尾崎紅葉著

紅葉全集

十千萬堂藏版

明治三十年の紅葉山人

紅葉全集 巻之四

目次

紅葉全集　目次（二）

隣の女

（一）

淺草郵便局の爲換掛に粕壁讓といふのがゐた。二十八になるが配耦は無し、兩親は無し、厄介は無し、親類は無し、然も家まで無い。これが眞の獨身で、寺島村の植久といふ植木屋の奧座敷に下宿をしてゐた。生若い小官員の中には、鼻下に産毛を生してゐながら、三歳になる兒があるなどは珍らしからぬ例で、それといふのも、年老いた母親があつて、本人は小成に安

んじたい氣は無いのだが、親に奉じ、身を養ふ術の無いところから、壯心已まずと雖も五斗米の爲に膝を屈して、何も孝行〲と、神妙に極めてゐると、親の心は格別で、彼も道樂を始めない内にと、早速虫おさへの嫁を强ひられる。それには色々否といはれぬ事情が絡むで、是非に及ばず、一番その女房といふのを持つて見ると、有繫に情合で、憎くは無い。自分が稼人であつて、而して小使帳をつけて見せらるゝ細君なるものが出來た曉には、豈所帶染ざらむと欲すといへども得可けむやで、遠大の志は氣の脫けた風船球のやうになつて了ふし、名譽は欲しくもなくなるし、女房は可愛くなるし、子供は出來るし、老親は愚痴になるし、唯無上に欲しいのは金錢で、遂には貯藏銀行の廣告に首を傾けて、一日一錢づゝ無いものにしておけば、月に三十錢の、年には三圓六十錢、十年で三十六圓だから、百年なれば三百六十圓、千年の三千六百圓、なるほど大きなものだ、と今更のやうに吃驚して、日に一錢づゝで三千六百圓は可い

が、能く考へて見て、千年といふのに二度吃驚して、それでは日に二錢としてと、また勘定を爲直すやうな根性にもなる。

嗚呼、おもへば青年の英雄で、所帶持の凡人と成下がらざるは蓋し鮮矣。天下に凡人は多いけれど、生れからの凡人よりも、青年からの凡人よりも、親の脛を咬つてゐた比の有爲多望の士なる今日の凡人が、其過半數を占めてゐるといつて可からう。故に女色が身を斫る斧ならば、所帶は軀を摧く玄翁とも謂つべしである。

短袴弊衣に高履を着けて、斑々たる霜鬢、四十にして未だ家を成さゞる的老書生を見れば、いゝ年をしてと、行逢ふ人は眉を顰めるけれど、實際を謂つたら更に憐むべきは、二十三四の無分別盛で、親睦會の餘波を雷門で外しの、仲見世で喇叭や招猫を買つて歸る男の境涯であらう。子は三界の首枷、其子の母は一生の絆、我標札をうつたる格子造の借家は、心を繋ぐ獄である。さて見れば、男子の蚤婚は自ら好むで痺藥を飲

むやうなもの、島田髷の女房の爲には、日本國中で一日何千人の有爲の男子が愚弱々々になることかと想へば、御同然に懼るべきは虎皮より緋縮緬である。

袴を着けの紋附の羽織で、容貌頗る那勃翁に肖てゐる立派な男が、一生月二十圓ぐらゐに齷齪して、敢なく息は絶えにけりて、それでお仕舞は、少しく腑効無さ過ぎるけれど、什麼いふものか、何處の役所でも課長は一人で、下役は大勢ゐる。粕壁讓は年輩といひ、所得といひ、世間で謂ふ、天晴一人前の男であるのに、まだ女房は持たず、所帶には拘はず、然りとは、之を青年の月給取に比して、大いに頼もしく思はれる。定めて志を抱くが爲に身を愛むで、例の痺藥を飮まぬのであらうと推量される、天晴々々。と當事も無く褒めてばかりもゐられまい。實際心に期する所あつて、當分書生的の生活を甘んじてゐるの歟。但しは深く自ら晦して、私に哲理の研究に耽りつゝあるの歟。それとも、容色好みのむづ

かしやで、未だ佳耦を得ざるの歟。筒井筒振分髪の聘定に死別れて、外に見かへる女子は無といふの歟。或は又づっと意氣筋で、實と誠の中の郷、折々御高祖頭巾が訪ねて來るといふやうな寸法歟。知らず粕壁讓の獨身は、善か惡か、邪か正か。まづ平素の行狀が詮議物である。

近いことでもあるから、北廓の方は如何？　屢〻河を渉つて繰込むことであらうと想へば、なか〳〵以て道德堅固の甚しさは、植久夫婦が保證する。第一、局の同僚が、話せない奴だと除けものにしてゐるのが、何より確である。話せない奴だといふ一言の中には、吉原に限らず、總べて女の子に關係せぬ、といふ意味を含蓄してゐると解釋して差支あるまい。其實玉顏紅粉粧と摩違つても、曾て流眄をつかつたことの無い男である。況んや佇立の回顧の目送の茫然自失などゝいふ不見識に於てをや。菽麥を辨ぜずと謂ふのが、世智に昧いことの隱語なら、粕壁讓は銀杏返と唐人髷を辨ぜざるものである。

まづ如此色氣が無いから、定めて形にも風にも構ふことではあるまいと思へば、構ふといふ程では無いが、萬更構はぬでもない。勿論襦袢の袖に淺黃縮緬を附けたり、懸物の表裝見るやうな帶をするのでは無いけれど、いかにも淸楚として、さも身嗜の好さゝうに見えるほど綺麗にしてゐる。譬へば花一つ咲かぬ杉の生垣が、刈込まれたばかりで雨に濡れたるかの如く。格別眺にはならぬけれど、見た眼に少しも否がない。けれども美服を着てゐるわけではない、數を持つてゐる次第でもない、始終同一ものを引張つて、保つだけは保たせて、是非入る時に新しいのを拵へるといつたやうな、極眞面目の道樂氣無しで、唯心して薄汚ないのや、汗臭いのなどを用ゐず。亂脈のない風躰が大の嫌ひと見えて、いつも出來立の押餡の樣に、きちんと極つてゐる。

恐らく十六にして衣類を疊覺え、十七にして引熨を知り、十八にして仕立の寸法を書留め、十九廿にして、友切は仕舞つておくべきもの、と心

着いたのは此人であらう。

（二）

女色でも無し、衣類でも無し、旨い物食でもするのかと謂へば、さうでも無い。折々は鷄肉、牛肉、乃至は藪蕎麥、小料理屋などへ立入つて、獨酌を極めることはあれど、壹圓と纏まつて、飲食に費つた例が寡い。それに又交際の無いといつたら、恐らく此男ほど交際の無いのも希らしい。何が日にも朋友の訪ねて來たこと無し。行つたこと無し。それでも正月には年賀の葉書が二三枚來る。それが先づ朋友であらうけれど、皆遠國に在るもので、何年にも姿を見せたことが無い。

是だから少しも錢は入らぬ。宿料の五圓といふものを月給から減いて、剩餘は幾許だか知らぬが、其は皆費つて可いものであるのに、道樂は無し、義理は入らぬから、半分は雜費としても、確に半分は手附かずに月を越しの、備荒貯蓄として毎月積立てられるに違無い。

尤も土曜日の晩には、折節淺草の寄席へ出掛けることがある。日曜には屹度貸本屋が入りこむ。此二者が目に見えた出錢の口であるが、これしきでは高が知れてゐる。けれども、寄席とは、貸本とは、粕壁讓にして頗る異しむべき嗜好といはねばならぬ。その寄席といふのは、いかなる種類の藝か、貸本はどんな物を見てゐるのか、聞きたい。

例の十六にして衣類を疊むといふ人物であるから、總じて物事が綿密で始末な、生丁目な、綺麗好な。所帶を持つたら、始終格子を拭いたり、庭の草ばかり挘つてゐさうなと想はれる。その通り、居間をば畫割の如く形附けて、手爐に火箸の刺しどころまで、ちやんと極つてゐる。床間であれ、机の上であれ、戸棚の中でも、茶棚でも井然として、何が一個曲つて置いてあるものも無い。いかな自墮落の先生でも此一間へ入つたが最期、忽ち生丁目電氣を感染して、體が眞四角になつたやうな心地がして、我知らず肩が聳えて、割膝になつて、姑く恐縮して、遂に痺を切

らすてあらう。
かういふ人に座敷を貸すのは五割の德だ、と平素喜んでゐる主の植久が名言を曰つた事がある。粕壁樣のお座敷の取散らしたのは、近火の時でも無くちや見られない。之を聞いて女房が、「緣起でもない。ちつとも見たかないよ。」と凹ましたさうな。
いかにも近火か煤掃の折などで無ければ、粕壁讓は居間を取散らした事は無いのである。そのくらゐであるから、自身に箒、拂座を把つて、毎日丹念に掃除をする。役所から退けて來れば、まづ靴を下駄箱へ入れて傘を承塵に掛けて、帽子を帽子掛に掛けて、棧留革の夾帒を床の脇に置いて、羽織から袴、帶、衣物、襦袢と脫いで、衣紋竹の不斷着に衣更へて、順々に羽織から疊むで、之を簞笥に仕舞ふ。但し袴は押をおき、襦袢は干すと知るべし。
それから火鉢の前に押直つて、茶道具を取出す。そこで心閑に茶を點し

て、塗物の食籠から甘納豆を前後に三匙ほど食べて、其を仕舞つて、茶盆を片付けて、やをら机に打向ひ、本箱から書物を出して、跡を蓋して、頬杖を突いて默讀を始める。此書を何かと思へば、實に愛想が盡る、繪のある小形の貸本である。

繪のあるのも敢て尤むるには足らぬ、貸本と雖も侮るべきではない。けれども小形といふのが稍ゝ氣に懸る。其書の何であるかは、粕壁讓が平素の爲人を傷つける虞があるから、德義上茲に明言することを好まぬ。

尙又嚮に此人に望を繫けて、滔々たる青年官吏中、行年二十八歳、未だ妻を迎へず、然も品行を端正にして、勤儉の美德を養ふのは、想ふに後來雄飛の大志があるのであらう、とまで提灯を持つたのに、然りとは呆れたものだ。今更鑒識違ひの面目ないに就けても、唉書名を明言するに忍びない。然ればといつて、陰蔽をすれば同罪の汚名も口惜い。已むを得ぬから中間を取つて、作者の名だけを明すが、狂訓亭爲永春水！

彼座右の書が春水の中本と知れたら、寄席も大方は落語か娘義太夫といふ見當であらう。誰か粕壁讓を話せぬ奴と謂ふや、このくらゐ話せたら十分である。未だ〳〵外に恐ろしく話せる、大した事がある。見よ床間に三管の尺八、繼の七寸は裸で、二管は袋入。白天鵞絨の古びて黄ばむだ袋のが貫甫の八寸で、これは年來手馴らしたのであるが、レの調が思はしからぬとかいつて甚く氣にして、然るべきのを一管欲しがつてゐたが、つい近頃手に入れた古童の九寸は、頗る意を得たさうで、虫の音といふ銘を附けて、一方ならず秘藏して、糸錦の袋に入れてあるのが其である。

音色といひ、竹の味といひ、中分は無いけれど、ごろ節が無いとやら、竹相が惡いとやら、素人には解らぬ其道の不足を言つてはゐるけれど、兎も角も此位の尺八は稀物と、粕壁家の重寶にしてある。尤も此管を手に入れるには、殆ど一月半の月給を棒に振つたのであるから、大事にす

るのも無理はない、趙氏連城璧、粕壁月給笛。
此に到つて、粕壁讓を觀察した我眼の謬つてゐたのも益極まれり、と自白せねばならぬ。彼が妻を持たず、錢を費はず、寺島村に閑居して、俗客の往來を謝して、名利の機心を絶つてゐる、其だけは事實であるけれども、その(持たず)、(費はず)、(閑居)、(謝して)、(絶つて)とあるのは、決して哲學を研究するの、遠大の志を抱くのと、そんな頼もしい了簡ではないのである。お高祖頭巾が訪ねて來るでも無ければ、振分髮でも亂髮でも何でも無いので、矢張人間並の粕壁讓、何處までも郵便局の爲替掛、そこらが相當の人物である。

唯異つてゐるのは、尺八を朝暮の友どころではない、兄弟分のやうに可愛がつて、天神樣に梅の木、爲朝に弓、柳に蹴鞠、松魚に大根おろしの如く、片時も側を離した事の無いほど凝つてゐる。

凝つては思案に能はずとも、下手の横好とも謂ふけれど、なか〱然う

でない。之を素人藝としては餘程黒い方で、緣日に蓙の上に排べてある物干竿のやうなのに孔を明けて、一尺八寸あるから尺八などゝいふ名管を九錢で求めて、器用から吹習つて、いでや劍舞の下座を勤めやうなどといふ、書生一流出たらめ吹の管とは、少しばかり譯が違ふ。六段や八千代獅子は中村樓の溫習會じみて冴えない奴さ、ぐらゐの高慢はいつても、聽衆は敢て憎しまぬほどの鍛練は必ずあるので、長く其道の門に入つて、本式に苦むだ藝である。

然し、話せぬ奴の粕壁讓を、折々寄席で見掛けた同僚はあるけれども、さほどの藝があらうとは夢にも想ひ懸けぬ。さほどの藝どころか、尺八といふものは、笊を冠つて、黒塗の駒下駄を踏いた人が、立ちながら啣へてゐる物と、粕(粕壁といふべきを畧して、同僚は蔭で粕々と呼ぶ。)は想つてゐるだらうぐらゐに輕蔑してゐる態であるから、此事をもし聞いたらば、それは大方粕が竈下を焚付けてゐたのであらうなど、誰も取

合ふ者はあるまい。
そこが隱藝である。朋友知人の間に知れわたつた藝ならば、少しも隱藝のことは無い。粕壁の尺八も誰知らぬところに大きに旨味があるので。一體藝事といふものは、些とばかり遣ると、直に人に知られたくなるもので、諸人之が爲に難澁するが世の習である。
この境を脱けると、逆上も下つて、次第に容躰も見直して、自他の命に別條も無くなる。之に由つて觀れば、粕壁讓が修行中の舊時は知らず、今日の樣子から考ふるに、未だ聽ざるに先だつて、此人の竹は捨てたものではあるまいと賴しい。人に知られ、人に見せつけやうといふ根性も無いのに、大枚の金を投じて、古董の作を伊達に秘藏するのではあるまい。さういふ風の男でないことは、彼が平生の行の質素なのを見ても解る。
扨其は其としても、彼が一管の笛に生涯を托し、名利を捨てゝ、唯是樂

むといふには、何とか子細がありげに考へらるゝ。然矣、粕壁讓君よ、不幸なる粕壁讓君の薄命は吾他ともに同情の淚を濺ぐに吝ならざらむ。

君よ。

（二）

粕壁讓が薄命といふのは外でもない、彼は實に言語に斷えたる醜貌である。女子は容儀を重ずるものであるから、不器量を歎くも理であるが、苟くも男子たるものが、何事である、好男子に生れたら何なる？　醜男子であつたら何とする？　女子に惚れられないが爲に、社會から擯斥された噂を聞いた事がない。惚れられた擧句が紙衣を着、少し氣の利いた手合が男妾になる、といふ話は往々耳にする。

今粕壁が薄命といひ、不幸といふのは、單に醜貌に生れついたからと謂ふのであるか。そんな薄命、そんな不幸に、誰が同情の涙を濺ぐものか、馬鹿々々しい。

凡そ世間に是はと思ふほど麗しいのは寡いけれども、醜いのが御望とならば腐るほどある。粕壁一人が醜いといふなら、或は不幸薄命の人かも

知れぬ。然し一人ではない、多數であるのだから、寧ろ氣が強い筈で、それに又數の中であることだから、粕壁より十段も二十段も不出來なのがあらうと想はれる。實際いくらも在る。けれども其等の不出來連は粕壁のやうに苦勞にしてはをらぬ樣子で、甚しきに到りては、自ら好男子とこそ思はぬけれど、萬更捨てた面でもないぐらゐに自認して、彼奴は些と來てゐるなどゝいふ語を、折々は洩すところを以て察ると、幾分か自得してゐるらしい。歎けばとて回る可きにあらず、之を天より享けたのであるから、各自其分を樂むだ方が、或は道かも知れぬ。

よし之を樂まぬでも差支無い。然し歎くにも悔むにも當らぬ。彼奴は面が拙いから交際は御免だといふ朋友は無い。男と生れたら願はくば男に惚れられるやうでなければ、到底立身出世は覺束ない。

男に思着かれるには、色白の必用も無い、鼻筋が通らなくて濟む、鳳眼蠶眉も入らなければ、丹花の唇にも及ばぬ。金が無くても、大の無藝で

も、何でも構はぬ。之ほど仕事が樂で、第一身の爲になる色事は、多度あるものではない。

之を小にしては、銘酒屋の姉樣、牛屋の婢、之を大にしては遊女、藝者、之を地物にして、後家、生娘、女房等に思ひ着かれた、男子としての價値は幾許か、それから其結果は奈何。最一つ其末路は奈何。噫、色男には誰がなる!! 榮華は夢の如しならば、色事は水泡々々。粕壁讓何をか悲まむ。不幸薄命が聞いて呆れる。

なるほど聞いたらば呆れるかも知れぬが、其身になつたら呆れてもゐられまい理由がある。それは讓といふ男は、不思議にも自惚氣の薄い性で、他が見たよりは倍も自分の不器量を惡く見てゐる。見てゐるといふことは、凡夫の淺ましさに出來まいけれど、唯さう信じてゐるのである。世中に自分ほどの醜男はあるまい。あゝ因果だ、情ないといふ念が、四六時中片時も絕えぬ。

何故絶えぬであらう。榮華は夢、色事は水泡であるのに、何も醜貌が昇進の障碍をする譯ではあるまいに。勿論！　誰も嫁に來てくれる女は無いといふ次第でもあるまいに。待つた！　それは些と勿論と言惡い。粕壁讓が不幸薄命といふのは、そこらである。

彼は右樣の醜貌であるから、色事は全く繩張外と、綺麗に斷念すれば善いのだけれども、それが業で、とかく斷念しかねて、どうかして女に思はれて見たい。引張凧になつて、兩方へ義理が立たなくて狼狽して見たいといふ野心が勃々としてゐる。一生に一度でいゝから、女子に苦勞させて見たいと、烏の鳴かぬ日はあれど、さう思はぬ日は無いけれど、淺ましや我姿を見れば、自分ながらも愛想が盡きる。これでは到底相手にしてくれるものはあるまい、まいなら可けれど、ないと考へるほど、執着は彌々固くなる。固くなるほど益々望に遠ざかる。

自分も望に遠ざかる事は知つてゐるけれど、骨が舍利になるまでも、此

ばかりは諦められない。また强ひて諦めやうとも爲ない。其代り、今に何か成らうとも思はずに、唯當も無く昏々と、女に思着かれることを考へて、戰を爲ずに七書ばかり見てゐるのである。

粕壁讓は犯せる罪ありて恐るゝが如く、おのれの醜貌を心に愧ぢ、世間に憚つてゐる。こんな顏を人に見られるのが愁いといふ思慮から、ひよこ／＼出掛けることを懌ばぬ。就中女子に見られるのを何より可厭がつて、色氣のある所は敬して遠ざかつてゐるゆゑ、自から道德堅固であるが、その心中に立入つて見ると、敢て其樣ものゝ堅固を望むでゐるのではない。矢張世と和して、野暮といはれうより、粋だとか、意氣だとか謂はれたいのであるけれど、直に鏡と相談して見て、此顏で！　と落膽する。

到底我は色の戀のといふ浮世の樂を味ふことは愜はない、謂はゞ不具者も同然の味氣ない身だ、と甚く鬱いでしまふ。

諺にいふ破鍋に綴蓋、いかに醜貌であらうとも、難有いことには、出雲に大社樣の在ます間は、相應の相手の無いことはない。ましてや二の酉で賣殘つたのが山の如くあるのだから、其中に又想の外の目つけものが無いには限らぬ。

娘や藝者に思ひつかれて、やいの〳〵言れるばかりが戀でも無ければ、浮世の樂でもあるまい。假名でいふ浮氣な色事、むづかしく謂へば皮想の愛、其始や飄然として惚れ、末は突如として否になる間などは、決して戀の部には入れられない。其形は淡として水の如く、之を味へば甘露に似たる、かの夫婦の情こそ戀の戀、於戯本戀である。

粕壁讓は自ら不具者だといつて、切りに失望するけれども、此樂を享けらるゝのではないか。

世中の事は定規で度つたやうに正しくゆくものでない。美人だから必ず好男子に添ふとは限らぬ。否寧ろ其反對の現象を屢觀るから異しい。

故に粕壁譲も美人の妻を迎へる、と斷案を下すわけにはゆかぬけれど、かういふ次第だから失望するとはないと自ら寛うして、餘り鬱々思はぬが可からう。

他人が思ふまでもない、粕壁譲は自身にも女房を持つての快樂は認めてゐる。また女房を持つたらば、藝者や娘に惚れてもらはなくても窮らない、內で小指が多度可愛がつてくれるといふことも能く心得てをる。それに又何故嫁を妻はぬのか。乞君莫怪、粕壁譲には理想の妻がある！媒妁に妻はせられた嫁、好い加減に極めた縁談、親などに勸められた女房、そんなのは粕壁譲の最も屑しとせざるところである。よしや其女が小町であらうが御免を蒙る。相互に心が知れ合つて、添はう。添ひましよ、死ね、死なう、といふほどの間で無ければ、夫婦になる可き必用が無い。道中で馴々しく語を懸ける奴があつたら、胡麻の蠅と想へと戒めてさへあるのに、これは假初にも偕老同穴の契を結ぶのではないか。それに何

ぞや、碌に言語さへ交さない不見不知の女子を捉へて來て、これと所帶を持つのだ！　實に此位解らない、向不見な、險難な話が亦とあらうか。それで無事に納まつてゆくのが餘程不思議、紛々擾々の持上る方が至當なのである。無事に納まつてお目出たい。それだけで夫婦といふものは濟むものなら、世中に夫婦ほど凡そ無能いものは無い。

とても夫婦となるならば、多年相惚で苦勞した間でありたいといふのが、則ち粕壁讓平生の志である。

贅澤さへ言はなければ、粕壁讓と雖も相惚の一人や半分出來まいものでも無い。けれども其は綴蓋だといふとを、一寸斷つておかなければならぬ。然矣、破鍋に綴蓋　粕壁は破鍋でありながら、綴蓋では不服なので、彼が理想の妻といふのは、さまで美しくなくても可い、けれど醜くない、一寸仇な、色氣ぽい、何處か思附のある、江戸子らしい張のある相貌て、樣子の好い、口前の面白い、如在のない、快豁てゐながら妙に

初心の處があつて、氣の小さい、實のある、情の深い、意地張な、口說の多い。なか〳〵註文が難しい。

此繪姿通りの女子が果して有らうか。有つたとした所で、粕壁讓の手に合はうか。讓樣と私の其間はと。いはれるほどの相惚になれやうか。或は其な事になれやうかも知れぬ、色事は機であるから。

然し、讓躬ら事の終に望むべからざるを先刻覺悟してゐる。もし覺悟してをらぬとならば、彼は豆鐵砲で猛虎を狙ふものである。故に、理想の妻！　そんなのを女房に持ちたいものだと念ふだけで、持たうと企てる次第ではない。とは謂ふものゝ、もし女房を持つといふ段になつたら、是非此註文通りのと、相惚の上でなくては、外のでは否だと極めてゐる。して見れば、不便ながらも粕壁讓は一生鰥に生かれる身である。もし幸ひに此理想（理想と謂はうより妄想）を捨てゝ、大人しく綴蓋で辛抱するなら、風雅でも無く、酒落でも無く、草深い寺島村などに引籠むで、人

の座敷をかり住居、寂寥まさる夕暮の、風が持て來る何處かの絃歌を聞きながら、給仕無しの夜食を搔込みの、燈火がつくと影法師と背合で、色があると此な晩は訪ねて來るものだと、年中隣の寶を數へて氣を惡くしてゐるやうな事は無いので、これといふのも心がらであるが、其心がら如何も傷はしくてならぬ。不幸薄命といつたのも、抑是ゆゑである。何がな娛樂が無くては人間は勤まるものでない。その人間に毛が三筋どころか、づんと足らぬ思の粕壁讓、まづ二人前の道樂が無ければ、この埋合は附きさうもない。そこで尺八に慰む事を思ひついたのであるが、有繫に思ひついたゞけある、夫鐘怒つて之を擊てば則ち武し、悲みて之を擊てば則ち哀し、誠意の感じて入れば也で、月明の椽に座して心靜に吹澄されたら、その何とも彼とも言はれぬ音色といふものが、毛孔から身に泌みわたつて、悚然として來るかと思ふと、胸が一杯になつて、覺えず涙が滴れる。と謂ふのも仰山だけれど、兎に角上手を吹く。

奥で始めると植久は呟く、光氏のやうな男が自墮落なく柱に靠れて吹いてるとしか想はれねえ。鮮かなもんよ。此ばつかりでも小色の一つや二つは出來るんだ。惜いことに喃、最少し男振を何かした日にや、へつ片端から薙切だ。

寔に植久の言の如く、此音色を聞いて此人を想見するのは難い。色白の華車な、意氣いな男でゞもなければ、藝が何であらうが、いかに管が好からうが、あんな音の出やう理が無いと想はれるほどである。

本人も管さへ持てば、浮世の事も、其身の事も、何も彼も一切忘れ、全く魂を打込むで吹賞む。粕壁讓が一日中の樂は、この尺八を吹いてる間と見える。此間の心地といふものは恐らく仙人であらう。

（四）

粕壁の座敷とは垣一重隣りに、二階造りの寮めかしい建物がある。總ての好みが待合風で、異に華車がつて小細工のしてある具合は、一目して、格子の間へ胡瓜の輪切が挾みたくなる。

抑も此家は某會社の番頭が外妾を貯いたので、其次の代には新聞屋が住むで、それから一年ばかり、今に空家になつてゐる。

眞面目の素人にいちと住みかねる構造ではあるが、元來其に建てたゞけあつて、圍者でもしやうといふには誂向の住居で、また愛妾が鼠鳴をして悅びさうに出來てもゐる。

七八日前から二三度も人が見に來た樣子で有つたが、どうやら取極つたらしいので、早速植久が云々だと告すと、粕壁は眉を顰めて、

「それは窮るなあ。あの二階から此方は全然見通しだ。」

と嘆したところで仕方が無い。

「見通しても可うございまさ、別品ださうでございます。」

と植久が洒落に言つたのを、粕壁は眞に承けて、

「ぢや亦外妾だね。」　と苦い顔をした。

それから二三日して、讓は役所から退いて來て、座敷に入ると、垣隣に人聲が聞える。それは女の聲で、女も女も別品らしい仇な聲である。

此時粕壁讓の心は悸々た。何故に悸々たのかは自身も識らぬ、然し確に悸々た。所へ宿の女房が洗濯物を持つて入つて來て、

「旦那、いよ〳〵引越して參りましたよ。」

と事ありげに注進されて、まだ心の悸々てゐる讓は、有繫に何と無く面羞かつたが、遽に氣を取直して、

「あゝ來たかね。」　と冷淡に應けても、女房は勝に乘ずるといふ勢で、

「すばらしいもんでございますよ。まだ若いね、溫雅な、どんなに好い

女でございませう。」

打遣つて措くと、まだ〳〵言立てさうな氣色を見て、

「あゝ然うか、うむ然うか。」と氣の無い、不愛想の返事をするので、女房も今は張合が拔けて、悄々と出て行く。

何時でも女子の噂をすると、苦々しい顏をするのが粕壁讓の病である。彼は女子に嫌はれるとも、女子を嫌ふといふ方ではない。然あらば、女子其物は所好だけれども、影の如き噂は嫌ひだといふのである歟。それでは、人情本を愛讀する心意氣が解らぬ、女子を見ても振向いたことが曾て無いといふ了簡が、なほ解らぬ。

さては實物にせよ、噂にせよ、女子といふものに就ては、總て意地が綺麗のやうに、人前だけを粧るのかと想へば、女房が立つた迹で、こつそり庭へ出て垣間見をしやうでもない。矢張常の如く、落着いて衣類の始末をして、火鉢の前に悠然と坐つて、茶を煎れて、多時喫してゐる。

隣の女の聲は人を弄殺すかの如く、折々微に聞えると、讓は聽耳を聳てる。聲がしなくなると、首を傾けて考へこむ。

平生は茶を飲むでしまふと、例の讀書を始めるか、尺八を持出すのであるが、今日に限つて讀みも吹きもしない。机に凭れて何か頻りに案じてゐたが、其間に日は暮れて、楓の葉越に宵月の影が見え初めると、殘蛩七艸の露に啣いて、夜涼水の如く骨に入る。まだ燈も點さずに、闇がりの座敷の隅に茫然して、蚊に食はれてゐた粕壁讓も、すゞろに物の悲さに堪へかねたか、管を携へて、のこ〳〵椽先に出懸けて、仰視れば天の原、銀河横はる處隣の二階の簷に、ほの〴〵と夕顏の繪の岐阜提灯を點して、客でもあるやうな氣勢である。

一寸見向いたばかりで、讓は管を取直して、閑に歌口を濕すかとおもふと、はや(リチリロリロツレツロリ〇)と、(虫の音)の曲を吹始める。

二階には相對のお樂筋と見える小宴の始まつたところで、床柱に靠れて

立膝をしながら、麥酒の玻璃盃を手にして、玉山未だ頽れざる好男子は、年紀三十六七と見える。朽木形の紺染の浴衣に白縮緬の卷帶をしてゐるのは、豪勢意氣であるが、いくら意氣でも寒いと見えて、二つばかり色氣の無い嚔をしたので、女は慌てゝ今手を鳴らしたのは、お風召すなと、羽織でも取寄せるのであらう。

女そぱつとした色氣の中微塵の小紋の羽織で、男と對の浴衣を着てゐる。上品な天神に、金足の五分珠といふのを挿して、櫛は白檀蒔繪と見える。十九か廿歳、越えてゐるか知れぬが、まづ十九で通る。肌理そちと疎いが、色のくつきり白い、細面の凜とした、御殿風とも謂つべき相貌である。

眼は口ほどに物を言ひとしてあるが、此女の眼といふものは恐らく口よりも物を言ふ。特に横眼づかひが千兩で、嬉しい時、怨めしい時、悲しい時、情ない時、此流盻の秋波一轉が、言語でいふ半分餘の意を通ずる

ので、それに口元、是が憎いほど可愛らしい。男も此女と並べて、見劣らぬ容貌を持つてゐる。もし向島の土手で始めて會つたとしたら、女も扇を取落して、もしお孃樣といふのが木の頭で、舞臺が廻らうといふのである。

抑此男は何者であるか。將又此女の素生も知らまほしいけれど、今日引越して來たばかりであるから、近所に誰知るものもない。けれども樣子が正當の夫婦では無いらしい。外妾か、まづ其邊であらう。何の彼のと、今更爰で戶籍調も野暮の至りであるから、追て詮議のある兩人、今宵のところは睦ましく、對座の模樣だけを御覽に入れる。

「なか〳〵好い處だが、どうも此蚊には恐れる。」

と男は肩や膝をぴた〳〵拊くと、女は側から扇ぎながら、

「それでも人目よりは餘程ようございますよ。」

一句奇警、人を驚かす。

「でも人目はこんなに惡痒くはないぜ。」

之に應じて女も何か言はむとする時、喨々として尺八の音が耳近く起る。二人は思はず襟を正し、危坐して眼と眼を見合せたばかりで、霎時は無言、吃驚したかの如く、感心したかの如く。

頓て男は夢の覺めたやうな顏をして、

「お小夜、奈何だ。」と女の方を向く。

お小夜は醉へるが如くになつて、耳を傾けてゐたが、聲を懸けられて、やう〳〵我に復つて、

「巧いのねえ。素人ぢやありませんよ。感心！　彼處が。」

と未だ夢中でゐる。

「上手なものだ。」と男はぐつと一盃飲干して、

「おいお酌。」と小聲でいつたのが、お小夜の耳へは入らなかつたと見えて、一向平氣で聞惚れてゐる。

「どうだらう！　餘程淫亂だ。」
と嘲ける如く呟くと、淫亂だといふのだけが聞えたか、振向いて、
「貴下、何が淫亂ですつて？」
「聞えたか。」　と男は笑ふ。
「聞えません。どうせ私は淫亂。」　と怫然とする。
「淫亂のお酌といふのを願はうか。」　と玻璃盃を出すと、お小夜は矢庭に引手繰つて、
「ちつとは淫亂にも飲まして下さいなね。」
「いぢ〳〵するなよ。誰も飲ませないとは謂はない。それよりは我が酌をしてくれといふのに、尺八に聞取れてゐて、鼻涕もおっかけないから、淫亂だといつたのだ。」
「それは私は尺八は所好ですわ。所好なら所好とおつしやいな、外聞の惡い、淫亂だなんぞつて。」

「所好も淫亂も親子の間だ。」
「でも眞箇に巧いのね。」
「それ見たことか、矢張……。」
「あゝもう澤山。」
男は肱枕をしてごろりと寐轉び、お小夜の顏を故と凝然と視て、
「どうも險難だよ、直隣にあゝいふ藝人が居ちやあ。氣が揉めるぜ。」
「又あんな言を有仰るよ、お株で。」
と彼得意の秋波を送る。
「お株とは甚く見下げたね。甚助といはないばかりだ。」
「だつて貴下、私が尺八が好きだから賞めたばかりぢやありませんか。
それだのに、それ險難だの、氣が揉めるのつて。」
「宛然花時分の渡舟のやうか。」
といつて、男は獨り面白さうに笑ふ。女は怫然とした顏で、

「いつても人に謔つちや、後で笑つてらつしやるよ。私は本當にしますよ。」

「斷るには及ばないよ、本當なんだもの。」

「貴下の本當は噓ですよ。」

「お前の噓は本當か。」

「知りませんよ、もう。」

「それは知つてるといふ事だね。」

打物業では敵はじと、といふ見得で、お小夜は衝と立つて撲ちに行くと、男は起上らうとして、床柱で頭こつつり。あ痛と押へると、女は吃驚して、今れはや恨も忘れて頻りに介抱する。

「貴下、どうかなさりはしませんか。」

と心配さうに男の顏を覗きこむ。

「あいたかつたと眼に淚だ。尺八のお蔭で甚い目に遭つた。」

「また貴下は直に尺八〳〵とおつしやるよ。」

「お前だつて尺八〳〵といふぢやないか。あれ、無上に吹きやがる。彼奴も同じく淫亂と見える。あゝ吹立てられちや閉口だ。ちよつ喧ましい、好い加減に息めればいゝ。」

お小夜へ調戯半分眞面目になつて謂ふと、

「可愛さうに。貴下は一躰なぜ然う無慈悲だらう。折角一生懸命になつて吹いてゐるものを、息めればいゝの、喧ましいのつて。あんまり實が無さ過ぎるぢやありませんか。」

と男の膝をぐつと撞く。男は冷然とお小夜を顧眄て、

「否に尺八へ義理を立てるぢやないか。異しいぜ。」

と秋波一轉。この秋波はお小夜のやうに効力はない。けれども或一種の意味を十分に含むで、口説の端緒を引出さむとする。

「ぢやあ、もう尺八の事は申しますまい。」

と故とらしく口を噤むで見せる、少し體を彼方へ捻向けて。男はくすくす笑出して、拗てゐるお小夜の手を執つて、

「どうだ、尺八。はゝは、尺八といふ名は珍らしい。おい、尺ちやん、一杯申上げやうか。しやあちやんといふと、何だか鐵面皮のしやあのやうだから、尺ちやんといかう。尺ちやん！　此奴も惡い。早口に言ふと、皺くちやと聞える」可愛さうに、これでも皺くちやには未だ間があるのさ。」

堪らなくなつてお小夜も噴出しながら、男の背をぴつしやり。

「貴下は眞箇に可笑いよ。一寸見ると馬鹿に樣子が好くつて、附合つて見ると、格に無い毒口を聞くかと思ふと、其中に仇氣無い冗談をいつて、」

「一處になつて見ると、邪慳の樣で心が鈍いか。」

「まあ左樣ね。」　と澄して言ふ。

「大概にしておけ。」　と突飛ばせば、

「それが邪慳だといふのでさあね。」
「はゝはゝは、心は鈍いよ。」
此時尺八の音がぱつたり息む。

（五）

さては粕壁譲はもう寐るのと見える。心細くも五六の蚊帳に入つて、此の樓上に似たる夢を結ばむとするか　可憐、可憫、千態萬狀の世の中、好いた同士？　隱家に樂む男があれば、直ぐ其隣に唯一人つまらなく寐る人もある。嗚呼思へば禍福は垣一重である。

不幸薄命の人も、世間が一般に不幸薄命であつたなら、味氣無い身を喞つことはあるまい。粕壁譲と雖も、到底出來ない事だと諦めてはゐるものゝ、もし此樓上の光景を親しく目擊したらば、おのれ、やれと堪忍はなるまいけれど、幸ひに、その羨ましくも忌はしい現象を見なかつた。けれども、大方そんな事であらうとは、噂に聞いた美形、客來の樣子、二階の燈光、話聲等に據つて、はゝあと勘付いて見ると、餘り心地は快くない。

其に就けても此面が、と腹が立つ。同じ人間と生れながら、えゝ、つまらない〱。こんな事なら、いつそ一氣に死むだが勝だとまで思迫る。

それも道理である、氣の毒であるが、假初の吹奏も、妙音美人の心を動かして、爲に一場の口說を惹起したことを思へば、藝ながらも適れ艷福、一寸は男前で思着かれて、餘り無藝過ぎて愛想を盡される色男も往々あるのに、藝で惚れられるとは、澁い！　恐入つたものである。

粕壁讓がもし之を聞いたなら、其胸中は如何ばかりならむ。彼は歡極まつて泣くであらうか、氣が狂つて跳るであらうか、吽といつて悶絕するであらうか。恐らくは泣き且狂して、遂に悶絕するであらう。

それから甦つて、そんな事實なら郵便局の方は辭職して虛無僧にならう、などゝいふ不了簡を出さうも知れぬ。虛無僧も往時のは、一寸しても錦の袋入の戒刀といふのを手挾むで、御無用といふと腹を立てたり、捕手

が掛ると左右へ投げたり、大相景氣の好かつたものであつたが、御存じか知らぬが、當今のと來たら、いや、はや見る影は無い。虚無僧よりは爲換掛の事！　右樣の虞があるなら、知らざるの優れるに如かずである。さるほどに讓は煩惱やら妄想やらで、夜の更けるまで眠に就かなかつたかして、明くる朝例刻に起きたことは起きたが、甚く床離が潔くなかつた。それでも時刻には出勤して、毫かも執務に澁滯無く、少しばかり眠むたい顔で退いて來たが、それで、眠もしない。姑くは現で考事をしてゐたが、何と思つたか、急に尺八を取出して、机の前で吹始める。思はしく音が冴えないと見えて、幾度も出直して、やゝ十分許も吹いたかと想ふと、手を住めて、唸るやうな大息を吐きながら、遂に管を釋く。讓が尺八を手にしたら、十分や二十分で措くのではない。餘程此日は出來が惡いのを、無理にも妙處を吹かうと散々に悶えたが、意の如くならなかつたものと見える。

管を袋と一所に机の下へ入れて、手拭と石鹸を摑むで、ぷいと出懸ける。木欒子は磨いても黒いけれども、磨かざるよりは何分か美しくなつて、旋て歸つて來ると、鏡を出して髮を撫付けて、それから茶を飮むで、大いに精神爽かになつたといふやうな鹽梅で、また尺八を手にする。今度は出來が好かつたけれど、堪らぬほど睡氣侵して來たので、さすがの好者も其處に睡りこける。

ふと眼が覺めると、日脚はいつの間にか西に傾いて、何處寺の鐘がぼをんと、尾を曳くやうに長く響くと、薄寒い風が心細く吹いて來る。讓は眼の覺めたやうな、覺めないやうな、氣懈い、異な氣持で、無上に生欠ばかりして、何を見るとも無く、何處かを凝然と視ながら、走回つたまゝ惘然してゐる所へ、へい御飯と膳を出されて見ると、なるほど腹も空いたやうな氣になる。そこで急に顏を洗つて、箸を取ると、やうやう人心地が附いたので、此調子なら一番吹けるだらうと、尺八おつ取り

しやに構へて、音を入れて見ると、果せる哉、寥亮として梁の塵も爲に動き、木の葉も感じてか、ぱらり〱と落ちる。（虫の音）の曲は讓の最も好む所で、然も未だ幾分か稽古中と云ふのであるから、今夜も其を吹始める。

管が鳴出すと、今まで寂閑としてゐた隣家に、遽に女の聲が聞えた。確に例物が嬌語を洩すのである。

讓はさうと氣は着いたけれど、格別意にも介めずに吹いてゐたが、何といふ氣無しに、ひよいと上眼づかひをすると、隣家の二階の欄に女の姿が見える。

電光！　石火！　姿の（す）の字ぐらゐが僅に網膜に映じたかと想ふ間に、讓は慌てゝ座敷へ逃込むだ、汀の丁斑魚が跫音を聞着けたかの如く。管は其なりにして、ほつと呼吸を吐いたが、心臓は激しく鼓動して、宛然早鐘を撞くやうである。

欄に倚る女の姿！　それは誰？　噂に聞いた美形歟。それとも下女歟、老女さん歟。讓はその何者なるやを辨じない。けれども男ではない、女だといふだけは確めたのである。では若い女歟。そこまでは氣が着かなかつたけれども、若い、美しい女らしかつたやうに、何と無く感じた。若い、美しい女として見れば、隣の主、即ち噂に聞及ぶ美形である。さて見れば、美形が二階にゐて、何か見てゐたのである。何か見てゐたのなれば可いけれど、もしや自分の方をも次手ながら見はせぬか。見られたら大變、實に、甚だ、大いに窮る。よもや見はしまい、何も見る用は無いのだから。よしむば見たとする？　見たてはない、見やうと企てたと爲る、そこで自分が見られたらうか。彼處に此いふ風で、此方向になつて吹いてゐたのだから、樓上から覗くと、後面から斜に、耳から少し頰へ懸けて、見えれば見えるのである。

然し、二階からでは、庇の蔭になるから、到底腰から上の見える氣遣は

無い、簾から裾の方が見えるばかりである、それに違ひ無い。
まづ如此に考へながら、尺八は其方退にして、座敷の眞中に打坐つて、隣の二階と此方の庇との勾配、及び庇と自分の坐た位置との角度などを、目分量で荐りに測量してゐたが、分明には見えない理だけれど、隨分見える、椽に出て眞正面に坐つてゐたら、無論見える。けれど曩は背面で椽の内にゐたのであるから、幸ひに見えないと、數理で割出してから、やう〳〵安堵の胸を撫でる。
安堵したところで再び吹始めたが、二階で見てゐはせぬかと想ふと、何と無く氣が侵して、呼吸が震へる、指遣ひが硬る。氣骨ばかり折れて、却つて不斷ほどには行かぬ。
衆が聽いてゐればとて、上氣して狼狽るやうな、そんな初心の譲ではないのであるが、今日に限つて稍悸々して、場打のしたやうな態である。それでも内心は大分嬉しいので、一番感動させてくれやうといふ、恐ろ

しい了簡を出して、合戰ならば爰許死物狂、大童の血眼になつて、吹いたりや吹いたり。

是ほど一生懸命にやつて、設し聽いてゐられなかつたら、こんな馬鹿々々しい事はないと思ひながら、多分聽いてゐるだらうの念無きにしもあらずで、吹きながら徐々と居去出して、此方の顔を見えぬやうに用心して、庇の蔭から偸視すると、果然、女の姿!! 但し腰から下。讓れぎつくり、胸がどき／＼。さあ彌々死物狂の一心不亂で、後生大事に管に噛付いてゐる具合は、桑原々々と唱へないばかりである。

曲の闋らぬ間に日はとつぷりと暮れた。もう昏いから、顔を合せたところが知れまいと、吹き／＼居去出して、また覗いて見ると、南無三! 昏さは昏いけれども、未だ仄に見えなければならぬ白地の浴衣が見えない。はつと思つて、ぐつと乘出した、而して見たが全く見えない。見えないのでは無くて在ないのである。

譲は思はず尺八を捨てゝ、矗然と立上つたかと見ると、ひよろ／＼と椽端へ出て、瞬もせずに二階を見込むでゐたが、いくら見たからとて、形の無いものゝ見えやう理が無いのに、未練らしく彳むで、唯是掌中の玉を失ひたる心の中、途方に暮れたやうな顔をしてゐた。

落膽して座敷へ入つて見たが、一向つまらないので、また椽側へ出て、談合するかの如く膝を抱いて考へた。

取逃したのは殘念だけれども、あの女は管を聞きに彼處に出てゐたので
るか。或は何といふ事は無しに二階へ昇つて、田圃でも眺てゐたのであるか。管か、田圃か。田圃なら何の面白くも無い。もし管なら有難い。多分は管であらうと想ふけれど、田圃かも知れぬ。

我は固より醜貌だ、けれども尺八は可也聴れると、自分も信じてゐれば、人も許してゐるくらゐだから、我の顔を女子が恍惚と覗るといふ望は無いが、管なら随分嬉しがつて聴くものはあらう。

面白い、管か、田圃か、一つ試驗して見やう。もし明日吹いて、また彼女が二階へ昇つたら、我の方が及第。面白い、明日が關ケ原だ！

旦那、どうなすつた。」　と闇黒から聲を懸けて、のそ〳〵入つて來たのが植久。讓は吃驚して、ひよいと顏を擧げると、

「どうなすつた、未だ燈火もおつけなさらないで、甚く考へてゐらつしやるぢやございませんか。」

と撞平と坐つて、肩を聳かして讓の顏を覗き込むと、樽柿臭い息がぷんとする。

「どうも爲ないけれど。」　と讓は惰けた聲を出して、片手でべろりと顏を撫でる。

「どうも爲さらない事があるもんですか。餘程ふさぎにお月様のやうですぜ。」

「そんな事があるものか。」

「ぢや食もたれですか、色氣の無い。時に御覽なすつたか、隣の美形を。」
女の噂をすると粕壁は否がる。およそ男と生れて、女の嫌ひといふ理窟は無いのに、否がるといふのは可笑い。何でも此人は好色を内訌さしてゐるに違ひ無いから、いつか泥を吐してやらう、といふのが植久の肚で、否がるのを承知して、面白半分に故と隣の噂をしかけたのである。然るに粕壁は、例の如く苦り切つて、
「隣のが如何したのだい。」と反問すると、植久は冷笑をして、
「如何したの、如此したのつて、旦那、お賴み申しますぜ。」
いつよりも語氣の暴く且馴々しいのは、全く御酒の加減である。
「二階に出てゐましたらう、茶屋場のお輕といふ鹽梅で。驚きましたね、凄い物だ。御覽なすつたらう。」
と肩から先へじりじりと詰寄せる。讓は自若として、
「うむ、隣の女かい。私は知らん。」

「知らん、貴下、知らんで濟みますか。全體何の爲に二階へ出てゐたと思召す？」
「そんな事を私が知るものか。」
「まあ考へて御覽なさい。ねえ、幽靈の初物ぢや無い、日の暮に茫然突立つてる奴はありやしません。さうぢや有ませんか、物の道理が。」
「如何だか。」　と讓は素氣無く突剔ねる。それでも植久は一向無頓着。
「ぢやまあ（如何だか）で負けませう。口開だ。ねえ、私が恁う申したつて、何も油を懸けるわけぢやありませんけれど、旦那、一升お奢んなすつたつて可うございますぜ。」
「何だか些とも分らんね。」
「へゝへゝ御冗談者ですよ。この罪作め！」
と委細構はず讓の太股を抓ると、不意を吃つたのと痛いのとで、讓は躍起つて絕叫する。

「こりや御免下さい。その代りお詫として一升は帳消としませう。お痛うございましたか。」

「甚いね、人を抓つておいて、後から痛いかなんて。話があるならさつさとお爲な。」

「へい短夜のことですから可成簡單に辯じませう。實はね、私が何氣無しに、先刻裏の窓から蒟蒻玉を投げると、―

「又そんな馬鹿な言を。」

「こりや佹想。でも裏の窓からといふと、どうしても語呂が蒟蒻玉と來ないと……。」

「もう可いから。」と鬱陶しさうに顏を顰める。

「ぢや蒟蒻玉はよして、覗いて見ますとね、欄に摑まつて、貴下の尺八に聞惚れてるぢやありませんか。」

此一言に、怺へ〳〵し讓も取外して、はつと顏が赧くなると、たら〳〵

と背に汗を流したが、然あらぬ體て、
「馬鹿な。」と落着いてゐる。
「まあお聞きなさい。私も始めは、さうぢや無と想つたけれど、餘り美い女だから頻りに視てゐる間に、こゝが身上てさ、顔を彼地へ遣つたり、此地へ遣つたり、腰を屈めたりね、色々氣を揉むで覗いてる樣子が變さね。はて何を爲てゐるんだらうと、根が苦勞性だから此方も心配して、よく〳〵見ると、貴下が切りに吹いてゐらつしやいましたらう。それを覗かうといふので…………。」
讓は汗が又たら〳〵。
「馬鹿な。」と彼方を向いたが、今度の(馬鹿な)は少しばかり震聲である。
誰樣がお前の樣子に惚れて、是非といつてゐるよ等では、其が孔夫子、釋尊の言と雖も、讓は決して頷くまい。其と謂ふのは、有繫に容貌では

自惚が無いからである。けれども尺八！　二箇月の俸給に値する、(虫の音)といふ名管まで秘藏するほどの意氣込から考へても、尺八は好加減の天狗であらう。此虚に乘られる計りでも隨分徹へるのに、もしやと思ふ下地のある所へ、植久なるものが平生は餘りかういふ冗談を謂はぬ男である。それが設ひ酒の上とはいひながら、萬更根の無いでも無さゝうな話振。はて此奴はと、爰に始めて粕壁讓の玉の緒は動いだのである。

然ればと謂て、謹愼の深い男であるから、圖に乘つて、(ぢや一升奢らう)などゝ、脆く內兜は見せない。突けるなら何處からでも突いて來いといふ氣色で、一向取合はないといふものだから、植久は躍起となつて、有る事、無い事、嬉がらせの百萬陀羅を陳べると、これには讓も目が眩むで、(難有い)と(辱ない)が腹の中を驅廻る其苦しさ。むか〳〵と何だか吭まで込上げて來るのを鵜嚥にして、氣強くも最一辛抱した。是に於て植久も根負をして、全く話せねえと、愛想竭しの袂を拂つて座を立つた。

關ヶ原！明日の關ヶ原！戰はずして天下は既に此方の物だ。扨こそ推量に差はず、二階に見えた女の姿は、面白くも無い田圃の景色を眺めるのでは無くて、我の管を聽きに出たのである。眞僞の程は判らぬけれど、久五郎の言ふ所に據れば、隣の女の二階に出てゐたのは、單管を聽かうばかりでは無い、其實我を見やうといふ精神らしい。と、ま謂ふのだけれど、其は見た事で無いから一圖に信じられはせぬ。然し假二階に出てゐたのを、自分の管を聽かむが爲にとすれば、大いに慮へなければならぬ、唯音を聽くばかりならば、何も二階へ昇ることは無い。垣一重であるから、樓下に在て十分に聞える理である。それだのに二階へ昇る、として見れば、久五郎の謂ふ所も一理ある。

兎も角も最一度明日試して見るに如くは無い。此方の思はく通り、明日また二階へ昇つたら、いよ／＼其に相違なし、聽き且覗むといふ精神なのである。

それほどにして聽いてくれるとは實に辱ない。且視むといふの一段に到つては、殆ど冥加に餘つて感謝す可き言語に苦しむ。と謂つて、容貌が好からといふので見たがるのでは無い、無論。また見られるやうな容貌でも無い、なほ無論、實際見られては却て迷惑するのであるから、一目なりとも見られるとは万々望まぬ。けれども管を聽いて、あゝいふ音を出すのは、どんな人だらう？　是非見たいものだ、とまでに感じられたかと思ふと、潸然として涙の下るを覺えない。

知らぬことゝて讓は今日まで天を怨むでゐた。我に何咎あつて、こんな醜貌に生みつけて、恥辱を曝しに世中に出してくれたのかと。實に天を怨むだが、今となつて見れば、濟まない、天に何の怨か有る？　此やうに讓は醜貌に生れた、下女、子守、火屋や玻璃燈の破損買にまで他見をされるやうな、見る影も無い姿に生れたけれど、櫻は花で、栗は實で、孔雀は羽で、鶯は聲。萬物各其稟るところを異にして、彼に長あれば此

に短がある、そこが天理の妙だ。譲も顔が好くない代りに、天之に與ふるに尺八の美音を以てしたのである。我の姿には他見をする下賤の女はあるけれど、此管に心を動かさぬ美人は無い。惟へば凡慮の淺きを以て測り難きは天の深意である。人は多く眼で惚れられる、我は獨り耳で愛される。眼と耳との差違はあるけれども、眷戀されるのは一つである、女に好かれる味に二つは無い。

噫、知らなんだ〳〵、昨日まで眼で嫌ひぬかれた我といふものは、今日から耳で好かれる粕壁譲ならむとは！

と仰いで天を拜し、俯して尺八を取擧げ、

「三十圓ぢや廉なものだ。」

（七）

關ヶ原はいよ／＼今日となると、朝からの胸騒、そは／＼、うは／＼、坐ても立つてもゐられない。貧乏人が夢に千圓札を拾つて、夢ならば覺めるな、と切りに氣の揉める、快やうな、不快やうな、一種不可思議の心地がする。こんな感情を懷いたことは、粕壁讓物心づいて以來未だ曾て有らざるところで、恐らくは又最終而最初であらう。

大雪脚を沒しても、暴風木を拔いても、强雨盆を覆しても、其外あらゆる天變地異の朝と雖も、謹勉なる粕壁讓は、あゝ出勤するのは否だなあ、と色に出したことが無ければ、心に考へたことも無い。それほどの男が今朝ばかりは、後髪でも曳れるやうに、出勤の裝束をしたまゝで、座敷中をぐる／＼廻りながら獨語をいつてゐる。

「今まで一度も怠けたことは無いのだから、一遍ぐらゐは可からう。月

に一度屹度欠勤する奴さへあるのだ。一寸一枚所勞屆を出せば、それで濟むのだから。然、休むのも可い、けれど今まで休まないのだからなあ。そこも有る。」

と先づ火鉢の前に坐る。そこで袂から麁末なる卷莨入を出しかけて、思案莨を一本。ぷかり〳〵と烟を吹いて、有間考へてゐたが、何と思つたか、早朝から尺八の調と洒落こむだ。今に出懸けるだらうと、靴を正して待つてゐた女房は、時ならぬに管の音がするので、驚いて飛んで來る。見ると、讓は泰然と本箱に倚懸つて、高々と帽子を戴き、袴を着いて立膝をして、庭に向つて餘念無く吹いてゐる。

その優長の鹽梅、氣樂さ加減、壇の浦の御座船か、樓門の孔明か。前に敵を控へてゐながら、悪落着に落着いて、今日は日曜のはずだが、といはぬばかりに澄してゐる！

此體に女房は打魂消た。眼を圓くしたばかりで、頓に語も出ないのを好い

幸ひに、讓は素知らぬ顏で吹いてゐる。

「貴下まあ。」　とやう〳〵聲を懸けたが、讓はなほ寂寞として眼を閉ぢ、指の頻りに動くに隨ひて、管はすゞろに妙音を響かしてゐる。

「貴下、もう時間がございませんよ。どうなすつたのでございますねえ。」と女房は諷する如く、訝る如く、詰るが如く、促がす如く、憤つたいかの如く、とんと一つ足拍子を踏むで、「今日はお役所は？」　と喚くと、其の聲の調子外の爲に、律呂も亂れたのか、管の音はたと歇む、途端に讓は不承々々に顏を擧げて、

「どう爲やうかと思つて。」　と今度は弱い音を吹く。

「何處か御不快のでございますか。」　と訊ねると首を掉る。

女房は更に合點が行かぬ。

「何以いらつしやらないのでございます。」

「實は今考へてゐるのだ。」

「それぢや何ぞ御用でもお有なさるのでございますか。」
讓は歌口から管の中を覗きながら、また首を掉る。
「御不快も無し、御用も無し、それでお役所をお休み遊ばさうといふのでございますか。」
讓は返答に窮つて、帽子を取つたり、冠つたり、冠つたり、取つたりして、少時考へた末に、
「行かう！」と聲を懸けて、やをら立上る。女房は嬉しさうに、
「あゝ然うなさいましよ。これまで御精をお出しなすつて、今更お休みなさるのは、百日の鐵砲屁一つですから。」
と間違つた言をいひながら、子細らしい顏をして前に立つ。讓は後からのそ〳〵跟いて入口まで來ると、植久も送りに出て、「今日は大層御優悠おやございませんか。」
といふ挨拶。讓も少しばかり極の惡い思で、

「つい晩くなつて………。」

だけは聞えたが、以下口の内にて不明。倉皇格子を開けて、逃げるやうにして出て行く。

殊勝にも粕壁讓は出勤した。は可かつたが、取急いで魂魄を家へ忘れて、出かけたのは脱殼である。

蟬の脱殼でも耳爛の藥になれば、蛇の脱殼でも肌理を密にするから、苟も萬物の靈たる人間、その脱殼が何かの用に立たざらむ乎。月給十六圓の一日分の役を勤めて、のこ〳〵歸つて來たのは、午後の彼此四時。座敷へ入る、衣更へる、とつぱくさと遣つて、やがて恭しく取擧げたのが(虫の音)の名管である。づつと體を極めて、いつもの柱を背にして吹かむとしたが、待て少焉、そろりと椽へ這出して、忍びやかに隣の二階の樣子を候ふと、軒端に高く葭簾を卷いて、腰硝子の障子がちやんと締めてある。樓下は？　同じく留守かと想はれるほど森閑としてゐる。

在るのか、在ないのか、消息は少しも知れぬ。もしや湯へでも行つたのか。それとも旦的と何處ぞへ出掛けたのか。在るにしては餘り閑寂過ぎる、と讓は大分氣を揉む。

其間に聲がしたので、占めたと耳を澄すと、判然とは分らぬが、どうも例のゝ聲では無いらしい。疑ふらくは下女の聲。下女が獨語をいふのこ、あんなに聲を立てることもあるまい。誰かと話をしてゐるとすれば、二人暮の家だから相手は彼に極つてゐる、それとも八百屋でも來たのか知らぬ。

下女でも可い、八百屋でも可いとして、左も右も一つ探を入れて見るとしやうと、瀬踏の曲(そんなのは有るまいが)といふのを一節吹いたけれども、應じない。

「あゝ全く在ないのだ、在さへすれば出て來ない理は無い。それとも寐てゞもゐるかなあ。寐てゐたところが、もし久五郎が言ふ通りの事實な

ら、明日隣で尺八の音がしたら、すぐ起しておくれよ、とか何とか、下女に吩咐けておきさうなものだ。それを吩咐けておかないやうなら、脈は無いのだ。久五郎め、彼奴ちやらっぽこを謂つて、失敬な奴だ。」

と尺八を頤の支柱にして、ぐんにやり考へてゐると、青天の霹靂、テンテンと第三絃を彈く音が、冴えわたつて響いたので、荒肝を抜れた讓の頤は支柱を外れて、あはや疊に打附つて、前齒で舌を咬まむとしたが、次いで轉軫を卷く音がキリ／＼キリと、鼓膜を貫くばかり。

勇士が轡の音に目を覺したかの如く、讓の體は忽ちしやっきり張つて、勢猛に首を回らして隣を睨むだ。睨むだかと思ふと直に外眥が下つて、眼中の容躰が異く他愛無くなつて、顏の筋が弛むで來る。

其間も調子を合はす三味線の音は荐りに響く、キリ／＼キリ、トテントテン。

「なるほど在たのだ。」　と讓は呆れた顔で呟く。

「うむ、在たのだ。」と餘り呆れたので、最一度呟く。
「三味線を彈くのか知らぬ。何だらう？ 清元か、常盤津か、長唄か。こりやあ面白い。面白いは可いが、先刻から在たのだな。在たのに二階へ出て來ない所を見ると、脈は無い！ さうすると昨夜のは全く田圃か。えゝ、もう落第だ〳〵。こんな馬鹿々々しい事があるものかい!!」
と尺八を疊へ敲きつけて、ぐたりと轉覆つて、長大息して、
「いゝ馬鹿を見た！」
讓は仰向に轉覆つたまゝ、ぱつちり眼を開いて、への字狀に兩膝を立てて貧乏顫動をしてゐる。
今に三味線を彈出すかと、待つ心も無く待つてゐたが、思はせぶりに調子を合せたばかりで、一向取掛らぬ。
讓はぬく〳〵と起上つたが、隣の方を流眄にかけて、
「何だ、調子を合せたばかりで彈かないのか。彈かないくらゐなら、始

から調子なんぞを合はせなけりや可い。其方が彈かなけりや、此方で吹いてやらう。」

今は聽かせやうといふ色氣より、寧ろ吹いて〳〵吹倒してやらうといふ自憤の氣味で、(雪)といふ意氣な短い曲を吹くと、曲の闋る頃に、またトテン〳〵と稍低く響く。

「えゝ何の事だ。またトテン〳〵か。トテン〳〵より外には知らないと見える。そんな女に我の管が解るものか。ふゝ飛だ買冠をした。それぢや骨を折つて吹くことは無い、お喧嘫からうけれど、又ちと(虫の音)のお稽古でも爲やうか。」

と例の曲を吹出すと、トテン〳〵より外には鳴るまいと侮つた隣の三味線が、遽に撥音冴えて聞えると思ふと、不思議！　合せてゐるのである。隣の三味線は粕壁讓の管と合せてゐるのである！

その三味線の主を誰だと想ふ？　隣の主婦。その主婦を何だと想ふ？

恐らくは外姿。その外姿は若い美女である。その美女が三味線を彈いて、讓の尺八と合せてゐるのである。

讓の心臟は實に破裂した。くら〳〵と眼が眩むで、一時は全く知覺を失つたが、その中でも管は見事に吹澄してゐた。何が何やら一切夢中で、

「草茫々たる阿倍野原に虫の音ばかりや殘るらん〳〵。」

と納まると、讓はやうやく正氣づいて、天狗に戻された人のやうに、唯きよろ〳〵と四邊を見廻して、一躰我は奈何したのだらうと、心の中に我と我身を疑つてゐるやうに見えた。暫くは茫然してゐたが、軈て血が通ひ始めて、眞人間になつたといふ容體で、隣の方を名殘惜さうに眺めてゐたが、良有つて、

「驚いたなあ。」　と寐惚聲で先づ呟く。

「恐入つた。よもやと想つてゐたのに、合奏したのは驚いた。それが尋常の腕でないから驚いた。上手なものだ。唯上手に彈くだけなら格別驚

くことも無いけれど、さつさと合奏したのには恐入つた。元來この(虫の音)といふ奴は、初心の識るべきものでは無いのだ。餘程の心得が無ければ……………どうも凡人ぢや無いな。外妾らしいと謂ふが、舊は藝者か知らぬ。藝者にしちや珍しい嗜だ、まづ無いな。品の好い女だといふから、或は良家の娘が零落して、妾に出たといふやうな事かも知れない。何にしろ、此方で吹いてゐるのを、突如に合奏して澄してゐるのは、憎いほど凄い腕だよ。どんな女か見てやりたいものだ。」

（八）

其撥音が冴えてゐやうが、ゐまいが、其腕が凄からうが、何であらうが、外姿であらうが、無からうが、舊は藝者であらうが、旗下の娘であらうが、そんな事に頓着は無いのである。唯此方の尺八に合せてくれたといふ其一事で、粕壁讓は見事に極樂往生を遂げた。

設今日も彼が二階へ出たならば、それこそ自分の思つた通り、また久五郎も睨むだ如く、隣のは全く自分に思召がある、では無い、自分の尺八に思召があるのである。どうぞ今日も出てくれますやうにと、昨夜から今日の四時まで、忘れる間も無く其のみ念じてゐたのに、吹いても、吹いても、欄に人影は見えなかつた。此時の讓の心地は抑や抑どんなであつたらう？　實に今月の俸給と引換でも可いから、欄に靠れて聞惚れてゐる姿が、唯一目見たかつたくらゐである。

失望の極は泣聲になつて、（いゝ馬鹿を見た。）と己を辱めて、之に懲りても返す〴〵自惚は出すまいものだ、と迄は未だ後悔する間も無いのに、意氣な音調で、心有りげに、三味線を合せるといふ、得も言はれぬ筋になつたから。讓は夢かとばかりに歡んだ、歡極まつて逆上せ、逆上せたので自失ぼんやりてしまつた。

隣は三味線で此方の管に合せる！　考へて見れば格別不思議は無い。先方も所好だのに、此方で善く吹くといふ所から、烏滸がましいわけだけれども、一寸洒落に合せる、隨分有りさうなことである。先方が女と聞くほど、嬉しいといふ念よりは、生意氣なといふ感が起りさうなものであるが、退いて最一應考へて見ると、餘り心地の不快ものでは無いらしい。音樂は人心を和ぐるといふ中にも、外の鳴物と違つて、三味線は特に色氣を含むだものであるのに、その又彈者が彈者であるから、連句なら無論表には嫌ふ、たしかに戀になる。それから、垣越に合せるとい

ふのが、此奴風流な戯で、萬更腹も立たない。
人情本の口書では無いが、男と女が合奏をしてゐる狀は、自から靄然と和合の相を表はしてゐる、言を換へれば、何と無く戀を含むでゐる。誰にしても木石にあらざる限りは、此局に當つて、ちつとやそつと、神驚き、魂迷はざるものはあるまい。彼は昨日から、隣のは我の尺八に心を惱ましてゐるのでは無いかといふ疑念が有り、且つ是非惱むで貰ひたいのである、惱むで下されば好いがと切望してゐるのである。所へ合せられたのであるから、もう堪らぬ、前後の分別も思案もあらばこそ、騎虎の勢驀直に、戀の淵を目懸けて逆筋斗に躍込むだ。
讓は管を下に置くと、隣の方を一寸見たが、直に俯いて、にや〳〵と笑つた。
「やつぱり然うだ。どうも然うらしい。萬更嘘でも無いかな。さうして見ると久五郎が昨日見たといふのも本當なのだらう。艶福！　艶福！」

何だか、かう變な氣になつて來た。あゝ一升奢つてやりたいな。けれども奢ると又何の彼のと謂はれるのが煩し、心祝だから奢つてもやりたし。えゝ、無暗と嬉くなつて來て爲樣が無い。どうしたら可からうなあ。」

主人の久五郎が内に在たらば、此際咖煙管で默つて引籠むでゐるものか、(旦那、二升ですせ。)と忽ち飛で來るに相違無い。生憎今朝から神田邊へ仕事に出て未だ歸らぬ。そこで女房が、留主は私の預りといふ顏で、襷を外しながら座敷の口から覗きこむで、

「旦那、唯今は。」　と底意有げに笑ひかけて、一寸小腰を屈めて、額越に讓の顏を見る。

「何が？」　と濟しても、心に覺があるのだから、鼻の頭に恐悅が躍つてゐる。

「何がぢやございませんよ。隣家で好い音調がいたしたぢやございませんか。」

「さうさ。聽いたかい。」
「お安くないんでございますね。」
「何故？」　と讓はもつと弄つてもらひたさうに、強ひて訊ねる。
「何故でも何でも可うございますから、何ぞ奢つて下さいまし。もう御膳の支度をいたすのですから。」
「奢れ、奢る事情がありや何でも奢るさ。唐突に奢れたつて、私はそんな罪を作つた覺は無いから。」
「多度おつしやいまし。隣の三味線と貴下の尺八と…………お樂みの癖に。」
と入口に踞むで、これから大いに談じやうといふ身の構。
「うむ、合奏してゐたといふのか。」
「ゐたといふのかも無いもんですよ。お安く無いぢやございませんか。」
と襷の束ねた端で輕く疊を拍つ。
「お高いことも無いさ、私が合奏したのぢや無し。」

「先方から醉興に合奏したのでせう。」と嬉しがらせに突込まれて、讓は內心恐悅、外面はむゝと塞る。
「ですから奢つて下さいと申すのですよ。鰻鱺にいたしませうか、鷄肉にいたしませうか。」
讓は稍俯いて、頭を撫でゝ無言でゐる。
「何方にいたしませう。ねえ貴下。」
「それだけの事で奢らせられるのか。」
「それだけの事？」と女房はわざと眼を圓くして、「まあ慾の無い。どうすりや奢つて下さるのでせうね。」
「あれで奢れといふなら奢るさ。」
「當然でさあね。」と窘めるやうに言ふと、
「當然とは酷い。」と歎すやうに言ふ。
「でも貴下、萬更不快心地はなさいますまい。」

「奢らされてかい。」
「あれ、さうぢやございませんよ。隣のにあゝやつて持掛けられて。」
「怪しからぬ、持掛けられるなんて。そんな馬鹿なことがあるものか。」
と見たところでは怒つた貌。
「おや餘り好い心地はなさらないのでございますか。」
「そりや不快ことは無いさ。」
「そら御覧じましな。謂はゞ持掛けられたやうなものでございまさあね。」
「そんな馬鹿な事！」と今度は怒らずに、ちつとばかり極の悪い貌。
「本當に奢つて下さいますか。」
「奢るさ、仕方が無いから。」
「仕方が無いとおつしやるなら、御迷惑なのでしせから御斷り申しませう。」
「いゝよ、奢るよ。」

「そんなら奢つて戴きませう。」
「酷く恩に被せる。」
「被せても可い事情があるのですから。」
と立上つたが、一寸氣を變へて、又踞むで、
「旦那、申しかねましたが、今月から御座敷料を最少し上げて戴きたいのでございますが。」
食氣の後が直に慾の不意を食つて讓は吃驚、「何故だ？」と眞顏になるのを見て、女房は底の拔けたやうに笑ひながら、勝手の方へ、どたばた、どたばた〳〵。

二階の欄に倚る女の裾だけを瞥と見たばかりでは、讓の自惚は起らなかつたのである。貴下の管に聽惚れて、切りに此方を覗いてゐましたぜ、といふ久五郎の注進ばかりでは、讓の自惚は未だ起らなかつた、斜ならず嬉しかつたには相違無いけれども。今日といふ今日こそ、隣の女は自分の管に氣が在るといふ確證を擧げたのである。

自分の管に氣の在る女！　どんな女だらう、美女とは聞いてゐるが、どんなに美女だらう、見たいものだといふ念が、火を噴く如く勃發する。是非どうかして見てやらうと考へたが、見るのは可いけれど、爰に困つたことは、自分の姿は先方に見られたくない。管はなるほど聽かれても、聽かせても、慙かしいことは無いけれど、此男振は我慢にも見せたくない。隣の女の思ひついたのは、管に在りて顏にあらずであるから、此後

ともに管を拙くさへ吹かなければ、それで讓の戀は長く保たれるので、貌が醜いからといつて、其が微塵も藝事に影響することは無い、と謂ふのは表面上の理窟であつて、いかに心の融々となる音色を出してゐても、此顔色では誰も興を覺してしまふ。

譬へば食物、それが旨いものでも缺椀などに入つてゐたら、啻に外見が不味さうに想はれるのみでは無い、食べて見たところで實際不味。それが、一寸器が綺麗であると、さほど旨くない物までが旨く食へる。人情といふものは一體さうしたものである。

今我の管にしても其理だ。管は良い、けれども吹手がこの醜貌であつて見れば、それとは知らず蔭で聽いてゐる間は、折角感動したのが、お目に懸つてから急に否にならなければ可いがといふ懸念で、讓は隣の丶顔が見たいに就けて、自分の姿を見られては一大事といふ苦勞を求めた。でも見たい！　自分の管に惚れたといふ女、然も其が美人といふのであ

るから一層見たい。と此方でも此程に懐ふのだから、女の方もあんなに善く吹くのは、どんな男だらうと、見たがるのも無理ではない。我の見たい程それ程女も見たからう。

隣のは寧ろ見せたいくらゐの容色を持つてゐるのであるから、見て貰ひたからうが、此方は然うで無い。見られたら百年目、例の美味も醜い器の一件であるから、忽ち愛想を竭かされるのは、鏡に懸けて見るが如し

時鳥ではないが、聲ばかり聞せて姿を見せない所に、趣が在るのだから此方は何處までも姿を見せない算段をしなければならぬ。すれば讓の管は、いつも初音の心地こそすれで、決して飽かれる氣遣は無い。

と妙くも分別をした。

夜に入つてから主人の久五郎は歸つて來る。早速膳に向ふと、こは什麼？笄の如く割箸を戴いた鰻鱺の大丼が麗々しく附いてゐるので、水瓶の中に龍が生いたほど驚いて、

「奈何したのだ、こりや。今日はお前の志の日か。」
と憎たらしく言ふと、女房は莞爾として、
「粕壁樣の豊年祝だよ。」
「粕壁樣の？　ついぞ無え事だが、何だ。」
「隣の、ね、あれが今日旦那の尺八に合奏してね、彈いたのさ、どんなに好かつたらう。」
久五郎は愕然した貌で、
「えゝ、おい、三味線をか。有難え！」
と額をぴつしやり。其手で丼の蓋を取つて、
「いよう、流石は豊年祝。時にお燗は未だか。」
「ちつと溫いけれど。」と女房は鐵瓶から德利を引揚げる。まづ一杯と、溫いのをぎゆうと引懸けて、
「うむ、なるほど、旦那の尺八に隣のゝ三味線、此奴は妙だらう。如何

だい、三味線は？」
「素人ぢや無いね、巧いもんだよ。」
「旦那大喜びだつたらう。」
「色々冷かしたら、始めの内は苦い顔をしてゐたつけが、とう〳〵仕舞には蕩然として、やつぱり女は否ぢやないんだねえ。」と今更感心したやうに言ふ。
「箆棒め、女の嫌ひな奴があるものか。我のやうな方でも悪かあねえんだもの。」
「お前様の方ぢや悪く無くつても、女の方で御免を蒙るよ。」
「我に御免を蒙つた女が何處に在る、内ちやかうして酷く爺むさくしてゐるが、一町と戸外へ出て見ろ。へつ、御存じは無からうけれど、寺島村の久様が通るつて、後から陸續跟いて來らあ。煩くつて〳〵、うつかり仕事にも出られやしねえ。」

「それで此頃惰けるのかい。」

「擧足を取るない。寺島村の久様だ、これから些と大事にしや。まごまご

ごすると、眞箇に亭主冥理に盡さるぜ。」

「おや鰻鱺の所爲か、急に氣が強くなつたよ。」

「氣も強からうよ、御馳走だもの。」

「でも藝の徳だ、恐ろしいものよ。全く旦那の尺八には惚込むだのだ、

見せたいよ、隣のを、旦那に。美女だ。」

「旦那は未だ見ないのかね、私も見ないけれど。」

「お前なんざ見ねえが可い、見た日にや生きちやゐられねえから。」

「何故?」　と此謎は解けぬ様子。

「愧かしくってよ。」　と冷笑ふ。

「お前様だつて同じ事さ。」

「此奴も何故と言ひてえな。」

「其顔ぢや始まらないからさ。」
「戯るない。寺島村の久様だ。」
「後から陸續跟いて來るだらう。」
「はゝはゝは、其顔と謂や、粕壁樣よ。」（と小さな聲をして）
「お氣毒なものだ。尺八ぢや惚れられても、御本尊を拜まれちや、情出來るのも出來ずに仕舞はあ。さう謂つちや惡いけれど、せめて尋常の容貌なら、今度のなんざあ本物になるんだけれど、何つたつて彼容貌ぢや納まらねえからなあ。」
「然うさねえ。今こそ見慣れたから別に何とも思やしないけれど、始めて家へ光來の時はねえ、きび／＼と能くもかう醜く出來てると思つたよ從來些とも女の話なんざ爲さらなかつたけれど、彼で心から嫌ひといふんおやなからうねえ。又彼で無暗にお好きでも困るけれど。」
「嫌ひといふものが唯の一人だつて有るものかな。我なんざ未だに好く

って耐へられねえ。」
「お前樣なんざ蓆破の質だよ。」
「人聞の惡い、未だそんな年齡ぢやねえ。額際こそ禿げてるが、今が色の出來る眞盛だ。我に旦那の半分尺八でも吹けて見ろ、來月邊から、もう日光臭くなつて土堀をしちやゐねえ。糸織の（ねんねこ）で袖手をして、隣のゝ仕送で、安氣に色で暮せる男なんだけれど、生憎不器用の無藝と來てゐるもんだから、まあ十人出來るものが七人、と謂つたやうな勘定で…………。」
「もう解つたよ。お前樣は色男だよ。」
折から讓の座敷で手が鳴る。女房は頓狂な聲をして、
「へえい。」

翌日讓は役所から退けると、昨日の味を占て、今日も屹度合奏すだらうといふ肚で、何は措いても、先づ（虫の音）の名管を取上げる。所で不圖考へたのは、毎日（虫の音）でも無からうから、何か異つた曲をやりたいけれど、突然に始めたら狼狽だらう。何をやるといふ合圖があたいものだがな。（虫の音）ならお馴染で世話無しだけれど、毎日ぢや鼻にも附くし、然も我が外の曲は下手のやうでもあるし。何とか好い工夫は無いか知らぬ、と種々氣を揉みながら、何を吹くといふ覓據無しに暮露々々と音を入れる、忍男なら垣の外でえへん〳〵を極める格で。

隣家でも思召はあるのと見えて、忽ち之に應じて絃の音を響かす。そこで、此奴いよ〳〵本物と、讓はぐつと來て、早速譜本を取つて好加減に拔けると、（深夜月）といふ三下りが出る。

なるほど(深夜月)は可からう。之を一番吹くかな。(虫の音)が行けば此も行くに違ひ無い。好い文句があるな、身につまされる、(戀しき人は暴き風、うき身に透る烈しさは、君に恨は無きものを…………。)(君に恨は無きものを)は穿つてる。其に相違無い。君に恨は少しも無いけれども、戀しき人は暴き風、憂身にとほる烈しさは、實に耐へ難いと口說いたところが哀れで好い。

と之に極めたが、さあ一生懸命。まづ坐住から正して、無念無想と謂ふのになつて、眼を半眼に開いて、心靜に吹出すと、我ながら玉振の妙音。迸つて、乾坤爲に淸きかと疑はれる。けれども隣ではペンともいはないから、讓の氣の揉み方は尋常で無い。

隣家で合せないからといつて、今更罷められもしない。と謂ふのが、自分が甚く乘つてゐて、中途で廢すのが如何にも惜いのである實際乘つてゐるほど有つて、今日は格別調子が好いに就けて、合奏せてくれないの

が恨めしい。是ほど身を入れて吹いてゐるのであるから、今日こそ合奏せてもらひたいと念ふのに、錦を衣て夜行くが如しだ、寶の持腐だ、犬死だ、と少しく孤憤になつて吹いてゐると、（空飛ぶ鳥の影なれや）の後の、手事の前彈から、絃聲忽ち湧いて、輕攏、慢撚、嘈々〱切々〱として合奏せ始めたので、讓はいつそ命も入らなくなつて、肺の臟に龜裂の入るほど、力を竭して調べる。

やがて首尾好く曲は闋つたが、讓はなか〱湛納しない。是非最一曲と思つたが、外の曲をやつて又狼狽せるよりは、寧ろ最一遍之を首から合せやうといふ了簡で、追懸けて（深夜月）を繰返すと、隣でも其と曉つて直に彈出す。

讓は是に於て、隣のが全く自分の管に惚込むでゐるわい、と心の底から確信する。それも無理は無いので、隣の女は言語を以てこそ其意を通ぜねけれども、所爲に於て十分に心の誠を明してゐると見て差支無い。

士は己を知るもの丶爲に死すといふのが人情であるから、讓も己の管を悅ぶ隣の女の憎からう道理が無い。それも平生緣日の小間物店ほど女子に取卷かれてゐる男なら、これしきの事は九牛の一毛、固より齒牙に懸くるに足らぬけれど、御承知の通り飢餓きつてゐる讓には、實に容易ならざる艶福で、永く日記の上に特筆大書すべき一生の面目である。

それほど難有味のある女をば、越人が秦人の肥瘠を見るが如くにしてはゐられない。逢ひたさ、見たさは飛立つばかりであるが、此方は何處までも例の時鳥を極めて、聲ばかりで氣を揉せの、姿は見せまいと云ふのであるから、なか／＼仕事が難しい。まづ垣間見の外には施すべき手段も無いので、其も可からうと椽に出て、庭下駄に足を懸けたことは懸けたが、爰に當惑したのは、此態を植久夫婦に見附けられては些と拙い。と謂ふのが、鰻飯まで奢せられたのであるから、秘密は既に破れてゐるのであらうけれど、垣覗をやるまで沽券を下げてゐるとは知られたくな

い。
五十歩百歩であるから、其も可いやうなものではあるが、從來が從來で、女は大嫌ひ、一生精進のやうな貌をして通したのに對しても慙かしいわけである。あんなに堅く見えても、心は矢張軟いのだと思はれるのが愁し、又あれほど堅かつたのが、忽ち蕩けてしまつたと思はれるのは尚のこと愁い。見附けられなければ餘程妙なものだけれども、竊と母屋の方を窺ふと、窓は障子が閉つてゐる。此窓からで無ければ、外から何處も見える處は無いのだから、今の內だと、鷺歩で垣根へ忍寄つて、此處等と思ふ邊に顏を差寄せたが、此方の垣と彼方の垣とが二重になつてゐるので、好い隙が無い。何處かに一箇所ぐらゐは在りさうなものだと、彼地此地探したが、さて無い。幸に在つたところで、座敷だか庭だか判らぬが、何にせよ、隣家の模樣が綺の如く仄かに見えるばかりで、實景の千分の一にも當らないから、唯見えるばかりで、何が何やら全然判ら

ぬ。
二重の垣は殆ど密接してゐるから、隙見の出來るほどの穴を鑽けるのは雑作も無い。小刀で一つ抉れば可いのだと、早速道具は取つて來たが、今度の仕事は些と盗賊じみるので、有繋に氣が咎めたか、きよろ〳〵四方へ眼を配りながら、首尾好く垣まで行着いたから、手迅く刀を揮つて、づかと垣の竹へ斫込むだ。引拔いて最一刀といふ所で、
「おや〳〵。」と女房の聲がしたので、讓は冷っとして、小刀を隱しながら振向くと、女房は椽側まで出て來て、
「おや其處に在らしったのでございますか。何を爲すつて？」
と呶鳴つける。讓はへどもどして、
「うむ、何も爲てゐやしない。」

（十一）

悪い所へ女房に出られて、其日は志を果さずにしまつた。夜に乘じて企てやうとしたが、闇黒で少しも勝手が知れないので、夜明といふ事に定めた。

燈を點けて、机に向つて見たが、底から持上げられるやうに氣が浮ついて、爲る事も無く靜坐してはゐられない。火の焚ゆるが如く、浪の跳るが如く、水火の交も激する如く、耳の側で馬鹿囃子をやられる如く、師走と正月が一處に來たかの如く、讓の肚の中は、色男になりすました感情の爲に攪旋されてゐる。

黒く、冷かに、寂寞として、恰も（死）の如き夜は、到底這般の生氣烈々たる軀を斂む可き柩では無い。讓は無聊に苦むで、悶々として座敷を出た。

入口の框に立ちながら、奥へ向つて、
「一寸散歩して來る。」　と聲を懸けると、久五郎は玻璃燈を手にして慌たゞしく現はれる。
「何方へ？　寄席でございますか。」
「なあに。そこらを散歩して來るのだ。」
「お早くお歸んなさいまし。これからお座敷へ出まして、色々またお話を伺ひませうと存じましたところで。」
へゝへゝへと氣味の惡い笑ひやう。
「何ね、話とは？」　と讓は不思議がる。
「いづれ意氣事のお話でございまさあ。今日も亦お目出度ございました。」
とひよことと頭を下げる。讓は思半に過ぎて、莞爾と打笑み、
「又そんな馬鹿な事を。」　と言捨てゝ、すつと出る。
「何處へお出なすつたの？」　奥から女房の聲がする。

「何處だか。散歩して來ると謂つてお出なすつた。」

と言ひ〳〵久五郎は居間へ入る。

讓は飄然と門を出たが、別に何處へ行かうといふ目途は無いので、足に任せて土手の方へぶらり〳〵、田畝路の闇黑を半町ほども來たが、不圖立住つて前より足疾に引還す。

殆ど我家の側まで來たから、もう歸るのかと想ふと、垣根傳ひに裏の方へ出て、隣の女の住居の門に立つた。それからぐるりと廻つて裏口へ出て、それから最少し廻つて、庭の垣の外から斜に二階を見上げて少焉イむでゐる。

二階の雨戶は閉めてあるが、樓下は明放して、座敷の火影が庭の樹々に映ろつて、家內は人無きが如く森としてゐる。二重で無いから此垣からは奈何か見えやうと、立寄つて隙見をすると、なるほど隙間もあるけれど、植籠の茂に遮ぎられて、十分に眼が逹かぬ。それでも思ひ切れずに

入口の框に立ちながら、奧へ向つて、
「一寸散歩して來る。」　と聲を懸けると、久五郎は玻璃燈を手にして慌たゞしく現はれる。
「何方へ？　寄席でございますか。」
「なあに。そこらを散歩して來るのだ。」
「お早くお歸んなさいまし。これからお座敷へ出まして、色々またお話を伺ひませうと存じましたところで。」
へゝへゝへと氣味の惡い笑ひやう。
「何ね、話とは？」　と讓は不思議がる。
「いづれ意氣事のお話でございまさあ。今日も亦お目出度ございました。」
とひよことと頭を下げる。讓は思半に過ぎて、莞爾と打笑み、
「又そんな馬鹿な事を。」　と言捨てゝ、すつと出る。
「何處へお出なすつたの？」　奧から女房の聲がする。

「何處だか。散歩して來ると謂つてお出なすつた。」

と言ひ〲久五郎は居間へ入る。

讓は飄然と門を出たが、別に何處へ行かうといふ目途は無いので、足に任せて土手の方へぶら〲、田畝路の闇黑を半町ほども來たが、不圖立住つて前より足疾に引還す。

殆ど我家の側まで來たから、もう歸るのかと想ふと、垣根傳ひに裏の方へ出て、隣の女の住居の門に立つた。それからぐるりと廻つて裏口へ出て、それから最少し廻つて、庭の垣の外から斜に二階を見上げて少焉イむでゐる。

二階の雨戸は閉めてあるが、樓下は明放して、座敷の火影が庭の樹々に映ろつて、家内は人無きが如く森としてゐる。二重で無いから此垣からは奈何か見えやうと、立寄つて隙見をすると、なるほど隙間もあるけれど、植籠の茂に遮ぎられて、十分に眼が達かぬ。それでも思ひ切れずに

二三箇所探したが、其効は無い。

隙間は到底駄目だ。やつぱり小刀で抉るのに限る。明朝の事だと斷念して、表へ出て來ると、五六歩前に角燈を閃かして行くものがある。郵便配達か、巡行の巡査か、と視ると、細袴が白い、劍鞘が耀く。二間ばかり行つたかと思ふ間に、ふつと角燈が消えて、ばつたり靴音が絶える。讓は之を見ると、何と無く可厭な心地がして、思はず立住る。巡査が角燈を消す、どういふ意だらう？　風で消えたのか知らぬ。それほどの風も無かつたし、どうも樣子が自分で消したらしかつた。異しいぞ、と立住つたまゝ偸視してゐる間に、靴音がぽくり〳〵と響いて、角を曲つたやうな氣勢である。

丁度自分の歸る道であるから、讓は足音を偸みながら急いで蹤を追けると、角を曲ると同時に、格子戸の開く音がする。此小路には例の隣の女の住居より外に家は無いので、其家はまた格子造である。して見れば、

今格子の音のしたのは隣女の家で、入つたのは巡査だ。巡行の巡査が角燈を消して、夜中女ばかりの家へ入る。これは異しいぞ。彼奴強盗ぢゃ無いかな。それとも火を借りに入つたのか知らぬ。何しろ、前を通つて見れば解ると、見附けられぬやう、と端の方に寄つて、行過ぎながら格子の内を覗くと、土間に立つてゐるのは巡査である。應接してゐるのが女で、それは下女か主婦か、能くは判らぬけれども、何と無く主婦のやうに想はれる。

角燈は消してある、玄關に灯は無し、葭戸から洩れる座敷の燈影が、どんより照らしてゐるのであるから、無論明瞭には見えなかつたけれど、土間に立つてゐたのは巡査で、取次に出てゐたのは女であることは、僻目では無い。

瞥と見たばかりで譲は行過ぎたが、どうも氣に懸つて、そのまゝ見遁されない。これから奈何な事になるだらうかと、ぴつたりと垣に身を寄せ

て、暫く樣子を候つてゐる。

凡そ二十分餘も立つてゐたが、巡査は出て來ない。はて火を借りるのなら、疾に出て來る理だのに、何を爲てゐるのだらう。これは彌異しいわいと、最一遍門を通つて見ると、怪、怪！　玄關に人の影も無い。異しいぞ。あのくらゐ見張つてゐたのだから、出て行つた理は無い。家へ上つたのだ。上つたのなら靴があるだらうと覗いたが、土間は闇黑で見えない。靴は見えなくても何でも、出て來なかつたのが何より證據だ。上つたのに相違無い。

強盜かな？　女二人といふことを知つて推込むだのかも知れない。もし然うなら助けてやりたい。女ばかりで窮つてゐるだらう。拔刀で威されて聲も立てずにゐるのだ。此處から一番呶鳴つてくれやうか。と讓は心が悸々して、足が浮出した。既に格子戸を亂打いて、盜賊々々と叫ばうとしが、考へた、もし然うで無つた日には飛だ恥辱を搔かなければな

らない。まづ心を落着けて様子を探つた上でと、耳を澄したが、がつたりといふ音も聞えぬ。

けれども讓の心は安まらぬ。二人とも踏縛つて、猿轡でも箝めておいて、悠々と仕事を爲れば何のことは無いのだ、と想ふと益々氣が揉めて、矢も楯も耐らない。どうか様子が見たいものだと、また引還して庭の垣から隙見をしたが、見えないものは依然見えない。

氣は揉める、心は逸る、胸は跳る、腹は立つ、奈何せうかと思つてゐると、俄然水口の戸が開いて、のつそりと出て來るものがある。おのれ曲者と、讓は息を凝して潜むでゐると、下駄を踏覆して、おゝ痛いといふのが女の聲である。おやと思ふ間に、すた／＼前面の方へ行く。間も無く井戸端に桶を置くらしい響がすると、直に水を汲始める。

想像と實際とが、差つたと謂つても餘り差ひ過ぎたので、讓はあんぐり口を開いて、我ながら極の惡いほど可笑かつた。やがて重たさうな足音

と、手桶の水の溢れるぼちやり〳〵が聞えて、其者は水口へ入つて了ふと、後は再び閑寂とする。何だ、下女が水を汲みに出たのか。賊が入つてゐるのに水を汲むことも無からう。然うして見ると、賊ぢや無いわい。それで先づ一安心したけれど、そんなら彼巡査は何だらう。よもや不見不識の者ぢや無からう。知人でも何でも無い巡査が、巡行中に人の家へ入り込むといふ法は無い。設ひ知人であらうとも、巡行中に道草を食ふとは怪しからぬ事だ。自分の家へだつて寄る事はならぬのに、人の家へ、怪しからぬ、燈を消して、靴を脱いで、悠々と上り込むで……以の外の事だ。不都合な巡査だ。告發すれば早速免職ものだ。太い奴があつたものだ。

無論知人に違無い。けれども如何いふ關係なのだか知らぬ。兄とでも謂ふのかな、藝者の兄、妾の兄なんぞといふ奴は得て臭いものだ。(菖蒲を杜若といつたが無理か、場合ぢやお前を兄といふ)の本文通りの兄かも知

れぬ。けれども高が巡査だ。あのくらゐの女が巡査風情を情夫に持つ？餘り不相應だ。蓋し有得可からざることだ。或は眞實の兄か、其も判らない。兄が巡査をして、妹が妾、父親は昔八百石の旗下。隨分さういふのも有る例だ。まさか情夫といふやふな事はあるまい。譬へば兄にしろ、情夫にしろ、苟くも職を巡査に奉じて、人民保護の任を負ひながら、自から罪を犯して、巡行中に小憩をするとは不都合極まる話だ。用が有るなら非番の時に來たが可いぢやないか。角燈を消して人目を忍び、夜中こそ〳〵入込むなどゝは、職掌柄にも似合はぬ事だ。

それでも晝間は交番所の中に眼張つて、高慢な顏をして生酔と議論をしたり、無提灯の車夫を捉まへて、愚にもつかない說諭をして、揚々自得してゐるのだらう。新造が物を尋ねると、惡執濃く親切に敎へて、傖父が何か聞くと、傲然として更に應じないなどゝいふのは皆この手合だ。

怪しからぬ。戸籍調に來て、茶を一つ出しても、會釋をしたばかりで手も着けないといふのが巡査の作法だ。それに、夜中女ばかりの家へ上り込むで、もう彼是三十分餘にもなるのに、まだ出て來ない。一體何を爲してゐるのだ。不屆千萬な奴だ。

と如何いふものか讓は甚く憤懣して、賊でも無つたから、それで安心して歸つても可さゝうなものを、まだ／＼氣が揉めるといふ鹽梅で、家の周圍を廻つて、巡査の見張をしてゐると、良有つて、格子を開けて出るものがある。

畜生め！　と讓は角に隱れて窺つてゐると、前面の方へ行く靴音がぽく／＼とする。

畜生め！　まだ角燈を點けずにゐる、と見てゐる間に巡査は立住る。何をごそ／＼してゐるかと思ふと、一道の火光忽ち闇を劈いて迸しる。其光の間に、朦朧として巡査の蹲まつて燈を點ずる姿を認めた。

畜生！　とう〳〵點けやがつた、となほ忍むでゐると、巡査は徐に起上る。乃ち照魔の角燈炯々として耀き、破邪の長鋏鏘々として鳴り、靴音高く踏轟かして、方正に、殊勝に、神妙に巡行を始める。

怪しからぬ。戸籍調に來て、茶を一つ出しても、會釋をしたばかりで手も着けないといふのが巡査の作法だ。それに、夜中女ばかりの家へ上り込むで、もう彼是三十分餘にもなるのに、まだ出て來ない。一體何を爲てゐるのだ。不屆千萬な奴だ。

と如何いふものか讓は甚く憤懣して、賊でも無つたから、それで安心して歸つても可さゝうなものを、まだ／＼氣が揉めるといふ鹽梅で、家の周圍を廻つて、巡査の見張をしてゐると、良有つて、格子を開けて出るものがある。

畜生め！　と讓は角に隱れて窺つてゐると、前面の方へ行く靴音がぽく／＼とする。

畜生め！　まだ角燈を點けずにゐる、と見てゐる間に巡査は立住る。何をごそ／＼してゐるかと思ふと、一道の火光忽ち闇を劈いて迸しる。其光の間に、朦朧として巡査の蹲まつて燈を點ずる姿を認めた。

畜生！ とう〳〵點けやがつた、となほ忍むでゐると、巡査は徐に起上る。乃ち照魔の角燈炯々として耀き、破邪の長鋏鏘々として鳴り、靴音高く踏轟かして、方正に、殊勝に、神妙に巡行を始める。

(十二)

讓は巡査の不都合を憤つて、心頗る平ならずして歸つて來る。一身上の事の外は冷淡に看過する平生にも似あはず、不思議にも今夜に限つて無性に(怪しからぬ)がるのは、餘程虫の所在でも惡かつたものと見える。否、別に理由があるらしい。巡行の巡査が怪しい擧動をして、夜中女ばかりの家へ入込む。なるほど不都合千萬であるが、其の女ばかりの家と謂ふのが、自分に無關係の(女ばかりの家)であつたなら、單不都合とも、怪しからぬとも念つたゞけで、事は濟むだのである。

然し、其(女ばかりの家)、巡査の入込むだ(女ばかりの家)と謂ふのは、自分の管に惚れてゐる隣の女の家であるから、よもや巡査如きを色に持つやうな、そんな事はあるまいとは信じながら、快い心地はせぬ。それに、巡査の擧動が如何にも胡散臭かつたから、然うでもない、戀は思案

の外であるから、と內々妬ける氣味で、其不都合が殊外癪に障つたのではは有るまいか。

茫然座敷に入つて、薄闇い玻璃燈の前に坐つて見たが、一向冴えない。先刻久五郎が伺ひたい話があるといつたが、極りで又奢れなど〻、油を澆けに來なければ可いが、何と言はれたつて、中々奢る所の始末ぢや無いと鬱切つてゐる。

久五郎は飲過ぎて、はや僵れてしまつた。女房は何を爲てゐるのか、折折ぴしや／＼と蚊を撲つ音が聞えるばかり。

讓は所在が無いので、つい考へる。考へると沈つて來る、考へまいと爲ても考へられるので、こんな鬱悶した時は、平生なら管といふ所であるが、其管も今夜は氣が乘らない。貸本はなほ面白くも無し。起きてゐるのもつまらないし。いつその事寐やう、と時計を見ると、九時少し廻つた。

最こんなか喃、然うして見ると、一時間餘も徘徊てゐたのだ。あゝと惡らしく引張つた欠をして、次手に伸を打つて、否々立起る。それからぐづ〳〵床を敷く、蚊帳を釣る、寢衣に着更へる、脱いだ單衣は衣紋竿に懸ける、いざ横になるばかりになつて、机上の燈火を吹消した、あとは黑白も分らぬ眞の闇。

讓は寐飽きて眼が覺めると、朝の色は戸の隙間からほの〴〵と座敷を照らしてゐる。

寐起の煙草も吸はずに、寢衣帶を締めなほして蚊帳を出ると、直に庭の雨戸を、出來るだけ靜かに、音の爲ぬやうに一枚開けて、筆筒に挿してある小刀を摑むで、衝と庭へ下りる。

人目が無いから公然に、昨日からの仕事に取懸つて、首尾能く此方の垣に十分の隙を拵へた、これから隣の垣であるが、密接してゐると謂つても、五六寸は間が有るから、小刀では達かない。そこで座敷へ取て返し

て、蠟鞘の九寸五分を用意して來る。

晃々と引脱くと、水が滴れさうに磨澄してある。其を惜氣も無く垣へ貫して、がり〳〵がりと頻りに抉つてゐる間に、節へても深く斫込むだのか、更に動かない。色々矯して突いても引いても拔けないので、少しく憤れて、力任せに吽とやると、弛むだから、ぐつと抽いて、見ると驚く。

確に夏なほ寒き氷の刄であつたのが、忽ち燒冷の鹽鰯といふ姿になつて、齒は散々に缺ける、竹の澁には曇る、切尖から二寸約は屈つてしまふ、其淺ましさは眼も當てられない。其は左も右も、試に隙見をすると、依然思はしいことは無いのに、未練らしく幾度も覘いて、其後では鹽鰯の一刀を瞶めてゐたが、遂にはがつくりと投首をして、鞘と刄とを兩手に垂下げながら内へ引込むでしまふ。

再び蚊帳へ入つて寐轉むで、空想の夢を見る裏に、かういふ分別が識ら

ず〱浮むだ。

あの巡査が情夫であつても構はぬ、自分は豫て覺悟の通り、耳で惚れられる色男であるのだから、眼で惚れられるのとは自から別種で、而して最と高尚なもので、眼で惚れられるのは色を以て愛されるので、色を以て相愛するのは獸慾的である。

粕壁讓の管と來たら、巡査如きの風致と同日の論では無い。熟考へて見れば實に然だ。けれども其處が人間の淺ましさには、彼巡査が氣障に情夫がつた眞似を爲るのを、あゝして見せつけられると、有繫に氣が揉めぬでも無い、旨くやつてゐやがる、と少しは腹も立つたやうなものだけれど、なあに！　己を省れば敢て巡査には讓らない。

先づ我の管を聽かう、我の姿を見やうが爲には、二日も二階へ出たのでは無いか。それから、三度に合奏を爲たでは無いか。音樂に於ての色男たる本分は、それで業に盡してあるのだ。何が不足で人を羨むことが有

らう？　我の管の爲に、二度もわざ〱二階へ昇つて、三度も三味線を彈いた、其心意氣——其眞實——その情を立てた心中といふものは、なかなか仇や疎なことでは無い。

熟考へて見れば實に然なのだ。唯素人了簡に、色を以て愛されてゐる境遇と、藝に惚れられてゐる場合とを混同して、一概に比較にしたのは、全く自分の粗想であつた。熟考へて見れば、隣の女が我に心を寄せてゐる具合は、到底あの巡査などの企及ぶ所では無いのだ。

熟考へて見ると、我の管は餘程あの女の心を動かしたものと見える。ここが藝の德だ！（藝が身を助くるほどの不仕合）と云ふが、熟考へて見れば、噓だよ。藝が身を立てるやうになつてはお仕舞だけれど、助ける間は仕合だ。

巡査は巡査、自分は自分と、情夫の種類分をして、其で先づ嫉妬の熱だけは冷ましたが、爰に又一つ懸念は、實際隣の女は巡査を色に持つてゐ

るのか、否やと謂ふことで、まさかとは念ふけれど、萬が一にも其が事實なら、あの女は實に見下げ果てた根性の匹婦である。そんな腐つたやうな下等の女に、讓の管は聽いてもらひたくもなし、聽せたくもない。第一(虫の音)といふ名管の汚辱になる。もし不幸にして其が事實なら、此管を墨江の流に濯いで、再び隣の女の聽く所では吹くまいとまでに決心した。一たびは激昂して然は念つたもの丶、憎くはない女の事であるから、右樣の失行は飽くまでも無からむことを、讓は人一人の命を助けたいほどに切望する。のみならず、奈何かして立派に事實無根の反證を擧げたい、と心を碎いて工夫し始める。

讓もなか〱忙しい。これほどに懷つてゐる女の顏を未だ見ないのだから、其工夫も爲なければならぬ。垣間見の穴も其儘になつてゐる。管も日に一二度づゝは聽かせなければならぬ。何しろ昨今色男になつたばかりで、まだ一向勝手が分らぬかの如く、心陰に狼狽してゐる。

此日は日曜であるから、十時頃に例の貸本屋が來て、面白いと受合つて三部ばかり置いて行つたのを、机の下へ推籠むだまゝで、椽側の柱に靠れて讓は思案しながら、隣の二階を眺めるとも無く眺めてゐる。

あの座敷でなあ、二人對坐で、二曲ばかり合奏して、それから御膳となる。酒も全て無いといふのは寂しいから一寸在つて、それから何か睦まじく話をして、それから茶が煮る。些いと氣取つた菓子が出て、又話をして、もう歸りますといふと、色々留める。それを無理に歸るといふものだから不味を言はれる。それではといふやうな顏をして、少し仕てから、今日は始めて出ましたのですから、明日でも又ゆつくりと、どうしても歸さないのを振切るやうにして出ると、それでは餘りお名殘惜いからと、家の前まで送つて來てくれる。あゝ一度でも可いから、そんな目に遭つて見たいものだと、此所繪に畫いたらば、讓の胸から魂魄が飛出して、隣の二階の簷頭を浮波ついてゐると知るべし。

さう、其時には何を合奏したものだらう。先方から乾度註文するさ。それが濟むと、何か本曲を聽かしてくれと、澁い好が出る。何が可からうな、京鈴慕？　秋田菅垣？　京鈴慕は寂くつて俗耳に入るまいから、秋田菅垣にしやう。本曲となると又格別旨味が有るからな。秋田菅垣！面白い、一つ試みやうか。と嘘から實が出て、讓は急に尺八を取りに立つたが、座に復ると直に吹始める。段々興に入るほど我を忘れて、浮々と一曲調べてしまふ。

今日は善く出來た。此位に聽かせやうものなら忽ち參つてしまふ。聽かしてやりたいな。と何心無く振仰ぐ途端、讓は鐵槌一擊の下に身軀が粉韲に碎けた歟の如く感ずる。

隣の二階に出てゐる！　出てゐる!!　出てゐる!!!　欄にぴつたり身を寄せて、此方をば孔の穿くほど瞶めて、美人が愁然佇むでゐる。

讓の周章狼狽は尋常で無い。朝日に照らされた魑魅罔兩の如く、驟雨に

逢つた中風病の如く、土手で伯父貴に邂逅した息子の如く、火藥を運搬する車力が火事場に差懸つたかの如く、命が有つての物種といはぬばかりの容躰で奥の方へ駈込む。樓上の美人は此光景を見て、思はず片頰に微笑を含むだが、それは讓の業々しい周章狼狽を、唯可笑いと思つたばかりでは無いらしい。其中に自から幾分の冷氣を帶びて、半嘲る如く見えた。何を嘲けるのやら、其は本人の外に知るものは無いが、兎に角讓の身に取つて餘り賀すべき事ではあるまいと想はれる。

階子を下懸けに、美人は再び讓の座敷を見込むで、嘲ける如き微笑の既に消えた迹に、復更に笑を帶びて、此事を他に話して聞かせむと爲るものゝ如く、稍慌だしく下りて行く。

讓は管を握つたまゝ机の側に竄むで、太甚物に駭いたといふ體で、眼が光つて、呼吸が迫むでゐる。

何が其ほど恐ろしいことが有るのであらう？　短刀一口棒に振つてまで

も、隙見をしやうと企てたほど焦れぬいてゐる女の顔を、思懸無く面と向つて見たとは、隨意ならぬといふ世中に、これほど好い都合が多度あるものでは無い。思ふ存分見ておけば可いに、どぢ〳〵して奔竄れるとは何事であらう。今更羞かしい年齢でもあるまいに。

然矣、誰しも然う思ふ。然う思ふのが常情である。憐む可き粕壁讓は其(誰しも)の誰の中には數へられぬ條件があるので、それで、誰しも然う思ふことを、讓に限つて、然うは思はぬのである、思はぬのでは無い、思へないのである。

其條件とは何？　彼は非凡なる醜貌である。下女や子守にまでも彼方を向れるほどの醜貌である。他も然う見れば、讓自身も然う念つてゐるから、此度は不思議の御縁で音樂上の色男になつたものゝ、此面を見せたが最期、百年の戀も忽ち覺されると合點して、例の時鳥を極めの、聲のみを聞かせて、此戀を長く樂まうとした計畫が、もう破れた、爲樣が無

いと、讓は一圖に念ひこむだのである。

（十二）

屹度顏を見られた。見られたら愛想を盡かされたに極つてゐる、と讓は求めて失望しておいて、後から百方に自から慰めて見たけれども、到底自から慰めたのに滿足することは出來なかつた。

事實の上に於ては、愛想を盡かされたものとして異議は無いやうなもの、そこが人の心は種々で、容貌と藝とは別物だといふ思考を、隣の女が持つてゐるならば、と辛くも一方の血路を開いて、九死の中に一生を得むものと企てた。今となつては、恃む所は唯是のみである。

之を試みる手段といつては、當人の胸を聞くより外は無い。其には例の如く管を用ゐて、今まで通りに合奏せたら、少しも心配は無いけれど、設應じなかつた日には、脈は全く無いものと諦めねばならぬ。

此上は運を天に任せて、我力の限り吹いて見るばかりである、と九分ま

ては失望してゐるもの丶、一分は僥倖といふ色氣の有る爲に、幾分か力附いたやうな加減で、絶食した病人が此一兩日は粥湯を啜つたぐらゐの元氣は出たが、安否のほどが氣に懸つて、一か八か、早く勝負を爲て見たくて耐らない。後刻も今も有るものか。やつて見ろと尺八を取擧げたが、待てよ、未だ立つて在はしまいか。在はしまい！　在たら合奏せるも試みるも無い。脈は大有だ。え丶晩かつた、其處に氣が着いたら、びくびくして引籠むでゐずに、早く覗いて見たものを。もう大分過ぎたから、待草臥れて下りてしまつたかも知れぬと、そろ〳〵這出して、竊に窺つたけれども、はや影も無い！

あゝ在ないと落膽して引退つたが、もう此上はと、食濕した唇を歌口に推當てゝ、無二無三に(袖香爐)といふのを吹く。吹いてゐる間にはトテン〳〵も響かなかつた。吹いてしまつても、そんな氣は無い、それでも讓は屈せずに、最一度繰返したが、同じく音沙汰無し。それでも未だ未

だ譲は屈せずに、追懸けて（深夜の月）を吹く。隣では三味線が損じたのか、それとも糸が無いのか、但しは親類の忌中か、いよ〳〵鎮りかへつてゐる。

譲はそれでも未だ屈せず、（肚の中では如何なにか屈して、もう孤憤の死物狂なのかも知れぬけれども、管を離さぬ所は、未だ屈せざるやうに見える。）今度は御馴染の（虫の音）を吹出した。

抑も之を聴かせるのは、カンフル注射も同じ事で、これで感じが無いやうなら、嗚呼哀い哉此戀は既に死せり！

之を最後の手段と思へば、譲の心は有繋に跳起ち、狂奔る、我も管も一世一代の晴業と、死力を盡して調べたけれども、無情、無情、無情なる隣の糸は終に響かぬ！

譲は管を持つて横臥しに僵れる。僵れるとぶる〳〵と身を顫はして、そのまゝ眠れる如くなる。噫眠れる如く？　譲は其のまゝ眠ることを望む

だてあらう！　寧ろ其まゝ永く眠りて再び覺めざらむことを。
それでも讓は心から思切られぬので、其晩も亦散々に吹いて、隣の女の心を試した。
試せば試すほど失望を強めるばかりて、いくら自惚を出して見ても、愛想を盡かされた、とより外に考へやうは無い。
今となつては植久夫婦の手前も面目無くて、隣では一向取合も爲ないのに、此方でばかり無性に吹くのも、餘り器量が惡過ぎる。强賣をしてまでも聽いてもらひたいやうな、そんなお安い讓の管でも無いのだ、と早早尺八を袋へ納めて、自分も例より蚤く蚊帳の中へ潜りこむ。
夜が明けて見ると、又何分か氣が變つて、兎も角も今日もう一度試して見やう。それで斷然いけなかつたら、潔く斷念するばかりだ。今度こそ潔く斷念する！　潔く、男らしく、勿論の事だ、と大いに決する所あり迄は立派であつたが、其期に迨むで見ると、無慙にも三回失望した。

嗟乎最期の失望！　絶息せる失望！　讓の胸中は實に言ふに忍びぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此夜樓上に燈暗く、比翼の影を障子に映して、男女の私語するあり。女は言ふまでも無く讓の所謂（隣の女）、實名小夜であるが、男は移轉の夕に來て酒を酌むだ、彼の紳士風の好男子では無い。半は日に燒けて色の黑い、眼のぎよろりとした、鼻の隆い、決して醜貌では無いが、女子に戀着かれさうな相貌でも無い。何處か凄味を帶びて、一癖ありさうな、まづ惡黨手の面である。それで服裝は、莫大小の襯衣に紺飛白の單衣、藍氣の銘仙の長羽織を着て、鼠縮緬の兵兒帶に裏白の紺足袋。年齡は三十二三で、その八字髭の好さといつたら宛然作物である。二人の間に旨さうな味が二三品排べてあつて、お小夜の後の小火鉢には、鐵瓶の中から德利が顏を出してゐる。

「お前さん何處で飲むで來たの？」

とお小夜は怨むが如く窘む如く、流眄でじろりと見る。男は極の惡さうに顏を撫でゝ、

「何さ、少しばかり。ほんの御呪禁ほど。」

「おや、お酒が何の御呪禁になるの？」

「そんなに何も言ふことは無いぢやないか。」

「有るよ、無くつてさ。內で飮ませないと言やしまいし、何も餘所で飮んで來るには當らないぢやないかね、否に面當がましくさ。」

と眦が少しく昂る。其と見るより男はわざと語氣を和げる。

「そんな否味を……どういふものだらう。何の面當に？　無理ばかりいつて人を困らせるよ。我が赤い顏をして來て、それがお前の氣に障つたのなら謝るよ。どうか勘忍して下さい、以來は屹度謹むから。」

「謝れと言やしないよ。一體何處で飲むで來たのだか、其を言つて御覽

な。」
と横を向いて、可愛らしい銀管で煙草を輪に吐いてゐる。男は酒盃の雫を一寸切つて、
「まあ一盃申上げませう。」
と危みながらお小夜の前へ出すと、物をも言はず煙管で丁と撃く、猪口はからりと碎ける。男は吃驚して、女の顏を凝然と視てゐたが、
「何を憤つてるのだなあ。」
と語の未だ訖らざるに、お小夜は屹と此方を捻向いて、
「だからさ、何處で飲むで來たんだと言ふんぢや無いか。それを聞いてるのに、空々しい、一盃申上げませうもないもんだ。」
男はわざとらしく笑ひながら、
「何處で飲むだ〳〵と、大層氣にして聞かれるけれど、お話申すほどの處ぢや無いのだから、それで先刻から實は差控へてゐたのだ。」

「おや大層御遠慮だねえ。多度まあ然うなさいまし。」
「また始まつた。ぢや包まず白狀するさ。今晩來懸に、朋友の家へ用事があつて一寸寄つたら、丁度牛肉で飲むでゐるところさ。」
「牛肉？　牛肉はおよしといふのに。」
「だから、牛肉は食はずに葱ばかり食つたさ。」
「あら見とも無いね、此人は。」
「だつて、牛肉は食ふなと謂ふし、葱を食つちや見とも無かつたら、まるで口へ入れる物はありやせん。」
「だからさ、朋友の家なんぞへ寄らないが可いぢや無いか。」
「寄らないが可いたつて、用事がありや仕方が無い。」
「嘘をお吐きよ。飛だ朋友だらう。」
と執念く怨じかけられて、男は面倒臭いといふ貌で、
「然うなら然うにしておくさ。」

「まておいたら本望だらうけれど、そんな勝手な眞似は爲せないよ。」
と屹と言ふと、透明やうな蟀谷の邊に、疳癪筋がほんのりと顯はれる。
怒ひ返答をすると、益々疳を募らせるばかりと、男は無言で、手酌で飲むでゐる。
「朋友の家へ寄つて飲むのは、何も今晩に限つた事は無いぢや無いか。危い首尾をして呼ぶ私の身にもなつて御覽な、ぐづぐづ寄道なんぞをして、醉拂つて來られた義理かえ。人の氣も知らないで、勿體も大概にしておくれ。洒落や嬉戯にお前樣を呼むでるのぢや無いよ。一つ間違つて旦那に知れりや…………。」
「解つてる。」解つてるよ。から見えても、心の中ぢや仇や疎に思つてるものか。寄道をしたのが我の落度だ。謝る、此通り謝るから、機嫌を直して一杯飲むでおくれ。よう、機嫌を直してさ。」
溫言と酒とを左右にして、一圖に敵の歡心を買はむと力める。けれども

お小夜は度々釣落された魚の如く、こんな餌には懸りさうにもしない。
また例の手かい、よしてもおくれといふ肚でゐる。
「ねえ、おい、一盃飲まないか。」
「あゝ飲みたきや勝手に戴くから。」
「困るなあ、どうも然う憤られちや、ちつと話しにくいことがあるのだけれど、言出せない。」
と偸に女の顔色を見る。お小夜はつんと横を向いて、奥歯で烏樟を嚙みながら、いつまでも煙草を塡めてゐる。
「ねえお小夜、機嫌を直してくれたのか。」
「どうだかね。此先の交番で聞いて御覽。」
「皮肉を言ふなよ。今日は非番で佐々木樣は色の處へ行つて、今脂を取られてゐる最中だ。」
笑ふまいとしたけれど、ふゝんとお小夜は思はず笑ふ。佐々木は其圖に

乘つて、御意を執るは今だといふ意氣込で、
「さあ一杯獻じやう。」　とわざ〳〵お小夜の側へ立つて、猪口を突附けるやうにしても手を出さない。無理に持たせると、わざと落す。持たせた女の手を押へながら、盈々と一杯注いで、
「さあ飲むでくれ。」　といひながら引退がる。お小夜は不承々々にぐつと飲干して、猪口を下に置いたまゝで、返盃をする氣色も無いから、
「其を戴かう。」　と催促に及ぶと、
「お持ちなさい。」　と極めて素氣無い。
仕方無しに佐々木は其猪口を拾上げて、
「どうせ御返盃さへ下さらない際だから、お酌をお願ひ申したところが、無駄だらう。矢張巡査風情には此が相當です。」　と否味を言ひ〳〵手酌を極める。
「お腹立中で甚だ申出しにくいけれど、ちつとお願の筋があるのだがね。

と無闇に頭を掻く。
「何でございますか、承はるだけなら承はりませう。」
「承はられるだけなら承はられますまい。」
と追々酔が廻つて來たので氣が強くなる。
「お前樣餘り飲むぢや否だよ。先刻から獨酌で大分飲むだよ。醉つてしまふといけないから、好加減にしてお措きってば。」
「酒を飲むのだから少しは醉ふさ。先刻から飲むだと謂ふけれど、飲まずには在られまいぢや無いか、散々ぱら否味を謂はれたり、憤りつけられたり、謝らせられたり、其返報に、ぐでん／＼に醉つて御介抱を受けるのだ。」
と先方が少し折れて來た虚に乘て、今度は一番此方から強く捩れて出る。
「佐々木樣、今のお願といふのは何だえ。お極りかい。」
「度々で氣毒だけれど………。」

「ほんとに度々〳〵だよ。どうして仕舞ふのだらうねえ。」
「銀行へ預けて置くといふ次第でも無いのさ。」
「お洒落で無いよ。さう〳〵は私だつて有りやしないやね。」
「無けりや、よう〳〵、ようつつてばようの二つ三つも言やあ、忽ち十枚ぐらゐは出る御身分ぢや無いか。」
「否に強請じみた言をいふよ、職掌にも似合はない。」
佐々木は苦笑をして、
「晝間は巡査だけれど、夜になると早替で色男だ。色男が卑くなると強請になる。」
「強請が高じたら何になるだらう。」
「まづ巡査に捉まるね。我なんぞは其處へ行きや世話無しだ。自分で自分を捉まへるから。」
「馬鹿におして無いよ。」　と煙管で佐々木の膝を吃はせる。

「冗談は斥けて、少しばかり奈何かしてくれたまへ。」
お小夜はづつと高く宿つた顔で、
「失禮な、少しばかりは奈何かしなくつても。平生も心得てをりますよ、憚りながら。」
佐々木は礑と横手を拍つて、その手で直に拜みながら、
「よう〳〵！　お小夜大盡。」
「否だよ、もう。幾許ばかり入るんだね。」
「思召で可いけれど、相成可は多い方が宜しい。」
「一體何でそんなに入るのさ？」
「追々秋冷相催しゝに付ては、袷も入るし、羽織も入るし。」
「おや、此間も袷を拵へるつて持つてたぢや無いか。どんなのを拵へたの？」
「あれは拵へやうと思つたので、今度のは本當に拵へるのさ。」

「それぢや私も今晩のは進げやうと思ふので、來月本當に進げやうよ。」

「何だな、吝嗇くさい。」　と思はず口が辷ると、お小夜はもう怫然として、

「あゝ私は吝嗇さ。」

「あれ又憤るのか。今夜は無暗と氣が強い。」

「鰻の頭でも食べたのだらうよ。」　と愈腹を立つ。

何といふと二言目には憤りつけられるので、佐々木も虫があるから、さう〳〵は凹むでもゐられず、少しは何だ！　といふ了簡も出る。それに酒の氣があるから、

「へっ面白くも無い。」　と放擲るやうに言放つて、衝と立起る拍子に、ひよろつく醉脚を踏緊めながら、

「御馳走樣でございました。」　と憎たらしく挨拶をして、階子の口へ懸るまで、お小夜は素知らぬ顏をしてゐたが、正しく歸りさうな氣色と

見るより、今一段下りた佐々木の背後から、物をも言はず獅嚙着いて、女の腕の孱弱ながらも曳擧げむとする。

佐々木は小聲に力を入れて、

「何を爲るのだ。ちよつ放さないかい。」

と申譯ほどに問いてゐるばかりで、強ち振拖らうともしない。其間に、曳擧げられたのか、曳擧つたのか、何方とも附ずに佐々木は再び二階に昇つたが、流石に座敷へは入らず、椽側に突立つて、お小夜が手を放したら駈下りやうといふ勢を見せてゐる。

「何で歸るのだえ。何で歸るのだよ。」

とお小夜は聲を顫はして、佐々木の手を執つて力一杯に小突廻す。眼は怖ろしいほど釣昂つて、額に青筋が出て、ぎりぎり切齒をしてゐる。

「歸りたいから歸るのだ。」

とお小夜の摘むでゐる手を放さうとすると、益々固く摑むで泣聲を出して、

「歸るなら歸れ！」といひざま男の手甲へ噛着く。驚いて突放すと、同時に女の方からも撞いて來る。不意を打たれたのに、醉つて足が浮いてゐるから、佐々木は後へ一足勢強く蹌踉と、撞と欄に撞着たので、却含を吃つて眞倒まに放り出される。づしり、ばたりと忽ち庭へ投墮された地響。

(十四)

譲は爾後茫々然として、もう浮世に望が無いといふ顔色をして、所好な管さへ吹かずに、局から退けると、つまらなく轉輾してゐる。臥ながら天井を眺めて、時々氣の無い大息を吐いて、多時空想を畫いて、人情本中の圓滿なる好男子の身上を憶起して、そこで我身がいとゞ果敢なくなつて、巡査をしても可いから、隣の女のやうなのに可愛がられて、仕送られて、意氣な苦勞をして、面白く暮して見たいなどゝ考へる。さうしたら什麼な心地であらう!? 貧乏しても、擯斥されても、更に厭はぬ、恐らく命も入らない、嗟乎!

(時鳥)といふ戀を念懸けてゐる間は、譲は奈何なにしても顔を見せまいと苦心をしたが、一朝過つて見られた以上、既に愛想を盡かされた以上は、强ひて見てくれがしに爲る必用こそ無いけれども、へたくた隱さう

とするにも當らない。見られるものなら見られても構はぬから、これから毎日一度づゝは、隣のゝ顔が見たいといふ了簡が忽然と出て來る。見たい、眞に見たい！　咄嗟の間に一目したばかりであるから、十分には見なかつたけれども、流石は圍はれるほどあつて、目覺しいものだ。世間に美しい女は隨分在るけれども、所好に適ない容貌といふのが許多もあるものだが、隣のは身に沁みて好い！　あんな女子に……嗜耐らぬな、命も入らぬ、名譽も入らぬ……。今頃は如何して在るか知らぬ？今日は薄寒いからフラネルの單衣に縮緬の羽織でも引被けて、寂しさうに火鉢の前に坐つて、新聞でも讀むでゐるだらう。見たいものだと妙に氣紛れて、失望の底に寐轉むでゐた讓は、むく／＼と起上つて椽側に出る。

晝間家の戸鎖してあるのは、何と無く不景氣なもので、隣の二階の雨戸は所々引殘して、微曇の日影が其間から座敷の中を便無げに照してゐる。

ざは〳〵と芭蕉の葉に風の戯れてゐる垣の外に、隣の百日紅の花が、華美でゐながら物寂しく咲亂れて、斷續蟬の聲が遠くに聞える。
讓は風物の已に秋意を含むで、自から心を傷ましむるに遭つて、拱手をしながら恍惚と佇むでゐると、二階に今昇つたのは誰だやら、引殘した戸の間から女の衣服が瞥と見える。
見やうが爲にわざ〳〵出て來た讓は、其覺悟の無かつたかの如く、今更心を轟かしたが、此機失ふ可からずと奮發して、椽の戸袋を小楯に取つて、今に下りる所を見遁すまいと、片唾を嚥むで待つてゐると、程無く見えたのは、果して(隣の女)てふ美人である。
何氣無く一寸顏を出して、庭を下瞰して、それから此方を向いた時には、讓の五臟六腑は顚倒やうであつた。足が震へて呼吸が逼つて、顏が熱る、それらは未だな事。
此處に讓が忍むでゐるとは、女子は少しも識らなかつたが、ふつと目に

入れて忽ち顔を引込ませると、讓も頸を縮めて戸袋の陰に藏れる。蝸牛のやうに、時分を度つて再悠然と頭を出しかけると、女は戸の陰から半身を顯して、讓と顔を見合せて嫣然一笑する。はつと思ふと、今度は慇懃に會釋をする。讓は周章して、いつそ遁出さうとしたが、有繫に遁げるのも惜し、留まるのは極が惡し、行くにあらず、留まるにあらず、其間の所をまごつきながら挨拶を爲返すと、女は手を擧げて、眼で物を言つて、其處に待つてゐてくれといふ意を暗に示して、美人の姿は忽ち消える。迹に讓は狐に魅まれたやうな顔をして立つてゐる。間も無く美人は再び欄の際に顯れると、先づ讓に目禮をして、人目を忍ぶかの如く左右を眴はしてゐる間に、その袖の中から白い物が飛出して、ぱつたり此方の庭に墮ちる。

何か投げたなと視ると、萩の花の一面に散敷いた上に、紙を結びつけた銀簪が横はつてゐる。扨はと顔を擧げると、はや美人の影は無い。

讓は跣足で駈下りて、引攫ふやうに拾つて來て、ぶる〳〵顫ひながら、其紙を解いて披げると、何やら書いてあるので、文だ！　と思ふと、悚然して總毛堅つ。

是は隣のが寄來した文だらうか。どう考へても、隣のが附文などを爲る因緣が無い。いかにも無い！　けれども、確に今見てゐる所で二階から投げたのであるから、自分に來れたのに相違無い。事實は然うだが、そんな理由は無いが、一體何を書いて寄來したのか、まづ讀んで見やうと眼を曝す。

女の文といふものを親しく手にしたのは、讓は臍の緒切つて此が最初である。況んや直々戴くに於てをや。況んや一面識の無い、然も惚れてゐる美人からと謂ふに於てをや。況んや小說にある通り、狂言で爲る通り、簪に結むで投込まれるに於てをや。世間幾多の風流才子ありと雖も、十九世紀の今日に於て、如是詩趣の附文を爲されたものは、恐らく粕壁讓

唯一人であらう。

人に寄つては、附文だけでも、古風なことをと懌ばぬ向もある。まして簪に結むで投文など丶來たら、定めて其物好を嗤つて、氣障な眞似をしたものだと斥けもしやう。粕壁讓は人情本通の理想色男である。換言すれば、詩趣に富める愛情家（もし如是熟語があるなら）であるから、此簪の附文は特に其詩情を動かして、感最も深かつたてあらうと考へられる、畢竟平生の理想が幾分か實行されたのであるから。其文の文言に曰く、

無躾ながら一筆まゐらせ候。失禮なる御願にて、まことに〳〵御恥かしくは候へども、今晩御暇にも候はゞ、八時頃より尺八御持參にて御運ばせ有之やう、暮々も念じ上げ參らせ候。何も御目もじの上にてあら〳〵かしこ

（原文は當字假名違等多く、往々文章調はざる處ありて、本字を用うる僅に十二字、餘は平假名にて認めたれど、判讀の勞を省かむが爲

に、校訂して此に掲ぐ。)

と讀むだが、どうも未だ夢のやうな心地がして、十分得心せぬので、最一度繰返したが、やつぱり晩に來てくれといふのである。斷じて然いふ理は無いのだと、もう一度讀返す。文意は前の通りだけれども、未だ腑に落ちない。そこで又讀むで見たが、(八時頃より尺八御持參にて御運ばせ有之やう)である。前後四度まで讀んだが意は一つ、瞶めてゐても紙が桐の葉にも化らないから、讓はやう〳〵安心して、まづ其多を取つて推戴きの、丁寧に皺を伸して八ッ折に疊むで、難有く縮珍の紙入に納めて、簪は紙に包むで、一所に机の抽斗の奥へ仕舞つて、慌たゞしく時計を見ると、五時半過。

「これから顏を剃つて、湯に入ると…………。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

讓は途上〱も、顔を剃る間も、湯に入つてゐる中も、始終其事ばかり考へる。

「今日の夕は意外だつた。八時頃より御運ばせは難有いが、餘り話が好過ぎて、何だか薄氣味が惡いて。今日になつて此樣な事をいつて寄來すくらゐなら、此間四度も五度も管を吹いた時、前の樣に一寸でも合奏してくれたが可いぢやないか。否に思はせ風をして散々氣を持たせやがつて、（まことに〱御恥かしくはいへども）も無いものだ。

過ぎた事はまあ可いとして、彌よ晩に出懸けるか。難有いぞ、嬉しいぞ、極が惡い喃。一寸入り難い喃。初對面の挨拶をしてから、話が無いので窮るて。然しそんな事は臨機應變だ。先方がそれ者だから、其處は萬事巧く執成してくれるさ。文面の通り、早速ながら管を伺ひたいとか、合奏せやうとか、何とかいつて直に始まるだらう。其が濟むでからが骨の折れる所だ。

わざ〳〵家まで呼ぶところを以て見ると、我に全く意の無いのでも無いかな。よし意が無いにしても、我の尺八に惚れてゐる餘り、我の容貌を大目に見てくれてゐるらしいて。藝の長を以て容貌の短を補ふのだ。どうも其に違無い。然して見ると、尺八から取入つて、自然此譲といふ人物も憎からぬものに思はせる事が出來る。既に今晩遊びに來てくれといふのは、落花有意の氣色を暗示してゐるものだ。けれども情無い事には、何しろ此顏だから、餘程巧く行らぬと、二度と御運ばせは御斷を吃ふから、今晩が大事の中の大事だ。

今晩巧く行つて、顏こそ惡いけれど、藝といひ、意氣といひ、好いたらしい方だといふやうな事情になると、明晩も亦何卒と來る。其次の晩も、亦其明る晩も、二度が三度、三度が四度となる間には、いつか一日水神の植半へでも參つて、ゆつくり遊ばうぢやございませんかといふ話になる！　これは必然の勢だ。然すれば最此方のものだ。

容貌こそ惡いが腕と來たら凄いものさ。容貌が好くつて情婦が出來る、それは當然の事で、雨の降る日は天氣が惡いと謂ふのと同じだ。我などはこんな顔をしてゐて、あゝいふ美人を情婦に持つのだ。色男といふと、一概に好男子のやうに考へるけれども、不思議なもので、實際色男——女子に可愛がられてゐる男に限つて、どうも醜貌のが多い、實際!! もと男女の愛といふものが、決して單に容貌から成立つ理のものでは無い、心と心が相投ずるので、始めて死ね、死なうとまでにもなるのだ。惡女の深情と能く謂ふ、惡女必ずしも深情では無いけれど、概して容の美しくないものは、情に於て濃厚で、其と謂ふのが、汎く愛されるといふことが無いから、自から一方に情を專らにするのだ。

自分の容貌が醜いから言ふのでは無いが、人は眉目より心さ。(心だに誠の道に合ひなば)だ。何でも十分に心意氣の好處を見せて、實のある、頼もしい人だといふ處に眼を着けられるのが肝心だ。

あゝ、何だか氣が急いて、從容く洗つてゐられない。どうせ容貌で色を爲るのぢや無いのだから、好い加減にして出やう〳〵。と體を拭いて、姿見の前で涼みながら、心の中に以爲らく、これでも色が出來るのだ。

(十五)

女房は疾に夕飯の支度をして待つてゐるのに、時分時になつても讓の歸來が無いので、新漬の茄子の色が褪めるのやら、芝海老の羹が煮つまるのやらを苦勞にして、今頃何處を彷徨あるいてお在なさるのだらう、と頻りにぼやいてゐる最中、飄然と歸つて來た顏を見るより早く、

「まあ貴下は何處のお湯へ入らしつたの？　唯今夫が笊を持つて御迎に參りましたよ。」

と爆發する。冗談をいひながらも鼻息の暴いのを、讓は其と見て、柳に受流す。

「道理で、今途中で笊を擔いで行く人に遭つたつけ。おや彼が久樣だつたか知ら。」

と眞面目で言ふと、奧から久五郎が大喝一聲、

「飛ても無い。そりや旦那、紙屑屋でせう。」

これで三人一度に哄と笑ふ。

それから夕飯の膳に向つたが、歡喜が胸一杯で、飯が吭を通らない。辛うじて一膳吃して、箸を措くと直に御召更に取懸る。

鼠地に白の千筋のフランネルを着して、紺無地と、茶っぽい縞と織分の博多帶を、しゆう〳〵と結めてゐる所へ、女房は膳を下げに來て、

「おや、これから何地へ？」と呆れたやうに訝る。爰で餘り眞面目がると、却つて兎や角異まれると考へて、讓はわざと微笑を含むで、（尤も此微笑は別に由つて來る所が有るのかも知れないけれど、此場合では、〔わざと〕と謂はなければ照應が惡いから。）謔ふ歟の如く、

「まあ何處へ行くと想ふ？」

女房は否な横眼づかひをして、讓の心を其顏に於て讀まむとするものゝ如く、

「然うでございますねえ。いづれ御愉快でせう？　けれどもお珍しいぢやありませんか。何が日にも、そんなに装して御出懸けなすつた事なんざお有なさらないのに、今晩に限つて……不思議ぢやありませんか。變ですねえ、何だか、餘程。本當に何地へ入らつしやるの？」

と再否な横眼づかひをする。讓は重ねて破顔微笑しつゝ、

「我だつて人間だもの、往々には装して出懸けるさ。」

「それは然うですけれど、不思議ぢやありませんか。あら、お羽織ですか、お着せ申しませう。おや、絽の御紋附！　まあ夜中だつていふのに大修飾ぢやございませんか。」

「夜中だからつて寢衣を着て出るものはあるまい。」

「ですけれども、御不斷ちつとも此樣にしてお出懸なさることはお有なさらないから、私は何だか不思議でなりませんよ。一寸お前樣、お前樣てば！」

と遙に久五郎を喚ぶ。

「何を喚ぶのだ。」と讓は咎める。

「餘り不思議ですから一寸呼むで……。」

「呼むで奈何するのだ。」

此返答の無い内に久五郎は入つて來ると、讓の扮裝を見て、是も膽を潰した貌で、

「おや何地へ?!」

是に於て讓はいよ〱大得意。

含笑てゐるばかりで、何とも挨拶を爲ぬから、久五郎は女房に向つて、

「何地へお出懸なさるのだ?」

「御愉快ださうだけれど、何處とも隱してゐらつしやるんだよ。」

「へえ、御愉快! どういふ御愉快筋で?」

讓の何とも答へぬ先に、女房が横合から、

「お前樣野暮な、御愉快と謂や知れてるわね。ねえ旦那。」
「お前は默つてゐねえ。」
と顧眄ながら粉韲に極着けて、
「本當に何地へ？　陪從を願ふとは申しませんから、安心の爲に何卒おつしやつて下さいまし。」
「さう否味を謂はれちや困る。何も隱蔽をしたわけぢや無いのだけれど、内君が餘り不思議だの、變だのといふものだから、一寸隱して見たのさ。」
「でも全く不思議ぢや………。」
「えゝ、默つてゐねえってば！」
と女房だけに可恐顏をして、「へい、成程。」と讓に其次を促す。
「今晩はね、局長の家の子の五歳の祝儀でね、局の僚一統招ばれたのだ。」
といひながら尺八の譜本を懷に入れて、
「内君、その袋に入つてる尺八を取つておくれ。」

「今夜御座敷で一番腕前を御見せなさるんですか。」
「なに、局長が是非聽かせろといふものだから、私は一體人中で吹奏のは大嫌ひだけれど。」
「やつぱりお獨で、隣のが合奏といふ寸法が宜しいのでございませう。」
といふ時、夫婦の四つの眼は一齊に讓の方を向いて、敵が笑ひ出したら、此方も笑はむものと待構へる。
「又そんな事を言ふよ。」
と讓は遂に笑ひたいのを鵜嚥にしてしまふ。
「何卒お土産を澤山に。」
と女房は冗談に紛らしつゝ萬一を僥倖して、危い所で下司張る。
「何、體したことは有りやしない。」
と此方も虚さず切脫ける。
讓の平生が平生であるから、久五郎は少しも疑はず、何處までも眞面目

に承けて、
「お歸來はお晩うございますか。」
と問はれたには、讓も有繁に肚の裏では赤面の至。今晩隣で管の音がすれば、事露顯は忽ちである。歸る早々胸倉を捉られて、明日は所詮一升や饅飯如きで、示談にはなるまいと覺悟する。
「さう、十一時？　十二時ぐらゐにはなるだらう。」
「へい左樣でございますか。おい、お履物だ。」
と注意すると、女房は早速駈出して行く。讓はわざと時計を見て、
「やあ、もう八時だな。どれ行かう。」
と出懸ける。後から久五郎は跟いて行くと、突然！
「あ、簪を忘れた。」と讓は身を飜へす。
「へえ、何を？」と久五郎には(簪)が聞取れなかつた。讓は慄然して、

「あの、何、紙入を。」と問に合せると、

「紙入はお持ちなすつたぢやございませんか。」

「うむ、何、紙入へ入れるものを………。」

と曖昧極まることを言ひながら、部屋へ走込むと、手早く其物を袂へ入れて、倉皇下駄を突懸けて衝と出やうとすると、大分慌てゝゐると見えて、高帽の横腹を格子へ叩着けると、ポコンと響いて頭から跳ねて、三和土の土間に落ちて再ポコン。此際何とも言ひやうは無し、然ればとて默つてゐる場合でも無いので、夫婦は異口同音に「おや〳〵。」

（十六）

讓は門を出て、二足三足も歩いたかと思ふ間に、はや隣家の前に來る。座敷の燈影が漏れて微暗く玄關を照らして、家內の森閑としてゐる樣子は、漫に巡査を尾けた時を憶起す。

いかに地を易ればといつて、彼時指を啣へて闇黑に突立つてゐた我が、今夜はお客樣でづっと入るとは！　眞箇禍福は糾へる繩の如しだ。此間人を羨むだ身上が、今夜は人に羨まれる身上とは、噫實に思懸けなかつた。彼時我が巡査の見張をしたやうに、誰か亦我の跡を尾けてゐる奴がありはしまいか。險難なものだと、自から前後左右が眴される。眴したところで、誰も尾けてゐる樣子は無いやうであるから、ぐづ／＼してゐる間に邪魔でも入ると面倒だといふ氣に勵まされて、今迄何分か躊躇してゐた讓は、決然に格子を開けると、心に徹へるほど高くがら／＼と響く。

小聲であつた（御免なさい）は此裏に沒了して、恐らく奥へは聞えなかつたらうから、もう一聲懸けやうとする所へ、足音の近くなるほど玄關が明くなつて、やがて葭戸をすうと開けて、取次に出たのが女子。下女かと想ふと、これは什麽！　當家の主婦小夜である。

鼠と紺と淺黄の墨流の縮の浴衣に、羽織は藍納戸の薩摩絛の平御召、帶は唐繻子と算顆の變八端の晝夜で、肉色縮緬の扱帶が慢く細腰を縈つてゐる。

髮は極品の良い天神に結つてゐるのが、洗髮と見えて亂加減に婆娑ついてゐる鬢の邊から、愛嬌髮といふのが濫れて、有る耶無き耶に淡々と化粧てゐるらしい。然らぬだに美しいのが、夜目には尚更美しさが銷魂的である。

右の手に玉火屋の玻瓈燈を擎げて、金剛石のと紅玉のと、黄金の指環が二つ耀く左の手をば三指に衝反して、譲の顏を見ると忽ち、片頰に微笑

を含むで、さも懷かしげに、

「おや！　好うこそ。」　と色氣のある清爽な聲を懸けられると、讓の全身は強く一種の電氣を感じて、少焉は骨が綿のやうになつて、肉が石のやうになつた歟の如く、異しく痲痺して、其間は氣までが遠くなつたが、直に我に復ると同時に、心臟が躍るやうに鼓動きはじめる。

早速挨拶を爲やうとしても、聲を出したらば顫へるであらうと氣遣はれて、口中が乾いて吭が固着くのを、無理やりに、

「先刻はどうも………、早速今晩………。」

と言はむと欲する所の、殆ど頭字だけを排べる。

美人は此挨拶の爲にいとゞ羞かしい思入で、

「先刻はどうも失禮なことを………、好うこそ、まあ、さあ何卒此方へ…………。」

と立つのに牽かされて、讓はやう〳〵玄關に上る。

「さあ此方へ。」　と小夜は座敷を入りながら再び案内をするので、おづ／＼迹に跟いて行くと、座敷を通越して椽側に出る。椽側を傳はつて、右へ折れて正面の六疊の間に導く。段通の鋪きつめてある座敷の眞中に、四方磨硝子の行燈形の玻瓈燈が置いてあつて、好き所に革蒲團、其側に煙草盆、茶道具が片寄せてある隅の小火鉢に、銀瓶がチリヽリヽイと可愛らしい音を立てゝゐる。

座敷の口に遠慮してゐる讓の膝頭へ、

「何卒貴下此へ。」　と蒲團を推着けるやうにして、美人は忙しさうに出て行く。

やがて主婦の出て來たのは、讓が卷莨の半分も喫た頃である。小腰を屈めるやうにして、含羞かの如く揉手をしつゝ、座敷に入ると直に、讓の座側へ行つて、

「貴下、そこでは御挨拶が出來ません。さあ何卒彼方へ。御遠慮を遊ば

しちや困りますよ。」

と切に主張つて、挨拶を爲やうとしても一向取合はぬので、已むを得ず讓はやゝ上座へ躪る。そこて先づ宣く初對面の口上があつてから、主婦は火鉢の側で茶を煮る。此間無言中讓は大照に照れて、手の所措も無ければ、眼の遣端も無く、否に體を四角にして、後生大事に尺八と譜本を引附けて、無性に煙草ばかり喫す。

程無く青磁の碟に煉羊羹を盛て、蕨形の象牙の取箸を添へて、紫檀の薄手の方盆に載せて出す。幹山の色畫の茶碗に青瓊綠髓といふのを勸めて、

「生憎今日は婢が在りませんので。」

と會釋をして復立つ。其間に讓は茶を飲むで、(但羊羹は摘まず)手持無沙汰さうに前後を眴してゐたが、考へれば考へるほど今夜の粕壁讓といふ者が更に解らぬ。それは解らぬとして措いて、かうして客に來てゐる心地は嬉しいかと謂へば、勿論それは嬉しい。けれども單嬉しいばかりで

は無い、氣の張るやうな、窮屈のやうな、心配のやうな、其や此やが合體して、自分で自分の解らなさ加減、一言以て之を蔽へば、曰く變とでも謂ひたい。

此頃の讓の理想といふものは、此主婦と相對の、合奏やら、話やらで、ゆつくりと一日遊んで見たいといふので、其を想ふと悶々するほど嬉しくて〳〵、奈何もならなかつたのが、今夜かうして其場に臨むでゐながら、何故か其半分嬉しく感じない。初めて相對になつたらば、唯戰々してしまつて、碌に口も利かずに別れるやうなことが、ありはしまいかと氣遣つたほど、實際は然までゞも無い。此も先づ想つた半分ぐらゐである。讓は此不思議に惑ひながら、兎も角も早く管を始めたいものだ。然すれば馴染もついて、それから打解けられる。かうして何時までもお客樣で据ゑておかれては、否に肅まるばかりで、一向面白く無い。度々立つたり居たり、何を爲てゐるのだらう、と頸を延ばしてゐる間に、主婦は酒

肴の用意をして、親ら二度に運んで、

「寔に何も御座いませんので、無躾にお招待申しておきながら。」

とかねて取寄せておいたと見える料理を、手順好く讓の前に排べる。

「どうも是は。」　と讓はお手厚いのに驚き、且痛入つて、頭を掻くばかり、何と申上げやうも無く當惑してゐる最中、

「御免あすばせまし。」

と矢庭に猪口を指されて、

「私は一向戴かん方で。」　と兩手を一所に膝の間へ挿込む。

「でも貴下お一盃ぐらゐ。」

「どうも初めて上りまして、どうも實に恐入りますなあ、どうも。」

と不格好に手を出して危懼く受ける。

「飛でもないことを。」　と小夜は雲州燒の華車な德利を輕く把て、酌をする手元の鮮かさ。讓は心に思ふやう、實に此酒は戴いて飲まなけれ

ば罰が中る。これだから何でも人は一藝を嗜みたいものだ、と今更膽に銘じる。
生下戸と謂ふのでは無いが、深くは飲まぬ方であるから、讓は早くも海老色に醉を催して、おひ〳〵度胸が据つて來るほど、何と無く面白くなる。小夜も相をして飲むだのだけれども、例のほんのり櫻色にも出ず、物思はしげに浮かぬ顏をしてゐるのが、美人だけに、夜目だけに、物凄く見える。
讓は嚮から其を氣にしてゐたが、
「如何か遊ばしたのですか、大層お顏色が惡うございますが。」
と盃を献すのを機會に訊ねると、小夜は慄然した樣子で、
「そんなに否な顏色をしてをりますか。」
と俯いて大息をする。讓は此躰を見ると、いよ〳〵不問には措かれなくなつて、

「御氣分でも御不快ので？」と少しく乘出す。
「否！」と俯いてゐながら首を掉る。
「それぢや如何遊ばしたので、何か御心配な事でも？」
と訊ねると齊しく、小夜の明眸は朱鷺色の支那手巾に掩はれて、情緒纏綿たる（沈默の能辯）は、嬌語の自ら之を訴ふるより、更に幾倍の明晰と眞率と、沈痛とを以て、無限の愁思を語る。
讓は之が爲に激しく感動して、身を殺して仁を爲す！此人ゆゑならと謂ふ氣に奮然となる。
「何か御心配な事！お差支が無いなら伺ひませう。及ばずながら私も…………。」
と力を附けられて、小夜はやう〳〵涙を拭ひ、
「御深切に難有う存じます。始めてお目に懸りまして、寔にお戀かしいことを…………。」

と言ひつゝ、讓の顏を凝然視て、又萎れかへつて俯いて了まふ、言はうか、いつそ言ふまいかと猶ふかの如く。それで讓の神經は益興奮して、是非その胸中を聽かなければ、一寸も此座を動くまいと謂ふ氣色で逼る。

「お差支が無くば仰有つて下さいまし。」

小夜は纔に顏を擧げたが、見合せるのが羞かしいのか、直に他を向いて、力一杯に手巾を捻りながら、

「一見のお方にこんな事を申上げて、はしたない女だと御侮蔑あすばすか存じませんけれど、あの、貴下は私を何だと想召します？」

「何だとは？」　と讓は其意を得ぬ。

「あの、かうして在ります私の身分でございますよ。」

と思ひ切つて言ふ。

後家か、娘か、妻か、妾か、但しは高等淫賣か、明かに其何たるやは讓は知らぬ。けれども察するに外妾とは、十に九まで外れぬ所と鑑定はし

てゐるが、面と向つて（外妾）とは言ひ難い。然ればと謂つて、滅法界な臆説を言散かして、お茶を濁すわけにも行かぬので、進退谷まつて、まじ〳〵其てゐるのを、小夜は其と見て、
「お話をいたすのもお羞かしうございますが、私は唯今では人に圍はれてをるのでございます。」
「は、なるほど。」と讓は迷惑さうに挨拶する。
「其に就きまして、色々私も苦勞が………。」
と小夜は心が一杯になつて、そのまゝ姑く默つてしまふ。讓は肅然と形を正して、
「は、なるほど。」
「私は人の妾などをいたすのは、もう〳〵否で〳〵ならないのでございますけれど、兩親は疾に御座いませず、一人の兄と申すのが、仕方の無い厄介者で、今の旦那といふ人に、私の身をまあ賣つたも同樣な事をい

たしましたので、否といふことも出來ませんやうな義理で、かうして圍はれてをるのでございますけれど、私のやうなものでも少しは女の道ぐらゐは存じてをりますから、いつまでも這般な眞似をしてをりたくはございません。何卒いたして親の名前を汚さないやうに、裏店住居をいたしましても、堅氣に所帯を持つて暮したいのが、あの、私の心願なのでございます。」

「裏店住居！　怪からんことを。貴方がいくらお住ひなさりたくても、世間が承知するものですか。」

讒は爲たり貌で、人情本に在りさうな言をいふ。

「おや、何故でございます？」

と小夜は眞面目の奥で笑つてゐるやうな、憎くない顔をする。

「何故でございますか、私のやうな化物が、そんな意氣な事を知つてゐやう理はございません。」

「御存じの無いのに、唯今何故おっしやいました？」
「私は知りませんけれど、世間で然う申しますから。」
「ぢや其をおっしやつて下さいましなね。」
「知りません。」と猪口を取つて、ぐつと飲む。
若い男女が對座で、此般に千話るのを、實地に於て曾て見たことも無い讓が、一躍して情人の位置に立つて、剰さへ繪にあるやうな美人の活物を前に置きの、多年空想し、妄想し、夢想せし腦裏の顯象を、實躰的に直覺する其の心地は、本人と雖も説明することはなるまい。矧や他人の筆が、其十が一だに描し得らるゝ理のものでは無い。
理非の分別も、前後の思慮も、激昂したる感情の爲に無茶苦茶に攪亂されて、讓の眼中唯小夜の姿あるのみで、其心には此戀を物にしやうといふ了簡ばかりである。
「此方ではどんなに懐ひましても、妾でもしたやうなものを、堅氣の人

は相手にしてはくれませんから…………。」

と獨語のやうに言つて鬱ぐ。

「相手にしたら如何なさいます？」

と讓の眼は熱心を耀かして、その聲に異常な調子が響く。

「堅氣の人でございますか。」

と小夜も容を正して、眼を瞬つて、思はず膝を進める。

讓は（堅氣の人！）と頷いて、

「ですが、それこそ裏店住居同樣の貧乏人ですよ。」

「身分は？」

「平凡官員！　お否でせう。」と冷かに笑ふ。

「誰が否だと申ましたの。」と怫然とする。

「大方お否でせうと存じて。」

「勿體ない。本當に然ういふ方が有るのでございますか。」

といよ〳〵眞面目になる。

「有ります。有りますけれども、大變な顏でございますよ、宛然化物のやうな。それは酷い醜貌！」

「容貌を望みなら、私は始めから役者の處へ參りますよ。殿方は何も容貌で立つてるのぢやございますまい。」

「それでも餘り醜いのは……。」

「宜しいぢやございませんか、心さへ賴もしい方なら。」

「貴方のやうに然うおつしやれば何ですけれど、世間は然うは參りませんよ。」

「世間は如何でも、私が可しければ可しいぢやございませんか。」

「信實然ういふ思召なら、お氣に入るか、入らぬか知りませんが、私が一人御紹介申しませうか。其男は貴方を能く存じてをつて、實は、その、疾から、及ばぬ戀ですけれども……。」

小夜は手巾の端で擲つ眞似をして、衝と横を向いて、
「存じませんよ、そんな事を。」
「否、實際！　それを噓だと思召すのは餘りです、實際なんですから。其は實際です。」
「どうも難有う存じます。貴下から宜しくおつしやつて下さいまし。」
「それぢや噓なら噓にして措きます。」
「そら御覽あすばせな。」
「でも本當になさらんから。」
「そんな事が本當に…………。」　と手巾で顏を掩す。
「其が噓か、本當か、後で判りますから、まあ本人を御紹介申しませう。」
「貴下がお媒妁？」
「はあ私が…………。」
「それでは…………。」　と言ひながら不背々々を爲る。

「私の媒妁ではお氣に召しませんか。」と男は怫然して見せる。
「貴下のお媒妁では、どうも…………。」と女は當惑して見せる。
「さういふ次第なら御周旋申しますまい。」
ときつぱり言はれて、小夜は悄々してゐたが、
「あの、甚だ失禮なことを伺ふやうでございますが、貴下は奧様は？」
と折返して婉曲に持懸ける。讓は胸悸々。
「私？　一寸御覧になつても知れさうなものぢやございませんか、貴孃はお人が惡い。」
人が惡いと窘められたのを、小夜は思ひも寄らず、驚いた風情で、
「何故私が人が惡いのでございませう？　ですから失禮なことを伺ふやうでございますけれど…………。」
「さうぢやございません。考へても御覧なさいましな、私のやうなものの女房になり手がございますか。」

と席を拍いて蕎しかけると、小夜は呆れ顔で、

「まあ、あんな事を！　ぢや未だ、あの、お寡居でゐらつしやるのでございますか。本當に？　あの本當でございますか。」

「本當なら如何なさいます。」　と小夜の顏を心ありげに瞶める。

「本當なら………。」　と情を含むで忽ち面を背ける。

「本當なら？」

と讓は勢に乘じて、百尺竿頭一歩を進める。

「本當なら………。」　といふ聲は、前より二音階も低く、時ならで紅葉する顏はいよ〳〵俯く。

讓は五體の肉が今にも破裂するやうに蠢いて、內には勃々の氣が實して胸は劈けるかと想はれる。眼色は變る、聲は顫へる、

「本當ならば!?」　と我を忘れて詰寄せる讓の膝は、小夜の羽織の袂を踏敷いて、却舍立つ呼吸は湯氣を吐懸けるやうに、ほか〳〵と暖く女

の頬に感じられる。
出來るだけ身を窄めて、一心に手巾を握緊めてゐた小夜の手が、忽ち跳るよと見る間に、讓の左の小指が俄に燦然として耀きわたる。怪、怪何か抑と見れば、其光物の白いのは金剛石！　金色に晃めくのは黄金の指環である！　天からも降らず、地からも湧かず、唯の今まで、小夜が左の點紅指に、紅玉のと相隣つて寵を爭つてゐた爾の指環である！
小夜は讓が（本當ならば。）といふ疑問に向つては、一言の答も與へなかつた其代りに、此指環をば貺つたのである。
指環を貺る！　其は指環では無い、假に指環の形を成したる小夜の心、小夜は心を讓に貺つたのである。小夜は心を讓に貺ると同時に、くるりと背を向けて、正躰無きかの如く岸破と伏してしまふ。
燈火の光は讓の呆れた顏を無遠慮に照らして、色男は是でござい！　といはぬばかりに意地惡く耀いてゐる。始くは惘然と、寐恍眼で金剛石の

指環と小夜の後姿と見較べてゐたが、まだ半は夢心地で、
「貴方、これは本當でございますか。」
と其聲阿波縮の如し。小夜は此時やう〳〵顔を擧げたが、なほ燈影を怯れて、忍びやかに肩頭から讓の方を顧みて、
「噓に貴下、そんな事が………。」
と言ひかけて復俯く。

（十七）

夜は森として十一時に近く、杯盤の既に狼藉たる座敷には、微黯い玻瓈燈が悄然と、覺束なくも夜を守つてゐるばかりで、二人は何處へ行つたのか、影も形も無い。

大分更けたから讓はもう歸つたのかと見れば、革蒲團の前に卷煙草入が洋銀縁の口を顎の外れたやうにあんぐり開いて、譜本と袋入の管が其側に置いてある。小夜の座の迹には、持つて出た時には小皺一つ無くて、どつしりとしてゐた支那手巾が揉苦茶になつて、斑々濕つてゐるのは、酒やら、涙やら、羞しい汗やらの名殘と想はれる。其が打遣つたやうに遺してある。二人とも一寸立つたと見える光景であるが、二階にも、樓下の座敷にも、一向人の氣勢が無い。忽ち見る一道の火光！細く長く隱隱として襖の隙を漏る一室の内に、私語する聲が、四邊の寂寞の爲に、

種々の反響を受けて………。

此一室は丁度かの六疊の眞横に當つてゐるが、其方から見ては、此處に間があらうとは想はれぬやうに建てゝある。六疊の入口の横は、四尺ばかりの板敷になつて引込むでゐる。その正面が壁で、横手に押入と見える三尺の扉がある。其を開けると、三段ほど低くなつて、母屋から續いてゐる椽に出られる。出て右手の正面の間が四疊半の茶席で、こゝに二人が密會してゐる。

凡そ二時間といふものは、その私語の聲が殆ど途切れなかつたが、やがて出て來るやうな物音がして、入口の襖に人の觸れる響がする途端に、小夜の聲で、「貴下、後生ですからねえ。もし此が剽と………、ほんとこうございますか。」と襖が開く。前に小洋燈を把て出たのは小夜である。雨に敲かれた花のやうに色も香も失せて、無慙に憔悴した顏をして、滿心の愁ひは眉宇

の間に溢れてゐる其裏に、一種陰險の氣があつて人に逼る。讓の顔は蒼く土氣色をして、紫色の唇が顫ひ通して、きよと〳〵瞳の定まらぬ樣子は、痛く心に懼るゝ所あるが如く、歩く氣力の無いのを、無理に歩くのが、蹣跚曳きずられるやうである。

二人は椽傳ひに母屋の方へ行つて、物置部屋の前に小夜は立住る。振返ると讓は胴顫ひをしてゐる。

「貴下困るぢやございませんか、そんなに戰々〳〵なすつちや。貴下本當に堅忍なすつて下さいましよ。」

と勵ます女の聲も顫へる。

「だ、だ、大、大丈夫…………。」と退歩をする。

「貴下、本當に、後生ですから、堅忍なすつて下さいましよ。」

「よ、よろしい、よ、ようございます。」

小夜は襖に手を懸けると、目を瞑つて一思ひに曳開ける。すると唐紙の

軋る音を聞くと、譲は慄然と顫ひあがる。
小夜は委細構はず入つて、古箪笥の角に燈を載せて、其側の長持の蓋に手を掛けて、
「粕壁様、さあ早く此方へ。えゝもう何を爲てゐらつしやるんですねえ。」
と怨めしげに睨められて、譲はひよろ／＼、ぶる／＼、やう／＼の想ひで小夜の傍まで來ると、
「一寸手をお假しなすつて。」
「こ、こ、此中で、ですか。」
「まあ何でも可うございますから。」
と二人懸りで長持の蓋を取ると、人の顏が出る!!
最期の苦悶を今も其まゝの死顏！　年紀は三十二三と見える、血氣盛の、丈夫さうな、髭を生した男の死骸が、寂然として長持の中に横はつてゐる。譲は一目見ると、消入るばかりに驚いたが、此期に及んで逃げるこ

ともならぬので、今にも泣出しさうな顏をして、唯途方に暮れてゐるのを、小夜は流眄にかけて、

「貴下、今更否だとおつしやつたつて、私は肯きませんよ。」

と其眼色に十分の決心が見える。此一言は、鼻頭へ白刃を突着けたも同じほどの凄味で、絶躰絶命までに讓の心を脅かす。彼と謂ひ、此と謂ひ、重ね〳〵の恐怖に、讓はどぎまぎして頓に語も出ぬ。小夜は氣が立つてゐるから、一秒の猶豫をだに與へる情も無く、憤つたさうに聲を暴げて、

「奈何して下さるんですねえ。さあ早く爲なけりやいけませんよ。」

と矢庭に男の袖を捉へて、癇癪紛れの力でぐつと曳張る。踉蹌〳〵と前へ懸つて小夜の肩に撞當ると、捉まへて二つ三つ劇く小突いて、

「さあ、もし確乎なさいよ！」　と噛みつくやうに言ふ。

「よ、ようご、ざ、ざいます。」　と讓は益〳〵顛倒して、ひよいと長持の中を覗くと、一陣の腥氣が鼻の心を貫くやうに薫じる。

恐怖と驚駭との爲に、讓は全く心を奪はれて了つて、自分が自分の身體を支配することが協はぬ。唯小夜が指圖通りに手足を動かして、死骸を長持から出して、敷紙の古いのに裹むで、其上を有合ふ細引や繩でぐるぐる卷にすると、宛然花火の筒を轉がしたやうである。

其を萠黄の夜具風呂敷に、包むだは包むだけれども、大きくて、長くて、突張つてゐるから、如何とも爲樣が無い。

箇大きくて、長くて、突張つてゐて、爲樣の無い持餘し物を讓は背負つて、隅田川へ水葬して來なければならぬ、今更否でも應でも、其が約束であるから。いかに惚れた女に賴まれたからといつて、此般事を滅多に請合ふ者は無い。兎にも角にも其を請合ふといふに就いては、なるほど無所據義理などに絡まれたのであらう。然矣、小夜は讓と友白髮の末懸けて女夫にならうと堅い約束をした。今年一ぱいは情夫で逢つて、明ければ暇の乞へる都合であるから、其から何處ぞに所帶を持たうと迄話は出來

たのである。而して小夜の言ふ所に據れば、衣類ばかりでも貳千圓が物はある。其外髮の飾、指環、時計等のやうな裝飾品が千五百圓ほど、正金では千圓足らず持つてゐる。暇の出る時には涙金の五百圓は確に貰へる。此家作も自分の所有である。合計凡五千圓の持參で、此美人が女房にならうといふ、其に少しも詐の無い證據には、金剛石の指環もあれば、まだ其外の事もある。

扨此迄に運んでから、小夜は水葬一條の秘密を明して、信實可愛く思つて下さるならば、他人では無い女房の難儀を救つてくれと、義理責めにしたので、其に就ては、死骸の顚末を話さなければならぬので、小夜は、無能漢の此兄の爲には、從來どんなに苦勞も迷惑も爲たか知れぬ。此方へ來てからも、三日に擧げず貸せ〳〵で來る。それが生憎此近傍に巡査を勤めてゐるのであるから、いくら斥ねても煩く附絡ふ。昨夜も醉つて來て强請たのが發端で、少しばかり言合ふ内に、無法な事をして迯げや

うとする機に、二階から蹈外して庭の敷石で頭腦を撞つて即死をしてまつた、と涙ながらに話されたので、讓は一圖に此死骸は例の無賴漢の兄とばかり信じて、情夫のまの字も疑はなかつたけれど、此死骸は實に佐々木巡査である。

過失とはいひながら、契を結んだ女の手に懸つて、無慙の最期を遂げた其果が、反古に褁まれ、細で括られて、精靈棚のお飾のやうに、無雜作に川へ流されて寂滅とは、色男の末路も亦た憐むべきものである！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから二日目の朝、厩橋の河岸に書生躰の死骸が漂着いた。左の小指に金剛石の指環を篏めてゐたといふので、事情あるらしく爭つて小新聞の三の面が報道した。其後二週間も立たぬ内に、小夜は築地邊へ妾宅を移して、今も不相變麗しいと聞く。

（二十七年六月）

不言不語

(一)

一素封の奥方、田舎住の徒然を慰むる御敵手求めらるゝよし。其者は齢十七より廿歳迄にて、素性賤からず、容貌も醜からず、氣質は温順、普通は書讀み、物書き、諸禮といふほどの事は無くとも、行儀正しく、琴、三味線のいづれか習熟あるべし。月給は八圓なり。なほ神妙に勤めなば、彼方の親類分にして、相應に支度させて、良き方へ縁附かすべしとなり。環、行きて見ぬか、と叔父なる人の仰せられけり。

叔父とは名のみにて、骨肉にはあらず。此家に嫁ぎたりし叔母こそ我亡母の妹なりしが、疾に鬼籙に入りてければ、今此身の寄れる叔父母夫婦は、空似もせざる他人にて、まことの兩親は、我身が十四十五の年相踵

いで赤坂の土とはなりたまひき。獨り遺されて寄邊無かりしを、叔母なりし人不便がりて引取りたまひ、他人の叔父も情深く、實の娘のやうに愛しみたまひけるなり。

叔父は年久うさる私立銀行の支配人を務めたりしが、睦じう交りし人に欺かれて、負債山の如く身一個に崩かゝり、さま〳〵憂目の果は、小石川の奥深く日蔭者になりて、借家の荒庭花に色無く、雨降らぬ窓も曇りて、家内濕りがちに暮せる中に、叔父は取分面羸れ、卒に白髪も目立ちて、月々の支拂も苦きまでの身の上とはなりたまひけり。

世盛の頃は緣談の數々有りけるを、叔父は我身を愛みたまひて、彼にも此にも與れず。志す方は、白耳義といふ國に留學中の人、若けれども才學勝れて、末頼もしと見立て、其親とも談合し、書信にて彼方へも通じ、粗其事に極まりて、十八の春には適れ奥樣と噪めきしに、不慮の事起りて、遽に這般の仕合となりければ、其沙汰も烟となり、内々支度せし衣

類は、簞笥三棹、長持、葛籠にも餘りたりしを、幾度か萌黄の四布風呂敷に裹まれて、餘所なる藏へ預けられ、纔に殘りたるは、簞笥一つに輕し。

其を歎くにはあらず、悲しくもなし。親には別れ、家は絶ゆるほど、我は固より不幸の身に、かねて此世は果敢なきものに諦めたれば、此緣の結ばらぬも緣なり。唯傷はしきは恩人の身の上と、旦夕それのみ心に懸りて、此家今にも再興の榮を、唯管諸神諸佛に願奉りしが、難澁愈打續き、活計は日增に不如意となるにつけ、女の身に生れたるが口惜さ折から、心嬉しく膝を進めて、その奉公是非にと望めば、叔父は涙を浮べて、頓に辭も出でざりしが、良ありて、環、恕してくれ、と面を背けたまひけり。

惟へば今の所帶は一人口も重荷なり。さるを我身奉公に出でなば、月給といふものあり。過半それを此方に貺らば、然こそは米鹽の資ともなる

べきにと、我は平素の恩に酬うべき時の到れるを、歡ぶ氣色叔父には恨めしく、いとゞ聲を曇らして、環、其方は泣かぬか、心强き女なり。叔父は娘ほどに最愛き奴の、此花盛を嫁には適かで、奉公に出づる不幸をば泣くぞ。世間不知を稠人へ出して、可哀や苦勞さするを泣くぞ。五年の恩愛、今日の別離、これ出世の首途にしても、人は必ず泣くべきを、零落るれば憑く情なき目にも遇ふものか。我は泣くぞ。亡叔母の分までも泣くぞ、と猶泣き給ひければ、我も漫に得耐へずなりて、聲を立て、疊に伏して、叔父よりは泣いたりき。

（二）

年の内に談急遽調ひて、行先は澁谷村の奥に笠原とて聞ゆる大家なり。正月二日雪のちらつく夕暮、目見にとて尋行けば、四十歳餘の老婢出でて取次ぐ。導かるゝまゝに引添ひて、玄關側より、臺所を右に見て母屋へ通ふ廊下を過ぐるに、異しくも卒に胸穩からず、牢屋など行く道を辿るかと想はれて、心細かりけり。

それは家の廣きに人氣少く、加へて昏れる空の夜に入らむとするが爲のみにはあらで、此家の内には何等の子細かありて、かくは恐ろしき心地するにはあらざるか。

夕暮の暗さも、餘所よりは一際哀に暗く、燈火の影も、餘所よりは光弱くて眠れる如く、寒威は戸外よりも身に浸みて、意地惡きまで耐へがたなし。此心地、譬はゞ、不祥の事ありて、涙に打濕りたる宿に在るが如

きなり。

固より然ることは有るべしとも思ひがけず、又有りとしも聞かざるに、不思議は此家に入ると齊しく、心傷ましく、悲しく、果敢なく、恐ろしく、寂しく。やがて母屋に遠からぬ六疊の間の小綺麗なるに案内されたるが、かねてより待受けたりと見えて、手爐には湯沸を架け、茶道具も排びたり。

風暴れて硝子窓を鳴し、雪は降頻りぬ。家の内も外も正月二日の夜には似ざりけり。思へば其よりも我身の上こそ猶と胸塞りて、有繫に懷しきは小石川の空なり。

齡こそ廿歳なれ、今日を初奉公の心元無さ、船は置去の孤島に、途方に暮れたる氣色をば、かの老婢憫みて、紛るゝこともやと、打解けて話しかけ、或は慰め、或は劬る。自から其擧止言語に實意も見ゆるに、笑ふ口元の、亡くなられし叔母に能く肖たるほどなほ頼もしくて、名を問へ

ばお増といふ。我は四邊を眗して、三ケ日と申すに、此寂しき事れと呟けば、お増は頷きて、實に此家の寂しさは、三百六十五日いつも變る事無し。世界の果には夜の國とて日の影を見ぬ所もありとやら。申さば此方は夜の御館、餘りの寂しさに、此婆も堪兼ねて、齡よりは白髮も多し。若き御身には一月の辛抱も先は難しき所なり。然れども、それをだに怺へたまはゞ、御主人は御二方とも善き御方なれば。末々御前樣の御身の爲、必ず〳〵惡きことあらじとは、合點のゆかぬ詞の端。それほどまでに寂しき所以はと問へば、それには段々子細もあるやうなれど、私等の知ることにあらず。長う居たまはゞ其間に、とお增は冷々に笑ひぬ。

馴染もあらぬ人なれば、根問も不躾がましく、少時話の途切れたる窓に、さら〳〵と雪吹きつけて、梢の鳴る音も凄く、奥の方なる喚鈴の音は、死にたるやうに靜りたる家の内に轟きわたりて、恐ろしき響に肝を冷せり。

お增は然も無き氣色にて身を起し、あれは奧樣の御召、御前樣をお連れ申せとの御意なるべし、と急ぎて行きしが、旋て立踵り、襖の外より、さあ此方へ。

微なる雲洞の影を便に、暗く冷かなる廊下を傳ひて、燈無き座敷を二間越れば、奧の一間より優しき咳の洩れたり。

お增は立寄りて襖を排き、閾の外に跪まりて、お連れ申ましてござりまする、と聞ゆれば、柔婿なる聲音にて、此へとありけるが、我はお增の背後に控へたるに、入口には二枚折の屛風の立ちたれば、奧樣の姿は見えず。お增は振返りて、此へお入りなされまし、と席を片寄せつゝ纔に座敷へ躙入りぬ。

我は大人氣も無く心怯れて入りかねたりしを、お增に促かれて、やうやう屛風の陰を出づれば、俄に夜の明けたるやうに玻璃燈の光輝きて、殘る隈無く姿を照さるゝに心地惑ひ、倒るゝ如く座に着きて、人の影も、座

敷の模樣も、見るに遑無く頭を叩れば、そこは端近なれば、遠慮無く此へと聲懸けらるゝ後より、御遠慮無くお進みなされまし、と逐立つるやうにお增も言ふ。

次且と稍進めば、なほ容されず、寒ければとて火鉢の傍まで引寄せて、雪の事、途中の事など懇に訊ねらるゝ。此間にお增はいつか引退りぬ。奧樣は手づから茶を煮れ、菓子を挾み、萬般の待遇、口氣まで、我をば心易立に、少しも主人貌はゑたまはず、打解けて物おほせらるゝより、氣の置かるゝも然までならず、始めて浸々と御樣子を見るに、二十二とは聞けども二歳は若し。凜として美しう、高位の奧方などに備りたる品なり。黑縮緬の小袖に白を襲ね、夜會結びにして、馬車などに召したらば、然ぞと想はれたり。輪の大きなる天神に牙彫の中揷、蒔繪の揷櫛。召物は銘仙なるべし。下着は更紗絹、友禪の胴着、半襟は藤紫に小さき縫あり。羽織は小紋縮緬

の稽古りたる。帶は黒繻子と繻珍の腹合なり。是此家の奥方にして三ヶ日の服裝にはあらず、御不斷着なるべし。

面長にて色白く、頰の邊微く羸れたり。頸長く、髪濃く、華車なる姿の好さは繪にも寫す可く、我等は相對も愧かし。見參らするほど目鼻立難の言ひ所無く揃ひたまへるが、唯怪しきは、其美しき中に春の夜の月の如く曇れる所あり。それは天成の瑕とも見えず、何事か心に思惱める色の自から容に露るゝが爲す業なめり。

御顏の此曇こそ、此家の異く寂しきには似たれ、と不圖思ひつきたりしより、もしや其と此と關係のある事もや、と心には浮びたりき。

此御方を見參らするもの誰かは美しと見ざらむ。美しと見るものゝ誰か又此曇をば異まざらむ。著きは此曇、疑はしきは此曇なり。

田舍住の徒然を慰めむとて、御合手の欲きといはるゝは、此曇のあるが爲にはあらざるかとも疑はれしに、奥樣は然なり、と言はるゝも同じ事

をば仰せられけり。

この二三年病ふといふほどの事は無くて、唯氣の閉、心の鬱結、積り積りて、胸は日毎に切なく、身は次第に衰へて、世の中樂しからず、生効も無くて今日を暮すのみなり。疾病といふにあらねば、醫藥は驗無し。頼むは明日より我身の友となりて、この憂をば霽させよ。かゝる邊鄙なれば、何事にも自由は利かず、これぞと面白き事も無ければ、賑しき地に住馴れし人には愁かるべし。其代には、其方の身は其方が思ふまゝの處置、奉公人とは思はず、客分にて氣樂に遊べとの御辭なり。

世間は廣けれども這箇奉公のあるべきや。冥理のほども可恐う忝く、到らぬ身の私、御合手にはなるまじければ、御心に稱はぬ節は謂々仰せられて下さりまし。及ばぬながら御奉公いたしまする心底と申せば、奥樣は歡ばれて、明日は田舍の馳走すべし。夜なれば何も無くてと、更に菓子の色々取出し、手調の細工物など見せむとて立たるゝ時、座敷の外に

人音して、徐に襖を排くものあり。

我も奥樣も齊く其方を見向けば、男子の悠々と入來るなり。奥樣は其姿を見るより倉皇坐に復り、呼吸をも凝し給ふかと見ゆるまで、驚怖れたる風情にて、身を竦めてゐたまへり。奥樣のかくまで怖れたまふ此男は何者なるかと我も可恐く、忍びやかに其人を打瞻りたりしに、衝と我傍に進來りて、語氣温乎に、環殿とは其方か。我身は主人なり。かゝる日に遠路を好くこそ、と火鉢に手を翳しつゝ、我面を視たまひぬ。奥樣は我身敷きたまひし縮緬の褥を取りて、裏返して薦められけるに、旦那樣は見も返らず、又敷かむとも爲たまはざりき。此間奥樣は一言も仰せられず、唯打萎れて、旦那樣を覰くが如く見たまふのみ。

譬も懸けさせたまはぬのみか、其方へは眼も轉れさせられず、忌はしき者の傍に在るを、旦那樣は不興の躰などのやうに見えたり。三十二三にやなりたまふべき。長高く、肉緊り、色淺黑く圓顏にて、凛々しき裏に

得も謂はれぬ愛らしき所あり。頤の邊微かに青く、八字髭麗しう生ひて、頭の髮は春の海の浪などのやうに梳馴したり。糸織の小袖に白茶縮緬の兵兒帶、御召縮緬の長羽織、男子にしては稍媚ける縞柄なりき。襦袢の下に白フラネルの襯衣見えて、霜降莫大小の下袴を召したり。

主人と聞くより席を退りて、慇懃に挨拶すれば、氣輕に應けて、愛相など言はるゝ樣子は、奥樣への待遇と較べて、別の人のやうに思はれぬ。

やがて茶を薦めたまひて、奥樣おほせられけるは、今宵は徹夜降るべし。明朝は此へ庭の雪見に御越ありて、御肴には環殿の琴を、と我を見て寂しく打笑み給へば、雪見は我書齋にて足れり、と旦那樣は苦々しく空嘯く。奥樣は返す辭も無くて、例の俯きて便無げに萎れたまふ。

此爲躰見る目も氣毒にて、我までも手持無沙汰に控ふれば、旦那樣は例の此方へは優しく、小石川邊の事、實家の事、身の上の事など精細に訊ねたまひて、答ふる跡より續けて話懸けたまふほどに、絕えず物語るは

旦那様と我身にて、奥様は此に在る効も無く除け物になりて、彼方に獨り傷しう打沈みておはするを見れば、何かは知らず我心頻に疚くて、願くは奥様も倶にと、幾度か話柄を枉げて物申懸けしに、いつも猶ひて御答の遅ければ、旦那様は横合より奪取りて、再び我との話に復したまひけるなり。

我力にては及ばず。唯此上は多く物言はぬが可と念ひて、十言おほせらるれば一言ほどの御返事を申すばかりにて、我氣色奥様に氣を兼ぬると、旦那様も御心着かれたるやうにて、やがて立起りたまひつゝ、今日は疲れたるべし。蚤く寢まれよと、我にばかり目禮したまひ、奥様には始終一言もおほせらるゝ事無くて、此座敷を出でたまひぬ。

其跡には、召されざりし茵の側に、手にだに觸れたまはざりし茶は、赤く濁りて冷えたり。燈火の斜に照せる奥様の御顏は、枯骨の如く白くなりて、膓も斷れぬべき思を唇に咬緊めつゝ、眼には秋の草葉より繁く露

の宿るを見たり。
我は茵を取りて參らせ、かの茶碗を盆に移しけるを、奥樣は不圖御覽じつけて、遽に急來る涙を拭はせたまひけり。
まだ御馴染も薄きに、立入りて樣子を問ひまゐらするも野しと思へば、何とも申上ぐべき辭無くて、燈火の下に奥樣の萎れたまふを、心許無げに打瞶りつゝ、かく御間の不和なるは何に因りてか、と先づ思廻されたり。
人目をも憚りたまはで、旦那樣の酷しう餘所々々しき御待遇は、此事の根柢淺からぬ證なるべく、なほ奥樣の旦那樣を懼れたまひて、繼子の片隅に潛むが如き樣子の見ゆるなど、愈此御不和の容易ならざるを表せり。僻目かは知らねど、美しき御顏に懸れると謂ひし、彼忌はしき曇の、此時益甚しくなれるやうに見えたれば、或は此が其因にはあらずやの疑ひも起りぬ。

我若奥樣の御身にてあらば、之が爲には貌も窶るべし、心も亂るべし。其にて已むべきか、遂には玉の緒も絶えぬべきを、此愁ひ色に出づるなどは未だなる事なり。

夫婦の契は、我等處女の身の知るべきにあらねど、世に此上はあるまじう樂きものと聞けり。憂は互に慰め、苦勞は二箇に分けて、妻の眼に涙あれば夫の袖も濕れ、夫の胸の痛む時は、妻の心も惱むといふなるに、見參らせし御間は、之をしも夫婦と申すべきか。路上に往來ふ人と雖も、かくまで冷淡に情無きはあるまじきなり。慭ひ添ひて箇樣に疎しくありたまはむより、引別れて氣易く在さむこそ、なか〳〵優らめ、と笑止にも思ひまゐらせけり。

奥樣は旦那樣を見給ふこと、匹似小鳥の鷹に遭ひたる如く、旦那樣は又腐れたる魚の腸などのやうに、奥樣の御傍をば嫌はせたまひつ。同一の棟に起臥を倶に遊ばしながら、心と心は千里を隔てゝ、夢にだに面影の

通ふことあるまじく、これ名のみの契、繪に書ける花鳥の、さては春を樂まむやうもあらじ。深山の奧深く、荒磯の果は遠くとも、夫婦の睦しう住みなす方は、世界の何處も皆都なり。田舍住の徒然なれば、其御合手との御望なれど、御顏を曇らする御心の雲の晴れたまはぬ間は、天上極樂の都に七珍萬寶の家造して、千萬人の御合手錦の袂を飜し、妙なる樂を奏でゝ、終日通宵御慰め申さむとも、御心の樂むこと片時もあるべからず。ましてや不肖なる我身一箇何の御慰にかなるべき。却りて今のやうに、我にのみ優う辭など懸けさせらるゝにつけて、いとゞ憂き思ひを爲させたまふばかりなるべし。

いかやうの事情ありてかは知らねど、然ばかり睦しからぬ御間にてありながら、御離縁の沙汰も無くて過ぎさせたまふまでの御辛抱もあらば、なるまじき所をも枉げて、御互に御堪忍遊ばされなば、固より御縁ありて夫婦にはならせたまひし御間なり、いつか御心の端より解初めて、や

がては御愛き舊に復りたまふべし。我身は徒然の御合手にとて御奉公に參りたるが、その徒然の這箇徒然とは思ひも寄らざりき。然れども一度參りたるからは、何處までも御合手となりて、御心を慰むるが務なれば、覺束なけれど、あはれ此御間を舊に復し、睦しう並ばせたまへる御二方の前にて、愛でたく御暇賜らむやうに爲たし。之に越したる御徒然の慰藉はあるまじく、此御間を和げまゐらする外に、環の奉公はあらじと思定めたり。

床の間の置時計十時を打てば、奧樣は物思はしげに俯きたまへりし御顏を擧げて、もはや行きて寢み給へ。明日はゆる／＼語る事あり、遊ぶ事もありと仰せられて、お增を召して、我をば寢間へ送らせたまひぬ。

座敷を出でゝ、例の坑の如く黯き廊下を行けば、二人の跫音靜に踏めども物凄き響をなして、怪き物などの尾るにやと、背後の見らるゝに、風吹荒みて、窓打つ雪の簌々、振亂せる髮を率くかと氣味惡く、忽ち人を

驚かして鼠の騒ぐ方を見遣れば、廊下を右に折れて、三間ばかり彼方に、何處よりの燈火か、いと微に映したり。

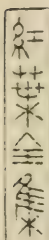
お増を引住めて、あれはと訊ぬれば、御二階の昇口、旦那樣の御居間と答へて過ぎぬ。

御間不和の所以は大方お増こそ知るべきなれ。それ搜るべき便此人の外にはあらず。左右は餘所事にして紀さばやと思ひて、今宵旦那樣にも御目通せしに、御人品、大樣なれども驕り給はず、男らしう凜々しけれども可怖からず。やさしき御言語、快濶たる御樣子、何につけても申さうやう無き御方らしけれど、唯一心得ぬ事ありと語れば、お増は苦笑して、然もあるべし、傍觀にも實に御惻しく、効無き御間とばかりにて、重ねて何を問へども、此事に就きては洩さゞりき。よし今は洩さずとも、渠の知ることとならば、我此に一月在らむ間には、強ひて問はでも、自から其口より辷る時あるべしと思ひぬ。

枕に就きたれども、頓には眠りかねたる心の中に、百端の事湧出て、解くは苦き絲の紊亂も、捉へむとする唯一筋は、御間の不和なる原因なり。之を知らでは、御奉公を爲べきやう無し。まづ其秘密をこそ探らめ。手段は如何にしてなど考へたりしに、不知想は然らぬ方に馳せて、推測に其原因を捏造したるが、四つ五つもありけり。中には有理と覺ゆるもあり、又拵過ぎたりと思はるゝもあり。其一々を爰に言はむも可笑かるべけれど、固より推量に過ぎざれば、憚多き事もありて、言はれず。

初奉公の日は齡少きもの皆泣く。其身の心細く、生家の事のみ戀しうて、逃げても還らまほしう堪ふまじきものとは、かねても聞き、然もあらむとは我も思ひ、宵のほどは實に、獄などへ繋れたらむ心地もせしが、御二方に御目見申せしより、生家の事も、初奉公の身も忘れ果てゝ、箇異き御不和の有樣のみぞ荐に心には懸りける。

自ら何故とも知らざれど、我は飽くまで此秘密を探り、此御間を和げむ

には、力の限盡して厭はじとばかり念入りぬ。不思議といふも愚ならずや、我は彼方に何の由縁あるにもあらず、而も恁まで深く思染みたるは、宿世何とか契置きけむ。

（三）

雪は徹夜降りて、明れば正月三日なり。始めて門口に心着けば、松も立てず、注連も張らず、座敷には輪飾の影も見えず。有係る例門徒の家には有りとか聞きしが、眼前視るは今なり。いと寂しく、不吉らしう、係ては春も來ぬやうに覺えて、此由來をお增に問へば、御家例とて毎年此通りとばかり。

窓に一面の日影、何處とも無く梅匂ひて、獅子舞、鳥追、凧の響弓、羽子つく音、門には禮者、絹裏の肌觸底寒く、起居の忙きをこそ春とは覺えしが、今年の春は死にたるやうにて、其邊の物皆冷たく、幾度思返しても正月三日にはあらず。

小石川にも今朝は雪の降歇まで、此樣に積るべし。表の六疊も微暗く、臺所は惡寒く、往來には車のみ軋りて、床の福壽草も然ぞや萎けて、叔

母は一方ならぬ怯寒、叔父は世を恨む餘りの陰氣にて、固より在りし世の春には似るべくもあらねど、春は自から春にて、左にも右にも長閑けく、今頃は雜煮の餅燒く香して、鰹節搔くは叔父が自慢、狹き勝手元に美衣着たる人の立働くも春の景氣、と思出でらるゝ側に、野曠き臺所にお增一人が縮まりて、こそ〳〵と膳立する。

程無く奥樣は起きたまへり。お手水の間に座敷を取片附けて、お火を入れたる頃に、お髪を理け、召物を替へて入らせたまひぬ。昨夜よりは御顏の色も稍〻鮮に見えたり。然れども例の曇は殘れり。我を見るより翳げに打笑み給ひて、夜の明るを佗しく、其方に會ひたうてと、火鉢の側に引留めたまひて、雪の噂などゑてゐたりしに、彼方にお增の物言ふ聲したりければ、誰と語るにかと思ひて、障子の硝子越に見遣れば、母屋の椽に顯れたるは、旦那樣なり。寢衣の上に黃八丈の長羽織を召して、楊枝啣へて、庭の景色を眺めつゝ立ちたまへり。お增は金盥を差置きて内

へ入りぬ。

旦那様の御目覺と立たむとせしに、旦那様の掛は增なれば、其方は我身の世話を頼む、行くには及ばずと仰せられて、奥様は萎れたまひぬ。昨夜の如く旦那様の方へは一目も見向きたまはず、おのれの見ぬものは他も見るなと言はぬばかりに、心を其に移させじとや、頻に話をば爲かけたまひて、旦那様の其に在する間は、聲の達かぬほどに隔たりたるに、なほ心置かれて穩からぬ風情目に餘れり。

八時半過ぎて、お增は二人前の膳を運出でぬ。手の無きことを知りながら、お客顏して今まで動かざりし不束を愧しく、俄に起ちて此心無さをお增に詫びつゝ、此所は私に任せて、旦那様をお呼び申して下さりましと咡けば、お增は目授して我を窘め、聞えよがしに是は奥様の御膳、これは貴方のと言ひて渡しぬ。我は仍合點行かず、旦那様はと小聲に訊ぬれば、お增は彼方に見えぬやうに、言ふなと手もて抑むるを、能くは解

らねど少は解りたれば、そのまゝ膳を運びて奥樣の前に据ゆれば、其方も此處にて食べよと仰せられけり。餘りに恐多く、私はお增殿と彼方にてと斷りけるに、孑然と一人は不味し。相伴せよとて、容し給はざれば、是非無く席に着きて箸を取りたり。此時始めて心着きしが、三日といふに雜煮にはあらで例の御飯なり。

門に松立てず、內には輪飾掛けず、床に鏡餠をも飾らぬほどの宿なれば、とは思ひしが、さりとは變りて、何と無く濟まぬ心の中に、返す〲も此家の尋常ならぬを疑ひてき。

旦那樣は二階の御居間にて、手づから紅茶を煎じたまひ、朝御飯は牛乳一合に麵包二片、給仕も要らず、新聞を見給ひつゝ、いと無雜作に濟せらるゝなりけり。

午餉こそはと思ひしに、膳は仍ほ二人前にて、旦那樣は二階を下り給はず、亦一つ訝しき事哉と思ひけれども、お增にも問はで措きしに、御夜

食も我身ばかりを御相伴にて、旦那様は此一日遂に影をも形をも見せ給はざりき。

もしや御病氣かとお増に訊ねしに、さる事無し。何に依らず別々に爲さるゝと答へしが、此不思議此日に限りしにはあらで、次の日も、其次の日も、又其次の日も、五日、六日、七日、十日になれども、之に異らず。さればとて、奥様より推して御機嫌伺ひに行かるゝにもあらねば、旦那樣も亦、其故に御不興を增さるゝとにもあらざる如し。

日を經るまゝに御馴染の重なるにつけて、奥様種々打解けたる御物語の度には、必ず何かの端に旦那様の御噂の出でざる例無し。それは心より最愛く思召さるゝ餘りと覺ゆる辭のみ。かくまで深く思はせたまふものを、如何なる御憎惡のありてか知らねども、旦那様の爲され方の餘りとや鬼々しきが、我までも怨めしきほどに、奥様の御心根を御不便に覺ゆる時も度々なり。

とは云へ、我は思踰しぬ。旦那様は努々然ばかり酷く情無き御方にはあらざるなり。それは我一人の見たるばかりにあらず、お増も優しき御方と云ひ、奥様は猶譽めたまふほどなれば、その旦那様の釋したまはざる奥様の、過か、落度か、不束か、何か知らねど、御心の解けたまはぬ其は、容易ならぬ事なるべし。さては御間不和とはいへど、過は奥様の方にありて、御詫を遊ばされたき御意は山々なれども、旦那様の御憤激しくて、御側にだに寄るべくもあらざるなめり。

過は奥様にあり！と我は私に思定めたり。

其後も旦那様の御樣子は、二日の夕始めて御見受申せし儘にて、奥様に會せらるゝ事ありても、我よりは曾て物仰せられず、怫然として餘所ばかりを見向きたまひて、適に奥様の方をば見らるれば、怨めしげに睨みたまふやうなり。

然れども例の如く我には優しく、萬般に御心着かれ、お増をも劬りて、

何處に申分無き御主人と見るほど、かゝる御方にて、理も無く奥樣に愁くあそばさるゝやう無し。いよ〳〵過は奥樣にこそ。

恪て我は怪しきと疑はしきとに心ばかりを迷はせつゝ、早くも此に半月を過しけり。

旦那樣は毎も御機嫌惡く、奥樣は曇りたる御顏色の異らずして、此忌はしく寂しき正月は過ぎぬ。

努めて油斷はせざりしかど、異しき秘密は些の隙をも見せざりければ、我は唯何處までも闇路を辿る心地してき。一月にも餘りぬれば御二方の御顏を合されしも度々あり、二言三言なれども物仰せられしも寡からざりしが、其時々の御樣子、總て二日の夕に毫差はざりしなり。

我身の來りてより、奥樣の御心大分霽たるやうなり、とお增は言ひしが、我眼には然りとも見えず。折に觸れては、始めて見參らせし夕の御顏の曇の如きは、謂ふにも足らざるまでに、太く味氣なき氣色にて、物思ひ

たまふを見る日もありき。さては忍び〳〵に憂き思や御方の胸を窄むると、餘所ながら我は益心を痛めたり。

秘密、秘密、其事は兎の毛の露ほども聞かせたまはねば、如何にとも慰め參らせむ方無く、さればこそ其秘密をと、旦暮心には懸けながら、さまでに思ふ程の驗も見えずして、唯給金ゆゑの奉公人の如く、一月餘を噓嗒と、而も一年中の最も樂き正月をば、此(辛抱のなるまじき家)に在りて、何の苦も無く暮したりしは、構へて我の辛抱强きにはあらざりしなり。我は始より、此御間の不和を整へむ、此異しき秘密を探らむにのみ心を注ぎて、身の程を顧るべき遑のあらざりければこそ、知らず〳〵一月をば暮し得たりしなれ。唯奉公とばかりにては、恐らくは十人が九人まで、一月の辛抱はなるまじきなり。なるほど御手宛は十分にて、居然御客樣に遇はれ、立働くにあらず、重き物持つにあらず、奧樣の御合手申して、まづは遊ぶばかりを一日の務なるに、何處に辛抱のなり難き

所やあると、人は然ぞかし不審に思ふべし。寂しき田舍の廣き一軒家に、不興と泣顏との間に介りて、一日紛るゝ事も無き環の身になりて見給へかし。　世間は欲德の沙汰ばかり！　今日も奧樣のいとゞしく思頽れ、何申上げても生返事のみ遊ばして、切に心惱ませたまふを見れば、我胸にあらむ嬉しき事も、忽ち消ぬべき心地すなり。況て然る事のあらざるをや、我も誘はれて、遽に世の樣の果敢なく、身の行末も頼無く念にれて、自から頭重く、俯かむとせり。

御奉公も御合手も是ぞと思へば、努めて御慰藉になるべき事どもを仕向けて、種々御機嫌を取れども、奧樣は些も浮きたまはず、慿る事は屢あり。

毎は勝れたまはぬ氣色に御見受け申しても、我の御側に氣遣ふを、有繫に見かね給ひてや、强ひて粉らしつゝ、それなりに忘れ給ひて、左も右も常座の御機嫌は復るなり、然れども不圖御心の惱劇しき折節は、御顏

の凄く蒼白めて、涙を含ませ給ひ、時ならぬに身悶あそばし、今にも盡然と起ちて、あらぬ事など口走らせたまふかと見ゆるまでなり。

さる事はいと稀なれども、餘に憂きに堪へかねさせ給へば、餘所目も忘れたまはざるにもあらず。五度六度ばかりもありけり。始の程は恐ろしとも思ひしが、後には慣るゝほど、なか〳〵御惻しく、我身も双親に後れて、便は唯一人の叔母にさへ別れし跡の十日ばかりは、身も世もあられず、今奥様の思煩ひて在すらむやうに、其のみ悲しく、切なかりしを憶合せて、實に其胸の中はと、慰むべき身も倶に萎れて、庭なる鳥の囀、手に取る如き障子の内の明るきに坐りたりしが、叔母の初七日といふ日、涙は盡きず、衰嘆に沈みたりしも、二月の係る日和の朝なりしに、折から程遠からぬ家に琴の音色の冴々と、聲微に麗しう江の島を唱ひたりしを、毎よりもいと面白く、思懸けず慰められし事のありしが、と不圖憶出でたり。然ばかりの涙の間に如何してか其琴の面白かりけむ、我なが

ら知らず。又我昔の悲みと、奥様の今の憂さとは、全く品變りてこそあるべけれど、奇しき我の例もあれば、もしやと、實にも女心の果敢なき事を頼みつゝ、やがて御秘藏の琴を持出でゝ、爪音も其折の調子にして、わざと聲低く江の島を唱ひ出しければ、彼方の隅に俯き給ひたりし奥様は、驚きたる氣色にて我方を見給へり。

御方は然ぞや驚きも呆れもしたまひけむかし。彼方は胸苦しう思惱ませたまへるに、無遠慮にも獨氣散らしう、さりとは憎き奴と御覽ずるにやと、有繋に心は退けたれども、我身の慰められし江の島を頼に、わざと憚らず、樂しげに彈きつ唱ひつ、半にもなりぬるほどに、我もいつしか興に入りて、自らも惜しと思ひつゝ曲を闋りてけり。

御機嫌のほども如何やと、慌忙爪を外して、座を退かむとせしに、今日ほど面白う聞きたることはなし。今一曲何なりとも、と奥様の仰せられぬ。

此時の嬉しさ、何に譬へむやうもあらざりき。奥樣は御機嫌好く、今一曲とは仰せられたり。なほ聴かむとは望ませたまひたり。我悲みを解きし江の島は、主なる御方の愁ひをも慰めたるか。面白う聞きたりと仰せられし奥樣の氣色は、實に少しく勝れて、黒きまでに曇りたりし御顏も、今ぞやがて雨の晴れむずる空の明うなりたる如くに見えたり。

御意とあらば、此指の折れむまでもと申せば、大事の妹の指は折らせじ、と愛らしき眼して我をば見たまひけり。勿躰なき事ながら、日頃の御情のほどに甘えて、心には奥樣をば姉樣とも思ひて、私無く傅き参らすに、此誠徹かざるにや、御所為に妹を袖にしたまひて、恨めしき所ありと申せば、奥樣は屹となり給ひて、其怨言は我方の誠こそ通らざるなれ。袖にせしとは曾て覺無し。ありとならば聞かむ、と膝を進ませたまふ。我は俯きて琴の緒を緊めつゝ、御主に御怨み勿躰なし。恕させたまへと頭

を下ぐれば、奥齒に物の介りたる其挨拶。我等の間に恕す、恕さぬなどといふ事無し。思ふよしあらば何なりとも、言はるゝが結句嬉しきと、聞捨てには爲給はざる奥樣の氣色なり。

係る事譯々と親友の間にてこそ申せ、お主に向ひては憚多し。御心易立の過ぎて、御恨みがましきこと申出せしは、私の不調法。それとても事々しう申上ぐべき筋にはあらぬを、唯此儘に御聞流しのほどをと謝れば、愈心に懸けさせられて、左も右も言へと責め給ひ、言はずば竟に御機嫌をも損ぜむばかりに見えさせ給ひければ、今こそ好機なれ、係る時に言はではと、琴を片寄せ、席を進むれば、何事を言ふにかと、奥樣は氣遣はしげに見給ひつゝ、容を改めて待ちたまへり。

何日ぞはと存じましたれども、然るべき機の無かりしと、第一には餘に不躾らしう、出過ぎたる爲方と、幾度か思飜して今日となりぬ。始めて御目見申せし日より、御顏色の勝れたまはず、御氣分の快からずと見參

らせしが、はや爾來一月餘今も御樣子の捗々しからぬに、格別御藥用あそばさるゝにもあらず、猶此儘捨置かせたまひなば、御合手にとて上りたる環は、軈て御看病人にやなりなむと、御側にて陰ながら心を痛め參らするは幾多ぞや。然れども何か御不自由のあらぬ御身上にて、かほどの御病に微々なる藥をば吝ませ給ふ所以なし。想ふに此の御病藥の力には稱はざるか。さりとて捨置き給ひて癒ゆべき病はあらじ。何がな御對症の藥もと、及ばずながら御心配は申せども、何御病氣とも知れざれば、是ぞと計ひて、差上ぐべき藥も無し。妹とも思ふとまでに仰せらるる私ならば、少しは御胸の中をも明し給へ。獨苦ませ給はむよりは、慰められて紛れたまふ事もあらむ。不束なる此身なれども、猫には優したる所もあるべし。

憖く御合手にとて上りましたれども、或時は半日物も仰せられず、又或時は御側に在るを煩く思召さるゝやうにては、何を便に御合手の致し方

も無く、此分にては御奉公務まり難し。鬱々御心に思はせたまふ事、苦からずば環にも仰せ聞かせたまへかし　憚りなから御力にもなりたく、且は獨り物思はせたまふを日毎に見參らするは、相與に心を苦むるにも優したる苦あり。

御馴染も昨日今日なるに、差出がましく、能くも斯る事申上げたりと、我ながら驚くばかりなれども、奥樣の御可憐身に沁みて、人事とは思はれぬ餘り、巾過して慙かしけれど、切なる環が心の底をも汲みたまへと申せしに、奥樣は顏も得擧げず、身を竦めて、恐懼れたまへる風情なり。

庭には鳥の音長閑に、眞盛の梅風無きに撩亂と、如月半の天いと麗に。

良有りて奥樣は夕月の如く蒼白みたる面を擡げ給ひて、我に怨みとは其事なりしか。然りとは身に取りて忝き怨みなり。今に始めぬ事ながら、其優しさ徒には思はじと、御目に餘る涙を拭はせたまひけり。

愚ならぬ其方なれば、平生の樣子、何かにつけて然ぞや合點のゆかぬ事

のみなるべきに、大概は察したる所もあらむ。實に我身ほど世に淺ましきは無し。合手にとて頼みたる其方をば、やがて看病人に爲むことは、かねて此身の願ひなり、と仰せられつゝ又泣き給ふ。

我は怪しき御辭に驚きて、さても變りたる御望みもあるもの哉。何を思出に御病氣にはならせ給ひたきぞ。戯れにも然る忌はしきことは仰せられな。無病は一つの寶とこそ申せ、と慰め參らする言の下より、寶には用無き身なり。其方を看病人に頼むからは、逐次一七日の香花まで、氣毒ながら其方の手に懸りたき意ぞと、我面をば懷かしげに瞶め給ひて、嗟我は此世に死ぬるより外には何の望もあらぬ身なりと、其聲太く顫ひて、御顏は益蒼ざめたり。

此世に在らむものは、昆蟲の末までも命の惜からぬはなし。まして奥樣の御身上にて、千年萬年存へたまはむとも、御樂みの極るべきにはあらざるを、假初にも今の御辭は、よしなき事を思ひつめさせ給ひて、我と

憂き身になしたまふゆゑなり。片時も忘るゝ間無く思ひつめ給ふ其よしなき事をば、左も右もして御胸の外に棄てさせ給へと諫めければ、嬾げに頭を掉りたまひて、棄てむとは念ひ、棄てむとは爲たりしかど、その憂き事は出でゝ行かず、我在らむ限は心の底に蟠りて、終に此身を冥土へは伴はむ。冥土こそ我安樂の家なれ、と思入りてぞ仰せられける。係る事聞くも何とやらむ恐ろしく、心打騷ぎて、その憂き事を棄てても忘れもゑたまはむとて、我をば御合手に召給ひたるにはあらざるか。膝とも談合と申すぞかし。設ひ好き智惠はあらずとも、御苦勞を增させまするほどの事は爲出さじと申せしに、我胸なる憂き事を打明けよとかと、奥樣、慄然としたる御樣子にて、人に道ふべき事にあらず、人の聞くべき事にあらず。我も言はねば、其方も聞かむとは爲な。わが胸裏の此憂き思ばかりは、神佛の茲に現出で給ひて、如何に力を盡させたまはむとも、その根を絕つべきにあらざれば、賴無き身に賴みたき其方をも賴まずし

て、とても因果の我一人を苦むるなり。嬉しき志のほどは平生能く知りたれば、徒にも思はねば、妹を袖にするにもあらねど、此事のみは語り難し。されども後來一度は知るゝ時もあるべく、又我身の悉う語る折もあるべし。その時節の來らむまでは、忘れても再び言出したまふなと、座にも堪へかねたらむ氣色にて、衝と立ちてぞ椽に出でたまひける。

(四)

人に道ふべき事にあらず、人の聞くべき事にあらず、と奥様は仰せられけり。忘れても再び言出づるなとまで仰せられけり。實に然もありけむ御心のほどは、卒に起たせたまひし御顏色の尋常ならざりしにても知られたり。

此上は如何に申上ぐるとも、その事は打明けさせ給ふべしとも覺えざれば、愁くとも今姑獨苦ませ給ふを看てあらむより外無しと諦めて、其後は噫氣にも出さゞりしが、奥様は日增に我をば親きものに遊ばされし、片時も御側を離したまはず、少しく見えざる時は、用もあらぬに喚鈴を連打に鳴したまひ、或は御自身に庭まで尋ねさせたまふ事もありき。然ればとて御側に置きて、御合手をさせらるゝにもあらず。御座敷に孑然と唯二人、奥様の氣儘に琴彈きたまふに、我の針持つ時もあれば、此

方は新聞を讀みて、彼方は寂しく莨を召上るなど、湯治場の長逗留に談も盡き、遊にも飽きて、一日事無く對向ひたらむやうにて、何不自由も無けれど、さて面白くもあらで今日を暮しつ。

此分にては御合手の効無しと、我ながら思はるゝに、佗くても奥樣の御心には、我を一方ならず頼みに思召さるゝなり。我在るをば最心強う思召さるゝなり。御側に飾物のやうに唯据置きたまひて、御心濟まさるゝなり。其驗は、仰せらるゝ事、爲向けたまふ事の一々、益親しう、餘に心措かせられざるを、お增も或時は驚きて、我身の仕合せを羨ましきとこそ言ひたりしが。

何に限らず、申上ぐるほどの事用ゐたまはざるは無しとも謂ひつべく、奥樣は深く我を信じ給ひ、環無くては夜も日も明けぬやうに思召さるゝか、と疑はるゝほどの御樣子も見えけるに、人に道ふべき事にあらず、と一度仰せられし御胸の中の事のみは、竟に微見しも爲給はざりけり。

それは如何なる御身上の大事かは知らねども、秘密とあらば、此口を裂るゝとも誓は守らむ環なるを、左右に危み懼れたまひて、いつまでも仰せられねばこそ、いつまでも其御苦み。打明けさせ給ひなば、此身を砕きてなりとも、必ず御頼効を見せ参らすべきにと、奥様の忍びやかに大息あそばさるゝ度に、恨めしきやら、歯痒きやら。

愢くて御面影は日増に羸れ、益〻限無く彼憂思にや責められ給ひつゝ、二月も過ぎて彌生となりぬ。御庭の櫻も咲初めて、長閑の日和打續けば、池を回りて蝶を逐ひ、柳を隔てゝ鳥を窺ひ、垣の内の漫行も心和ぎて、世間並の春景色、松立てぬ雪の正月とは事異りて、二月餘閉ぢたりし胸も豁き、男ならば樹下に酒も飲みたしと思はるゝ此頃なるに、旦那様は御用もあらぬ御身を二階にのみ閉籠めたまひて、適にも御遊山に出られず、御辛抱もなるもの哉。

其も事情ありての御無性かと思へば、なか〳〵御惻しく、せめてはと、

絲垂櫻の可憐を見立てゝ折取り、白銅の釣船に活けて、之を旦那樣へ奥樣からの御貺と御覧に入れてはと申せしに、殊の外喜ばせ給ひて、能くこそ心着きたれ。別けて見事に出來たれば、御意にも入るべし。然りながら我身からの御貺とは申すな。其方のにして御目に懸けよと仰せられぬ。不取敢二階の御居間に持行けば、旦那樣は罐詰の水菓子を下物に三鞭を召上りて、今や陶然と色に出て給ひたるなり。御床の間に懸けて、折に觸れたる私の戯。御笑草までに、と會釋して立たむとせしに、見事の手際、花にも勝りて其志の可憐。返禮無くてはと、卓の上なる玻璃盞を把りて差したまへり。辱けれど不調法なれば、と御斷り申せしに、年寄に耻搔かすな。飲まずとも盞は受くるものぞとありければ、有難く御受せしに　壜を差付けたまひて、注ぐ眞似させよと仰せられぬ。眞似ならばと油斷せしに、不意に注ぎたまひ、あれと驚くを見て笑はせ給ひつつ、飲めぬとならば唯口を着くるばかりにても苦からじと、御下物一つ

下されけり。其をば懐紙に藏せて、此二品奥様への御土産にと申せば、御機嫌卒に惡く、其方にとて遣りたるものを、下へ持行く程ならば返せと仰せらるゝ。今は是非無く、玻璃盞を取擧げ、一口着けしが、御酒ならば一つ二つは强ひても飲め、慣はぬ酒に吭の塞る心地して、殘餘を持扱ひたるに、下の御座敷にては我を召し給ふ喚鈴の音頻なり。

之を機に、奥様のあのやうに召しますればと申せば、增が行くべしとて立たせ給はず。なほ盃返せと逼りたまへば、又一口無理飲して、稍苦く、此一盃干さば倒るべしと、途方に暮れたるを御覽じて、始めて、飲めぬかと仰せらるゝも意地惡し。

野暮に生れつきましてと申せば、女子は野暮に限れり。飲めぬとならば其盞我引受けむと言はるゝに、それは羞しきやら、失禮やら、いよ〳〵飲まねばならぬ義理となりて、又一口强ひて、はや顏の酡うなりたる折から、奥様よりの御迎ひとてお增は來りぬ。

斯る仕儀より思はざる長座して、さぞや奥樣の御待兼と心急かれ、殘れるを唯一飲にして、御返盃申し、匇々に御暇乞して下りしが、足許も覺束なく、顏は火の如く、胸苦く、御座敷に入りて、晩はりし御詫を申せば、奥樣は勃然したる御顏にて、好き御色の羨しきと、餘所々々しき御辭なり。是はと思ひて、悉う有躰を申上げしに、御心容易に解けず。其場は別に何事をも仰せられで濟みしが、それより二三日は齒に帛被せたらむやうの御所爲のみにて、御側の愁かりしが、固より根も無き事なりければ、程無く御疑ひも霽れて、舊の妹になして、御優しき事ばかり。之に就けても、我は此御間を和ぐべき斡旋の難きに困じたるなり。かばかりの事にても御妬はありけるを、繁々旦那樣の御側へ通ひなば、如何なる椿事や起るらむ。御爲を思ひながら、よしなき恨を受け、且は憂き名を負ひて、立つ瀨はあらず。今思へば、人事に入らざる苦勞して、叔父に聞かれなば定めて叱らるべし。然りとて、奥樣の御容躰を見參らす

れば、有繋に御惻しさの忍びかねて、又御奉公の心も起る。

春雨降出して御庭の花傷み、かの絲垂櫻も其一枝を釣船に眺められしばかりにて、日毎に空黯く、晝も寂しくて、奧樣は御胸の鬱結いとゞしく、雪よりも軒の玉水人の氣を腐らす。

夜に入りての凄寥は更に勝れり。過ぎにし雪の夕も凄かりしが、庭樹に灑ぎ、瓦に訪るゝ雨蕭々と耳に沁み、目を慰むべき燈火の影も打濕りて、廣き家の何處に人の氣勢も無く、物の音のがつたりともせず、外に降るものゝみ獨時を得貌に、根良く、煩く、意地惡く、焦れたきに、奧樣はぢつと俯かせ給ひたるまゝ、其處に在すとも思はれぬまでに、打沈みてゐたまへり。

此物凄き無聊に堪へかねて、琴取出して彈けば、是まで睡げなる音して、聞くも懶く、今宵は早寢と仰せらるゝを幸に、九時を聞くや否や臥戸に入りけり。我は二月の始より御伽にとて奧樣の御側に臥すなりけり。枕

に就きて暫は睡られず、十時の鳴るを聞きてより後は覺えずして、不圖寢覺めつ。何時とも分かざりしが、やがて一つ鳴りしは一時なるか、半を打ちしにか。雨は撓む氣色もあらで、風さへ加はりて、雨戸に吹着け、椽の何所にか、ほた〳〵と漏る音せり。

宵寢せし故にや目の冴えたるに、なほ雨泄の音耳に付きて寢付かれず。枕為替へて、右左に勝手を直せども、氣は益澄みて悶ふる間に、時計は鳴りて、また一つ打てり。さては一時半か。今眞夜中と思ふ折しも、風暴かに一陣強く戸を鳴して、雨の颯と灑ぐに怖ろしく、身を竦めて夜着引緊むる隣に、奥樣は勃起と枕を擧げ給ひぬ。彌怖ろしく、何とか為給ひけむ、と竊に窺ひけるに、御眼を据ゑて、徐に四邊を眗し給ひ、旋て耳をば傾けたまふは、物の音をや聞取らむとし給ふならむ。何か聞ゆると、我も耳を澄しけるが、雨の音の外には異りたる響もあらざるなり。奥樣は猶も聽澄したまひて、其ぞと思召すらむ方を屹と視たまふ御眼の

色尋常ならず、確に其よ、と身を顫はせ給ひて、環、環と呼び給ひぬ。其御聲の震驚、疑ふべくもあらず、御心に恐怖ありと思へば、氣味惡く豫ひたりしを、目覺めぬと思して、夜着の上より慌忙しく搖りたまひつゝ、また環と高く呼び給ひければ、やう／＼今覺めたる躰にて御返事申せば、環、あの聲を聽きたるかと仰せられて、御耳を傾けたまふ。我は起回りて、如何なる聲かと申せば、あの聲、あの聲と忙しう仰せらるゝ御顏色は變りたり。

今仰せらるゝまでも無し、向者より御樣子を怪しく、耳を澄せども、我には何か聽ゆる聲もあらず。我には聞えぬものを、奥樣にのみ顯然と聞ゆるとは、正しく御氣の迷ひと思へど、如何にも何やらむ聞えたまふに紛れ無き御樣子の物凄く、身毛忽ち彌立ちて、肩の邊惡寒く、襟搔合せて、如何なる聲の聞えまするると申せば、あの聲、あの聲が聞えぬか、と少しく焦れ給へり。

我耳には何の聲も聞えず。雨は蕭々、風の樹を吹き、戸を叩くのみ。彼仰せらるゝこと心得難く、惑へる面色にて御顏を瞶めてありけるに、彼方も同じく我顏を訝しげに視たまひて、其方には、あれ〳〵、あの赤子の啼聲は聞えぬか、と聲震はして、怖ろしがり給ふ。幾度氣を變へて耳を澄せども、赤子の聲などは氣も無し。さては夢をや見給ひて、未だ全く覺めさせ給はざるにやあらむと思ひければ、御心確に遊ばされよと申せば、益焦れ給ひて、其方こそ氣をも心をも確にせよかし。寐惚れたるにやあらむ。あれ〳〵啼く、と仰せられて已まざりけり。

御樣子の愈怪しきに、我も怖ろしかりけれども、御迷ひ霽させむと思ひて、さらば見屆けて參るべしと起直りければ、氣の毒ながら賴む、と嬉しげに見えさせ給ひぬ。

枕頭の玻璃燈を取りて、立懸りつゝ、其聲は何處邊りにと申せば、折々彼地此方に聞ゆれども、多くは彼所にと、指させ給ふ方は南の窓なり。

恁くと聞くより、卒に總毛竪ちて、我は覺えず床の上に竦みたり。確に今窓の外にて、と仰せらるゝほど竦然として、身動きもならざりしが、やう〳〵氣を取直して起上れば、其方一人にては氣味も惡からむ。我身も與にと立ちて、奧樣は我後に尾き給ひぬ。屛風を出づれば、直に其窓なり。

戶を啓けぬ先に、未だ啼聲はいたしまするかと御訊ね申せば、今鎭りたりとなり。此間にと急ぎて障子を引啓け、戶を半排きも敢ず、又啼くと叫び給ひて、燈を持てるまゝ奧樣の逃げ給ふに、我も驚きて引退りしが、何の聲するにもあらざりけり。

再び這寄りて、一思ひに引啓くれば、眼の前墨の如く、燈火に映ふ小雨白く晃きて、窓際なる明竹の一簇風に戰げり。

別條もあらざるに力を得て、首差出せども黯くして見えず。悍りながら燈を此へと申せば、奧樣疑懼く近き給ひて、能く見てたべと、遠くより玻

璃燈を翳し給ふ。光の逹く限隈無く眴しけれども、赤子は措きて、啼くものとては、蛙一つも見當らざりき。
貴方も御覽ぜまし。聲も爲ざれば物も在らず。正しく御氣の迷ひか、さらずば僻耳なりと申せば、奧樣も四邊を熟と見定め給ひて、今まであれほど啼きつるものをと、やう〳〵夢の覺めたまひたる御顏なり。今も聞えまするかと申せば、はや聞えずなりぬ。合點の行かぬ事哉、と眉顰め給ひて、茫然と佇みたまへり。
之にて御疑ひを解き、御心易く寐ませ給へ。果して聲のするものならば、私にも聞えぬ理無しと慰めつゝ、戸を鎖したるに、折から風來りて竹を動かせば、幹の撓むにつれて異しき響きのするを、あれ啼くと、奧樣は逼足になり給ひて、環、其聲ぞ。あれならば竹の搖る音なるにと申せど、肯き給はす。其音寢めば、啼聲も鎭りたりと仰せらるゝに就けて、之をこそ聞僻めたまふなれと、正躰知れては我心に何の恐怖もあらずなりて、

慄きたまふ奥樣をば、百方申宥めて御床に入れ、我も枕に就きける後も、折々風吹きて竹の鳴る度に、奥樣は切に怖れさせ給ふ風情なりしが、我には再び何とも仰せられざりき。此騷に三時を聞きて、有繫に睡氣催したりしが、竟に夜の明けたるも知らざりけり。

此朝我は一目に奥樣の疲果て給ひたる躰に驚けり。わづか一夜の中に恁く變らせらるゝこともあるものか。

赤子の啼聲に怖れたまひし昨夜の空耳、御正氣にしては有るまじう異しく、御夢とは猶受取り難けれども、御正氣にても、御夢にても、御正氣にも、御夢にもあらざるにても、所詮は御腦の健全ならざるが爲せし業ならむ。此二三日は雨降續けて鬱陶しければ、其が爲に例の御思腦みの募りける餘に、取亂し給ひしならむ。今朝御氣の重く、病苦の姿に見えさせ給ふにても、御心の疲勞の程を想ふべし。然るべき折には、根も無き事、思の外の事など、振舞も口走もすること、夢見るにも同じければ、

御意識あらぬ現の間の事を尤むるにはあらざれども、赤子の啼聲と、聲無き聲を聞付けたまふのみならで、太く驚き怖れさせ給ひしは何故ぞや。不審は是なり。

奥樣の憂思に沈ませ給ふと、御間の不和なるとは、關繫の密着したるに疑無く、其事の起因は奥樣の過にあらむとも、かねてぞ我は見定めたる。然りながら過とは如何なる咎ならむ、それまで推量るべくもあらで過ぎたりしが、昨夜の事を思合すれば、その黒き秘密の裡には赤子をも裹みたるにはあらざるか。

秘密の陰に赤子は眠れり！　然れども、我には聞えざりし啼聲の主は、奥樣の生せ給ひし御子か。但しは他の子か。それだに知るべくもあらざれば、深き事は闇を覗くに似たる心地もすれど、昨日までの疑惑に較べては、一點の燈火微に見えたらむやうにて、今は些か頼もしき所あり。申さば御心を惡くせむと差扣へて、昨夜の事は忘れたるやうに申しも出

さゞりしに、彼方より、昨夜は睡き所を騷がして迷惑懸けたりと御挨拶ありけり。夢をや御覽あそばしたると申せば、夢とも就かず、寤とも就かず、赤子の聲の聞えしが、今思へば其方が辭に差はず、風の竹をば鳴せし音なり。

赤子の此邊りに啼くべき所以は無きに、其と聞きしは正しく夢にてやありけむ。我は幼きより夢に魘はれ、驚き覺めて立騷ぐ癖あり。心地惡く、頭の重き折などは、今も發りてと仰せられぬ。

然りとは昨夜の御辭と違へり。いかほど竹の音と申しても、御聞入れはあらざりし其時の御意氣込み、今朝となりて恁く卒に折れて、御合點あそばさるべしとも見えざりしに、何とやら事を打消し給はむとての御詐りのやうに覺えて、得心はならざりけれども、彼此申さむも異なものと、唯順しう仰せらるゝまゝを承はりて濟しぬ。疑へば限無けれど、之に就けても、秘密の陰に赤子は睡れり！

(五)

風呂は隔日に立ちて、我は毎も奥樣と御一所にて、御背を流し參らするなり。はや旦那樣の濟ませられしとて、お増の來りければ、我は湯好の待兼ねて、召しませと申せしに、少く風邪の心地と覺ゆれば、今日は罷めむ、と仰せらるゝ奥樣は、一昨日の夜の寤の御物驚きより以來、御食事も捗々しからず、目立ちて憂き思に屈し給ふなりけり。

恪て我一人にて湯殿に在りければ、お増はお背を流さむとて入來れり。はや此に三月にもなりけれども、奥樣の御側を離し給はず、起臥も同一にて、臺所に出づるも稀なれば、其後染々とお増に會ひて、物語るべき折もあらざりしに、今日こそはと思ひて、何氣無き躰にて、奥樣の御子供衆の有無を訊ねけるに、悉しき事は知らざれども、御子樣はお一人も有たせ給はざりしと聞きしが、と渠も何氣無く答へたり。

近き御親類などには、と重ねて問ひしに、されば、今は別に是と申して御親類もあらざるやうなり。御本家とて、旦那様の御兄様の赤坂溜池に在せしが、御夫婦ともに三年前に亡くならせ給ひて後、間も無く此方に引移り給ひてよりは、御親類らしき御方の出入も無く、御血屬と申しては、なるほど御一人あり。其方は旦那様の弟御様にて、今神戸とやらに居らせらるゝ由。

その御本家に御子様は無かりしか、と我は訊ねたり。男の御子様の御二歳なるが在しけれど、それも亡くならせ給ひしとかや。私の御奉公に參りしは、赤坂より此方に御轉宅遊ばされてよりなれば、其頃の事ども能くは存じませず。正助と申する老僕の彼方より隨いて參りて、當座働きてゐたりし者より、小耳に挾みたるのみ。

其頃より御二方の御樣子今の通りかと聞きしに、些も違はずと言ひつゝ、お增の眼色は有繫に御身も其を訝りたまふべし、と語るが如く我を見た

り。
些も違はず！　と我は思はず渠の語を反覆せば、お増も反覆して、些も違はずと、其疑惑に堪へざらむ氣色なり。
是には定めて深き仔細のあるべしと、渠の意を聞かまほしげに、語るともなく呟くともなく言ひければ、必ず深き仔細あるべし。然は念ひつゝ、年來疑惑に疑惑を累ぬるのみにて、何を是ぞと見出せし廉も無く、唯不思議なる御家と呆るゝばかり。世間は廣くとも、恁る御夫婦間の亦あるべきか、と膽潰したる顔色なり。
我も毎々訝しきは其事。いかに御間の睦しからずとて、三年も四年も彼樣にて續くものにあらず。實に御夫婦は名のみと申しながら、不見不知の他人よりも疎々しう、さりとて奥樣の御意は、些も旦那樣を憎ませたまふにはあらざるやうなるにと言へば、赤阪に在せし頃の御間の睦しさは、謂ふにも謂はれざりしとなり。元を糺せば奥樣は戀女房。御縁組あ

そばさるゝまでの旦那様の御執心やら御骨折は、一通や二通ならざりし由。其頃は人に羨ませらるゝほどの御相惚の間なりしとは、老僕の毎々申して、卒に變らせられたる唯今の御様子には、白首を掉りたりしがとお増は語りぬ。

聞けば御縁組の當時を知りたる老僕さへ知らぬ事を、如何にしてか中年者のお増が知るべき。三年も故參のお増さへ知らぬものを、今日此頃の環の知るべき事かは。お増にはあらねども、實に唯不思議なるは笠原家なり。

秘密の鍵の片端と頼みたりしお増なれども、抵りて見れば想の外にて、不思議の裏は知らざるなりけり。然れども渠の語に由りて、赤子の啼聲の有所は朧げながら知れたり。今は草葉の陰に睡らるゝとあるほど、御方の竊に聞かせたまひし御夜啼の凄かりしも理と思合されて、多分は其ならむ、と我心は頷きけり。

事の次手と思ひて、正月松立てず、餅搗かぬ御家例の由來ありやと訊ねしに、これは近頃の御家例にて、此御家に附きたる習俗にはあらず。赤阪に在せし頃には、御門に削竹、鏡餅なども美々しう飾らせられし由なるが、此方に御移轉のありてより、ふつと罷めさせ給ひて、見られし如く最侘しう春を迎へさせ給はぬ年も無し。來年も在して見たまへかし。此御家の一年中最も悲しく、最も物凄く、最も沈みたる、最も忌はしき時は、世間の最も賑しき、最も樂しき、最も長閑なる初春ぞと覺えたまふべし。それは松立てず、餅搗かず、屠蘇の香無く、御年始客のあらざるゆゑにもあらで、何と無けれど御家内の有樣水を打ちたらむやうに俄に濕ること、因縁のありげなり。三年が間試みしに、例年變らざるのみならで、年毎にいとどしく成増るやうなるが、この正月をば如何に見給ひけむと、思ふほどの事名殘無く一度に打出さむずる勢にて、お增は息も繼敢ず語りぬ。

我身も實に怖ろしく物凄く、牢などに入れられなば恁る心地や爲らむと覺えしまでに、初奉公の正月の果敢なかりしが、聞けば聞くほど之にも因縁あるべしと言ひければ、此事は例の老僕も何とも語らざりしが、三箇日か七種の内に、誰やらむ歿なられし人のありしやうなり。御本家の御夫婦にもあらず、御子樣にもあらず。さては御親類の數にはあらざるまじけれど、何とか御家に縁ある人に疑無し。其故か、あらぬか。左にも右にも希有なる事の塊りたる御家と語りて、湯を汲まむとて風呂の中の微温に驚き、火を消したり、と慌てゝ走出づる時、廊下に足音の聞えければ、お増は後戻して、奧樣の御出と知らせて行きぬ。

頓て奧樣湯殿の戸を啓け給ひて、環未だか。餘り長さに案じられて、笊持つて態々迎に來たり、と御顏を差入れ給ふ。

此太りたる軀を抄はせ給はむほどの笊、御臺所には無き理なるにと笑へば、奧樣御返に塞りたまひて、唯打笑ませ給ひけるに、隣の焚口よりお

増が聲して、奥樣、御物置に用心籠がござりまする、と囃すが如く笑立てぬ。

我も笑へば、奥樣も希しう快心的に笑はせたまひつゝ、増は面白き事言ふ。その苦勞無げなるが、我は何より羨ましと、何かに就けて二言目には御可憐きことのみ。

御心に其莬結ありとせば、また何日か折に觸れて、赤子の啼聲に駭かせ給ふべしと候ひけるに、其後幾度も風吹き、雨降りて、庭の梢の響き、窓の竹も鳴りしに、竟に變らせられし御樣子も見えずして、四月となり、五月に入りて、一日俄に暑く、今日は浴衣と人々噪ぎし日の暮、宵月の影おもしろく庭に風情添ひて、螢も出てたり。其珍らしく、内よりは、外の陽氣なるに誘はれて、千里竹の露に分入り、戯に苔蒸したる燈籠に火を入れ、雜裁を潜りて裏なる池の頭に出づれば、茂初めたる水草の陰に魚躍りて、汀の蛙好音を啼立つる。面を回らせば、由々しく立てる御

二階の木間陰に燈火の影射したるなど、此等の趣取集めて、田舍源氏の繪を見る想せり。其處に扁平の石のあるに手帕を敷きて腰懸け、何を見るにもあらで、唯此邊心の清むに任せて涼みたりしに、御座敷の方にて、環、環と聞ゆるは奧樣の御聲なり。我は衝と起ちて、雜栽を走出で、築山の側より其方を見れば、團扇持ちて椽端に立たせ給へり。

御內は暑苦しきに、少し納涼に出させ給へと申せば、庭は藪蚊の多くてと、動き給はず。蚊は想の外少くて、多きは螢なり。御池の四面は花火を揚げたるやうなればと申せしに、やう〳〵我側に來給ひければ、打連れて再び池の頭に出でたり。橋向なる淡竹の大藪の上に月ありて、池水黑く、魚のみ躍ねて、狸火ほどの螢も見えざりければ、奧樣は呆れ給ひて、何處に花火のやうに、と仰せられつゝ、我顏を御覽じて、言ひし事の餘の空々しとは思ひしかど、形の無きとも思はざりしに、此人は、と團扇取直して、我肩を拊ちたまひぬ。

嘘にはあらず。我見し時は花火のやうに飛交ひしが、御出の遲かりしゆゑ、はや消えにし迹なり。暫時御辛抱あらば御目にも懸くべし、と言ひも訖らぬ後の方より、珍らしくも大きなるが唯一つ、浮波々々と飛來りて、池の上を徘徊ひたり。

それ御覽じませ。花火ほど數の參らぬ代に、あの大さ千疋掛、子供の人魂のやうなりと申せば、悚然と身顫あそばされて、忌はしき言を、と御聲も暴かに叱らせ給ひけり。

螢は飄揚〳〵と水の上を遊びて、又引返して此方に來りければ、我は奧樣の團扇を拜借して、撲てば外して、逐回すを、止めよ〳〵と制し給ふ奧樣の御顏近く飛行けば、あれよと驚き、身を退き給ひつゝ、見返る後の一目に復聲立てゝ、環といひさま縋らせ給ふ。不意を打たれて我も心轟かして、如何遊ばしたると、やう〳〵申せば、あの石の蔭に赤子がと、益〳〵縋りて離れたまはず。

さては例のと合點しても、何とやら底氣味惡く、御肩越に竊と覗けば、そこら闇くて見分かねど、向者まで我の憩ひし石なり。其蔭に赤子の卒に湧出づべきやう無しと、心を鎭めて立寄りしに、我も有繫に慄然せしは、信に赤子のやうなる物の臥したるなりけり。

されども思返して瞳を定むれば、草の上に產衣を着せたりと見しは、腰懸けし時石に藉きて忘れたる桃色絹の手帕の、いつしか辷落ちたるなり。今更可笑く、拾取りて、私の遺せし手帕と持行けば、奧樣も始めて得心あそばされたる御機嫌にて、人魂などゝ其方が威せしゆゑなり。此所は冷ゆる、內へ入らむ、と我手を執り給へば、御座敷へ歸る。

（十八）

何が日にも此御座敷に御出は無き旦那樣の、何とか遊ばしけむ、日和の晴朗なる午前、ふと御心の向かせられたる風情にて、御庭傳に入らせられけり。

我は御奉公の内に一度は恁る御有樣を見むものと冀ひたりしが、今日明日とは夢にも思懸けざりしなり。

奥樣の御喜のほどは幾許と思へば、不覺心になりて、手に持つ物打捨てて御出迎申せば、何して居るぞ、と溫顏に仰せられつゝ御座敷に入らせたまふ。

奥樣は御嬉しくてか、例の御恐ろしくてか、太く狼狽へ給ひたる軆にて御挨拶ありけるを、旦那樣は沮色に見遣り給ひて、民之助より手紙の來たりと、懷より取出したる一通をば、奥樣の前に投げさせ給ひぬ。

民様よりの御文とは、變らせられたる事もや、と奥様の仰せられければ、二三日の内に歸るとの事なり。それはと奥様は手紙を御覧じ給ひ、はや明後日は御着なるか。久しう〳〵御目に懸らねば御懷しう、貴方も御樂みの事なるべし。此家も益賑しうなるが嬉しきと、繰返して手紙を御覧じたまふ。

賑しうなるは可けれど、と旦那様は俯きて、太き息を吐き給へば、少時御勢付かせられし奥様は、霜に沸湯を灌ぎたるやうに、忽ち有りし氣色は失せて、いとゞ濕々とならせ給ひぬ。渠の歸りなば、心を着けて疎忽の無きやうにと、猶仰せられたき事を御胸に納めて、目顏に其と言はせ給へば、愼みますると、奥様も故と御言寡し。

善矣と旦那様は屹と頷き、やがて徐に我を見向きたまひて、二三日の内に神戸に在りし我弟の歸來らば、また其方の世話になることぞとありければ、御家の賑しうなるは何よりの事なり。御世話と申して、私の屆く

ことにはあらず。今までは樂過ぎて、勿躰なけれど退屈いたしますれば、御遠慮無う以來は御役ひたて遊ばさるゝやうにと申せば、驅役は此方の勝手なれど、其方のやうに華車に生れたるものを、むざ〳〵骨太に、圓くして、疵物にするが餘とや可憐に、と旦那樣の笑はせ給へば、此御機嫌を奧樣も嬉く、環は姿の好きに飽きて、少しは醜うなりて見たきなるべし。榮曜の餅の皮とやら、さま〳〵の人心かな、と打笑み給ひけり。係る折は又有るまじ。一分も長く此に旦那樣を御留申して、御間の復るべき便とはならずとも、少時も奧樣の御心寛と思へば、旦那樣の有繫に起ちかね給はむやう、御莨よ、御茶よ、御菓子よと排べて、曩日の御返報なれば、是非とも此にて私の差上げまする酒、一盞と申せしに、免せと仰せられて、容易に承引き給はざるを、種々御勸め申し、葡萄酒三盃まで御酌して、御話を始めければ、稍興に入り給ひて、御腰も落着き給ひたるに、奧樣は左右に引込思案にて、冴々と物仰せられざれば、我は獨

り遣りて、御間に橋を渡せど、旦那樣も亦、適に話懸けさせ給ふ奧樣には生返辭のみ遊ばせば、我も竟には飽倦果てゝ、御斡旋も其迄は續かず、御飯をもと思ひし目算も外れて、旦那樣は衝と起ちたまひ、首尾好く敵は擊たれしぞ、覺えてをれと、御庭傳ひに逃げさせ給ひけり。

之を奧樣に怨ずれば、其方が心遣を知らぬにはあらねど、旦那樣の前の謂ふばかり無く氣逼にて、申したき事はありながら打出されず。又彼方とても、我身には御心易う物は仰せられぬを。然れども今日は什麼なる吉日か、此にて御酒召上るだに嬉しきに、御機嫌の御顏を見しも久しぶりなり。是皆其方が働と、徒には思はず。其にて我も一盞戴かむ、と玻璃盞をば把り給へり。

御氣霽には之に增すもの無し。一盞と仰せられず、ちと浮々あそばさるるまで召上りませ。唯今御肴も種々、日本一の增が庖丁と侑むれば、一つ受けさせ給ひて、日本一の增が庖丁に、世界一の環が御酌。成る口な

らば此一瓶をも盡すべきに、萬國一の生下戸なればと、玻璃盞に半分ほどを十口ばかりに空け給ひて、かねて妹とは言ひたれども、未だ固の盃は濟まざりけり。改めて姉より、と差し給へり。

姉樣も下戸なれば妹も下戸なり。御盃は式ばかりにして、冀くば後に固の御茶をこそと、我も何と無く今日の愉快さに、おもしろく酒飲みて、稀々仇口を申せば、奥樣も櫻色にならせ給ひて、平素よりは御口も輕く。時々若き事仰せられて、實に此日ほどの吉日はあらざりしなり。

先の程の御手紙の話になりて、神戸なる弟御樣の事伺ひけるに、悉う御物語あり。

旦那樣は三十六にならせ給ひ、民之助樣は丁度となり。二十四の歳商業學校を卒業あそばし、翌年實地を見習の爲上海へ、二年は其所に、浦鹽斯德に三年、去年の秋御歸早々神戸の一商會に重く用ゐられて在したりしが、かねぐの御計畫ありて、その運びも着きたれば、旦那樣と御相

談のありて、此度歸らせらるゝなり。

さては御商人なるかと申せしを、奥樣は何とか聞取らせ給ひけむ、商人なれども書生風の物に構はず、旦那樣をば御友達のやうに少しも御遠慮無く、我身にも持餘すほどの我儘仰せられて、可愛き御方ぞかし。久しう見ざれば、有繫に變らせられたる所もあるべきなれど、折々の御手紙は始より終まで御冗談ばかりにて、はや三十になり給ひたる心地はせず。拆げたる學校帽子を横斜に冠りて、土曜日毎に御馳走せよと亂入み給ひし御樣子のみ今も眼に在り。あの御方が商會の重役を勤め給ふと聞けども嘘のやうなり。如何に變らせたまひたるか、一日も早く御目に懸るが樂くて。

旦那樣に肖させ給ひてかと申せば、衆は有繫に兄弟なりと言へど、我眼には然までにも見えず。聲音の似たるばかりは陰にては別け難きまでなり。外國より送られし寫眞のあれば、紹介せむとて、手匣の中より中判

の半身取出して見せ給ひぬ。なるほど旦那樣に肖たる所あり。眉屹として、御眼色慧う、頰の邊豐滿と、口吻の可憐さ、可愛きと仰せられしは此ならむ。渦毛の卷きたる上衣を召して、厚太き外套を抱へ、少しく身を撚りて、物に倚らせ給へり。

眞に凛々しう、御目鼻立揃ひて、一言に申さば、才子らしき御和貌。身の擧止など輕く、應接好くて、誰をも遜し給はぬやうに見ゆると申せば、其通なり。御氣風は旦那樣に似て、今一息豁達なる所あり。此人歸來給はゞ、花の咲きたるやうに此家も賑しうなるべし。さもあらば我身もと言罷して、奧樣は卒に案じ入りさせ給ひぬ。

賑しうなるは可けれど、と旦那樣の大息吐かせ給ひしも是なるべし。何故にかあらむ。

（七）

御客樣を容るべき御座敷は書院に定め、我も半日襷掛になりて働き、掃除も屆き、飾付もして、唯御出を待つばかり。

此は御庭の眺望も曠朗に、明取宜く、風も通して、御普請も見事なれば、御座敷中にての御座敷と、今始めて見直したり。昨日までは微黯く閉切りて、用無ければ覗きもせず。雨の日などは戸も啓けぬまでに有効無く扱ひたりしに、恁くなりて見れば、旦那樣の御居間よりも、奥樣の御部屋よりも、結構なるは偖措き、謂ふに謂はれぬ好き所は、胸の開くやうに此御座敷の陽氣なるなり。

此度弟御樣の歸らせらるゝも、窖廩のやうに思ひし御家に恁る御座敷の出來たるも、やがて御間の和らぎて、笑うて暮し給ふべき前兆にはあらざるか。左にも右にも其御方の歸來たまひなば、必ず此御家の爲、御二

方の爲となるべし。旦那樣にも御遠慮無く、奥樣にも御儘仰せらるゝと聞くほど頼もしく、此御方の唯一言は、我等の千言萬言にも優りて、大方の事ならば、御間は無理にも一日の内に復るべしと、待ちに待ちたる御歸りもいよ〳〵今日となりぬ。

三時頃の御着と知りながら、午過ぐればはや落着かれず、幾度か書院に出入りて、挿花を正し、書幅も見飽きて、茶道具、煙草盆に手を付け、なほ持餘したる身を庭に出して、木陰傳ひに行けば、垣根に茂れる野薔薇の花の白きと紅きが唯二つ咲きたり。虻を逐ひて二つともに摘みて、奥樣の御覽に入れけるに、近う寄れと仰せられて、紅きをば我髮の根に挿し給ひ、我にもとありければ、白きを挿して參らせけり。奥樣も我も夜會結にしたるなり。

今日ばかりは稍御心の晴れたる御機嫌にて、彼此御饗應の噂の内に二時も打ち、今鳴るは三時、最早御出と云ふ程も無く、玄關に聲して、お增

は駈來りぬ。

打揃ひて御座敷を出て、階子側を過ぐれば、旦那樣の下りて來たまへるに會ひぬ。連立ちて御出迎に出づれば、人力車三臺、二臺には骨柳、鞄を溢るゝばかり積みたるを、汗水漬になれる車夫どもの解下すを、式臺に立ちて指圖したまふ御客樣は、霜降の脊廣に同じ胴衣を召して、薄納戸地の棒縞の窄袴をいと華車に穿做し給ひ、鐔濶の兜帽を召したるまゝなれば、御顏は瞭と見えねど、寫眞とは變り給ひて、想ひしよりは大人びて、かくては商會の重役をも務めさせたまふべき御容躰なり。

荷物を其に置きて、車夫は歸れり。御客樣は始めて帽子を取り給ひ、まづ旦那樣に御挨拶ありて、奥樣を見らるゝより打笑みたまひしが、其隣に見知らぬ我顏を、訝しく一目見遣りたまひて、御機嫌よろしう、と帽子を脱ぎ給へば、御歳よりは若く、御語氣を聞けば、なほ若く、我儘も仰せらるべく、御遠慮もあるまじく、いかにも爽懐なる御方のやうなり。

御二方と連立ちて書院に通らせられける跡に、お増は御荷物の始末してゐたりければ、我は御風呂の加減見に行きて、其事申しに御座敷の口まで來りけるに、お客樣の高く透る御聲にて、あの美しきは何者、姉樣と並べて同胞のやうなりと、折から我噂なるに、遠慮して姑く小蔭に忍びたり。

あのものは我身の妹なりと奥樣は仰せられぬ。貴方の妹にして愍かしからず。昔の娘風に當世の愛嬌を持たせ、陰柔なれども寂しからず、引立ちたる相貌にて、多く難獲き美人なり、と聞くに胸轟き、顏熱りて立竦みぬ。餘に賛められたるは嬉しからで、辱しめられたる心地のするものなりけり。

續きて御客樣の訊ねらるゝまゝに、奥樣は我身の上を語らせ給へり。それも御賛辭の多く、いつまでも我噂にて、立顯はるべき機無ければ、抵個のあらぬ御話の隙を見て入らむ、と今姑く待ちしに、旋て御辭の切れ

たれば、わざと咳してやう〳〵入りぬ。

御風呂に召ましてはと申せば、御客樣は氣輕に、それは辱しと御會釋ありける側より、旦那樣は片笑み給ひて、環、噎は出ざりしか、一つか但しは三つばかり。如何に〳〵と我顏を覗き給ひつ。

其事と胸に覺あれば、赧む額を打背けて、此に得堪へず起たむとせしを、旦那樣の引住め給ひて、噎の數を言へとて肯き給はず。爲む無くて、何も出でずと申せしに、奧樣、彼分にては一つにはあらじ、三つなるべし。

之は民樣に伺はむとありければ、御客樣は頭を撫でゝ、未だ三つまでにはあらねど、一つにてはあらじ。一つ半〳〵とて立たせ給ひければ、一つ半にては寧ろ二つに近しとて、旦那樣は大笑あそばしけり。我は獨り玩弄になれる想して、在るにも有られず、身を竦めて俯きたるに、御風呂に御案內せよと奧樣の御意ありければ、立つより早く駈出せしを、お客樣に呼止められ、徐に御案內賴む、と笑はれて彌〻面目無く、やがて諍

院に返せば、御酒の支度と、奥樣も御手を下し給ひて、御料理の數々卓に排べて、御酌は我役なり。

此上に御酒の始りなば、いかに羞しき憂目や見るらむ、と我は切に胸を騷がせしが、さまでの事は無くて、折々旦那樣の輕く諾らせ給ふと、御客樣の可笑き事のみ仰せらるゝとにて、御座敷は浮立ち、奥樣も始終笑ましげに見えさせ給ひ、旦那樣へも親みて物仰せらるれば、彼方よりも十言に十言の御答ありて、如何に見參らせても御別條のあらざる御間なり。

御銚子の代に立ちし時、お增は唯呆れて、此御家始りて以來今日のやうなる日はあらずと言へり。此後は日毎に今日のやうなるべしと聞かせければ、如何にしてかと渠は問へり。我は唯打笑みて、語らざりしが、噫嬉しくも我推量は差はざりけり。

名句なりとて、叔父の每々聞かせし、(五月雨や一夜ひそかに松の月)とは、

實に今日の事なり。あはれ松の月の長く此御庭を照して、五月雨の全く霽れ、春雨の窓に音無く、正月の雪再び降ることなかれ。

翌日は二階の御居間にて御客樣は朝御飯を召上りて、そのまゝ正午まで下りさせ給はず、荐に御話のありけむやうにて、折々笑はせらるゝが聞えたりき。

御晝飯は書院にて、昨日の如く、卓を圍みて睦しう。晝間は熱ければとて、御酒は無かりけれども、御客樣は御元氣にて、奥樣の沈みがちなる御氣も恬くては引立ち給ふべく、人笑はせに强ひて興じさせ給ふにはあらで、仰せらるゝ事に自然の愛嬌あり、御話の得も謂はれず面白くて、姑くも坐を起ち難く覺ゆるまでなり。

御物語も途絕えて、奥樣の少しく俯きて御飯を食べさせ給ふ御顏の、如何なる故にかありけむ、細々と御羸瘦の太く目立ちて見えたるを、御客樣の瞶めて在したりしが、卒に姉樣と呼び給ひぬ。

奥樣は慌てたる風情にて見向かせ給ひしが、今まで何やらむ思案してゐたまへりしを、忽ち吾に復りたるやうに見えたり。御思案とては例のなるべし。

御色澤も惡く、痩せ給ひたるは又格別なり。確に御病氣の御顔色。如何爲たまひたる、と御客樣は眉を顰め給へり。

奥樣の惑ひ給へる氣色より、旦那樣の此時の御顔こそ、在お胸の内の苦惱を畫きたるは一層と、我は思はず見參らせけれども、御客樣の御目には入らざりければ、其色見せじと旦那樣は、頰などの脫け、體の細りて、膏氣の脫けたるは、寄る年の加減にて是非無し、と笑ひ給ふも故とらしく、さりとは御心苦しげなり。

然までに痩せてかと、奥樣は兩の頰を撫で給ひぬ。痩せたり、太く羸れたり。神戸へ參る前、赤坂にて見參らせし頃などは、痩せず、太らず、中肉にして玉の如く、別けて口吻より頰の邊の好さには、恐多けれども此

民之助忍びて焦れ參らせしがとありければ、さては其方の熱念にて痩せたるならむなど、旦那樣までも仰せらるゝに、奥樣は彌々迷惑して、顏の事言ひ給ふな、昔の事も言ひ給ふな。過ぎにし俤に焦れさせ給ふとならば、寫眞なりとも參らすべし。婆をば苛み給ふな、と言はせも果てず、苛むにはあらず、御心配申すなり。可惜ものを殘ひたるよ。我もやがて女房持つならば彼口吻、彼頰の如きをとこそ念ひたるなれ。それより三年になりぬれども、未だ瓜八分ほども肖たるに邂逅はず。邂逅はぬも其理かな。本家さへ傾くなりぬるを。願はくは笠原家の爲、兄者人の爲御自愛專一ぞと、御戯言の中にも實あり。

御飯も濟み、御茶となりて、御客樣は猶奥樣を視たまひて、必ず御病氣なるべしと、前後三度ばかりも異しみて問はせ給ひけるに、御心に懸けさせ給ふな。然る事無しと、飽くまでも裹ませ給ひけり。之に由り觀れば、御間の事民之助樣は全く知り給はざるならむ。假奥樣

の痩せ給はず、或は物を思はせ給はずとも、抑も御二方の御様子に眉の顰むべき不思議あり。恁く昨日今日を欺き了せたまふとも、遠からず穂に出でゝ、民之助様の御目には留るべし。現に三度まで異しまれたまひし後の奥様の御機嫌は、はや御胸の曇りたると、手に取る如く我には見ゆるぞかし。

（八）

民之助樣の一所にならせられてより、御二方の御樣子暴に著しく變れり。日々の事、萬般につけて別々なりしが、今は殆ど同一になりぬ。始めて我目を驚かせし不思議の御食事も同一になりて、御茶にも顔を合せられ、納涼にも一つの風を分けさせられ、御物語も尋常なり。恁くては御夫婦として異りたる所も無し。奥樣の御容躰の例ならず見えさせ給ふを、然も無しと固く仰せられしには、民之助樣も御疑ひの存り給へるやうなりけれども、御間には當分御心も着かれずして過ぎぬ。御心の着かれざるは、民之助樣の迂濶にあらず、御二方の御謹愼の深きなり。實にも御謹愼の深きこと、從來を知れる我には、能くも恁くまでにと驚かるゝばかりなりけれども、有繫に奥樣の御心弱く、御胸の内の盡く御顔に顯るゝを得愼みたまはざりけり。假旦那樣の御心解けて昵うあそばさるゝには

あらざるも、昨日迄の御所爲に比べては、針の莚の板敷に變りたりとや謂ふべき此頃を、如何なれば喜ばせ給はぬ奥樣の御顏の曇りは例の如く、日を經るまゝに御樣子は春雨の頃に復る。

恁くてあらば、やがて民之助樣の再び見尤めたまひて、秘めたまふ事の露顯も今の間ぞと、險しき崖を馬の躍るばかりに氣遣はれたり。然れども我志を謂はゞ、此不思議は一日も早く民之助樣の御目に留らむをこそ喜ぶべきなれ。我願ひた遂ぐべき心の切ならば、進みて此不思議を御耳にこそ入るべきなれ。我は其を知らざるにあらず、奥樣は此不思議を蔽ひたまはむとて、憂きが上にも憂き思ひを爲させ給ふとまでも、知らざるにはあらねども、あれまで頑に情無く御側を嫌はせたまひし旦那樣の、さりとは打て變りて此頃のやうに遊ばさるゝを見るにつけて、此一大事民之助樣には知らすまじき御用意の深きを想へば、さばかり褁ませ給ふものを憚りも無く打明けて、御二方を苦め參らせむは、我心の忍びざるの

みならず、さては大なる罪をも犯すが如く、恐ろしく覺えければなり。御不和の原因の如何なる事かを、分明に我の知るならば、彼御方に漏して可否の分別もあらむ。深く裹ませたまふ事なればとて、强ちに他言を愼むべきにもあらず、其事に由り、其人に由りては、御爲になか〱善きもあるべし。その分別のあらぬ我心は置所に迷ひぬ。

聞かせ參らせて善き事ならば、いかに我心の忍びずとも、よしや大なる罪は犯すとも、御口を割りて苦き藥をも參らすべき覺悟はありながら、可否知らねば是非無し、敵のやうなりし御二方の同一になりて嚴秘したまふに心怯れて、唇の寒しとやら、唯知らぬ顏に遇してぞ、姑く折を見合せたりし。

民之助樣は閑なる餘御二階と奥樣の御居間とを掛持に往來あそばして、いつも〱冴々しう、御冗談の種盡くるとなく、いつか我をば友達のやうにあそばさるゝにぞ、自から其氣にもなりて、旦那樣よりは御心易立

になりける。
今日も御出の頃と、奥樣とも御噂して待てども音信無し。見て參れとありければ、まづ書院を御尋ね申せしに、在さゞりければ、御二階に伺ひけるに、此にも御姿見えずして、疾に下りしが、と旦那樣は仰せらるゝ。何處へか行き給ひけむと、御家の內隈無く搜せども仍在さゞりけるを、先の程御庭へ出でさせ給ふを見し、とお增に誨へられて、椽に出でゝ眴せども、木の間に御浴衣の端も見えざりき。さては裏庭を志して、築山を越れば、池の汀なる無花果の廣葉の茂れる陰に蹲りて、餘念無く水を睨みて在したりしが、我跫音に面を擧げて麾き給ひければ、近寄りて見るに、釣して居給ふなりけり。好き所に來合せたり。嚮より吭の渴難堪けれども、頻に泛子の動くに立惜まりたりしに、折からの御出辱し。早速ながら茶を一つ、次手に莨盆。御報恩には、此鮒御身の物にせむと。言ひ給ひければ、御側を見れども何も有らず。其は何處にと申せば、あ

れ見よ、今泛子の動くぞ、彼をば抵當にするなりと笑はせ給ふ。されば御用辨じて參るまでに、必ず彼をば釣置きたまへ。御入物も持ちて參らむと、御座敷に還りて、云々と申して、奧樣にも御見物を薦め參らせけるに、否と仰せられければ、品々二度に運びて、我一人姑く御側にて見てありける間に、御約束の魚も釣れ、續きて五尾まで懸りし面白さに、御貰の隙を窺ひて、其竿拜借して入れたれども、曳くばかりにて懸らざりければ、連に上げつ下しつ、竟には鉤を浮藻に縈めて、曳けば弗つと綸を切りぬ。爲なしたり、と悔れども所爲無く、段々御謝を申せしに、御戲なれども釋したまはず、謝罪にも種々あり。其謝罪にては濟み難しと、又例の謔らせ給ふ御意なるべし。思召さるゝまゝの御謝、如何やうにもと申しければ、さらば我訊ぬる事を裹まず言ふか。さては例の事に御心の着かせたまひけるなれ。然れども申して可否の分別無きからは、何處までも知らぬにて通さばやとも思ひしが、既に御目に留りたる上は、

我見し在躰を申せばとて、仂き告口にもあらじ。まして外ならぬ御方なれば、左も右も申上げて、共々に御爲を思はむかとも、思煩ひつゝ、頓には御答も申さゞりけるに、民之助樣は重ねて、如何に褒まず言ふかと責め給へり。今は胸を据ゑて、私の存じたるほどの事ならば。固より其方の能く知る事なり。其方より外には知らぬ事なりと、我氣色をば見たまへり。さもあらば何をか褒み可申き。はや〳〵御聞かせあそばされよと申せば、民之助樣は片頰に笑を含みたまひて、我の每に譫言をのみ云ふとて、此をも其數に入れたまふな、極めて眞面目なるぞと有りければ、例の御話にしては、此前文の少しく心得難く思ひしに、其方には夫のあるかとの御訊ねなり。

餘りに思寄らず、暮々も御斷はありけれども、如何にしても御戲とよりは受取難く、聞違へかとばかり怪しくて、問返し參らせけるに、はや定まりたる夫のあるか。かねてより聞きたかりしぞと仰せらるゝ。我は忽

ち顔の火の如く熱するを覺ゆると倖しく、胸は切無きまでに轟けり。面を向くべきやうも無くて、口早に、さるものは有らず、と申して立たむとせしを、袂執られて、先よりは身近に引据ゑられ、いよ〳〵羞しさに背向けて、やう〳〵控ふれば、遁ぐるとは何事ぞ。なほ訊ぬる事あるに、遁げむとならば、彼鉤今取りて返せ。返すか、遁げぬか、と袂を動かしたまふ。さりとは御無躰なり。裏まず言へとの御約束ゆゑ裏まず申せしに、仍釋ゑたまはずして、今更鉤を返せとは、我を紿きたまふなり。裏まず言へとは、其事一つにあらず、未だ外に數あるなり。其一々聞かるるが否か、但は池に入りて彼鉤取りて返すが可か、と進退させたまはず。頓に御答もなりかねて當惑するを、如何々々と急立てたまふにぞ、我は是非無く、鉤取ることは御釋ゑあるべしと申せば、さては順しく聞くとの事か、それは嬉し。まづ確に定まりたるものは無し。偖其次に、思染めたる御方などは如何、と益苦めたまひけり。

我今年廿歳にもなりぬれど、恁る目に遭ふは初度なり。男といふものゝ側も、いつぞや旦那樣に御酒を强ひられし折と今日と、二度より外に經驗無く、さりとは得も謂はれず氣の逼りて、唯消えも入りたく、捗々しうは語も出でずして、怖ろしきに稍似たる心地もしつ。左右は御答もせであるべきにあらねば、如何なれば然る事は訊ねさせたまふと申せしに、少しく御不興にて、煩しといはぬばかりなり。重ねては訊ねじ。速に彼鉤取りて返せと拗ねたまふ。

煩きにはあらず、羞しくて申し難ければ、今のやうには申せしなり。私の如きもの、貴方の御一目にて、どれほどのものと大方數の知れたるを、わざ〳〵御訊ねあそばさるゝこそ、畢竟苦めて見むとの御戯なれ。廿歳になりて奉公するほどの意氣地無し、人並々の働きだにあらぬ身とは知りたまはずやと申せば、其方は如何に意氣地無くとも、人の唯は措かじと思ひて訊ねしまでなり。定まりたるものも、戀人も無しと聞きて先づ

は安堵。必ず其辭に詐りは無きか。今一應聢と聞かむと仰せられければ、些も詐り無しと申しも敢ず、さらば主無き花ぞ。我に一枝ゆるせ、一生の觀好にして飽かじと、やをら差寄りて、直と俯きたる我顏を頸元より覗きたまへり。我面は再び燃えて割るゝ如く、渾身頻に顫きて、心地宛然醉へるに似たり。

良久ありても我答の無かりければ、我に恥搔するか。係る言云はるゝ身より、云ふ心にもなりて見よ。酒興の上にもあらねば、いつもの洒落にもあらず、羞かしながら忍ぶに餘る民之助の思入りたる胸の中ぞ。今は男の意地なれば、返事聞かねば此場は起たせじ。必ず應と云へとにはあらず、否ならば否にても可し、唯所思を聞くまでなり。孰にしても、一言にて濟むことぞと、平素の民之助樣よりは執念く、意氣込みて逼りたまひぬ。

我は震ひたる小聲にて、御心の程も知られずと申せば、何故知られぬ、と

愈手詰に志たまへり。我等如きものを左右仰せらるゝ貴方にはあらず、御羨しき御噂の數々は、奥樣より承はりて能く知れり。さる立派なる方方を差措きたまひて、よしなき一時の御戯より、後來の御迷惑は起るぞかしと申せば、設へば一時の戯にもせよ、後來の迷惑些も厭はぬ覺悟ならば、差支はあるまじきなり。後來の迷惑ずんと承知。いで〳〵此上は其方も一時の戯ずんと承知せでは、語が合はぬぞ、と我肩を拊ち給ふ。御心だに僞無くばと、皆までは聞きたまはで、毛頭僞無し。我心には毛頭僞無し。其語忘るゝな、と獲物の桶を把りて起ちたまふ時、私よりは貴方こそと、茶道具莨盆取擧ぐる間を佇み給ひて、後に又釣せむと思ふが、其方も來るかとありければ、參りたけれども、奥樣の御一人にて淋しがらせたまふべく、又彼方を其方除にして氣儘に遊ぶやうなれば、と聞きたまひて、「然らば我より斷りて其方を借るべし。」それも何とやら異なものにて後護ければ、折を見合せて參らむほどになど語ひつゝ、御座

敷に還れば正午なり。

此日は我一生忘られぬ六月十五日、民之助樣の入らせられてより三週間餘になりぬる頃なりき。此日より、此時より頓に我心は異しく變りけるなり。謂はゞ新しき思の一つ增したるが、日每に蔓りて、いつか心も全く其になりけるやうにこそ覺えしが。此事ありてより奥樣の所思憚られて、用有りて書院へ參りても、我と尤められて匆々にして出でぬ。可成くは避けて、有りしよりは遠々しく、三度參りしものも一度にと努めけるに、民之助樣の此方に入らせらるゝのみは毫も變らず。我に向ひての御所爲とても同じけれど、我は有繋に心弱くて、自から萬般退目に、捗捗しからぬやうに想はれたり。恁くては奥樣の御目にも留らむと慮はしく、彼方の見たる所を、陰に訊ねまゐらせしに、少く異な所も見ゆれど、然までならず。縱知られたりとて何か有らむ。其折は明白に我に惚れられたりと言ふべしなど、例の氣樂に笑ひて了はるれど、我身にしては中

譯無し、面目無し。

然は思ひつゝ、胸の內には躍るばかりなる嬉しき念の絕えず在りて、今は奥樣の御側もなか〳〵寂しからず、いとゞしく霽れたる我心は、餘所なる愁の雲も淚の雨も曇らし得ざるなりけり。

民之助樣の歸來たまひなば、やがて此家も、賑しうならむ、と賴ませたまひし奥樣も、亦此御家も、在けるまゝにて、思ひも寄らず、我身の獨り賑しうなりけるのみ。それをば喜ばぬにはあらねども、此御家と御間の仍變らず佗しきを、我は已みがたなく悲むなり。

我御奉公は實に其なるを、忘るゝとにはあらねども、一つ增したる新しき思に取紛れて、姑く懈れり。我は固より此家の人にあらず、又奥樣の妹にもあらず、御合手にとて抱へられたる身の上なるに、其務は棄てゝ、人目を忍ぶ歡樂に浮れ、奥樣の御苦勞を餘所に見て、我身ばかりを慰むこと、思へば〳〵淺ましからずや。民之助樣に心通はすことの申譯無く、

面目無からむよりは、之をこそなか〱に罪とも過とも、我は悔ゐも慙ぢもすべきなりけり。

心に咎むる事のあれば、其後は書院への出入も故と疎々しく、しみ〱御話の間も無くて、御間の不思議を申出さゞりしが、今は彼方とも恁くなりぬ、何をか裹むべきや、思ふまゝの一々申して、御了簡のほどをも聞かばやと思極めたり。

夕暮熱く、御庭には稍風ありて、薄黒む木の間に隠々と白地の浴衣は、民之助様の散歩を遊ばさるゝと見る間に、我の椽に立てるを呼給ひて、納涼に出ぬか。姉様は如何在する。納涼には御出なきか。お伴れ申せ、と團扇を揚げて麾きたまひぬ。

日毎に一つ家に居て、今朝も、晝も、つい鬢にも、見たりし人の御顔なれども、又更に珍しく、懐しく、直にも御側へ参らでは、何とやらむ心細さに、飛びても行きたけれど、奥様の手前もあれば、まづ我を差措き

て、御意を伺ひしに、奧樣は籠行燈の前に御姿の毎もながら力無げに、我は行かねば其方行け、とは幾許か嬉しけれども、御氣の引立ちたまはざる御容躰を見るにつけ、恁くあればこそ慰め參らすべき彼方を打遣りて、務を外なる氣儘の申譯無く、なほ彼方を附けたりにして、外出を逼め參らせしも面目無くて、次且と立ちかねたるを、我には管はず出よと仰せられけり。

平生ならば直にも參るべきなり。今日ばかりは心に愧ぢて得立たざりけるを、何とて行かぬぞと尤めさせ給へり。奧樣の御出無くば、私も參らじと申せば、入らざる義理を立つる人かな。今日に限りて、と御目を側めて、黯きに蹲る我を見入りたまふにぞ、冷たき汗は遽に出でゝ、面は自から有らぬ方を向きたりし。

御答申さゞりければ、重ねて、はや〳〵行くべし。民樣の御待遠なるべきに、と聞くより忽ち赫となりて、さる事おほせられければ、我は猶こ

そ參るまじけれど、椽より御座敷を驅拔けて、何處へと的は無けれど、足の行くまゝに、玄關の方へ遁れてけり。

此夕こそ好機會なりしが、有繫に疵有つ足の御側へ寄ることもならざりしに、彼方より御越はありけれども、奧樣の在しければ、本意無く御別れ申して、次の日夜の白々と、未だ勝手にも音せぬ比なり、竊に起出でて、書院へ忍び行きぬ。

惡き事を働くにもあらねど、人目を偸むといふは、いと心の快からぬものなり。胸も騷ぎつ、足も顫ひつ、見尤められじとばかり四方に心を配りつゝ、やう／＼辿着きて、靜に襖を啓くれば、飛惑ふ蚊の聲細く、有明の燈火微に蚊帳を透きて、民之助樣はすや／＼と、御顏を此方にして寢入りたまへり。我は先暫入口に佇みたり。此日來最憐きことの數々おほせられて、我方よりも、世には彼方の外に人はあらぬやうに思ひ參らすれど、假初にも淫靡の契などありけるにあらざれば、濫に入るまじき

御寢間に忍びたることとの切くて、努々猥褻らしき意のありてにはあらざれど、御忖度のほども悲しく窘められて、頓には入りかねたるなり。されども室外の慮はしさに、左も右も身を入れて襖は閉てたれども、御側へは進み難く、なほ佇みて姑く思案せしが、潔き心の疚しからずば何をか恐るべき、と思直して御枕頭に近き、民之助樣、民之助樣と忍びやかに二聲呼びしに、御答は無くて、却りて遽に鼾をば立てさせたまひぬ。重ねて、民之助樣と申せば、唯今此通り御寢中とおほせられて、前よりは鼾高く。

御戲の段にはあらず、去りがたき用事ありて參りたり。御話あれども御寢間にては後護し。はや夜も明けて蒸熱くもあれば、御庭へ出させたまへ。涼みながら申上たき事あり。森の如き畑の朝顏、見榮もあらぬ紅一種の花なれども、早咲の可憐をば御目覺しに、と無躾ながら蚊帳を外して、衣桁なる御召物まで取りて參らせけるに、朝顏ならば此に見事なる

ありて、外には目を遣るべき花も無し。其所の戸一枚啓けて、露を帶びたる風情を見せよ。勿躰なけれど、寢ながら見るが勝手なりと、莨盃引寄せ、腹這になりたまひて、遠路の所を早々と切角の御出なれども、お茶一つ差上げもせず。御覽の通の鰥夫暮、蛆こそ生かね、蚤蚊に責められ、獨り寢る夜も三十年、未だに誰來て世話して下さる御方も無し。世にも不便なる男一疋、御知己の中に不用なる女子衆も候はゞ、御取持のほど偏に賴入ると、容易に起きさせたまふ氣色もあらず。折角なれども私慶安にはあらず、此家の下婢にて、御座敷の御掃除にとて參りたるなれば、はや〳〵起きさせたまへ。時移りて人目に懸らば、御話もなるまじ。わざ〳〵首尾して參りたる志に愛でゝ、お睡くとも是非に御庭までと申せば、唯今承はるに、御掃除に御出の由。掃除なれば塵を拂ひ　芥を掃出すとこそ覺えたるに、忝くも御客樣をば、無躰に庭へ引出すとは、怪しからぬ御掃除もあるもの哉。此大きなる芥、自分にては動かず。願

はくは、御手に抱かれて何處へも參らむ、と搔卷引剝ぎ、大の字形になりて、庭へなりと、池へなりと、勝手の所へ捨てよかし。芥だ〳〵、芥之助でござる、と御床の上を轉げたまふ。

此心をも御存無く、我を任意好き御目醒しに爲たまふを、やう〳〵申宥めて御庭に出づれば、夜は既明離れて、二人並ぶ姿も何とやら羞しきに、民之助樣は睡起の脚の萎えて步み難ければ、手を牽けとて聽したまはず。何所の雨戶も閉ぢて、見る目の憚りもあるにはあらず、木々の露綠の色深く、裾吹く風の涼しき外には、鳥の音と薄月の殘れるばかりなれども、我と心の置かれつゝ、築山を回り、木間を辿り、池の汀に佇みなどして、かね〳〵胸に疊みたる事を、今日といふ今日ぞ始めて申出しける。

今まで勇しかりし民之助樣は御機嫌暴かに變りて、太き息を吐きたまひ、其方も心着きたるかと、續く御辭も無くて、天打仰ぎて、思案に餘りたまへる御風情なり。

此頃心着きたるにはあらず、始めて參りし夕より、眉は顰みて今に開かざるなり。御入來のありてよりは、御二方の御謹愼ありてか、以前のやうにはあらねども、當座に比ぶれば、日増に御樣子の舊に復らせらるゝやうなり。

不束の身をも顧ず、差出がましき業なれど、奥樣の餘り御惻しさに、如何もして此御間を和げ參らせむと、陰ながら心を碎きつゝ、仔細はあるべしと目に見えたれど、我等風情に打明けさせ給はむやうもあらざれば、何と手を着けむ因も無くて、今日とはなりぬ。貴方には旦那樣は御兄樣、又憚り多けれども、奥樣は此身をば妹と仰せられて、實に其樣に御情も深ければ、姉樣とも思ひ參らする御方なり。何卒力を協せて御爲を計ひたく、此事疾より胸には在りたれども、出過ぎぬが善と思ひて差控へたり。されども此御斡旋貴方ならではと申せば、頻に頷かせたまふのみにて、姑し待てども御辭のあらざりければ、我は重ねて、貴方なれば仔細

は御存なるべし。親たりとも必ず漏すまじければ、概略を聞かせたまへ、と恐らくは誠も色に顯れけむ。民之助樣も容正したまひて、さりとは優しき志、我身にまても嬉し。かねて怪しき樣子とは見たれど、我も仔細は全く知らざるなり。其故は、長年外國に在りて、歸りて後も神戸に住みて、一所に一月と暮すは、此度が初度なり。外國へ立ちしまでは、最睦じう、疊の上の鴛鴦と、我は屢譃りし程の相惚なりけるに、來て見れば其裏の裏なる此頃の有樣、心の中にては驚きたり。あれほどの間の這樣になりたるには、容易ならざる事のありけるに疑ひ無し。我兄は性來雅量にして、大方の事を咎めず。姉とても亦素直にて、憎惡など受くべき人物ならず。なほ互に惚合ひたる間なれば、天地覆りて、水の火ともなりなむ時こそ、此夫婦は媒介に二度の用もあらめと請合ひたりしに、天は仰げば高く、水は夏も冷たき今日、不思議なる哉、何事のありけむ、我考の及ばざる所なり。其方は

我よりも長く此不思議の中に住める人なれば、左も右も思當れる節やあらむ。聞きたしとは此方より。

思當れる節と申して、別に無けれど、唯一つ異しきは、寤に幻影に赤子の事、云々と二度までありし次第を語りけるに、民之助樣は聽澄したまひて、良久し御目を閉ぢて、心に問はせたまへるやうなりしが、頓て、赤子々々と呟きたまひて、益五里霧中を行くが如し。もしや我留守中に子など設けし事のありけるにや、と荐に頭を傾けたまひぬ。

然は先誰しも思ふ事なり、我もお增より聞きし、この澁谷に三年が間の異狀なかりし由を申して、亡くなられし御兄樣には二歳とかにならせられし男の御子樣の在せしと聞きしが、何とか其に關繋したるにはあらざるかと、推量のまゝを明し參らせけるに、如何にも總領の兄には一人の男子ぞありし。それは實布的里亞に取られしが、我子にもあらぬものゝ、夫婦が間に然ばかり關繋するとはあるまじきなり。其か非ぬか、雨の夜

の寤は措きても、池の頭の手帕に驚きしは、尋常事にして看過し難き所もあり。好き事聞きたり。之を手繰りて或は不思議の紛亂解くるよしもあらむと、有繋に御心痛のほどは眉の邊に露れたり。

貴方の御氣性にて、其に御心の着かせたまひながら、今に御一言も、旦那樣へなり、奥樣へなり、御訊ねあそばさゞるは似合しからず。是は如何と申せば、それに如在のあるべきや。姉の氣色を尋常ならずと見て、訊ねしことも幾度なりけむ。されども言はず。夫婦の樣子は彌異しくて、兄にも折々言出せしに、彼此言を窮して、要領を得ず。姉の事言出せば、いつも機嫌を損ずるが氣毒さに、さてこそ事情あれとは、我も疾より見拔きたれど、當分は知らぬ顏、やがて一伍一什を搜得たる上にて、左も右も爲べし、と了簡せしなり。

從來の志辱し。更に今よりは他人ならぬ兄の爲、姉の爲、又我爲と隨分骨折りて、此詮議を爲遂げ、波風治めて、浮寢も睦しき鴛鴦に、此方も

劣らぬ女蝶男蝶の銚子を取らせ、目出度々々々々を重ねむ日をば待ちたまへ、と語ひける間に全く夜明けて、はや射來る日影も熱く、朝顏の花の色も眩げなりけり。

遽に勝手の戸の開くに驚き、奧樣も今頃は御目覺め、知られては面目無し、はや御暇と申して立退むとせしに、戀は人目を忍ぶにて面白し。眞晝間相乘して、人に遭ひて二人が挨拶するやうにては、手品遣ふを背面から見るも同じ。我等も程無く其になるべし。取快は今の間ぞ、誰物としもなき島田をば肚の裏にて圓髷と眺むる内が花と知らずや。命も長からぬ恁る首尾を、急くな、無情め、行くならば徐に行け。夜は明けたれど、此は人里遠き片田舍、定めて道の寂しかるべきに、單身歸すも心元なし。それまで送屆けむ、と仰せらるゝこそ可笑くも嬉しけれ。

道の遠ければ、急がずば日は暮れなむ。御志に詐無くば、駕籠に乘せて送らせたまはずやと申せしに、何とやらの里に馬はあれど、君を思へば

徒跣と、昔の戀は理せめて律義なりしぞ。杉の柾の下駄ならば、云分はあるまじきに、乘りたくば之にて駕籠に乘りたまへと、左の藥指なる玉入の黄金の指環を拔取りて、我指に貫さむとしたまふに驚き、振切りて遁げむとするを、我言ふことは、何にてもあれ、差はじと誓ひしを忘れたるかと、袖に引入れたる我手をば、力窘に曳出したまはむとす。御辭は何にても背くまじけれど、君を思へば徒跣と聞きしからは、駕籠に乘りては、昔の人に志の劣るやうなれば、今はなか〳〵跣にても參らむずる心底の、金子には用無ければと斷りけるに、用無くば捨てよ。其方に遣りたるものなれば、思ふまゝぞ、と我袂に投入れたまひ、衝と離れて木間に入ると見しに、はや築山の彼方に出でたまひ、我は書院の履脱の前に佇みて、互に見合す此時の顏。

心も心ならず、御座敷に還りて見れば、今朝は例ならず奥樣の御鎭りあそばしたる仕合に、雨戸を繰りて御夢を驚かせしが、やがて御手水の折、

書院の戸の一枚開きたるを御覽じて、民之助樣とはや起させたまひしか、と御訊ねあり。如何か存ぜずと申せば、毎になく彼所の戸の開きたり。八時ならでは起きたまはぬ御方なるに、と奥樣は御不審に思召して、見に行けとありければ、何事も御存じあらぬを、御氣毒やら、勿躰なきやら、いと罪深く思ひけれども、畏まりて書院へ參りけるに、亂次き寢床の狀は在りける儘にて、主は在さゞりけり。未だ御庭より御歸りのあらざるならむと、立歸りて此由を申しけるに、また池にて釣したまふならむ。所在の無さに、近頃は釣に憂身を窶したまへり。賑しき地に住馴れたまひしを、俄に僻る田舍に引籠りたまひては、さぞや慰みたまはむやうも無く、退屈過ぎて氣の腐り、一日に一年づゝ齡取るやうなり、と仰せられしも有理と覺ゆる。然は仰せられつゝも御辛抱のなるは、其方といふ御合手のあればなり。如何ともして我身も御愛相したけれど、知る通りの健れぬ體にて、思ふに任せざれば、御客樣の御接待萬般我身に

代りて頼むとの御辭、一々犇と胸に徹へて、御存じ無しと想ひしに、今朝ほど抜出せし事も御承知にて、書院の雨戸より御氣の着かれたる躰にして、我をば見に遣はされしも、其となく窘めむとの御意なりけるか。然までにしても知らぬ顔を、いと憎くや思召して、今又改まりて懸る言をば仰せらるゝなるべしと、やう／＼心着けば、面も擧らず、申さむやうは更に無くて、唯慙入りてゐたりけるに、奥様は微笑みたまひて、民之助樣の事言出せば、其方は毎も顔を赧めて、必ず語の滯むも異し。尋常事にはあらずと見たり。此姉には憚る事無し。打明けよ、と此事露骨に言はるゝは今朝を初度なり。

我胸は、民之助樣に始めて微見されし時よりもいとゞしく難堪く轟きたり。世に忍びたる惡事の竟に露顯したるやうにぞ膽は冷したる。實に思へば、是も一種の惡事なるべきをや。然れども有躰を申せばとて、叱らせ給ふ奥樣にはあらざるを我は知れり。此緣は必ず結ばせたまひなむ奥

樣の御意とも亦知れり。然りながら、昔氣質の律義なる親の子なる環は、死しても係る事我口より人の耳へは得入るまじきなり。我は係る密事を惡事の一種とは念へるなり。努々浮きたる心ならねば、末こそ契れ、今を窘み、神懸けて汚れたる事ありしにはあらざれど、親の知らざる男を我と見立てゝ、思を通はせ、心を許したるをぞ、我は疚しく思ふなりける。知られて身を殺すべき恥とにはあらねども、好みて語るべき功にもあらざらむ。

左にも右にも我は此有躰を明すべき氣丈の魂あらざりければ、愬ひ秘さむは濟まぬことゝは思ひつゝ、彼方の事おほせらるゝ毎に私の羞かむにはあらで、奥樣の毎も言廻したまひて、私を羞しがらせたまふなり。譯などのあるやうに、貴方より仰せらるゝゆゑ、私も御噂の度に何やら羞しくてと申せば、さては我目違なりけるか。夫婦にせば言分あらぬ好一對なるべきにと、わざと口惜げに呟きたまへり。

程無く朝御飯となりけるに、民之助樣の御出無かりければ、奥樣の御吩咐に由りて、我は御迎ひに出でたり。

池の頭にも見えたまはざりければ、御庭の内殘る方無く尋ねまゐらせしに、何處にも影無し。畑へ廻りて見るに、切戸開きて、はた〱と風に扇り、鉤匙の外れたるは、此より外へは出でさせ給ひけむかし。然れども何處へかおはしけむ、ついに慿る例のあらざりしに、そこら散歩してゐたまふにやと、外方を見遣れども、崖には畑の一面に靑々と、田圃に動く人影よ、耕す男、岨にも畔にも樹蔭にも、それらしき姿はあらざりけり。

還りて慿くと申しければ、散歩に出でたるならむ。捨措け、と旦那樣は仰せらるれど、奥樣は有繋に心元ながりたまひて、御時分時なるに歸らせたまはざるはなどゝ、異しき事に思召すめり。夜深にもあらず、朝風の涼しく、草葉の露の心快きに誘はれたまひて、そこら吟行たまふなら

むとは思へども、曾て有らざりし事なれば、また心にも繫かりて、御飯の濟みても歸らせたまはぬならば、見てや參らむ、搜索に出でよなど、奥樣と語ひつゝ食事も果てぬ。箇抑什麼ぞや、未だ御歸はあらざりけるなり。

落着かせ給ひたりし旦那樣も今は稍ゝ御心惑ひて、渠は如何にか爲けむ、飯をも喫はで何地を吟行ふらむ。七兵衞爺を呼びて見せに遣らむ、と卒にお增を隣へ走らせ、我も見て來む、とまで騷がせたまふ。此躰に奥樣いとゞ御胸を轟したまひ、さりとは心得難し。如何にあそばしけむと、御眼色も尋常ならず、變などのありけむやうに思做してぞ狼狽へたまふなりける。始のほどは心丈夫なる我なりしが、恁る有樣に忽ち怯の出でて、遽に忌しき念ひも浮べば、在るにもあられず、私も見て參らむと、帶引緊め、履物取りに急ぎて、勝手口より出づれば、出合頭に隣の七兵衞、蚤取眼に打魂消て、御客樣の御行衞知れざるよし。何とも以て大變

の珍事出來と、不吉の挨拶益人の心を驚かす。
畑に出づれば、旦那樣も御庭より廻り給ひて、其處より出でけるかと、お增が大事の茄子畑、我身秘藏の瞿麥、苦蘵の圍をも踏散して、切戸口に寄りたまふ。唯見れば、奧樣も御庭下駄にて朝顏の籬の側に立ちて、此方を御覧じつゝ、環、氣を着けよ。旦那樣は早う御歸りあれ。お增は內に居よ。はや七兵衛は出掛けたるかと、每には聞かぬ高聲の甲走り、四邊に響くばかりなり。
旦那樣は戸口を出でゝ我を見返りたまひ、其方は出るな。却りて氣遣ひなり。人騷がせの民之助め。と言捨てゝ行きたまふを、見送りて在るべき此場ならねど、奧樣も切に留めさせたまへば、身を悶えつゝ、旦那樣の前途を打瞻りたる後に、御歸り〳〵、御客樣の御歸りと、哭くが如くお增に喚かれて、驚くやら氣の弛むやら、思はず蹣きて振返れば、飄然と勝手の方より民之助樣、何事か起りたる、何をか珍しげに二人して御

見物と、氣も無き御顏色。此時ばかりは如何に彼方にても有繫に憚かりけり。

見れば、旦那樣は未だ遠くは行かせられず。我は聲を揚げて呼び參らせしに、三聲目御耳に入りて顧たまひければ、兩手を抗げて麾きまゐらせけり。

人々民之助樣を取圍みて、嬉しさと腹立しさに詈り噪ぎぬ。彼方は何故とも御存じ無くて、唯呆れてゐたまへるを、烟に卷きて御座敷に御伴れ申し、偖云々と聞かせ參らせけるに、民之助樣は肚の底より搖上げて笑はせたまへば、旦那樣も奧樣も、他たちの心を知らずやと打腹立ちて、左右より責めたまひけるにぞ、やう〳〵氣毒に思召して、始めて御謝罪はありける。何所へ御出ありしぞ、と訊ねけるに、何心も無く切戸を排けしに、見亘したる朝景色の得も謂はれず、眺むる間に氣も漫になりて、足の向くまゝに立出でしが、此より見ゆる大樹の蓊蔚、恰も毬のやうな

るあらむ、彼所より岨を下りて、程遠からぬに、まだ茅葺も新しき一軒の家の見えたりければ、其邊までと、又行きしなり。

庭など廣く取廻して、數ある藥草の花珍しく、椽に朝鮮簾を掛亙して、軒端に二つ鳥籠を釣りたり。風致の何とやら幽しさに、何者の住居かとをかしく、なほ胸しけるに、座敷の簀戸の明放したる隙より、緋毛氈掛けたる桐の大机見えて、其邊に紙、書物堆く、何さま然るべき人の宿とは見たる、と姑く佇みたりしに、五十約の品好き男の鼠木綿の浴衣着たるが、裏の方より青紫蘇の葉を二三枚摘みて出で來れり。

我は折から喉の渴きて難堪かりければ、庭の隅なる石の井筒に、吊釣瓶置きたるを涼しげに見着けて、水一つと無心せしに、主極めて愛相好く、まづ此方へとて、御飲料にならば、御茶を献ずべしと、點法も妄ならず目覺しき茶を煎れて、菓子も鹽餡の最中に都を味はせ、道具なども撚りて、いよ〳〵凡夫ならず。二つ三つ語ひしに、身も浮くばかり元氣の話

上手、此方も劣らぬ御饒舌なり。始の程は椽に腰掛けたりしが、いつか座敷に躙込みて、先方も容易に放さねば、此方も滅多に歸るとは云はざりしが、勇士も腹の空きたるは難忍く、飯ばかりは水のやうに無心もならねば、やがて一石と碁盤取出すを、やう〳〵預けて、後刻を契りて、今歸りたるなり。なほ委細の事も語りたけれど、無殘や下肚に據無くて、聲を出すべき氣力も竭きたり」助けたまへ、人々と、仰せらるゝ時お增は御膳を持出でたりけり。

忙しく箸取りたまひ敢ず、其人は何者ぞ、と旦那樣は問せ給ひぬ。其人こそ遠山霞叟とて、知られたる書家なり。浮世繪師にはあらざれども、現に魁新聞の挿繪を書きて、評判宜しく、其名は豫て我も知る人なり。此程より京橋の喧囂を避けて、隱家を彼所に求め、風月を友として氣樂に仕事し、家には婢一人、乳母一人、三歲になる男の子ありて、獨身にて暮せり。願の如く市塵を遯れて、閑居の朝夕心を養ふに足れりと雖も、

語ふ友の全くあらぬ侘しさには、弱り果てたる折からの好敵手とて、以來は入魂ならむことを望まれ、此方よりも之を御緣にと、これよりは往來すべきに約束せり。兄様にも此人は紹介せ申すべし。竹を割りたる如き心意氣、さりとは否なる所些も無く。此家業にして此人あり。實に美術家なる哉。惟へば此田舍に過ぎたるもの二つあり。曰く、遠山霞叟、曰く、笠原の環。

曰く、笠原民之助と言はずや、と旦那様は笑はせたまひぬ。奥様の御氣勢は、打背けたる我顏を覘ひたまふやうなるに、我は身を縮みて、民之助様の又しても無用言仰せらるゝを心苦く。

（九）

翌日更めて民之助樣は、此新しき相識の許に、小半日も遊びて歸らせたまひしが、其次の日の二時頃頭痛するばかりの日盛を、怪しく大きなる網代笠に凌ぎて、白の木綿縮の單衣に、支那綸子の茶の兵兒帶して、塗骨の長やかなる扇を携へ、頤に白髮斑の髯生したる人訪れて、民之助樣に御面會いたしたしと言入れたり。

改めて名を問ふまでもなし。此風躰こそ其人とは曉りしが、何方樣と申せしに、霞叟と御傳へ下さるべしとなり。

午睡あそばしたる民之助樣を起して、恁くと申せば、御出迎へあそばして書院に通させたまひ、やがて御酒も出て、我は御酌を勤めたり。

御二方ともに深くは召上らねども、御談話おもしろく、互に其にのみ實の入りて、霞叟といふ御方の御齡にも似ず若々しく、聲などもいと高く

て、四邊にも轟くやうなり。昨日今日の御馴染とは見えぬまでに、打解けて御物語ありけり。

御銚子の替りに立ちけるに、隣の御座敷の口に奥樣は佇みて在せり。我を小手招きたまひて、御客樣は、民之助樣の年寄られなば、と想はる御樣子の御方なり。頻なる笑聲に、如何に面白き御話のあるやらむ。且は畫家とは珍しく、如何なる御方かと、垣間見に來りたりと仰せられぬ。

はや御覽ありけるか。御人品の良き、元氣の御老人にて、民之助樣とは成程御合口と見えたり。さりとは御話上手にて、御側に居ても可笑さに、折々取外して笑ふと申せば、我家は弗と御來客のあらざるが、かゝる御客の折節はありて、御酒などの始りたるは、賑しくて最好きものなり。何も無けれど、屆かむほどは御饗應參らせよ。風呂もやがて沸かば、申上げて見よとて、奥樣は彼方へ行かせたまひぬ。

我も御座敷に出でゝ、間も無く旦那樣は入らせたまひぬ。初對面の御挨拶ありて、又姑く御盃は回りつ。醉はせらるゝほど御客樣は勢加きて、御話益機めば、旦那樣も興に入りたまひて、四人の一度に笑ふ聲は、物の崩るゝやうに御座敷を撼かせり。

係る暑き日中に、衿元も寛げられず、居住も頽さず、絶えず團扇の風を送りて、御給仕の役は難堪し。御座敷のおもしろく、氣の張らぬにしても箇許なれば、森嚴き席にては苦惱も幾多ならむと思ひぬ。わけて今日の溽暑は、額に入染む汗如雨露の水を打ちたるごとく、帶のまはり蒸れて、火をも卷きたるかと覺ゆるまでなり。

日の力もやう〳〵薄れて、吹入る風の少しく涼しうなりける比、御客樣は立たせたまひぬ。取散したる物匇々に片附けて、風呂に入りける心地は、女子には似氣なき語なれど、成佛せむとも謂ふべくや、肉も魂も爰に蕩るかと想はれたり。浴衣着更へて、生れかはりたる心になりて、恍

惚と畑の畔に涼みたりしに、又人の訪るゝ聲せり。勝手に單身忙しきお增は取次に出でざるにや、なほ訪ふ女の聲の聞えければ、急ぎて我は取次に出でけるに、乳母らしき年增の、三歳ばかりなる兒を抱きて、玄關の前に立ちたるが我を見るより慇懃に會釋して、遠山より參りたるもの。唯今は主の御馳走に預り、食酔ひまして失禮もいたせしなるべし、是は御目に懸けまするほどの品にはあらねど、と小形の杉折莎縄に紮げて、鄙びたる熨斗添へたるを差出せり。何にかあらむ名物と見えたり。

男の兒とは聞けど、目鼻立の優柔、女兒とも見るべく、色は透くばかりに白く、漆の如き髮を河童に置きて、長き奴も可愛く、淺黄の縁取りたる中形縮の袷に、有平縞の唐縮緬の兵兒帶して、右の手に稈笛を持ちたるが、少く人見識して、乳母の頬の陰に隱れむとしつゝ、横目に我を見たる可憐の風情は、人形に魂魄や入りたるか。好き御見かな。少し貸し

たまへ、と我を忘れて寄添ひ、差覗きて、怺しけるに、羞かみながらの笑顔は、恐く御父樣の筆も及ぶまじく、御名はと問へば、乳母の力夫と答へぬ。

此可愛獨見るは惜く、皆樣の御目に懸けて稱めさせたく、我手に抱取りて、乳母を引添へ、奧樣の御座敷へと急ぐ廊下にて、會ひまゐらせけるに、奧樣の御顏色卒に變りて、吮着かれたる如く御足は確と住り、凝眸になりて屹と御兒を打瞶りたまひしは、思ひも寄らず可恐きものを見たまひたる氣色なり。

さて我も忽ち心着きぬ。竹の音をも赤子の啼聲と駭き、淡紅の手帕をも產衣の寢姿と怖れたまひし奧樣なりけり。されば今正眞の生ける稚子を見させたまひては、御驚駭も御恐怖も然ぞ。不調法をしたりけり、と悔ゐても晩く、後には乳母の見る目もあれば、折角此まで連れたる御兒に、御辭一つ懸けさせられざるに、素氣なく引反しもならねば、心苦しかり

けれども、遠山樣の坊樣と申して、御傍へ寄せければ、奧樣も卒に御氣を變へさせ給ひけるか、御顏を和げたまひしも故とらしく、愛相したまふも、義理一遍のやうにて、假初にも御手は出したまはざりしなり。然こそと推して、好程にして退きけるを、誰しも一足は追ふべきに、奧樣は悄々と御座敷へ入らせ給ひければ、乳母の手前も面目無くて、此ままは戻し難く、幸ひ書院に連れて、民之助樣に見せ參らせければ、我に抱かせよと最愛がりたまひて、さま〲に𢰤したまへば、却りて恐れて、乳母の方を見つゝ泣顏になりけるを、賺して椽に出づる。實に好子なり、玉の如し。如何に見ても面影の親御に肖ず、年齡も御孫にて可きやうなるが、と民之助樣の呟きたまひけるに、乳母の答へける、御實子にはあらず。まことは弟御樣の遺紀念なり。世には弟の子の生きたるもあれば、兄の子の死せしもあり、と我は不圖思ひぬ。我ならでは思はざる事ならむ、と復思ひぬ。

（十）

今日は民之助樣の遠山へ行かるゝとありければ、くれ〲も、力夫樣を伴れらるゝやう、乳母への傳言を托みまゐらせて、何も玩具のあらざりければ、庭の花など彼此採集め、石菖盤に池の麥魚を抄入れ、干菓子の色々紙に盛りて、書院の次の間の涼しきに席を設けて待受けたり。

我は子煩惱といふほどにもあらねど、人並に稚兒は可愛く、抱きて尿など沃けらるゝも、強ちに厭はしとは思はざるなり。これまでに人の稚兒を抱きし數も知られず。其中には親の誇るほどにはあらぬもあり、抱くも愧しきほどなるもあり、衣服ばかり美きもあり、不器量にても愛らしきあれば、器量は美くても小憎きあり。多かる中にても此兒はと寐覺に思はるゝはあらざりしが、力夫樣ばかりは、片言も多くは聞かせず、最愛らしき態も無く、人懷しげにも見えざれど、得忘られず其面影の眼

前に在りて、母の親無きを慨しく、乳母には足らぬ慈愛を、ならば我手に掛けてと、思へば入らぬ世話も、可愛き餘なりけり。

然れども奥樣は幼きものを嫌はせたまふなり。昨日の御所爲にて、必ず然ぞと知りたれば、御座敷へ伴れて參ることはならず。それの成らざるのみか、御內に入れて、此に一所に居ると知り給はむだに、御心快くは在さゞるべし。また彼御兒を招ばむには、奥樣をば單身彼方に置きて、例の我身のみ任意に遊ぶになるべしなど、彼を思ひ、此を思はざりしにはあらねども、差當りての懷しさに堪へかねて、民之助樣に傳言は托み參らせしなり。

程無く、乳母は御兒を負ひて來にけり。今日は鍪盡を散したる縮の筒袖に着更へて、昨日の姿よりは成せて見ゆるも猶好く、僅一日の見識越も、有繫に稚氣の打解け易く、始の程は唯花を歡び、魚を樂みたりしが、後には乳母に誨へられて、姉樣と舌怠く呼びて、懷きぬ。

お増も出て來り、旦那樣も御越ありて、人形のやうなり、玉のやうなり、と口々に稱揚しけるも世辭にはあらず。此御兒は正しく人形とも玉とも謂ひつべく、世間に有觸れたる好き兒の儔にはあらざるなり。旦那樣は御思深く、何がな此御兒に進ずる物は無きかと仰せらるゝ。町ならば一走行きて玩具をも買ふべき便はあれども、と我も曩より其に當惑したりければ、種々思回しけれども、生憎にて、更に愛相とてもあらざりけれど、御兒は最快く、おとなしう遊びぬ。

折から風呂の立ちたれば、奥樣の御迹に伴れて入りて、戲れに化粧せしを、乳母は歡ぶこと限無く、歸りて父樣の御覽に入れむとて譟ぎけるに、いつか乳房に取付きたるまゝすや／＼と睡りければ、革蒲團に臥かして、小搔卷打着せ、乳母には物など食べさせ、お増を合手に置きて、我は奥樣の御機嫌伺ひに參りけるに、御兒はと訊ねさせたまへり。今方お寐りたりと申せば、其方は稚兒が好きかなと仰せられぬ。奥樣は御嫌ひにや。

煩くや思召すと申せば、嫌ふとにはあらねど、好ましうもあらぬなり。」
餘の兒ならば、知らず。あの御兒ばかりは、御嫌ひにても好かせたまふべし。左も右も私の美しう化粧したるを、一目なりとも見させたまへと冀ひければ、已む無く笑ひたまひて、御自慢とあらば拜見もすべしとて、進まぬ氣色と見たりければ、強ち勸めまゐらせざりしが、果して御出のあらざる間に、御兒は目覺して、竟に歸りけり。

翌日も必ず來たまへと言ひければ、御兒よりは乳母の喜ぶ色なるもをかしかりき。

恁て力夫樣は我をば好き友とし、此家をば好き遊所にして、雨は降りても、風は吹きても、姉樣と慕ひて、訪ひ來ぬ日とてもあらざりければ、我可憐は增すのみにて、言ふこと、爲すことの一より十まで、力樣ならざるはなきとて、ある時は奧樣の御不興なりけるまでなり。親御の身にしては幾許か嬉かるらむ、遠山樣の我をば賴しきものに思ひたまふとは、

實に大方ならず。更に民之助樣との御懇意は益〻深うなりぬ。我は日毎に御兒の傅して、奥樣の御合手して、民之助樣の事も忘るべきにあらず。忙しくも一つの身を三つに働くを、我はなか〳〵に苦しとも覺えぬのみか、奥樣御一人を守りし舊時に較べては、却りて氣の冴々しう、此忌はしき寂しき田舍も、今は捨難き故鄕となりけり。實に故鄕なる哉。我介抱を需ちたまふ病身の姉樣は在りて、此身の思召厚く、夫と契りたる人在りて、毎に御側に添ふ事の愜はぬ身ほど、寐覺の思深く、力樣といふ見ありて、我無くては靜肅う遊ばず、我も之無くては、起臥の樂みあらぬやうなり。此間にても有繫に例の御奉公は忘れず、竊に民之助樣と折々は談せけるが、やう〳〵少しは考得たる節もあれど、今は語難しと聞きしのみにて、我には彼黑き影は仍黑く存れるなりけり。八月も過ぎぬ。御兒の愛らしさは日增に捨難く、民之助樣と遠山樣との御交りはいとゞ親う、一家の如くにもなりけるに、旦那樣は如何なる御

意にてか、此御客をば隔てさせたまふ。まして奥樣は、御顏を合せ給ふも折節にて、其席に出させたまふは、いと〳〵希なり。こは然もあるべきなれども、日頃無聊に苦みたまふ旦那樣の、如何なれば係る友をば棄てむと爲たまふにや。交りを結びたまはむほどの人物にはあらずとて、係はあそばさるゝかとも想ひしが、遠山樣は必ず〳〵疎ませたまふべき御方にはあらざるなり。又折々の御口氣も賛めさせたまふやうなるに、爲され方を見れば、左右は此人に近かざらむと勗めさせたまふなり。此事の訝しくて、或時民之助樣に訊ねまゐらせけるに、我にも然は見ゆる。それこそは餘りに親う立入られなば、例の不思議を見尤められむの虞あればなれ。兄なる人は性來客を好み、別けて遠山の如き人をば喜ぶなれば、努々渠を疎むずるにはあらねども、臑に疵もつ故ならむかし。臑に疵有つ故なり、と獨合點して頷きたまひ、やがて太息吐きたまへるは、御思に餘る事のあるなるべし。さては彼不思議を見露したまひける

にぞあらむ。定めて御一家の大事、御兄樣なり御姉樣なり、いづれかの御恥をや曝したまふべきなれば、有繫に漏しかねたまふも有理とは覺ゆれど、外ならぬ此環に、今更裹ませたまふは御怨みなりと喞ちければ、其なれども、未だ見露したりといふにはあらず。但臆測に或是と、いささか思ふ所あるまでなれば、如何に其方なればとて輕々しうは打明し難し。今姑し待てとなり。待てとならば、御辭に背くべき我ならねど、唯我をば紿きたまふが最恨めしきと申せば、民之助樣は思懸けざる御顏にて、誰か其方を紿きたる。我には覺無しとありければ、我には目あり。奧樣の思惱みたまへるも、旦那樣の憂きを忍び給へるも、能く見ゆる目あり。ましてや寐覺に忘れやらぬ御方の事、昨日は御手の爪を鋏みたまひ、今日は御脚の蚊に螫されたまひし痕までも、やはか見遁さぬ我身にして、近頃左右に勝れたまはぬ御機嫌を心着かでやあるべき。曩日夜更くるまで御二階にて何やらむ御物語の長かりしが、其翌日より御心の煩

擾稍御顏に見えて、人無き折々御思案の躰も訝しう、なほ唯今の太息も、貴方には適しからず。彼此見るにつけて、旦那樣より御話のありしに疑無きを、然もあらぬやうに紿きたまふが御怨みなりと詰め參らせけるに、邪推なり。兄より何をか聞かむ。幾度か迫りしかど、竟に言はず。但向者に此家をば我に讓りて、やがて隱居の志とありしを、心得難く、推して問ひしに、近來切に世の中の樂からざれば、せめての慰藉に、諸國を旅して山水に游ばむとて、姉の事など諄々も頼まれし我驚愕は幾許なりけむ。その時も其後も、種々諫めけれど、執心固く、爲む術のあらざるに苦むなり、と聞くに我は胸潰れて、こは如何に成行くことならむと淺ましく、何日を限に旦那樣は此御家をば捨てたまはむ思召かと訊ねけるに、我だに應といはゞ、隨分明日にも旅立つべき氣色なれば、世の中の樂からぬ因あるべし。それ聞かぬ内は何事も承引くまじく、然やうに思立ちたる仔細悉う聞きての上にて、如何にともならむと挨拶したりしに、

兄も即答しかねて、談は今も其まゝになりたるなり。何事も其方に裹みたりしは、此返事聞きての後と控へしを、恨まれては迷惑。在様は如斯。されども姉には洩すまじきぞ。之に就けても、夫婦が間の秘密といふは容易ならざる事ならむと、いと怖れたまへる眼色にて、民之助様は我顔を瞶らせたまひけるに、何とも知れず我も怖ろしく覺えて、頓に身内の寒くなりぬ。

御不足もあらぬ御身にてありながら、言効も無う不幸なる方々かな、と漫に哀催して、打萎れたる我の手をば執りて、環と呼びたまひければ仰ぎけるに、少し笑みたまひて、兄は我等の事を知りたるぞと仰せらるゝ。如何にしてかと驚けば、お饒舌の奴ありて皆告げたり。誰かと我は益驚けば、いと落着きて民之助様は、我と我鼻を指したまひけり。其は信か。さりとては。

(十一)

殘暑を凉む夜も更けて、今や寢なむとする比、玄關側の出窓を打叩くは、誰かと民之助樣の見たまひけるに、遠山樣なり。もはや御寢なるべしとは想ひしが、明日を待たれぬ用事の出來たれば、心無く係る夜深に罷越したり、と氣毒がらせたまへば、御遠慮には及ばず、宵張りの不肖なりまづ御入り、と書院に御案内ありけるに、はや蚊帳釣りて見苦しきに手を鳴して人を喚びたまひければ、我は走行きて御用を伺ひぬ。此を片附けよ、と仰せらるゝ側より、遠山樣の制めたまひて、それまでも莫し、御隣の間にて足る事なり。一口御話して直に歸るなれば、と切に辭りたまひければ、隣室に燈を入れて椽の戶を啓放ちたるに、月あかあかと差昇りて、天は水の如く、薄寒き風ありて簾を動かし、見亘したる庭の風情、得ならぬまで艶に寂びたり。

磨硝子の行燈の下に、髯長き人の茶の紙布織の單衣を着たると、納戸の瀧縞の浴衣に白縮緬の兵兒帶したる人の眉目好きが相對ひたるに、我は細かき鳴海絞を着て、煙草盆を持出でたるを、此庭、此座敷、此人物、總て此まゝ畫なり、畫なりとて遠山様は團扇を拍ちたまへり。實に畫などにもあるやうに覺えたり。

不圖見れば、御膝の下に電報の封切りたるがあり。何か知らねど、御急用とは是なるべしと合點せり。遠山様は我に向ひて、貴方にも御迷惑願はではならぬ事出來てと仰せらるゝ時、民之助様の茶をとありければ、そのまゝにして先立ちぬ。軈て持ちて參りける比には、御話半にて、仔細は能くも解らねど、俄に御旅立などの御様子にて、御留守をば托ませ給ふらしく、民之助様は一々御心易う引承け給ひければ、明日は早くと思へば、今夜の内に彼此支度もあり。心急かるれば之にて御暇。環様には格別御世話御賴み申せば、數々申上ぐべきなれども、取急げば失禮の

み。委細は民之助樣より御聞取下されたく、京橋まで泊掛にて參るなれば、御用もあらば何なりとも承はるべし。留守中は力夫めを偏に御願ひ申すなり、と十二時の鳴るに驚き、やれ忙しや。さらば之にて御目に懸らず、皆樣へも宜しく。環樣白粉の御用は、と玄關に立ちて足は彼方を向きながら、なほ二つ三つ仇口吐きて、大勝にのさ〳〵と出行きたまひけり。

京橋へ御越とは、何御用にて、幾日ほどの御逗留にや、と迹にて御訊ね申せしに、新聞社より電報來り、紙面の改良に就きて相談ありとなり。熟議の上は挿畫の準備、體裁の指圖など、自身に參らでは成らざる用事あれば、如何しても五六日は費るべし。その留守中は萬端我を恃み、小兒の事は其方にと、近來の大役仰付けられたるなり。

我此身上ならずば、御兒は乳母ともに引取るべき法もあれ。奉公人の口より然る事願ひ出づべきにあらず。まして奥樣の故ありて小兒を好かせ

たまはぬをや。民之助様とても、申さば食客の何に彼に御遠慮もあるべく、遠山様も此御家の御懇意といふにあらねば、何事も表立ちては爲惡し。さて如何はせむと案じつゝ其夜は過しぬ。明くれば九時頃民之助様は御留守を見舞はむとて行きたまへり。遠山様そはや七時ばかりに立せたまひしなり。二時間程ありて歸らせたまひ、變る事は無けれども、主無き室は異なもの哉。侮りて鼠なども晝より暴廻り、座敷の内も侘しげに、總て恃寡き心地すれば、入らざる世話ながら、迫込みて屹と留守を爲むとも思ふと仰せられぬ。

假初にも一軒の所帶をば、心知りたりとて奉公人の手に預くること、思へば恃寡さの限なり。彼方の御爲を思はゞ、それに勝したる事あらじと申せば、遠山はあの無頓着なれば、他の思ふやうにもあるまじけれど、我には忍び難きまでに心元無くて、如何にかなるらむと、今宵一夜も懸念せらるれば、六時頃より行きて泊りて見むなど語りたまひき。

正午も過ぎ、二時にもなりぬ。毎も御兒の見ゆる頃なるに、沙汰無ければ案じられて、隣の七兵衞を遣はしけるに、御風邪の氣味にて御機嫌惡く、御熱もあれば、外出を愼みたりとて歸來れり。我は不取敢書院に參りて、御兒は云々となり。孱弱なる身には假初の事も假初ならず。やがて御越ありて容躰御覽じて、さるべくは醫者にも診せたまへ。何の心得も無き乳母などには暮々も打任せ難しと、少しく我の氣色ばみて見えけるに、民之助樣も動かされたまひけむ、さらば見て來むとて、直に出で給ひしが、程無く婢來りて、坊樣の御加減然せるにもあらざれば、必ず御憂慮あそばされなとありけるに、やう〱胸を安むじ、御座敷に還りて程無く、御宅よりの御使なりとて、お增は一通の手紙を持來れり。

見るに疑似も無く叔父の手跡なれば、我胸は先づ騷げり。曾て係る例のあらざりければ、何事や起りけむと、心も心ならず次の間に起ちて、披

見れば、明白に用は書かで、至急に話したき事あれば、一日の御暇を願ひて、明日の午前に來れとの文の面なり。

誰か急病などにや、と然りとは心を痛めしに、まづは可けれども、奉公の身を呼寄せて話したきとは、抑如何なる事ならむ。反復も然る事のあるべきやうは無きにと、不審は霽れねども、此由申して奥様まで願ひけるに、御暇の出でければ、返事に認めて、使の者に渡しぬ。其男も近きに住める輕子にて、知る顔の老夫なりけり。

思返しても〳〵疑惑の解けざる餘、僞手紙などにはあらぬかとも思ひしが、取出して視るほど、正しく叔父の字なり。使までも我家の使なり。彼此叔父よりの便に詐りあらずとせば、其用談の不審を奈何にせむ。

小石川までは程もあれば、朝も早目にと、其仕度したるに、八時過ぎても民之助樣は還りたまはず。今日にも限らねど、御朝寐なるべし。御目には懸りたく、御兒の事も聞きたく、姑待ちしに効無かりければ、途に

はあらねど立寄らばやと、車に乗りて出でたり。
やがて其門に着きぬ。かねて案内知りたれば、直に庭口の枝折戸を排くれば、萩の花の今を盛りと咲亂れて、露けき梢裊々に折重るをやう〳〵推分けつゝ飛石を傳ひて、椽側より小聲に訪るれば、さらりと障子を開きて、睡げなる顔差出したまふは民之助樣。今御手水果てゝ御髪を梳したまふなり。我の参りたるだにいと異しと思召さるゝに、御召縮緬の單衣に、銀鼠の縮緬の羽織着て、些は顔さへ粧りたるを、呆れ顔に打瞶めたまひて、何方の御孃樣の戸惑ひさせたまへると思ひしに、其方とは夢のやうなり。さりとは我等風情には勿躰なきまでの御艶麗。あはれ自から頭も低る心地す。其所は端近まづ〳〵此へ御通りあるべし。見る影も無き係る茅屋に、何と思召してか能うこその御出、忝し、有難しと、いつも〳〵御戯のみ。
人目もあらねば、此へと仰せらるゝ所に坐りて、力樣はと申せば、「今し

方乳母の伴れて其邊へ出たり。勝手には婢一人。必ず御心措無う、仰せられたき事もあらば仰せらるべし。此方より承はりたき事も數々あり。思ひも寄らぬ首尾は嬉しけれど、門に車の音せしやうなるは、何所へ行かむとてか。」それ申上げたくて參りたるなれど、懸念は御兒の事。昨夜の樣子は如何。熱は劇しう出でもせざるか。憤りたまはざるかなど問ひ參らせければ、夜中に啼騷ぎて、腹などの痛む氣色なりしが、丸藥飲ませ、介抱して、今朝は全く治りたり。されども稍元氣微く、平素のやうなる機嫌にはあらざれど、愆る例は往々あり、と乳母の言へば、後刻出直して、仍も思はしからずば、其時醫者に診すべし。然までは案ずることならず。思へば小兒は可憐きものかな。明暮其方を慕ひて、姉樣へ行かむと、只管強みて已まざりければ、伴れて出でしは其方の留守を尋ねけるか。實に此美しき姉樣を、戀慕ふは小兒のみかは、此にも大人の、と我姿をば故とらしう眴したまひて、今日の鮮さは格別なり。之を半時

も手放して、獨行は油斷のならざるに、危いかな、危いかな。誰に見せむとて何處へは行くぞ。恁くいふ夫たる者に、一言の挨拶はあるべきなり、と例の仇口まじりに。

仰せまでも無し。彼文取出して御覽に入れて、明日は歸らむほどにと申せば、民之助樣は其文姑見入りたまひて、此用事といふに心當あるかと仰せらるゝ。露ほども無ければ、昨夜も其のみ心に在りしが、と聞きたまひて、無しとは我への遠慮ならむ。我には屹と心當ありと、文をそのまゝ投付けたまひ、さてこそ一方ならぬ御嬌飾と見たるも、今解めて、是矣なり。

わざ〳〵の御立寄は辱けれど、その御吹聽と思へば毫も嬉しからず。さりながら其方の身にしては何よりの御目出度なり、と彼方向きて、人も無げに御髮を梳きたまふ。

御本心よりとも思はねど、捨置きかぬる御辭なり。何をば證據に、可有

も無き言をと、膝推進むれば、見向きも志給はで、何よりの御目出度なりとて、憎うも取合ひ給はず。然らば如何にせば、御疑ひは霽させたまふぞ。文の面も唯用事とばかり記したるを、その御廻氣は過ならずや。もしも然る事ならむには、直と辭りて立歸るべきに、如何に我身の不束なればとて、所夫は一人といふほどの心得はあり。此外に誰かは、と彼指環をば手のまゝ差出せば、實に白魚とや申すべき、玉とや申すべき、と排斥けたまふ。白魚にもあらず玉にもあらず、黄金の指環と申すものなり、と誨へまゐらするをも聞きたまはで、左右は云へど縁談と思はば、少しは心嬉志かるべし。それ〳〵胸の轟くが、此より衣越に能く見ゆるわと嘲りたまふ。衣越に他の胸をば見透したまふほどの御目に、嬉しきか、嬉しからぬかの見えたまはざることはあらじ、と申しも敢ず、いかにも嬉しきと見たりと仰せらるゝ。

嬉しければ心も急かれ、はや參るべし、と身仕度すれば、行くに嬉しき

奴の然ぞかし愁き歸來のほどはと、一つは拊たねばならぬ物の仰せられやうなり。日の暮れぬ内にと、御暇申して起てば、民之助樣も椽に出で見送らせたまひぬ。

唯一日にしても離別といふは侘しう、戶口まで來て見返りまゐらすれば、彼方も佇みて打瞶りてゐたまふに、行きかねて立戾り、ならば朝の間に歸らむと申せば、やう〳〵打笑みたまひて、何やら仰せられむとする時、門口に御兒の啼聲せり。折好く歸りたりとて、乳母を呼びたまひて、庭より此へとありければ、やがて入來りぬ。御兒は負はれて啼入りたりしが、立寄りて顏見すれば、俄に聲を歛めて縋着きぬ。姑と抱取りけるに、離れぬは離し難く、時は移ると思ひつゝ、椽に腰懸けて、飽かずも愛づる可憐き容の、今日は衰へて、順しく我胸に頭を推當て、眼色も懈げに、每よりは涎の夥しきを、乳母は事も無げに、風邪の氣味にて熱のあればと言へど、忽にはすまじき由を懇々も言置き、民之助樣にも囑みて、啼

きて背かぬをやう〳〵引放して出づれば、追ひかけて門口に御見を抱きたる乳母の姿は、車の走るほどに路の折れたるに隠れたりしが、久しありて彼方と見遣りけるに、例の毬の如き樹の立てる丘の上に、いと小さく顯れたり。

御見はなほ啼いてか。乳母は此車をば指すなるべし。

（十二）

御見の身の上、民之助様の事、さては叔父の用事など、巳に思回しつゝ、車は小石川なる我宿に着きぬ。晩かりしとて叔父叔母は爭ひて出迎へ、互に積る話の何より言ふべき方も無くて、唯珍しく、懐しき對面なりけり。

久々なれば二三日は優游と逗留したまへ。老者の鼻突合せ、何の思出も無く侘しう暮して、其方の來るを樂みたりと叔母は言ひぬ。叔父はほくほくと喜びて、然まで辭には出さゞれど、心の中は見ゆるやうなり。

彼方も無人にて、我ならでは用の足らざるもあるに、近來御親類の御客ありて、いとゞ忙しき間を、御文ゆゑに枉げて一日の御暇を願ひしなれば、此度は落着き難し。重ねて參る折も有るべく、御用といふが伺ひたきと言へば、奉公するからは然ほどの役に立たでは効無し。人の妻とな

りても、と叔父は獨領きて、其方は下谷の菅の維清殿を知るならむ、と卒に訊ねらるゝも異し。菅といふは叔父が世盛の頃の懇意にて、其方は今も繁昌にて、維清とは其所の長男、白耳義とやらに留學して、三年前に歸りし人なり。親たちの一度は我に許せし其人なり。之を知るかとは、民之助樣の御辭も憶出でられて、彼方なれば知れりと答へしに、知る理なりと、叔父と叔母とは微笑みて、かの菅なり。是非に其方を與れよとて、此程より切に逼りけるを、一度破れし事もありければ、今更と、好きやうに辭りしを、推返して人棧架くるは、何故にかと段々糺せしに、幾人の見合も皆氣に入らず、元の其方に越したるは無くて、懇望切なりと聞くが上に、親の賴も辭し難ければ、其方の意を聞かむとて、わざ〱今日は呼びたるなり。如何、格別異存はあるまじ、と叔父の心もはや其に定りたるも次手惡し。

折角なれども、今年中は御奉公申すべきを、奥樣に御約束もいたし、來

年は旦那樣の弟御樣に娶せむとて、御二方の種々仰せられければ、叔父とも相談の上にて、と申上げて置きたる事もあるに、其も棄て難く、此方も取極め難ければ、歸りて此由申上げての事にせむ、と聞きたる叔父は想ひの外なる氣色にて、叔母も嬉しからざる面色なりしが、强ひては勸めも爲たまはで、本意無げに物思はるゝは、御心の中にて然ぞや此身の放縱を憎みたまふなるべし。御心盡も我爲なるを、勿躰なくは思へども、此指環といふものあれば、今は如何にとも成難く、よし成らばとて彼方の棄てらるべきや。恁く御機嫌を損じては、何とやら居愁くて、歸去のほどを急ぎけるに、切に留められて、之をも背くは、重ね〳〵心苦しく、牽るゝまゝに翌日は皆連立ちて春木座を見物して、それより歸去もならねば、民之助樣も御見も待つらむ、と夢にも見つゝも其夜は泊りぬ。

せめては午後にとありけるを、我ながら素氣無く辭りて、小石川を出で

しは、三日目の朝八時頃なり。

土産の玩具取擴げて、御兒の喜ぶ顏も見たし。彼方には一日晩れたる辨疏も無くて、片時も早くと、心の急くほど車は緩く、疲るゝまでに身を揉みて、やう〳〵澁谷に來りけり。やがて御門に着きたる嬉しさ。足も空に勝手口より入れば、竈に獨火の燃えしきりて、皮剝きかけたる茄子の味噌漉打覆り、鍋鉉に襷の引紮み、あらぬ所に庖丁投出して、お增は見えず。御土產物の包をば部屋に差置きて、奧樣の御居間へ急げば、民之助樣の聲高に爭ひたまふが聞えたり。

何事の起りたるかと、卒に忍足して覗ひ寄れば、奧樣をば民之助樣の引据ゑたまひたる御側に、旦那樣は手を拱きてゐたまへり。いよ〳〵狀態の尋常ならぬに、進みかねたるを民之助樣の見付けたまひて、環、環、還りたるか、好き所にと、御聲の調子迫りて、環か、と奧樣は伸上りたまひぬ。我身に係る事などの起りたるやうなり。御二方の騷げるに引替へて、

旦那樣は深く思案に暮れたまへり。思懸けざる爲躰に氣を奪はれて、内には入りたれど、辭も出でず、うろ〳〵と眴したりしに、力夫は疱瘡に罹りたるぞ、と民之助樣の仰せられぬ。誰かは信とすべき。我は唯呆れたり。都合ありて昨夜は此方に泊りたるまゝなれば、今婢の告來りしに因りて、我も始めて知れり。乳母めは傳染を怖れて、今朝疾く遁失せしとなり。電報打ちしが遠山の歸來らむには間もあり。醫者の許へは人を遣はしたれど、家には小兒の獨身さぞや苦みつらむ、と民之助樣の御辭、聞きも敢ず、我は衝と起ちて走出でむとするを、飛蒐りて抱留めたまひ、何所へ行くぞ、と暴かに仰せらるゝ。力樣の唯一人にて、無殘や、不便や。放して行したまへ、と身を顫はせば、力夫が疱瘡は想ふに容易ならざる劇症にて、正しく近所に其患者のありけるより感染したるなり。其者は昨夜死せしと聞けり。可憐き兒の事なれば、不便にも思ふべし。看病もしたかるべし。然れども恐るべき病毒の傳染を奈何にせむ。其方の

命にも關るべきぞ、と民之助樣の諭したまへば、それも厭はじ、と我は泣出せり。御兒の劬るものも無くて、小さき枕に唯獨苦悶ゆる狀の、遠に胸に浮びたるなり。

力夫の爲に捨つべき其方の命か、と猶振拂はむとする我を抱緊めたまひ、耳の端に聲を潛めたまひて、我の命ならずや。我に任せたる身にはあらずや、と民之助樣は窘めたまへり。それは存じたれど、不便や、不便や、と我はいとゞしく泣きぬ。環とおほせらるゝ聲に、推當てたる袖の隙より見れば、奧樣の我傍に立たせたまふなり。奧樣、力樣は如何になりたまふらむ。哀と思ひたまへかし、と我は益涙に掻暮れたり。心遣ひすな。御兒の命は我ぞ助けむ。我身に換へて必ず助けむと、常の弱々しきには似させたまはで、いと頼しげに奧樣は仰せられけり。我は餘りに頼しく、餘りに嬉しく、神などの告げたまへるやうに覺えて、思はず御袖に取縋りて、助けさせたまへ、御兒の命をと叫べば、奧樣は戰く我手を握緊め

たまひて、憂世に住侘びたる此身の爲、二つには、長の月日の介抱受けたる其方の爲に、此看病は望む所ぞ。御兒の病の如何ばかり重くとも、我一念の力を以て、危殆はあらせじ、と思入りてぞ仰せられける。
恁くと聞かせられし民之助樣は御目に角立てゝ、御命に關ることゝ、先程より辭を盡しまゐらするに、御耳には入らざるか。揃ひも揃ひて、力夫が命に代らむと、我を爭ふ人たちの心底更に其意を得ず。まして姉樣は力夫に何ほどの義理ありてぞ。なるほど小兒も不便なれど、大事の夫を捨てたまはむとは、御了簡違ひなり。力夫と兄樣と孰をや重しと思召さるゝ。餘と申せば驚入りたる無分別。それにても御正氣か、と敦圉たまふ。
此御辭聞くに我は忽ち夢の覺めたる心地して、緣も因もあらぬ御兒の爲に、御身を忘れて看病ゐたまはむとの奥樣の御意のほどを始めて訝りたり。民之助樣は脣を震はしたまひ、不心得なる奥樣をば睨みてぞ在する

に、旦那様は嚮より俯きたまひたるまゝ、身動きもあそばされず、此悶着の如何に成行くらむをも管はせたまはぬやうなるこそ、猶訝しく、御兒の事も少し紛らされて、我胸は忽ち彼（秘密）を想出せり。奥様の御目は遽に露を置きたまひぬ。御聲もやう〳〵打顫ひて、此世に夫より重きはあらず。如何なる罪も悪事も夫ゆゑならば厭はじとばかりに、我は換難う重きものに念へるなり、と竟に堪へかねて、犇と御顔に袖を掩ひたまひぬ。

さばかりの夫を捨てゝ、力夫の爲に御身を危うせむとゐたまふにあらずや。無分別なり、亂心なりと、民之助様は居長高になりたまへば、奥様の、さらば夫の許可を得む時は、と泣く〳〵訊ねさせたまひけるに、生死は夫の胸一つ。兄様の行けとならば何所へなりとも、と言放ちたまひければ、奥様は涙ながらに旦那様の御側へ居去寄りたまひて、樣子は嚮より其にて聞かせたまへるならむ。願くは我身を遣はし給へかし。生先

長く、行末も頼しき幼兒を、今殺さむは餘りに口惜く、不便も一層なれば、我身をば兒の一命に換へさせたまへ。御兒の命に、かの御兒の命に此身を換へさせたまはずやと、御膝の邊に領伏して、潸々と泣きたまひぬ。旦那樣はなほも御辭は無くて、俯きたまへる横顏は、いつのほどにか最凄く蒼みわたりて在せり。

いとゞ重なる不思議の有樣に、民之助樣も我身も自を失ひて、御側に寄集り、片唾を嚥みて、御二方の爲むやうを眺むるばかりなり。

御許あるべし。御許のあるべき理なり。かねての覺悟、嬉しくも今日こそはと、御顏を振擧げて彼方を視たまふ奧樣の御目の赤く腫起りたるに、面影も稍變りて見えたまへり。

此時始めて旦那樣の御顏も重げに擧りぬ。實に其色は樹の影の映ひたるが如く、御眼中は無量の悲みと苦みとを漏して、見參らするだに可恐さの漫身に沁むやうにぞ覺えたりし。暫がほどは瞬きもあそばされで、奧

様の悩しげなるを打瞶らせたまひたりしが、忽ち御目を閉ぢたまひて、行け、と再び俯きたまへり。

膽を挫がれたる我等の二人は、實に爲む術を知らざりけり。好うぞ仰せられける、御名殘は盡きざれど、時後れなば効無からむ。民様にも環にも申置きたき事は山ほどなれど、今は縷々言ひてあるべき時ならず、何事も後よりとて、奥様は起ちたまひぬ。

御顔は滋き涙に汚れさせたまへど、今は早や泣かせ給ふにあらず、御覺悟の氣色、常の萎れさせ給へるに替へて、さりとは屹と落着きて見えたまへり。されども我の悲しさは、力の限御手に縋りて、貴方の御越あるべき所にあらず、參るならば私こそ。いかに旦那様の御許はありけるとも、環が此は放し參らせじ。見す〳〵死にゝ行かせたまふなり、と身を悶えて奮り參らすれば、其志は忘れじ、と突放したまふを又取付きて、いよ〳〵思止らせ給はずば、私も御供にと、彼方を差措きて驅出せば、

又民之助様に抱留められ、旦那様には呼住めらるゝ彼此僅の隙に、奥様は御座敷を擦脱けたまひぬ。其と見るより民之助様は我を打棄てゝ追ひかけ、引戻したまひけるを、捨置け、と旦那様の御意あるは、正しく殺せなりと、民之助様は呆惑ひて、石の如く立ちたまへり。我は唯可恐くて、胸騒ぎ、身は顫ひつゝ、犇と奥様の御袖に縋りたり。

旦那様は苦々しげに、深き仔細のある事なり。止むるは渠の爲ならねば、捨置け、捨置け、と頭を掉りたまひぬ。如何なる仔細のあるか知らねど、怪しからぬ事ならずや。捨置きて姉様の御身に萬一の事などあらば、と民之助様は御息も迫りつゝ。

如何にともなれかし。我も人なり、渠も我妻なり。絕つは苦き恩愛の覊を切りて、行けと許し、止むるなといふには、深き仔細のありぞと知るべし。其所放さぬか。はや行け、と旦那様は御目を瞑りて觀念したまへば、後れじと奥様は御庭へ走出でたまへり。

遣らじと我等の逐ひ参らする後より、駈着けたまへる旦那様は、民之助様を支へ給ひて、環も待てよ。言ふべき事あり。仔細知らずば驚愕は然もあらむ。遣るが慈悲ぞ、と御涙一滴。奥様は轉ぶが如く畠の方へ馳行きたまひしが、はや切戸口より出でさせたまへるなるべし。

我は胸迫りて椽に僵れたり。民之助様は御聲も震ひて、慈悲か無慈悲か知らざれども、十に九までは命も危し。さては殺したまはむ御意かと詰寄せたまへば、不便なれども其意なりと旦那様は涙を嚙みたまひぬ。怪しとも、不思議とも、悲しとも、可恐とも、旦那様は奥様を殺したまはむ御意とは。さては奥様も御自害覺悟にて行かせたまひしか。行きたまふ御方の氣強さも、遣りたまふ御方の殘忍も、作物語、狂言などには見し例を、今目前なる悲哀に、我は幾と我身の在るをも覺えず。有繫に民之助様は纔に御心を鎮めたまひて、疾く〳〵其仔細聞かせたまへと責めたまへば、語るは易けれど、渠の生ける間は人には言はじ語らじと契ひ

たれば、今暫くは明き難し。やがて渠の死なむ後にと、旦那様は卒に涙に咽ばせたまひぬ。

やがて渠が死なむ後にとは、聞くにも堪へず、聲を揚げて泣伏せば、民之助様も今は打萎れて、連りに鼻を啜りたまへり。寔や頓て、悲くも頓て、美しき御寢顏も冷に、呼び參らせても御答無く、動かし參らせても効あらぬ御枕上に、我等は再び之にも勝らむ思して、歎き悲むべきを坐に想へば、然あらぬ間に如何ともして御命助け參らせたく、遄る心は物狂しう、我を忘れて彼方に取縋り、奧樣に如何なる御過のありてかは知らざれども、御見殺とは過なり。とても亡きものに思召されて、御命は此身に賜わかし。深山の奧、荒野の末、人も覗かぬ谷間の底へも御伴申して、此世には隱し參らせむ、せめては生し參らせて、佛の御傍にも棄てさせたまへ。是非に御命ばかりは——又何の世にか廻合ふべき便もあらぬ、假の身の刹那の御命ばかりは恐させたまへ、と泣いつ喚いつ嘆き

參らせけるに、旦那樣は彌增す御淚の隙より、渠が爲には千部の經より、夐に勝れる哀願なれども、渠は所詮存へて樂しからざる不幸の身なり。死ぬるぞ渠が所望にして、殺すはなか〳〵我情ぞ。我の命を宥むとても、渠は自ら死すべきなり。恁くまでに渠が命を他の愛む如く、渠は只管其身の亡からむを急ぐなり。然れど渠は努々心の狂ひたるにあらず。又我とても鬼畜にあらねば、誰か生けるを喜び、死ぬるを悲まざらむ。我等の夫婦は人の喜びを悲み、人の悲みを喜ぶべき憂目に遭ひて、始めて滅すべき業因の深き身上なれば、今は奥が事を悲むな。渠の身を最憐しと思はゞ、片時も渠が最期の速ならむことを、神にも佛にも賴みてとらせよ。酒一盃欲し。此に何ぞ在るかと訊ねさせたまひぬ。奥樣御飲殘のヱルモツトと申せば、陰ながら別の盃、其持てと仰せらるゝも更に御淚なり。

目も眩れ、心も消えて、起つも力無く、やう〳〵這寄りて茶棚を啓れば、

夜毎に御手觸れし壜の其まゝなるにも泣かれて、是も御紀念となるべき猪口そなほ悲しく、涙ながらの御酌を泣く〳〵承けたまひて、引懸け引懸け凄じきばかりに飲みたまへり。壜には滴も殘らずなりけれども、御顏色は枯骨の如くなほも亂るゝ御胸を持餘したまひて、手枕に仆れたまひけるばかりは、醉ひたまへるにも似たりけり。

彼方の隅には旦那樣の臥したまひ、此方には民之助樣の投首してゐたまへり。我は途方に暮れつゝ、如何にせば可からむ。此間も奥樣の御身上心許なしと騷げば、嬉しくも、御見舞に伴れむとて、民之助樣は起ちたまひぬ。

御命半は取留めたる心地して、御後に跟きて玄關を出でたり。男の脚志て急ぎたまへば、片息になりて隨ひ參らすれど、屢後れ勝なるが掊かしさに、立戻りて、我手を牽きて伴れたまふ。中にも釣らるゝ想ひにて、其苦艱は追ひ參らするより負に勝れり。されども魂も憧れ出づべく心の

逸れば、緊と握りたまへる御手を便に、一念に急ぎたり。途中にて民之助様の仰せられけるは、我等の日頃心に繋けたる不思議も、此四五日の内には顯然たるべし。さりながら我等の所願は竟に協ふまじきぞ。姉の命は亡きものに極りたり、と涙ぐみ給ひぬ。頼みにしたりし彼方さへ今は係る事言出し給ふに、悲しさ、悔しさ遣る方も無く、如何なれば貴方までが見殺にしたまふかと泣けば、情は我にもあれど、姉が自ら死なむの意止め難きまでに切なるを如何にせむ。我が力は及ばざるなり。佛の力、神の力、それとても得及ばじ。かくまでに思迫めたる姉の心の苦惱を思へば、我は我身を劍になして、唯一撃に其命をば絶たむと願ふばかりぞ。それをこそ姉はなか〳〵に喜ぶべきなれ、と御聲も斷續なり。

我も奥様の御覺悟のほどは知れり。故ありて我から死なむと望みつゝ、愁ひに生かされてあらむは、いとゞ悲しかるべきを思はざるにあらねど

も、それは見ぬ人にこそ言ふべきなれ。辱くも姉樣と御馴染も尋常ならぬ奥樣の、たとへば御最期の後にて儚くと聞知らむとも、其思は幾多なるべきに、目前御吭に刃を擬てさせたまふも同じき今はの際に、如何に惜がらせたまはぬ御命なればとて、之を餘所見のなるべきや。昔より死ぬべきを思替へて、尼法師ともなりし例數あり。せめては其樣にもと申せば、それは心の底に命の惜き人、或は死なむにも死なれぬ人の爲せし業なり。姉も命の惜きならば、かうまでは有らせじ。助くる方は種々あり。兄をば我の言宥めて、女の命二つ三つは片手に乞ひ受けても見すべし。姉が覺悟の躰を見ずや。大方の事にては、あれまでの觀念はなるまじきなり。兄も思慮無き人にあらねば、など箇許の大事を當座の分別に任せむや。今は是までの因縁と諦むる外には無し。天の爲せる業はと、涙御手に餘りて袂を沾し給へり。我は今更返さむ辭も無くて、胸は彌亂れつゝ、やがて其門に着きにけり。民之助樣も心強うは仰せられけれど、

有繋に御身上は案じられけむ、無事の御一目や急がれて、枝折戸突啓けて庭に入りたまひぬ。風冷に萩の茂りを渡りて、花は未だ散りやらず。はや奥様は御兒の側に打偃れて、呼吸も絶々になりて在すらむやうに、想はれたりしに、姉様、と外より民之助様の呼びたまひければ、御答あるに嬉しく障子を啓れば、枕屏風の端に恙も無くて在したり。御座敷へ入らむとするを、固く止めたまひて、恁る所には入りたまふな。恁る所に長居はまたまふな。御心に繋けて好うこそ御見舞ありけるを、いかで素氣無う逐ひまゐらすにはあらねども、御身に不慮もあらばと、それの氣遣はしさにと、御語も明爽に、惡怯たまはぬ氣色は、なか〱平生にも勝りたり。

我等は椽に推並びて、空しく御姿を眺めつゝ、涙を催すのみなり。奥様は重ねて、環、旦那様は如何に在する、と仰せられし時ぞ、御聲は少しく曇りし。御心の憂さに堪へかねさせたまひて、強ひて召上りし御酒も醉

とならず、御居間に獨り悶臥したまふなりと申せば、御介抱を賴むぞよ。家の事も萬般我に代りて好くせよかし。民之助樣も環をば我妹と思召して、末長う便となりて遣はし給へ、と之を御意には御遺言なるべし。旦那樣の御介抱、又御家の事、私風情の一日も務るべきにあらねば、御兒の看病は其道の者を傭ひて爲すべければ、奧樣は彼方と御一所に此より御歸去あるべしと諫めけるに、これこそ我身の願ひにて、旦那樣よりも御許はありけるなれ。さぞや御一人にて侘しう慰めかねて在すらむに、疾く還りて、我に代りて御介抱申上げよ。こゝに長居は危し。民之助樣、はや〳〵環を伴れ給へとありければ、彼方は力無げに大息吐きたまひて、今は何とも申さじ。唯このまゝに立歸るべく。御覺悟の動かしがたきやうなり、と呟きつゝ起ちたまひぬ。

御兒の容躰も見たく、恁くと申せば、奧樣は徐に屏風を排除けたまへり。氷嚢を頭にして、纔に交睫める面影は、其とも覺えず變り果てゝ、面を

蔽へる發疹は花の蕾を散せる如し。彼方を見るにも、此方を見るにも、唯胸碎け、涙の出づるのみにて、我は幾と性躰を失ひつ。民之助様に扶けられつゝ、道すがら涙の乾く隙も無く、泣疲れ、悲み過して、還ると齊しく、得堪へず竟に打僵れぬ。我身にしても箇許の物思なり。旦那様は奥様はと、腸も絞らるゝばかりなるさへあるに、御兒の寢顔の紅斑々なる幻影も、悲歎の數を添へて、夜に入るほどに頭重く、渾身の疲勞いとゞ勝りて、宵より部屋に臥ゐたりしに、お増は繁々御座敷へ通ひぬ。旦那様は獨り御酒を召上りて在するとなり。民之助様は折々御見舞に來たまひけるが、其人とも見えず耄けたまひて、多くは物も仰せられで、大息をのみ泄したまへり。枕紙も冷く、打濕りたる燈火の下に、此夜はいとゞ心細く更けたりき。

明くる朝も心地勝れず、頭の重さにも換難く、御安否の氣遣はれて、竊に拔出でゝ御見舞に參りぬ。旦那樣も民之助樣も未だ御目覺のあらぬ程なり。

落葉を送る風肌寒く、天薄曇り、田面の景色寂増りて、其所此所に殘る蟲の音微に、露けき畔道の獨傳ひも心細く、自から無常の身に沁みて、人の死ぬべき日和とぞ覺えし。

かの枝折戸は鎖したれば、格子より入りぬ。御座敷には御見の啼き悶ゆる聲頻りて、奧樣の優しう賺したまひつゝ、介抱志たまへるが聞ゆ。襖推啓けば、環か、と與覺め顏に見たまひて、好う來たと云ひたけれど、はや歸れかし。御見の事は案ずるに及ばず、我身に換へても仔細はあらせじ、と御辭は辛けれども、昨日にも變らせられず恙無き躰に、我は先

づ胸を撫でたり。
その（我が身に換へても）が申さむやう無く氣遣はしさにと申せば、然までに此身を念ふかとの御意なり。おろかの御事や。陰ながらの愁歎のほどは尙ほ幾許と思召すらむ。このまゝ永き御別ともなりなむやうに悲しくてと申せば、まこと此身を思ふとならば、共々に我願ひをば愜へさせよ。我一生の願ひを愜へさせずやとありければ、其とは知りたれど、御願ひとはと怪しめば、この御兒の命を助けむ事なり。我は人の命一つ助けずば、在るにもあられぬ身の上なれば、かく夏虫の火に入る如きをも、更に恐れず、悲まず。いつかは一度此身を蒸くにあらざれば、我心の愁ひは消えざるなり。平生其方が種々の心盡も効無かりし例の憂思ぞ、やう／＼今や霽るべき時は來にける。
我は玆に御兒の疱瘡の膿を吮ひて、其毒に腸の壞れて苦まむは、旦那樣と花の陰に御盃獻酬して、其方が琴の調に慰まむより、良に心も長閑な

るべきぞや。三年ばかり以來に、昨日今日のやうにぞ嬉しき日とてはあらざりし。さりとも知らで、氣遣はしとは何事ぞ。はた其涙は何の意ぞ。恁くまで事を分けて聞かせしからは、はや其方の疑團も釋けて、共々に嬉しかるべし。さては何か秋毫の氣遣ひもあるまじきに、二つ無き身をわざと危うして、この可恐き病毒の邊に立寄らむこと、此後は屹と愼むべし。改めて染々と言ふべきことはあれども、今は其時ならねば、やがて我より沙汰せむまでは、忘れても此の垣の外にも立つまじきぞ。」はや歸れ、行かぬかと、我をば閾の外に推遣りて、はたと襖を立てたまひぬ。御兒の憤る聲の聞ゆるのみ。

我は暫其所に泣伏したりしが、さらば御旨に從ひ、御沙汰を待つべければ、貴方も御身を大切に、必ず輕譟のこと遊ばされな。御看病したまふとも、御用意だに深からば、病毒の感染らむに限れるにしもあらざれば、旦那樣の御歎き、又數ならねども環が悲みをも思ひ給ひて、旋て力樣も

恙無う、貴方の御無事は猶の事、その命をば助けさせたまへるに因りて、御胸の雲も晴亘り、何方も御機嫌好う、目出たう御祝の莚に、今日の涙を昔語に笑はせたまはむやう、それのみを環の御願ひなり。我も御辭を守りて、御沙汰のあらむまでは懐しき御顔も見ずに忍ばむほどに、奥様も我願ひをば可かせたまひて、反復も御身を輕々しうゑたまふな。さらば環は今御暇を申すぞかし、と襖越に聞ゆれば、御答は無くて、歔欷に泣きたまへり。心強くも立歸りて、具に恁くと御二方の御耳に入れけるに、いづれも涙に暮れ給ひて、頻繁懐しき顔を見せなば、奥が覺悟も亂れて、いとゞ苦しき思ひをやせむ。唯此上は寄らず觸らず、在るまゝに任せて、左右は渠よりの沙汰を待つべし。聞く程物思の種なり。此後は奥が事言出すなと、旦那樣は今日も御盃を放したまはざるなり。

民之助樣も種々仰せられければ、御見舞の事は辛うじて思止りけれども、

忘るゝ暇は無くて、今や〳〵と御沙汰は待たるゝも、其折は其なるべし、と思へば猶悲しく、かくある今も、とあらむ行末も實に頼無く、果敢なさの限なりけり。

此日は三度ばかりもお増して御用を聞かせぬ。其度歸るを待構へて御樣子を訊ねしに、別條もあらで夜に入りけり。晝のほどだに御身の案じられて紛るゝよしもあらざりければ、いとゞ胸騷ぎて身の置所も無く、窓啓けて其方の空を眺めたりしに、宵闇の物凄く、疎なる星の林を風の誘ひて、眼前に光の飛びしも、折からの氣に繫り、お増を頼みて、御見舞に遣れば、劾々しう提灯振照して出でぬ。なほも見遣りけるに、したゝかなる闇の中を燈影のほら〳〵と覺束なくも漂ひつゝ、幽になりゆく心細さ實に謂はむ方無し。星は亦一つ飛びぬ。身毛竪ちて獨此闇に面を向くべき心地もせず、やがて提灯の見えずなりけるを機に、窓鎖して、部屋に入りけり。良有りてお増は跫音も著皇からず歸來れり。我胸は稍安

むじたり。果して御變りもあらざりしなり。
悲き可恐き夢のみ種々見續けて、夜は明けたり。お增は御用の品々調へて參りしが、未だ御目覺はあらざりしとなり。午前又參りて、御無事なる御顏見たりとて、共々に喜合へり。暮方の御見舞には、嬉き〳〵音信を齎したり。御兒の命今は我物なり。はや氣遣ひはあらずと。我は手の舞ひ、足の所踏も覺えず、御居間へ走行きて、云々と御披露申せば、御二方は打驚きたまひて、御兒の命助りたりとや、と互に御目を見合せたまひぬ。
姉樣の御看病思遣らるゝ、と民之助樣はほろ〳〵と泣きたまへば、奥が樣子は、と旦那樣は息をも出したまはず。それは聞遣して、勝手に駈戻りて訊ぬれば、お增も御兒の事の餘に思寄らず嬉しかりしに、婢より其事聞くや否や飛還りし仕合とて、狼狽きつゝ又走行けり。
行着くらむと覺しき頃、氣立ましき跫音の玄關を驚かせり。我は忽ち胸

潰れ、御二方の御顔色は頓に變りつ。我立出づる遑もあらせず、そこら犇して御居間に躍込みたるは、待ちに待ちたりし遠山樣なり。申譯無し。大事起りたりと、絶々なる呼吸を勵して、力兒に代りて奥樣の臥れたまへり。渠が病をや引受けたまひけむ、御熱氣劇甚しく、唯今立歸りて何事も存ぜねば、驚入るの外無し。はや〱誰か御人を、其間の御介抱はと、飛ぶが如くに驅出でたまひぬ。民之助樣は驚破と起ちたまへば、我も帶引緊めて續きしが、彼方えはや出でたまへり。在合ふ雪踏穿きて御迹を追ひかけたり。

入日の名殘も消え〱に、例の毬の木立の邊り見分かぬ黄昏の空、頭の上を鴉のいと悲しげに亂啼く。

御兒の死ぬべかりし枕の迹に、今は奥樣の熱を病みて臥したまへり。我身に換へてと仰せられし言の空しからで、終に御命を讓りたまひけるかと、悲しき涙は既盡せし我目より、更に御健氣に泣かるゝ涙の出づるこ

と限無し。

時を移さず奥樣は御居宅に引取られたり。御看病は我手一つにて、いでや思ふまゝ御奉公のなることとの、せめては嬉しき我心の味氣無さよ。惟へば打萎れたまへる御前に、琴掻鳴し、或は御物語など勸め參らせても、慰みたまはざりし憂さも辛さも、恁くまでにはあらざりけり。如何ばかり物思ひたまはむとも、唯生きて在せかし。曇の全く霽れたる御笑顔を見むとも、そのまゝ長き御別は、何にか爲む。御兒の病に比べては、いと輕き此御症なり。我に彼方を思ふ誠だにあらば、など箇許の御症に御命捨てさせ參らすべきやなど思續けつゝ、瘦細りたまへる窶顏を眺めがちに御藥の用意してゐたり。

燈火といと明く、半死にたる如き御顏を照せり。每は御眉の邊に叢りし例の曇の痕も留めず、風の竹に驚きたまひし比の御俤よりは、御看病に疲れ、熱に惱まされたまへる今宵こそ、かへりて目易う穩和に見えたま

ふなれ、と打目戍りたりけるに、御夢の中に微笑みたまひ、やがて二聲ばかり呻きて、ふと御目を開きたまひて、御兒は如何にや、と先づ訊ねさせたまひぬ。御蔭にてはや些も憂危はあらずと申せば、快げに打笑みたまひ、良有りて、環と呼びたまへり。御枕に近く進めば、其方には長長苦勞懸けたるを、いつのほどにか其報はせむと思ひしに、やう〳〵今や時到れり。民之助樣に添はせて、此笠原の家を讓らむほどに、末長う睦じう暮したまへ。我の此世に在らむも二三日の間ぞと、御聲も濕まざりけり。

果敢無き事を仰せられな。御兒の命を助けさせ給ひし上は、千萬年も存へさせたまふべき御身上となりけるにはあらずや。御病も輕ければ、十分に御療養あそばして、一日も早く御全快を急がせたまへ。御兒も無事に、奧樣も御健に、旦那樣の御機嫌も好う、我身も民之助樣に、と思はず言未して口を噤めば、何とかあるべきに奧樣の御辭も無し。竊に差覗

けば、御寐息のすや／＼と聞えたり。

さりとは御覺悟なりける哉。初度は固く醫者の診察をば拒みたまひしを、人々種々に口說きて、纔に承引たまひけれども、御藥とては露ほども嘗めさせたまはず。我は絶えず責めつ、歎きつ、勸め參らせけるに、左にも右にも肯きたまはで、餘に申せば、果は打腹立ちたまひて、我心に悖らば此には置かじ、とまでなるに困じて、御二方に訴へければ、其方の好きに計ひくれよと、はや亡きものに諦めさせたまへるなり。

斯くて御病は募るのみにて、益衰行きたまひぬ。實に御命は風前の燈火、火上の氷の今をも知れず見えさせたまへり。然れども御氣は明かにて、折々悲しき事など仰せられぬ。旦那樣も民之助樣も立替り入替りてぞ御見舞に入らせられける。いと靜に寐入らせたまへるをば、御息のはや絶えたるか、と心驚かせしも幾度なりけん。唯弱りに弱りたまひつゝ、今日は其日より三日になりぬ。

邪慳の旦那樣と、氣強き民之助樣と、効無き環とは、打寄りて奧樣をば御見殺に爲るなりけり。

（十四）

九月二十四日の夜なりき。御枕頭には旦那樣、民之助樣と我身とは御側に居並びて、御臨終の間近なるを危みつゝ、爲む術も無く御氣色を目成りたり。

奥樣は息も怠げに旦那樣を呼びたまひて、淺ましき女子の心より慮はぬ過失を爲出し、御不興受くる身となりてより、憂き事悲しき事の數々胸に餘りて、三年が間片時も穩き思無く、さりとは死ぬるに增したる苦艱も、恨みは人に在らず、皆天罰と、それは身に責めて堪へも忍びもしたりしが、唯一つ是のみに心苦しかりしは、御不興の後よりもいとゞ最愛き、最愛き貴方と云ふものゝありながら、今はの際までも染々御顏を見ること稱はず、宿無き犬猫の如く殪れて、然ぞや敢無からむ最期の口惜さに、効無き命を存へしも、何日は罪を贖ひ、御不興釋されて、御手づか

ら藥の一雫、露ほどの御情をも受けて、せめては御別だに夫婦らしう、と唯管賴めし念達させて、恁く御側にて往生すること、なか／＼御佛の導きたまはむよりも辱く、今日のあらむばかりにこそ三年の憂愁は忍びしがと、辛くも御枕を擧げて、旦那樣の御姿を飽かずも眺入りたまひて、竟に滂々と泣きたまひぬ。此時いづれに出づる聲も無くて、燈火のみぞ耿々と。

奥樣は直に疲臥し給ひて、御憎惡の深かりし此身も、人の命を救ひて、今は此世を去るべきなり。かの過失も、かの罪も此に愛でゝ釋させたまへや、釋すと御口より唯一言、それ承はりて、はや死なむと、御手を差出して、彼方の御膝の邊りを懷しげに搜らせ給へり。旦那樣は辭も塞りたまひ、飲めども嚥めども餘る涙は、時雨の如く御膝に灑ぐを、奥樣は見付けさせたまひて、辱き御涙や。泣かせたまふは我ゆゑにか。然れども一言は釋すと聞かせたまへと希ひたまへば、釋す。心易う死ねと、泣

く泣く打出したまひぬ。此御一言よりは其御涙こそ、實に幾千萬の御赦なるべきなれ。

奥様は重ねて、彼方の御手を枕に死なむと望みたまひぬ。皆泣きつ。やをら背より抱へさせたまひければ、世にも嬉しげなる御顔を彼方の御胸に靠せたまひつゝ、環も歡べ、と打笑ませたまひぬ。目も當てられず我は涙に打俯して、やう〳〵面を擧げし時は、旦那様の御手に縋りつゝ、奥様は御目を塞ぎて在せり。こは什麽にと進寄れば、はや息は絶えたり、と旦那様は御顔を背けさせたまひぬ。

奥様は歿りたまへり。奥様は歿りたまへり。旦那様に抱かれたまひ、靠れたまひて、離れじと御身を一躰にして。されども歿りたまへるなりけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊

亡からむ後にてと、御遺言のありける例の秘密を、旦那樣は渠が罪の滅せむ爲にもとて、御亡骸の枕邊にて、其夜我等に語らせたまへり。餘人ならぬ奥樣の御事、善き御噂ならねば、且具に泄すに忍びず。笠原家の鉅萬の富をば、旦那樣に襲せまほしき御心の迷より、御家督なりし兄樣の御遺子をば陰かに毒害し參らせしを、その乳母の獨知りて、病死の際に旦那樣に密告せしより、然しも心ならぬ御不和は起りしなり。三年の御憂目と、今は我子の力夫を助けたまひし御覺悟と、御臨終の御愴惻など憶ふにつけて、いよ〳〵御過失の始末胸にも浮べ難くなむ。此事胸に浮ぶれば、忽ち奥樣の怨しげなる御顏の顯はるゝを奈何にせむ。然れば爰に筆を止めつ。又重ねては此事胸にも浮べまじきなり。

明治……年……月……日　　笠原環誌

（二十八年六月）

鷹料理（四の緒）

今は昔、伊太利フロオレンスに、系圖も正しく、富裕なる家に生れて、容清秀に、心の都雄は更なり、弱年ながら才藝備りて、フェデリゴぞ由々しき武士と沙汰せし。

女の方より言寄るも許多なりけるを、我からは人の妻なるモンナ、ギオバンナに懸想し、假初にも其姿の見まほしくて、夜遊の莚、馬上試合、花に托せ、月を名として、左右に此君を招き、念ひは餘所ながら露して、端的に其とは言はねど、種々の贈物には籠むる心を、知らぬ顔に女は操正しく、仇めく辭も懸けざりけるを、男なほ慕ひて、慍く無情も怨みは他に在らず、花咲くべき梢も風寒く、所詮は我誠の至らぬゆゑなり。此上は命を捐つるに覺悟して、身の行末は念はず、ギオバンナが爲なら

はと、あるほどの財を盡し、思ひを形にして運びければ、さしもの身代夢の間に傾き、昨日の榮華、今日の身になりて、フロオレンスの住居も成難く、密に地所賣殘したる田舍に立退き、住みも慣はぬ茅屋に、伊達の名殘は一羽の鷹あり。是世に愛でたき逸物なれば、身に換へて離さず、耕す間を山野に狩暮して、是のみぞ實に昔ながらの娛樂なりける。然れども忘られぬはギオバンナが事なり。家富めりし日は心盡しを見すべき因もありしに、それさへ空に礫を打ちければ、今將霜の案山子、朽ちぬる袖は賤女も牽くまじきに、此戀なほ慨ふべしとも想はれねば、在るに効無き身を歎きつゝ、有繫に命もあらばと空頼めの、果敢無き月日を送りしに、程なく其人は夫に先だゝれて、頓に夢の世を觀じ、未來は遠くもあらざれば、跡追行かむと思立ちしが、懷しき其形は消えても、魂は此土に遺る男の兒あり。惜からぬ身も之に慰められて故鄕に歸り、一生樂隱居の門を鎖し、庭には亡夫が好めりし花ども種ゑて、垣の外へは側

目も轉らず、心を墨染に行清してけり。

此程より愛兒の心地例ならぬを驚き、枕を撫でゝ之を問へば、一件の所望あり。それだに稱はゞ病は忘れむと云ふ。母は打笑ひて、亡父の財を遺されたるも、其方の最愛しければなり。金銀にて逮ばむほどの事ならば、よし明日は人の門に立たむとも何か苦しかるべき。その所望聞かせよとありければ、子は嬉しく、曩日山に狩せしに、勝れて良鷹ぞ持てる人に會へりし、後には物言交し、折々其家にも遊びて、見るほど彌増に其鳥の欲けれども、持主亦之を愛むこと身に越えたり。如何にしても獲てむと、それのみ忘れかねて、世の中も果敢無しと訴へければ、母は思懸けず、然りとは易き事かな。それは何處の如何なる人ぞと訊ねけるに、この村端の棟の木の下に微く暮して、フェデリゴといふ優しき人なりと答へぬ。

母は愕きて、少時兒の顏打瞶りたる胸の中には、實にも我ゆゑに尾羽打

枯して、葎の宿に住侘ぶと聞きしフェデリゴは、此處にこそ居たりけれ。然あらぬ人ならば、子にも讓るまじき寶なりとも、千金に換むには難からじ。垣根の草もフェデリゴが物を望まむは、易きに似て易からず。子細は我子に聞かすべくもあらざれど、此儘に措かば命も危からむ、と思亂るゝ側に、頑是なき子の請むに我折れて、左にも右にもと覺悟して、其得させむ、と事も無げに賺しければ、言の下より兒の氣色麗しく、百服の藥も之には過ぎず覺ゆるほど、もし事の成らざらむにはと、其悲みも目に見えて、活くるも死ぬるも其人の返事一つ、其人の返事こそ我心一つにはあンなれ。其心苦しかりけれども、兒の最愛に思立ちて、明る朝夙に隔無き友を語らひ、そこら散步の躰に擬して、程遠からぬフェデリゴの隱家に尋寄れば、淺ましやフロオレンスに人にも知られて、由緒あるアルベリギイ家の館は、柴門よろぼひ、軒傾きて、壁もおち目の幸無く、さながら下人の棲家と見えて、訪ふさへに愧しく、恁く成果てつるも、

フェデリゴ殿の罪にはあらず。手は下さねども、是皆我身の爲せる業よ、と空可恐く涙溢れて、得も入らで四邊を眺詰せる間に、友なる女の訪ひければ、應といふ聲して、畑の方より人の出て來る氣勢に、思はず身を退きて、人の陰に藏るゝ如く寄添ひたり。

フェデリゴは泥塗れの手に鍬提げて、玉と見し面も一年の日に黧み、膩露に怪しの衣被て、賤の帽子を横斜に戴き、聲もあらげなく、生來の百姓と見えたる形にて、外方を覦ひければ、友なる女、これは近き邊に住めるモンナ、ギオバンナなり。唯今偶然御門を過ぎて、不覺昔の懷しく、其後如何や暮したまふと言へば、フェデリゴは手に持つ物をからりと投捨て、人目も忘れて戀人に縋着き、やれ珍しの御方やと、語は其のみ。連に玉散る涙我袖に置餘りて、ギオバンナが袂も沾るゝばかりなり。やがて泣く〳〵、さても變らせられず、いつ眺めまゐらせても、我戀の彌增す御姿かな。我は其に換りて此狀、今はアルベリギイのフェデリゴとは巾

さじ、得知れぬ土民の忰の心狂ひて、あらぬ事申懸くるよと思して、申す事の一々、必ず御心にな留めたまひそ。
寔に辱き御志。御意には染まぬながら、世をも、家をも、身をも捨てゝ、一念焦れまゐらする不肖。少しは不便のものと思されてか、ようぞ〳〵、ようぞの御越。門過ぎて昔懐しとは、固より噓と知りつゝも嬉し。申すは異なものなれど、今も執念く忘れ参らせず。昨夜も夢の御見、その節はあらぬ御怨言を申懸け。覺めての後悔、今改めて御詫と、取亂してや埒無き事まで口走れば、友なる女は其心の切なるを感じて、石に立つ箭もと獨語てば、ギオバンナは彌面羞さに身を持餘して佇めば、男は其手を把りて、まづは此方へ御入あれかし。見らるゝ通りの仕合なれば、意のみにて御歎待の致さむやうもあらねど、さすがに御覺えはあるべし、往し花散る社前の騎戰に、紅梅騟を中に飛し、夕日に耀く大身の長槍十文字に横へて、汗をも搔かず、敵七人まで突伏せたりし此手にて、俺朶

折焚べて自煎の澁茶、何は無くとも姑く憩ませたまへ、と奥の一間に導きて　早朝よりの御出、朝餐は未だにて在すべし。手作の畑物數々御目にも懸けたく、到來の酒も少許あり。久しう心結ぼれしが、今日料らず愁ひの雲霽れて、さながら病氣平癒の想ひなり。その賀の證までに、枉げて一盞の寸志を饗けたまへ。

いでや、此より君が爲春の野に出でゝ、菜摘の間、中座を御免と駈出で、隣の女房呼びて、竈に焚付け、我戀人は鷄にもあらぬに、菜をのみ鷹めむも傍痛し。何がな思着の一皿、此身になりても昔幽しかるべき下物をと、戸棚の隅、厨の天井まで、隈無く思廻らせども、干魚の骨もあらざるを、如何は爲むと、途方に暮れたる耳元に、愛鳥の叫頻なり。

フェデリゴは礑と横手を拍ち、有之かな。我なほも貧に迫り、一片の麵包に事缺き、飢果てゝ斃れむとも、やはか此鳥人手には渡すまじき秘藏なれども、かの御方は我命にも換難きを、まして一羽の鳥、御爲に何吝か

らむ。かほどの寳にてこそ今日の饗應の効はあれ。いで〳〵此鷹炙肉にして、我念ひ情無き人の肚に入れと、フェデリゴは抃舞して打喜び、餌や與るゝと搏く鷹を解下して、吭元に諸手を懸け、今はかうよと見ゆる時、告別の鳴音、一聲の身に沁みて、思はず拳に取直しつ。爾心無きも、主從の契四年に餘りて、朝夕相見ぬ日とても無く、恩愛我子も如かざりしを、鳥類なりとも其德を懷へかし。德を懷はゞ報謝の志やあらむ。其志もあらば、今我爲に死ぬるを恨むべからず。以後幾年か爾が生あらむ間、雲に翔り、草に伏して、日每に十羽の獲物あらむよりは、今日命を火上に致して、纔に一臠の肉となりなむ其功は百倍にして、忠義は千倍にも勝るぞかし、恁麼、爾、聞分けたらば潔き最期を見せよ。此年月の馴染も今を限りぞと、翼も淋漓に涙降沃ぎて、鳥は朝の林に分入る想ひなるべし。名殘は盡きねば、心強くも細首振上げ、狂ふを膝に敷伏せて、可惜逸物も空しき軀となりけるを、かの女房に渡して、料理を急げば、程

無く萬般調ひたり。
手足を濯ぎ、見好げに衣更へて、東道の椅子に着きければ、野菜の後に運出づる皿より煖氣の立騰るは、其ぞと、塞がる胸を酒に紛はし、申すほどの味には候はねど、此は殊に東道の心を籠めたる一皿なれば、御賞翫に預りたしと、格別披露のありければ、各由々しき料理ならむ、と疎ならず小刀を把りて、御心入りの風味なるほど勝れたれど、嘗て類無き此肉、いかなる鳥にてか、東道の臻り聞かせたまへ、とギオバンナの挨拶なり。御意に稱ひて其肉めも然こそは滿足、不肖に於ては尚以祝着御明し申さむは最易けれども、さては興無し。固より御覺えはあるまじき鳥肉とばかり。客も强ひては問はず、唯管珍味の饗應を懽びて、心ばかりの御返しに、明日は此方にて晝食を參らせむなど、外なる物話になりて、ギオバンナは彼事言出でむ機も無く、窓の日脚は、はや此家に三時ばかりや過しつらむ。

宿には我子の待詫ぶらむ、と心切に急がれて、恁る事申すも嗚滸がましく、此方様の所思猶慙しながら、愛子の一命にも關はる大事。子といふもの持たねば親の心は知れずとやら、其は凡人をこそ申せ、世に勝れて優しき御心根の程を便りに、近頃御無心の品ありと諷かせば、フェデリゴは嬉しげに膝を進め、我等を見懸けての御無心とは辱し。不肖全盛の昔、少しも金銀の沙汰せず、珍しとある品隨分捜求めて、御許へ進らせしは幾度か。されども曾て喜悦の御顏見せたまひし例無し。ましてや身貧の今日、何か不自由あらぬ御方に、御無心言はるゝほどの物恐らく持合さず。されども御望みの品ありとは、フェデリゴが生前の面目。此首にてもあれ、否は申さじ、と壁に懸けたる一腰取下して、小脇に掻込み、いざいざ御遠慮無くと勇めば、見る影も無く容は貧に汚れても、飽くまで清しき男の魂を駭きて、卒に語も出でざりしが、不束なれど我も女子の端なり。尋常にては恁る事誰にか申すべき。耻を忘るゝも、名を厭はぬも、

最愛き兒ゆゑの闇に迷へる心から、と見免しもしたまへかしと、子細打明して、千金も厭はじと、理無く賴めば、フェデリゴは無念の拳を握りて、さりとは御無心の仰せられやう晩かりけり、と地鞴踏みて淚を流す。各其意を得ざりしに、御所望の鷹は一時後れにて此姿と、手も着けざりし我皿なる炙肉を、二人が前に差置きて、聲も惜まず哭いたりけり。

ギオバンナは仰天して、氣も狂はしう、さては唯今其とも知らで、むざむざ口に入れたりしは、我兒が藥の鷹なりしかと、我と我吭搔挘りて、身をさま〴〵に悶えつ、悲みつ。フェデリゴは外の方より、切首、胴殼、之を證據と持來り、復らぬことを歎くに增して、ギオバンナは、我子も明日は死出の山に、此鷹追ひて分入らば、いつ立歸るべき路も無し。御情餘りて仇となりぬと、鷹の軀を搔抱き、衣を朱に染めて、淚血を流すかと見る目も哀なり。弱る心をフェデリゴに慰められ、頽るゝ身は友なる女に扶けられ、殘れる一皿を果敢なき土產に、其亡骸も身を放さず、泣く

泣家路を辿りけり。

鷹は死せしと聞くより、兒の氣色卒に頼み少く、その明る夜の東雲、空打仰ぎて身を悶え、翦れたり〳〵と、今はの際まで其事なるに、母は絶入るばかり歎きを盡して、そのまゝ枕も擧げず二月の臥病。今は浮世に望み無し、と後には藥も手にせず、唯臨終を待つと聞くより、一門驚きて駈着け、交々説得して、やう〳〵快方の慶日増に、一月の後健に本復せるを待ちて、亡夫の兄なる人ギオバンナの齢若きを憐みて再縁を勸めしに、初度のほどは可かざりしが、さま〴〵言はれて、遁れぬ義理となり、有繋にフェデリゴが情も憎からず、添ふならば彼人と、ありし始末を語りければ、兄なる人も涙を流し、實に立寄るべき蔭は其ぞと、相生の松幾千代の契り深く、家益富榮えて、六百年前の寐物語今も想はるゝ。

（二十八年七月）

三箇條（四の緒）

今は昔、アケイアのアヽゴスといへりし町に、ニコスツラタスとなむ呼べる貴人ありける。偕老の契り半にして空しく、其身は頭に降りかゝる雪の閨寒く、後妻に迎へたる美少婦は、衆皆娘かと見たり。此頃の風習とて、然るべき家には鷹、獵犬、奴の數ある中に、パイラスとて年若なる美男の才智勝れて、萬般賢く振舞ひけるが、特にニコスツラタスの意に稱ひて、片時も御側不去。やがては寶藏の鍵をも預りぬべき勢なりけり。

されども志正しく、權に居らず、寵に矜らず、專ら忠勤を勵みて、世に有難き若者なりけるを、後妻リヂア深く思初めて、我如何なれば、夫持つべき身と生れながら、夢見るまでの人を外にして、かく一所に並ぶれ

ば、主從は顚倒にて、月の前なる燈の、見る影も無き翁に添ひあて、何思出も無く、恁くても果つる一生か。世界にバイラスといふ者ありと知りたらましかば、今日まで唯は措かざらましを。逢はぬ昔は是非なし、見たるが最期、遁さじと一念固めて、眼に言はせ、風情に色を含みて、人無き折々は此袖牽けとばかりに見せつくれども、曉らぬ氣色なり。リチアは齒痒く、彼人の平素を思ふに、さるべき鈍漢にあらず。さては賢人貌に行淨すか、と孰を分かず思惱める色を、御意入の婢に黠きありて見尤め、御病とも見えざれば、定めて御心に濟まぬ事、私に秘させたまふは御恨みなり。いかなる御事にても、身に換へまして御報恩は恁る時と頼まるれば、リチアは先づ嬉しく、韞めども穗に出でしほど、是には深き子細、そもじの思はくも愧しくて、と遲ひけるを、私風情へ愧しき御事無し。抑せられての上、此身にて御役にも立たば、火水は未劍の中へも分入るべき心底、と誠はなるほど面に露れぬ。

あなかしこ、他にな泄しそ。此程よりパイラスに思入りて、殿の御姿二目と見るも否なり。此戀成らずば、在るに効無し、と萎るれば、さほどの御事に、と婢は進寄りて、下々より玉簾の內へ想懸參らするとならば、及ばぬ例もあれど、家來への御無心、何なりとも御遠慮のあるべきやうなし。パイラス殿の大果報者、恁くと申さば二つ返事、手を合せて拜む姿が、今から見えまするを、分別無しに獨合點するを、リヂアは苦々しく、我心を惱ますは其なり。端的に物こそ言はね。會ふ度毎に其色見すれど、知らぬ顏の氣強さは、前世の仇敵か、と蹉跎して歎たるゝを、見つゝも婢は信とせず。私にお委せあらば、十が九まで御思遂げさせまゐらせむ、と事も無げに嚥下めば、覺束なくは思ひながら、成らぬとよりは頼もしくて、願愜はゞ褒美は望次第ぞや。必ず失るまい。爲損じて怪我さすな。

其も此も皆心得、御居間を退出てゝ、パイラスを捜行けば、書院の椽に

修らぬ後姿も、奥様に見せまほしく、下部に庭の掃除の指圖してゐたりけり。緦は故と忙しく、御奥より火急の御用あり。彼方まで御越と賺して、一間に呼入るれば、其事とは知らず、早速承はらむ　と神妙に控へられ、明白には言はれぬ仕儀となりて、奥樣暴に御心地惡く、今は御命も危く見えさせたまふと取做せば、パイラスは打愕きて、今朝まで御機嫌の麗しきを拜せしに、箇抑と驅出でむとするを引住めて、其に就きて奥樣より貴方へ折入りて御賴みあり。御秘藏の良藥一服是非に御所望、と眞顔に述れば、パイラスは嘘嗒として、心得難きは奥方の御病。名醫も數あるに不肖に御藥劑とは、彌以て不審なり。恐らく何かの謎にてや候ふべき。武骨者の不肖然る風流の辨無し。とても事に有樣聞かせたまへと詰られて、緦は頭を掉り、謎にもあらず、實の御病とは、よう御存の理なるに、その知らぬ御顔が彌御命を縮むる種、餘病と違ふ難症なれば、いかなる名醫も匙を投げて、貴方に御持合せの藥を差措き、御全

快の道も無し。外ならぬお主樣の御命、つい一寸助けて進ぜたまへ。唯一言應とだにおほせあらば、それにて埒は明くものを、と詰寄するを、パイラスは銜退け、腕着け、御命助けまゐらせぬ心底なり。御所望の一服は、道を辨へたる不肖が眼に、古今の大毒藥と見極めたれば、大恩ある御主に薦めまゐらせむこと曾て思寄らず。その一服なくて死ぬる御命とならば、不肖喜びて御見殺しに仕るべし。此日頃の御振舞心得難きことのみと存せしが、今思へば、なるほど御病氣の爲せし業か。この御返事こそ家傳秘法の大妙藥、少しは苦くとも御耐忍あらば、不義の御病平癒は目前なり。覆さぬやうに持歸られ、否とおほせられなば、隨分手籠にまでも御薦めあるべし。之にも懲りず、重ねて慿る御取次勤めなば、御挨拶は此の通、と矢庭に扱放す劍の光に、仰天して逃歸りける媼は、誓ひし辭も反古になりて、御謁見も面目無く、途方には暮れたりしが、御返事詐るべきやう無ければ、不首尾の段々詫入りけるを、奥方聞き給

ひて、さればこそ慧立して要無き事を爲出したれ。殿様の御耳に入らば此身の破滅ぞと泣かるゝに、縱は在るにも在られず、御足下に領伏し、此御詫には、罪を私に引承け、忘れても御名は出すまじければ、せめては御心易く思召されよ。とても罪に服するならば、此儘にて已みなむも殘多し。今一度バイラス殿の心中篤と聞糺したく、成るも成らぬも時の運と御覺悟ありて、此御使重ねて仰付けられたし。木を伐る斧も幾年か磨るほどに、鍼となるべき時もあり。遽に御心落し給ふなと慰められ、リデアは愁ひの裏にも喜ばしく、なほ此上を頼めば、頼まれて、今はなかなか刄を懼れず、再び機を得て、バイラスの袂に縋り、かねての御言葉もあれば、まづ私を撃放したまへ。首になりてから申上ぐること數々あり、と劍の欛に手を掛くれば、バイラスは驚き、さまでの御心盡辱し、不肖とても男の端なれば、切なる御志承はりて、身も消えむずばかり喜悦に堪へざりしを、情無く申せしには仔細あり。御家に數ある奴の中

に、不肖獨擢で〻重く用ゐさせたまへば、おのづから私慾に貪り、我儘の振舞を募らせ、身のほど忘るゝこともやとの御懸念より、殿樣御指圖にて不肖胸中を試さむ爲、奥樣の御心にも無き戀を爲掛け給ふと存じ、向者には潔白を御覽に入れしまでなり。

然れども事再度に及び、尙又此方の樣子、彼此謀計とも覺えざれば、此上は二言と申さず、いかにも御意に從ひ、御禮は染々申上ぐる夕もあるべし。思へば殿樣には山海の御恩を蒙り、仇にて奉報つる段、天罰の免るべきや。見よ〳〵、今にも牛裂、鋸挽の屍を野末に露し、汚名を永く後の世に流さむこと、さら〳〵遺憾とも存ぜず。御情の嬉しさに、命は亡きものにして、思召すまゝの首尾仕る可き覺悟なり。

恁く一命に換へての大事なれば、奥樣に於ても、此戀の仇ならぬ證據を給はるべし。それには此方より恐れながら三箇條の所望あり。いかに、御聞屆下さるべきや、とあれば、総は歡極まりて伏拜み、如何なる御所

望かは知らねども、奥樣御執心のほどには、お前樣の事とならば、御身にも換へらるべし。その三箇條とは。第一に、殿樣御面前にて御寵愛の鷹を御手に掛けらるべき事。第二、殿樣の御髭一摘。第三、殿樣の丈夫なる御奥齒一本。右何れも拔取りて下さるべき事。此三箇條協へたまはゞ、不肖生々世々の滿足之に過ぎたるは無し、と聞くだに難題言掛けられて、婢其はと當惑せしが、此無理假初にも怨めしき色を曉られなば、想ひしよりは拗者のパイラス、復何言出でむも料られねば、最易き御所望なり。申上げて喜ばせ參らせむと別れて、直樣この由を取次げば、リデアは聞く毎に眉を顰めて、飽くまで憎き爲方ながら、願愜へむとばかりを嬉しく、さては此難題見事に埒明け、品々眼前へ衝附けて、積る恨みは存分に霽さむと、私に工夫を凝して、三箇條やがて成就の時節を候ひけり。ニコスツラタス客を愛して費を惜まず、目覺しき夜宴の催頻繁なり。心祝の事ありて、今宵も嘉賓の識れる限りを請じ、銀燭眩く、玉壺を傾け

て、主客やう〳〵興に入る時、リヂアは錦の裘を曳き、粧を凝して顯れければ、寒林忽ち花を着け、暗雲披きて月の輝くか、と滿坐鳴を鎭めたり。

リヂアは閑に一禮して、彼方に据ゑたる棲架に進寄り、綜緒とく〳〵鷹を取下せば衆目之に注ぎて、爲むやうを眺めてけるに、搏く鳥の頸に諸手を掛け、引扛げて壁に打着け〳〵、年來の怨恨今思知れ、と眉逆立ちて息捲けば　ニコスツラタスは飛ぶが如く驅寄りて、こは物にや狂ひたる。聊爾すなと、リヂアが腕を支ふる時を、一足晩く、無慘や鷹は死したりけり。

ニコスツラタスは此躰に怒憤彌増して、此鳥何の罪有りてか、我儘の成敗奇怪なり、と面色烈火の如く、拳を握りて詰寄すれば、リヂアは少しも騷がず、いかに、各位聞かせたまへ。我夫此鷹を愛でらるゝ餘り、日毎の田獵に家を忘れ、晨に出づれば日晏るまで歸りたまはず。春の日を

語暮し、秋の夜を起明して、なほ慊らぬ最愛の夫に、一日相見ぬ妾が心は如何にぞや。まして幾日か打續きて、次第に御契りも薄く、妾を外になしたまふは、御心奪ふ此鷹のあればなり。いつぞは亡きものにして後を安く、今までの恨をも霽さばやと覘ひしが、逃匿るべき敵にあらねば、唯一撃にせむは容易けれども、人無き所にては後護く、大事に思召さるゝ鳥なれば、御不興のほども可恐くて、今日までは過ぎにき。幸ひ各位の光臨を待ちうけ、かく首尾好く懐を遂げたれば、仔細具に申述べて、妾が聊爾か、鷹めが不便か。御裁斷仰ぎたき心得なりと、語凉く挨拶ありければ、一坐動搖めき、適なる御働き。人の妻たるもの何人も恁くぞ有りたきと稱へて、御中今より逾睦じう、萬々歳渝らぬ御壽の盃参らせう　と總立になりて盞を捧げ、哄と笑ひて、夫婦を上坐に据ゑ、衆口に殿の御果報羨めば、ニコスッラタスも釋然と心解けて、御機嫌始に增て麗しかりけり。

これより殿の御寵愛いとゞ勝りて、錦帳夢暖に手枕の私語、彼此御戯のありける時、リチアは然り氣無く殿の鬢の毛を弄り、それより眉を撫で頬を摘み、やう／＼御髭に手は觸れたれども、有繋に挘るべき機も無し。如何にせましと思煩ひつゝ、なほ指頭に絡みて物語ふ間に、殿のをかしき事言はれけるを、此時と、身を反して笑ひさま、力を籠めて曳きければ、殿は得堪へず、呀と叫びて仆れたり。

我手を見るに、いと長き髭六莖ばかり、根元に皮の附きたるもあり。逸早く推隠して、こは如何にゑたまひたる、と抱起しまゐらせけるに、殿は御手を口に掩ひ、面を顰めて、ほろ／＼と涙を流したまふ。リチアは疵所の心許なく、御手を取除くれば、髭の脱けたる孔より血入染み、苦痛も然こそと想はれて、御怒の聲暴く罵りたまふを、語を極めて慮外を詫びければ、固より過失の事とて深くも尤められず、御氣色復りて、なほ睦じく夜を明しぬ。

嬉しや二ヶ條は爲了せたれど、殿の奥齒を獲むことは、龍の腮の珠を捜るとも謂ふべくや。リヂアが頓才も計に盡きたりしが、爰に先妻に二人の男子ありて、若草のめでたく生立ち、花は行儀を見習ひの爲、父が三食の膳に給仕して、兄は肉を斫り、弟は銚子の役、いづれも神妙なりけるなり。

リヂアは一日二人を招きて、さる方より此度母の聞きたる事あり。凡そ老たる人は精衰へて、譬へば夜明の燈の油の盡きなむとするが如し。かかる老體に、血氣盛なるものゝ呼吸は、壽命を短むる大毒之に過ぐるは無しとかや。かへす〴〵も恐るべき事なり。聞かざる先こそ是非なけれ、此後御給仕の節は、始終面を背けて、假初にも父上に向ひたまふなかれ。然れども此事人には語りたまふな。父上問はせたまふとありとも、努々子細を明したまふべからず。如知られなば、如何なる人をも避けて、深山の奥へも入らむなど、由々しき大事に及ばむも難測し。唯々心に秘め

て、妙う振舞ひたまへかし。是大なる孝行〲ぞや、と言巧に唆かせば、見たちも之を信として、其日の晩餐より母の敎を固く守りぬ。

リヂアは機を見合せ、近頃和子達御給仕の樣子常に變れり。御心着無きやと問ひければ、然れば我も疾より訝しとは思ひつゝも打過ぎしが、如何なるゆゑにかあらむとありければ、リヂアは御顏つれ〲と打瞻りて、それには至理なる子細あり。苦からずば申上げむ、と聞くより、有樣申せと苛ちたまへば、リヂアは御側に寄添ひて、恐れながら御口中の臭きゆゑなり。妾こそ得忍びまゐらすれ、和子達の面を背けたまふことと道理と覺ゆると申せば、殿は呆れて、我口中得堪ふまじく臭きとか。奇怪なることを聞くもの哉と、自ら御手に息を吐きかけて、頻に嗅ぎたまふに、何ともあらざりければ、御首幾度か左右に傾きたり。

氷は自ら冷かなるを覺えず。御自身には知られずとも、齲齒などの今朽つるにやあらむ。左右は御見せあるべし、と窓の明るき方に伴ひまゐら

せ、口中具に視る眞似して、是よく／＼と小膝を拊てば、殿は思ひも寄らず、何か有るかと仰せられぬ。奥齒一つ眞黒に蝕みて、全く朽ちたり。此儘に差措かれなば、其毒隣より隣に及び、竟には口中盡く腐るべし。害を除き給ふは今の間、と一々信しやかに聞ゆれば、言の下より、齒醫者召せと急きたまふを、リヂアは止めて、妾經驗あり。渠等の手に掛りたまはゞ、その苦痛譬へむ方なく、さりとは無法の暴療治、拷問の責も如此やと、今憶出して身毛も彌竪つ。身に換へて最愛き殿に、何とて然る憂目を見すべきや。妾躬ら心を用ゐて療治しまゐらせむ。亡父の齒を三度まで抜きし事ありて、いさゝか心得も侍りと賺せども、殿はなほ危む氣色なるを、やう／＼我居間に伴ひ、かねて用意の粉藥を含ませ、有間が程に齒根の弛むを料りて、牀几に倚りたまふ背後より、例の腰翼縛に抱附き、リヂアは御膝に乘懸りて、隱持つたる釘拔御口に差入れ、始の程は徐に御齒の動搖を誘ひけるに、殿は早疼痛に堪へがたき御機嫌

と見るより、今は用捨もあらず力の限曳きければ、手足を悶え、牀几を蹴返して、殿は仰様に打僵れ、鮮血は縷の如く頤に傳ひ、哀に苦き聲を揚げて、命も覺束なげに呻きたまふ。

リチアは此間に巧置きたる齲歯に擦換へ、首尾好く殿の御眼を眩し、丈夫なる奥歯一つ血附のまゝ、直樣パイラスの手許に届け、三ヶ條の難題見事埒明けたる上は、今宵にも否は言はせぬ爲の一札、墨の乾きもやらぬを妐懐にして立歸る時、殿口中の御痛未だ去らず。蒼白たる頬を抱へて、素性も知れぬ齲歯を御手に、恨めしく御覽じつゝ涙を浮べて在したりけり。

（二十八年七月）

冷熱

（一）

茲に相模國何とやら郡の何とやらいふ町の盡頭に、田舍には珍しく意氣事造の新しい二階家がある。

四五日前から毎日此前を、午後と夕方と、大抵二度づゝ徘徊する男がある。年紀二十四五の瘠肉の秀削とした、色の小白い、面長の、まづ好男子。風俗は書生であるが、金の指環の二つも貫めて、絲織の長羽織でも披々と着て、鍔の惡く狹い、山の低い、霜降の帽子を臨に戴いてゐやうといふ、娘義太夫の御定連とも見える服裝て、角細工の柄杓の煙管で紙卷を喫しながら、流眄に二階と下の出窓とを等分に睨むで、其合手には、片手に持つてゐる横文字の雜誌を見い〳〵、いかにも深く考へるやうな

貌をして、ぶらり／＼と四遍ほど往きつ還りつ。竟に元來し道へ返して行くと、やゝ七八間も遣過して、二階の窓をすらと啓けて、女子が徐ろに面を露す。

小肥に肥つた、髮のけは／＼と濃い、顏の薄赤らむだ、目のぱつちりとした、脣の薄片な、喋りさうな、廿歳許の婢らしい新造である。

双子の立縞の布子に、海老茶の綿天の半襟を脹まして、メレンス更紗と縞繻子の晝夜帶を結めて、メレンス友禪の袖口が翩々と手先に絡まるのを喜んで、蔽膝無しの浮波々々した腰を振らして、男の後影を眤と見送つてゐたが、

「御新造樣、彼でございますよ。」と首を引込める。

「どれ、お見せな。」と障子の陰に聲がして、婢の橫合から差出した顏は、今戸燒に京人形を並べた程も違ふ。鴈金が劃然と、厚鬢の餘るばかりなるを、無雜作に引詰めて、粗放に腦天へ捩附けたやうな束髮に結

つて、瓜核の豐嫭とした、抜けるほど色の白い、眼色の可恐く好い、唇邊に愛嬌のある、さぞ口說の有りさうなのが、黑縮緬の羽織を自墮落に引被けて、相良縫の細い紫の襟をゑてゐるだけが見える。打見たところでは、いかにも娘々してゐるが、容貌に於て其齢を讀むに、恐らく二十五六の邊でもあらうか。左にも右にも鄙には希者、なるほど彼書生の日參をする御本尊は是かとよと拜まれる。

束髮は遙に望みながら、

「ほんとにお前毎日來るのかい、彼人が。」

「事實でございますとも。」と婢は力を入れて。後は口早に、

「明日も屹度參りますからお報せ申します。それはなか〳〵樣子の好い……………。」

「おや、お前に宜くとさ。」

「あれ、御新造樣、否でございますよ。」と微に肩を搖る。

「でもお前に用があるのかも知れやしないよ。」
と御新造は鼻の中でむづ〳〵笑ふ。
「多度おつしやいまし。明日彼人が來たら私は水を打沃けてやるから可うございます。」
「馬鹿な事を御爲でないよ。」と御新造は怨しさうに難めると、
「それでも、お譃ひあすばすんですもの。」
「ぢや、譃はないなら、明日來たら報しておくれ。どうも見馴れない人だが、土地の人ぢやあるまいねえ。」
「土地の者ぢやございませんとも、ついしか見懸けたことがございませんもの。」
「大方東京か。濱邊から漫游にでも來てゐる人だらうけれど、何だつて我家の前を那麼に行くのだらう。氣が知れないぢやないかねえ。」と
嫣然一笑する。

抑も此束髮の美婦人は、其名を玉河悦といつて、今年廿八になる。浦賀で虎屋といへば、近國に響いた大長者の寵妾であつたが、先々年旦那が亡くなつたといふもので、それお暇が出る、就ては、佛樣も一方ならず御情を懸けられた者であるから、今更突放して、行末味噌漉を提げさせるやうでは、千僧萬部の供養も、やはか其効はあるまい、之も追善の一つといふ事になつて、手切やら、形見やら、何と付かずに、一代は安氣に暮せるほどの恩給をしてもらつて、故郷の此地に歸ると、今の居宅を普請して、若隱居で端然としたものである。十九の歳虎屋の先代に見染められて、三百圓の支度金で引取られてから、六年が間を神妙に奉公して、まことに温順で通つて、內外の者の承も良くて、特に內儀に可愛がられてゐた、までは人の知る所であるが、其前の歷史を詳悉にせる者

は無い。

自ら言ふ所に據れば、某の宮樣に十四の春から御奉公申上げて、十八の秋御暇を戴いて、身の形附を急いでゐる間に十九と成つてしまつたので、厄年ゆゑ縁談は來年の事にせうと、當分內に在て裁縫の稽古に通つてゐる中、料らず旦那樣の御目に留りまして、と至極綺麗なる申分、果然其通かも知れぬ。然し或は虛誕かも知れぬ。

其通でも、但は虛誕でも、其が些も本文に關係は無いから、素性の一段は姑く曖昧模稜の裏に沒了し、やがて章を重ねて說來る言行の裏面に、秘密の鍵を藏して、取る人の取るに任せる。

事の次手に、彼書生の身上を簡單に說く。姓は勝見、名は琢次、行年二十四歲になる。父なる人は勝見良琢といつて、家柄も資產も可也に、此町での流行醫である。

琢次は次男に生れて、十三の年から東京へ遊學に出て、蕩樂も爲たらう

し、勉強も爲たらうが、それは偖措いて、某私立學校の哲學部を卒業して、先月の半に歸郷つたのであるが、凡そ世中に不具の子と哲學ほど、身の助にならぬものは無いと謂ふ。それも今日の活計に事缺く身分であつたら、晝の間は哲學三昧に入りて、幽を闡き、玄を鉤し、日暮からは號外五厘に賣りて、鈴を振り、聲を嗄し、左か右か息の通ふやうに算段もせうけれど、これが暖衣飽食の家に生れた日には、始終坐禪をして、圓窓一片の月を看めながら、巽に人生などを觀じてばかりゐたからう。勝見琢次も其人で、毎日俯仰して、素人目には何を爲るでも無く、何所までも御次男樣の格で、まづ生涯の親臑とよりは受取られぬ。
それで本人は氣毒さうな貌をする段では無い、學者といふものは皆這般ものさ、はゝあと一笑に付して、荐に大人風を吹してゐる。父親も女親も乃至は兄貴人も、此見識には畏懼をなして、琢次は揮博洽のだか、無能のだか、そこらは空々寂々で、唯何事も仰らるゝまゝに、奥の六畳に

封籠めて、彼はまあ彼にしてある。

一日琢次は忽ち悵然として巻を釋てゝ、飄然として戸外へ出た。何故悵然だか、何故飄然だか、哲學者の一擧一動の如きは、固より幽玄高遠にして端倪すべからざるものである。

琢次は仍其飄然の有様に於て吟行つゝ、町の下の方へ二町ばかりも下ると、唯有る四角に鶴の湯といふ東京風の温泉がある。男湯の入口の欄間に入れてある五色硝子が二子間毀けてゐるのを、何と感じたものか、立住つて姑く視てゐた。前にも言ふ如く、哲學者の擧動は到底端倪すべからざるものである。

やう〳〵眼を轉じて、徐ろに一歩を移す時、女湯の耳門から大液の芙蓉水を出でたのが、かの玉河悅なる客觀美である。

唄に、私は能く見て能く惚れるとしてあるが、强ち其にも限らぬか、琢次は唯一目見ると、忽ち一種の電氣が體內を流傳するやうに覺えて、怪

しからず好かつたので、唯一目では湛納されなかつたから、追究けて、前へ廻つて、最一度見たいと念つたが、晝間ではある、顔は識られてゐるのに、不見識な、と辛抱はしたものゝ、さて全く棄てることは出來なかつた。そこで不見識と辛抱とを調和して、五六間後れに跡を慕つて行くと、例の町盡頭の二階屋といふのへ入つたのである。

琢次は長らく東京へ出てゐて、つい此間歸つたばかりであるから、此邊に這箇建物のあらうとは知らなかつた。まして況むや、(おもほえず古里にいと端方なくてありければ)なるほど是は心地惑ひにけりで、有間其邊を彷徨つてゐたが、重ねて見るよしも無かつたので、其日は悄々立歸つたといふ次第であるが、歸つて見るとなほ〳〵忘れられぬ。何者であるか知らぬと、それとは無しに藥局生を素引くと、彼でございますかと、一を聞けば十を答へる始末で、誰も先刻御承知の尤物、素性の一通は容易に知れた。

其に就て琢次は百端考へた。實に可憐なもの、あんなのは許多無い。羞しながら我は惚れた、確に惚れた。惚れたに違無い！　けれども、妾揚りは窮る。二十八も窮るが。此方は辛抱する。せめて後家なら未だ可矣が、妾揚りは窮る。

勝見良琢といへば、家格といひ、位置といひ、名聲といひ、此一郡に聞えたもの。その男の勝見琢次、六年も東京で修行して、而も立派に某學校の卒業生で、この界隈に我ほどの人物は恐らく絶無、掃溜の鶴ともいはれるほどのものが、妾揚りの女風情と浮名を流す？　馬鹿なことを！　思ふまい、思ふまい、斷じて思ふまい!!!

とは念ひながら、有繫に燈火を一息に吹消すやうには、形の附くものでない。けれども琢次は心強く此戀を棄てた。此念ひを霽さうといふ妄想は絶つた。此女と浮名を立てられることは罷にした。さすれば天地に俯仰して少も愧るところは無い。さて一方は然して措いて、心で惚れてゐ

る分は差支あるまい。心で惚れてゐるとは、則ち其事を實行せぬのである――唯顔を見て樂むだけの事である。顔が見たいから見る、それが設罪過であるならば、勸工場へ入つて買物をせぬものは盜人である。於此琢次が此頃日毎に玉河の門前を前渡する意が解める。

（三二）

靈夢を蒙るのさへ、相場は滿ずる七日目と極つてゐる。琢次の日參も今日で五日といふ日、冬には珍しく駘蕩とした午前、家の手前だけは飄然と出かけて、横町を曲ると直に急足になつて、玉河の門へ近くほど、復漫々地と大樣に歩き出す。唯見ると、その門口に花賣の荷が下してあつて、其側に男と女が立つてゐる。男は無論花賣であらうが、女は小間使か、瞭然と辨別は附かぬけれども、本尊では無いらしい。

眤と望めながら進行く一歩は一歩毎に、果して客觀美では無くて、おやおや婢だと、結髪から服裝まで鮮明に見えるほど間近になると、幻燈の消ゆるが如く、婢の姿は忽ち門の内へ突然入る。

琢次は其遁込むだやうの體度を何と解釋たのか、鼻の頭に溢れる悦喜を地上に投じて、幾分は羞しい所もありげに蹌踉々と、其門迄はや五七間

の距離に迫る頃、婢は再び顯れて、此方を見い〳〵、琢次の近くほど花賣に物を言懸けて、然りげ無い體を粧ふやうに見える。

琢次は心の裏で、何でも是は通知したに相違無い。通知するくらゐであるから、彼奴も見る氣に相違無い。然し外へ出て來ない所を以て察ると、窓の障子を細目に放けて、垣間見やうといふのに相違無い。垣間見なら彼出窓、彼處が胡散臭い。幸ひ荷の花を看つゝ過ぎる貌で、門口を近々と通れば、婢は上窺をつかつて、孔の穿くほど琢次の顏を視める。それには構はず、花を看る眼を今や出窓へ轉さむとすると、這抑甚麼！　格子の內に佇む女がある。今更誰と云ふ迄も無い。

琢次が眞前を通る比を計つたかのやうに、格子から故と顏を露して、

「ぢや、やつぱり水仙にしておかうかねえ。」

と亂次聲を聞かせる。

琢次は思切つて眤と視て、二三歩行過ぎてから、又頸を振向けて彌眤と

視ると、婦は眞白い手を頬に加てゝ、人の見るのを遮りながら、劇しく流眄をする具合、先方でも萬更では無いのだと思ふと、いつそ此儘化石にでも、木伊乃にでも、成るものに成つて、罌になる迄化てゐたいのは山々でも、有繋に鐵面皮と心着けば、居るには居られず、行くには行かれず、然ればと云つて殘惜さも殘惜し、もう一目、もう一目に牽かされながら、心にも無く脚を進ませると、小石に突かけて膝ががくりとなる。やうく其で正氣づいて、神妙に一二間行くと、直に又頭を捩向ける。と女も懷しさうに見送つてゐたので、顏と顏とが丁と會ふ。その途端に女の顏は俯くと、琢次は何と思つたか、卒に疾行に、つい其處の角を大通の方へ曲つて了つた。

その影が見えなくなるや否や、

「如何でございます。」　と婢が目授をすると、

「如何とは？」　と主婦は片頰で
 然笑ふ。

此時賣花の翁は水仙を見繕つて、
「へい、これで如何でございます。」
と拈り〱持つて來ると、主婦は彌〱笑つて、
「大層如何が行るよ。」
「今通つたのは何所の人だか、花屋さん、お前さん知つておいでか。」
と何吃はぬ貌で婢が訊ねると、翁は言下に、
「存じてをります。あれは勝見樣の若旦那でゐらつしやいます。」
「へえ〱、おや然う！　些も知らなかつた。」
「御存知はありますまい。つい此間まで東京へ御勉强にいらしつてたんで、大した學のお有なさる方なんださうでございますよ。」
「お醫者樣ぢやないの？」
「然うぢやございません、學者なんださうで。」
「お醫者樣の子ならお醫者樣でありさうなもんだのに、ねえ。」

翁も此挨拶には窮つたか、
「へえゝ、」と氣の無い聲をして、鼻の下を長くする。
問答の途切れたところで主婦は内へ入る、婢も續いて入ると、中の間の口で、
「ねえ、増、」と主婦は立住つて振返つた。
「へえ？」と婢も立住る。
「勝見の息子かねえ、彼が。」
「さう致しますと、彼は若先生の弟でございますよ。なるほど何處か肖てゐますけれど、若先生よりは餘程容顏が佳うございます。ふゝふゝふふ。」
と卒然に笑立てる。主婦は且驚き、且呆れて、
「あれ、奈何ゐたつてんだねえ。」と流眄にかける。
「私は可笑くて、可笑くて、忙然突立つて見惚れてゐた彼人の顏色とい

つたら。あれは全く心から御新樣に何なんでございますねえ。」
「否だよ、增は。」　と主婦は衝と座敷を拔けて椽へ出る。花溜へ水仙を入れて、奥へ行かうとする所を、お增は又捉へて、
「御新樣、私は考へて見ますと、彼人が可哀さうでなりませんよ。」
「おや、其は〳〵。」
「あれ、まあ、御新樣串戯ぢやございません、貴方は餘程罪な方でございますよ。」
「はい〳〵。」　と盆弄謔すと、婢は少く勃然とした狀で、
「事實でございますよ。」　と擲けるやうに言ふ。
「だから嘘だとも何とも言やしないやね。」
「おつしやらなくても、私の申す事を馬鹿にしてゐらつしやいますもの。」
「何で馬鹿にするものかね。馬鹿に爲やしないけれど、お前が又餘り油を澆けるからさ。それを一々私が眞に受けて聞いてゐられるものかね。」

「でも事實でございますもの。」

「だから可矣よ。知つてるよ。能く解つてるから、彼人の可哀さうな所以をお聞かせな。」

「別にお聞きなさいませんでも、御存知の理でございます。」

と幾らか拗て見せる。

「おや然う、それぢや聞くまい。」

と主は主だけに又其上を拗る。

「あれ、御新樣、申しますよ。先方では那麼に思つてゐるんでございませう。それに御新樣の方では、蚤の螫つたほどにも思つてらつしやらないんですもの。」

「それから。」　とお增の顔を故と見れば、

「それだけで御座います。」　と屹と斷る。

「おや、まあ味無いこと！」

「味無くても可うございます。私は一人で可哀さうだと思つてをります
から。」
「あゝ、お前は可哀さうだと思つてお在な。私は私で味無いと思つてゐ
るから。」
彌〳〵出で、彌〳〵冷かされるので、お増ももう耐らず、
「でも貴方餘りぢやございませんか。」
と括枕のやうな膝を勃起々々推出す。
「お前こそ餘りぢや無いかね。いくら先方で思つてたつて、私の方で否
なものなら爲方がありはしないわね。それぢや私もお前に暇をあげるか
ら家へお歸り。」
「あら御新様。」と甘怠れた聲をして、體を搖りながら、
「何故でございます。」
「家にはお前に焦れぬいてる次郎兵衛様といふものが、頭を長くして待

つてるぢやないか。」

「あら、措して下さいましよ。次郎兵衛なんぞ、否、否、否。」

と顔を蹙めて身顫ひをする。

「それ御覧な！」

局外のお増でも琢次の執心には絆されて、（可哀さうでならぬ）と云ふのに、本人の主婦が、全く痛痒を感ぜぬやうに見えるので、お増は入らざる御世話ながら、情無く念つたのである。尤も痛痒を感ぜぬのも、情無いのも、所以は大有で、それはお増も善く知つてゐるから、強ち尤めるのでは無い。けれども如斯お高くなくても可さゝうなものを、と畢竟は見かねて言つたまでの事であるのに、竹篦返とは餘り酷い。さうして見れば、我身が次郎兵衞面に於けるが如く、あれほど好い男子の勝見の若旦那を、御新樣は全くなにとも思召さぬのであるか。虫の好かぬといふのは可恐いものだ、とばかりお増は一概に信じてゐると、その日の暮方、主婦の卒然二階に昇るのを見た。良有つて、門前を通る琢次の影を見た。

此一双の（見た）がぐつとお増の癪に障つて、些と言ふことがあるよの氣

色で、十三貫六百目の體量を階子段に踏轟かして、二階へ昇ると倖く、

「御新樣！」　と哮りかゝる。

「あゝ吃驚した。何だねえ。」

と振向きながら、今まで外を眺めてゐた窓の障子を礑と閉てる。

此礑と閉てたのが、お增の癪に又障る。

「多度まあ私にはお秘しなさいまし。」

とのつそり突立つたまゝ、今にも比目魚になりさうな眼をして、主婦の顏を思入れ覗てゐる。

主婦は澄したもので、

「何を私が秘したのさ。」

「えゝもう不知々々しい！」

と胴顫ひをしてお增は悔しがる。

「先刻何と貴方はおつしやいました。お前は何とも思はなくつても可矣、

私は私で可哀さう………ぢや無かつた、お前は可哀さうでも、私は私で何とも思つてゐないからつて、あの立派な口上は如何なさいました。」
「どうするものかね、ちやんと覺えてゐるよ。」
「はい、覺えてゐらつしやる方が、どうして御二階へおいでなさいました。」
「階子を一段づゝ昇つて。」
「存じませんよ、もう。それぢや今門外を通つたのは、彼は誰でございます。」
「種々通つたよ。巡査だの、犬だの、………。」
「勝見の若旦那だの………。」と耐りかねて暴露ると、
「お増樣の岡惚だの………。」と忽ち蒸返される。
姑く這般ことを言合つて、更に際限は無かつたが、究竟琢次を見に昇つたのだ、と白狀したでも無し、しないでも無しの間に、模糊と形が附い

た。

扨其翌日の午前も、例刻を候つて、主婦は二階の窓に姿を露したが、その暮方もまた、見つ、見せつ、見せつ、見られつ。それで主婦は琢次の噂をするでも無い。此方から水を向ければ、何とか言ふやうなもの丶、決して眞情から溢れて、是非とも聞かせるといふ例の其ではない。さればば虫が好かぬのであるかと想へば、先方の前渡をする時刻を待つて、屹度二階の窓へ出かける。そこで萬更では無いのかと想へば、唯其時の外は、其らしい樣子が全く見えぬ。

好いのやら、惡いのやら、お增には全然解らぬので、煩く聞いても、主婦は唯笑つてばかり。

互に顔を見合せたのは、琢次が通ひはじめてから五日目の事である。それから續いて六日七日と、朝に夕に門を通るたび、客觀美も屹度姿を露はして、流水有情の心意氣を示したので、琢次は夜の目も睡ずに悦ぶといふ始末であつたが、八日目の朝も、(さぞ待つてゐるだらう)などゝ來て見ると、二階の障子は殆ど三十分間の猶豫の後まで啓かなかつた。四十分待つても啓かず仕舞で、琢次の失望は實に得も謂はれなかつた。然し暮方もある事、と心を勵して、やう〳〵歸つては見たものゝ、不愉快、不愉快、不愉快！ 吁、不愉快の七時間！ 其も過ぎれば過ぎられるもので、日脚の傾く比に再び出かけて、待つたが〳〵、裏田甫から眞一文字に吹着ける凩は、人を撲仆すやうに、その寒威は鼻柱も拖げるかと想はれる。いかに修飾の良い琢次でも、水洟は垂れまする、栗肌にはなりま

する、亂離木葉、色男の寒晒。もう歸らうと斷念をつけたのが、とつぷりと日暮時分、これを名殘に、また門を通ると、思も寄らず二階の障子が啓いたので、その愉悦は飛立つばかり、渴饑して瞻ると、二階の女は轉眼もふらずに匆々と雨戶を引いてゐる。

轉眼もふらぬ理哉、それは炊婢の老婦である。琢次は夥しく腹を立つたが、この老婦の知つたことでは無し、出て來ぬ人が惡いのだと恨むだ所で、もとが約束をしたのでは無し、釣られて來た奴が馬鹿なのだらう、我が馬鹿なのだ。未練らしく遲々してゐるほど益馬鹿になる。

然矣、馬鹿にもなる、夜にもなる、寒くもなる。是に於てや歸らざるを得ざるにもなる。一歩踏出す途端、一陣の風が颯と地を捲いて、琢次が意氣事に淺く頂いてゐる帽子を背後から引攫つた。驚いて手を擧げる間にきり〳〵と舞つて、はたと地に落ちると、くる〳〵くる。琢次は跡から、すた〳〵すた。息をも吐かず二町ばかり逐ひかけて、やう〳〵滞

の端で取つて抑へて、程無く我家の門。
その夜は寐苦く明して朝になると、八時から十時頃迄は、患者や藥取で玄關は市を成してゐる。琢次は食後に浮浪々々と藥局の方へ出て行く通路、玄關の群集の前を、好男子の學者は乃公だといふ顏で、懷手の悠々然と過ぎながら、何心無く入口の片隅を眼下に見ると、爰は屋上の烏にもおよぶといふ、我戀人の召仕お增が、干乾びた老夫と洟を垂した小女との間に、島田を峙てゝ端然とゑてゐたのが、慇懃に禮をして、羞しさうに横を向いたのである。
琢次が此時の心の內は、島の俊寛が遠望の澳に寄來る白帆を認めた其思ひの、まづ千分の一がものは有つたらうか。渠の平生驚くべき尊大自重の頭が、此際五割方も低く頷いて、學者たるものが召仕風情には過ぎたる挨拶ぶり、所謂豚に眞珠を投ずるは、之を吝むに遑あらざらしめたる感動の作用である。始めてお增の姿を見付けた時には、理窟は無しに學

浪浮浪と、（はてな、文でも屆けに來たのでは無いか、）と想つたが、考へると、これは我ながら餘程慌てたもので、玄關に扣へてゐるからは藥取に極つてゐる。なぜ藥取だらう？　病人があるからであらう。誰が病いのであらう、彼婢ではあるまいし、炊婢でも無からう、主婦歟な。なるほど、昨日一日顔を見せなかつた所を見れば、こいつ主婦病氣だな！　それで彼が藥取か。義理明晰、釋然とし解めたわい。

昨日あたり阿兄が診察に行つたのだらうが、些も知らなかつた。何病だかな、それは藥局で當れば直に解ると。

所で、あの婢が藥取に來るのを幸ひ、何とか巧く手懐けて、彼を以て此方の方寸を言はしめる。豈妙ならずや。これは出來るよ！　彼が病氣になつて、我家へ乞治などゝいふのは、全く緣だ。

と爰に始めて琢次が勃々と氣紛れたのである。もし此お增なる者が藥取に來なかつたら、琢次は（心で惚れてゐる）の初一念を飜すやうの事は無

かつたのであらう。橋があるから人が渡る。盃を見たから飲みたくなる。切れる刀を持つから殺したくなる。其處に出てゐたから、食べたくは無かつたけれども、一箇摘むで見た、などの格で、丁度幸ひの傳がある所から、琢次は一寸鍬を入れて見たくなつたのである。

話次分頭纏てお増は水藥の瓶と散藥一袋を友禪縮緬の袱紗包にして、勝見の門を出て一町ばかりも來ると、背後から、「もし〳〵」と呼ばれる。振返ると、勝見の若旦那！　其外に人氣は無い。

お増は小腰を屈めて、

「私でございますか。」　と溫顏に尋ねると、琢次は少しばかり極の惡い躰て、

「あの、貴方は玉河樣のお內の…………」

「はい、左樣でございます。」

「妙な事をお聞き申すやうですが、御主人が御病氣なんでございますか。」

と手を擧げて帽子の頂を敲いてゐる。お增はお增で、顏の遣端に窮つて上下左右を眴しながら、袱紗の結端を荐に拈つて、

「左樣でございます。一昨夜から少々風邪の氣味で。」

「いや、然ですか。私は每日お宅の前を通る度に、いつでもお見掛け申すのが、昨日は一向お見えなさらんでしたから、御留守かと想つてをりましたが、お風邪ですか。如何です、御容躰は。」

「難有う存じます。大した事はございませんので。」

「それは結構です。」と迄は續けたが、後が遽に出て來ぬので、ざくしやく踠いて、大きに持扱ひの間、双方姑く默然。

琢次の肚では、もう一條も話を續けてゐる間に、何とか機發を附けて、其處を器用に持つて廻らうといふのであるが、はや勢追つて、長くは捉へてゐられぬ境になる。ゑゝ、今日は無効と諦めて、

「どうぞ宜く。」と帽子へ手を掛けて、一足退きながら、何心も無く

「いや、宜くと申しても、まだ御相識でも無かつたつけ。」

と照隠しに笑ふ側から、、

「いゝえ、主人も能く存じてをりますから。」　とお增の一語は自から男の腸を抓る。

「いや、然ですか。其は奈何も。それぢや本當に宜く有仰つて下さい。然し奈何して御存じなんですかねえ。」　と一寸拈つて見ると、之に應ずるお增の語は、更に拙が無い。

「それは貴下。」

何を謂ふにも、初對面なり、途中の立話なり、遠慮もあれば、人目も憚るで、その日は不本意ながら別れたが、續いて四日藥取に通ふ間に、琢次は毎日着々と關係の歩を進めて、今は秘密を打開けても、隨分頼まれさうな所まで屹と察いたつもりで、いよく此上は、お增を中立に積る思を通はせやうものと、一日の夕暮玉河の裏口へ忍びの、相圖は礫か、

咳拂ひか、三つの拍子を敲いたか、右も左も首尾好く戀の棧を呼出して、物陰に私語を始めた。お增は先づ口を開いて、

「先日はどうも結構な御品を難有う存じます。私なんぞには勿躰なくって……。」

「なに非薄ものを。」

と緩みかゝる白の烏帽子縮緬の襟卷をぐっと捩込むで、

「今晩は又めっきり寒いねえ。」

「此お寒いのに、能く入らっしゃいましたこと。」

「これも誰ゆゑさ。」　と何とか謂はれたさうにお增の顏を見て、一寸笑ふ。

「あんな事ばつかり。」

「あんな事と云ったつて、其に違無いのだもの。其は可いが、如何だね、樣子は？」

「未だ奈何も瞭然分りませんけれども、多分可からうと想ふんてすけれども。」
「けれどもは困るぢやないか。實は今晩ちやんと認めて、持つて來たんだけれども、それぢや迂濶頼まれないねえ。」
と袂の中を欲々やる。
「ですから、始から私はお請合申しは致しませんけれど、貴下の御用なら、何なりとも務めますから、仰有つて下さいまし、御持になつたといふのは、御手紙でございますか。」
琢次は輕く頷く。
「お届申しますから、私へお預下さいましな。」
默然と考へてゐる。
「なまじっか私から申すよりは、御手紙の方が却て宜うございますよ。」
なほ半は思慮に沈みながら、

「それは可からうけれど、手紙まで附けて斥かれたら、餘程可笑なもんぢや無いか。第一書いたものは、永遠も證據に遺つて、業曝な話だ。」

「ぢや恁う致しませう。もしも成けなかつたら、取戻して差上げます。然なら宜いぢやございませんか。」

「然さ。まあ可いやうなものぢやあるけれど。」

「ですから、然なさいましよ。」とお増は地鞴を踏むで迫る。

琢次が東西南北思案に暮れるのは、寧ろ此手紙の處置に就てゞは無い。何が故にお増には主婦の意中が知れぬのであるか、それが頗る腑に落ちぬのである。先方も何分か思召のある事は、黒い眼で睨むでゐるのに、床の上下までしてゐるものが、分らぬなどゝは餘程分らぬ。抑我鼻藥の未だ足らざるが爲か、或は彼が神經の遲鈍なるが故か、最一つ氣を廻したらば、主從馴合で我を弄して見やうといふのか。

何はともあれ、御用は務める、手紙は屆けるといふに任せて、之は渡す

ことにせう。それで、果して渠に氣があるものなら、好い返事を聞せるであらう、一日遲れゝば一日だけ、入らざる苦勞もしなければならぬのであるから、早く渡して、善惡ともに早く片附けてもらはうかと、やうやう取出す一通は、大さ一錢の切餠の如き西洋形の封筒。

「それぢや思切つて、頼むことにしやうか。」

「えゝ、其が宜うございますよ。確にお屆け申します。」

と受取つて袂へ入れる。

「落しちや大事だよ。」

「大丈夫でございます。」

「而して何日返事を聞かしてくれる？」

「明日の今頃入らしつて下さいまし。」

「いや、それは難有い！」

「それぢや貴下、餘り長くなりますと叱られますから、是で御免蒙りま

す。左様なら、御機嫌よろしう。」
と急いで行きかける、慌てゝ呼留めて、白革に銀金具の蟇口から、四つに疊むだ一圓紙幣を出して、物をも言はずお増の手に掴ませる、
「それぢや何分。」　と足疾に立退く。
お増は戴いた物を帶の間へ挿入れて、頼まれた物を懐へ移して、内へ入る出合頭、臺所の口で、はたと炊婢の老婦に行遭ふと、
「おや〳〵、お前樣何所にお在だの？」
「其處にさ。」　と兎脱る後から、とんと一つ肩を拍いて、
「好い加減に浮氣をおさなさいよ。」
「あら、否なお峯樣ぢやないか。他聞の惡い。」
「はい、はい、御免なさいまし。あの人が附いてると思つて氣の强いこと。　おゝ、可恐、可恐。」
と首を掉りながら、匆々と女部屋の方へ行く。

折から奥の六疊で主婦の呼ぶ聲、

「増、増や。」

「はい、はい。」　と二歩ばかりも駈出すと、

「其處の煙草を少許出しておくれな。」

お増は早速納戸の袋戸棚から煙草の箱を出して、持つて行くと、主婦は蝸牛の殼のやうに炬燵を抱へて、長々と腹這に臥倒つて、赤本の探偵小説を見てゐたが、跫音を聞きつけると、倦怠さうに臥回りながら、

「お前今迄何所に在たの？」

「私でございますか。」　と玻璃燈の側にどつさりと坐つて、

「あの、御新樣。」　といふ拍子に兩膝をぽんと拍つ。

「また炬燵へ入れてくれかい。ちつと裁縫をおしなね、此夜長に。お前此間進げた帶側は如何おしだ？　心はもう張つてあるんぢやないか。」

「これから懸るんでございますけれど。」

「ぢや炬燵は十分の間だよ。入ると直に坐睡をするから否さ。」
「あれ、炬燵ぢやございませんよ。少し御目に懸けますものが………。」
「又何か買つたのかい。お前は眞箇に浪費が所好だよ。」
「あれ、また違ひました。」とお增は搖上げて獨り面白がる。
「何だよ。」と主婦も隱されるほど見たくなる。
「頼まれ物でございます。」ふゝと笑ふ。
「頼まれものとは？」
「四角なもので、白いもので、書いてあるもので………。」
「そんな事を云つたつて解りやしない。物は何でも可いから、誰から頼まれたのさ。」
「いの字でございます。」
「いの字？　いの字ぢや解らない。其次は？」
「いの字。」

「亦いの字かい。」
「いの字が二つ續くのでございますよ。」
「ぢや(いゝ)だね。」　と姑く考へて、
「えゝ、もう憤れつたい！　言つておしまひなね。」
主婦の急くほどお増は落着いて、
「其次の字が(ひ)でございます。」
「いゝひ？」
「其次が(と)の字！」
「いゝひと？　馬鹿におしでないよ。」
と長煙管でお増の膝を力まかせに吃はせると、狼狽へて身を退く機に、懐の手紙が居去出す。主婦は瞥と上書の(玉)の字を見付けて、卒然に引手繰る、遣らぬと襲る、推隔てる。彌襲れば彌隔てる。その騒擾で玻璃燈がばつたり、倒れる、起す、吹消す、火傷する。

一通は竟に主婦の手に入る。お增は物化の幸を私に喜びながら、さまでにも無い指の火傷を見之よがしに舐めて、

「お〻、まあ疼いこと。飛だ災難でございます。」

と片手では膝を撫る。

「お前が他を馬鹿にするからさ、主の罰といふ者は可恐ものだ。」

と笑ひながら封を開く。

「覺えてらつしやいましよ。主の罰だなんて、私は罰の中るやうな那麼惡いことは未だ致しません。」と唇を喰反して側目をする。

「それおや以後爲る意だね。」

と取出す文は半紙の八折、披けば假名八分に細々と認めてある。

「おや〱大層綺麗に書いてある。何を這般に書いたのだらう？」

と樂みさうに見廻しながら、づる〱と炬燵へ辷込む。玻璃燈を寄せて（御ひらかせ）に掛ると、横合からお增が首を出して、氣味惡さうに覗け

ば、主婦は忽ち振向いて、
「お前の見る物ぢや無いよ。」
「あら、御新様、少しお見せなすつて下さいまし。私は未だ附文といふものを見たことが無いんでございますから。」
と一向洒落でも無い様子。主婦は呆れた貌で、
「當然さ。度々這般ものを見て耐るものかね。」
「でも、一躰恁麼事が書いてあるんでございます。」
益顔を出すので、主婦は一寸文を隠して、
「其を聞いて何為るのさ。」
「何といふ事はございませんけれど。」
「何所か違る所でもあるのかい。」
「あら！　よう御座いますよ。」
「それぢや見なくっても可いぢやないか。お前たちが這般ものを見ると

毒になるからさ。」

此時勝手に人聲がする。主婦は聞付けて、

「おや、誰だらう？」

お增は姑く耳を澄して、

「ぢやございませんか。」と目授をすれば。

「然ぢや無い。」と主婦は首を掉る。

直に話聲が歇むと、お增は勝手へ向つて、

「お峯樣、誰？」と呼べども寂然として聲無く、唯跫音の近くのが聞える。主婦は一心に手紙を見て、眉を顰めたり、微笑を含むだり、側にお增は見ぬ風をして、遠くから拾讀をしてゐる。

そろりと襖を啓けたのは、小豆色の綾羅紗の外套を引被けて、焦茶の獵帽を目深に冠つた、町人躰の三十歳そこ〳〵の男、軀幹の細小の、色の淺黑い、眼色の黠い。一圓といふ所を弗一枚と覺えて、直に横濱の商館

の名でも列べさうな人物。
お増は何心無く振向いて呀と驚く。　主婦は其聲に驚いて顔を擧げると、
これも驚く。
起上りながら文は手早く懷中へ隱して、炬燵を出ると、お増は直に客の
裀を取りに立つ。其跡に例の封筒が遺ちてゐるのを、主婦も氣の着かぬ
間に、男は竊と拾つて袂へ入れて、
「今日歸つて來ましたから早速。」
と坐りながら粗雜に頭を下げる。
「珍しく實があるのね。」　と主婦は嫣然。
「これは御挨拶。」
「人の噂ぢや東京へ行つたのは嘘で………。」
「事實は借金で身を隱したんですか。驚きますねえ。」
と額をぴつしやり。

「冗談ぢやないよ、眞箇に東京へ行つてたの？」
「先づね。」　と男は指頭で煙管を廻してゐる。
主婦は躍起となつて、
「先づねて濟むのかい、貞樣。」
「私の方ばかり濟まないんぢやございませんよ。」
「おや、異なことをお言ひぢやないか。それぢや、何かい、私の方にも濟まない事があると言ふんだね。」
男の顏をぎろりと見て、
「好い加減にお爲しよ。罰あたり！」　と横を向く。
「どうせ罰中りでさ。這般野郎には、貴方のやうな御方は過ぎてます、へえ、冥加に餘つてます。」
「また御株の怨言だ。誰もそんな事を罰中りとは言ひませんよ。」
「其外には罰の中るやうな覺えそまあ有りませんね。」

「他にばかり氣を揉ませて、浮氣な眞似でもすりや、罰も中るのさ。」
「その罰なら、男にも中りや、女にだつて中りませうね。」
「知れたこと。」　と主婦は綺麗に言放てば、貞の字は鼻の頭で笑ひながら脂下る。
「女にも中るのが如何したのさ。」
「中つたら御氣毒樣見たやうなものでね。」
「何だね。何を妄語を云つてるのさ。」
男は何とも言はず、冷笑をして、袂を搔搜りながら、
「紛擾て悉皆忘れてゐた。つまらない物ですが、わざと御土産の驗に。」
と勿躰らしく例の拾物を出しかけて、
「宛名は玉河樣。裏を御覽じろ、御ぞんじかが身上さ。」
と主婦の前へ突付ける。突付けられたのは更に驚かぬが、何の間にか之を拾つた早業には呆れて、主婦も少しは慌つたやうに見えたので、男は

茲ぞと刳りに懸る。

「如何ですな、この御土産は？　是なら屹度御意に入りましたらう。さあ何卒御納めなすつて下さい。御遠慮には及びません。貴方の好いた者を貴方が可愛がるのだ。誰に遠慮も無ければ、罰の中る憂も無し。私一人が間抜になりや、それで事は濟むんです。間抜は天成だ。とてものことに立派に間拔にならうぢやございませんか。貴方も刷毛次手だ、思切つて、一層うんと間抜にゑて下さい。外に恁云ふ御代が出來たから、お前は不用にするんだとおつしやりや、私も男だ、それを切てとは願ひ難い、御挨拶次第綺麗に引退りやせう。」

煙管を右でぽんと擊いて、左の肩をぐっと突出し、

「ねえ、然ぢやございませんか。」

「大相凄味ねえ。」　と主婦は平氣でゐる。

「なんぼ間抜でも腹が立ちや、ちつとは凄味にもなりませうよ。」

「貞様、お前ほんとに腹をお立ちのかい。」
「嘘の實のと、腹の立分をするやうな、そんな器用な男ぢやありませんのさ。」
「おや御免下さいよ。」と懐中から例の一通を出して、
「これは今の御土産の御禮までに。」
「難有うございますが、此は何でございます。」
「それは手紙と申すもの。」
「へえ、手紙？　之を如何しますんで？」
「解らないね、恁うするのさ。」
と雨手に展げて、男の顔へ擦りつける。
男は其手を拂除けて、
「えゝ面白くもねえ、今更見たかありません。」
「見たかなくっても、見せずには措かないよ。」

「そんな物を見せられて、おたまり小法師があるものか。さあ、見せられるもんなら見せて御覧なさい。」
と目を閉つて、燈の前へ顔を突出す。
「馬鹿々々しいよ、這麼手紙ぐらゐで！」
と一握に其文を揉潰して、男の頰へ敲きつけると、故と慌だしく拾上げて、
「やれ〳〵可哀さうに。好いた、惚れたと、口の頭ぢや巧い言を云つても、陰へ廻れば皆此通だ。大方私の手紙なんぞも、此御ぞんじ様の前ぢや御同然な目に遭はされるのだらう。其を考へると、他人のやうには思ひません。」
と膝の上に展げて、丁寧に皺を熨しながら、
「女といふものは、薄情なもんだ、浮氣なもんだ、信にならないもんだ、可恐もんだ、憎いもんだ。」

と諷刺を言ひ〳〵、文言を見てゐる。

「男といふものは、愚痴なもんだ、水臭いもんだ、惡く氣を廻すもんだ、人の心も知らないもんだ。」

と主婦は烏府の中で切炭を割つてゐる。男は呢と文を見てゐたが、卒然に、

「畜生！　巧な文句を列べやがる。」

「何と書いてあるのさ。實は未だ悉皆見ないんだよ。」

と主婦は膝を進めると、一寸突戻して、

「幾度御覽遊ばすのさ。」

「あれ、眞箇に。唯今來たばかりなんだもの、何が書いてあるか知りやしない。」

とくの字狀になつて覗込む。

「死ぬほど惚れたと書いてあるんでさ。お賴み申しますぜ。」

「知らないよ。私の方は死ぬほど否だ。」

「など〻仰有るが、こんなに慕はれて見ると、萬更悪いことはありますまい。」

「いくら慕はれたつて、可愛くない男もありや、邪慳に爲れても思切れない人もあるのさ。」

「へ〻え、成程。」

「世は樣々ねえ。」

「どうか左樣さうで。」

「勝手におしな！」と力まかせに突倒せば、

「邪慳に爲れても思切れない人もございます。」

と起上る所を又突倒して、

「なるほど色男といふものは力の無いものね。可哀さうに。どれ起して遣はさう。」

「上げたり下げたりといふ事は聞いてゐたが、倒したり起したりは新しい。」　と手を執られて起直る。
「時に箇御ぞんじといふのは誰ね。」
「お前樣も大方知つてる人。」
「はてね、私の知つてる儕輩にや、こんな時代な眞似を爲る奴はありやせん。私始め、かうと思つたら、構ふ事は無え、衝つて碎けますさ。」
「その癖餘り出來た例も無いんだらう。」
「不思議に唯一つ！」　と異な手付で頤を撫でる。
「そのかはり婆だもの。」
「婆？」　と呆れたやうに、故と眼を圓くして、
「馬鹿に實があつて、萬事に氣が着いて、親切に世話をしてくれる所は婆さね。」
と味に持たせると、女は口を結むで笑つてゐる。

「へん、餘り婆にしておくんなさんな。」（惡く言はれりや腹が立つ）と泣びた吭で寸許轉す。

「久ぶりで一聲聽かうか。」

「手前の方こそ、さあ承はりやせう。」

「何をさ。」

「はて知れた事、其方に心を通はす男。」

「高島屋！」

「いや、恁なつちやお仕舞だ。眞面目々〳〵々々。」

と急に坐住を正して、

「眞箇に誰ですよ。」

「ぢや言つてしまはうか。」

「つい撫付けておいてたもと、傍に立れば女房も。」

と今度は太棹でゆく。

「今晩は奈何したのさ？　否に浮れてるよ。」
「いつそ全然いはしやんせぬかといふこといなあ。」
と未だ稲川の女房でゐる。
「えゝ、もう此人は。」
と打ちに懸れば、男は其手をぐつと掴むで、
「ぢや眞面目に誰ですといふのに。」
「本氣で聞かないから張合がありやしない。」
「本氣、本氣、本氣に團扇。」　と又洒落る。
主婦は捉れた手を振拂つて、ついと炬燵へ入ると、男は直に其傍へ寄つて、
「憤つたんですか。」
「知らないよ。」
「そんな事を言はずに。」　と無理に此方を向かして、

「眞箇に聞きますよ。私だつて氣になりまさあね。さあ聞かして下さい。よう、聞かして下さいといふのに。」

「煩いねえ。」

「煩いは情無い。」

散々弱らせられて重々恐入り、やう〳〵御機嫌の直る所へ、酒の支度をして、丁度お增が膳を持つて出る。不取敢差しつ差されつ、附文の顛末を物語る。

「へえ、成程、勝見の、此間東京から歸つて來た、大分粧けてる、一寸樣子の好い。」

「如何だか。」

「如何だかぢやありませんよ。彼は恐入つたね。尋常の勝負ぢや少し引退る。彼は手剛うごす。何しろ金が滿とあつて、容色が好くつて、扮裝を飾へてゐやうといふんだから、餘程油斷がなりません。」

「氣障だよ。如何するものかね。」
「所が、いつか如何かなる奴だから可恐い。」
「憚樣だね、そんな浮氣なんぢやないよ。」
「大丈夫ですか。」
「大丈夫だよ。」
「その大丈夫が竹の脇差だから、どうも不安心でならない。」
如何に陳じても、男は氣を廻して、何處迄も疑念を霽さぬので、那麼事情では無い證據に、お增を呼付けて、事の次第を明細に聞かせれば、話は其で分つてゐるが、肝腎の貴方の心が知れないと、訧出して、摩つた揉むだの擧句、口頭では死にもする、實があるなら躬行で見たいと言懸ると、女も負けぬ氣で、
「四五日内に如何かしてお目に懸けませうよ。」
と意氣込めば、男もぐつと嬉くなつて、

「如何して？　えゝ、如何してね？」
「如何しやうと私の勝手さ。」
「でも御座いませうが、其處がそれ安心の爲といふ奴ですから、一寸筋書だけ聞かして下さいな、ねえ、貴方。」
と猪口の雫を輕く切る。
「まあお重ねな。」　と主婦は銚子を執る、其手を支へて、
「今夜は些も飲けないぢやありませんか。」　と無理に盃と取換へる。
「醉はして聞かうと謂ふのかい。」
「何しと、然な深い企圖のある男ぢやございません。御覧の通り此限の人間ですから、人樣が馬鹿にして、手前といふ主あるものへ、はい、穴なんぞを附けまする。是が眞箇にふみつけにされたのでございませう。」
主婦は默然で薄笑をゑてゐる。男は鍋の物を摘むだ箸を取直して、膳の縁を丁と撃き、

「ねえ、一寸聞かして下さいてことさ。何も然う焦らさなくつても可いぢやありませんか。貴方は一躰氣強いよ、どうも殺生だよ。」
主婦は忽ち一笑を催して、
「氣強いのさ、どうせ殺生なのさ。それだけ解つてりや澤山ぢやないか。その氣強いのも殺生も、誰ゆゑだと思つてお在だ。眞箇にお頼み申しますよ。」
「これは恐入つた。」と仰山に顏を顰めて、
「騙撃の嬉がらせなんぞは感心しませんね。」
「おや、嬉がらせだとえ? 私は何もお前樣に嬉がらせを言ふ因緣はありませんよ。心に在るから、在ることを言ふんぢやないか。解らないのも大概にしてお措きな。」
「恐入りました。」と男は故と優しく頭を下げる。
「恐入つたら、順しく四五日待つてお在なね、其時成程と言はして見せ

るから。」

「其時は其時として、一寸まあ今晩の所は何いつた寸法なんで。」

「だから、殺生を爲るのさ。」

「え、殺生？　殺生なんぞして何爲るんで。」

「何爲るものかね、お前樣に見せて疑念を霽させるのさ。」

「手前に見せて？　疑念を霽させる、それゆゑに殺生をする？　難有い

。」

と一句毎に手の舞素手ゝ古の如く、

「畜生、色男め！」

と我と我膝を思入れ抓る。

（六）

翌日の午前に貞造は歸る。直に主婦は硯匣を出しかけて、炬燵を机に、筆を把る手を頰杖に支いて、左に卷紙を持ちながら、石山寺の紫式部を一筆書にしたやうな態で、姑く案文してゐたが、軈てのことに筆を下して、えっちらおっちら一行許書いたかと思ふと、引割いて丸めて、噛潰して唾壺の中へ入れて、復書いては復噛潰し、稿を更むること四五遍にして、十行餘漕着けたが、前を見返すと、氣に入らぬ字が三箇ほど有つたので、之も亦唾壺物にして、新規蒔直しとする。

仕立上り一尺二三寸の玉章を、午後一時前にやう〳〵卷納めて、甚く慒然した顏をして、休息の煙草を喫しながら、まじ〳〵上書を眺めてゐる所へ、お増がのっそりと入つて來て、

「御新樣、御飯は如何でございます。おや〳〵御返事が出來ましたんで

ございますか。」
と珍しさうに手紙を視る。
「馬鹿々々しい、肩が凝つて來たよ。少し揉むでおくれな。御膳は未だ後刻で可い。」
お増は主婦の背後へ廻つて、頻に揉むでゐる間も、手紙に目を放さずにゐたが、
「御新樣、その勝見の勝といふ字が、それぢや違やいたしませんか。」
「何違ふものか。」と空嘯いてゐる。
「あら、違ひますよ。」と疊みかけられて、主婦も少く覺束なくは思つたものゝ、下女に尤められたのが業腹さに、
「生意氣お言ひでないよ、知りもしないで。」
と頭ごなしに爲る。お増は躍起となつて、
「違ひます、違ひます。左の方の片身は、一躰ちよいの、棒の、撥るの

が、御新造のは、ちよい、ちよい、棒でございます。」
と伸張出して、肉月と行人偏とを疊へ書分けて見せる。主婦は其を見る
でもなく、見ぬでもなく、何を小癪なといふやうな尻目づかひをして、
「私の習つた勝の字は如箇さ。お前は何處で習つたのだい、田舍だらう。
私のは東京で敎はつたのだ。お前のは、それは田舍の字に違ひ無い。」
「田舍だつて、貴方、何も字に異はありやいたしません。」
とお增は何かに付けて田舍がられるのを、平常憂きことに念つてゐるの
が、字まで田舍と言はれて、噛ひつきたいほど腹を立てる。
「だつてお前、第一言語からして違ふぢやないか。だもの、字だつて違
ふかも知れやしない。」
「それぢや私は晩に屆ける時、勝見の若旦那に聞いて見ます。」
「何だね、那麼事を見つともない。」
「見つともなくつても管ひません。私は餘り悔うございますから。」

「管はないことがあるものかね。餘計な事をお爲でないよ。」と主婦の聲色稍厲しいので、お增は眞赤になつて默つてしまふ。鹿角菜の散れたやうに、主婦の辛うじて躙得たる上書は、實にお增の說の如く、勝の字の扁が違つてゐる。

然し待焦れた身には、安ぞ肉月と行人扁とを問はむや、勝の字が負といふ字になつてゐやうが、少も管はぬ。唯萬遍なく墨の付いた白紙であれば、二王、旭、素の眞筆よりもづんと貴いので、お增の手から受取るや否や、內懷へ捩込みの、一散に立還つて、姑くは開封も爲ずに、上書ばかり眺めてゐる、小兒が饅頭を皮から蠶食して、次第に餡へ近くのを樂むが如く。

天地萬物の本源を究め、森羅萬象の實相を明むる哲學者と雖も、觀來れば元是造化の膝下に戲るゝ小兒に過ぎず。琢次は餘念無く饅頭の皮を咬盡して、舌頭纔に餡に及べば、其甘きこと蜜より甚しく、骨も性根も蕩

けるやうに、手こそ惡いが、文こそ拙いが、數々嬉しい言を書いた末に、
來る十日の夜八時頃に庭の木戸まで御忍被下候やう念上げ參らせ候。
占めたぞ。 到頭御忍被下といふ事になつた、今日が六日で、七八九十、（と指を折つて）間三日だな。 いや大概恁だらうと想つたよ。 然し案外だ。何しろ彼美といふものは鮮い。 あれを手に入れたかと思ふと我ながら可恐い。 尤も彼奴も何分か屬意ゐたのだ、けれども其屬意ゐたのが可恐いよ。 所で、 これから段々逢ふほど深くなると。 深くなるは可いが、 其極如何する？ 無論夫婦になる譯には行かず、 然かと云つて、一生關係してゐる譯にもいかんて。
一躰先方は如何いふ思慮で、 這麼返事を寄來したのだらう。 と云つて見ると、 此方は如何な了簡で文を遣つたのかといふ問題が起る。 何も然う後來の事まで考へて爲た譯ではない、 畢竟惚れた一圖の無分別だ。
此方が然なら先方だつて然だらう、 まづ然だな。 男だつて然だもの、況

やつぱり我の文を見て、勃々となつた而已のことだらう。吁、今更那麽理窟を言つた所が爲樣が無い、遣る所まで遣つて見るのだ。然し嬉しいな、彼が我の物になるのだから。

（七）

今宵忍ぶと約束の日、朝から點々白い物が落ちて、正午頃暫く底日が射して、忽ち掻曇ると、降るわ降るわ、一尺と先は見えぬ中を、犬は駈る、兒輩は騒ぐ。竹は見る間に撓の窓から、琢次は頗る當惑また顔を出してゐる。

是は窮つた。いや又殘酷に降るではないか。此勢で夜になつたら大事だぞ。大事は可いが、家が出難い。此雪に夜々中何所へ行く、と尤められたら挨拶に窮る。雪見に！　雪見なら明朝に爲なさいと來るだらう。夜の雪見は格別です！　も異なものだし。そんな醉興な！　健康の毒だ、と喝られたら事畢矣だ。屹度また喝られるに違無しだから、豫め之に應ずる手段無くむばあるべからずだが、はて、何と爲たものであらうなあ。いや有焉、有焉、有焉。これから出かけるのだ。今三時半だから、四時、

五時、六時、七時、八時まで、四時間半を何所かで暮すとして、まづ雪見といふ名義で、洋服、長靴、衿卷に手袋、之に二重外套、いかにも仰仰しい裝束をして、一寸其邊の景色を見て來ます。何所へ行く——八幡の森へ、とか何とか言へば、其所が躰好く出られる。出てから四時間半を何所で暮したものであらう？　それは又機に臨み變に應じて計を運すか。左も右も出さへ爲れば宜しい。

善しと頷くと共に障子を閉てゝ、戸棚から曳出したのは、中位に古びて、二三箇所鼠喰のある、大一番の柳行李、蓋の胴に勝見とてある羅馬字が消々に殘つてゐる。中には洋服がぎつしり充つて、いづれも廢物同樣の着古しに遇はれてゐるが、其實細袴の裾の切れたの、膝の拔けかゝつたの、上衣の肩の傷つたの、色の褪けたの等は、十着餘の中に二三着よりは無いのである。琢次は數の中から最も見好げなる一領を擇むで、之を着けると、姿見の前に立つて

「醜いなあ、始めて會ふのに此服裝は！」
傳聞く、深草の少將は華美なる直衣に錢を召してぞ通はせ給ひける。今昔の差違こそあなれ、人の心に異無き勝見の若旦那は、風通の羽織に外套を引纏ひ、傘は兩面の綾甲斐絹といふ所好であつたものを。
風は萬字に吹廻し、雪は巴と降頻る。往來の絶えたる裏通は、積るがままに路も無くて、深い所は半長靴をすつぽりと呑む。毛繻子の傘を矢面に翳して、外套の翼を斷れるほどに飄し、眉毛にまで雪を點けて、赤くなつた鼻の頭から、老人の垂すてふ物を微く露して、驀地に進行くのは、問はでも著き勝見の若旦那、計圖に中つて、家の手前は首尾ゑたもの丶、出てからの當惑は夥しい。これから夜の八時迄四時間といふものは、行くに所無く、歸るに家無く、中有に迷はねばならぬとは、毎朝湯で顏洗つて、衣服を煖めて被る人の、抑爲し得べき業ではない。今に暖めてくれる奴があるのさ、と其を念へば、紅爐、金樽、狐裘、錦蓐も屑ならず、

颺雪何ぞ恐るゝに足らむやと、如此強いのではあるが、同く人間の躰で
あれば、他の寒いのは琢次も寒い、冷たいのは同然に冷たいから、その
四時間を全然傘の下で暮したいことは無い。そこで、門を出る時から、
何所かに中宿はあるまいか、と頻に考へたのである。
長らく遊學してゐたので、土地には朋友といふものが無い。懇意の病家
はあるが、何とやら行難い。料理屋でも可いが、顔を知られてゐるのが
拙い。八幡の森の際に掛茶屋が一軒ある。便るべきは先づ是而已である
が、森まで十三町といふのが大分徹へる。最少し近間に席料の一圓約は
苦からぬから、炬燵をして晩まで舍いてくれる所はあるまいかと考へた
が、これが勝見の若旦那でなかつたら、隨分有るまいものでもなからう
が、御人躰が御人躰だけに、迂濶とした所へは飛込み難い。
彼此工夫に盡きて、不得已八幡の森と志して、田圃に出ると、四望一白
茫々として垠無く、風は益荒れて雪は愈凄じく降懸ける。その中を唯一

人の心細さ。これから四五町も行つたなら、路が埋つて還られぬやうになりはせぬか、と内心少く可怖くなつて竟に引返す。

左右爲てゐる間、寒氣は段々心に徹へて、腸まで凍つて來る。手袋は穿めてはゐるが、傘を持つのも覺束なく痺れかへつて、爪頭は啖取られるかと想ふほど岑々と痛む。

行惱むで立住つたのは、田圃際の新開地の盡頭に七軒續の棟割長屋がある、その極端の燒芋屋の前。入口には吹雪を防ぐ爲に雨戸を一枚横にして、平常よりは引込めて草鞋が四五束ばかり垂下してある側に、例の看板の大行燈を見せて、家の中は微黯く闃寂として、休業同然の景氣である。

知らぬ他國の道中ならば知らず、我故郷の而も立派な門構の居宅から、三町とは離れぬ所で、いかな〳〵、此勝見琢次が芋屋の閾を跨ぐ人物でない。けれども此日は進むで跨いだ。何故跨いだ？　寒いから跨いだ。

それが尋常の寒いのではない、實に息の根の遏るほど寒いので、外見も、外聞も、見識も、勿躰も、我も、學者も、何も彼も皆忘れて、何と云ふ事は無しに、ひよろ／＼と跨いで、

「少し御免なさい。」と情無い聲が出る。

「お芋をあげますか。」と障子を放けて現れたのが、四十恰好の百姓ぢみた亭主。

「芋も買ふが、寒くてならんから、少し内へ入れて休ましてくれんか。」

と傘を窄めて身顫ひをする琢次の風躰を亭主はぢろ／＼視ながら、

「さあ、お入んなさい。」と否々戸を排ければ、それを待ちかねて琢次は躍込むなり、無遠慮に竈の陰へ入つて、

「えゝ、寒い、寒い！　火を一つ焚いてくれんかな。」

と言へば、亭主は生返事をして、不景氣な顏でゐる。琢次は其と曉つて、

「代は出すぞ、焚火代は。」

と廿錢銀貨を一片、竈の角に丁と置けば、亭主は忽ち腰を卑くして、
「いゝえ、そんなに戴きましては何でございます。」
と拙い木彫のやうな手を無性に揉みながら、拵へたやうに笑ひかける。
「まあ可いから取つておけ。而して早く焚いてくれ。えゝ寒、これは耐らん。」　と出來るだけ肩を竦めて齒を咬緊る。
亭主は現金に勉勵しく、空いてゐる釜に水を張つて、其下へ不斷に藁を投込むと、見る〳〵火燄に渦巻立つて、琢次の體からむぽっ〳〵と湯氣が出る。
「おう〳〵、　旦那樣は宛然蒸立のやうだ。如何でございます、その上の御召をお脱ぎなすつちや。此方へ干して置きませうで。」　と背後へ廻つて脱がせながら女房を呼ぶと、奥から出て來たのは、なるほど是ならば、黒縮緬の五紋を被せても、紛ふ方無き芋屋の内君。のそりと顯れて琢次を見ると、無作法に挨拶をして、土間へ下りかける所を、亭主は振

向いて、
「茶は沸いてるかなあ。」
「あゝ沸いてるだらうよ。」
「お客様へ一杯あげな。さうして盆を一つな。」
少焉すると、鳶色の液躰を盈々く入れた、玉轉の景物見るやうな湯呑を、挽物細工の茶托に載せて、目三分ぐらゐに持つて出る。
亭主は盆を受取ると、火の無い方の釜の蓋を啓けて、切の大きさうな、素性の善さうなのを七八箇鑒識まて、
「旦那お一つ如何でございます。」と愛想に出す。
「あい、難有う。」と琢次は一寸見向いたばかり。

（冷熱）の一篇はボッカシオがデカメロンの一節、即ち其第八日に方りてパムピニアの話説せる物語を、小説　に敷衍せるものなり。始め讀賣新聞に掲げた

りしも、病の爲に中廢して、その(冷)をだに說かで止みにしを、今や改版の需急にして、稿を續くべき遑無ければ、姑く原作の梗槪を叙して之を補ふ。

今は昔伊太利フロオレンスに其名をヘレナと云ふ美しい若後家が居たのである。財が滿とあつて、苦勞が無くて。家內には氣に入の總が一人、誰憚らず所欲三昧の出來る所から、人知れず可愛い男があつて、そが入浸りの面白可笑く暮してゐた。

多感の人と學者は戀する例、爰に長年巴黎に留學をして、此頃歸つて來たと云ふので、大きに持囃されてゐるリニエリイと云ふ若紳士が、或宴會で此ヘレナを見染めたのである。

我を忘れて恍惚と其姿を眺めてばかりゐたので、女も悟つて、一番調戯つてやらうと云ふ了簡から、誘ふ水あらばの目授こして、散々に嬉がらせた。リニエリイは之から寐ては夢、寤めては現となつて、その事ばか

り思窮めてゐたが、漸く戀人の住居を尋出して、何とか言寄る術のありさうなものと、毎日其門の前渡を始めると、女は之を見付けたから、打折窓から姿などを見せて、例の否にはあらぬ樣子をして、面白半分に彌男の心を惱したのである。

於是リニエリイは益胸を焦して、彼婢に傳を求めて、媒を頼むで見た。出來る出來ぬは請合れませぬが、お話だけは致しませうと、此事情を主婦に話すと、ヘレナの言ふには、幽しく思ふは先方樣ばかりではない、此方も疾から憎からず思つてゐるのであるから、その御辭を聞いては飛立つばかりであるが、數ならぬ私のやうなものでも、名譽もあれば守るべき道もあれば、然う輕々しく御心に從つて、憂名を流すやうな事があつてもなりませぬから、其名譽にも道にも換へるほどの郎の眞實を見せて下さいまし。其上で左も右もなりませう、と婢に返事をさせたものである。

リニエリイの喜悦は夥しかつた。十の物は九までは成就したと、當面つては眞實の見せ方に苦勞をしたが、第一、人傳は惡かつた、と文を書いて頻に送る、喜びさうな物を心配して、精々と贈る。此程にしたら得心もしさうなものと思ふのに、其後は一向沙汰無し。

恁云ふ可笑い事があると、ヘレナは此一條を或時可愛い男に話したのである。男は之を聞くと、妬かずにはゐなかつた。一言二言云ふ内に口舌は縺れて、まこと調戲なら調戲である證據を見せろと男は云出す。見事疑を霽させやうと云ふのが發端で、それでは何日何時御出なさい、屹度見せる事があるからと約束をして、直にリニエリイの方へ緫を遣つて、さて此間は子細あつて打絶えてをりましたが、御眞實のほどは見えました。此上は積る御話が致したいから、某日は聖誕祭、好い首尾なれば、日の暮を合圖に宅の中庭まで忍むで御出を待つ、と通じたのである。

歡天喜地のリニエリイは夢なら覺めよと、其日を待つて、時刻を違へず

忍むで行けば、果せる哉妐が手引に出て來て、中庭へ入れた。

ヘレナは可愛男を招びの、二階座敷で夕飯を食べながら、さてかねての疑を霽すのは今宵、あの若いのに心の無い證據は、騙して中庭まで誘寄せてある。幸ひ雪はいよ〳〵降つて來る、要無い殺生も男ゆゑ、一つ雪責にして御覽に入れやうから、と今夜の魂膽を話して聞かせると、男は横手を拍つて、おもしろい。

忍ぶ門のリニエリイは天晴色男の氣でこそあれ、酒の肴にされやうとは、神ならぬ身の白雪や、降積む庭に唯一人、と唄も何も切れず、切れるやうなのは手足の冷たさ、見る〳〵四邊の白妙となる心細さも、君ゆゑならと辛抱して、胴顫を忍べば歯根が合はず、片時も早く今や〳〵と、奥から挨拶のあるのを待ちかねてゐた。

二階ではヘレナが櫻色になつて、今妐に氣休を言はせに遣つたから、甚麼樣子であるか、此から見やう、と男の手を引いて、竊に窓から中庭を

覘ふと、愬は愁然と雪の中に立つてゐるリニエリイを呼んて、折惡く主婦の兄が來合せて、今と云つては外して參るわけにもゆきませぬゆゑ、直に歸して了ひますから、最少し辛抱をなすつて下さい、と主婦の矩通り實しやかに陳べてゐる。
妾とは知らぬからリニエリイは噴々と頷ひながら、私にはお搆ひなさるな、待てとならば此身が氷になるまでも待ちませう、ではあるが、此雪に吹晒されて立つてゐる愁さ、何分御察しなすつて、少しも早くお客を還して內へお入れ下さい、と泣聲になつて賴むのが能く見える。二人は之を見物して、何と私の心底は見えましたか。半分でも好いと思ふ男が假にも那麼目に遭はされうものか、考へて下さい。これで疑は霽れましたらう、と男の肩を撫けば、女の頰を突くと云ふ睦じさ。上は極樂、下は地獄の四苦八寒、雪は彌降る、寒氣は益身に沁む、小蔭も無い所に茫然立つてゐれば、骨までも凍ゆるので、庭の內を彼方此方と往きつ還りつ

して、凌げぬ所を凌いで、もう客は還るか、もう此戸は啓くかと、我身を持扱つてゐたが、待てども〳〵還るべき客は還らず、開く答の戸も開かぬ。

其内に夜は次第に更けて、雪は益降頻る。外の人は甚麽恰好をしてゐるやら、と飽くまで玩る氣の二人はわざ〳〵臥戸を出で、又窓から覗いて見れば、リニエリイは居ても起つても耐らぬので、歯を咬緊つてはあはあ言ひながら雪の中を跳廻つてゐる。

私の腕は凄いものでせう、音樂無しで那麽に躍らせる。未だ是では御慰が薄いから、殺生次手に最少し罪を作るから、是非見て下さい、とヘレナは獨り二階を下りて、中庭の戸口に立寄つて、鍵孔からリニエリイを呼むだのである。

此聲は實に戸外の人には何より嬉しかつた。凍死をまさうです、助けると思つて、早く此を啓けて下さい、とリニエリイはその戸に縋着いて顫

へた。內から女の云ふには、些個の雪を那麼に有仰ることもありますまい、巴黎の寒氣は未だ〳〵強い筈でございます。誠に相濟みませんが、兄が未だ歸らぬので、どうも此を啓けることが稱ひませぬ。長くとは申しませぬ、もう少々怺へて下さいまし。

リニエリイは泣聲を出して、待てなら待ちまするが、此雪の中では命が續きませぬから、せめて戸の內へ入れて下さい、物置の隅でもさら〳〵厭ひは致しませぬ、と手を合さぬばかりに賴むだのである。

爾時女の言ふには、御難澁のほどは御察し申しますが、直に其所の座敷に兄が控へてをりまするゆゑ、此戸を啓ければ聞えまする、聞えれば、此夜更に何事と思つて出て參りませう。それでは今まで御待たせ申しました效も無ければ、又折角啓けました效もございますまい。なるほど然云ふ事ならば怺へませう。その代に急いで首尾して下さいまし、又煖爐の割れるほど火を起して置いて下さいまし。其を樂みにと申

したいが、もはや手足は感覺が失くなつて、今にも拖げて了ふかも知れませぬ、と餘りの愁さ情無さにリニエリイは男泣の涙を嚙む。

女は彌落着拂つて、これは御辭とも思ひませぬ。郞は胸の思は身を焚くばかり、と文にもお書きなされた通り、戀と云ふ熱を有つてゐらつしやるのではございませぬか。それに寒いの凍えるのとは、あのお文は妄をお書きなされたのでございますか。大眞實と有仰つた郞に妄は無い筈、とヘレナは奥へ引込むで了つた。

さては一杯陷められたか、とリニエリイは地鞴を蹈むで悔しかつたが、今更何と爲方も無い、唯急立つ胸を摩つて、此上は少しも早く歸らうと、木戸に手を懸ければ、錠が下りてゐる。之は待飽倦むで中途で歸るやうな事があつては、雪責の趣向が思はしく無いと云ふので、婢に吩附けて、手引をして内へ入れた時に此を固めさせたものである。

今は歸ることさへ稱はぬ。恁までに巧むだかと、憎さ腹立しさに寒いも

忘れて、リニエリイの怒氣は烈々として火のやうであつた。まゝよ凍死ぬとも此恨を霽さでおくべきと、せめては復讐の手段を考へて、時の移るを忘れてゐた。

やう／＼夜が明けると、妼は素知らぬ顔で出て來て、寔に何とも申譯は御座りませぬが、昨夜の御客樣は如何しても御歸りにならず、到頭御宿になつた爲に首尾はなりかねて、さぞやお寒かつたでござりませう。必ず旦那の麁想ではござりませぬゆゑ、ならぬ所も御勘辨あそばして、近い内に改めて又好機を申上げまするから、と躰の好い事を云つて、やうやう木戸を啓ける。

此奴も仇の片割と思へば、撲倒てくれうか、と握つた拳を息で煖めながら、私は昨夜のやうな難儀をまたことはありませぬ。然しながら夫人の御心に懸けられて御見舞に御出下された御深切は忘れませぬ。暮々も昨夜の雪の苦を憐と思召すならば、是非近い内に好い首尾さして、此憂を

露さして下さるやう、御言傳を賴みますると、虎口を逃れて我家に歸ると、直に臥床に入つて其一日寐通して、目が覺めて見ると、手も足も痺れて利かなくなつて了つた。

早速醫者を招いて、診察をしてもらひ、藥を服み出すと、さて急には癒らなかつた、二月餘の長患をして、やう／＼舊の體になつて見ると、一日も早く此復讐をと云ふ念は熾になつて、夜も晝も其が忘られず、機も有らばと手藥煉を引いてゐたのである。

話下不在へレナはいつか男に棄てられて、面影の窶れるまでに鬱いでゐた。婢は心配をして、如何ともして旦那樣の御心を慰めたい。それには此樣に焦れて、不實の男でも惚れたが因果で思切られぬゆゑの御病であれば、左にも右にも縒を戻すより外は無いが、はて何としたら可からう、と思案に晦れてゐる窓前をリニエリイが通る。幸ひ、彼人は巴黎で學問をして、不思議の奇術を心得てゐると云ふ噂、その術の功力を以て、何

どか爲てもらはうと、思付をば主婦に話せば、苦しい時の神頼で、それも可からうとなつた。

於是又然が使に立つて、實は云々の次第であるが、何卒先生の奇術を以て、此戀を昔に歸すことはなりますまいか。御禮は如何やうとも御望に任せまする、と他事無く頼めば、リニエリイは快く之を承諾して、恨は恨、頼は頼、さぞ御心苦しい事であらう。なるほど私が請合つて此願成就させませう。委くは御目に懸つてと、日を約して、兩人はサンタルシアデルプラトオで會つたのである。

ヘレナは男に捨てられた恨と悲で、おのれの他に愁かつた事は忘れてリニエリイの顔を見ると、涙を流して此始末を頼む。

リニエリイは眞顔になつて、必ず御心配には及びませぬ。不肖多年巴黎に在りて學得たる道は多けれども、最も力を籠めて修行ましたのは奇術であります。抑も我奇術の不思議と云つぱ、晴天に雨を起し、海上に巖を

浮ぶるなどは瑣々こと、凡そ此天地の間にあらゆる者を捉來りて、我意のまゝに爲むとするに稱はずといふこと無し。然りながら左道と稱へて善からぬ道であるゆゑに、好みて妄に用ふることはいたさぬが、外ならぬ貴方の事なり、別しては餘り切なる御頼につき、枉げて御引受を致しまするが、是は私が法を修するばかりでは可けませぬ、本人の貴方も行を勤めなければならず、又其行に毫毛なりとも懈怠あるに於ては、更に驗は無いのでありまするが、其行が辛うござりますが、御辛抱は出來ますか。容易ならざる荒行でありますゆゑ、その御覺悟を承はつた上でなくては、と念を推せば、如何なる辛抱をも致しませうと云ふ挨拶。

然やうなれば行の順序は恁であります。

まづ男の形代を錫で拵へてあげまするから、其を持つて月の傾く頃、七度川水に身を淨めて、その裸のまゝで高い所へ登るのであります。然して北の方へ向つて、右の形代を捧げまして七度咒文を唱へまする。其咒

文はいづれ記してあげます。此行は人に見られてはなりませぬゆゑ、極寂しい所に限ります。右の咒文を唱誦ると與に二柱の天使は忽然と顯れて、物を云ひかけらるゝに相違有りませぬから、其時は憶めず恐れず思ふ所を言はなければなりませぬ。天使の姿が消えたら、直に其所を下りて御歸りなさいまし。その夜の中に男が尋ねて來て、是迄の不實を詫びて、彌々深く貴方を思ふやうになりまする。

ヘレナは滿面に歡喜を顯して、此御恩は生々世々忘れは致しませぬ。アルノオ川は宅の直裏でござりますゆゑ、都合が宜しうござります。夏の事ゆゑ水垢離を取るのも樂でござります。又少し參れば寂しい所に古塔もござりまするから、彼へ昇りまして行を勤めませう。何分早速にお願ひ申しまする。心得ましたで其日は別れた。

リニエリイは躍々喜むで、まづ怪しげなる錫の形代を作つて、咒文と云ふのは任口の文句を紙に記して、之を恭しくヘレナの方へ送つて、さて

日が吉いに因つて、是非今夜行をお勤めなさるが宜しいと指圖をして、其身は一僕を從へて、ヘレナの近所に住む友人の方へ出掛けたのである。ヘレナは時刻を計つて川原に出て見れば、月の光と水音ばかり、天地靜に夜は更けて、今は見る目も無しと、衣類を脫捨てゝ叢間に推隱し、形代を抱いて川の中へ入つた。敎の如く七度水を浴びて、雪の膚を惜げも無く月に曬しながら、葎の路を蹈分けて塔の方へ行くのを、岸の柳の蔭からリニエリイは僕と與に醉へるが如くになつて視てゐたが、一時は氣も萎え、我も折れて、不如もう免して遣らうかとも念つたのである。見れば見るほど惚々とする姿、苦めるは惜いものであると、姑くは慾も出たものゝ、それに就けても忘られぬ恨は中庭の夜の雪、あの色香に迷つたばかりに旣の事命を殞さうともした。此日頃憎い〳〵で何日かは目に物見せてくれうと、待ちに待つた今日今宵を、なほ懲りもせず雪の膚を見たばかりに、一年越の宿怨を帳消にされたとあつては、いとゞ立た

ぬ男の一分が腰拔となる。茲は石に噛付いても推耐へて、存分に慙面をかゝせて腹癒をする所だ、と弱る心を取直して、なほ樣子を窺つてゐると、良有つて雪の膚は塔の上に見はれた。

時分は好しと、リニエリイ主從は塔の下へ忍寄つて、早速梯子を引いて、其所に匿れて居ると、上では一生懸命、北の方に向つて七遍まで咒文を唱へて、隨分丹精を抽たつもりであるのに、約束の天使は忽然にも何にも皆無顯れぬ。待つたが〳〵沙汰が無い。人とは違ふ神の事であるから、催促もならず唯根好く待つてゐる内に、夏の夜は短くもはや東雲の空となる。

ヘレナも今は心着いた。さてはうま〳〵一杯吃されたか。雪の夜の復讐と云ふ氣か知らねど、それでも罪はまだ淺い。外に幾多も苦めやうのあらうものを。此夜の短い一晩が何であらう。裸にえたのを手柄か知らぬが、水まで浴せてくれて、結句涼しかつた、と私に嗤ひながら、梯子の

口に來て見ると、有繫に驚いた。無い、無い、下りる梯子が無くなつてゐる。

南無三、是は容易ならぬ大事となつた。此態で下りることはならず、夜が明けたらば、如何せう、と氣も動顚して、塔の上を驅廻つて降口を搜してゐた。日は竟に沖つて、立派に朝となつた。高い所には居るし、素裸ではあるし、遠くからは見えるし、面目は無し、身を縮めて壁に密着いて、途方に晦れてゐると、下から、夫人、お早うございますと聲を懸ける奴がある。竊と覗くと、リニエリイ。ヘレナそはつと思つて、餘りの無念さに泣出したのである。

リニエリイは反身になつて髭を撚りながら、夫人よ、天使は未だ顯れませんか、などゝ始める。ヘレナは彌悔しいやら悲しいやらで泣倒れてゐると、少し御話をしたいから顏を貸して下さいと云ふので、ヘレナさやうやう這出で、段々昨夜の事を詫びて、何を云ふにも女の身、此有ら

れも無い姿を見られては、死ぬにも勝る思であるから、此迄謀に乘つたのに免じて、去年の恨はもう忘れて下さい、と身を悶えて哀を乞うた。

リニエリイの云ふには、一々御尤の御辭、私とても哀を知らぬではないが、少しは考へて見て下さい。今貴方は涙を流して、此を下してくれと有仰る。私もあの雪に埋められて、寒の爲に命も絶々になりました、せめて戸の内に入れて下さいと、あれほど御頼み申ました、定めて御覺がありませう。其時貴方は快く戸を啓けて下さいましたか。それのみならず、他の苦をば肴にして、貴方は戀人と御對酌の雪見とは、はて御樂なことでございましたな。雪の夜中に外へ放出して置いても差支の無い犬猫同然の私のやうなものに、貴方のやうな御方が頼むの免せのと有仰る事はございませぬ。御難義と見掛けたなら、あの晩可愛がられた二階の御客樣が飛むで來て、御助け申すが至當でございませう。恁云ふ時にこそ命を捨てゝも盡すが、戀の誠と申すものかと思ひます。好い時に面

白い事をするばかりが戀の道でもありますまい。此は私がお下し申しては理が違ひますから、如何やうに有仰つても、私には御頼は聽かれませぬ。是も廻る因果で、我他に愁ければ、他又我に愁してありませう。罪無いものを苛み散した天罰なら、どうも今更致方はありますまい。若切て此天罰を免れたいとならば、其所から一思に飛むでお下りなすつては甚麽ものでござります。腦は碎け、手足は斷れて、死んだらば、其業晒も其苦艱も除きませう。一つ命を捨てゝ御覽になつたら如何です、と一向平氣なものでゐる。

ヘレナそもはや絕躰絕命、此期に及むでは戀人も何も要らなくなつたか、罪を釋して此を下してくださるならば、此身は郎に委せて、一生添るまい。此苦艱に就けて郎が雪の夜の憂も思當りました。然ほどに思つて下さつたかと、今の今始めて心着きまして、情無男の事は斷然と思切りました。前非を悔いて今日からは此身の一生を郎にお頼み申しまする心底。

さあ恁う申上げたからは、私は郎の戀人、その戀人をば這麼酷い目に遭はせて、手を拍つて見てゐられる郎ではありますまい、と言へば言ふほどリニエリイは傍痛く、怨言と嘲弄の有らむ限を訖來して、姿を隱して了つた。

日は益々高くなる、熱くなる、飢怠くはなる、疲れては來る、此上は不如飛下りて、死ぬとも活きるとも、二つに一つの覺悟を爲るより外は無いと、泣きに泣いてゐる所に、又リニエリイが小氣味の好さゝうな顏をして顯れた。せめては衣類だけも許してくれるやうに、ヘレナは只管賴むにそれほどの願ならば聽かう、と其在所をば訊ねて、これから直に取つて來て進ぜませうと、實は例の友人の家へ戻つて、晝食をして、一睡と出掛けた。

待てど暮せど衣類を持つて來もせぬ。此上にも騙されたか、とヘレナは益失望して、其所に身を投伏したが、夜前からの疲勞に昏々と微睡むだ。

塔の板敷は日光に炙られて、燒鐵のやうである、上からは灼々と照付けられる、割れるやうに頭痛はする、叢から起つ微蟲は紛々と身に集る、耐りかねて蹶起されば、はや午後の日脚は正面に塔の内を蹂躙して、身を忍ばせる小蔭も無く、烈暑は肌を刺して肉も裂けるかと想ふばかり。

此時リニエリイもやう〳〵目を覺して、又樣子を見に來たのである。へレナは其姿を見るより、絶々の息を勵まして、餘と云へば酷い成され方ではございませぬか。私の郞に憂目を見せましたは、雪の中とは云ひながら纔の一夜、その返報に宵からかけて明日も一日火責になさる御了簡でございますか。此苦艱を見やうより、何卒一思に殺して下さいまし。いつそ殺して下さる方が未しも慈悲でござりまする。殺す慈悲さへ御否とあるならば、此世の思出にせめては水を一盃お惠みなすつて下さいまし。

リニエリイは之をさへ聽かなかつた。一盃の水とは御易い御用。然しお

惠み申すほどならば、一升が一斗でも差上げますするが、僅一盃の水が上げられぬ理が宏にござります。御存はあるまいが、あの雪凍の爲には二月餘の長病を私は致しました。其折醫者の申したには、噫、貴方は命拾をなされました。此が時候が春先に向ふのでなかつたら、而して御齡が若くなかつたことなら、一生の不具になるところ。私は貴方の御惡戯で既の事手足を緩縱にするのでした。御聞き下さい、私は二月餘の長病を致したのでござりまする。その報讐を爲やうと思ふのに、今此で一盃の水を上げたら、何所に貴方の苦惱がありませう。雪のやうな其美しい膚をば黑焦にさして、一月ぐらゐは枕の擧らぬやうにして進ぜやうかと思ふのでござります。煖爐の割れるほど火を熾して置いて下さい、と過日御願ひ申した事がありましたが、其節は如何御取計ひ下さいました。今日の一盃の水は則ち彼夜の煖爐の火の御禮でござりまする。まづ折角御體を御厭ひなされまし、とリニニリイは思ふまゝ云つて除けた。

ヘレナは身を顫はせて、酷いにも程がある。彼夜の事を此までに執念く思つて、恨をお返しなさるゝならば、設も私が郎の御親類でも殺したことならば、郎は私を何の樣になさるでございませう。設も此フロオレンスを騒がした逆賊でもあつたならば、郎は何のやうな處刑をなさるでござりませう。如何なる極惡の罪人でも、今はの際の望ならば、葡萄酒さへも與ふるに、一盃の水も下さらぬか。鬼か、蛇か、人非人に物を言うたとて分曉はあるまい、もう覺悟したからは、立派に死んで神の御前で儞が罪は訴へる、と言ふかと見れば、ばつたりと倒れたのである。

此躰を見屆けて、リニエリイは僕にヘレナの衣類を持たせて、其家へ遣はすと、昨夜から主婦の行方知れずと云ふので、紘は泣顔で心配をしてゐる最中。云々の所に居ると敎へて、衣服を渡せば、それ、と駈出して古塔へ行つて見れば、折好くも、ヘレナの家の作男が、二頭の豚を見失つて、其を尋ねて料らず此下に來合せたのを、ヘレナが呼むで、今漸く

梯子を掛けた所。打疲れて立つほどの力も無い主婦は、作男が背負つて塔を下りれば、後から續く鯲は、梯子を陥過ねて、顛落ちて、腿を挫いて、起つこともならぬ。男の手一つに病人二人を抱へて、如何もならぬので、先主婦を内へ連れて、更に人を出して鯲を迎に遣つて、事落着する頃には其日も暮れた。早速醫者は來たが、ヘレナは引續いて劇しい熱病を患ひ、鯲も打傷の爲に寡からず惱むだとしてある。

（二十九年四月）

浮木丸

(一) 子おろし劑

むかし某の村に先祖代々の水呑百姓にて、仇名を塵塚の佐治六といふ男住みけり。

夫婦の間に子無きをも憂へざれば、神にも佛にも祈誓は懸けざりしに、女房一夜不思議の靈夢を蒙らずして、唯尋常の如く娠りぬ。

佐治六深く之を悲みて、女房に言ふやうは、

「嚊や、お前もまあ今度はお目出度のだ。お目出度のに這麼事は言ひたかねえけれど　金錢に不自由の無え家なら、子寶とか謂つてのう、赤兒の出來るほど結構なことは無えのだ、から目出度ともいふのだけれど、我曹の家と來ちや、衆には塵塚と謂はれる貧乏所帶で、夫婦さへ食ひか

ねてる始末だから、お恥かしい譯だが、鼠が一疋棲むぢやゐねえ。其中へ今度まあ、重々お目出度わけだけれど、呱々と出られた日にや、いよいよ御難澁は知れてゐら。お前も知つてる通り、是までに我は鎌で腹を切らうとしたのが二度よ。首を縊らうと思つたが三度半よ。五十年といふ短え命を五度半も死なうとしたのは、お前よくせきの事ちやねえか。其もお前色戀か何かで、添ふに添はれねえ義理からよ、未來へ往つて金の蓮の葉へ合乘をきやうといつたやうな意氣な筋なら、又そこの處がお話にもなるけれど、お前お飯と無理情死ぢや、餘り男が好く無さ過ぎやうぢやねえか。塵塚の佐治六樣のお勝手向は此始末だ。所へ又一人口殖ゑたら、お前奈何せうと想ふ。何、どうかなる？　借錢の辯疏ぢやあるめえし、どうかなるぢや濟まされねえ。其のどうかなる梗概を一寸搔摘むで話して見ねえな。其どうかなるといふ奴は何時も奈何かならねえから可笑い。先途は知れてゐら、親子三人鹹のやうに一つ枝へ垂下るか、

何、緣起でもねえ？　緣起でなくつたつて其通りに違へねえから仕方が無え。疊の上で首尾能く往生したところで餓死よ。ほい、又緣起でもねえか。そこで物は相談だが、小の蟲を殺して大の蟲を活さうといふのは奈何だ。」

「何を殺すのだえ。」

「小の蟲をよ。而して大の蟲を助けるのだな。」

「そんな謎見たやうな言をいつたつて、私には解らないよ。判然言ふが可いぢやないか。」

「判然言へば墮胎のよ。」

「胎見をかい。」　呆るゝ女房は少時夫の顏を打目戍りぬ。

佐治六は空嘯きて、

「夫婦の命には換られねえからのう。」

「お前それは本氣かい。」

「本氣といひたかねえけれど、金が敵の世の中だ、我は本氣だ。」
女房は泣聲になりて、
「本氣なら鬼だ。いかに食ひかねるからって、我子を殺せとは何といふ了簡だらう。二人も三人もある子ぢやなし。お前今度のは始めての子だよ。世間には千兩萬兩出しても欲しがる人があるけれど、授からないところには授かるものぢやない。是はお前天から下さる寶だあね。それを勿體ない、墮せなんぞって、罰があたるよ。赤兒が一人出來たからって、急に此上貧乏にならうぢやなし、よしむば甚麼に難澁をしやうとも、他人でない我子ゆゑなら、格別辛い事もあるまいぢやないか。それでもお前が厄介だとか、痼だとかいつて邪魔にするなら、お前の世話にはならないよ。あゝ些とも御迷惑は懸けませんよ。乳の出る盛は物も多度食べるといふから、それだけは私は拾食をしてもお腹を拵へやうし、產衣だつて襤褸一つ無いのだから、藁でも衣せておかあね、寒い目をさせなけ

れば可いのだ。其上て、此子が矢張お前の厄介になるやうだつたら、私はお前の手は藉りないよ。殺さうと、捨てやうと、私が勝手に獨で始末をするから、後生だから墮さうなんて、そんな邪慳な言を云つておくれでない。這麼に言つて頼むでも分解けてくれなければ、仕方が無いから、どうでもお前の勝手におしな。此子ばかり殺しはせないよ、さあ私も一處に殺しておくれ。此子を抱いて彼世へ徂つて、父樣や母樣にお前の所業を十分言告けるから、さう念つておいで。お前のやうな無慈悲な人と添つてるのは否だから、可愛い此子を連れて私は彼世へ徂くよ。さあ殺しておくれ、殺しておくれといふのに。」

「馬鹿言ふなえ。子を墮す藥はあるけれど、母親を一所に片附ける藥は無え。誰もお前を墮さうと言やせねえ。」

「其藥は此に在るよ。」

何を爲るぞと見れば、女房は衝と立ちて、研ぎすましたる草刈鎌を把來

り、佐治六の鼻頭に撞附けて、礑と其膝の前に投出せり。

「えゝ危ねえ、何を爲るのだ。」

「何も爲ないよ。お前の本望通り殺しておくれといふのだね。」

此鎌ゆゑに佐治六は我を折りて、過ぐる月日に關守無く、やがてぞ產の紐解けば、親に肖ぬ子の鬼ならで、玉のやうなる男子なりけり。

（二）　天象道人

七夜の夕暮れて間も無く、佐治六の門の戸を丁々々。

「御免なさいよ。」

佐治六は爐の傍を立ちもやらず、纔に外方に面推向けて。

「はい、何方でございますね。」

「佐治六樣とおつしやるのは此方かな。」

「はい佐治六は手前でございますが……。」

「はあ左樣かな、ちと用事があつて參つたものぢやが、一寸お目に懸りたい。」

誰ならむと呟きつゝ佐治六は重げに身を起して、戸を引啓くれば、但見る、白髮雪を戴き、銀髯長く垂れて宛然頤に拂子を掛けたる如し。朱脣、白眉、面の色は桃花に似て、眼清しく、鼻隆く、玉稜々として風骨尋常

ならぬ老翁の、法衣様の衣の黄染なるを裾長に着做して、頭には木皮もて編める囊を懸け、藜の杖の肩を過ぐるばかんなるを携へて、月影に打背きつゝ飄然として佇めり。

佐治六は異様の容に驚かされ、思はず戸口に蹈ひて、

「へい〳〵。これは何方様か存じませんが、私は佐治六にございまする。御用がございますれば、へい何卒おほせ下さりまするやうに。」

爾時老翁は杖に縋りて閑に頷き、

「お前様が佐治六様かい。それは始めてお目に懸ります。我はな、諸國を遍歷する旅のもので、天象道人といふ、可笑な名の老翁でござるがな、ちとお前様に用事があるというて、お尋ね申したのは外の事でもござらんが、我は占者でござるて。」

「へい貴下様は占者でゐらつしやいますか。それぢや手の筋だの、墨色なんぞを………。」

「否々〳〵、その占者とも少し違ふので、我のは此大虛の星を候て、人の身上行末を占ふのでござるが、實は我はこれから東の方へ行くもので、此邊を通る筈ではなかつたのぢやが、六七日前から一つ新しい星が顯はれたのを不圖認けたので、占うて見たれば、何でも此村に男子が生れたに相違無いと、から想うてな、寄道ではあるが、わざ〳〵此村へ來て訊ねたれば、お前樣の家で男の御子が生れたと聞いたに因つて、それでお訪ね申したのじや。」

「それはどうも御遠方の處を御苦勞樣な、難有う存じまする。御意の通り男子が生れまして、今日が七夜でございますが、私に御用とおつしやいますのは。」

「その御子の身上を占ましたに因つて、一寸お前樣にお話をしてあげたいと、から思うてな。」

「それでは、忰の身上を御覽下さいますとおつしやいますので、」

「如何にも。」と言訖りて道人は、物思ふ氣色なる佐治六を打見遣りて、其心を讀まゝ欲しき風情なりしが、渠は埃塗れの頭を掻きて、

「折角の思召ではございますが、それはお謝絶を申しまする。」

「謝絶？　はて妙なお人ぢやな。奈何いふ理でな。」

「へゝへゝへ、別に奈何と申して、理由も糸瓜もございませんが、唯お謝絶を申すのでございますから、惡からず思召して。」

「さあ愈妙じや、唯謝絶のに惡からずは無理のやうぢやな。はゝはゝははゝ、面白い言をいふ人じや。別段理も無いといふのなら、聞いても可さゝうなものではないかな。別に他の話を聞いたとて、損の行くことはあるまいに。」

「それが又左樣參りませんのでございますから。」

「はて、それでは何か損が行きますかな。」

「あんな事をおつしやいます。貴下樣、醫者に懸れば藥禮、馬を頼めば

駄賃、貴下樣の方から見てやるとおつしやつたつて、無料では濟まされないといつたやうな理ではございませんか。我家は御覽の通りの貧乏世帶でいとゞ苦しい處、今度は嚊が又重荷に小附なんぞを拵へましたので………。」

「これ〳〵、それでは何かい、我に占てもらふと見料が入るから否じやとおつしやるか。はゝはゝ、そんな心配には及ばん。我はな、之を道樂で爲てをるのぢやに因つて、一切見料などは取りませんぞ。」

「えゝ左樣でございますか。それぢや何卒一つ悴の身上を、事精密に詳く御覽下さいまして。」

「現金な人ぢやな。それでは御免下さいよ。」

道人は佐治六と倶に戸の内に入りぬ。迹には天地寂に、秋高うして露寒く、銀河の邊に一星ありて輝けり。

（三）　旅商人

爰に此國の司山水左衞門尉は、些ばかり物の本の端を覗きて、古の明主は皆然矣、我も躬から民の疾苦を問はゞやな。微行といふ思附はどうぢやの、と卒然に仰せ出されけるに、家老將監はヽはっと平伏して、まことや君の御德は草木に及ぶ、と無上に感じ奉り、此義最も然るべし、と譯も無く煽り立つれば、左衞門尉殊外乘氣の氣色にて、早速用意を取急げ。予の好みは旅商人じや。あの姿が奈何も好いの、との御諚なり。腹心の扈從右近太郎は道中の警護として、同じ姿に打扮ちて、覺えの業物を仕込みたる天秤棒を引擔げ、いでや御隨從と御前に侍へば、太郎似合うたのと麗しき御機嫌にて、やがて菅笠深く人目を忍び、闇に紛れて非常門より館を立たせたまひけり。

さても主從は道を急ぎて、未だ四五町も來らざるに、左衞門尉は腰状巽

しく、いとも切なき聲にて、
「太郎、草鞋が脱けた。」
はゝと太郎は荷を置きて、殿の草鞋を結ひなほし參らする間、殿さごとい
ろきよろと四邊を眴して、
「太郎、餘程參つたやうぢやの。此處は何と申す國じや。」
「恐れながら此は君の御城下にござりまする。」
「はあ、誰の城下と申す？」、
「我君の。」
「はてさて予の城下は宏大なものぢやな。忘て見ると、領分境までは未
だ餘程あらうかの。」
「眞直に參りまして十里餘もござりまする。」
「左樣かな。それまでに予の草鞋が幾度脱げるであらうの。」
「五町で一度と見積りますれば、十里と見まして三百六十町に相成ます

るから、五七三十五の二五の十で、まづ七十二度ほどでござりませうか。」
「七十二度脱げるかな。其度毎に其方の世話になるぞ。」
「委細承知仕りましてござりまする。」
やがて城下を外れたる頃、左衛門尉は又立住りて、
「太郎、また脱げた。」
「はゝ。今度は脱げまするのが、ちと早目のやうに存じまする。未だ二町餘より參りません。」
「此分では七十二遍では濟むまいな。」
「御意に御座りまする。いつそ百遍に遊ばされましたら、丁度勘定が宜しうござりまする。」
「太郎、大分草臥れたやうぢやが、乘物はあるまいかな。」
「ごは怪しからぬ言を御意遊ばされまする。傳聞く、延喜の帝は忝くも寒夜に御衣を脱がせられたる例もござりまするに、君には御領内の下情

を御覽あらせらるゝ御心にてありながら、乘物などゝは以ての外の御諚で。左様なる思召ならば、恐れながら太郎は隨從の義を御斷り申上げまする。鉢木の謠曲をお聽きあそばされましても、最明寺殿が大雪に惱まるる條はございませうが、乘物が欲しいといふ本文はござりますまい。」

「太郎、左様に申すな。予が乘物を欲しいと申したのは、草臥れたわけではないぞ。其方に度々草鞋の世話になるが心苦いに困つて、予が乘物へでも乘つたならば、其方も嘸や樂であらうと存ぜてじや。」

「難有き御意、太郎身に取りまして、百石の御加增よりも忝いことに存じまする。」

「其方のやうな家來ばかりあれば、予も內福で樂であらうけれど、誰も予の言葉よりは、一人扶持の方を喜ぶで困る。」

「手前にいたしても、毎々お言葉ばかりでは、憚りながらちと困りまするやうにござりまする。」

「其方もやはり一人扶持の方がよいと申すか。はてさて、人の心は淺ましきものじや。」

さるほどに左衞門尉は、右近太郎に勵まされて、草臥足の跉跰曳き〳〵、夜明くるまでに三四里行きて、草鞋の世話になること二十五度。はきかへ四足、此代何文と、記むる日記の表紙も揉めて、十日に餘る旅の空、笠は長途の埃に黑み、足は蹈みなれぬ山坂に傷れて、無慘やな左衞門尉、つもる憂きめや愁きめに、憔悴として元氣無く、遂には悲しき聲を出して、太郎、最否になつたに因つて歸館せうかとありけるを、御諚は有理と思へども、所領も大方遍歷して、今は早遺るものとては唯一ケ村なるに、此儘歸らせたまはむは、いと口惜き事なれば、と進まぬ殿を慰めつつ、かの塵塚の佐治六が住める村にぞ來りける。

「太郎、これで仕舞ぢやの。」

（四）　星の化身

主從は村端の掛茶屋に入りて、落葉の煙に溫もりたる澁茶に殿は舌鼓を拍ち、甘露々々と頻に賞翫せらるゝ折しも、百姓三人どや〳〵と入來り、店口に腰掛けて、煙草やすみの雜談。

「久作、聞いたであらうが、塵塚の佐治六めは旨いことを爲をつたでないか。」

「おゝ聞いた〳〵。此間生れた餓鬼の事であらうがの。もう十四年經つたら塵塚ではない、檜木造の佐治六じや。」

「おれは聞かぬが、佐治六が奈何ゑたのじや。」

「奈何した段ではない哩。あの評判の話をお主は知らぬかい。知らぬ理じや、耳の遠いといふは、はて何に就けても不自由なものじや。」

馬の樣なる齒を露出して久作が高笑ひすれば、耳の遠しといふ男、

「耳は遠うても眼は近いわ。」

「それでは一向差引にならぬ。はゝはゝはゝ。」

「冗談は斥けて、知らぬなら話して聞かさう。先月佐治六が家で餓鬼が生れたろ。彼が大きたものじやと云ふわな。七夜の晩に旅の占者が佐治六の處へ訪ねて來てな、言ふには、此子はえらい運の好い子じや。何とやら謂ふ御星樣の化身で、人間の種ではない。」

「佐治六の嬶めは、鈍な奴で無いに因つて、末の事を慮へくさつて、お星樣にお膳を据ゑをつたのぢやな。」

「大方七夕の晩にでも据ゑたのぢやろ。」

「お星樣にも茶人があると見える。我がやうなものでもあの嬶は眞平だ。」

「仁平が所の娘子は、まだ拙い面だがな。」

「馬鹿吐け、ありや田舍小町というて評判娘じや。」

「田舍汁粉といふてつぶし餡ぢやろ。はゝはゝはゝは。」

「お星樣の申子じやに因つて、今にえらい出世をする。彼悴が十四になろものなら、御領主樣の婿樣になつて、今の殿樣の御家督になると言うて、その占者は消えてしまうたといふとじや。何と佐治六は仕合せものの飛切ぢやあるまいか。」

「いや話を聞いたばかりでも、踴躍するわ。佐治六の身になつたら、どんなに嬉しからうかのう。思出した、我は佐治六に二百ほど貸があつたが、もう一年半にもなるのに返しくさらんから、到底無効な事と諦めてゐたが、こりや大分旨い事になつたわい。」

「佐治六が出世したら、二百の文を兩にして返してもらふがいゝ。」

「それで濟まさうかい。百の字を千に書換へてもらはにや勘辨せぬわ。」

「餘り强慾なことをいふと汝が首が亡くなるぞ。」

「こんな首は亡くなつても、二千兩の方が可いわえ。」

此に領主の在りぞとも、知らねば誰を憚らず、高話して出でむとするを、

右近太郎聲を懸けて、

「もし〳〵お百姓樣、今のお話は餘程面白いが、其は實事でございますか。」

三人は齊しく振返りぬ。一人の男の應ふるやうは、

「實事とも、村中で知らぬものは無いほどの大評判でござるわな。」

「へい其は不思議な。而して其佐治六といふ人の家は何地でございますね。」

「此處から、あれ彼處に見える森を左に取つて、彼の竹藪の前を通つて、眞直に二町ほど行かつしやると、角に大きな欅の木がある。其横手の汚い家が其でござるよ。彼邊へ行かしつて、塵塚の佐治六と聞かしやると、三つ子でも能く識つてるで。」

「それは大きに難有うございました。」

百姓どもの去りし跡に、左衞門尉は物案じつゝ、

「太郎、容易ならん事ぢやの。」
「これが事實ならばお家の一大事にござりまする。」
「設ひ星の化身にもせよ、領內の土百姓の小忰などを我婿とは、系圖の汚辱ぢやわいやい。」

(五)　光るもの

主従多時密義を凝して、左衛門尉は今宵を過さじ、と急性になりて身を起せば、同じ思の右近太郎、茶代も拂はで駈出でむとするを、老女に喚れて心着き、これ遣ると錢一緡投出して、誨へられたる路を辿り行けば、やがてぞ佐治六の門に着きける。

實に塵塚の名に負かず、聞きしに勝る廢屋の光景に、左衛門尉は愕然として、

「太郎、此裡に人間が住つてをらるゝかのう。」

「御意にござりまするが、道々も御覽になりました乞食輩は、全く宿と申すものはござりませんので。それから見ますれば、これでも家持にござりますから、遙立優つてをりまする。」

「いかんとも汚穢しい家じや。あれに在るのが女房ぢやな。いや凄じい

姿をいたしをる。宛然下手の畫いた荒神ちやの。おゝ赤兒の呱々が聞ゆる。兎も角も案内いたせ。」

太郎は戸口に進寄りて、

「へい御免なさい。佐治六樣とおつしやるのは此方ですかね。」

「はい手前方が佐治六でございますが、何ぞ御用でございますか。」

「佐治六樣はお留守でございますかい。」

「今野良へ出てをりますが、須臾戻りますよ。」

太郎は我後に立てる殿に向ひて、

「これにて待ちませうや。」

「應、床几を持て。」と殿樣は何處までも殿樣なり。

「左樣なものを旅商人は所持いたしませんて。」

「いや左樣であつた。然らば彼の莚を持て。」

太郎は在合ふ莚を戸口に鋪きて、左衞門尉を上座に請じ、おのれも其端

に蹲踞して、待つこと約そ半刻ばかり、やう〳〵佐治六は歸來にけり。

「それはどうもお待遠樣でございました。私へ御用とおつしやいますのは。」

「餘の儀でも無い。外の事でもございませんが、私どもは御城下の呉服屋でございますが、此近所まで買出しに參りまして、此方で大相結構なお子がお生れなすつたといふ風評を聞きまして、かね〴〵主人も子供の無いのを心配いたしてをりまするので、さういふお子ならば何卒養子に欲しいものだと、かういふ事情で、主人同道でお訪ね申したのでございますが、何と物は相談てすが、そのお子を私方へお讓り下さるわけには參りますまいか。」

佐治六は冷笑ひ、

「へえ、貴下方は御城下の呉服屋樣で、左樣でございますか。お聞きでもございませうが、あの佐治郎は十四になりますると、御領主樣の御聟

樣になる身分でございます。でございますから、どうも呉服屋樣には爲せたくございませんでねえ。」

「へい〳〵成程。其處でございますて。御領主樣の聟樣と生れる時から極つてゐらつしやるお方なら、手前方へおもらひ申して、呉服屋にしやうと甚麼に側から推附けたところで、十四の歳が來れば、屹度御領主樣からお召出になりませう。それお召出になれば聟君樣、山水家の御家督だ。ねえ然うでせう。」

「だから私の申します事さね。さうなつて見れば私の方は鰕で鯛を釣られたやうなもので、貴下の方では、御領主樣の親御樣で、えらい出世をなさるのに、實の親の私達は、やつぱり塵塚の佐治六でございます。」

「さ、さ其處だて。手前の方では其お子を餌にして出世をしやうなんぞといふ慾は微塵もないので、其お子をおもらひ申したいといふのは、實の所、末は御領主樣にもおなんなさるほどの、立派な御身分のあるお子

を、ようございますか、一日でも我子にきたら店の暖簾の光だ、とかいふまあ了簡で、實はあがつたのでございますから、それぢや十三の大晦日まで、養子分にして手前の方へお預り申しておいて、十四の元日の明の鐘がボオンと鳴るのを合圖に、お前樣の方へお戻し申すといふ約束て、讓つていたゞかうぢやございませんか。其間の養子賃に現金で小判の耳を揃へて、百兩こゝに並べませう。而して十四になつたら戻さう、といふ一札を上げておかうぢやございませんか。」

と太郎は頸に掛けたる紐を手繰りて、重げなる財布をづる〳〵と曳出し、

「それ此通り。」　と百兩包の封を切れば、太郎の手より墮つる黃金は鏘々と鳴り、赫奕と光れば、夫婦は心を奪れて、呼吸をもつかで瞻めたり。

魚の餌食

良ありて佐治六は進出て、
「左樣ならば、此百兩を下すつた上に、十四になりましたらば佐治郎を返さうといふ證文を下さるとおつしやいますか。」
見し例無き小判の顏に、欲しや〳〵の飛立つ胸を鎭めかねて、涎を流さむばかりの氣色をば、太郎は見て取りて、仕濟したりと心に懽び、
「然うでございますよ。今もお話申す通り、私の方では何も慾徳づくで其御子を養子におもらひ申さうといふのでは無いのですから、畢竟保育にやつて百兩取るやうなものぢやございませんか。こんな旨い話はありやしません。無躾ながらお前樣だつて樂なお身分といふのぢや無し、一人でも厄介の少い方が、御都合が好いといつたやうな譯でございませうから、ねえ、もし、讓るの、養子にやるのと思ふと、何だか億劫になり

ますから、十何年の間保育にやるのだと、かう思召して。」
佐治六は女房を後目に見て、
「奈何したやうなあ。折角あんなに有仰つて下さるものだけれど。」
「間違ひ無く十四になつたら戻しておくんなさるといふなら、可いぢやないかね。」
佐治六は女房の懐なる子の寝姿と、眼前に輝く小判とを見合せて、
「さうよ喃、そこもあれば蓋もあるが…………。」
「お前様、こゝで百両あつて御覧な、どんなに好いか知れやしないよ。」
「それは我だつて知つてらあな。」
「だからさ、養子に遣切といふのぢやないのだから、間違の無いやうに、證文をおもらひ申しておけば可いぢやないかね。」
「ぢや然うせうかな、貴下それ、ぢやお譲り申すことにいたしませう。」
「いや其は忝い。そんなら唯今證文を認めますから、此金を検めてお受

取下さい。」
「へい其はどうも、へい難有う存じます。」
佐治六は饑ゑたる馬の豆を見たらむごとく、鼻息暴く小判を掻寄せ、ま
づ一枚を取擧げて恭しく禮拜し、扨女房に示して、
「どうだ、此燦爛〳〵光ること！　之が一兩の小判といふものだ。手前生れ
てから未だお目に懸つたことはあるめえ。」
「何だい。自分だつて見た事も無いくせに。一寸お見せよ。あれさ持た
して見せつてば。おや〳〵薄片な物だね。其割には重いこと。一寸見
たばつかりでも好い物だね。これが十枚もあつたら嘸好からうねえ。」
「十枚？　へゝ憚りながら此處に百枚ばかり持合があるのだ。欲しか二
三十枚ばかり遣らうか。」
「大きな事をおいひでないよ。男は直に其通り氣が大くなるから否だと
いふのだ。お前大事にしなくつちやいけないよ。」

「笑はせら、餓鬼が玩具でも買つてもらやあめえし。」

太郎は早くも一札を認め了りて佐治六に渡せば、逍に女房は今を別れと恩愛の涙に沈みて、此思は財にも寶にも換へがたく、さま〳〵慨けども、太郎は情無くその懐なる子を引放して、主從慌忙しく立出でけり。

左衞門尉は框に腰を打懸けて、夫婦の話を心可笑く聞きゐたりしが、

やゝ三町も來たりと思しき比、太郎は田畝道の四邊に人無しと心を安じ、

「我君、如何かと存じましたに、首尾好く參りまして恐悦に存じまする。」

「これも其方の盡力じや、滿足に思ふぞ。」

「恐入りましてござりまする。」

「どれ〳〵、其者の顏を見せい。おゝ能う寐入つてをるわ。いかさま、百姓の胤とはいひながら、十四歳に相成れば我家督を相續して、一國一城の主ともなるべき奴ほどありて、何と無く尋常ならん骨格じや。」

「我君、大分河音が聞えまする。」

「お丶餘程近うなつたと見ゆる。急いで參らうかな。
程無く主從河岸に着けば、太郎ゑやをら懷の子を取出して、
「然らば投込みまする。」
「これにて檢分いたすぞ。」
太郎は赤兒を無圖と摑みて、一揮々るよと見えけるが、曳やの聲と諸共に、佐治郎の身は毬のごとく空を躍りて、河の流れの正中に、水音高く墮入りて、生死も知らずなりにけり。

（七）　河童の捨子

さしのぼる朝暾は山の一角を染めて、河霧のやう〳〵薄れゆく隙より、仄かに見えたる茅葺の一軒家は、漁師四五六が住家なり。破戸推開けて差出したる面は睡げに蹙みて、外方を眗しけるが、良有りて半身を顯はし、寐ぼれたる聲して、

「何も居ねえがの。あゝ睡い。」

家の内にて聲するは女房なるべし。

「居ねえことがあるものかな、それ啼いてるぢやねえか。」

「うゝ啼いてる〳〵。」

四五六は藁草履引掛けて戸外に出づれば、葎の露の「えゝ冷てえ」、兒の啼聲は堤の下に聞えたり。

「河の中だ〳〵。」　と喚べば、

「河の中で嘴くのなら、河童の捨子だらう。」
と戸内より酒落ながら出で來るは女房なり。
「早く下りてお見なね。」
「喧しいやい。今下りる所だ。」
渠は堤を下りて川面を窺ひ、浮木の上に横はりたる赤兒の姿に魂を消して、
「やあ居た〳〵。捨子だなあ、是は。」
堤の上より女房は下瞰きて、
「捨子だとえ。どんな子だい。」
赤兒を取擧ぐれば、奇なる哉浮木は遽に波を截りて、下流指して流れ行きぬ。女房は珍しげに子を抱取りて、
「おや〳〵まあ好い兒ぢやないか、襤褸こそ衣せてあるけれどもねえ。」
「さうだとも。襤褸に纒まつてる人品ぢやねえ。」

「可愛さうにまあ、あの木へ載せて流したのだよ。」

「これは必常乙姫樣が父無子を孕むで、龍宮に人間は置けねえといふので、捨てたものに違へねえ。さうでもなくちや、お前どうして此河へ流されて沈まずにゐるものか。」

「何しろこりや夫婦へ授つたのだから、大事に育てやうぢやないか。」

「子の無え我輩が拾ひ上げると云ふのも何かの緣だ。我家の子にしてしまはう。」

と聞くに女房は歡びて、はや我兒ぞと懷にして寢床に入れば、すや〳〵睡る顏を四五六は打眺めて、

「滅法好い兒だな、奈何だい、すばらしい人品ぢやねえか。凡人の胤ぢやねえね。何とか名が無くつちやいけねえ。名を附けやうぢやねえか。」

「さうさ、何とかお附けな。立派な名が可いよ。お前のやうな四五六なんて氣の利かない名は御免だよ。」

「何が氣が利かねえことがあるものか。浮玉川の四五六といや響いたものだ。四五六の忰だから七八とおやうか。」

「七八！　馬鹿らしい。もつと滅法界立派な名におよ。お大名の若樣は何とか丸つて、よく丸の字を附けるぢやないか。だから此兒も何とか丸とおよ。」

「そんなに丸が附けたけりや、七八丸は奈何だ。」

「えゝもう七八はよしておくれよ、氣障な。」

四五六は少時打案じて横手を拍ち、

「好いのがある。これならお前の註文通りだ。此子はそれ浮木へ載つて流れて來たらう。そこでお前が丸が好きだらう。」

「何もそんなに好きな譯ぢやないんだけれど。」

「まあ可いから聞きねえ。赤兒は浮木で助かつてよ、助けた親が丸が好きだから、喧嘩の出來ねえやうに兩方一所にして、それ浮木丸はどうだ。」

感心したらう。」

「浮木丸といふのかい。何だか呼び難いぢやないか。」

「呼難くつても何でも、もう浮木丸だ。」

此日より浮木丸と呼びて、四五六夫婦の鍾愛は生の子に異ならず。さるほどに光陰流るゝごとく、浮木丸は健かに生長ちて、早くも十二の春を迎へければ、四五六は最早我手助ともなるべしと、舟漕ぐことを習はせ、漁る業を敎へけるに、浮木丸が川に出でし日より、獲物の多きこと平素に十倍して、二年ばかりが間に、富むといふにはあらねど、活計裕になりて、夫婦は老後の樂みを得たるを懽びけり。

（八）　誕生日

養親の寄る年波に、浮木丸は早十四歳の秋の暮、拾ひ上げし日を此子の假の誕生日と、祝酒の支度に女房は庖丁の手元せはしく、竈の烟賑はしき門外より、息急き驅入る庄屋の畑右衛門、

「四五六殿や、お丶御座つたか。何ぢや知らぬが、御領主樣がの、御鷹野のお途に此方の家へ御立寄があるといふ、急のお觸があつたに因つて、一寸知らせに來ましたが、もうお先供が見えるから、間も無く此へ御出があろ。隨分麁想の無いやうに、氣を着けさつしやれや。あ丶息が切れる、お水一杯もらひませうか。」

四五六は眉を顰めて、

「何とおつしやいます。私どもへ御領主樣がお越になる？　庄屋樣、それは何かお聞違ひではございませんか。」

「いや我もな、餘り變だと思うたから、再三お役人樣にお訊ね申したら浮玉川の漁師四五六といふぢやないか。浮玉川に四五六といふ漁師は二人と無い。ぢやに由つて奈何でもお前であろがな。」

「へえ、お役人樣が浮玉川の漁師の四五六とおつしやいましたか。」

「その通りじや。」

「して見りや我か知らん。」

畑右衛門はきよと〳〵外方を窺ひて、

「それ下に〳〵が最聞える。さあ〳〵お出迎の支度をさつしやれ。」

と言ふより早く舊來し道へ返しけり。

四五六夫婦を始め浮木丸は夢路を辿る心地して、如何なる事實とも辨へざれど、領主の御成とあるからは、麁想ありては一大事、といづれも戸口に土下座して、待つ間程無く入來るは、當國の領主山水左衛門尉、例の右近太郎唯一人を隨へて、三人が前に優然と立ちたまへば、親子は只

管稽首きて、畏りてぞゐたりける。
右近太郎衣紋を正して、嚴肅に、
「漁師四、五六と申すは其方か。」
「御意にござりまする。」
「面を擧げい。」
左衛門尉は床几に倚りて、扇を笏に構へつゝ、女房と浮木丸の頓伏したる姿を御覧じ給ひ、
「兩人も面を擧げよ。」
命によりていづれも恐〳〵顔を擧ぐれば、左衛門尉主從は浮木丸の面に瞳を凝して、少時は瞬だもせざりけり。旋て左衛門尉は再三頷きて、
「四五六とやら、これは其方の忰か。」
「御意の通りにござりまする。」
「面躰は少しも其方どもに肖てをらぬが、實の子か。」

四五六の對へむとするを遮りて、右近太郎は聲暴かに、

「君の御訊問なるぞ。僞言などを申さば其分には差措かぬぞ。」

「へい〳〵。申上げまする。私の實の悴ではございません。」

浮木の舊時を知らぬ浮木丸は愕然として、流盻に四五六の顏を見遣るのみ、御前を憚りて言も出さで控ふれば、

「此兒には深く秘しましてをりましたが、殿樣の御意でございまするゆゑ、裹まず申上げまする。」

神妙なるぞと太郎の詞に勵まされて、四五六は我子の素生を詳細に物語れば、主從は聞く度毎に面を見合はせ、想ひしことの違はざりしを、無言の間に語るに似たり。

自一至十を說訖れば、太郎は更に訊ぬるやう、

「其折に着しをつた襤褸は今に所持いたしをるか。」

「後の證據にも相成りませうかと存じまして、大事に取つておきまして

ござります。」
「早速之へ持參いたせ。」
夫の目授に女房は心得て、戸棚の奥なる古葛籠の底より疊包を取出し、恐れながらと太郎の前に差出せば、手に取擧げて子細に檢むるを、左衞門尉も頸を延べて倶に點檢むたりけるが、
「四五六、其方の悴浮木丸は今日より予が扈從に召抱へて取らする。」
「あの悴を」と四五六は吃驚、
「あの御扈從に。」と女房は仰天すれば、
「あの私を。」と浮木丸の驚駭は更に謂ふべくもあらざりけり。
太郎は然こそと、
「これには深い子細があるが、其は追て沙汰するであらう。今日より浮木丸を御家臣の列に加へらるゝとの御諚、難有く御禮を申上げよ。」
親子は齊しく稽首きて、

「難有い仕合に存じまする。」

(九) 御文函

爾時右近太郎は金高蒔繪の文函を擎げて、浮木丸の前に立てば、左衞門尉聲を懸けて、

「浮木丸、早速ながら其方が奉公始に、館まで急ぎの使者を申付くる。」

右近太郎は文函を浮木丸に渡して、

「此御文を御城へ持參いたして、御臺樣へ差上ぐる大事の御使なるぞ。大小衣服並びに路銀、殿樣より下しおかるゝ、難有く拜領いたせ。こりや四五六夫婦のもの、浮木丸は御使にて只今から出立いたすに因つて、其方たち支度の世話して取らせよ。浮木丸、火急の御用なれば直樣發足いたすやうに。」

御諚辭み難く、親子は一禮して内に入れば、女房さはや涙ぐみて、

「浮や、おまへ無事で行つて來なよ。何だか夢のやうで私は惘として志

まつて、さつぱり次第が解らない。お前道中は能く氣を着けなくちやいけないよ。」

「えゝ何を泣きやがるのだ。目出度事ちやねえか、漁師の悴がお侍に取立てられて、見な、立派なものだ、此お太刀をきめた塩梅を。まるでお侍だ。こんな嬉しいことはねえ。目出度のに泣く奴があるものか。」

「何だ、他の事を言ひながら、自分だつて、見るが可いや、ぼろ〳〵涙を零してゐる癖に。」

「我は悲くつて泣くのぢやねえや、篦棒め。こりや目出度泣といふんだ。」

「お前が目出度泣なら私だつて目出度泣さ。」

「馬鹿言へ。手前なんぞに目出度泣が泣けるものか。」

「これ〳〵静にいたさんか。」

と太郎の聲に、夫婦は鳴を鎮めたり。浮木丸は衣服を更めて、兩親の前に兩手を支へ、

「そんなら父樣母樣行つて來るよ。直に歸つて來るから心配まずに待つておいでよ。」

四五六は訣別と思へば、有繫に忍びかねたる涙聲、

「おゝ、行つて來い、無事に喃。」

女房それとゞ悲しく、浮木丸の手を執りて、

「もう行くかい。身體を大事にまなよ。而して早く歸つて來てくんな。父樣も母樣も一日でもお前が居なくつちや心細くつてならないから。」

右近太郎は衝と戸内に入來りて、訣別を惜む親子を睨めつけ、

「其方たちは奈何また〔ママ〕ものじや。先刻より殿樣のお待兼だわ、猶豫してをるところでない。浮木丸早く發足いたさんか。時刻を移すと親子ともお咎を蒙るぞ。」

威せば夫婦は驚きて、やう〳〵放しやる浮木丸も、泣顏掩して立出づる。

左衛門尉屹と其姿を御覽ずれば、威風凜然として天晴骨格や。土民の家

に生れながら、一城の主ともなりなむ、と相者の謂ひけむ言も思合されて末恐しく、唯惘然と志てゐたりしが、旋て太郎は浮木丸の手を執りて、名残は盡きせじ、いざ〳〵、と門の外方へ推遣りけり。

泣く〳〵行く影の今は見えずなりける比、左衛門尉は四五六の家を立出でたまひ、馬上にての御物語、

「太郎、今度ばかりは逸すことではあるまい。」

「確に首尾好う参りましてござりまする。」

「これで予も安堵いたした。今日の鷹野もやはかこれほどの獲物はあるまいの。」

（十）毒蛇の口

浮木丸は唯管途を急ぎて、物化峠に懸りたる比、日は全く暮れにけり。月明の便はあれど、不知案内の山深く、茅薄は騎馬の人より高く生茂りて、何處を道と踏分け難く、今は街道に出づべき望も絶えければ、かゝる山中にも木樵獵師の住家やあらむ、と微に流の音する方を心期に進み行けば、やがて深河の畔に出でたり。浮木丸は岨に立ちて四邊を回顧せば、此流を隔てゝ一簇の木茂の隙より、ちら〳〵と光影の見ゆるは、察するごとく住む人ありと覺えたり。行きて今宵の宿を假らむ、と遽に心勇みて、疲れたる脚もおのづから輕く、葛に攀りて谷に下り、石を傳ひて流を渉れば、懸崖に一條の徑を刻みたり。之を登りゆけば、果して木蔭に年經る白屋ありて、窓の障子の燈々と、内には糸車の音頻りなり。

浮木丸は駈寄りて語急しく案内すれば、容陋からざる老嫗の齢六十路ばかりなるが、窓推開けて外方を眺めつゝ、

「はい、何方でございます。」

「私は御城下の方へ参るものでございますが、始めての旅だものですから、道が分らなくなつてしまひまして、宿る家が無くて窮りましたから、お氣毒樣ですが、どうか一晩お泊めなすつて下さいましな、代は拂ひますから。」

「それはまあお傷しい。お泊め申してはあげたいけれど、少し事實がありましてね。」

憐れげに浮木丸の顔を打見遣りて、老嫗は獨り頷きつゝ、

「お泊りなさらない方がお前樣のお身の利だ。私が其處まで附いていつて、分るやうに道を誨へてあげますから、さう爲さい。」

「難有うございますけれど、私は今朝から歩き通して、もう草臥れてし

まつて歩くことが出來ませんから、後生だからお泊めなすつて下さい。」
撞平と戸口に坐して、動く氣色は見えざりけり。
「私だつて泊めてあげたいは山々だけれど、お泊め申されない事實があるのだから。老人といふものは惡い言はいはないから、私の言ふことを聽いて……………。」
「あゝお腹が空いて痛くなつて來た。姨さん、そんな事を言はずに泊めて下さいよ。」
「そんなに泊めてくれとおいひだけれど、泊つたらお前樣の命がないよ。殺されるが、それでも可いかえ。」
浮木丸は希有なることをいふ婆かなと、或ひは懼れ、或ひは駭き、心惑ひてゐたりけり。老媼は然こそと微笑を含み、
「それ御覽なさい。それだからお前樣の利を思つて、泊めてあげないといふのだよ。」

浮木丸は霎時思案して、

「姨さん、誰に殺されるの。」

老媼そや丶口籠りて、

「私の悴に！　悴は大惡人だから、私も苦勞が絶えない。」

「惡人？　甚麼惡人です。」

老媼は當惑きたる氣色なりしが、言はでは此兒の疑念霽れじと、やうやう心を定めけむ、壁に耳ある世なればとて、聲を潜めて說出しぬ。

「言ふのもお愧かしいわけだけれど、私の悴といふのは、犬長範の八平次といふ大盜人だから、お前樣を泊めやうものなら、今にも歸つて來て、其衣服や大小に目を着けて、剝ぐばかりなら可いけれど、生して歸しては露顯の因だ、と命まで取るに違ひないから、それで私はお泊め申さないのだから、意地の惡い老婦だと思つて下さるなよ。」

浮木丸はこの物語を聞訖りて、良久打案じて居たりしが、

「をばさん、私は殺されても可うございますから、どうぞ泊めて下さいな。」

老媼は膽太き辭に呆れて、

「馬鹿なことを言ふお兒だ。殺されて可いといふことがありますものか。そんなことを言はないで、私が道を誨へてあげるから。」

「いゝえ、をばさん、私はこれから單身で山の中をうろ／＼してゐれば、どうせ狼に喫はれてしまふのだから、同じ死ぬなら、人に殺されて死ぬはうが勝だから、死ぬつもりで泊りますから、泊めて下さいな。そんなら泊めて下さいませう。」

「よく／＼窮ればこそ、殺されても可いから泊めてくれとまでおつしやるのだ。悴の罪業消滅にもなりませうから、さあ／＼此方へお入りなさい。まだ御飯を上らないと。やれ／＼其はおひもじからう、今直に上げますよ。」

老嫗の老實に遇なすにぞ、浮木丸は今宵死ぬべき身をも忘れて、心暢やかに晩餐の饍に向ひ、太く疲れたればとて、奥の間の臥戸に入るより早く、前後も知らぬ高鼾、熟睡したる折こそあれ、犬長範の入平次は山刀の欛に獲物の財布を縛付けて、今宵の好運を鼻唄に謳ひつゝ、悠々として歸來り、戸を引開けて内に入れば、忽ち眼に着く草鞋に、不審を立てて、

「この草鞋は何だ。」

と家の隅々睨めまはせば、老嫗は憶せず、

「お客があるのさ。」

「客だ。盗人の家へお客とは難有え。これが眞箇の飛で火に入る夏の蛾だ。」

冷笑ひつゝ爐の邊に撲乎と坐して、老嫗の顔を流眄に懸けたり。

「お客とは何者だ。旅のものか。武士か、商人か。」

「若いお侍さ。」
「若い侍だ。服装から所持品の具合は、どんな鹽梅だ。」
「さうさの、まづ大小は黄金装で、」
「あの大小が金装！」
「五六百石も取らうといふ服装かねえ。」
「五六百石も取らうといふ…うめえ鳥が羅つたなあ。」
八平次は笑ましげに襟に着けたる財布を解きて、燈火の下に覆くれば、掻きあつめたる落葉のごとく、小判の山は三百両。
「見ねえな、どうだ、今夜の仕事は。此上に大小が金装、服装が五六百石取の臻り小袖。これだから盗人は罷められねえといふのだ。」
老嫗は小判に目をも懸けず、八平次を屹と見遣りて、
「八平次、刀を見せなさい。」
「それ御覧なさい、こんな物だ。」

きらりと一刀の鞘を拂ひ、隻手に持ちて火影に翳せば、老媼は摺寄り、篤と檢め、

「可いから斂めなさい。」

「はゝはゝは、血の曇なんぞはあるまいがな。近頃は八平次も發心して、滅多に人の命は取らねえから、安心するが可いのさ。」

「其言葉に縋つていふのではないが、奥のお客の…………。」

「はて命まで取らうとは言はねえ。」

「いゝえ、命を取らないばかりではない、衣服も所持品も其まゝ手を着けずに、無事に歸してあげておくれ。」

「それぢや大分目算が狂つて來る。見す〳〵金裝の大小や、五六百石取の…………。」

「剝ぐだけの價値があるか無いか、奥に寢ておいでだから、一寸隙見を爲て見るがいゝ。」

「なるほど、直踏をするも可からう。」
鷺歩して奥の一間に忍び寄り、紙燭を點して浮木丸の寢姿を見れば、若き侍とは理や、十五に足らぬ少年なり。脱捨てたる衣服、大小、其外の所持品までいづれも疎末のものゝみなるに、八平次えひたと呆れて、「ええ忌々しい、飛でもねえ饑鬼侍だ。」と呟きつゝ座に復りて、
「あの黄金裝の大小なら、我の方からくれてやるわ。何だつて那麼小僧を泊めたんだ。死だ親父の日でもあるめえに。」
苦々しげに言放てば、老媼は浮木丸が道に迷ひて、一夜の宿を頼む心の切なりし次第をば、語簡に語りけり。八平次は不興の面色にて、
「盜人の親に慈悲なんぞは要らねえ事だ。どりや此財布を抱いて好夢でも見やうか。お前もゝう寐るがいゝぜ。」
大欠伸して、納戸の内へ入りにけり。
老媼もやがて爐の火を埋め、燈火を消して臥戸に入れば、時分を度りて

八平次は、そろり〳〵納戸を出て、奥の間の障子の破れより、彼文函を盜取りて、

「いよう金高蒔繪だ。馬鹿に太い紐を大業に結びやがつて、御大相な容體だ。先刻ちらつと見て、此奴がと眼を着けておいた奴よ。輕いな。中はやつぱり唯の書狀か知らん。唯の書狀ちや可笑くねえて。開けて口惜さ玉手箱は御免だぜ。かう見たところは立派な物だ。拵へたときは餘程直たらう、今捨賣にしたつて安かねえ。有繋は大名道具だ。中は何だらう、そろ〳〵御開帳としやうかな。」

封引切りて紐とく〳〵、蓋を開くれば南無三寶、一通の文の外には、塵一片もあらざりけり。

(十一) 換玉

八平次は書狀投げつけて、

「えゝ何の事た、大方こゝらが結局だらうと想つた。然し、何が書いてあるか、─次手だから讀むで遣れ。えゝ何だと(一筆申入候。此狀持參の若衆は我家に寇爲す曲者に候へば、)曲者に候へばさ頼もしい。(館へ着次第搦取りて、異議に及ばず首刎ね可申、)いや非道い事をおやがる、首刎ね可申は、我より餘程上手だ。(必ず油斷有之間敷、委細は歸城の上にて申聞かせ候べく候以上。)いやこれは飛でもねえ手紙だ。それぢや彼處に寐てゐる若衆は、明日は首の飛ぶことを知らねえのだな、可哀さうに。此儘へい御文と持つて行けば、首がころりか。いや不氣味な御使だわい。」

八平次は面杖つきて、書面を目戍りてゐたりしが、良有りて、

「好事がある、こりや面白からう。」
と頷き〳〵、戸棚より破硯を取出し、一通手早く認めて、この換玉を文函に納め、舊のごとくに封じて、浮木丸の枕頭に差置き、おのれも睡に就きにけり。然りとは知らぬ浮木丸は、朝疾く起出づれば、老媼之はや飯を炊ぎて、爐の自在に懸けたる鍋は、芬々として味噌汁の香を吐きぬ。一間に聞ゆる大鼾は、昨夜老媼の物語に聞きし主なる盗人よ、と浮木丸は恐怖をなして、長く此處に留まらむには、かの主の眼覺まして、我命は亡からむと思ふにぞ、唯是一髮を以て釣りたる大石の下に臥したるごとく、安き心もあらざれば、寸時も早く虎口を遁れむ、と頻に騒ぐを老媼は制して、八平次を固く誡めし昨夜の次第を語り、我御身を護るからは、努々憂慮たまふなとて懇に勧れば、浮木丸やう〳〵安堵の胸を撫で、心靜に支度して、やがて此門を立出づれば、老媼は五六町ばかりも送來りて、

「この道を何處までも眞直に行つて、左に見える森について曲れば、直に街道へ出ますから、氣を着けてお出でなさいよ。街道へ出れば午後には御城下へ着きますから。それでは御機嫌よう。」

浮木丸は訣別を惜みて涙を浮べ、

「姨さん、どうも種々御厄介になりまして、難有うございました。先刻に出さうと思ひましたけれど、何だか極りが惡くって、今まで出さずにゐましたが、これは少々ばかりですけれど、あの宿料でございますから、」

おづ〳〵若干の錢を出せば、老媼は手にも觸れず、呵々と打笑ひて、

「まあ何だねえ、こんな物を。それはお前樣の御小使になさいよ、道中といふものは何のかのと、想つたよりはお金の入るものだから。」

「でもそれぢや餘り御氣毒樣ですから。」

「何も氣毒なことは無いから、それは納めてお置きなさい。」

「姨さん誠に濟みませんねえ。それぢや歸路にお土産を買つて、又お寄

り申しますから、御厄介でもゝう一晩泊めて下さいましな。」
「滅相も無い。今度泊ると、それな、内の忰は盗人だから、どんな事を爲まいものでもないから、決して〳〵復と寄らうなどゝはお思ひなさるなよ。私はお土産も何も要りませんから、もしお前樣がこの禮をしやうといふ思召があるならば、何卒かう〳〵いふ處で盗人の家に泊つたといふ事を、誰にも話して下さるな。万一お上へ聞えた時には、忰も私もお召捕になつて悲しい目を見なければならない。此事ばかりは私の一生のお頼だから、誰にも言つて下さるな。」
「あゝ何の、誰に言ひますものか、父樣や母樣にも話はしませんから、決して心配をなさいますな。」
「その一言が百兩のお禮より、私は嬉しく思ひます。そんならお前樣。」
「姨さん最お出でなさるか。もし御用でもあつて浮玉川の方へお出でなすつたら、漁師の四五六と云つて屹と尋ねて下さいよ。此お禮に御馳走

をしますから。おい、姨さん、あゝ最行つて了つた。」

(十二) 姫の婿

偖て浮木丸は其日も暮れて月影のあかきに道を照しつゝ、やう〳〵城下に着きにけり。

火急の御用とあるからは、何ぞ明朝を待つべきと、かの文函を證として城内に入り、役人同道にて家老將監の館に赴き、問はるゝまゝに有りし次第を陳べて文函を差出せば、這は抑什麼なる事の起りたるやらむ、と將監は心を噪がせつゝ、取るものも取敢ず奥方の御前に伺候して、此由を披露すれば、あら心元なの御消息や、と奥方は睡ぼれたる御聲を顫はせたまひ、灯火掻立てさせ、文函を開きて、御文取出でたまへば、わざ〳〵申入候。此狀持參候若衆義、子細有之、此度姫の婿に見立て候へば、其許へ着次第早々内祝言可爲致、委細は歸城の上可申聞者也。

奥方は直と呆れさせたまひて、

「將監、此御文を拜見いたすやうに。」

と狐に魅まれたらむ御氣色なり。おほせに畏みて、將監御狀を披見するに、半に到りて眉根を寄せ、讀訖りて、はて心得ぬ顏色、言句も無くて控へたり。爾時奧方の宣まふやう、

「將監、其方は如何思ひますぞ。」

「はゝ、恐れながら稀有なる義に存上げまする。」

「さて、此御文を持參いたした若衆といふは、何地に居りまする。」

「恐れながら手前屋敷に控へささましてござりまする。」

「どのやうな樣子か、聞かせますやうに。」

「年齡は十四五歲、色白くして長高く、眉秀でゝ眼清しく、適れ貴人の骨格、と見承けましてござりまするが、進退擧止言辭等は、どうか下賤のものゝやうに存じまする。」

奧方は聽く度每に頷かせたまひ、再びかの狀を取上げて、幾度か見返し

たまひけるが、

「將監、此御狀は殿樣の御直筆に無相違拜見いたしましたか。」

「確と無相違拜見いたしましてござります。」

奧方は物思ひつゝ御狀を卷收めたまひて、

「今宵は夜も更けたれば、詳細は明日話しませう。其若衆は隨分叮嚀に取扱ひまするやうに。夜中の出仕太儀に思ひまする。」

と會釋ありて奧殿深く入りたまへば、將監も館をさして歸りけり。

明くれば平生より蚤く出仕して、奧方と密談數刻に渉りけるが、左にも右にも御歸城を待ちて實否を正し、扨其上にて祝言あるべきことに評議を定め、此日より浮木丸を別殿に移して、いと鄭重に遇しけり。

（十三）　狂人でござる

左衛門尉は係るべしとは露知らず、浮木丸も今は早世に亡きものとなりければ、心に障る雲も無し、と歡び勇みて歸城あれば、待設けたる家老將監、早くも御前に進出でゝ、

「御變りもなう麗しき御機嫌の體を拜して、將監いかばかりか大慶に存じ上げまする。」

「おゝ留守中は太儀であつた。何も別條は無かつたか。」いや、別條があつた筈ぢやが。」

「おほせの如く容易ならぬ別條ござりまして、御臺樣を始め我々一統驚入りましてござりまする。」

「おゝ、左樣であらう。」太郎、一統驚いたと申す。」

と殿は頗る得意なり。太郎とはつと首を低げ、

「一統の驚愕無かしと存じまする。」
「はゝはゝはゝ、こりや驚くが有理じや。將監、さて奴彼を如何取計らつた。頭を刎ねたか。」
將監瞿々として、
「何と御意あそばします。」
「其方も近來大分老いたの。耳が遠うなつたやうじや。かのものゝ頸を刎ねたかと申すのじや。」
將監聞くより吃々と笑ひ出し、
「怪しからぬ言を。苟くも殿樣の御鑒識をもちまして、婿君にお見立に相成りました御方を。將監取計らひまして則ち御別殿に…………。」
「こら〳〵、將監、其方は年老にも似あはず、何じや、戲言などを申すな。別殿の庭前で斬つたと申すか。」
「切るなどゝ申すとはきつい忌詞にござりまする。其外さる、わかれる

かへる、もどる等のお詞もお禁みあつて然るべう存じまする。」
「これ〳〵、何を申す。太郎、將監は醉うてをるやうぢやが、奈何ぢやな。」
「恐れながら御家老の赭顏は天成にござりまする。」
「それは予も存じをるが、彼の申すことが一向解せぬに因つて、大方醉うてをるのであらうと思ふのぢやが。」
「恐れながら將監は御前に於て酒氣を帶ぶるやうな不所存者ではござりませぬ。何故殿樣には臣を醉客と御意遊ばされます。」
將監やゝ腹立の氣味にて、ぎり〳〵と詰寄せたり。此躰を見るより左衛門尉は刷毛のごとき眉を釣昂げたまひ、
「默れ、將監、何故とは何故じや。其方が理の解らぬことを申すに因つて、酩酊いたしてはをらぬかと申したのじや。もし又醉ひもせぬに其樣な理の解らぬ言を申すなら、此方は狂人じや。狂人に家老の大役は預け

られぬ。謁見かなはぬ、下れ〳〵。」
「こは愈以て奇怪な。臣愚なりといへども先君の御鑒識を以て、山水家の御家老をも相勤むるものを、狂人とは………。」
と眼には涙の玉霰、額に湯氣の雲を起し、皺嗄聲を振立てゝ、
「狂人とは奇、奇、奇怪千萬。何故なれば狂、狂、狂人………。」
「おゝ狂人じや。狂人、狂人、大狂人、其方は亂心者の大狂人ぢやぞ。」
一徹短慮の將監は怒氣烈々として猛火のごとく、念逼れる一筋に肩衣丁と撥ねのけて、小刀に手を懸くれば、右近太郎は馳寄りて、
「御家老、御前でござるぞ。」
「臣は固より狂人でござる。此處をお放し下さい。」
踠くを太郎は緊と抱住めて、
「御家老、御短慮でござる。」
「短慮でない、狂人でござる。」

（十四）　手品の仕掛

殿の疳癖、家老の短慮、水火のごとく相尅して、條理も分らず何じや物じやと悶着するを、驚破事よと近侍の面々、總懸りにてやう〳〵推宥め、まづ將監をして自一至十を言上せしめけるに、顚末始めて分明して、殿の御心稍解けてけれど、頸を刎ねよとありし浮木丸が命愛でたさのみならず、我館に在りて殊遇を受くると聞くよりも、心甚だ平かならず、暴かに脇息推遣りて、

「將監、然らばかの狀を此へ持參いたせ。」

「御狀は御臺樣の御手許にござりまする。」

「こりや金彌、奥へ參つて其狀を持て參れ。太郎、怪しからぬ事に相成つたの。」

「御意にござりまする。」

「御意にござりまするではないわ。予は確に彼奴の頸を刎ねよと書いたつもりじやに、奈何いたしたものであらう。」

「ほと〳〵驚入りましてござりまする。」

「驚入りましたではないわ。あの文函は予が長年用ひ慣れたもので、手品の仕懸など爲てある理は無いのじや。將監、確と其方が老眼の讀違ひではないな。」

「恐れながら魯魚烏焉馬などやうの文字の見違ひは、隨分例のある義でござりまするが、弓矢八幡も照覽あれ、全文讀違へるやうな義は曾てござりませぬ。また始に件の御狀を御披見に相成りましたのは、御臺樣であらせられまする。」

殿は少しく鼻下の寸を延したまひて、

「ふう、奥が最初に見たと申すか。」

「いかにも、御臺樣御覽の上にて、こは容易ならざる事、と將監にも拜

見の義を抑せ出されましたに因つて、始めて事の次第を承知仕りました
やうな義にござりまする。」
「あゝ左樣であつたか。奥は其方より齡も若し……はゝはゝ、其方より
と申すと、もはや白髮の老女のやうに聞ゆるが、將監、奥は今年何歳に
相成ると心得る。」
「恐れながら御臺樣には容顏御美麗に在しますゆゑ、何ヶ年相經ちまし
ても、御入輿の時と少しも變らせられぬやうにお見上げ申しまするが、
指折り數へますれば、お十八にて御入輿、それから、かうつと、十五年
に相成りますれば、今年はお三十二かと存じます。」
「いかにも三十二ぢやが、將監、何と物は相談ぢやが、二十四五には見
えぬかな。」
「恐れながら臣は唯今でもお十六七ぐらゐに拜見いたしまする。」
「はゝはゝは、然らば奥が輿入の折には、胎内にをるやうに見えたか。」

などゝ、奥方の御話にて御機嫌特に麗しき折から、金彌は文函を持參して御前に差置けば、殿は急遽開かせたまひて、中なる書を手に取るより、愕然として、

「將監、違うてをるぞ。太郎、違うてをる。」

太郎は嚮にも御側に侍りて、殿が自筆にて認められける文を親しく視たりければ、證人として今此狀を示されけるに、やゝ！　と、吃驚、

「こりや如何にも相違してをりまする。」

將監もなほ吃驚、

「なに、あの、相違………！　怪、怪、怪しからぬ事でござる。」

右近太郎は默然と思案してゐたりけるが、良有りて御前間近に進出て、

「恐れながら此義に就きまして聊か存寄りましたる仔細がござりまする。」

「おゝ何じや。」　と殿も思案最中の、むづかしき顏して睨むがごとく顧たまへば、太郎は聲低く、

「こは必常浮木丸の所業と愚案仕りましてござりまする。」
殿は顰めたる眉を半開きて、
「予の考へも其通じや。彼奴途中にて文函を開いたものと相見える。」
「百姓風情の小忰ゆゑ、文字などは知らぬことゝ侮りましたが、此方の不覺にござりました。」
「今更言うても復らぬ事じや。將監、浮木丸を此へ喚寄せい。」

(十五)　命乞

浮木丸は召に應じて伺候すれば、殿は將監、太郎と倶に交る〴〵僞筆の詮議をなしたりけれども、微塵さる覺は無しとて、罪に服すべくもあらざりければ、左衛門尉今は怺へかねて、

「やあ將監も太郎も捨置け〳〵。小童めは設ひ白狀せいでも、活けては置れぬ奴じや。最早問答は無益ぢやわ。誰そ、彼奴を庭前へ引据ゑよ。」

と喚はりつゝ、佩刀を挈げて衝と身を起せば、近侍の武士五七人、ばらばらと立懸りて、矢庭に浮木丸の小腕把りて、物をも言はせず引立つる。こは理不盡と浮木丸は憤怒をなして、

「私は何を惡い事をして斬られるのでございます。其理由をお聽かせ下さい。」

曳かれながらに地韛を踏めば、武士ども聲を揃へて、默れといふがまゝ

に中に舁ぎて、椽前に引据ゑたり。唯是一羽の雛鳥が梟の群の擒となりて、生命を弄ばるゝに似たりけり。

浮木丸は身動だに得ならずして、今は唯刃の下に死を待つことの心細さに、助を乞ふべき人は無けれど、頻に聲を放ちて號泣べば、情を知らぬ武士輩は、神妙にせよと同音に喚はりて、御佩刀の切味什麼と待ちかけたり。

爾時左衛門尉しづ〳〵庭に下りたちて、浮木丸の悶ゆる躰を流眄にかけ、片頬に微笑を含みつゝ、黄金裝の一刀を晃りと脱きて進寄れば、浮木丸は心も消えなむとして、いよ〳〵悲鳴を揚ぐるのみ。殿は太刀把直して眞額に揮翳し、呼吸を度りて今やの折しも、奥の方より跫音漫亂に、姑く〳〵と馳來るものあるに、左衛門尉は拍子ぬけて振回れば、思も懸けず奥方は、十歳ばかりなる鹿子姫の手を執りて、轉ぶがごとく驅寄りつ。左衛門尉が袂に犇と取着きて、少時の猶豫を願ふに

ぞ、什麼なる事情とも知らねども、子細あらむと左衛門尉は、辭急しく樣子を問へば、奥方いなほ打噪ぐ心を撫でゝ、姫が稚心にも浮木丸を慕ふことのいと切なるよしを具に語りて。今若渠が命を絶ちたまはゞ、姫が愁傷は奈何ならむ。お家に寇なすといふにもあらぬ浮木丸の、命ばかりは助けて得させたまへ、と涙とゝもに訴ふれば、鹿子姫も可憐に命乞して已まざりけり。

(十六)　第一の關

左衛門尉は有繫に心鈍りて、遂に刀を斂めたれど、渠が行末を念へば、なか〳〵助命すべくもあらざれば、忽ち一計を案じて、

「こりや浮木丸、其方は命冥加な奴じや。奥といひ、姫といひ、皆其方を愛うおもうて命乞をいたすに因つて、首は繫いで取らするぞ。」

浮木丸は歡涙の流るゝを覺えず、

「難有う存じまする。」

「然し、唯は釋されぬ。此城の東南の方に當つて、遙に淡青く見ゆる山がある。あれは黑雲山といふが、其山中の窟に一人の山男が棲ひをる。そのもの〻頭髮は長五尺に餘りて、色は金の如く輝くとある。その頭髮を三縷奪つて參れ。首尾好く歸城の上は、鹿子姫を其方に娶して、予が家督を讓るであらう。これから直樣發足いたせ。」

浮木丸は途方に暮れて、

「その山男といふ人は強うございますか。」

「相撲を取つたら大概其方と五分であらうな。」

「此處から其山まで幾里ほどございませう。」

「わづか百里ばかりじや、喃、太郎、そんなものであつたな。」

「御意にござります。」

奥方は早くも左衛門尉が胸中を曉りければ、

「おほせではござりまするが、年齢も参らぬ浮木丸を、其樣な處へお遣はしに相成りまするは、必定彼の命をば………。」

「これ〳〵控へてをらぬか。」

目授をすれば、いよ〳〵夫よ、と奥方は悲さに堪へかねて、岸破と俯して泣入りたまふ。浮木丸は我力の及ばざらむ事と心には危めども、旨に忤はゞ命を亡はむこと眼前なり。萬が一にも三縷の髮を取得て歸らば、

山水家の世嗣となりて、終身榮華を窮むべし。嬉しきことの極度哉、と思へば心を定めてぞ御前を退出したりける。

さるほどに浮木丸は城を出でゝ、東南の空に微見ゆる遠山の影を心あてに、行き〳〵て日數三日になりぬれば、今は早二十里許も來にけむと覺しき處に、嚴めしき關門あり。番卒の一人は浮木丸の入來るを見るより、聲を暴げて、

「こりや〳〵、其方は何處より何處へ罷通る。」

「私は山水左衛門尉のお城から黑雲山へ參るものでございます。」

「然らば山水家の御家來かな。」

「左樣でございます。」

「何役をお勤めなさるゝ。」

浮木丸そはたと應答に窮りしが、

「へい何でも勤めまする。」

「何でも勤める？　然らば何でも御存じかな。」
浮木丸の應答は既に頗る奇なるに、番卒の質問は更に尚奇と謂ふべし。
「何でも勤めるくらゐですから、何でも存じてをりまする。」
「いや其に何より重疊な事でござる。何でも御存じとあれば、ちと智慧を拜借いたしたい義がござる。實は先月の初から此領内の井戸の水が悉皆干てまうて、今以て一滴も出ぬので甚だ難澁をいたしてをるのでござるが、誰でも舊のやうに水の出る工夫をするものがあれば、褒美として領主より黄金を馬十駄下されうとの事でござるが、何と水の出まする御工夫はござりますまいか。」
浮木丸は無雜作に、
「それは譯の無い事だ。海の水をお汲みなさいな。」
番卒は忽ち眼を瞋らして、
「やあ、奴輩、役人たるものを嘲弄いたすな。」

と謂ふより早く棍棒追取り、齊眉殺勢に構へて擊蒐らむとす。こは敵はじと浮木丸は一目散に奔竄せば、二人の番卒は水車のごとく頭上に棒を打揮り〳〵、逸さじものをと逐來る。捕へられなば什麼なる目にか遭はむずらむと、浮木丸は心も空に走ること七八町にして、息竭きて地上に撻と僵れたり。

（十七）　蕃椒

されども此處までは番卒どもの逐來らざりければ、浮木丸は辛くも難を免れて、それより四日が間は道中何事もあらざりしが、五日目の黄昏に着きたる町の入口には、またもや關所の固あり。浮木丸は門の外に足を停めて、

「おや〳〵、復關所だ。此處にもやつぱり逐懸けられた棒がある。あゝ棒を見ると胸が動悸々々する。又大きな聲をして何か言ふだらうなあ。」

呟きつゝ門を入れば、果せる哉番卒は大聲にて、

「これ待て。」と喚住めたり。

浮木丸は曩日の失言に懲りて、這度は敬ふ如く、畏るゝ如く、唯々と應ふれば、番卒の問ふこと第一の關に同じく、然れば浮木丸も亦前の如く應へけるに、一人の番卒進み來りて、

「それは丁度幸ひな事でござつた。早速ながらお話し申すが、當御領主の奥庭に昔から唐土渡來の橘がござつて、年々實ることでござつたが、いかゞなものでござるか、昨年から頓と芽も出さぬやうに相成つたで、上樣には殊外の御心配で、此橘は御先祖御入國の其始に栽ゑられた、代代御相傳の寳であるのに、御當代に相成つて枯れたといふのは、信に目出たからぬ前兆で、且御先祖へ對しても謝譯の無い義であれば、何者にても件の橘を活したならば、褒美は望次第との事でござるが、何と御工夫はござるまいかな。」

浮木丸は例の無雜作に、

「それは橐駝師を賴むだら可うございませう。」

「愚なことを謂はつしやい。これまで手に手を盡して、百方丹精をいたしても、一向其効が無いばかりに、このやうに一々旅人を檢めて、然る可き人を穿鑿いたしてをるのでござるわ。」

「あゝ然うでございますか。それには好い法がございますけれど、私も主人の使で黑雲山まで急いで參らなければならないのでございますから、どうせ歸途には又此方を通りますから、其時の事にいたしませう。」

「いや一日遷延に相成れば、それだけ餘計に枯れてしまふのでござるから、御用もござらうけれども、急に一つ御培養を願ひたいものでござるな。」

此一言に浮木丸は遁れむ路を失ひて、姑く思案に暮れたりしが、

「一體實の生る樹といふものは、實が生らなくなると、枯れてしまつたのでございますから、今日培養をするのも、來月になつて爲るのも同じ味でございます。」

出まかせの妄語も、番卒は疑はず、

「はゝあ、左樣な理合なものでござるかな。」

と深く感じたる體なりしが、やゝ年長なる同僚を顧て、

「唐木氏、今のお話をお聞に相成つたか。然やうな理合のものなら、尊公が御秘藏の、あの盆栽な。」
「拙者が秘藏の盆栽と？　はて何の盆栽でござつたかな。」
「尊公は頗る外飾家だから恐れるよ。何の盆栽だなど〻、大層數でもあるやうな顏をして、臍緒切つて以來、天にも地にも唯一つ、去年買つて直に枯らした、それ、あの盆栽さ。」
「あ〻、あの蕃椒かな。」
「は〻は〻は、其蕃椒の秘藏の盆栽さ。」
「貴殿は否に他を嘲弄するではないか。秘藏だの、盆栽だのと、さも蕃椒を大事にでもいたしたやうに。」
「いや此は御腹立かい。御腹立では恐入る。何も嘲弄いたしたわけではないが、あの盆栽…………ではない、壞れた擂鉢を繩で縛つた奴にお手栽の…………。」

「それが即ち嘲弄では無いか。」
と唐木は大いに不興なり。かの番卒は笑を忍びて、
「そんなら單お手裁の、あの蕃椒が枯れたといつて、其節大層慨いてお在であつたが………。」
「默らつせい。唐木朴内は武士だ。蕃椒が枯れたりとて慨いた覺えは無い。今一言謂つて見るがいゝ、手は見せんから。」
「はゝはゝはゝ、尊公は腹立ゑたのか。」
「腹立ゑたが何とゑた。」
「可笑いね。唐木朴内は武士だといつたではないか。武士たるものが蕃椒の爲に腹を立つとは可笑いてね。蕃椒で腹を立つやうでは、人參では以爲切腹だね。人參で切腹するやうでは、武士たるものは八百屋の前は通られまい。」
嵩にかゝりて嘲弄すれば、朴内今は堪忍袋の緒を切りて、おのれ兩斷と

腰なる刀を引拔けば、然知つたりと此方の番卒も、棍棒執つて相抗ひ、丁々發矢と亘合ふ眞劒勝負となりにけり。浮木丸は此隙に、逃げろ〳〵と走行く。

（十八）舟の中

黑雲山の半腹に繁茂る樹抄の翠も、歷々見らるゝまで間近う來りける處に、渺々として海の如く、いと濶かなる湖あり。浮木丸は蘆間に騰る煙を目指して到着けば、菰簾の小屋の中に五十路ばかりの渡守が、消えなんとする焚火の傍に坐睡りゐてゐたりけり。浮木丸は聲高に、

「老爺、舟を出してくれないか。」

渡守は應と眼覺ませしが、頻りに浮木丸の姿を眺めて、身を起さむともせざりければ、浮木丸は懷を搜りて若干の錢を取出し、

「これは渡錢だよ。」

渡守は頭を掉りて、

「錢は要らねえ。其代りお前樣にお聞き申したい事がある。」

「知つてゐる事なら聞かせるから、代錢は取つておゝきな。」

「錢は要らない。聞きたい事を聞けば可いのさ。」
此問答の間に二人は舟に乗りて、はや三反ばかりも漕出でたり。
浮木丸は奇異なる言をいひし渡守の顏を打目戍りて、
「聞きたい事といふのは、老爺、甚麼事だい。」
渡守は艪綱を把りて、器械のごとく動きつゝ、
「お前樣はお年齡はいかないけれど、かう見た所は立派なお武家樣だから、學問とやらも稽古をして、智慧があらつしやるだらう。」
浮木丸は揚々として、
「智慧は隨分あるよ。」
「然うだらう。そこを見立てゝお賴み申すのだが、私もね、かうやつて這麼所で渡守をして一生を果すのも、つまらない話だと、つく〴〵此家業が否になつたから、どうぞして商賣換をしやうと思ふけれど、どんなにしても此家業を罷めることが出來ないだ。」

悲むが如く渡守は愬へぬ。浮木丸は又例の無雜作に、
「罷めたら可いぢやないかね。」
「それが、奈何いふものだか罷めることが出來ないだ。」
「出來なければ仕方がないから罷めないのさ。」
「それが罷めたいだ。」
「困るねえ。」
「困るよう。」
「それぢや奈何したら罷められるか、それを聞きたいといふのかい。」
「然うさ。自分の氣では今からでも罷めたいのだけれど、また何と無く罷められないやうな心持がして、さう思つてから十年にもなるけれど、今だに罷められずに、愒して居るのさね。」
「こりや餘程むづかしい。私の智惠ぢや企及ないから、丁度今師匠の處へ行くのだから、聞いて來てあげやう。歸來まで待つてお在な。」

渡守は大いに歡びて、
「それは難有い。是非御師匠樣に伺つて來ておくんなさい。」
「屹度聞いて來てあげるよ。」
「何分お賴み申しましたよ。而してお前樣はこれから何處へお出でなさるのだえ。」
「黑雲山の山男の處へ行くのさ。」
渡守は顏色遽に土のごとくなりて、
「大、大、大變な言を謂ふ人だ。」
戰慄して恐怖をなせば、浮木丸は怪みて、
「え、何がそんなに大變のだい。」
「何が大變だつて、黑雲山の山男といふのは人を啖ふ妖怪だ。」
人を啖ふ妖怪！　浮木丸は戰々と顫ひて、
「大、大、大變だねえ。」

「大、大、大變だ。舟を回さうよ。」
渡守は慌しく艪を取りなほさむとしたりけるを、浮木丸は制めて、簡單に君命によりて三縷の髪を獲て來らむことの始終を語りければ、渡守は再三其無謀なる旨を諭しけれど、遂に承引せざりけり。
「それぢや恁う爲さい。これも人の噂だから信にはならないが、其山男の一人の妹は、此湖に住むでゐる鏡鯛といふ魚が大好だけれど、此湖の主が可恐に其魚を捕りに來ることが出來ないので、始終鏡鯛を食ひたがつてゐるといふから、其魚を持つて行つて、山男の妹に頼むだらば可からう。」

（十九）　鏡鯛

人を啖ふ妖怪と聞きて、我既に死せりと覺悟したりし浮木丸も、今又鏡鯛の計を聞くより、雀躍して打喜び、

「老爺其は事實かい。」

「事實だか、無根だか知らないけれど、さう言傳へてあるのさ。お前樣は奈何ても行くといふなら、外に爲方も無いから、まあ鏡鯛を持つていつて御覽なさい。前岸へ着いたら私が釣つてあげるから。」

浮木丸は渡守の情を深く歡びて、

「澤山釣つておくれよ、二十尾ばかり。」

老翁は寂しげに笑ひて、

「そんなに釣つてたつて爲樣がない。」

「澤山持つてつた方が喜ぶだらう。」

釣竿を取出せば、浮木丸は身を起して、

舟は岸に近きぬ。渡守は水の色を候ひて、

「老翁、もう釣るのかい。それぢや私が艪を預らう。」

渡守は此少年の素生を識らざれば、用無き嬉戯と危みて、

「飛でもない。お前様なんぞに舟が扱へるものか、危い〳〵。」

浮木丸は可笑さを忍びて、

「何、難はあるものか、一寸貸してお見せ。」

「危いといふ事に。」

「大丈夫だ。」

と櫓を把るより早く再三盪せば、渡守は驚きて、

「こりや本物だ、巧いぞ〳〵。」

浮木丸は是見よがしに術を盡して、

「巧いの巧くないのって、本物だらう。」

老爺は手を拍ちて、
「本物だ〳〵。大分學つたね。」
「學つたの學らないのつて、本物だ。これだから安心して早く釣つておくれよ。」
渡守は綸を繰出して、此處ぞと思ふあたりに投入るれば、待つ間もあらせず手應あり。驚破と引擧ぐれば、竿は撓みて半月の如く、水を排きて躍出でたる鏡鯛は、大さ二尺にも餘んぬべし。舟中の二人は聲を揃へて、獲たりや獲たりと歡びぬ。かくして竿を下す毎に懸らずといふこと無く、易きこと生簀の魚を釣り、嚢の物を搜るに似たり。少焉の間に釣得たる鏡鯛は、優れて大いなるもの〻み其數十に滿ちぬれば、渡守は竿を收めつ〻、板子の下の潑剌たる響を聞きて、笑ましげに、
「これだけ持つて行けば、山男の妹も懽ぶだらう。」
「こんなに持つて行くのは大變だね。重たからう。」

「藤蔓か何ぞへ貫して、背負つて行くのだ。」
「背で躍られたら痛いね。」
「弱い事をいふ。そんな了簡で妖怪の處へ行かれるものか。」
「妖怪は背で躍はしない。」
「其代り頭から喰つてしまふ。」
浮木丸は愁然として、
「脅しちや厭だよ。」
「大丈夫さ、此魚さへ持つて行けば、其妹が親切にしてくれるから。」
「老爺、お前識つてるなら、よろしくと言はうか。」
「えゝ誰が妖怪を識つてゐるものか。」
やがて二人は陸に上れば、渡守は何處よりか一條の蔓を取來り、魚の腮に貫きて、其端を結び合せ、
「さあ恁して持つておいでなさい。」

浮木丸は受取りて、數度其厚意を謝し、我もし命愛でたく歸らむ日には、厚く此恩に酬ふべしと、覺束なき再會を契りてぞ、西と東に別れける。

（二十）大女

此湖より黒雲山の麓に到るまで、平原茫々として人の家無く、又人の影を見ること無く、狐兎路に跳りて、怪鳥頻りに叫ぶ。更に山中に入りては、凄寥も一層にて、溪河の響、梢を拂ふ風の音も、尋常ならず肝に徹へて、おのづから進みかねたる山路に、棘を踏み、草を分け、或は橋無き流に裳を褰げ、或は壁の如き斷崖に蔓を攀ぢ、奥へ〳〵と志して、行けども行けども山男には遇はざりけり。

高き木末は茜色に、脚下の稍黒むは、日も早暮るゝに近し。夜に入らぬ間に、と心ばかりは逸れども、身體疲れて思ふに任せず、左右して進行くほどに、道窮りて谷深く、瞰下せば隱々として其底を知らず、鬼氣騰りて人に逼る想ひあり。恁る處にこそ妖怪變化の類は住むべかりけれ、と浮木丸は心猛くも纔に道を求めて下り行けば、谷の中間は藥研の如く

窄まりて、底は口よりも濶かなれど、晦冥は日中も薄暮に似たるべし。但見れば、樹茂の蔭に目覺しく大いなる岩穴ありて、入口の裝飾には、數百の人の髑髏を珠數繫にして懸けわたしたり。浮木丸は慄然として色を失ひ、

「あゝ此處だ。」　と我にもあらで口走りつゝ挈げたる魚を見るに、身一つだに苦しき險路を携へ來りたれば、尾は盡く磨れきれて、皮といへば、斑々木根巖角に壞られたるが泥塗になりたる、醜狀謂はむやう無し。

「おや〳〵、大變になつて了つた。これぢや贈品にはならない。こんな物を出したら、それこそ頭から喫はれてしまふ。」

傍に溪河あり。これ屈竟と立寄りて、蔓のまゝに彼魚を流に浸せば、手を費さずして忽ち舊の如く鮮けくなりぬ。浮木丸は洗ひたる魚を左視右瞻てありける後より、突然聲ありて、

「好いものを持つておいでだね。」

此聲の耳に入るや否や、浮木丸の全身の血は冷却りて氷の如くなりぬ。背後に立てるは身長六尺有餘の大女なり。其容貌を視るに、少しも常人に異る所無く、而も妖艶なることは之に過ぎたり。身には眼慣れざる荒栲やうの衣を絡ひて、樹皮を擣きたるを綯ひて帶とし、脛も顯はに跣足なれども垢着かずして、膚の白さは玉をも欺くばかりなり。

浮木丸は此大女こそ山男の妹ならめと、一目に看破りければ、

「之を進げませうか。」

大女は囅然に進寄りぬ。

「あなたは兄樣がありますか。」

大女は頷きぬ。

「金の髮の生へてゐる、而して人を喫ふ。」

大女は又頷きぬ。

「それぢや進げませう。その代り私もお賴みがありますが、聞いて下さ

るか。」

大女は魚にのみ眼を注ぎつゝ、

「何でも。」

「それぢや兄様の頭髪を三本抜いて下さいな。」

（二十一）蟻の姿

大女は其語を異みて子細を訊ねければ、裹まず語るに疑團を解きて、望みに應ずべきよしを答へければ、浮木丸は重ねて、かの渡守の事、橘の事、水の涸れたる事等を質ぬるに、大女の言ふやうは、それらは渾て我兄の關知れることなれば、計を以て聞出すべしと語らふ間に、一陣の魔風颯と吹來り、山鳴り谷應へて、凄じなんど謂ふばかり無し。

大女は狼狽へて、

「さあ〳〵、兄が歸つて來る。お前を見たら一口に啖つて了ふから、かうしては居られないよ。苦しからうけれど少しの間辛抱をおし。」

「何を辛抱するの。」

と問ふ間もあらせず、大女は丁と手を拍鳴らせば、不思議や浮木丸は忽然化して、疊の目にも入るべき小蟻の姿となりにけり。

「さあ、これで可い。私の衣の皺の中に匿れてゐるのだよ。」
小蟻は心得たりと大女の裾に取着き、倶に窟の中に入りて、山男の歸るを晩しと待ちけるに、外方鳴動すること逾劇しく、轟然と高く響くよと思へば、大石を墮すがごとき跫音聞えて、歸來れる山男の相貌は畫ける鬼に髣髴たり。金色の髮を双の肩に亂しかけて、面色青く唇は烈火の如く、惣身に毛の生ひたること、獸の皮なんどを被たらむやうなり。
浮木丸は蟻となりたる微小なる身をいとゞ縮めて、樣子は什麼と見てあれば、山男は頻に鼻を蠢かして、
「人臭いぞ、人臭いぞ。」
と爛々たる眼を瞬りつゝ舌舐めずりして、四邊を隈無く眴せども、人の影はあらずして、人肉の臭きを怪みつゝ、
「人臭いぞ、人臭いぞ。」
大女は冷笑ひて、

「何の、人も居ないのに人臭いことがあるものか。」
「人のゐないのに、こんなに人臭い理は無い。」
「理は無くっても、人なんぞは居るものか。」
窘められて山男もやをら妹の膝に枕するよと見れば、天地も崩れむばかりに高鼾して、やがて睡に就きにけり。
時分は好し、と大女は其髪の最長やかなるを一縷引抜けば、岸破と起きて、
「何を爲る。」
大女は何氣無き面色にて、
「あゝ夢を見て、苦し紛れにお前の頭髪を引張つた。」
山男は打笑ひつゝ、
「どんな夢を見た。」
「一村で井戸の水が悉皆干てしまつて、奈何したら可からうと、大勢に捉まつて責かれた夢を見たが、奈何したら水が出るものだらう。」

山男は事の易きを侮る如き氣色にて、
「難の無い事よ。其村の眞中に在る井戸の底に、大きな蝦蟇が住むでゐるから、それを殺してしまへば、舊の通り水は出るわ。」
と言ひも訖らで睡りければ、妹は再びその頭髮を一縷拔きぬ。
山男は勃然と起きて、
「えゝ何を爲るのだな。」
「私は又變な夢を見たよ。ある城の奧庭に橘の樹があつて、去年までは澤山實が生つたのに、今年は芽も出さないといつて、大勢樹の周圍に群つて騷いでゐたが、あの橘は奈何かして實を持つやうになるまいかね。」
山男は欠交りの寢惚聲、
「それは根の下に鼠が巢を營つてゐるのだから、其鼠を殺せば可いのだ。あゝ寢やうとすれば何のかのと、懊惱い言を謂ふ。」
と我手枕に又睡りぬ。大女は遂に三縷の髮を拔得て、またもや眼覺まし

たる時例の如く夢に託して、かの渡守の事を問へば、其奴が代り
「それは誰にでも舟の艪を持たせて、顔へ潮水を沃ければ、
に生涯渡守になつてしまふのだ。」
計其圖に當りて、三縷の髪を獲たるのみならず、併せて三ヶの秘事をも
聞き得たり。
浮木丸は衣の裾の皺より蟻の面を差出して、占めた、と思はず叫びしが、
其聲小さかりければ大女にも聞えざりけり。

（二十二）　二代の渡守

大女は窟の内を忍出て、手を打鳴らして浮木丸を人の姿に復して、偖言ふやう、御身が望む三縷の髪は此に在り。三ヶの秘事も定めて聞きつらむ。此上は早々此處を立退くべし、と懇に捷徑を誨ふれば、今や一生懸命の望を達したる浮木丸は、勇氣平生に十倍して、山路も暗夜も惧るゝところにあらずと、金色の髪を懷にして、辭急しく大女に別を告げ、飛ぶが如くに道を急げば、麓に近く頃に夜は明けたり。

遙に望めば、かの湖は瀲灔として、朝日の波に映ろふ景は我心にも似たりけり、と饑ゑたるも憊れたるも忘れて驀直に山を下り、廣野を一文字に驅抜けて、早くも湖の畔に着けば、待ちに待ちたる渡守は舟の中より躍出てゝ、

「おゝ無事で歸らしつたか。」

と歡涙に暮れければ、浮木丸も渡守に縋りて、少焉は涙に咽びけるが。

「老爺、お前のお蔭で山男の頭髮を取つて來たよ。」

と獲物を渡守に示して、互に其首尾を懽ぶこと限無し。

偖浮木丸は山男より聽きたりし秘事を傳へければ、渡守は天地を拜して打懽び、彼一句我一句行末の幻影を眼前に語らひつゝ、舟を舊の岸に回して、こゝに袂を分ちけるが、浮木丸は二の關に着きて、山男の言の如く、橘の根方を掘らせ、數百の鼠を盡く擊殺させけるに、日ならずして橘は枝每に芽萌けるより、領主は其功を賞して黃金三千兩を賜ひ、道中警護の武士數多を差添へて、本國まで送らせたまふ。

浮木丸は第一の關に入りて、數ヶ村の水を半日に湧かし、褒美の黃金二駄の馬を曳せて、勇みに勇みて歸城すれば、左衛門尉夫婦を始として、家臣一統の驚駭は謂ふべくもあらず。倘かの山男の髮を見るにつけて、いよ〳〵奇異の想ひをなし、浮木丸は天津星の化身とかや、人間業には

あらざりけりと、感ぜぬものぞ無かりける。

さるほどに左衛門尉もかねての辭反古に爲難く、乃ち浮木丸を家督と定め、鹿子姫と內祝言の式を擧げて、城內萬々歲を唱ひすましぬ。

それより數日を經て城主左衛門尉卒に行方知れずになりけるとて、館の騷動一方ならず。八方に手配して、草を分け死を起せども、音信は更にあらざりしに、程經て一人の老漢浮木丸を訪ね來りぬ。こは是湖の渡守なり。

さては御身に代れる不幸の人のありけるか、と浮木丸の訊ねけるに、老漢は北叟笑みて、云々の武士の來りけるを欺きて艣を把らせ、思ふまゝに潮水を吃はせて、今は二代の渡守是なりと語る。浮木丸もなほ具に其士の衣服容貌を質しけるに、紛ふ方なき義父の左衛門尉なり。

嗚呼今思ひあたることあり。過日旅の物語せよとありし時、かの湖の前岸には黃金の砂ありて、收むる人もあらずと座輿に語りけるを、鄙客な

る父君の轉て信とおぼしたまひけるか。

(二十九年九月)

青葡萄

（一）

八月二十五日、此日は恐らく自分の一生忘られぬ日であらう、確に忘られぬ日である。

歐羅巴の諺に、土曜日に笑ふものも日曜日には泣く、とあるが、果然未來は一寸先も辨らぬ人間の仕事を、神の目から見たならば、其淺ましさは幾許であらう。陰陽師さへ身上は知らぬものを、自分は例の朝寐をして、十一時と云ふ比蟬の聲に起きて、朝飯と晝飯の間を掻込むで、机に向つたが、暑い、暑い。此暑い裏で俳諧！ 風流は熱いものであるのか、但は熱いから風流で涼むのか、左にも右にも先日來、小波西郊の二子と（土人形）と云ふ三吟の端書俳諧を始めて、今や名殘の月に近く進むだ所

てあるから、小波も輿に乗じて　二三日前から脚氣の爲に江の島に轉地療養をしてゐるのであるが、遠路も厭はず矢繼早に射かけて來る。已無く苦いのを附けて、西郊へ廻す次手に、午後四時から獅子寺の矢場で一拳爭はう。連中も四五名あるからと唆して、さて其時刻に出懸けた。はや大勢聚つてゐる射手の面々には、官吏もあれば兵士もある、若樣が居るかと思へば地主樣もゐる、英語の教師に新聞記者、御次男やら小説家やらで、矢聲も勇しく金輪の點取を催してゐる。

凡そ諸藝は何に限らず其門は天狗道であるが、別して射の道は劇甚やうに想はれる。自分とても四年來の天狗で、既に其筋から薄部尾の羽團をも許されやうと沙汰するほどの慢、叨に他の射勢を難じて、日置流の秘歌百首を朗吟するの一癖、抑我流には三教の密傳ありて、など〻遣りかける邉も無く、此日は殆ど亂射の躰で、矢數の二百餘も彎いて、黃昏となつた。自分の中の劣いのは、今に始まつたのではないが、此日は又格

別の不出來であつた。遖れば遖るほど揉破して、心中さながら焚ゆる如く滿身の疳は腦天まで亢進つて、是が昔の大名であつたなら、そつと中る的を懸けい、と劇しい御諚のあるべき所であるが、平民の身の可悲には、徹骨の恨を飮むで、怏々と弓を韔に納めてゐる所へ、明進軒(近所の洋食店)からの使で、社中の馬食先生の會食に招かれた。

馬食先生の洒脫の氣と諧謔の言とは、自分の常に喜ぶ所である。折こそ好けれと一躍して矢場を出た、E氏、H氏、T氏も同行した。

途上H氏は自分に向つて

「これから君は皆中だらう。」と戲れたが、頓て五人の膝は卓を圍むで、觴を飛し、且吃し、且談じた愉快は、向者の怏々樂まざる人をして、二立目に自景を濟ましたやうな元氣にした。

やう〳〵ビイフステエキの肉叉を擱くか擱かぬかに、給仕が來て、

「御宅から御人でございます。」

自分は直に起つて、二階の欄から門に佇む門生の春葉を呼びかけて、客來か、と訊ねると、「否、一寸……。」と渠は意有りげに自分を目成る。內から使のある每に、此から上下で應對するのは例であるのに、今夜に限つて、渠は一寸と言ふ。頗る不審に堪へなかつた。
不審に堪へなかつたのは、他聞を憚るやうな內密の用事のあるべきを信ぜぬからである。爾云ふ事は無い、とは思ひながら、如何なる事が降つて湧くかも料られぬ人の世である、もしや凶事などではあるまいか、と不圖考へると、何彼無法に慌忙しく階子を下りて、上框に出て、再び、
何だ、と訊ねた。
渠は益意有りげの氣色で、
「少々申上げたい事が……。」
と自分の背後に居並ぶ此家の衆に聞かせたくない風が見える。此時自分の胸は異しく轟いたのである。さて渠を入口の一室に導いて、三たび、

何だ、と訊ねた。
駈けて來たのか、渠は頻に過む息の下から、
「西木君の容躰が宜くございませんから、早速お歸りくださいまし。」
と言ふ聲は顫へてゐる。
「西木の病氣？　何だ、何だ、何だ？」
と自分が渠等の草稿を見て意に滿たぬ所に到ると、一抹の朱棒を吃はしながら毎に絶叫する、其絶叫を以て渠の言を難じた。西木と云ふは、我門下の秋葉である。渠は二週間も前から胃弱を病むで、服藥をしてゐるのであるが、此二三日は食が痞へるとて、粥を食つて、座臥してゐたのではないか。今日の午後まで異常の無かつたものが、脚氣衝心や、腦充血のやうに、人を呼立てるほどの劇變のあらう道理が無い。
(容躰が好くない)などゝは、文字上の意義に於てこそ輕いが、實際は、(死に瀕す)と云ふやうな場合に用ゐられる、容易ならざる語である。誰

大病直來い、といふ電報の文は、多く臨終の後に用ゐられる氣安文句に過ぎぬ。容躰が好くないとは、九死と云ふのを人に知らせる隱語である。自分は然う解釋ゐたから、夢かと驚いた。

「如何ゐたのだ。」

と我ながら震聲で鋭く問詰めた。

渠は四邊を眴して、極めて小聲に、

「吐瀉を始めました！」

吐瀉！　秋葉は既に死せり、と聞くも同じやうに、犇と胸に徹へたが、忽ち猛然として、設へば、傷を負ひたる武者の勇を鼓したるやうに、

「善、行け！　醫者は？」

四邊に忍ぶ聲ながら、渠の耳には破鐘の如く響いたであらう。渠は走りかけた身を捻向けて、

「K氏が參りました。」

と自分の頷くのを見るより疾く飛むで行つた。人を驚かすまい、と自分は故に從容として席に復ると、

「客來かね。」　と客の一人は訊ねた。

「親類のものが來たので、行かずばなるまい。」

と何氣無く答へて、取散してある煙管や、手巾、懷中物などを手早く收めた。

來たのは親類のものか。天下に(死)を親類に有つ人があらうか、口實も有らうに、親類とは忌はしいことを言つたものである。無心ながらも親類と言つたは、這箇(死)を歡迎せねばならぬ非運の兆ではあるまいか、と想はれた。

自分は綽々として身支度をゑた意であつたが、有繫に常ならぬ所が見えたか、一座は物も言はずに目を側めて、自分の心を讀まむとする氣色であつた。

就中常から鋭いE氏の眼は烱々と晃いた。言へば必ず答へると云ふH氏の舌さへ動かなかつた。渠等は何と無く疑つたに相違ないのである。

（二）

自分は門を出ると駈出した。寺町の往來は納涼の士女が織るやうで、摑着りさうでならぬから、衝と岩戸町へ切れて、一直線に道を急いだ。氣壓は低く、蒸すやうな暑熱、銀砂子ほど星はあるが、溝泥を引攪旋したやうな天の黑さに、西北の雲間から薄紫の電光が頻に閃いては、道端の（ゆであづき）の赤行燈の邊に消える。

一町ばかりの砂礫道を蹂躪つて、黑白も辨かぬ芥坂を駈上つた。大信寺横町の闇を探つて、倉皇と長屋門を入ると、はや跫音を聞着けて、春葉は燭を秉つて玄關に待つてゐた。

渠の顏を見ると齊しく、

「西木は如何ました。」と訊ねると、

「奧の四疊半に。」と案內した。

玄關側の八疊の間にさはや蚊帳が釣つてある。これは祖父母の寢所である。然し兩箇とも次の間に顏を鳩めて、憂愁は滿面に溢れてゐた。開放した椽頭から、涼しい風が蚊帳に戰いで、枕に通ふ蟲の音も聞える。平生は庭の正面の百日紅の枝に燈籠を釣るのが、今夜は闇で、葉越に星の數が見えるばかり。臺所には三分心の玻璃燈が黯澹として、婢どもの呟く聲がする。妻と乳兒とは午後から生家へ行つて、留守であるから、家内は森閑として火の消えたやう。

祖父母は自分を見ると、這出づるやうに左右から詰寄せて、西木が大變だよ。如何だらうねえ。と酷く慌てゝゐた。自分は立ちながら、

「心配することは無いよ。」

と言捨てゝ、椽を折曲つて、正面の一間の扉を啓けた。

取片附いた四疊半の片隅に、茶に染返した木綿更紗の二布薄團を敷いて、裾の方に手織柳條の木綿の搔卷を瓔して、其に細削けた脛を載せて、右

松絞の浴衣に兵兒帶を卷いて、背面に枕を外しかけて、氣怠さうに秋葉は横はつてゐた。
圓窓の戸を少し開けて、側に一閑帳の古机、其端に渠の書燈は樂書をした蓋を飄揚と風に扇られながら、氣の脫けたやうに光を放つてゐる。枕頭には、藥瓶に小茶碗を盆に載せて、鉢に氷の碎片を容れたのが、殘少に浮いてゐる。まづ心を轟かしたのは、少し離れて、耳盥が置いてあるのである。
自分は強ひて元氣好く、
「西木如何した。」と其枕頭に坐ると、渠は忽ち勢好く此方を向いて、苦笑をした。
恐らく渠の心では苦笑ではあるまい、斷じて苦笑ではなかつたに相違無い。
渠は自分が物を言懸けると、必ず先づ愛らしい微笑を洩すのである。此

時も亦必ず微笑を洩したに極つてゐる、勿論微笑したのであらう。渠の愛らしく微笑したものが、苦笑と見えやう理が無い。それが、確に苦笑と見えたばかりではない、苦笑であつた。唉、渠は微笑も苦笑と見えるまでに、淺ましくも羸れ果てたのである。

自分は實に驚いた。今の前までは有繋に病ある身の太儀さうにも見えたが、在りのまゝの面影で、行つて在らつしやいまし、と玄關に送つたものが、四時間ばかりの間に、弱つたのか、羸れたのか、痩せたのか、痩せも、弱りも、羸れもして、鬼界島の流人を見るやうに衰へたのである。是が吐瀉の結果かと思へば、渠が病症の忽諸にならぬことも解る。自分は胸迫つて、唯患者の顏を目戍るばかりであつた。渠は例の苦笑をして、

「へい、何有、大したことはございません。」

大した事は無い？　渠は自家の顏色を見ぬから、那麼事を言ふのである

――或は自ら務めてゞも言得るのである。心苦くも渠の容貌は半死の病人である！

「何か食はんければ可かんな。」

「何も食へません、氷の外は。」と渠は答へた。

此時又驚かれたのは、渠の聲の稍皺嗄れたのである。

「藥は？」

「藥はどうか納ります。」

「然し、何も食はんで、藥ばかりで凌げるものか。何か無理に食ひな。病には勝たんければ可けんよ。醫者は何と言つたい、何も食はんでも子細無いと言つたか。」

「葡萄酒が可いと言ひましたから、先程先生のを一盃飲ませましたが、藥の外は何を入れても悉皆吐いて了ひますので。吐く前後の苦惱は非常だから、何も入れんと言つて、西木君は可厭ますから、爲方がありませ

ん。」
と傍から春葉が訴へた。
「どうせ吐いて了ふのなら、飲ませんでも可い、と醫者が言つたか。」
と自分は患者と看護人との顏を眗した。是は決して二人を詰問する氣で言つたのではなかつたのである。けれども詰問されたと思つたか、渠等は面を背けて少時默した。
「Ｋ氏は別に何とも言はなかつたか。此藥さへ飲めば可いと言つたのか。」
と再び質せば、渠等は例の小言と合點して、益逡巡をする。自分の恁云つたのは、醫者の療法の極めて曖昧なのを疑つたのである、既に粥だに入らぬ胃弱の患者が、此樣に吐瀉して、衰弱してゐるものを、纔に一瓶の攝兒的兒水を賦與放で、それで可いものであらうか。自分は渠の容躰の極めて恐るべきに對して、醫者の施術の不察なるを疑つたのである。
然し、自分は親友たるＫ氏の不親切とは思はなかつた。彼國手は常に親

切である。自分が茶と煙草を多量に嗜むのに就いても、絶えず其節制を觀告して已まざる人である。秋葉は吐瀉前から氏の診察を受けてゐる患者であるものを、疎に爲やう理が無い、要するに、噓嗒の書生等が氏の言に耳を傾けなかつたのであらうと考へた。

這麼事で手後になつたら萬事休す、病は一瞬にして機を轉ずるものを、と思ひつゝ見れば見るほど患者の容體が面白くない。せめては氣分を聞かうと、一々質問をした所が、曾て切ない、苦いと云ふことを言はぬ。二言目には、大した事はございませんと言ふのみで。

果然渠は煩悶するではない。折々氣怠さうに轉側を打つ。それに異常は無いが、頻に渴を覺えて、氷を呼ぶ。虎列拉患者が氷を好む事は餓鬼のやうであると聞いてゐたから、此渴が最も自分の心を痛めたのである、若や那の下地ではあるまいかと。餘の心許無さに、擦寄つて渠の面色を候はむとした。途端に渠は三つばかり異な吃逆をすると、勃起々々と起

上つて、枕頭の耳盥へ首を入れた。
覺えず自分の呼吸は止つた。
忽ち渠は吐出したが、吐くのは水ばかり、正しく氷を反すのである。
折しも四隣の寂なるに、家内は水を打つたやうに沈默つてゐるのであるから、渠の嘔吐の吭に激して急上げる響は、四邊を拂つて氣立ましく轟く。
庭を隔てゝ、直前面に人の家がある。九時半頃であるから、聲こそせぬが、未だ起きてゐる、此音が聞えはせぬか、聞えて、密告でもされたら何と爲う。爾云ふ例が幾多もあるとやら、自分は傳染病者を隱蔽する如き卑怯の男ではない。ないが、吐いたばかりで虎列拉とは謂はれぬ、今一日手を盡して見たいものを、虎列拉と騷がれて、檢疫掛に蹈込まれでも志たら、患者の神經を傷ませるのが、如何にも情無い。
少し靜にゐろ！　と啊呀口の頭まで出たが、否、否、苦くて吐くものを、

靜にせよとは無理である。苦い身には、近所の手前も、檢疫掛もある。のではない、と動悸く心を抑へて、十分に渠の吐了るを待つた。此間の自分の心痛は、何とも彼とも、謂ふに謂はれなかつた。渠は吻と太息を吐くと與に、ばつたり內俯に僵れた。手の着けやうも無い、自分は頻に思慮に沈むで、一本の卷莨を吃盡した比、患者は蠢然と起つた。何處へ行くかと見れば、扉を啓けて、椽へ出て、渠は上圊するのである。

自分は唯驚いて渠の行くのを見送つた。些少は蹌踉やうでもあるが、確乎なもの、到底も如此く衰弱した病人の行步ではなかつた。けれども、渠が室を出る際に、

「單身で行けるか。」と自分は意を添へた。

「行けますとも。」と患者は冷笑つて、平生渠は不調子にばたくさと音を立てゝ步む癖があるのに、それよりは寧ろ調子好く步いて行つた。

渠が上圊すると齊しく、可忌しい、可忌しい物音が聞える。それと與に

自分は彈機に撥られたやうに起上つて、病室を出た。祖父母は路に要して、その心配を鎭めむ爲に、強ひて吉報を聞かむと求むる躰であつた。自分は落着き得る限落着いて、「例物ぢやないよ、腸胃加答兒だ！傳染る虞は無い、毫も恐れることはない。私は一寸K氏の所まで行つて來るから。」

殘惜げに、便無げに纏る老者を振拂つて、悠々然と玄關へ出ると、春葉は例の如く閾際に跽つて、憂しげに自分の面を瞻げた。

「後を頼むよ。深切に介抱ゐてやりな。老者は懼れてゐるから、神經を起すと可けないから、寄せないが可い。一家に代つてお前が世話をゐてやれ。明友の好は恁云ふ時に顯れるのだ。故鄕を離れて旅で病ふほど心細い事は無い、秋葉の心中を察してやれ。傳染病だと思つて忌嫌ふやうな氣色を見せるな。兄だと思へ、親身の兄の病氣だと思つて懇篤ゐてやれよ、可いか、可いか。」

と言ふ中に我ながら悲くなつた。春葉は小聲に唯々〳〵と答へて俯いた。簀戸を啓けて、途方に晦れた顏の兩箇の婢は見送に出たが、其一人の、

「行つてゐらつしやいまし。」は著しく慄いてゐた。

「騒ぐなよ、毫も可恐ことは無いから。お前たちには用は無いから、早く寐な、寐な。」

と吩咐けたが、渠等は常に十一時乃至十二時頃まで針仕事をしてゐるのである。それを今夜に限つて、如何に用が無いからとて、十時前から寐ろは、餘り希有である。渠等は定めて之が爲に彌怪み、且懼れたであらう。

「騒いぢや可かんよ。祖父樣も祖母樣も早くお寐なさい。がたぴししちや可けないよ。病人が聞着けると、自分ゆゑに騒ぐと思つて、神經を起すから、靜穩にして、靜穩にして。」

と自己の方が負に騒がしかつたかも知れぬ。

門を出ると雨氣の風が颯と吹いて、天には一點の星も無い。電火は閃々くと拔撃に鼻頭を掠める。氣も不覺に走つて、程遠からぬ國手K氏の玄關へ駈け込むだ。代診生が取次ぐ、先生は？　御留守！

腹の立つほど失望したが、左も右も患者の容躰を言つて、何も納らぬが、食慾の出る藥はあるまいか、と訊ねたのである。差上げてある藥は其であるが、液躰ならば痞へますまいから、葡萄酒が宜い、と誨へた。それも試みたが、受付けぬから窮ると言へば、其人も窮ると云ふ貌で考へてゐる。

結局が付かぬから、先生が御歸になつたら早速御來診を、と懇々も言置いて、其門を出は出たものゝ、さて歸る勇氣が無い。所恃に念ふ國手は伴れず、然かと云つて、思はしい療法は得ず、到底も是では歸られぬ、歸られぬと云つた所で歸らずにはゐられぬ。歸つた所で、爲すことも無く病人の枕頭に坐つて、次第弱に弱つて行くのを見てはゐられぬ。思案

に盡きて、其横町を兩三度往きつ還りつしたのである。
不圖考着いたのは、葡萄酒。葡萄酒は妙だ。納りさへすれば、力も付くと云ふから、一心に飲せやう。其内には醫者が來るとして、善、これから歸つて葡萄酒を飲せる。恁思ふと胸は忽ち豁然として、闇中に一道の火光を認めたやうに、心は漫に勇むだ。
一散に寺町通へ出て、馴染の西洋食料店に寄つた。
店口に突立つて、
「葡萄酒は有るか。」と極めて大束に、極めて慳貪に、我ながら山の手のお客であつた。愛嬌者の亭主は直に笑を含むで、
「今日は葡萄酒？　お珍しいぢやございませんか。」
毎々這麼事が有られて耐るものかと思つた。
「まだお廉いのもございますが、旦那が召上りますのなら。」
と自ら精撰と稱する一瓶を差出して、

「旦那は多度召上らないから困ります。奥様と御一所に召上つて一週間に一本ぐらゐは御空け下さいまし。」

と渠は抵掌して笑つた。

自分は此に來ては能く仇口を説く、渠も調子を合せて、屡這麼事を言ふ。それを決して無禮とは思はぬのであるが、今夜ばかりは些ばかり愚弄されたと思つた。

洒落を言ふのも、言はれるのも、自分は大の所好である。けれども今は其餘裕が無かつたから、脇も附けずにその瓶を引摑むで、

「ぢや之を持つて行く。」

これから歸る途上も考へたのである。渠のは虎列拉など、可忌しい名の附く症ではない、類似でも、疑似でもない。畢竟腸胃加答兒の稍劇しいのである。一命に關るやうなことは萬々無い、然し、あのまゝ飮食が絶えて、明日にもなり、時候でも惡かつたらば、或は變症せぬとも限らぬ。設や變症せぬまでも、衰弱し果てゝ……噫それも計られぬ。一髮の機は今夜の內！　此葡萄酒を如何か納めて、少しでも持直させたい。此葡萄酒で、と瓶を取直して兩手に持つと、新に支へた手頭に感じた硝子の冷たさ！　それが殆ど秋葉の脈を診た時のやうに覺えた。何故とも知らず、自分は慌忙しく瓶の他の所に觸れて見た。脉は無くて、いとゞ冷たかつた！　それに驚いて駈出した。

門を入ると、家内は鎮りすまして、老者は蚊帳の中に耿々してゐる樣子、

竊々と其所を驅抜けて病室へ通つた。春葉は枕頭に蹲つてゐる。患者は氷を咬むで天井を瞶してゐる。幸ひに異狀は無い。

K氏は、と春葉に問はれて、留守よ、と自分は腹立しげに答へた。春葉は自分の玄關に來る前からK氏の家には出入恚てゐたのであるから、渠の國手に對する感情は、稍心易立てである。

「それぢや私が呼むで參りませう。」

と身輕に起つて、倉皇と出て行つた。續いて患者は厠へ起つた。直に出て來て、ばつたり仆れると想ひの外、渠は氣も確乎に、動作好く横になつた。

自分は肚の裏で叫むだのである、（これなら大丈夫！　危憂は無い。）

「西木、我が葡萄酒を買つて來た。わざ〳〵買つて來たのだから、飲まなくちや可かんよ。」

後では能く記臆せぬが、「我の深切が無になるから。」と言つたやうに覺え

る。思へば、寔に因無いことを言つた。渠の爲にと思ひに思つた葡萄酒も、是では渠に取つて正しく感情上の大毒藥であつた。自分は淺ましくも我口から恩を賣つたのである。

然無きだに、渠は我家の厄介になる上に、恁く病を得て、迷惑をば懸けるのを、無上に氣毒に思つてか、四五日前から、寐ろ／＼と人々は勸めたのに、然ほど不快ことは無いと言張つて、病を推してゐたのである。人目を忍むでは玄關に臥してゐたのを、例の午睡とばかり想つてゐたが、其實太義であつたのであらう。けれども病は氣色に見はれなかつた。今日の午後ばかりは、竟に堪へかねて此間に仆れたのであるが、渠は心の中では、之を非常に氣毒に思つてゐたのである。それさへあるに、自分は一瓶の葡萄酒に恩を賣つて、我と我口から深切を衒つた。

自分は平生門生に向つては、毫も假借無く、其言ふことは極めて無愛相に、自ら持することは最も高飛車である。弟子は子も同じものを、嚴に過

ぐるは教ふるの途でない、それは自分も心得てゐる。心得てゐながら憖為るには理が無くては稱はぬ。理が有る、大いに有るのである。

（四）

凡そ天下に小癪に障るものは、近來後進とか稱へる修行中の小說家である。渠等の禮を心得ぬことは、山猿よりも甚しい。一面識も無いのに卒然と刺を通じて、懷中から何か書いたものを出して、御覽を願ひたい、と言つて其日は歸る。後から直に手紙を寄來して、早く添削を願ひたい、添削が出來たら、何處へでも御世話を願ひたい！　驚かざるを得ぬ、呆れざるを得ぬ。

又は一面識も無いに、原稿に狀を添へて、（方今の文壇其人多しと雖も、不肖の仰ぎて師と恃むべきもの、先生を措いて、其誰か有らむ。）と先嬉しがらせて、これほどに思ふものを、添削して下すつたとて、万更罸も中りますまい、と云つたやうな口說を書いた末が、可成く早く手を入れて返送を願ふとしてある。それで中に二錢の郵便切手が一枚入れてない。

いやもう、實に大詩人ほど凄いものはない。
此等は未だ可い。二度でも三度でも斧正を辱うして、何か恁か世間に紹介までしてもらつて、覺束無くも獨歩が出來るやうになると、さあその御無沙汰！　近火があらうが、それから十日經たうが顏を出すでもない。嚴いのは、年始状をさへ寄來さぬのがある。渠も自言ふ如き詩人であるなら、一時一日に三度も潜つた十千萬堂の格子、此雨には如何に朽ちつらむ。此月には門の梅香如何に匂はむぐらゐは、思に浮べさうなものであるに。然し是も未だ可い。現在立派に門下生と稱して、草稿も持つて來れば、互い御世話にもなつてゐながら、陰へ廻ると、先生を同輩に遇つて、其名を呼捨にしたり、(あれ)がなどゝ云ふ代名詞を用ゐたりして、其人物を貶し、其文章を罵るのがある。
これは自分の門に往來する後進の士のみではない、何方も然のやうである。考へて見れば、後進が野面で、薄情で、不埒と限つたのでもなくて、

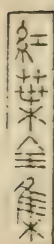
究る所は先生の德が薄いからかも知れぬ。今の小說界の後進なるものが先進に對する道と云へば、まづ恁したものである。渠等の多くは後脚で砂を撒けて行く。自分は五六年間に約そ三四十の後進に接したが、其半は、愚にもつかぬ手習反古を擔込むで、先生の餘光で若干かにしてもらひたい人。他の半の二分の一は、歌を斧正してもらはうには、まづ束修が要る。發句では點料が費える。小說は添削料と云ふものが無いと聞くから、一寸頭の二つも低げて、持つて行つて見せやう。而して鹽梅が好さゝうなら弟子になつて、一年も稽古をして、取立てゝもらはうかと云ふ人。その殘の半分が、多少か眞摯に先生と賴まうと云ふ人、のやうでもあるが、之も腸を洗つて見たらば、愛相の盡きる種かも知れぬ。尤も考へて見ると、月謝を取つて敎ふる學校でさへ、入學證と云ふものを出さして、然るべき保證人が連署の上でなければ、入門させぬが規則であるのに、此方は月謝を取るでもなし、保證人を立てるでもなし、面

識があるでもなければ、紹介があるのでもない、卒然と來て、卒然と御賴申すと云ふのである。其始が恁う下直であるから、勢ひ其終も手輕にならざるを得ぬのであらう。

然し最一つ溯つて考へて見ると、元來小說に師と云ふものは無い。その例は、古人の名家を列擧するまでもなく、現在自分からして然である。既に己に師無くして、人に先生を強ふるは、少し疝氣筋である。多くの後進渠等も恐らく這麼の辨はあるに違無い。けれども一日も早く世に出たさに、些と手の達かぬ所を踏臺の格で、陽に先生と云つて、陰に唾壺取りにやるのであるのかも知れぬ。

今まで其とも心着かず、幾度か諏訪法性の兜を竊まれむとえたは、渠等の敏捷のではなくて、正しく此方の癡鈍のであつた。自分は如此く行賣の弟子には懲りたから、せめて內弟子だけは、三尺五寸ばかりは去つて我影を踏まぬやうに躾けたいと念つて、鞭と麻繩と眼玉の三道具で自分

の教育された寺小屋的學制を以て、玄關に臨むことになつたのである。

（五）

然し、それは平生の事。病者は良藥よりも溫言と懇切とを喜ぶのである。渠の枕頭には今溫言の父母も無く、懇切の妻子も無く、己が身の苦よりは、人への迷惑を憂ふ病人である。その哀むべき病人に向つて、氣毒がらせを言つたのは、反復も都禮ない爲方であつた。自分は輕々しくも渠を捉へて、拙い文章を書いた門生の待遇をしたが、渠は今日は門生ではなかつた、哀むべき病人であつた。

「へい難有う存じます、戴いて見ますが、どうも心下が嘔逆ますから。」

と渠はやう／＼起回つて、罪有るが如く詫びた。其聲は彌皺嗄れたやらである。

「然し、おれが買つて來たのだから飲みな。」

と瓶を引寄せて栓抜を刺した。

門生に對する自分の（おれが）と云ふ語は、最上權の嚴命で、渠等は先生の（おれが）の言下には、無理も道理に服さねばならぬことに躾けられたのである。果して渠は、

「飮むで見ます。」

と奮つて答へた。

「見ますでは可けない、飮むのだ。」

と例の皮肉を言つて逼つた。此間に口を開けて、玻璃盞に注いで、まづ自嘗めて、

「うむ、是は佳い。」

と患者の前に出すと、

「とても恁うは飮めません。」

なるほど多過ぎたから、又半分ばかり飮むで、餘を勸めた。渠は一口飮むと、躊躇したので、

「ぐっと飲め、ぐっと飲め。」

と自分は頻に逼つた。渠はぐっと飲み、ぐっと飲むだ、飲了ると口を結むで、少間は天井を睨むでゐたが、忽ち嘔逆る音は、目に見るやうに聞える。渠は益口を結ぶ。

「吐くな、吐くなよ。吐いちや可かんぞ。思切つて嚥下むで了へ。吐かうとするから吐くのだ。吐くまいとすれば、吐きはせぬ。何でも可いから、うむと嚥下め！」

自分も拳を握つて、一膝動出る。矢庭に渠は身を起すと見る間に、咨嗟又耳盥へ首を入れた。渠は太甚しく吐いた。自分は失望して、其背を搽つてやるも忘れて、唯渠の爲すやうを目成るばかり。

吐いた後は彌氷を喜むで、是ばかりは好もしさうに幾多でも嚥下した。

自分は手を束ねて猶視てゐたのである。

「どうも氷が一番宜うございます、吭が通くやうで、外の物は到底も可

けません。」
後は連に吃逆が出て、胸苦さに堪へぬ氣色であつた。有間して自分は訊ねた。
「でも藥は納るのか。」
「へえ、藥は納ります。」
「それは善い。藥を飲め、藥を。」
と藥瓶を取擧げると、少し待つてくれ、と患者は願ふ。なるほど是は自分が無法である。他の病でも然であらうが、別して胃病であるのに、漫に物が入らうか。餘り忖度が無さ過ぎた。けれども自分は此無理は、物の納るのを見て、左も右も幾分の心を安じたいばかりであつたので。
遂に渠は藥を飲むで見せた。果して此は吐さなかつたのである。
「うむ、藥が飲めるのは善いな。努めて飲むが可い。うむ、善い是は善いな。」

無上に自分は嬉しかつた。けれども、渠は益劇く氷を咬むで、愈繁く厠へ起つ。

颯と吹來る一陣の風と共に大雨が沃出した。庭の梢は震動する、戸障子は鳴犇く、暴風雨の氣色。濡鼠になつて驅戻つた春葉は、直にK氏の來る由を復命した。

後をば姑く渠に托して、自分は二階の書齋に入つた、今夜中に校閲すべき某氏の原稿に入朱するために。燈を剔つて一頁ばかりも見て行くと、朱筆は覺えず手から墮ちた。自分は忽ち原稿を閉ぢて、椅子を離れて屹然と起つた。

その小說は、獨旅の女郞が夜馬車の途で追剝に襲はれて、遁惑ふ機に傷を負つたのを、同伴になつた女郞が辛くも介抱しつゝ、唯有る森蔭へ伴れて、月光に疵口を見ると、無殘や急所の重創、渠そはや蟲の息ながら、其身の素性を明し、一樹の蔭のゆくりなき厚恩を謝して、終に敢無くな

ると云ふ條である。

自分は悚然して、慌忙しく下りやうとしたが、國手が今にも見えたら、此に通して、診斷の腹藏の無い所を聞かうと思つたから、取散したのを片附けて、茶爐には炭を添へ、裀を正して、好き所に燈を置いて、さて今下りる出合頭に、春葉が、

「K氏が御入來になりました。」

(十八)

國手は徐々と病室へ通つた。自分は挨拶も匆々に、

「どうか何か食へる工夫はありませんかなあ。」

と唐突に訊ねたのである。

「然やうさ。まあ診ませう。」

國手は診察に掛つたから、自分は其傍に片唾を嚥むで控へた。聽診の後に下肚を按ずると、手に應じて夥しく雷鳴がする。それから、脚の諸所を摑むでは、痛くはないか、と訊ねると、摑れる感覺の外は何もない、と患者は答へた。

足頸の邊から指根などを撮むで見た。是は皮膚の失彈を候ふ爲である。指根の邊には稍其趣があつたので、K氏は再び撮むで、物云ひたげに自分を顧みた。

やがて五指の爪頭を點檢して、次に手を及ぼしたが、手の指頭には多少の皺襞もあるやうに見えた。最終に、顏面を候つて、下瞼を展けると、血色は全く失せて、筋力の半は弛み果てゝゐたのである。

患者は鉢の内を撈して、切に氷を望む。渠は僅の間に此に一杯を盡したのである。過ぎては如何と思つたから、Ｋ氏に問ふと、可からう、と言ふ。許されずとも、渠の渇に苦むのを見ては、毒も制するに忍びざるばかりであつた。直に春葉を喚むで、氷を買つて來るやうに命じた。戸外は風雨が暴れに暴れて、家々は寢鎭つてゐる十一時、その夜闌に、戸棚の物を取りにでも遣るやうに、無雜作に吩咐けたのを、渠も無雜作に勇むで起つた。唉、秋葉が渇を苦み、心下の苦悶に惱むに比べたら、春葉が風雨を衝いて氷屋の門を敲くのは、闇黑の臺所を搜るよりも容易いであらう。渠の勇むで起つたのも、固より其である。

國手は渠の腋に體溫器を插して、十五分時の待つ間を患者への雜問に用

ゐた。然し、答ふる事の多くは、問の意に中らなかつた。國手の意は虎列拉の症候を見出さうと志たのである。患者は之に應ぜざらむと企つるやうに答へたらしかつた。けれども、自分は渠の平生を知つてゐる、渠は然ほどの卑怯者ではない。とは謂ふもの丶、渠の容躰が其を許さなかつた。自分の素人目にさへ、渠の顯す所と言ふ所とは相應せぬ廉があると見えた。故に幾分か隱すのではあるまいかと疑つたのである。體溫器は六度五分を指した。

「下つた！　先刻は七度二分であつた。」

とK氏は呟く。自分は動悸志た。

「葡萄酒は如何でしたね。」

「やはり吐いて了ふです。」

「それぢやブランデエは如何か知らぬ。」

と國手は首を傾けたから、

「ブランデエは無いが、キスキイでは如何でせう。」

有らば其をと云ふので、書齋の戶棚から出して來て、K氏の前に置いた。國手は之を攝見的見水に合せて、患者に飲ませたが、一二分の後には例の如く苦げに吐出して了ふ。

「可かんな、可かんな。」

と自分は顏を皺めて、頭を搔きながら髮を挘つた。K氏は端然として患者の樣子を眺めてゐた。

春葉は三斤の氷を抱へて息急き歸つて來た。それを碎くとて犇くのでもなさゝうに、座敷の方の物音は、河事かと行つて見れば、老者は不知蚊帳を出て、祖父は彷徨と立騷いでゐる。祖母は桃尻になつて莨を吃しながら、立騷ぐ人の姿を追廻して視てゐる。女部屋の葭戶は開放になつて、大小の寐衣姿が立ちつ居つ、呻いでゐるのも目に入つた。自分を見ると齊く四人は一度に湊つて來た。

「如何だい、如何だい。」

と祖父は氣遣はしげに訊ねる。

這は何事である？　主從の禮も無く、老者の恐慌さ…　婢の不作法…

自分は大の眼を睜いて、

「お前たちは何で此處へ出て來るのだ。寢ろと言ふのに！」

婢どもは池の麥魚の如く忽ち引込むで了つた。更に老者には、傳染病ではないから、毫も氣遣は無い。此方で騷ぐと、病人が神經を起すから、靜肅に爲て欲しい、と懇々も諭して、推込むやうに蚊帳の中へ入れた。

思へば家內のもの丶騷ぐも道理である。自分は幾度となく傳染病ではないと請合ふけれども、患者は頻に上圊するではないか。さては風聲鶴唳でもない。自分も虎列拉とは決して信じなかつたけれど、一歩を過つたならば、それに變症しはせぬか、變症の傾向は十分にあるとは信じた。

病室に歸ると、恰好K氏が手水を爲た後であつたから、お茶でも獻じま

せうと、書齋へ案内して、さて打出した。

「奈何でせうか、高診は？」

國手は苦笑をして、

「然やう、僕ならば、腸胃加答兒と云ふので、氣遣は無いと思ふけれども、時節柄ですから、如何です、最一人誰かに診せて下さいませんか。」

聲に應じて自分は答へた。

「宜い！　誰でも貴下の心易い方を。」

國手は心に此請求を氣毒に思つたらしい。何となれば、立合を望むのは、既に八分までもしやの懸念のある證である。K氏と自分との交は、醫者と病家としての間ではなくて、私交の關繫である。朋友の好がありながら、立合醫を呼むで責任を免れむとするは、極めて薄情の所爲である。九分までの懸念を懷くとも、有らむ限の力を盡して、引受けてくれるが、朋友の信とも謂ふべきに、と自分の怨をば受けはせぬか、と危むだので

はあるまいか。想ふに然であらう。恁云ふ場合は醫者たる者の最も切ない所である。

多少の教育あるもの、幾分の理解あるものでも、類似虎列拉と斷然言はれるよりは、曖昧に腸胃加答兒と濁された方が、虚妄でも嬉しい。それが人情である。自分は微塵もK氏を恨には思はなかつた。然し甚だ頼しからず思つた、が恐らく是は素人了簡と云ふのであらう。なるほど此際自分は確に素人であつた。避病院は人の生肝を取る所と覺えたほどの素人ではなくとも、その無責任の治療と不深切の看護とは人を殺すに足るものと疑ふ素人であつた。

K氏は徐に語出した。

「實に醫者も困る。年來の病家に吐瀉症の在つた時には、實に困る。懇意づくの間であつて見れば、それ、吐いたから屆ける、瀉したから訴へる、と然う規則通りにも行かない。吐いたにしろ、瀉したにしろ、藥を

與つて見れば、二三時間で脱然と癒るものもある。それをも待たずに、慌てゝ屆けると云ふのは實際酷な話で。けれども、吐若くは瀉したら、卽刻屆出よと云ふ達なので、犯則すればお灸です。是が間違つて傳染病を陰蔽したとなる日には、お灸も大分熱くなる、六十圓です。六十圓は熱いよりは痛いのですものね。」

と笑ふ。自分も笑ひながら頷いた。

「現在僕は今期警察へ喚れて、說諭を頂戴したのです。御存じでせう、肴町の魚又の一件。あれは病家です。かねて胃が不良ので、僕が診て、藥を與つてゐた。固より何でも無い、吐瀉するのでもなかつた。それが急に容躰が惡いからと云つて呼びに來たから、早速行つて診ると、先刻から吐瀉を發めたと云ふ事情で、昨日までは決して那麼徵候は無かつたのだ。聞いて見ると、どうも飯が食へないと云ふので、晝飯前に梨を三つ食つたと云ふ。胃病で梨を三は、時節がら最も惡い。けれども其だけ

なら未だ可い、晝飯に天麩羅とは如何です。半分ほど吃ふと、胸が惡くなつて食へないから、それなり飯は罷めて、又梨が二つ。」
自分は頭を掻いて絶叫した。
「いや、那箇は惡い。」
「實に惡い、非常に惡い。それから忽ち吐瀉を發めたので。」
「發めなければ謬だ。」
と自分は目を睜つた。
「それて招聘に來たから、行つて、嘔吐物を見ると、眞黑！」
「眞黑!?　白くなくて黑いの？」
自分は唯呆れた。呆れもせうか、墨を吐くとは前代未聞の虎列拉である。
「虎拉列の吐瀉物を米泔汁のやうだとは、好く言つたものです。丁度米の泔のやうだ。魚又の亭主のは色異だから驚いた。何を吃つたかと聞いて見ると、恁々。梨子に天麩羅、それは解つたが、梨子に天麩羅では、

黒くない。委く聞くと、なるほど其ぢや黒い！　果然是は梨に中てられたと云ふので、梨子を黒焼にして服むだとは甚麼です。」

自分は心配を忘れて覺えず噱然として大笑を發した。

「で、此は屆けなくてはならないから、と言聞せて、屆けた。屆けたは可かつたが、即刻屆けぬと云ふ廉で、喚出されて御叱は、少し無理のやうだ。如何にも僕が管つてゐた病人には相違ないが、吐瀉を發めてから見舞つたのは初度、それで直に屆けたのだから、陰蔽でもなければ、等閑に爲たのでもない。それでさへ喚出されるほど嚴しいので、特に牛込警察は嚴しい。それと云ふのが、意外に蔓延の兆があるので、又隱蔽したとか云ふので、罰金に處せられむとしてゐる醫者もあるとか云ふやうな始末だから、猶以て詮議が嚴しい。現在刑事巡査が尾行てゐる醫者もあるさうです。どうも規則で爲方がありません。

僕が西木君を引受けて治療するのは可いですが、變症せぬとも限らない

から、其時になつて窮る。又魚又の二の舞と云ふので、今度は必ず罰られます。で立合醫があれば、都合が好い。意見が合ひさへすれば、公然と腸胃加答兒で治療をさせませう。何を云ふにも、時節柄だから警戒しなければならぬのでねえ。」

自分は毫も異存の無い旨を告げて、K氏の推薦に任せたが、渠は組合の姓名を列べて、此内誰でも、と言つたのである。

其中にM氏と云ふのは、顔は識らぬが、近所ではあり、名は聞いてゐたから、此人は、と訊ねると、至極好からう、とあるので、直に春葉を喚むだ。今鳴つたのが十一時半、雨は益降る、風は益暴れる。實に魔有りて人を攫むべき恰好の風物であつた。南の雨戸の外るゝばかりに鳴犇く響の裏に、階子を駈昇る足音は春葉である。渠は椽に蹲つて先生の命を待つた。

「M氏の所まで行つて來てくれ。而して同道をさせてな。」

「西木君は不起か。」
と渠は聲を顫はす。
「いや、然云ふ事情ぢやないが、立合醫を呼むで、十分に念を入れやう
と云ふのだ。」
「へい。」
と言つた限て、渠は國手の横顔をば然も悄さげに見遣つた。とも知らず
K氏はM氏への添書を認めてゐる。
一座に聲の無い時、よた〳〵と下座敷の椽を蹈む音がして、厠の扉が開いた。春葉は肩を峙てゝ面を捻向けた。自分は煙管を手にして耳を澄した。K氏は筆を止めて、頸を延べた。三人の面上には各異様の憂が見はれた。唉、我等は何を聽いたのであるか。
やがて一度に吻と息をして、互に顔を見合せた。國手は添書を書了つて、春葉に渡すと、渠は飛ぶが如く階子を下りたが、直に格子の開く音がし

て、梧桐の廣葉に灑ぐ雨の聲より、猶暴かな響の忽ち聞えたのは、春葉の傘を差して今出るのである。

K氏は衝と立つて下りて行つたが、直に自分を呼むだ。氏は階子の下に邊を提げて立つてゐたのである。

「是は石炭酸です。彼所へ消毒をした方が可いでせう。それから便所、患者の入つた方へは誰も入らぬやうに。」

消毒と聞いた自分の胸は穩からぬ想ひをした。自分は敢て此臭を嫌ふのではないが、如此き不見識の臭氣を我門内に入れる事が極めて無念であつたのである。猶其よりも心を傷ましめたのは、憐むべき患者は遂に消毒法を要すべきものであるかの一事。飽くまでも自分は患者に別條は無いと信じてゐたものゝ、消毒と聞いて、渠の命は半奪はれたやうに、呀と思つた。最も危つたのは、此臭を嗅付けたらば、患者が神經を起しはせぬか、と有繫に躊躇もしたのである。

國手は重ねて、
「此は大分強いのですから、金盥に入れて、半分ほど水を加して、枕頭へお置きなさい。而して病人に觸れた後は、まづ此で手を洗ふやうに。」
自分は臺所から金盥を取つて來て、階子の下で誨の如く調合して、病室へ持込むだのである。
患者は悶々としてゐた、けれども苦惱の躰ではない、氣怠さに堪へぬやうに。向者まで南頭に臥てゐたのが、北枕に打俯してゐた。
自分の足音を聞くと、面を擧げたが、何をも言はなかつた。自分も何も言はずに窓の前に金盥を置いて、さて渠の枕頭に坐つた。
渠は異しげに輕摩れた聲を爲て、
「もう氷はございませんか。」
「有る。幾多も有るが、餘り吃るのは不可な。好加減に爲て我慢を爲ておけよ。」

「辛抱が出來ません。氷を口に入れてゐる間が極樂です。」

「そんなに苦いか。」

と昵ど渠の顏を覗込むと、

「否、些も苦いことはありません。」

如何だと訊ねる毎に、惡い、苦い、と患者の訴へたことが無い。果して苦くも惡くもないのであるか、如此く突發と一時に憔悴するほどの病を懷きながら、些も苦くない理が無い。さては自分の餘り心配するのを見て、渠は氣毒に堪へかねて、強ひて苦痛を裹むでゐるに疑無い、と思ふと、胸一杯になつて、潸々と涙が零れた。

渠は愛知の半田の產で、世業は藥種商である。渠は藥劑學を修むると詐つて新聞屋になりたい不埒のゆゑに、繼父の怒に觸れて、今は殆ど見限られてゐるのである。母は有繫に陰ながら、渠の行末を懸念して、雨に就け、風に就け、東の空の忘られぬのであるが、渠は其家の業を治めぬ

と云ふので、既に廢嫡とまで云はれてゐる。渠の覺悟も、憎からぬ義弟に督を讓り、其身は一生放浪して、夢は枯野を驅廻るとは、常に毎に言ふ所である。

我家の門生は何等の因緣で、恁まで不幸非運であるか。渠の合弟子の鏡花も、在所の金澤には七十餘の祖母と十五六の弟とを抱へて、我玄關にゐながら、幽に粥の料を仕送つた男である。渠は常に言ふ、鏡太郎の骨は赤坂に埋められるのだ。赤坂は我墳墓の地である。秋葉は渠と刎頸を契つた男で、これも能く言ふ、我股は必ず一度割いて先生の餓を助けると、渠等の二人は自分を父の如く賴むでゐるのである。

扨て見れば、渠は勘氣を受けた生家に呻吟せうよりは、十千萬堂の四疊半に悶える方が、或は心易いかも知れぬ。けれども有繫に重ね〳〵の厄介と、唯氣毒が先に立つて病苦をさへ遠慮する心の裏は幾許であらう！勘氣を受けたとは云ひながら、又我家は我家、優しき母や信ある弟も在

ることなれば、其手の纔に一按は、自分が一瓶の葡萄酒よりも、病には利くであらうものを、孤影伶仃として、病苦の裏にも義理を思はねばならぬ渠の心細さは、更に幾許であらう！

渠の苦くないと言ふ語は、死なねばならぬか、と號泣するよりも、夐に可哀である。設も自分が秋葉の床に横る身であつたらば、如何に悲しからう、如何に情無からう！　涙の爲に血も盡きて、そればかりでも絶命するに違無いと思ふと、いとゞ涙は膝に散つた。

今にも立合醫が來たらば、渠が如何に心を驚かして、或は（死）を想ひはせぬか、と其が謂ふ方無く氣遣はしかつたから、今の間に理を說いて安心させねばならぬと思つたのである。

然し、是ばかりは、直言を憚らぬ自分も怯れたのである。が、勇を鼓して竟に口を開いた。

下痢をきたばかりでも、目下は屆け出ねばならぬ警察からの布達である

から、K氏も獨斷では處置が爲難いと云ふで、M氏と云ふ立合醫を今呼びに遣つた。其醫者の手前、消毒の手宛がしてないと、事が面倒であるから、儀式的に石炭酸を彼所に置いたのである、決して心配してはならぬ、神經を起してはならぬ。時節柄注意をせぬと、醫者が犯則の罰を受けるのであるから、感情を害しては可かんよ。然したる事は無い、腸胃加答兒の稍重いくらゐであるのだから、必ず神經を起すなよ。K氏の診斷も、虎列拉などの徴候は全く無いと云ふのだから、我も安心した。お前も心強く思ふが可い、と此筋を割つ、口說つ、諭したのである。

患者は自分の取越苦勞をば呆れたやうな氣色で、

「私は毫も神經などは起しません。私の事は心配して下さいますな。神經などを！」

と嗤ふやうにも見えたが、

「然し私は………。」

と言ふ時ばかりは始めて聲を顫はした。

「どうも先生に濟みません。種々御厄介になりました上に、這麼御迷惑を懸けまして。」

と蒼白く瘦細つた雨の手は犇と眼を抑へた。自分の目も物の見えぬまでに曇つて、遂に點々と零れた。

「病中は誰も心細いものだ。お前は居候だと云ふので、何事も遠慮をするやうだが、遠慮は要らんよ。我が力の屆くだけは、どんなにでも世話をしてやる。生家に居るつもりで我儘を言ふが可い。病中に師弟の別は無い。我は是でも十分に盡してゐる積だが、何彼に就けて生家のやうには行くまいから、其を思ふと、然ぞ心細からうとは察してゐるが、どうも爲方が無い。所望なら國許へ電報を打つてやらう。母親を呼ばうかな。」

渠は徐かに頭を掉つて、

「故鄕は毫も戀しくありません。不斷から申します通り、私は此世の中

て先生一人が頼なのでございます。私が先生の看病をして、御恩を報すべきのに、逆施になりまして、面目もありません。私はどうも御宅へ御迷惑を掛けますのが……どうも實に私は、心苦くて、心苦くて……。」

渠は脚を擧げて、床をば連打にして泣く。

「馬鹿な事を言へ！　誰が迷惑をした。誰が迷惑な顏をした。我はお前に日に三度づゝ飯を吃はしてゐる、可いかい、何で飯を吃はせるのだ？　飯を吃はせないと、お前が死んで了ふからだ。病氣だから藥を飲ませる、介抱をするのだ。何で那麼に世話をするのだ？　世話をしなければ、お前が死んで了ふからだ。別に不思議は無いぢやないか。然だらう、然だらう。」

自分は身を反して例の高笑をしたが、患者は彼方を向いて飮泣してゐた。

(六)

折から門の人音は、立合醫のM氏が使と同道まて來たのである。春葉は愨と通じに來たから、渠をば看護に留めて、自分は急いで案内に出ると、M氏そはや座敷の口に立つてゐる。此時二階に居たK氏も出迎に下りて來たのである。

三人は直に二階に昇つて、座が定まる、挨拶がある。M氏の大名縞の縮の洋服は楚々として、其華車な體に相應しく見えた。言語は莊重として柔和に、汪洋の裏に多少の尊大を帶びた體度で、其端麗なる容貌は、恐らく啼兒も還寄るばかり。歐羅巴的に(美しき國手)と謂ふのが、簡單で適切に其人を表す。

K氏とても劣らぬ一箇の美男であるが、此人は齢の若いだけに、自から三分の書生氣を帶びてゐる。M氏が着實に物を言へば、K氏は快豁に語

つた。兩箇の應對から推すに、然して別懇の間でもないらしい。K氏は稍〻愼重に患者の容躰を陳べたのである。M氏は床の幅を眺めながら之を聽いてゐたが、やがて二三の質問をして後、左も右も診ませうと膝を立てる。K氏と自分は卒と病室へ案内した。

さて美しき國手の診察もK氏と異つたことは無かつた。渠は吐物を檢して、下痢物をも檢たいと望むだ。K氏も同意して、患者に、上圊の氣は無いか、と訊ねると、少し待つたらばとあるので、それまで二階で休憩をせう、と兩醫は席に復つたのである。自分は迹の始末をして、急いで書齋に還つたのは、少しも早く立合醫の意見を聞きたいからで。

自分が座に着く比には、はや其談は端を發いてゐたので、兩箇ともに語を出しては考へてゐた。

「如何でせうか。」

と自分は立合醫に訊ゐた。美しき國手は其美しき手で、美しき髭を撫で

ながら、
「別に虎列拉の徴候と確に認められるほどのことはありません。然しながら、時節柄ですから屆はせずばなりますまいな。」
「でせうかな。」
とK氏は覺束なげに獨語つ。
「全く其氣が無いとも云はれぬのですから、検疫醫に見せた方が可いでせう。」
検疫醫と聞いて、自分は慄然とした。いよ〳〵大事に及むだのであるか。検疫醫に診せたら、必ず類似と云ふであらう。自分は救を乞ふが如くK氏を見遣れば、
「如何ですか。」
と國手も徐かに自分の面を見込む。答に窮して、茶を一口飲むだが、心着いて見ると、立合醫に茶を出すのを忘れてゐたのである。慌忙しく茶

を勸めてから、又心着いて見ると、向者からＫ氏と飲むでゐたのである
が、手近にキスキイの瓶がある。其處に砂糖壺も玻璃盃もあるので、
「キスキイは如何。」
と愛相を云た。美しき國手は、
「少々下さい。」
と答へたから、盃に人數のコップを列べて、キスキイに角砂糖に等分の
水を加へた半盞の飲料を各〳〵配つて、自分も一口飲むだのである。
自分は粕漬にも醉ふほどの下戸であるが、宵から何と云ふ事無しに手當
次第に瓶を提まへて、ちびり〳〵と飲むだのも四五盃、此間に茶と莨は
凡そ幾多吃むだやら知れたものではない。二三月以來自分は此等の火酒
を催眠劑に用ゐてゐるので、此一盃は即ち八九時間の熟睡を誘ふに足る
べき量であるに、今晩は些の靄然とするばかりで、醉つた心地がせぬの
である。自分の腦裏は百端の妄想を起して、何とか紛らさなければ、一

時も在るに堪へぬ所から、幾と無分別に毒を服して、悶を遣らむと志たのである。
次いで二口目を飲まうとする時、K氏は止めた。
「胃を害するから、節へたまへ。」
コップを釋いて、煙管を取擧げれば、
「先刻から非常に吃むでゐる。毒だ、毒だ！」
とK氏は眉を顰める。煙管を捨てゝ、
「困りました喃、屆けるのですか喃。」
と首を俛れたが、やう〳〵擧げると與に急須を引寄せて、鐵瓶を取ると、
「茶かい。舍諸た方が可からう、然う飯むぢや堪らぬ。何杯飲むのだらう！　胃を壞す、胃を壞す。」
又止められた！　爲む方盡きて、今度は小楊子を取つて咬始めたのである。

「檢疫醫に見せた方が、却つて御安心でせう。」
と美しき國手は勸告したが、自分は分別に餘して、左も右も
「如何でせう？　K君。」
K氏も決答はしかねる躰であつたが、
「此まゝ明朝まで置いて、もし惡くなつた時には大事だから、
檢疫醫に見せたが可いかも知れません。」
「然うなさい。其方が患者の爲にも、貴下の爲にも。」
と立會醫は愈〻勸める。
自分の手は覺えずキスキイのコップに懸ると、忽ち其半を大嚼し盡した、
恰も自殺者が心を決したる刹那に、屑く絕命の毒を仰ぐが如く。而して
其酔を假りて、然も見事に、
「屆けませう！」
と言つて退けた。

「それが宜い。」

と美しき國手は同じたが、K氏も無論異存は無かつたのであらうが、

「ぢや届けますか。」

と極めて力無げに。

國手は我心中の苦悶を知つたのである。自分の此一言は、實に逼られて刀を揮下す想ひてあつた。

立合醫は患者が上圜の氣勢を聞付けて、一番檢査して來ませう、とK氏を誘つて起つた。兩個の下りて行くと與に、自分もばつたり書卓に靠れて、そのまゝ昏々としてゐた。

風雨は益暴れて、戸障子の犇く響は、棒を以て腦漿を攪旋されでもするやうに煩はしい、其物音の間に赤子の啼聲が幽に聞えたのである。自分は慄然として、藤枝が目覺したのではないかと思つたが、其聲は内ではない。噫藤枝は母と與に芝の遠くに今頃は寐てゐるのである。能くも

渠等は今朝芝へ遊びに行つたぞ。能くも自分は泊に遣つたぞ。坊主めが此最中に居たら、什麼であらうと考へると、骨に泌徹るほど奇寒を覺えた。

渠は虛弱で疳持て、我子ながらも愛相の盡きる激憤やの、加旃、持餘の泣虫である。書齋の次の間に渠の熟睡してゐる時、稍々高く咳拂でもすると、忽ち覺めて啼立てる。其聲は、實に其聲と云ふものは、錐で齒を鑽まれるやうな、謂ふべからざる一種の苦痛を以て、氣の遠くなるほど腦を惱せる。それで賺しやうでも惡ければ、何時までゞも啼續けやうと云ふのである。渠は全日の半を、激憤と啼泣とに費してゐるので。

其激憤やの泣虫が此動騷混雜の間に居たら、如何に反張つて號ぶであらう！　而したら自分は如何に得堪へず亂心するであらう！　無論渠は通夜啼いて、啼死に死ぬか、或はそれから病を得るか、自分は心二つに身は一つ、神氣爲に錯亂して、終に巣鴨へ行き、秋葉は駒込へ遣られ、藤

枝は例の赤坂へ送られたかも知れぬ。一家三人同日の災厄、遺族六人終天の不幸、旣の事、默阿彌の正本を生で見るところであつた！

自分は覺えず芝の方に向つて、神明宮を遙拜したのである。

十二時が鳴る。はた〳〵と兩箇の國手は昇つて來た。下痢物は幸に藍色、まづは虎列拉の徵候でない。彼は那麼して置いて、檢疫醫が來たら、見せるのに好材料だ、と語るを聞いた。

自分は直に下りて病室へ行つた。患者は別に異狀も無くて、臥してゐたが、心に懸るは、氣の退けるほど渠の氷を食ふので、宵の程からはや四斤を盡して、未だ容易に饜かぬのである。

搔卷を懸ける次手に、竊と渠の脚に觸れて見ると、死肉のやうに厥冷してゐた。忍やかに耳盥の內を窺へば、無色の液が七分目ほど漂うてゐたのである。

「西木、安心するが可いよ。大便の色が良いと云ふので、醫者も大層喜

むでゐる。氣分は如何だな。」

渠の皺嗄聲は、例の如く、「何とも有りません。」と答へた。

その顏色を視ると、噫情無い！　益々變果てた。設傳染病でなくとも、渠の陷落むだ眼は、到底再び朝の光を見ることは稱ふまい、渠は此四疊半の闇から更に幾億萬里の邈々たる玄冥の底に陷るのであらう。渠の面上にもはや一脈の活氣も見えぬ。死神は其冷なる手を渠の額に加へて、切に遂に行くべき道を指示してゐるのであらう。と思へば、心も消入るばかりに、儚く、淺ましく、情無かつた。

何と思つたやら、渠は朧然と目を瞪つて、自分の顏を目戍つたが、其曹然とした狀は、このまゝ事切れるのではあるまいかと疑はれたから、慌てゝ渠の脈を候つたが、極めて遲緩ではあるが亂れてはをらぬ、渠の手は今は葡萄酒の瓶よりもなほ氣味惡く冷たい。

「先生。」

と患者は聲を出したが、渇に堪へざる如く頻に口を動かして、滑かに言を繼がうと企てた。

自分は悚然した、遺言でもするのではあるまいかと。

「何だ。」

と自分は故と勢好く應じた。

「どうも私は濟みません、這麼御迷惑を懸けましては。そればかりが氣になりまして…………。」

「餘計なことを言はなくても可いよ。」

「へい。」

と少時は萎れてゐたが、卒に思入つた氣色で、

「先生、何卒早く病院へ遣つて下さいまし。」

思はず愕然して、自分は患者の面を瞶めた。今迄自分は愼むで、傳染病の傳の字も口には出さなかつた。渠も虎列拉の虎とも呻かなかつたので

ある。であるから、渠は有繋に傳染症の病とは思はぬのであらうと推測してゐたのに、實にも、渠が口を開けば、御迷惑の、相濟まぬの、と言つたは、暗に之を指したのであるか、渠は今まで其とは言はずに、言へば、直に病院と打出した。

渠の病院と云ふのは、殺せとの謎である。渠は四五日前までも言つて居た、避病院へ送られちや無効ですと。如何なる論據が有つてかは知らぬが、渠は固く然信じてゐたのである。

その避病院へ送れ、と渠は言ふ！ 渠は私を殺して下さい、と逼るのか。

自分は仰いで涙を飲むだ。

「先生、遣つて下さい。」

其言の訖るや否や、渠は吭のぐゞと鳴ると與に、勃起々々と起きて、金盥を引寄せた。

此時の自分の想ひ！ 虚妄でもない、胸は張裂けるやうであつた。顫へ

る聲を咬緊めながら、

「變症するやうなら、遣る。那麼徴候は少も無いから、心配することは無い。念の爲に、今に最一人醫者に見せやう。」

（七）

多くの醫者に診せると云ふことは、渠の感情を害する、とは知つてゐる。けれども、今屆出れば、是非檢疫醫が出張に及ぶ。一人の檢疫醫は十人の（多くの醫者）よりも患者の忌む所である。故に自分は其を詐らうばかりに、最一人と、穩に言つたのである。渠は憊れたか、はや言を返さぬ。自分も起つて二階に昇つた。兩箇の國手は屆出の打合を了つて、今M氏は立たうとする所であつた。

自分を見ると、再び座に着いて、吐瀉症の患者があるが、疑しい廉があるに因つて臨檢を乞ふとの旨を、K氏M氏の連名で屆ける。就ては屆書の用紙があるから、M氏は歸宅の上認めるから、直に其を最寄の交番所へ持參する爲に、書生を同道したいと、委細を語つて、M氏は階子を下りる。

K氏と自分は送つて出たが、M氏の脚下は踉蹌々してゐる。自分は驚いて注意をゑたけれども、異狀は無い、唯跟蹌蹣跚と玄關に出た。格子の外は墨のやうに、滂沱と降る雨は内の燈影を受けて、銀の絲などを亂して投懸けるやうに繁吹く。

輕く一揖して、美しき國手は蹣跚と外へ出る、後から春葉は提灯ぶらぶらと跟いて行つた。

「M氏は如何したのだらう、蹣々して。一體脚でも患いのですか。餘程變だ。」

自分の訝る傍からK氏は笑つた。

「病氣があるのです。」

「然ですか。」

と何氣無く應けると、

「キスキイ中毒！―

といとゞ笑つた。

聞いて見れば、M氏は生下戸である。茶を薦めても飲まずに、堪ふべからざる火酒の盞を把つたのは、それが傳染の豫防劑であるゆゑ、強ひて服した爲に、酩酊されたのと、やう／＼判めたのである。此理由を發見するまでは、自分は極めて心配した。何故となれば、M氏は自分が素足で病室に出入するのを太く危むで、足の裏から傳染するのであるから、脚部の消毒に注意をなさい。と熱心に勸告されたのを思合せて、其躊躇を傳染の第一期か、と謬まつたのである。

玄關を入つて、竊に座敷の蚊帳の内と、女部屋の樣子とを窺つたが、いづれも闃として音は無い。けれども誰も睡てはをらぬやうなのに、恁う鎭つてゐるのは、安心の故ではなくて、恐怖の爲である。病室も靜穩であつた。二階に昇ると間も無く、木戸が開いた。まだ春葉の歸る時刻ではないがと思ふと、物申の聲。もう一時過と云ふのに、人の訪ねて來や

う理が無い。理は無いけれど、確に案内があるから、理が出來たのであらう、と依然起ちかねてゐると、又物申！　斷然起たうとする時、

「K氏の御宅から。」

と祖父が取次いだ。

國手は首を傾けて、はてな、と言捨に起つて行つた。玄關で二つ三つ語る聲が聞えたが、やがてK氏は急足に昇つて來て、

「急病人があるから、一寸行つて來ます。」

と其處に脫捨てた絽の羽織を取つて引被ける。

「急病人？　何です。」

と氣遣はしげに自分は訊ねた。

「何有、下痢。直に來ます。」

と取散した注射器、聽診器、卷莨入やら扇子やら、手巾などを拾集めると、聽診器が二つある。

「や、忘れたな、先生。」

K氏は象牙製の持馴した、自分のと同じ形のを取擧げて、ランプの下に點檢した。果してM氏が遺れたのである。

自分は膝を拍つて、緣起を祝つた。

「これは好い辻古！　病人は（見直す）と云ふのだ。」

K氏は笑ひながら、その聽診器を書篋の側へ片寄せた。

さて國手は今や行くのである。自分は小舟の舵を折られるやうな想。事が起つてから影の如く身に添うて、助言者となり、後見人となり、或は助手ともなつて、自分の孤懷を慰めて、これまでの勇氣を與へてくれたのは、實に此國手の力である。もしも此國手の友を有たなかつたらば、自分は幾許苦み且悲むだであらう。地獄で菩薩の裙を捉へたやうに、自分は唯管K氏に縋つてゐるのである。其杖に離れる！　心細さは謂ふにも謂はれなかつた。

K氏は直に來ると云ふが、果して直に來られやうか。病家は何處であらうか。自分は心細さの餘、無躾にも其家を訊ねた。患者は程近さに住む、名は兼ねて識る學士の內君である。夕方枝豆を食べた所爲か、今卒の腹痛、頻回の下痢を發したとやら。その概畧を聞いて、自分は大息した。

「牛込の旗色は惡くなつた。」

「いくら繁昌まても、傳染病は御免だ。」

直に來る、直に來ると、我不穩の色を見てか、K氏は口續に斷つて、忙忙しく出て行く。

自分は身に比されて、學士の心勞の程を思遣つた。その若き美しき內君の爲に。將又その愛情の蜜の如く、和合の鴛鴦の如き女夫の爲に、滿腔の至誠を捧げて息災を祈るばかりである。

嬉しくも春葉は歸つて來た。屆書は凧市の角の派出所へ出したと云ふ。巡査は飛ぶが如く其を持つて警察署へ走つたとやら。派出所！　巡查！

と云ふ語は、極めて、極めて不快の念を起さしめた、寧ろ苦痛を感ぜしめた、自分は快々として、唯渠の語るまゝに頷いてばかりゐたのである。
「噫、派出所が料理屋、巡査が御酌になれば可いがなあ。」
と春葉の顔を見れば、
「然でございます。」
と渠は苦笑をした。
自分は始め消毒薬で失望し、次には立合醫で失望し、今や警察署で益失望した。これから検疫醫の出張がある。これが失望の底である。此底を拔くか、拔かぬか、一髮の繫ぐ所は今。
自分は又キスキイを飲むだ。其一盃を春葉に與へて、
「これは魔除だ。」
渠は感謝して受けて、迷惑して嚥込むだ。
「M氏は之で醉つたやうだ。」

と自分は又飲む。

「へい、酔つてゐられました。あれからお宅へ歸つて大騒でした。彼服を玄關で脱いで、石炭酸を打沃ける、先生は裸で入る。あれは素肌に洋服を直に着てゐられたのですな。あんなに豫防をしなければならんものでせうか。」

渠は文章の師に醫學の事までも訊ねる。

「それは拘はぬ人と、注意する人とある。」

「先生は如何で？」

自分は昂然に微髯を撚つて、

「苟も一道一藝に執心深く、其に求むる所が篤ければ、即ち志が堅ければ……だ、微々たる黴菌如きが、隙を覗へる理のものではないよ。乃公の全身は文章で稍がしてあるから、吹けば滅なるやうな黴菌や、取るにも足らぬ御長屋の井戸端評などは、到底冒すことが出來ないのだ。乃公

は些とも怖れない。」
正しく酔は稍遁つたのである。
「下へ行かう。」
と春葉を促して、病室を見舞つた。
噫、病室！　自分は此に入ると倖しく放言壯語の勇を失つて、別人の如く、胸は逼つて、身は窘められるかと疑はれた。
患者には異狀は無い。唯轉側を打つて、例の渴には苦むでゐる。春葉は身近く寄つて、背を按らうかと言つた。患者は辭して、心下の苦悶を蔽すやうに見えたから、之は自分への遠慮であらうと察して、此を起たうとしたのである。
けれど今にも檢疫醫が來る。最一人醫者の來るとは通じて置いたが、檢疫醫とは打明けなかつた。それと秘しておいて、患者が曉つたらば、却つて神經を傷めることは一層であらう。それよりは明白と割つて話した

方が勝と考へたから、此で仔細を明すに覺悟した。
覺悟はしたが、有繋言は頓に出かねた。如何にしても言ふだけの事は言はねばならぬ、言ふは易いが、それは精神的に渠を殺害するのである。吭を刺透す、それは血を流すまでのことで、殺すに二樣は無い。罪も無く、愛のあるものを、遲疑せず刺殺す人があらうか。我精神は稍錯亂してはゐたけれど、未だ發狂するまでゝはなかつた、殺すには忍びなかつたのである。

言はねばならぬのであるから、竟に言出した。最も婉曲に、と謂はうよりは、極めて曖昧に、檢疫醫の來るべき理由を娓々と陳べた。その理由は餘り曖昧で、陳べてゐる當人にも解らなかつた。定めて之を聽く身には、彌解らなかつたことであらう。けれども、檢疫醫なるものゝ來ると云ふことだけは解つたのである。

渠は毫も動する色は無くて、固より望む所と謂はぬばかりに、潔く得心

ゐた。渠は此時も、迷惑を懸けて謝罪が無い、御氣毒でならぬ、濟まぬ事である、と其事ばかり掻口說いてゐた。檢疫醫と聞いたらば、患者は定めて動顛して、(死より救へ!)と絕叫して、溺れむとする者の藁にも縋るやうな苦悶を見せるであらうと、懸念は其のみで言失れてゐたものを、渠は從容として一髮をだに動かさなかつた。

（八）

思ふに、渠の怖るゝ所は、死よりも義理である。渠は生きながらの柩なるべき釣臺よりは、師恩に報ゆる迷惑をば、已方無く心苦く思つたに違無い。

恁考へるほど、秋葉が可憐かつた、其心根が不便であつた、五年が間に今夜の唯今ほど、渠の捨難く可愛いことは曾て無かつたのである。

此可愛き秋葉は短き二十一年を一期として、明日は永眠の客となるのであるか、師弟の契も今宵が限であるか、自分は身に浸潤と渠の可憐さを知ることの晩かつたのを悔いた。悔ゆるほどなほ可憐さは増した。

渠は壁に向つて面を見せぬ。冷たい脚は杉丸太の捨てゝあるやうに、露出に横はつてゐた。自分はそれに掻巻を懸けて、愁然と病室を出る。

嬉しくもＫ氏は慌忙しく歸つて來たのである。

「樣子は如何です。」
と立ちながら訊ねられた。劇變は無いが、次第に衰弱するやうである、と答へると、國手は直に病室へ通つた。
自分は幾度とも知れぬ昇降に腰骨が痛むで、今は階子を昇るのが太儀に覺えたが、精神の疲勞と云ふものは更に甚しい。腦の內が生暖かになつて、煙の如く或物が蒸發するやうに感じる。
夢とも現とも辨かず階子を昇つて、次の間の六疊に打仆れた。耳元に鳴る時計は一時半、其を聞くと與に、疲果てた腦は忽ち異樣に鋭く働始めて、千緖萬端に妄想を書き散した。其の可忌さに堪へかねて遂に飛起きたが、益腦は咬れるやうに惱まされる。
ヰスキイを灑いで之を逐ふより外は無いと考へたから、書齋へ入つて、其瓶に手を掛ける途端、膽を貫く人聲！　自分は震へて、耳を欹てた。
氣立たましく喚くは格子の外である。檢疫醫か！　と起つ時、

「頼む、頼む！」

と呵責の笞を揮るやうに呼立てる。

妄想は忽ち消えて、自分は又舊の狂躁の人となつた。慌て忙きつゝ玄關に出ると、蠱然と立つたる白裝の車夫は、膝掛小脇に、紋付の提灯を馬手にして、承霤の邊から及腰に自分の姿を覗込むだ。

雨は小降になつて、風は全く歇むで、草木も漸く眠られるほどに、夜色濃かに、天地は靜である。

「何卒此方へ。」

と小腰を屈めると、車夫は門外へ引返した。程もあらせず、顯れたる大兵肥滿の老區醫は悠然自若として、一禮も無く玄關に動上つた。バナマの帽子を庇垂に冠つて、藥籠鞄を手にゑたまゝ衝と座敷に通られたが、K氏は此まで出迎へて、まづ、と二階へ請じた。すると、檢疫醫は帽を脫つた。其頭は半禿げて、其眉目は溫乎たる、五十有餘の人である。

老醫はK氏を先に、自分を從へて、のつし〳〵と二階へ推昇つた。縞透綾の羽織の裾を秩然と撥ねて、稍〻色付いたサビタの煙管を啣へながら、泰然と革蒲團に身搆へた時、K氏は慇懃に挨拶をした。續いて自分が頓首した。老醫は一々輕く應けて、さて兩箇の談は直に虎列拉物語。老區醫は劈頭其多忙を呟く。若き國手は警察の嚴を說く。話頭はそれから轉じて、我患者の容躰を說明し始めた。

老醫は無雜作に應答して、其說明の訖ると與に、前法の如く二三の質問を出したが、言下に要領を得ると齊しく、思出したやうに口なる莨を燻しながら、鞄を引寄せて、屆書を取出した。其を見い〳〵K氏と自分とを左右に控へて、更に幾多の檢疫官的訊問をしたのである。

自分が檢疫醫を理想したのは、極めて尊大な、頗る傲慢な、最も不親切な、漫に役所的の、金緣の眼鏡を掛けた、繝緞の浮波々々した洋服を着た、スタンレイのやうな覆日帽子を冠つた、見識の高い、高い、人民は

地に俯して恐懼仰見なければ、其頂を見ることの稱はぬほどに、見識の惡高い、眼の可恐い、髭の濃い、氣難しさうに瘦削けた、死んだ伯父樣に何處か肖てゐる、お前と云ふ語より外に二人稱を知らざる、四十三四の人物であつたに。

篤實、溫厚、敬愛すべき君子風の老國醫S氏！　此人に檢疫などゝ意地惡さうな名を呼ぶは、不相應とよりは、寧ろ勿躰ない。自分は恁云ふ容貌に接して、何と無く可懷く覺えた　檢疫に出張した國醫とは想はれなかつた。其麁末なる服裝と、碎けたる言語と、小節に拘らぬ躰度とは、深く自分の硬つた心を和げて、先生とよりは、老國醫よ、自分は伯父樣と呼びたかつたのである。

其邊幅を修めず、庬々と肥えた膝を立てゝ、例のサピタを啣へて、若き國手の顏を見ながら、言寡く、率直に、其反問に答へる躰は、全く家內の人のやうに想はれたのである。K氏は熱心に老國醫の意見を叩いた。

「まあ、診んければ……。行つて診ませう。」
とはや膝を立てれば、K氏は閑雅に會釋して、案内に起つ。何と思つたか、自分は獨り殘つてゐた。
君子の老醫は必ず、渠をば腸胃加答兒と診斷するであらう。退院するなど〻騷ぐほどの事があるものか。明朝までに治してあげる、と手輕に慰めてくれるであらう、と固く信じたのである。いざ然らば老醫の深切なる診察の模樣を見むと思つて、觳觫と病室へ出掛けた。此時は胸の内はS氏を信ずるの厚い爲に、我ながら呆れるばかり安恬なものであつた。其代體は太甚く疲れて、持運に骨が折れるやうであつた。
階子を下りて眞直に病室を見込むと、兩箇の國手は忙しげに手を下す樣であつた。老醫は診察してゐる。其側にK氏は助手として、器械の始末をしてゐる。自分は茫然と入口の柱側に坐つた。
K氏は自分を見ると、

「氷はありますか。」

と訊ねる。南無三！　もう無かつた。買ひに遣るも可いが、二時過！　は て喃と途方に晦れた。

「氷は敵起せば何時でも賣ります。」

と心着けられて、又玄關に居る春葉を呼むだ。

氣毒であるが、氷を買つて來るやうに、と吩咐けると、未だ一斤あると答へた。その嬉しさは、

「然か、然か。持て來い、持て來い！」

檢疾醫の診察も常のごとく濟むだが、唯心遣は、皮膚の失彈を試る時であつた、腓腸筋には微痛も無い、それから足頭の皮膚をば、事あれがしに老醫は彼地此地と撮むで、彈力の强弱を試驗た。甲の脊の皮は撮起ほどの退くのが稍弱かつた。指の邊も其傾向があつた、けれども言立てるほどの失彈ではないと思つたから、患者のを試ると與に、自分の足を出

て、私に彈力の强弱を見較べたのである。老醫が患者のを撮む時、自分も我足の同じ所を撮むだが、患者は確に多少の失彈あるを免れなかつた。

「多少かな……ちいと面白うない。」

と老醫は兩三度首を拈つて、K氏を見た。國手はラムプを擎げて、曩から瞬もせずに視てゐたのであるが、此時愁然として頷いた。而して自分を見向いたか、其眼色は、噫、秘密は暴れた、覺悟せねばならぬ、と合圖をするやうに輝いた。

老醫は更に指頭を吟味えたが、幸に皺襞は無かつた。手頭にも足と同樣の失彈は認められたのである。

此點檢の後、患者の腋に挿まれたる體溫器は取出された。

「六度八分。」

と老醫の呼ぶ聲に應じて、

「三分昇つた！」

と國手は嬉しげに呟いて、其體溫器を借りて篤と視たが、やがてS氏が持參のスプレイを拈つて、消毒を施した。此間に老醫は鞄の中から鉛筆と與に半紙二折大の薄い手帳を出して、燈の下に披いた。それは檢疫證とも謂ふべき印刷物である。
老醫そまづ患者の姓名、族籍、年齡、職業等を訊ねて、一々記入した。次に厥冷、痙攣、嘔吐、渴、沈衰、下痢、など〻分けてある各項の下に、患者の病狀を記入するのである。
老檢疫醫は每にK氏の意見を參酌して、最も愼重に筆を下した。自分も與つて多少の修正をすることを得たから、此檢疫證の條項には、半點の不服も無い。寛に流れず、嚴に失せず、噫自分はS氏の檢疫に就ては、毛頭も憾は無い。
恁云ふ場合には、得て、阿古屋が所謂雪と墨との人物が衝突するもので、白い黑いと、其說區々に、主治醫と檢疫醫との間に議論の起る例は往々

あると聞く。其砌には、檢疫官の出張を乞うて、其裁斷を須つとやら。吁、もし然云ふ事でもあつたらば奈何であらう。患者の枕頭で醫論の辯難、直の極らぬ內に初鰹は腐る事であらう。憂の中のせめてもの喜とは是である。自分は其檢疫證を手にして、更に精讀した。

遺憾は無い、不服は無い、是に相違は無い！　設此記載の病狀が、傳染の虞あり、消毒の要あり、送院の價ありとならば、自分は進むで豫防し、喜むで消毒し、勇むで送院する。

今は心を定めて、檢疫醫の宣告を待つばかり。死刑か、無罪放免か、或は有期徒刑となるか。自分の心は浪の暴るやうに騷ぎに騷いだ。

此では何とも其運命を患者に聞かせたくなかつたから、自分は切に、

「彼方へ、彼方へ。」

と急立てると、

「御手水を。」

とK氏に注意された。
自分は狼狽へて春葉を喚むで、早速手水を取寄せたのである。思へば、自分は狼狽へた、見苦くも狼狽へた。醫者に手水を進めぬとは！　詫狀の宛名に様の字を遺したほど、其程面目無かつた。我ながら狼狽へたと、是は氣が着いたやうなものゝ、然ぞや未だ／＼外に幾多も慌てたであらうと、K氏の手前も赤面の至に堪へぬ。
やがて二階に復つてから、老醫はK氏に向つて、療法の始末を訊ねた。嘔氣が劇くて、服したものは盡く吐すので、既に二回の羯布羅注射を施した、と言へば、芥子は試みましたか、と訊ねる。如何にも試みたが、疼がつて直に剝してならぬ、と國手が喞てば、
「それは可かぬ、胸が眞赤になつて、一日ぐらゐは色の消えぬほど貼つて置かぬければ。それでは芥子を、芥子を。」
老醫に急かれて、慌忙しく饂飩粉と芥子を取寄せたが、在合の西洋芥子

は瓶の底に幾程も無い。自分は氷の時のやうに失望したが、S氏は是で足りると言つた。

「それから、何か、針に箸！」

又春葉を呼揚げねばならぬ。手近にあつて菓子鉢を覆して、筆筒の小楷を二本抽いて出すと、不可！と言つて、老醫は肉叉の在つたのを逆に把つて、手早く捏始めた。

「紙は、紙は？」

藍摺の原稿紙を出した。老醫は半紙二折の一面に厚く布した。K氏は之を持つて病室へ起つて行つた。

自分は不取敢茶を勸めて、さて陰かに老醫の氣色を候つた。それは儚くも檢疫醫の意をば其面上に讀まうとしたので。患者が類症ならば、多少穩からぬ色が見はれやう。然も無くば平然たるものであらう、と云ふ私考であつた。老醫は平然として、氣毒さうにも、惻然さうにもなくて、

始よりは一層快豁に、怡悦に、心配の後の安堵と想はるゝ氣勢が微見いたから、吻と胸を撫でゝ、此分ならば、と故と逼らずに、姑く他事を語つてゐたのである。

K氏は程無く昇つて來たが、座に着くと直に、

「如何でございませうな、高診は？」

と先づ訊ねた。

老醫は扇遣の手を住めて、

「然やうな。」

と例の檢疫證を取擧げて眺めたが、答は咄嗟に出なかつた。

「惡いな、どうも面白うないな。」

と返事に窮るやうであつた。

自分は禁りかねて、顫ふ聲を抑へて、投付けるやうに、

「病院へ遣らなければならぬのですか。」

「遣つた方が宜いな。」
と老醫は奮然とした自分の顏を目戍つた。
「然し、未だ類似と云ふほどの徵候は無いのでございませう。」
「無いとは謂はれん、私は首を傾げますな。」
「せめて明朝まで委いて、樣子を見たいと思ひますが………。」
自分の聲は次第に顫へて來る。
「そりや惡い。然云ふ姑息なことは爲ぬ方が宜いな、誰も然云ふことを言ふて困る。早う送院して、早う手當をしたが宜い。あゝして措いて變症したら如何なさる。變症せぬとは限らぬて、いや變症しさうぢやて。早う送院して手當をするが、相互の仕合じや。」
自分は頭を俛れて身動もせずに、老醫の言を聽いた。
「全く段々樣子が思はしくないから、いつそ送院したまへな。それに、君は自費療養と云ふ事を言つてゐたぢやありませんか。自費療養なら、

取扱も善し、看護も十分に届くから、心配はありませんよ。あゝして家に置くよりは、却て可いから、西木君が不便と思ふなら、自費療養で早く送院さしてやりたまへ。どうも衰弱が段々劇くなるやうだから、注意さしなければ可くないと思ふ。」

國手は恁言ふのである。腸は千切れるばかり、口は吃して、聲も出なかつた。

「自費療養なら猶宜いがな。それは私は一箇人として勸める。姑息は悪い、大事の本じや。然なさい。それが一番可え。」

老醫は口を極めて送院の利を說いたのである。自分も局外者として意を言はしめたらば、此際必ず姑息の害と、果斷の利とを說いたに違有るまい。局に當る者は常に迷ふ、自分は最も迷つたのである。けれども、心には送院の可然を信じてゐた。唯其を患者に知せるのが、情に忍びなかつたのである。避病院と聞いたらば、渠は定めて落膽絶望するであらう。

如何に落膽絶望するであらうか！　其を思ふと、嗚呼、言へない、言へない。自分は木でも、石でも、鬼でも、蛇でもない、血と涙とを有つた人間である。

自分は鈍くも、送院と聞いて、さては渠も此までの壽命か、と思つた。――送院されるほどでは、十が七八まで命は亡いものと理外に迷信してゐたのである。渠とても同じ迷信を懷いてゐるのであるから、猶更自分は金輪際まで言ふに忍びなかつた。之を忍ぶものは何所にも在るまい。

絶望哉！　今は主治醫も送院を說く、檢疫醫も送院を說く。

四面皆敵、敵ならば必死の勇を奮つても、自分は當る覺悟はある。渠等は敵とすべからざる敵である。爭ふも無益、爭ふ事は稱はぬのである。其保護の下にある身として、警察權に反抗することはならぬ。自分が命を投出して爭つた所が、是非に警察權は執行される。事是に及むでは、……今更未練は出すまい、俎上の鯉だ！　と觀念の眼を閉ぢて、自分の

信ずる國手の計ふに任せた。
いよ〳〵其と事の極る間に、老醫は忙々しく檢疫證の寫を認めてゐた。
その一枚は警察署へ出すのである。
「では、これから直に送院の手續を爲ませう。」と取急いで檢疫醫は去つた。門外に其車の響く時、二時半が鳴る。自分はヰスキイを飮みながら、茫然と考へてゐると、
「S氏が屆けると、直に警察署から檢疫掛が來るから、用意を爲なければなりませんよ。而して病人にも神經を起さぬやうに、能く言聞かせてやりたまへ、落膽せぬやうにね。」
K氏に心着けられて、自分は不承々々に頷いた。
「早く爲たまへよ、直に釣臺が來るから。病人の身になつたら、釣臺は餘り好い心地でないから、能く言聞かせてやりたまへ。」
國手は繰返して自分を勵したのである。

「いよ〳〵送院かねえ。」

と自分は釣られるやうに起上つた。K氏は何を捜すのやら、瞿然と四邊を眴して、

「はてな、はてな。」

と呟いてゐる。

「何ですか。」

と尋ねると、

「此に置いたM氏の聽診器が無い。」

「聽診器? 先刻此に……。」

覺えの在所を見れば、影も無い、K氏も手は着けぬと云ふ、自分も知らぬ。それが所を變へる理が無い。

「S氏が持つて行きはせぬか知らぬ。」

とK氏は首を傾けたが、

「S氏は此で聴診器を鞄の中へ入れはしませんか。」

「入れましたよ。」

「はあ、それぢやS氏だ。」

「あれは自分のでせう。」

「自分のは病室で消毒をして、僕が鞄の中へ收つた。其を知らずに………然だ、然だ。」

とK氏は膝を拊つて、

「皆顚動してゐる。」

見ると其處に見馴れぬ鉛筆が遺ちてゐる。

「其代り鉛筆を遺れて行かれた。」

と自分は其を机の上に載せた。

「僕も何か遺れるかも知れません。」

とK氏は笑つた。

自分は悄々下りて、病室へ入ると、患者は仰樣に寐てゐる、その胸を柔藥が頻に按つてゐる。自分を見ると、患者は介抱の手を拂斥けて、

「もう可うござんす。」

と力無げに襟を合せた。これも苦悶を自分に見せまい爲である。渠は飽くまで病苦を自分に蔽した。それは何故であるか。渠は自分の心配するのをば、見るに堪へぬほど氣毒に思つたのである。迷惑を懸ける上に心配を爲せる！　此が渠に取つては、病の苦よりも遙に苦くあつたらしい。然と覺つたから、もつと按づてやれと命じたが、患者は固く辭して受けなかつた。

目授を老て春葉を彼方へ立たせ、さて枕頭に坐つて、渠の容躰を熟視たが、此時の驚愕は又格別。その衰弱の目覺しさ！　前と今とでは、普通の病人が殆ど一週間も經つたほどの相違を顯した。實に一秒毎に患者は死に近くと想はれたのである。

憚無く言はうなら、患者は確に明朝を待つまいと想つた。として見れば愬ひ婦人の仁に牽されて、送院を拒むだならば、なほ如何なる椿事になららうも知れぬ。左にも右にも早く送院して、行屆いた看護を受けさせるが急務である、と感じた。

此考の爲に一方ならぬ勇を得て、自分は進むで送院の事を說く氣になつた。有繫に口を切るのは猶豫つたやうなもの丶、案じたよりは易く打出したのである。此時も自分は、類似ではない、全く劇症の腸胃加答兒である。故に傳染の虞は無い、無いから自分も春葉も敢て接近して恐るる色が無いのである、と欺いた。傳染の虞の無い腸胃加答兒ならば、何故避病院へ送る必要があるのか。此疑問は差當つて說破するに窮る難題であつた。

自分がＫ氏に二度までも促されて、容易に起たなかつたのは、此問に對する答辯を案じてゐたのである。

やう〳〵恁云ふやうに辭を設けたので。
お前は腸胃加答兒である。腸胃加答兒と類似格列拉とは一紙の間である、と醫者は言ふ。間違ふと變症する。變症したらば、治療し難いものになる。自分が送院せうとする自費療養の特別室なるものは、既に格列拉と名の附いたものは入れるのを許さぬ所で、謂はゞ變症すべき傾向のある輕症の患者に限つて、入院を許すのであるから、自宅療養は手の屆かぬ所から、變症するやうではならぬとの懸念で、誰も入院するのである。檢疫醫が之を勸めもし、又之を許したと云ふのは、お前が類似でも何でもないのを證明するに足る。から、心配せずに入院して、一日も早く全快して、苦痛を免れるが可い。避病院と思ふと理が違ふと。
思へば隨分解らぬ理窟で、有繋に秋葉も不得心であつたであらう。自分は其時適れ理窟の氣で、眞實を面に顯して、一生懸命に說いた。最後に恁言つた。

「病院へ送るも可いが、甚だ無慈悲のやうで、厄介拂でもするやうに付られるのが殘念だ。此心も知らずに恨まれては恨めしい。必ず姨捨山へ遣るのではない。」

患者は泣きながら、

「私は寧ろ姨捨山へ參りたうございます。實に御禮の申しやうもございません。」

と枕に顏を摩付ける。

「それだから力を落さぬが可い　一週間内には出院させる、と醫者も固く言つたことだから、早く出て來て、（楮の花）の續稿を書け。春葉單身では扶桑新聞の小說も困るから。」

扶桑新聞と言ふと、自分は忽ち渠の故鄕の事を憶出した。

「家へ知らせてやらうかな。」

患者は頭を掉つて、

「心配しますから、知らせない方が宜うございます。」
萬一の事でもあると、と危く辷らす所を、
「然う、大したことでもないのに、那麼に騷ぐことも無い。舍さう、舍さう。」
と自分は故と思止つた氣色を見せた。
「それぢやもう病院の迎は直に參りますか。」
患者の眼は輝いた。
此語は別の意味とても無い、唯其儘の語であつたが、自分は謂ふに謂はれず、哀に心細く聞做した。渠の皺嗄れた聲もいとゞ凄味を添へたのである。
「直に來る。」
と自分の聲は顫へた。
「それぢや支度をしませう。」

患者は徐かに身を起した。

自分は驚いて、

「何を支度をする？」

「之を脱いで、最一つの手織の方を着て参りませう。あの方が未だ綺麗ですから。」

渠は白地の未だ新しい有松絞を着てゐたのである。其をば、裾の方に丸めてあつた、節糸の白茶に鼠の雑つた手織の浴衣に着更へたが、自分の目には有松絞よりは汚れてゐるやうに見えた。やうに見えたのではない、確に汚れてゐたのである。

何故に汚れぬものを汚れた物に着更へるのであるか、と自分は私に眉を顰めた、考へて忽ち手織と云ふのに心着いた。

手織とは！　母の手織ではあるまいか。未だ新しい有松絞より、汚れたりとも母の手織！　唉、渠は確に死を覚悟ゐたのである。渠の支度と言

つたのが、驚かれるほど異様に聞えたのも理、渠は死支度をするのである。渠は母の手織を着て、彼世へ往くのである。渠は一言も死を説かれ、けれども、其を説くよりも哀であつた。一語も悲を言はなかつたが、なかなか言ふよりは情無かつた。自分は息を凝して、熱い涙を飲むばかり。いよいよ送院となつたから、此趣を祖父母に通じなければならぬ。自分は徐かに病室を出て、座敷の蚊帳の中を窺ひながら、小聲に呼むだ。祖父も祖母も顚げるやうに一度に蹶起きて、蚊帳越に面を揃へて自分を視る。

「病人は樣子が善くないやうだから、病院へ送ることにしたよ。然し、心配するほどのことは無い。」

「避病院へかい。」

と祖母は呆れる。祖父は戰々兢々と、

「大丈夫かい、大丈夫かい。」

と轟く胸を鎭めかねてゐた。

「大丈夫だよ。明朝まであゝして置くと、却つて險難だから、手後にならない内に送院した方が可いのさ。それから、今に巡査や警部が來るから、此が往來になるかも知れないから、二階へ行つてお寢なさい。」

祖父母は益驚いて、はや蚊帳を出やうとする。

「少し待つて、今二階を片附けるから。」

と自分は二階へ昇つた。K氏は在らぬ。病室に春葉を呼ぶ聲がした。國手は第二回の皮下注射を施してゐるのであつた。

自分の迎をも待たず、祖父母はやばた〳〵と階子を昇つて來た。それと擦違に自分は降りて、座敷へ行つて見ると、蚊帳は無い、寢床は無い、綺麗に片附いて、檢疫掛の爲に道は清められてあつた。雨戶の隙洩る東雲の色は、はや陰々と座敷の闇を貫いて、昨夜から開放の玄關は、定かに人顏の見ゆるほど、明くなつてゐる。

秋葉の机に點つてゐる書燈の蒼白い火穗は、涼しい朝風に飄られながら、覺束無げに光を存つてゐる。其側に渠の書未了の原稿七八枚は山路の落葉のやうに算を亂して、猶飛ぶべきのが、正面の襖にべつたりと密着いて、慄くが如く絶えず閃いてゐた。

唉、此風前の書燈、渠の命も此樣である。見るほど蒼白い火影は異樣の可忌い感を與へた。自分は進寄つて吹消した。襖一重の彼方は婢等の部屋である。ごと／＼と物音が聞えたから、竊と覗ふと、渠等は目覺めてゐる。目覺めてゐるのではない、通宵睡らなかつたのである。

勝手口の欄間から射込む曉の光は、蚊帳の半面を照した。渠等は首を擧げて、自分を見ると、起上らうとする。

「西木は病院へ行くのだから、今に衆が來る。其衆たちが歸つて了ふま

では、寐てゐるが可い。起きては可かぬよ。」渠等は聞えぬほどの小聲に、唯、唯と答へた。而して二人とも蚊帳の中央に鼻を銜合せて跽つた。

「寐てゐな、寐てゐな。」

と言捨てゝ自分は二階へ昇つた。

續いてK氏も昇つて來た。其顏を見ると、自分は患者の容躰を訊ねれば、

「良くない、良くない。一層衰弱えた。先刻よりは脈搏が良くない。送院することにして善かつた。」

國手は太息を吐く。自分は直に駈下りて病室へ入つた。床に患者は在ない、閭に物音がする。待つてゐると、程無く出て來たが手水口を啓けるのも、手を拭くのも、椽を歩むのも、十數回の吐瀉をした患者とは想はれぬほど確乎したものであつた。自分はK氏の言を聞いて心に驚いたほどの、變を見なかつたので、稍安堵の胸を撫でたのであ

る。

「具合は如何だ。やつぱり瀉るか。」

「へい、一向何も出ません。」

患者は何食はぬ調子で答へた。

「それでも先刻から度々行くぢやないか。」

「へい、臥てゐるのも退屈ですから、行つて見るので。那麼に行きたくもないのです。」

大病人の言草ではない！　小憎らしいほど剛情な。是が平生であつたならば、自分は怺へかねて、渠を引据ゑたに違有るまい。無論引据ゑて、一拳の下に渠の失言を撃破さずには措かなかつたであらう。

此小憎らしい言草、此怺へかねる剛情！　自分は毛孔の竪つばかり嬉しかつた。此程の勇氣を有つてゐれば、大丈夫、渠は死なぬ！　必ず渠は病に勝つ！　今既に勝つてゐるのである。此上の願は、とてもの事にも

つと剛情を張つて、張つて、先生を侮辱して、侮辱して、立ろに脱然と平癒してくれゝば可いと念つたのである。

とは言ふものゝ、其實は苦しいか、渠は床に足を蹈懸けると共に、投飛ばされたやうに、僵れて枕もせずに、ぐつたりと横はつた。自分は心配するな、神經を起すな、と老人が孫に誨へるやうに、諄々も渠を慰めた。渠は又、御迷惑を懸けて相濟まぬ、と其事ばかりを氣毒になるほど反復した。

渠の顏を見ると、恬慰める外に辭は無かつたので、渠とても自分に對しては、是より外に意は無かつたのである。

空は益々白むで、はや四時となる。隙洩る外面の明は立派に朝になつて、聞馴れた鐘の音、勤行の太鼓、米屋の鷄の聲、製造場の笛、それら諸の寢覺の物音は、例の如く戸を開けぬのを、急立てるやうに聞える。

密閉された空氣は通宵の混雜に濁されて、目口を塞ぐばかりに重くるし

く感じられる、而已ならず人の行く毎に飄られる一種の臭があつて、幾と呼吸苦しい。然無きだに疲れてゐる腦は岑々と痛むで、目も眩むで來る。戸を一枚開けたらば、さぞ新鮮の大氣と香しい曙とが、醉醒の水のやうに快く亂入るであらう、其愉快は？　と思はぬではなかつたけれど、自分は一寸も戸を啓けたくなかつたのである。

一寸も戸は啓けなかつた。何故か自分も知らぬ、唯啓けるのが可厭であつた。可厭でありながら、隙洩る曙と涼げな青葉とを覗きながら、黯々淡々の椽を走つて、身心を苦めてゐた。

一言に云つたらば、何と無く夜の明けるのが可厭であつたので。四時半となつた、雀は益噪ぐ、井戸の轆轤は絶々に響く。泣いても笑つても朝となつたのである。檢疫掛は未だ見えぬ。

自分は二階へ昇つた。K氏は書齋に祖父母と話をしてゐる。其語る所は、可忌い近所の拉病の噂、自分の姿を見ると、祖父母は言合せたやうに、

こそ〳〵と蚊帳へ入つた。

「未だ來ませんか。」

とK氏は袂時計を搜つて、

「即刻屆出ろと言つて置きながら……、」

と呟いた。

「遲い、あれからもう二時間も經つ。」

と自分も呟いた。

「それとも多忙のか知らぬ。そんなに有る理は無い。」

と國手は眉を顰めた。

此期に及むでは、送院を一分も早く、と自分は心急かれた。別に係と云ふ手宛の爲樣も無くて、打棄て丶措くのは、極めて心許無かつた。早く送院して、規則正しい看護と、熟練した治療とに因つて、病勢の募るを防ぎたいの外他念は無かつたのである。自分は忽ち春葉を呼むで、

「辛子は如何した。」　と訊ねた。
渠は面目も無い顔をして、
「剝じて了ひました。」
と恐懼〱答へた。
「剝した!?　剝して如何なる。なぜ剝した？　一時間ぐらゐは貼つて置かなくつて、何が利くものか。」
渠が貼つて、渠が剝した事のやうに譴責した。
「どうも痛くて耐りませんものですから。」
渠も自分が貼つて、自分が痛むで、自分が剝した事のやうに、酷く恐縮した。
「爲やうが無い喃、剝して了つちや爲やうが無い喃。」
春葉は小さくなつて、階子の口に逃尻を構へてゐた。

（十）

矢庭に門の格子が啓くと同時に、聞馴れぬ濁聲が響いた。續いて、靴音、劒鞘ががちやり〳〵と鳴る。春葉は飛下りて行く。自分も起つた、西の戸を啓けて窺ふと、梧桐の葉越に白いものが動く。果然、巡査が來たのである。

此時の自分の感情は異樣なものであつた。戸籍調の外未だ甞て我門は巡査の靴を容るゝを許さなかつたのである。其時の巡査は極めて慇懃に、極めて溫厚に、極めて深切に家人に接する。なれども自分は巡査の容を見ることを喜ばぬ。巡査を見ると與に自分は罪惡！　を聯想する。それが可厭さに渠を見ることを喜ばぬのである。

坊主が憎ければ袈裟までが憎い。自分の袈裟が憎いのは、坊主が憎いのではない、其先の死が憎いのである。死に就いて始末をまてくれる出家、

考へて見れば、難有くこそあれ、毫も憎い理は無いのである。恐るべき罪悪、其戕害から保護してくれる巡査、喜ばしくこそあれ、忌むべき理は無いのである、のに、何故か女々しくも、自分は巡査なるものは謂ふばかり無く嫌忌である。別に意味も無く、唯嫌忌なのである。途中で會つて、顔でも見られると、心安からぬやうに覺えるのが常である。然までに忌はしい、疎ましい巡査が、負ふ氣無く我門を出入して、自分が月の夜毎に清香を嗅いで、苦吟の腸を洗ふ梅樹の下に、濶歩するを見た時の胸中は?! 而も渠は戸籍調に來たやうに、其擧動も其言語も慇懃ではなかつた、温厚ではなかつた、勿論深切ではなかつた。渠は罪有る人を睨付けるやうな眼色で、家の外構を眴した。

自分は常のやうに忌む、嫌ふ、懼るゝと云ふよりは、寧ろ憤慨に堪へなかつた。暴慢無禮の言を放つて、所以無きに侮辱されたやうに感じたのである。石の如く突立つて、自分は梅の樹下を徘徊する巡査を睨付けた。

渠も劣らず自分の面を賤む如く睨返した。

自分は侮辱された、自分は賤められた！　噫、然し、侮辱されるのも賤まれるのも無理は無い。思へば自分ば罪人である。自分が巡査の忌むよりも數十倍近所から忌嫌はれる大罪人であるのである。世間の迷惑になるのみか、政府に手數を掛ける傳染病を出した家の主、自分は立派な大罪人！

此大罪人に向つて、巡査が何故に慇懃であらう、温厚であらう、將又深切であらう。屈辱、輕蔑、これらは未の事、牛込中を引廻しにされて、神樂坂の口に三日の曝物にされても、自分の罪は償ふに足らぬほどであらう。

自分は寧ろ此巡査が我姓名を呼捨にして、神妙にしろ！と叫ばなかつたのを怪むばかりである。恁思ふと與に、憤慨の念は忽ち失せて恐懼となつた。恐懼は頓て神妙となつた、神妙は遂に意氣地無となつた。

罪有る我は禮として此敬ふべき巡査を勞はむが爲に、慌忙しく下りて玄關に出た。一足違に巡査は門を出て、井戸の檢分に行つたのである。

「こら、こら。」

と警官的音聲を揚げて、井戸際の下宿屋を呼覺すのが聞えた。やがて誰やら起きたと見えて、此井戸の水を汲むことはならぬ、と嚴達する應對の樣子であつたが、直に靴音が聞えて、引返した。

爾時病室から出て來た春葉は自分を呼ぶから、行くと、患者が氷を望むのであるが、もう盡きたに因つて、買ひに行くから、代を渡してくれと云ふのである。

餘り用るのは可くない、と思つたから、枕頭へ行つて、病院へ行くまで辛抱志ろと言ふと、渠は淺ましく皺嗄れた聞を志て、到底も辛抱が出來ないと言ふ。

其不便さは、毒と知つても與へずには措かれなかつた。國手に聞くと、

可からうとあるので、春葉は重箱を小風呂敷に包むで玄關に出た。巡査は內格子の前に仁王立に突立つてゐたが、春葉の氣勢を誚らむとする如く屹と視たから、
「氷を買ひに參るので。」
と襖の陰から自分が代つて辭ると、此言は――此罪人の我儘なる言は、如何に劇甚しく警察官の心を激したるか、渠は忽ち居長高になつて、
「交通遮斷でないか!!!」
と大喝𛂞た。大喝𛂞たばかりでは、放免するに足らざるやうに、渠は眼を輝かして自分の顏を孔の穿くほど打目戍つた。
自ら罪人と信ずる身ながらも、此時ばかりは、がた〱と齒の鳴るばかり怒氣は渾身に迸つた。
交通遮斷でないか!!!　「然り、交通遮斷である!!!!　交通遮斷であるが故に、警察官は交通遮斷でないか、と注意したのである。その通り、別義は無

いものを、何故に自分は然ばかり憤懣たのであらうか。後から考へて見ると、全然理窟が解らぬ。恐く自分が血迷つてゐたのであらう。
春葉は玄關を引込むと、矢庭に重箱を疊へ撲着けて、
「交通遮斷だい!!!」
と絶叫した。
先生からして血迷つたのであるから、弟子の氣の違ふのは無理も無い。血迷つた先生と氣の違つた弟子とは、壞れた重箱を見て、然も心地快げに笑つた。二人の發狂者は心地快げに笑つたのであるが、正氣の眼から見たらば、千回苦て櫟られるやうな苦い、苦い、苦笑であつたかも知れぬ。

（十一）

K氏は入替つて玄關に出て來た。巡査は見ると、可恐顏にも微笑を作つて、

「いや、これはK氏、先日も魚叉て、今日も亦。」

と目禮をする。

「なるほど、然でしたな。御苦勞樣でございます。」

と國手も親しげに會釋をした。

兩箇は聽て談話を始めて、少時は途絶もせずに物語る聲は、病室にも聞えた。春葉は檢疫掛の出張を待受ける爲に、椽の戶を啓けてゐたが、庭へ出たのか、飛石を曳磨る下駄の音がした。自分は患者に向つて、外出を禁じられて、氷を買ひに出るわけに行かぬゆゑ、病院へ行くまでは水て辛抱をせよと諭せば、渠は順しく承知はしながら、渴に堪へぬやうに

口を動してゐる、見るに就けて益不便に覺えた。なれども、是非が無い、せめては水なりとも嗽ませうと思つて、座敷の戸棚からブランデエの空壜を出して、臺所へ出掛けた。

婢の一箇とはや起懸けてゐたが、自分が行くと直に蚊帳を出て、釣手の一隅を外さうとする。

「待て、待て。もつと寢てゐなよ。」

と漉水の瓶の蓋を取つた。婢は慌てゝ潛込むだ。自分は壜に水を充めて、不圖考へたのは、是が末期の水になるのではあるまいか。渠は再び此水で墨を磨ることは無いのであるか、と心に浮ぶと、坐寒く身に浸む朝風は哀を誘つて、ほつたりと何處からか露が零れる。

此水を汲むでやるのが、師弟の好の終焉であるか。儚い、儚い! 無常の世である哉。自分は瓶を把つて口に推當てた。八分目までに飮むだのは、三世の別の水盃の意である。

其瓶を病室へ持つて行つて、物は言はずに枕頭に差置くと、渠は起返つて會釋をせたばかりで、氷こそ欲いが、水は所望ではなかつたか、直に口は付けなかつた。

「飲みな、飲みな。」

と餘所ながら勸める自分の吭は有繋に塞つた。渠は瓶の口から飲むで、

「水は温うございますな。」

と微笑を含むだまゝ、仰向になつて寂然とせてゐた。

自分は胸の張裂けるやうに覺えて、此に居られなかつたから、直に起つて庭に出ると、玄關前へ通ふ木戸はや開放してある。見れば、門内には二名の巡査が立話をせてゐたが、自分の足音がすると、一齊に頭を回して、自分を凝然と視た。

一双の目で視られてさへ悚然とするのに、四つの目で睨まられる、其不愉快！　體が竦むやうで、此にも居られなくなつて、二階へ駈昇ると、

蚊帳の中から、

「來たかい、來たかい。」

と聲を懸けられた。それは祖父である。

「來たよ！」

と自分は苦り切つて呟いた。二言と交さぬ間に、又人聲がして、人數の加はつた樣子。

西向の欄から下瞰すと、佛蘭西厨夫の上衣に似た揚飄〱したものを被た者が二名來たので、能く見れば、それも警部と巡査である。此二人こそ特務の檢疫掛と知られた。着てゐるのは檢疫衣とも謂ふのであらう。

此家の主として、應接に出ずにもゐられまい。自分は早速二階を下りて、庭口から門内に出た。何時の間にか梅の樹下に釣臺が來てゐる。是は！と思ふ間も無く荷車が二臺、それに四斗樽二つ、手桶に、蒲簀、鍬、消毒器の數々を挽き込むで來る、見る〱巡査は三名となつた。檢疫掛が

二名、釣臺の人足が三名、消毒掛の人足が三名、運搬夫が一名、總勢十二人、門內狹しと市を成した。之を見ると、謂ふべからざる不快の念は忽ち滿腔に溢れて、ある寳を懷にゐてゐる身が賊の重圍の中に陷ちたやうに胸が轟いた。なれども退くに退かれぬ場合、自分は從々と進むで、警部に一禮を施すと、渠は手を抗げて、稍小腰をも屈めて、慇懃に挨拶をゐた。恁とは實に想ひの外であつたので、極めて、極めて、頼もしく、心強く覺えた。渠は自分を罪人として取扱はなかつたのみならず、自分の不幸を憐むやうに見えたので、餘りの嬉しさに、自分は陰かに警部の顏を浸々と視たのである。

其人は三十五六でもあらうか、中肉の色の白い、溫和な溫和な、好貌の紳士である。愛嬌のある目元と、準繩の口角とは、覺のある面影に通つてゐた。勿論其人ではなけれど、何處やら其人に肖てゐる。誰であつたか、漸う憶出した。

自分が十七八の頃通學した某私塾の塾頭に肖てゐるのである。其人は諄諄倦まず八家文の質義に答へて、手を取るやうにして、自分を教へてくれたのである。

此警部は無論其人ではない、とは知つたけれども、どうも其人のやうに想はれた。之が爲に益頼もしくなつて、何か物を言つて見たくなつたから、

「どうも御苦勞樣て。」

と挨拶をゑた。渠は忽ち微笑を帶びて、

「貴下が尾崎先生で、どうも飛むでもないことでございました喃。」

其言語までが彼懷しき塾頭に似てゐるのである。昨夜の八時から今朝の五時迄九時間の長さを、謂ふにも謂はれぬ心痛をゑて、家中を狂廻つた擧句が、哀別離苦の悲境に沈む不幸の身を、誰一人吊むでくれるものも、慰めてくれるものも無く、出すべき涙を飲むで心に獨傷むばかりであつ

たのを、常に讐敵の想ひをする警察官から、慰められやうとは想はなかつた。味方にも捨てられた重傷の身が、敵に藥を惠まれやうとは、更に夢にも知らなかつた。

感窮つて淚ぐむだ。其人の顏を見るほど、自分は警部とも檢疫掛とも想はなかつた、彼十餘年前の慇篤なる塾頭が、自分を慰める爲に、早くも來てくれたとよりは考へられなかつた。思へば其塾頭は七年前故郷の弘前に病歿して、今は此世に亡き人であるのに。

折からK氏は玄關の外に出て、檢疫掛に應接をした。此間に自分は病室へ入つて、扉を啓けながら、

「來たから、支度をしな。」

と患者に告げた。渠は言下に起上つたが、蹌踉くとなる脚を踏固めて、帶を結正した。

「此からは入らない、入らない。」

と言ふ聲が聞えると、正副二名の檢疫掛と二名の介添の巡査は、木戶から庭へ推入つて來た。警部は檢疫衣の褄を取つて、白硬布の纒脚を顯して、雨の乾かぬ飛石を傳ひながら、

「あの木戶からは釣臺が入りませんな。」

例の親しげに、相談をするやうな調子で。

自分は物の哀を知る人の言を聞くのが、此際何よりも嬉しかつた、此檢疫掛が來てから遽に心が輕くなつたやうであつた。

「如何でせう、患者は彼所まで步けますまいか。」

と警部は病室を窺ふ。患者はふら〳〵と床を出て、

「步けます、步けます。」

「危い、危い。」

と警部は戶口に立寄つて、

「草履は有りませんかな。」

と自分に訊ねる。階子の下に不用の上履が突込むであつたのを憶出したから、自分は直に其を取出して、疊の上に直した。

「病人に接近してゐたのは何方です。」

と警部は國手と自分とを眗す。

「私と書生で。」

と自分は答へた。

「貴下？　夫では門まで介抱してお伴なすつて。」

自分は患者の左側に並むで、其手を執ると、冷、冷、冷！　全く血温は無い。驚いて患者の面を視ると……自分は實に此時始めて渠の顔色を仔細に視たのである。

夜の間は光も不十分であるし、又精にも視るほどの遑は無かつたのであるが、五時ばかりの朝日の影は白々と渠の面を隈無く照した、其所を今孔の穿くほど視たのであるが、渠は八分まで死んでゐるのではあるまい

か、と心を驚かした。
蒼い、蒼い皮膚は正しく死色であつた。窅然と陷落むだ眼は光を失つて、瞳は凝つて直視してゐる。下脣の筋は蕩けて垂れてゐる。額は飛出して、顴骨は峙つて、別人のやうに鼻梁が通つて、脣は薄墨を啣むだやう。宛然老人の姿と變つて、夢の如く立つた態は、唉既に此世の物ではない！

餘の心許無さに、

「歩けるか。」

と思はず口に出した。

「大丈夫です。」

との皺嗄聲も、平生に變らぬ活氣を帶びて、渠の脣を衝いて出た。果して渠は大丈夫であつた。自分の勞り〳〵手を牽くのを捂しさうに、偬々と歩くから、自分も其に從れて、稍足を疾めると、附添ふ警部は眉を顰めて注意を與へた。

「危い、危い、徐かに。顛びでもすると大事ですよ。」

釣臺は縞硬布の被の一隅を撥ねて、梅の樹下に横はつてゐる。患者は撻と其内に身を倒した。春葉の注意か、末期の水の瓶は早くも渠の枕頭に備へてある。

藁心の括枕が添へてあるのが、如何にも痛さうに見えたから、自分は急いで病室に返して、渠の枕と搔卷を擔いで、釣臺の内へ入れた。

枕を爲替へさせて、搔卷を被せやうとすれば、

「それは要りますまい、途中は暑うございますから。なか〱暑うございますよ。」

と送院夫の一箇は言ふ。

「暑いのは構はない、風でも引くと可かぬから。」

と自分は獨合點して、被せる側から、

「然う、然う。着て行つたが可からう。」

と警部は助言した。人夫は物言ひたげの口を噤むで、澁々被を下した。渠は此儘其姿をば黑い被の下に隱して、再び顯すことはないのであらうか。此一重の縞硬布が生死の境となるであらうか。自分の膓は搔挘られるやうであつた。

「早く歸つて來いよ。」

と勵す心の中の切無さ。被の內から、

「行つて參ります。」

と渠は自若として答へた。春葉は枕頭の被の隙から面を差入れて、

「ぢや行つて來たまへ。水は此に在るよ。」

と瓶を敲けば、渠は頷いたのか、聲は無かつた。巡査の一箇は一通の書類を手にして、警部の前に一禮して、何やら質問をえた、渠は護送掛である。

「はあ、然う、それで宜い。それから是は自費療養ですから、十分取扱に注意をするやうに。可うございますか。」

「搖れぬやうにな、徐かに遣つてくれ。」

と警部は更に人夫に向つて諭告した。護送掛は劍欄を握つて門外に立つた。釣臺は徐かに揚げられた。天白く星疏に、風は梧桐を動して、鷄の聲が遠方近方に聞える時。

「誰か附添は有りませんかな。自費療養には、是非御宅から人が附かなくては可けません。」

と警部は言つた。

「看護人ですか。」

と反問すると、

「然です、看護人。」

「看護人？」

と自分の當惑するのを見て、
「看護婦を何卒。」
と國手は助言した。
「はあ、看護婦を？　それぢや宜い。病院まで何方か一寸附添つて下さい。――送込むだけです。」
重ねて警部は要求した。
「春葉！」
と頤で示せば、
「はつ。」
と言ふより早く、渠は物置へ駈込むで、隅の方から硬布の深靴を曳出して、黴の生へたまゝを慌々忙々と捻込むで、はや出て行つた釣臺を逐駈けた。

（二十九年十月）

(自序)

此篇題して青葡萄といふは、庭前に其物ありしを人の假初に味ひて、不測の病を獲しに據るなり、畢竟巻中の之を説かざるは、後編に出すべき腹案なりしを、故ありて筆を前篇に止めしが爲のみ、世に蛇足の辭あり、如此きは更に狗尾の續ぐを慙ぢざらむや、

去年事のありける其日

葡萄蔭のあるじ

八重襷

（一） 居間の上

（薔薇子（豪商の娘）
（おはす（同家召使）

は「お嬢様、私は貴方にお怨を申さなければなりませんよ。」

薔「おや、然う？」

は「おや、然うぢやございませんよ。貴方のやうな酷い御方も無いもんでございます。」

薔「おや、然う？　如何したの。」

は「可うございますよ、多度那様に有仰いまし。何ぼ私のやうな者でも、愘だとか、邪だとか、一言ぐらゐはお話をなすつて下すつたつてお宜いぢやございませんか。餘りぢやございませんか、私は悔うございますわ。」

薔「何がさ！」

は「何がさぢやございませんよ、本當に、もう！」

と蒟蒻に地震が搖つたやうに身を顫して憤れたがる。

薔「私には些も解らないよ。譯をお言ひな。」

は「言ふなと有仰つたつて、言はずに居られますものか。」

薔「だから、お言ひな。」

は「だから申しますとも。へえ、申しますとも、申す段ぢやございません。さあ、申しますよ。あれ、貴方は、もつと身を入れてお聽き遊ばせましな、丁と此方をお向きなすつて。」

薔「ぢや、さあ伺うかい。」

は「故とお膝なんぞへお手を支き遊ばさなくても宜うございますよ。人を馬鹿になさるもんぢやございません。」

薔「だつて、手の置き所が無いもの。」

は「ですから、もつと目に立たない所にお置き遊ばせましな。」

薔「ぢや、簞笥の上？」
は「存じません、私は。」
薔「そんなら袂の中？　お薩でも入れるやうだね。」
は「それがお薩なら私は左の方を頂戴致します。」
薔「何故。左の方が太つて居るかね。」
は「いゝえ、皮に黄金が附いて居りますもの。」
薔「まあ、可厭だ。」
は「常談どころぢやございません、私は申しますよ。」
と切口上に改つて、
は「お嬢樣、私は今年廿二でございます。」
薔「那樣事は知つて居るよ。」
は「而して十三の秋から此方へ御奉公に上つたのでございます、然う致しますと、十三、十四、十五、十六、十七、十八………。」

薔「十九、廿、廿一、廿二さ、知つて居るよ。」

は「まあ、お聽き遊ばせよ。足掛十年の、まあ全九年と云ふもの貴方の御側に居るのでございます。奧樣の御臨終の時にも、わざ〳〵お枕元へお召になつて、はすや、お前は能く神妙に勤めてくれた、此後とも私の亡い後は、猶氣を着けて孃の世話をして上げてくれ。其の褒美には一切嫁入の支度はして遣るから、どうか落度の無いやうに長年して、此を親元にして嫁に適かうと思へ、而して生涯出入をしろよ、と誠に身に餘つた難有いお言。でございますから、私は是でも陰日向無く、もう〳〵一生懸命に御奉公致して居る意なのでございます。でございますからお孃樣も、他人とは思はない、と過日有仰つて下さいましたでございませう。お忘れ遊ばして？」

薔「忘れはしない。」

は「お忘れ遊ばしません？　他人とは思はない、他人と思はなければ、何

とお思ひ遊ばすのでございます。」
薔「解つて居るぢやないか。」
は「然うでございませう。然う申しては失禮でございますけれど、身のやうに思ふ、と云ふ譯なんでございませう、究る所が。」
薔「何だね、生意氣な、究る所がだなんて。」
は「でも、まあ、然うでございませう。私のやうな者でも身と思つて下さいますんなら、何もお隱し遊ばさなくてもお宜いぢやございませんか。はい、私は御嫁入の支度も何も要りは致しません、那樣水臭い御主人から御嫁入の支度なんぞをして戴きたくはございませんのです、はい。蓮は恁う見えましても、慾や徳で御奉公致して居るのではございませんから、はい。」
薔薇子は一向上の空で、外の事を考へて居る樣子。
は「お孃樣！　えゝ、もう貴方は私の申すことをお聽きなさすつて下さらな

いんでございますか。」
薔「懊惱いね、私はそれ所ぢやないのだよ。」
は「はすそ存じて居ります、丁と存じて居ります。それだから貴方は水臭い、と私はお怨み申すのでございますよ。幾許貴方が有仰つて下さいませんでも、はい、私は今朝ほど旦那樣から悉皆伺ひました。お孃樣、此度はお目出度う存じます、然ぞお嬉くて在つしやいませう！」
と腭を突出して憎たらしく言ふ。
薔「何がお目出度いのだよ、失禮な。嬉い事も何もありはしないわ。」
は「嘘お吐き遊ばせ。餘りお嬉いんで蓮なんぞにお話をなさるのは惜くて在つしやるんでございませう。」
薔「何が惜いものか、欲しけりや上げても可いよ。」
は「貴方、本當に本當の事を有仰つて下さいましな。實は私は今朝ほど旦那樣から、能く貴方の御了簡を聽いて見てくれ、と仰せ付つたんでござ

いますから。旦那樣の有仰いますには、今度貴方の御縁談があつて。先方は悉〳〵だ。就いては貴方が如何思召して在つしやるか、悉云ふ談には女親が居なくては誠に都合が惡い、お前は不斷孃の事を心配してくれるから、母親に成代つて孃の胸を聽いて見てくれ、と何から何まで打明けてお話を遊ばして下すつたんでございます。それを肝心の貴方は是ばかりでもお話をなすつては下さらないんで、だから私は悔くて〳〵。」

藝「私は嬉いと思ふ事なら、そりやお前に話をするのだけれど、嬉いとも何とも思はないから、別に話も爲なかつたのだわ。」

は「これが貴方お嬉くなかつたら、女の一生に嬉い事があるもんでございますか。それぢや、貴方はお可厭なんでございますか。」

藝「あゝ、可厭だよ。」

は「ぢや、先方樣がお氣に入らないんでございますか。」

藝「考へて御覽な、氣にも何にも入りやうが無いぢやないか、見たことも

無い人を。」

は「でも、御婚禮あそばすと云ふ事はお嬉いのでございませう。」

蕾「些も嬉くはないわ。不見不識の他人の中へ入つて、艱しい機嫌を取つたり、つまらない氣兼苦勞をしなければ成らないのぢやないか。それよりは一生慫うえて娘で居て、親の傍で我儘を言つて、氣樂に暮して居る方が、幾許可いか知れはしない。私は些もお嫁なんぞに適さたくはないのだよ。」

は「私もお嫁の味は存じませんけれど、決して然云ふものぢやないさうでございますよ。其の證據には誰でも御婚禮を致すぢやございませんか。好いた人と一處になるのは、然ぞ樂みなことだらうと想ひますわ。それや貴方、お嬢樣、樂みでございますよ。好うございますよ、好いに違ございませんわ。私は好いと想ひます、そりや屹と好うございます。お嬢樣、好うございますよ。」

薔「だつて、好くにも好かないにも、未だ見たことも有りもしない人を私は可厭だわ。」

は「そりや御尤でございますけれど、若し其の御方が申分の無い好いた方なら、お可厭なことはございますまい。」

薔「それでも私は可厭だよ。」

は「まあ!!」

薔「それには譯が有るのだもの。那の犬川のお遊さんね、」

は「はい〳〵。」

薔「新田のお苗さんね、それから、横原の板子さん、此の三人はお前も知つて居る通り、兄弟同樣の中善て、甚麼事が有つても不相變一生御交際を爲やう、と終始然う言ひ暮して居たのだよ。だから、面々お嫁に歸く時も、衆へ相談をしたくらゐて、板子さんは醫學士の藪内さんへ歸く、お苗さんは物産會社の船積さん、お遊さんは陸軍中尉の鬼柴さんと、そ

れぞれ緣付いたのだけれど、それはお前、面々〱隨分選りに擇つて、此人ならばと自分に得心して、謂はゞ皆好いた處へ歸つたのだよ。然うして兄弟のやうにして居たお友達は一人殘らず緣付いて了ふのに、私獨り內に居るのは、然も〱意氣地の無いやうで、其の當座は全く好い心持はしなかつたよ。」

は「それは貴方、誰だつて好い心持は致しませんとも、然うでございますとも。」

齋「それで、衆が來ては各自にお婿さんの自慢を言つて、何したの、恁したのと睦しい話を爲るものだから、私も早くお嫁に歸きたい、と實は念つたことも、それは有るわ。」

は「ございませうともね。それにお孃樣は負ける嫌で在つしやいますから。へえ〱、それから。」

齋「然う爲ると、お前、お嫁に歸つたとなると、三人とも言合せたやうに、

誰も内へ遊びに來ておくれではないのだよ。でも私の方はね、夙ての約束通り不相變御交際をする氣で、往々皆さんの處を訪ねて上げるのだけれど、何と無く先とは樣子が變つて、浸々話も出來ないやうなの。而して遊んで居る中も、始終用有りさうに出たり入つたりして、もう擾々して些も面白くないの。それに私がお客て行つて居ると、家の内へ氣兼をゑて居るやうな風が見えるので、此方も誠に居辛いわね。何もお前、お嫁に歸つたのは厄介になつて居るのぢやなし、偶に友達が遊びに行つたつて、那樣に氣兼をすることは無いぢやないか。それが猶且何だとね、友達なんぞが遊びに行くのは、舅姑の手前へ餘り好くないのだとね。而して私の家へも遊びに來たいのだけれど、猶且那樣這樣で外へも思ふやうには出られないのださうだつてね。まあ、何と云ふ情無い事だらう！私はそれだけでもお嫁になんぞ歸くことは可厭になつて了つたわ。

謂ふに謂れない那樣やうな苦勞をする所爲か、三人が三人とも皆面窶が

志てね、其中でもお苗さんね、那麼に大々と太り切つて居た人が、それは痩せて、半分ばかりに成つて了つたの、わづか、お前、半年ほどの内に。」

は「へえゝ。まあ、お傷いぢやございませんか。然う致しますと、此の歳晩には全で御體は消失つてお了ひなさるのでございますね。」

蕎「まさか、お前。それから私は如何なすつたのと訊ねたらね、それは苦勞も辛い思もするけれど、唯それだけなら這麼にも痩せることは無いのだけれど、其の譯は餘りお可羞くてお話が出來ないつて、なか〳〵お言ひでないの。」

は「如何でせう、まあ、可厭な方！　彼の方は一躰然云ふ方なんでございますよ。」

蕎「那樣ことをお言ひだけれど、是は一番辛いわね。何しろ那云ふ體格だから、所好なお鮓なんぞになると、十四十五ぐらゐ譯無に上るのだもの。」

は「あら、御す文字のお話なんでございますか。」

龔「お鮓には限らないけれど、船積さんの處の食物は、それは惡いのだとね。而して其も思ふやうには食べられないのだとさ。那處はね、外と違つて、男の舅さんがお釜の下まで世話を燒いて、それこそ目の眩るほど口喧しくて、お茶を一杯飲むにも其の方に斷るのだと。然云ふ風だから御飯の時の嚴い事と謂つたら、丁と見張つて居て、お苗さんの規定と謂ふのは、朝が二膳にお晝が三膳、お夜食が二膳と、其上は甚麼事にも食べられないのだと、女の體には過ぎる〳〵と傍から言はれるので。唯まあお肚一杯に食べて居るのは船積さん一人ぐらゐのもので、他は始終足りない勝で居るから、內の恥を言ふのぢやないが、私始め家內の者の顏の色澤を御覽なさいつて、お苗さんがお言ひのだが、成程皆同じやうに變に黃色く萎びて居るの。是は全くお澤庵を多く食べる所爲だつて、お苗さんもお嫁に歸くのは辛いものだとは聞いて居たけれど、這麼にも

餒いとは想はなかつたつて、熟く後悔してお在のやうなの。而して那の元氣の話好の、能く面白いことを言つた人が、誠に陰氣になつて、口數もお利きてないから、それも聞いたらばね、猶且食の足りない所爲で、久しぶりでお目に掛つたからお話は山々あるのだけれど、何分にも息が切れて、それはお話を爲て出來ないことはないけれど、然うすると迚もお夜食までお肚が持たないから、失禮だけれど、是も朋友の誼と思つて、どうぞ容してくれとお言ひなの。

もう其を聞いて私は熟くお嫁になんぞ歸くものぢやないと念つたわ。外の苦勞なら未だ好いけれと、食物の事で苦勞するのは、吁、私は可厭可厭可厭！」

「それは貴方、いくら舅御樣が鄙吝になすつたつて、御本尊のお婿樣がお苗樣をお見染なすつて、大相な御懇望で被入つたのでございますから、陰になり日向になつて、お苗樣の食べたいと有仰る物は十分に食べさし

て上げるに差違ございませんよ。それが貴方、人情でございますもの。」
蕾「其が然うでないのだから。那の船積さんが亦阿父さんに負けず劣らずの鄙吝で、其が爲に今紛紜が起つて居るのだとさ。實にお苗さんは因果なのね。彼處は阿母さんが違ふので、妬くのだと。」
は「氣障だ、耐りませんね！　阿父さんには喉口を干され、阿母さんには妬れ、而して旦那樣が鄙吝で如何なすつたのでございます。」
蕾「本當に話にも何もなりはしない。恁うだとさ、家內が殖ゑると物が要るから、俺は子供は嫌だ、決して子供を拵へることは成らない、と然う言ふのだと。」
は「何方がでございます。」
蕾「船積さんがさ。」
は「え丶、まあ！　いつそお苗樣もう／＼品胎でもお產み遊ばして遣ればお宜いのに。」

蕾「所がお前、出來たのだつて。」
は「好い氣味だ！　品胎でございますか。」
蕾「まさか品胎ぢやないけれども、お腹の樣子では孖ぢやなからうかと云ふの。」
は「御丁寧に、まあ。」
蕾「それだものだから、阿母さんは猶妬く、船積さんは機嫌を惡くする、惡阻でもつて物が食べられないので、喜ぶのは阿父さんばかり、お苗さんは大きなお腹を抱へて泣いてばつかりお在だとさ。」
は「まあ、お可愛さうに。可厭でございますね。」
蕾「然して紛紜の起つて居るのはお苗さんの處ばかりぢやないのだよ。中善の三人が三人ながら、お嫁に歸つて好い事は無いのだもの。それから板子さんさ、那の人は藪內さんが好男子だものだから、大變な御自慢だつたけれど、男振が好いだけに浮氣でもつて、何でも下谷とか新橋とか

の藝者に、疾から夫婦約束をした者が二人あつて、女義太夫を情婦とかに持つて居て、麻布邊の華族の御隱居の男妾をして、其上に博士とかの獨逸人のお孃さんを瞞して居て、一躰病家の奧さんやお孃さんを引掛けるのがお得意なのだとね。だから板子さんは些の看板で、それに那云ふ氣の善い人だものだから、書生や婢にまで馬鹿にされて、實に行つて見て居るとお氣毒のやうだわ。」

は「まあ、馬鹿々々しい。可厭でございますね。」

薔「酷い目に遭つて居るのはお遊さんよ。那の人は武張つたことが所好で、敷島の大和心を人問はゞ旭に匂ふ山櫻花、といふ歌を直に言ふのが癖で、何でも軍人の處へ適くのだ、と不斷から然う言つてお在の望どほり、鬼柴さんへ片附いた時にも、旭に山櫻の裾模樣で御婚禮をしたくらゐのだけれど、御亭主は可恐い飲抜で、始終軍人仲間を大勢引張つて來てはお酒が始るので、月給は皆飲んで了つて、それで足りなくて、お遊さんの

持つてお在の着物は殘らず質とかに入れて、而してお酒の氣が無いと機嫌が惡くて、醉ふと亂暴をして、頭を打つのが癖なのだとさ。だものだから、お遊さんは近頃腦病が出て、何日と云ふ事は無しに怏々として居るぢやないか。」

は「まあ、氣の利かない。可厭でございますね。」

蓮「那樣思をしても、女は一旦片附いたからには、何處までも辛抱をしなければならないわね。それは緣を切つて切れないことは無いけれども、二度目となれば體に玷が付くのだから、女は本當に滿らないよ、それを考へたり、三人の身の上の事を思ふと、私はもう〳〵お嫁なんぞには歸くまいと念つて、未だに恁うして居るのは、甚麼に仕合なのだか知れはしないよ。

此間も板子さんから長い手紙を下すつてね、貴方ばかりは決してお嫁に歸かうとは爲さるなつて、懇々も意見をして來たくらゐだから、私は本

當に考へて居るわね。」

は「へえ、若しお孃樣がお嫁にお出あそばして、那樣事でもございましたら、私は如何致しませう、私はもう〳〵死んで了ひますでございます、其事を書置して。」

蕎「私は又其の代筆は御免だよ。」

は「書置を他に賴むなんて法はございませんから、其時は自筆で認めます。」

蕎「然ぞ見事だらうね。」

は「可うございますよ、お孃樣。」

蕎「お前だつて那樣話を聞けば可厭になるだらう。選りに擇つて、是ならば確と思つて歸つた先でさへ、三人のやうな事があるのだもの、まして今度の緣談と云ふのは、阿父樣が獨で承知をおて極めてお了ひなすつたのだもの、私は可厭だわ。生意氣な事を言ふのぢやないけれど、歸く當人に何の話も爲さらずに、幾許親だつて餘り酷いわ。私は全で知りもお

ないのに、那の人なら申分無いの、第一俺が惚れて了つたのと、那麽に有仰るくらゐなら、阿父樣が御自分でお嫁に御出なさるが可いわね。」

は「えゝ〳〵、本に然うでございますとも。いつそ然う申上げませうか。」

薔「あら、馬鹿なことをお言ひでないよ。」

は「けれども、那の艱しい旦那樣は何處かへお嫁に歸つてお了ひなすつて、譯の解つた若旦那樣とお孃樣と御夫婦にお成り遊ばして、毎日面白い事を為て暢氣に暮しましたら、甚麽に好いでございませう。」

薔「氣樂なことを言つて居るよ。噫、如何かして此の緣談は斷つて了ひたいのだけれど、困るね、阿父樣は那の御氣性だから、滅多な事を云ふと甚麽に譴られるか知れないし、毎なら阿兄樣に然う言へば、話對手になつておくれなのだけれど、今度の事は阿兄樣も敵組になつてお在なのだから、蓮や、お前でも可いから味方にと思つたけれど、お前ぢや為樣が無いものねえ。」

は「それは、お孃樣、誰に有仰つて在つしやるのでございます。」
薔「お前さ。」
は「お前とは私のことでございますか。」
薔「當然さ。」
は「當然なもんでございますか！　恁う見えても猫には勝てございますよ。」
薔「それぢや今晩試に臺所の戶棚の中に寐かさうよ。」
は「えゝ、何とでも有仰いましとも。私はね、貴方がお一人で然ぞお困り遊ばして在つしやいませうと存じて、及ばずながらお力にもならう、と然う念つて居りましたのでございますけれど、（お前ぢや爲樣が無いっ。）能くも那樣ことを有仰いましたね。覺えて在つしやいましよ。貴方の味方に志て戴かなくても、はい、蓮は些も困りは致しませんの。旦那樣の方へお附き申志ても、散々貴方を困らして上げますから、まあ其の意で在つしやいまし。」

藚「知らないよ。私は私の考量があるから、可いからお前なんぞは彼地へ行つておくれ。」

は「はい〳〵、私なんぞは彼地へ參ります。彼地へ參つて旦那樣へ然う申上げませうでございます、お孃樣の御了簡を伺ひました所が、內の阿父さまのやうな譯の解らない人の見立てたお婿樣なら、どうで私の氣に入る筈は無いのだから、それを切て歸けと言ふんなら、身を投げると言つて嚇す意だ。而して、御自分のお婿樣なら手拵に爲るから他は賴まない。丁度今一人拵へ最中のが有る、と有仰つて威張つてお在でございますから、隨分御用心をあそばしまし、と何でも旦那樣の御立腹あそばすやうな事を精々言告けて上げますから、然やうならば御機嫌よろしう。」

藚「お待ちよ、お待ちってば。」

は「もう今ピイと鳴つて了ひました。此次は三時四十分。」

藚「後生だから待つておくれ。待たないと凍瘡の處を掐るよ。」

は「あゝ、待ちます。」

と唐突にべたりと坐つて、

は「はい、待ちましたが如何致しました。」

薔「ほゝほゝ、お色の白いことね。」

と食み出してゐるお蓮の膝頭をポンと拊く。

居間の下

むすめ　薔薇子
召使　おはす
父　壽右衛門

は「貴方、此の膝とも談合でございますよ。」

薔「それぢや何とかお前、智慧が有るかい。」

は「智慧と申して別に持合もございませんけれど、一躰まあお嬢様の思召は何云ふんでございます。先様が好いた御方なら御縁組を遊ばしますんでございませう。」

薔「だつて、お前、好くにも好かないにも…………。」

は「いゝえ、貴方、もしも好いた御方ならば、と申すんでございますよ。」

薔「もしも好いた方なら、それは又其時さ。」

は「お宜いのでございませう？」

薔「まあ可いとして置くわ。」

は「猶且御婚禮は遊ばしたいんでございませう？」
蕾「那樣こと遊ばしたくはないわ。」
は「でもお嬉いんでございませう？」
蕾「知らないよ、もう。」
は「それでも然云ふ思召ならば、好い事がございます。那して旦樣樣が有仰るのを、貴方が單だ可厭だでは濟みません、それは濟みません。でございますから、左も右も御本人の御樣子を見屆けた上に爲たい、と恁う有仰つて御覽あそばせな。」
蕾「然う言つて見て、可けなかつたら？」
は「可けませんでしたら……。」
蕾「可けなかつたら？」
は「些は貴方もお考へあそばせな、御自分の事ぢやございませんか。」
蕾「おや、可けなかつたら……。」

は「可けませんでしたら？」

薔「仍舊續だからお前がお考へよ。」

は「然うでございますか。然う致しますと……。」

此時奧の方にて父壽右衛門の咳拂聞ゆる。

薔「大變だよ！　さあ、阿父さまが御出だから早く爲ておくれよ。」

は「はい〳〵然う致しますと……。」

薔「可けないね、早く〳〵！」

は「はい〳〵。然う致しますと……。」

薔「何時まで（然う致して）居るのだらう。もう可けない、可けない。」

は「あゝ、後生ですから最少し!!　あゝ、何とか、何とか、何とか！」

薔薇子は慌てゝ起ち行き、入口の紙門を啓かぬやうに押へて、

薔「さあ、恁うして居るから今の内に。」

は「あゝ、成程、確り押へて居て下さいましよ。えゝと、何とか、何とか、

何とか。」
とおはすは轉打ち廻つて智恵を搾る。折から居間の外には壽右衛門が紙門に手を掛けて、引けども引けども啓かねば、
壽「これ、薔薇子や。薔薇子は居ないのか。」
手を放さぬやうに、とおはすは目顔で知らせる。薔薇子は早く考へぬか、と首で指圖をあつゝ、段々力弱りて紙門の開きかゝるを見るより、おはすも助勢と起ち行く隙に、壽右衛門は狹き口よりするりと入る。二人は其とも知らず跡を押へて一生懸命の所を、
壽「何を爲るのじや！」
薔「はい、あの……唯今……あの……一寸……あの……ねえ、蓮や。」
は「然うでございますとも。」
壽「何だ、何が一寸だか、何が然うなのだか全然解らんぢやないか。何爲呼ぶのに返事をせんのだ。」

薔「幾度もはい〳〵と申したのですけれど、ねえ、蓮や。」
は「然うでございますとも。此の紙門が餘り堅いもんでございますから、ちよいと外へお開え遊ばさないんでございます。」
薔「ねえ、蓮や、ですから二人で啓けて上げたので。」
は「ねえ、お孃様、然うでございますとも。」
薔「ねえ、蓮や。」
壽右衞門は片手に持てる書狀を一寸見遣りて、
薔「時に、はすや、孃の了簡は如何じやな。恁うして今春山からの手紙で、四五日内には優男さんが用事を兼ねて此地へ出向いて來られるのだから、十日や二週間は内に逗留えてござる都合になつたのじや。」
は「へえ、あの、それではお婿様が此方へ…………。」
と當惑の躰にて薔薇子と顏を見合せる。
は「然やう致しますと、其晩に御婚禮を遊ばしますでございますか。」

薔薇子は要らざる事を言ふなとの意にておはすの袖を引く。
薔「それでは何かの、孃は早く婚禮がしたいと云ふのかの。」
薔「いゝえ、決して那樣事はございません。」
薔「ふむ。はすや、お前、孃の了簡を聽いてくれたか、而して鹽梅は如何じやの。」
は「はい〳〵。それに就きまして色々とお話が込入りまして、唯今御相談最中なんでございました、誠に好い智惠が出ませんもんで。」
薔「何、好い智惠が出ない？　可笑なことを言ふのう。私は何もお前に孃の相談對手になれと言付けはせんがな。」
は「いゝえ、何でございます、お孃さまが相談對手になつてくれと………。」
薔「私だつて言付けはしないよ、お前でも相談對手になれば可いのだけれど、お前ぢや爲樣が無いと言つたばかりなのだわ。」
は「貴方、お孃さま、那樣事を有仰いますね。貴方が然云ふお心なら私も

貴方の有仰つた事を皆申上げて了ひますから、あの、旦那さま、箇樣なんでございます。」

おはすは喧嘩面になつて壽右衞門の方へ屹と向直る、其後から薔薇子はおはすの腋の下へ手を入れて力まかせに掐る。

は「あ、痛、た、た、た！」

壽「如何した、え、これ、如何した！」

薔「あら、はすや、お前如何おしだえ。」

と然も狼狽へながら取附くやうに見せて、賴むから言つてくれるなと呬く。おはすは顰み面をして頷きながら腋の下を押へて啐と息を吐く。

壽「如何した、腹でも急に痛み出したのかの。」

は「いゝえ、もう少し上の方なんで。」

壽「はあ、胸が痛むのじやな。」

は「もう少し横の方なんで。」

薔薇子は又其の袖を引く。

薔「はあ、乳の邊? 乳は女の急所とある。」

は「もう少し横なんでございます。」

薔「はての、然うすると肋の三枚目邊じや。」

は「まあ其の邊なんてございます。」

薔「妙な所が痛んだものぢやないか。」

は「まことに妙な所が急に痛みましたんで吃驚いたしました。」

「然し、もう快いか。」

は「はい、大分痛は薄ぎました。お孃さま。」

と如何にも力無げに呼ぶ。

薔「あいよ。」

は「私は痛うございます。」

薔「私は察してゐるよ、けれども病氣には勝てないから我慢をおしよ。」

は「私は悔うございます。何ぼ病氣だつて餘り手前勝手と云つたら有りやしません。」

薔「それはお前、病氣だつて屹度後悔をしてゐるよ。」

壽「何を行らん事を言つて居る！」

壽右衛門は更に語を改めて、

壽「さあ、四五日内には優男さんが來なさると云ふのじや、薔薇子お前の了簡は如何じやな。」

は「はい、唯今お嬢さまの思召を伺ひましたでございますけれど、それは、彼方から御出なんぞは御座いません意の思召なんでございますから、然やうな譯でございますと、又少々お嬢さまの思召もお變り遊ばしませうでございますから、もう一度新規蒔直しと致しまして、晩ほどに私から申上げますでございます、ねえ、お嬢さま。」

壽「薔薇子は何を指を折つて勘定して居るのじや。あゝ、何か、四五日内

と云ふので、うふ、ふ、ふ、ふ、ふ、おう、然うか。」
と獨合點して喜笑をすれば、薔薇子は怪訝顔。
薔「いゝえ。」
喜「いゝえじや？　それぢや何の勘定をしたのじや。」
薔「これから晩まで何時間有るかと思ひまして。」
喜「何の事じやい。然し、考量の、相談のと、暗々言ふのも今の內の事で、まあ、四五日經つて見なさい、一も二もありはせぬわい。何でも可いから、其の本人に逢つて見るのじや、のう。」
は「旦那さまは然やう有仰いますけれど、是も所好々々でございますから、若もお孃さまのお氣に召しませんでございましたら、……。」
喜「ほゝう、孃の氣に入らなかつたら？　私の一昨日の接木が枯れやうて、のう。」
は「あの、旦那さまの御自慢の接木が！　如何いたして枯れますでござい

なす。」

藤「ほゝう、私の此の光つた頭顱に黒い毛が繚々と生へやうて、のう。」

は「まあ〳〵！　然う致しますと、私の此の揉上も最少し出來やうてございませうか。」

藤「揉上は措置いて、米が一斗の臺になるわの。子を思はぬ親は無い、可愛い娘に見立てた婿に卒が有つて成るものかな。此の親仁だとて生から這麼に禿げて居たのではない、小言は小言、粋は粋、私と掛けて日蓮さまの書判と解くのじや。」

は「其の心は？」

藤「難しいやうでも解つて居る。」

藤「では阿父さま、私が一つ掛けませう。今度の縁談と掛けて、（タバ）と解きますの。」

藤「鱈か。」

壽「いゝえ、(タバ)。」
壽「薪なんぞの束か。」
壽「いゝえ、唯假名て(タバ)。」
壽「唯(タバ)とは何の事じやな。」
壽「それが謎なのですもの。」
壽「はての、どうも解らん、お前に上げた。」
壽「まあ、晩まで阿父さまに預けました。」
壽「よし、預つた。お前方にも晩まで預けたぞ。」
は「畏りました。」
壽右衛門は出て行く。
は「お孃さま、今の謎は何と解くんでございます。」
壽「那かい。」　と頻に笑ふ。
壽「(タバ)だから、ねえ、煙草のタバさ。其の心は、今度の縁談だから、

コ（粉、子）は可厭だと云ふのさ。巧いだらう。」

は「まあ、可恐い牽強ぢやございませんか。」

折から三時の時計が鳴る。

蓉「おや、もう三時だよ。」

は「さあ〳〵。」

と卒に襟を掻合せて居住を直す。

壽右衛門
ばら子
おはす

（二） その晩

娘主從の入來れるも知らず、壽右衛門は一心不亂に考へ居る。

は「旦那さま、あの、旦那さま。」

薔「もし、阿父さま。」

それでも聞付けぬので、二人一處に大く呼ぶ。

壽「おゝ、吃驚した。」

薔「何を考へてお在なさるの。」

壽「いや、あの、（タバ）と掛けられたのが、如何しても解けんのじや。」

は「おや、然やうでございますか。あの（タバ）は解けませんでございますから、いつそ切つて了はうと申す譯なので………。」

壽「何！　何じやと。」

は「で御座いますから、其に就きましてお嬢さまから一件の御願がござい
ますさうで。さあ貴方、有仰いましな。」
壽「うむ、而して其の願と云ふのは？」
は「何でも、其の御願が愜ひさへ致せば、お嬢さまも旦那さまの仰せ通に
お成り遊ばすんださうでございます。」
壽「それは妙じやて。私が其の願を肯けば、薔薇子も私の言ふ事を肯く、
可からう。」
は「さあ、可からうと有仰いますよ。」
薔「阿父さま、あの、今度の事でございますね、阿父さまが善いとお考へ
なすつてお極めなすつたのですから、決して氣に入らないの、何のと云
ふ譯ではないのですけれど、未だ一遍もお目に掛つたことは無し、何云
ふ御氣風の方だか解らないのでは、私氣が濟みませんから、今度お出を
幸に、何云ふ御様子の方だか、又甚麼御氣風だか、其が能く知りたいの

てございます。」

壽「それは譯の無い事じや。半月も逗留まてござるのじやから、二人まて能く視るが可いのう。」

薔「然うですけれど、唯表面から見たばかりで解るものではありませんから、本當の處が見たいのでございます。」

壽「それは何處でも見たい處を見るが可いのう。」

薔「御樣子だけなら直に知れますけれど、私はお肚の中まで見たいのでございます。」

壽「それも見るが可いのう。」

薔「ですけれども、一寸は見えません。」

壽「見えまい！　おゝ、是は見えまいとも。」

薔「それが見たいので。」

壽「それは見たからうとも。」

薔「それを見るには如何も尋常では見られません。」

壽「然うとも。目で見るものなら、目鏡もある、顯微鏡もある、其外又色色と器械なども有らうけれど、人の腹中を見やうと云ふには眼力だ。」

は「へえゝ、ガンリキと云ふ那樣、まあ、器械がございますんで御座いますか。」

壽「怳けたことを言ふぢやない。眼力と云ふのは眼の力よ。」

は「へえゝ、眼には力がございますんで。」

とおはすは頻に目を白黑さして力を入れて見る。

薔「私なぞには迚も其の眼力は有りませんから。」

は「然うでございますとも。力を入れるほど見えは致しません。」

薔「然うでなしに見たいと思ひまして…………。」

壽「そりや見たからうが、外に見やうも無いからのう。」

薔「有るのでございます。」

壽「有るえ？　是は聽きものじや。眼力でなしに腹の中を見る、手放で鼻涕を去むより艱しからう。」

薔「それが些も艱しくはないのですから。」

壽「器用な事じやのう。うむ、如何する。」

は「旦那さま、そこがお孃さまの御願なんでございます。」

壽「大方然うぢやらうよ。」

薔「いづれ京都から入つしやると、宅にお泊りなすつてお在なのですね。然うすれば、お客に來てお在なのですね。」

壽「一寸來るのは唯だ客で、泊つて居るから泊客かの。」

薔「何方にしてもお客に來てお在なれば、御遠慮を爲さいませう。」

壽「餘り遠慮を爲れるのも困るがのう。」

薔「又始めてお目に掛るのですから、私の前では取繕つてお在だらうと思ひます。」

壽「そりや若い同士の事じやから、又取繕ふも可いさ。客に來て居ながら遠慮の羽目を外して、内のやうに我儘を爲たり、始めて會ふ人の娘を藝者か何ぞではあるまいし、突如に嫐けたりする奴が有つて耐るものか。」

は「其處々々、其處でございますよ。」

嘗「さあ、其の我儘を爲たり、常談も言つたり爲る心易立の中に、其人の生地は見えるのですわ。」

壽「大きに、のう。」

嘗「それですから、私は可成く其の謹愼の無い處が見たいと思ひまして。」

壽「これ〳〵、何を言ふ！　未だ祝言もせん内から、我儘を爲たり、嫐け散したり、那樣事を親たる者が許さうと思ふのか。馬鹿も大概に爲なさい！」

は「あれ、まあ旦那さま、未だ先が有るんでございますよ。」

壽「先が有るのは知つて居る。」

壽「それならば皆お聽きなすつて、而して譴るならお譴りなさいましな。」
壽「先は先として、今迄の分を一寸譴つて置いたのじや。」
は「旦那さま、是からが本當に聞物なんでございます。私はもうお孃樣のお智慧には驚いて了ひまして御座います。本當に怖いやうなお智慧が出るんでございますもの。」
壽「おゝ、然うかの。それは何と謂つても女子中學校を卒業して、漢文は讀む、英語は出來る、國學の大和詞が行く、數學、習字、歷史に地理の、和歌、作文、裁縫に料理、又は女禮式の…………。」
と圖に乘つて指を折る。
は「お手紙、新聞、小說本、お琴にお茶の湯、編物がお上手で、お髮が結へて、西洋料理が召上れて、御兄弟中が善くて、お氣前が大くて、…………。」
と同じやうに指を折る。
壽「まだ書も一寸書いた。」

は「まだ書も一寸お書き遊ばして、あゝ、未だ御座いますとも、海水浴で游泳を遊ばす。それから、歌骨牌が御名人で、目敏くて在しつて、あゝ、最一つ有ると丁度十五になるんでございますけれども。」

舊「はすや、一寸此の處を捻いておくれな、私は肩が凝つて了つたよ。」

壽「さあ、其の先が聞きたいのう。」

舊「それで、謹慎の無い處を見るには、迚も面と向つて居ては可けませんから、「私といふ者は何處までも陰になつて居て、而して篤りと御樣子を見屆けたいと思ひまして。」

壽「宛で怪物を退治るやうな始末じやのう。然し、先方も故々來るのじやから、肝心のお前が陰になつて居られては、さつぱり趣意が立たん。又私もそれでは先方へ對して相濟まん。第一大事の花婿を、事も有らうに、怪物扱ひに爲ると云ふのが心得違じや。」

は「あれ、旦那さま、未だ先が有るんでございますのに。」

蕭「よく先が有るのう、田舎道を開くやうに。」
は「旦那さまは又汽車でお出なさいますやうに、行過ぎてばかり在つしやるんでございますもの。」
蕭「おゝ、それぢや停車場で下りて開くか。そこで……。」
蕭「はすと私と入替りましてね、はすを私の擬にして、私が蓮の姿になつて居りましたら、奉公人の前では多少か御遠慮もなさるまいでせうから、包み隠さない生地の處も解らうと思ひます。そこを私が蓮に成つて居て見たいのでございます。」
は「私は又私でもつて端然とお孃さまに成濟して居りまして、お婿樣の異に氣取つて、お品の良いとばかり言つて在つしやる處を見て置いて、一一お孃さまにお話を致します。お孃さまはお孃さまで御自分にお見屆け遊ばした所と、私の申上げる所とを照合せて御覧になりますから、それ、鐵札か、金札か。それとも贋札か。馬鹿か、利根か。大丈夫か、薄鈍か。

正直か、狡猾か。浮氣者か、賢人か。刻薄か、實意者か。」

薔「聒しい！」

は「はい。」

薔「然うすると、何じやな、お前と蓮とが互に姿を易へて、お前が蓮になつてお前の召使、蓮がお前になつてお前の……。」

薔「何だか紛糾つて解らなく成つて了ひました。」

薔「何有、能く解つて居る。恁うじや、お前が蓮になつて、蓮の召使、のう。蓮がお前になつて、蓮の主人か。」

薔「然うですか知らん。」

薔「然うですか知らんって、自分が言出して置きながら。」

薔「はすや、おまい、今のが解つたかい。」

は「解りませんけれども、本來解り切つて居るぢやございませんか。貴方が私にお成りあそばして、私が貴方にお成りあそばす。」

壽「然うよ。私の言ふのも然うじや。先づお前が孃になるのぢやらう。」
は「然やうでございます。」
壽「而して孃の主人になるのぢやらう。」
は「いゝえ。」
壽「何いゝえな事があるものか。」
は「・・・・いゝえで御座いますとも。お孃さまに御主人はございませんです。私がお孃さまに成りますれば、猶且はすの主人でございます。」
壽「えゝ、解らん奴じや。其の蓮は孃、孃は主人ではないか。」
は「で御座いますから、孃は主人——あれ御免遊ばしまし——お孃さまは御主人、其の御主人に主人はございません。」
壽「知れた事じや。ぢやから私が言ふのじや。ま、能く聽けよ、落付いて。お前が孃に成らうと云ふのぢやらう。」
は「而してお孃さまが私にお成り遊ばすんで御座います。」

壽「まゝ、默つて聽きな。お前が孃に成つて………。」

は「もう解つて居りますて御座います。」

壽「まゝ、默つて聽きな。お前が孃に成つて、孃がお前に成ると爲れば、お前が孃の主人に成つて、………。」

は「それ〳〵〳〵！」

とおはすが耐りかねて悍り出せば、壽右衞門も差理無理、

壽「まゝ、默つて聽きなと言ふに。」

は「いゝえ、此で默つて居りましては大變でございます。私はお孃さまに成りますたで、お孃さまの御主人なんぞに成るんぢやございません。」

壽「知れた事じや！　主人といふのは孃の事、」

は「召使と申すのは私の事。」

壽「孃といふのは薔薇子の事、」

は「私と申すのは蓮の事でございます。」

薔「何だね、お前は默つてお在よ。」
薔「然うとも、默つて居るが可い。」
薔「阿父さまも（お前が孃に成つて、孃がお前に成る）と其迄にしてお措きなされば可いのに、色々後をお附けなさるものだから、つい解らなく成つて了ふのですよ。」
薔「解らなく成る事があるものか。まあ、一寸聴きな。のう、お前が孃になつて……。」
薔「私は始から孃ですわ。」
は「えへん。」　と大な咳拂を爲る。
薔「おゝ、然うじや。お前は孃、那の難理會的が蓮じや。」
は「えへんつ。」
薔「えゝ、彼は難理會的の爲樣が無してすから、言つても無駄です。私には能く解つて居ますから、彼に言聞せるのはお止なすつて、是非然云ふ

事にして先の方の御樣子が見たいのですが、私も阿父さまの言ふ事を聽きますから　阿父さまも此の御願を聽いて下さいましな。」

壽「それぢや何か、其の願を聽けば、私の言にも背かんと云ふのじやな。で、若も優雄さんがお前の氣に入らんかつたら如何する。」

壽「然したら阿父さまの其の光つた頭に黑い毛が續々と生へるさうてはございませんか。」

壽「うゝ。」　と塞る。おはすは雀躍をして、

は「えへん〳〵。げっ〳〵げえい。」

壽「あれ、お前如何したのだね。」

は「唯今溜飲が下るんでございます。貴方も一寸お下げ遊ばせよ。よう、げえいと有仰いよう。」

此間壽右衞門は考へ居たりしが、

「然し、然うは謂ふものゝ、是も人々の所好々々でのう、」

は「おやおや、接木が枯れさうでございますよ。」
壽右衛門は首を低れて益々考込む。
おはすは吃々笑ひながら小聲にて、
は「一寸、お孃さま、那の滑々したお頭に斷然黑いお髮が生るんださうで御座いますから、其時は是非お手拍子御喝采を願ひます。」
壽「何だね、那樣事を！」
壽「はて、考へものじやて。那が恁で、是が恁と、因で此方が恁なれば、彼方が那か。那して恁して、恁なれば那として、那の恁の、恁の那か。はて、な。どうも是は私の一存にも極めかねる、いづれ延太郎とも後に相談の上挨拶を爲るとせう。もう彼も歸つて來さうなものじやが、のう。」

（三）　内談

父　壽右衛門
息子　延太郎

壽右衛門京都よりの件の書狀を下に置きて、それと睨め競の思案投首、餘程持扱ひたる躰。延太郎入來る。

延「唯今歸りました。」

壽「おゝ、延太郎か、待つて居たのじや。早速談が有るのじやが、まあ之から見てくれ。」

と展げたる書面のまゝ推遣る。

延「へえ、京都から。何ぞ事が出來ましたか。」

と取上げて口の中にて讀む。

延「やあ、面白い。お茶番を一幕出さうと云ふのですな。是は御趣向だ。」

壽「何を言つて居るのじや、能く目を開いて視るが可い。何處に茶番をす

ると書いてある。眞面目で然う言つて來て居るのではないか。」

延「先方が之を眞面目だからお茶番だと謂ふのでさ。然し是は可いぢやありませんか。本人同士ではお互に取繕つて居て、本當の處が知れないから、附いて來る書生と入替りの、花作箕作で入り込まうと謂ふんですな。」

書「何の事たか、お前の言ふことは誠に解らんのう。」

延「それぢや平假名入ルビ付で言へば……。」

書「何じやと。」

延「通俗に言へば、書生を自分に仕立て、自分が書生の姿になつて、薔薇子の樣子を見やうと謂ふんで。其の魂膽を此方が知らずでは、間違なんぞが有つてはならないと謂ふんで、阿父さんから恁うして耳打をして寄越した譯なんですな。貴方は、それ、優雄さんと謂ふのを識つてお在だから可いけれど、此の手紙でも無かつた日には、私なんぞの狼狽方は有りませんな。」

壽「本人には決して言つてくれるなと有てあるのう。」

延「それは知れてゐまさ。之を薔薇子が心得て居た日には、龍宮の紛失物で玉無しです。」

壽「そりや成程他は然うぢやらうが、其を知らせずに措くと云ふのも如何か、のう。」

延「いゝえ、放つて置くが可うございます。而して此方だつて目が有るんですから、蒟蒻か比目魚か、箸を着けるまでもありはありません。其が又主と家來と見分の付かないやうな代物なら、對手に爲るがものは無い、放棄して了ふんですな。」

壽「それぢや、まあ言はん事にしても、此に又一つ面倒な事が起つたのじやて。今の通り他からも然う言つてくれば、薔薇子の方からも丁度同じ事を言出しての、ま、不思議も不思議よ。」

延「ほう、薔薇子も同じ事を？　ふう、それぢや猶且身替一件を？」

蕭「然うよ。」

延「へえゝ。ぢや、此方は蓮が換玉ですな。」

蕭「然うよ。」

延「そりや面白い！　遣るべしですな。」

蕭「何云ふものかのう、お前は然う前後の考量も無く、左右飛返りたがつて、他の相談を受けたら、少しは考へてから挨拶をするものじや。何でも變つた事と云ふと、首から乘氣になつて噪ぐ、惡い癖じや。然云ふのを、お祭了簡と言つて、迚も大な仕事を爲得る器量ではないわ。吁、可惜しい事じや。」

と苦り切つて横を向く。

延「相談なら相談、意見なら意見と、何方かに極めて下さいな、其なら然うで此方にも聞き樣か有るんですから。大躰意見をなさるやうな無能なら……………始から相談をなさらないが可し、又相談をなさる位可頼い者なら、

何も意見をなさるには當らないと謂つて見たやうなものです。」
壽「其の不減口が第一惡い。」
延「どうせ相談が格に無くて、意見に振替られるやうな野郎ですもの、そこら中皆惡いんでせう。當年二十五歳にも相成つて未だ嫁さへ貰へない意氣地無しの忰でございます。」
壽「誰が嫁を貰つて遣らんと言つた。薔薇子を先に片附けて了はんければ、何の彼のと面倒じやから早く談を纏めやうと思やこそ、係うして心配を爲りや、相談も爲るのじやがな。」
延「其の相談も爲る迄は至極解つて居ますが、後が打壞でした。」
壽「これよ、談が談じやに打壞など〻いふ詞は嫌ふが可い。」
延「嫌ふが可いなんぞは、猶且辻占が惡うございます。」
壽「いや、それで憶出したが、實は嫌ふが可いじやて。若し書生が化けて居るのとも知らず、其が氣に入られては大事じやと思つて、他の魂膽を

薔薇子に知られて置かずば成るまいかとも考へるのじやが、然うかと云つて、此方は此方で同じやうな眞似をして居て見ると、他が其を知らずでは、甚麼間違が出來やうも知れずの、さあ、して見れば、薔薇子に然云ふ事は成らんと止めたものか、如何したものぢやらう、のう。」

延「他も然うして仕組んで來るのだから、此方も仕組せるが可いぢやありませんか。然して阿父さんと私とが嚴正中立といふ奴を守つて口を拭いて居れば、他は自分ばかり仕組んだ氣で居る、此方は又此方ばかりの意か何かて、總て暗闘搜合の所見、こいつは屹度面白い！」

薔「それが惡いと言ふのじや。何も面白盡の話ぢやない。」

延「ま、まあお聽きなさい。意見は意見、相談は相談。それで、双方から十分に見合ふ。善し、こゝらが水の入れ處と見たら、私達が中に入つて、悉皆狂言の筋を聽せて、纏るものなら纏める………。」

薔「纏らんものなら？」

延「纏めないだけの話。」
蕎「それぢや何にも成らんがな。」
延「そこが縁でさ。」
蕎「いや、險難な縁じや。ま、ま那樣事は萬々一にも有るまいが、何ぞろ、此方は其の書生を本人と思込んで居るのじやて、それで可いとなつたら其時は如何したものぢやらう。」
延「と來たら私にお委せなさい。ねえ、阿父さん火事の手傳でせう、西洋料理の宴會又は田舍客の案內ですかね、別して女の子に關する一切の紛擾と來たら、阿父さんなんぞの蹣跚と出る幕ぢやありません。心得たものです、此の延太郎が心得て居ます。御安心なさい、湯屋の煙です。」
蕎「おゝ、それぢや萬々一にも那樣間違が有つたら、お前が屹度引承けるの？　大丈夫かの、可いかの。」
延「大丈夫！　宜しい！　憚りながら御安心なさい。」

壽「どうか知らんて、從來お前には度々引承けられて、懲りて居るから、のう。」
延「いゝえ、然う〳〵爲損らうと謂つたつて爲損れるものでもありませんから、今度あたりは如何にか成りますよ、彼の天運と云ふ奴は專ら循環するんですからな。」
壽「それなら何もお前に賴むことは無い。」
延「そこを賴むのが依樣親子の情で、是非も無い處なのでせう。」
壽「全く是非も無いのじや。お前のやうな者に賴みたくはないけれど……。
延「難有う存じます。もう外に御用は御座いませんか。」
壽「未だ有るのは、左も右も蓮を孃に仕立てゝあるで、若も甚麼か拍子で彼が他の氣に入らんとも限るまい？」
延「御安心なさい。阿古屋ではないが雪と墨です。兄の慾目で言ふぢやありませんが、先づ其處へ出した所で骨格から違ひます。暗黑て撫てゝ見

たつて判る話で、撫でるのが面倒なら一寸嗅いだつて、片方は何と無く汗臭い。又其の見分の付かないやうな唐邊僕なら、彼を與れて遣るのは費な事で、出來て幾許もお間に合ふのが有りますから、外様を當つて見るが可うございまさ。」

壽「然うぢやらうともの。私も然うは思ふけれど。」

延「そりや、貴方、薔薇子の女振と云ふものは、今度の上野の展覽會に出て居る雨乞小町の横顔に肖て居るくらゐのもんです。」

壽「ほう、小町の繪に、のう。そりや善かつた！」

延「それから未だ肖て居るんです。」

壽「未だ肖て居るかの。」

延「今度は私なんです。」

壽「お前がな？」

延「私のいづっと天の岩戸です。」

壽「それは何よりじや、のう。ふむ、ふむ。」
延「彼處に大勢神樣が控へて居ませう、それ、何とかの尊だなんて。那の上から五枚目に在つしやる四十恰好の尊に一寸肖て居るので。」
壽「はあ、勿躰ない！」　と目を瞑つて恭しく頭を下げる。
延「それから未だ阿父さんも肖てお在なんです。」
壽「いや、私もな？」
延「阿父さんのは又づつと格が變つて、前面が日の出です。」
壽「日の出とは難有い。」
延「其に霞が棚引いて居て、一面の浪です。」
壽「日の出に浪！　目出度い、のう。それから。」
延「浪の眞中に係う巖が押立つて、それに金銀の苔が附いて、」
壽「金銀の苔が附いて居るか。」
延「それに大中小と簑龜が三匹、」

壽「はあ、見事なものじや、のう。」
延「其の中の龜の子の眞向の顏色が、何處とも謂へず、それは肖て居るんですがね。」
壽「何？　私の肖て居るのは龜の子じやと。」
延「銀の簑龜に肖てお在なんですから、お目出度いぢやありませんか。人が人に肖て居るのは、珍しくも何ともありはしません。年寄が簑龜に肖て居ると來た日には、家中へ祝儀をお出しなすつても可い位のものです。
壽「それも然うか、のう。目出度い次手に今度の話も圓く納めたいものじやが、如何か双方とも巧く目利をしてくれゝば可いが、のう。」
延「お案じなさるほどの事は有りませんよ。優雄さんと云ふ方は未だお目にも懸らず、甚麼人物だか知りませんから、薔薇子の氣に入るか、如何だか、そこ處は、何ぼ引承ける私でも保證は出來ませんけれど、薔薇子の方は氣遣無してす。彼が男の目に着かなかつたら、右の謝罪として金

五千圓進呈と廣告しても可うございます。だから、此方には些も苦勞は有りませんけれど、先方が如何かと思つて、それが多少か案じられるんでさ。」

薔「先方が如何かとは、薔薇子の氣に入らんやうな事が有りはせんかと謂ふのかな。」

延「そこです。」

薔「悅けたことを！　學問が有つて、才氣が有つて、可いかの、樣子は好し、男振は好し、それで愛嬌が有つて辯が爽かで、のう。」

延「それぢや始から（申分が無い）と言つて了つた方が手取早いくらゐのもんで。」

薔「其通り、申分が無いのじやから、彼が薔薇子の氣に入らんやうなら、二人にも言つた事じやが、私の此の禿げた頭に黒い髮が生へやうと……。

延「廣告をなさいますかな。然云ふ譯なら、些も案じる事は無いぢやあり

ませんか。ねえ、阿父さんは先方の中分が無い處をお引承けなさる、又私は私で、薔薇子が小町に肖て居るのを引承けるんですから、此の双方の引承を合躰すれば、手付かずに兩善しの相惚となる。因でシャン〳〵シャンのお目出度うございの譯無してさ。」

薔「何を言ふのやら、お前の話は獨合點で、誠に解り難い、のう。」

延「ねえ、阿父さんは先方を保證なさるんでせう。薔薇子の方は私が保證するんでせう。恁うして兩方に歴とした身元引承人が付いて居るんですから、是は御安心なさいまし。」

薔「成程理窟さの。」

延「ですから、搆ふ事はありませんから、其の狂言を遣らせるが可うございまさ。緣が有れば、一寸刺した柳の枝にも根が付くし、無い緣ならば、九々二十七度の盃をしたつて纏る事はありはしません。」

薔「ぢや、ま、默つて見て居やうか、のう。」

延「それに限（かぎ）ります。」

葉「あゝ、然（しか）し氣遣（きづかひ）でならん。」

延「お年（とし）は取（と）りたくないもんです。」

(四)　珍客の上

――春山の書生
實は 春山優雄

春山優雄黑木綿三つ紋の羽織に小倉の袴を穿き、總て書生の扮裝にて大鞄を携へながら出で來る。

優「どうか巧く行けば可いが、古里が那の調子では怪いものだ。而して、那奴の憎いことは、二度と這麼事は無いと謂ふ氣で、いや、三日天下の暴威を振ふが、那が耐らん! 傍に人でも居ると惡く主人風を吹せて、叱り飛す、逐使ふ、我ながら目も當てられん始末だ。途上〳〵の稽古中でさへ那の位手暴いのだから、いよ〳〵福富の內へ來たとなつたら、其の氣焰實に當るべからざる者あらんだらうよ。まあ然し、それは可いとして措くのだ、始から傒云ふ苦肉の計を行ふのだから、多少の艱難は覺悟の前だけれど、唯氣遣はれるのは、中途で馬脚を露しはせんかと云ふ一事

だ。彼も一寸推出した處では、顔色だつて太く拙くもなし、體格は別して善し、半分は服裝で威して了ふから、まあ〳〵春山優雄で通らん事は無いのだけれど、野卑な事を言ふのと、目先の見えないのと、而して那の大食には誤る。此方が始終軍師として附いて居れば、又何か恁か傍からお茶を濁しも爲るけれど、手放たら大變物だらう。

夫に、奴はまあ何爲那も卑く出來て居るのだらう。一昨日家を出るから今日までに那の百本入のマニラの箱を大方喫して了つて、眩暈がして胸が惡くて克はんと云つて騒いで居るのだが、聞いて見ると、今月は葉巻の豊年だから喫置を爲るのだとは如何だらう。

いや、化の皮が露れると云へば、福富の老人は俺の顔を知つて居るのだから、是には夙て通じてあるのだが、懇々も頼んで置いたから、よもや娘に話しは爲まいてな。那の老人又大の娘自慢で、過日も切に、唯一遍會つて下さい、而して思召に稱はなかつたら、強ひてとは願はんのだか

らなど〻、心中頗る得意に見えたから、此際却て門戸を開いて、其の天眞を見せるのを喜ぶかも知れん。那で何しろ一風ある人物だから、父も其點は懸念無いと言つたが、さて其の自慢の令孃は甚麼ものか知らん。二度吃驚は御免だて。

時に三日天下の我君は如何したのだらう。一寸京橋に委托物があるから放込んで來くると云つたが、察するに、又金時計を拈弄ながら何處かで法螺を吹いて居ると見えるな。那麼時計を無上に拈弄られては、歸る迄には好い加減に壞れて了ふだらう。時計も壞れるが、俺の體も其通り、奴の手に掛つては無事には居まいよ。

いや、恁うして何時まで往來に待つて居られるものでもない、一つ先觸に乘込むと云やう。」

門口に來る。

「ほ〻う、立派々々、聞きしに勝る居宅だ。賴まう、賴まう。おや、御

返事無しは怪しからんな。今日態うして珍客の來るのは知れて居るのに、どうも冷遇千萬な、本來なれば停車場まで迎を出して然るべきである。然う手數を掛けまいと、此方は故と差控へて時間の通知も爲んのだつた。今日は一躰誰が來るのだと思つて居るのだらう。噫、這麽不心得な家風の家と緣を結ぶのは可汚しい！　えゝ、もう還る〳〵。いや、これは失禮、大きに失禮を。此に電鈴が在つた。餘り酒落て小いものだから目に着かなかつた。そこで之を押すか、うん、鳴る〳〵。」

珍客の下

書生實は春山優雄
召使實は薔薇子
壽右衛門
延太郎

薔薇子召使の姿にて取次に出づ。

薔「はい、何方様で在つしやいます。」

春「えゝ、私は京都の春山優雄の書生でございます。主人は一寸寄道を致しましたので、私だけ先へ出ましてございます。どうぞお奥へ然やう仰つて下さい。」

薔「おや、然やうでございますか。まあ、どうぞお上り遊ばして。」

春「それでは御免を。」

と内に入る。此時双方始めて顔を合せる。

薔「暫く是でお待ち下さいまし。」

と男の方を見返り〳〵奥へ入る。優雄は又其跡を熟と見送りて、
「好いな！　那は好い。那でも好いくらゐのものだ。既に召使で那だから、本人たる者は想ふべしだぞ。必ず那より優るとも劣ることは無い。如何となればだ、女といふものは嫉妬の強いもの、それが己より器量の好い召使を置くなどゝ謂ふ事は斷じて無い。主となると、殊に家來との別を立てたがるものだ、どうも其が人情で爲方が無い。左も右も那より好いことは、事實として察するに餘ありと謂つて可からう。那より好いとして見ると、さあ、甚麽に好いのかな。」
と目を塞いて暫く考へる。
「迚も考へられん、想像の及ぶ所でない。唯（那より好い）と云ふので滿足して置くのだな。然し本人たる者は那より何程好いか知らんけれど、那の好いのにも驚嘆の外は無い。いくら好いと云つたつて那は召使、召使で居ながら氣韵の高いことは、立派に令孃、否姫君の器だ。那より本

人は優つて居ると爲れば、令嬢で居ながら氣韵の高いことは？　何の器だらう。人倫ではもう姫君の上は無いから、勢ひ神事になつて來る、天女の器かな。天女の器で、尻が輕くて妄に飛んで行かれたら、是も耐らない！　然し、天女の器だ。春山優雄たるものは天女を妻と爲る………われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる所に、虚空に花降り、音樂聞え、靈香四方に薰ず、これ唯事と思はぬ所に、これなる美しき松に衣掛れり、」

と段々調子付いて大聲に謠ひ出す。

春「寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず、いかさま取りて還り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じさふらふ………。」

奥より出で來る壽右衞門、延太郎、後より薔薇子。

薔「いや、本物ですな。」

と後から聲を懸ける。優雄は度を失ひて、

春「これは甚だ失禮を。先づ始ましてお目に懸ります。」

と推付けるやうに初對面の挨拶をする。

壽「どうぞ最少しお聞せ下さい。結構なお嗜で。」

春「先づ始まして、私は古里遠と申しまして、」

壽「外の藝事は宜ゝないが、那の謠といふものは、誠に上品な、紳士の嗜んで居て然るべき………。」

春「春山の書生でございます。えゝ………。」

壽「御流義は何て、えゝ御流儀は？」

春「えゝ、此度は………………。」

壽「はあ、金春？」

春「いえ、此度と申したので。」

壽「へえ、このたび流？」

延太郎見かねて其へ出る。

延「それは〳〵、御遠方を然ぞお疲でしたらう。彼方で御寛お休みなさい

まし。蓮や、おまへ御案内を。」

薔「さあ、貴方彼方へ。」

延「お荷物をお前お持ちよ。」

（はい）と言つて起ちはしたものゝ、此のお荷物たるや、既に優雄も途上く弱らせられしほどの目方なれば、薔薇子の力にては持擧げたるばかりにて動も取れず、それでも如何にか爲る氣で散々に腕きゐる。延太郎は此躰を見て可笑さを怺へゐたりしが、ふと顔を合せると舌を出す。此間に優雄は壽右衛門に向ひて、十分に底意を含めさせんと云ふ心にて、

耆「お初にお目に懸りますが、私は古里遠と申しまして、長年春山様に御厄介になつて居りまする、甚だ不調法者でござゐます。」

と宜く目顔にて知する。

壽「はい〳〵、御書面でありましたから委細承知して居ます。それで、自然彼此取込みまするで、一向お構ひ申されません。其代りお宅にお在も

同様に、どうぞ、まあ、お氣儘にな。誠に私方は此のお客扱が不器用で、外様では痒い處へ手が達くが、私方では痛い處へ足が觸るとでも謂ひたいので、別して今度御出のやうなお客筋は一向不馴でな、」

春「至極御尤で。」

壽「定めて不行屆ばかりぢやらうと思ひます。」

春「どう致まして、お客などゝは以ての外で、唯箇樣な不調法な書生と、そこを御承知下さいますれば、……………………………。」

壽「そこは承知。はい、承知して居ます。」

延「さあ、どうぞ彼方へ。蓮や、何をして居るのだな。早く其のお荷物を持つて行かないのか。」

壽「まあ、お前そんなに言ふな。蓮、如何した。」

薔「はい、私の力では……なか〳〵……あの……………………。」

壽「重くて持てんか。そりや然う……あゝ、然うか、然うして措きな、今

に延太郎にでも持せて遣るから。」

菅「若旦那さま、まことに憚りさまでございます。」

と故と抵てゝ言ふ。優雄は始終はすにのみ目を着けて、専ら惚れつゝあるが如くうつかり悄然として居る。

延「それは貴方、奉公人に甘いと云ふもんです。何處の國に婢が手ぶらで若旦那が荷物を挈げるなんと云ふ圖が在るもんですか。」

菅「在つても無くても、女の事で持てんと云ふのなら爲方が無い。持ちなさい、持ちなさい。」

延「本當に重いんなら持ちますけれど、何爲、奉公人根性で骨惜をするんでさ。」

菅「あら、那樣事を有仰るなら持つて御覧なさいましよ。」

延「其の手を吃ふものか。一寸見たつて輕さうな物だ。」

菅「あら、輕くはありませんよ。」

延「輕いよ。」

壽「どれ〳〵私が試てやらう。」

と自身に行つて鞄を挈げる。延太郎は之を好い幸にして、

延「まあ、古里さん、彼方へ被入い。」

これにて優雄は心着き、壽右衛門の荷を持てるを見て、

春「是は恐縮！」

と直に行きて鞄を取らうとする。

壽「いや、是は悴に。これよ、延太郎。」

春「いえ、どうぞ、もう。私が、どうぞ〳〵、是は私が。」

壽「これよ、延太郎。」

春「どうぞ、もう。どうぞ〳〵。」

（五）客間〔書生實は優雄　召使實は薔薇子〕

優雄を上座に、薔薇子茶の給仕をして居る。

春「此方のお孃さまのお名前は薔薇子さまと有仰いましたな。」

薔「然やうでございます。」

春「貴方は何と有仰る。」

薔「私のやうな者は…………………………。」

春「だつて、お名前は有りませう。」

薔「何ぼ下女風情でも名前ぐらゐは、あの御座います。」

春「いや、是は大きに失禮を。」

薔「貴方は古里樣と有仰いますので？」

春「如何にも古里、名前は遠と申します。何分此度は御厄介に成ります。」

薔「私そはすと申しまして、まことに不束な田舎者でございますが、何分
どうぞ宜うお願ひ申します。」
春「失敬ながら田舎者は虚でせう。」
薔「いゝえ、本當に田舎産なのでございます。」
春「田舎は日本橋在ですか。」
薔「いゝえ、目黒の先でございます。あの、貴方は春山樣には餘程久しく
お出でございますか。」
春「餘程久しく居りますな。」
薔「何年ほど？」
春「えゝ、もう、ずつと。幼少の頃から。」
薔「では、若旦那さまの御氣質は能く御存じで在つしやいませうね。」
春「えゝ、存じて居りますとも。誰にも隱して心の底の下積にして居られ
る事まで丁と知つて居る位のものです。」

薔「一寸云ふと、何云ふ御方で在つしやるのでございます。」
春「一寸云ふと、良い方ですな。貴方はお幾歳です。」
薔「私は十九でございますが、若旦那さまは如何良い御方なのでございます。」
春「總て良いのですな。貴方は御惣領ですか。」
薔「然やうではございませんが、總て良いと有仰つて、何云ふ御氣質で在つしやいますのです。」
春「然やうな、婦人には極優しい方で。而すると、貴方は何れへかお片附きなさるのですな――然うですか。貴方のやうな方を細君に持つものは仕合ですな。」
薔　那麽事を有仰います。あの、若旦那さまは婦人には優しいと有仰いますと、殿方にはお優しくないのでございますか。」
春「やはり優しいので、一度お會ひなされば大概樣子で解ります。もう今に御出でせうから、惚れちや可けませんよ。」

蓄「私よりはどうぞお孃さまがお惚れ遊ばすやうに致したうございます。」

呑「大きに御尤。お孃さまは然ぞ何とか有仰つてお在でしたらうな。」

蓄「はい、何云ふ御方か知らんと、それは毎日苦にしてばかり在つしやいました。」

呑「大きに御尤。私などは深い事は知りませんが、此方の御老人の有仰る處では、お孃さまの方には少しも御異存が無いので、私主人の方さへ承知なれば直に話は纒る、と云ふやうに聞いて居りましたが、全くお孃さまの方には始から御異存はお有なさらんのですか。何云ふものでせう。」

蓄「依樣御異存はお有なさるのでございます。」

呑「御異存が有る？　いや、それは大分話が違ふ。貴方さへ御承諾下されば、此方には少しも異存は無い、と那ほど迄に言れるから、此方は其を眞に承けて、…………………。」

と我を忘れて艴然となりしが、遽に心着き、

査「いや、是は大きに御尤。而してお孃さまは何と言つて被在います。」

醬「阿父さまは獨合點をして、世界に二人と無いやうにそれは褒めちぎつてお在ですけれど、男の心持と女の心持とは別でもあるし、年寄の目と若い者の目とは違ふから、幾許阿父さまが好くても、本人の私には又甚麼に好くないかも知れない。それを御自分一人の了簡で極めて了つて、是に爲ろと突付けるやうに爲さるけれど、過日も三井の陳列場へ入しつて、餘り好かつたから、お前に買つて來たが、如何だと言つて帶を取つて下すつたのは可かつたが、全でお酌が結めるやうな物を、何爲る事も出來ずに居るのが好いお手本で、阿父さまのお見立には懲々したから、今度のお話も心配でならない、と那樣に有仰つてゞございました。」

査「大きに御尤。前に然云ふ事が有つたので、今度は品物を取寄せて見ると云ふのですな。然うして見ると、私主人なるものは反物で、其に附いて來る私は鬱金木綿の風呂敷ですか。大きに難有うございます。」

薔「あれ、決して那樣つもりで申したのでは御座いません。貴方が若も鬱金木綿の風呂敷ならば……あの、私は頭巾に致しますわ。」

春「それは難有い。若も貴方が私を頭巾にして下されば、內にお在の時でも私は被り付いて居て取れはしませんから。いや、然し京都から此まで取寄せられて、見散かされて、どうも氣に入らないからと謂ふので突返されるやうな事無きにしもあらず、と知つて居られたら、故々お出になるぢやなかつたらうに、是は大きに不見識であつた。」

と熟と考込む。其の顏を薔薇子は又熟と眺めて、見れば見るほど好い殿振と、戀風なるものが身に浸遍る鹽梅。優雄は屹と頷いて起上り、

春「是は奧へ行つて一談判せにやならん。始のお話とは全で違ふ。屹と嚴談の上即刻此を引拂ひます。」

薔「まあ、貴方…………………。」

春「お放しなさい。」

薔「お待ち下さいまし。」
と縋付いて離れぬのを、優雄は心中大きに嬉しく、内々薔薇子の姿を隠無く眗し居る。
薔「それでは私が御主人に相濟みませんから、どうぞ今のは此限のお話になすつて下さいまし。然もございませんと、私は活きては居られません。」
春「いゝや、お放しなさい。」
薔「それぢや私は活きて居られませんから死んで了ひます。」
春「はあ、お死になさい。貴方が是から死ぬよりは私が行つて談判する方が早い。貴方の死に切れない内に此方は談判を濟して了ひますよ。」
薔「死ぬのに那樣に手間は懸りませんから、然やうなれば貴方。」
と手を放し、駈行く。今度は優雄が慌てゝ、後から抱留める。
春「お待ちなさい。」
薔「いゝえ、お放ち下さいまし。」

春「待ちませんね。待たんければ宜しい。此の兵見帶て貴方を縛つて置いて、而して私は奥へ行きますから。」

と忙しく袴の紐を解く。

薔「あれ、可けません、那様事は。」

又形勢一變して、今放せと爭ひし薔薇子が縋り付けば、

春「お放しなさい。」

薔「いゝえ、放しません。」

二人は手を取り、取られながら、思はず顔を合せしまゝに、暫く熟と見取れる。

春「まあ、此へお坐りなさいな。」

薔薇子ははつと心着き、四邊を眴しながら、

薔「貴方、此をお放し下さいまし。」

春「放しません。放すと貴方の命に關ります。」

と引寄せて薔薇子の顏を見れば、面を背けて切に可羞がる。然りとも知らで入來るは、換玉婿の古里遠。

古「怪しからん、是は怪しからん！」

忽ち飛退く二人を睨付けて、

古「古里！」

春「はい。」

古「女中！」

薔「はい。」

古「いや、お前たちは怪しからんもんだぞ。」

と例の金時計を手繰り出して、一寸時刻を見て、

古「何時だと思ふんだ。もう十分で四時ぢやないか。既に四時だと云ふに怪しからん。」

春「唯今お着でございましたか。大分お手間が取れましたな。此方さまで

もお待兼で。お女中さん、早速お奥へお知せ下さいまし。」

薔「是は入つしやいまし。然やうならお奥へ申上げて參ります。」

と薔薇子は座敷を出ると、紙門を細目に放けて、婿に化けたる古里の樣子を窺ひ、好かぬ奴といふ氣色にて、憤れたがりながら奥へ行く。

古「先生、」

春「叱!」

古「今のは醜體ですな。」

春「然うでない。色仕掛に志て彼から探らうと云ふ計なのだ。」

古「いや、然云ふ計を用ゐて宜しいなら、やはり私は古里遠の方が可うございました。」

春「だから、令孃の方はお前が宜しいやうに計を用ゐるが可いさ。」

古「用ゐて可うございますか。私も色仕掛なる者を用ゐますよ。」

春「あゝ、宜しい。」

古「而して萬一令嬢が靡きましたら如何ですか。」

春「潔くお前に讓る。」

古「潔く？　讓る？　此の財産は凡そ若干でせうか。」

春「まづ六七萬かな。」

古「よいしよ！」

春「氣障なことを言ふなよ。」

古「先生既に令嬢を御覽になつたのですか。」

春「いや、未だ。　おゝ、　足音がする。可いか、確り頼むよ。　えへん。」

古「えへん。」

（六八）　庭内

實は古里遠
實はおはす
實は薔薇子
實は優雄

二人連立ちて散歩しながら、
高「令孃那の木の茂つて居る後に家の在るのは何ですか。」
は「あれは茶室でございます。」
高「はあ、茶室と云ふと、茶を立てゝ飲む狹苦い處ですな。其は幸ひ、那へ行つて休まうぢやありませんか。」
は「あの、私は近頃手を傷めまして、お茶を立てることが出來ませんから」――
高「何有、茶などは立てんでも宜しい。」
は「それでは參りませう。」
茶室の障子を啓けて兩人腰を掛くる。

古「これは密談を爲るには最も妙だ。令孃には色々お話したい事が有るのです、もう少し此方へ寄りたまへ。」

は「椿が好く咲きましたこと。」

古「椿も咲いたが、令孃の指環も澤山に見事なものですな。」

は「這麼に穿めて居りますもので、どうも肩が凝つてなりません。」

古「成程。僕も這麼金時計を持つて居るが、お目に懸けるやうな品ではない。先から好い匂がすると思つたら、令孃のハンカチイフですか、之僕に與れたまへ、難有い。」と引手繰つて袂へ丸め込む。

は「貴方はお人が惡いから用心するわ。」

と指環を皆拔取つて紙入の中に仕舞ひ、櫛簪は紙に卷きて帶の間に挿む。

古「是は嚴い！」

は「何方が嚴いか知れやしません。」

古「時に此で一寸一盃遣りたいものだが、何か肴を命じて下さい。」

は「料理屋ではございませんから、然云ふ譯には參りません。」
芭「何爲、行かんことが有るものか。苟くも福富壽右衞門氏の富を以てして、其の愛娘の婿たるべき春山優雄を饗するに於てをやだ。麥酒に西洋料理が可い。それも上等でないと皿數が少いから、上等を命じる。麪包牛酪や水菓子は要らんから、其分を何か一皿加けるやうに、而して麥酒は二本。」
は「御酒は晩になすつて、唯今は一寸あつさりお菓子でも、ね、然うなさいまし。好いお茶を淹れさせませう。お菓子なら私も戴きますから。」
芭「此際僕は酒の方が可いのだけれど、令孃が憑う爲いと言ふのなら、それは菓子でも茶でも、湯でも水でも……………。」
は「那麼巧いことを仰有つて、私が申さないでも隨分喫るぢやございませんか。今朝の召上つたのには家中吃驚して居りましたよ。」
芭「それが、僕は元來堅苦くして居るのが大嫌であるのに、此の家は惡く

眞面目で氣が塞つて耐らんから、物を食ふ時少し樂を爲るのです。然し、僕は大食には違無い、如何にも大食であるが、薔薇子さん……………。」

と異な目をしてお蓮の手を執る。

貢「それが男子たる者の疵にはならんでせう。吾人が大食をすると、腹の中に乞食が居候でもして居るやうに言ふけれども、決して那樣ものが居るのでもなければ、又所謂虫の所爲でもない、畢竟は胃が強いからで、言換れば體が壯健なのだ。體が壯健でなければ長生が出來ん、長生が出來んければ、夫婦になつても其の樂みを續けることが出來ん。なあ、令孃、然うでせう。こゝらが最も考ふべき所ですよ。恁う見た所、令孃は頗る壯健だ。」

は「あれ、可哀さうに私は大食ぢやございません。」

貢「いや、大食でなくも、それは壯健な者は有る。令孃の此の壯健に、」

とおはすの肩を丁と拊ち、

古「堪へる夫は寡くとも倍壯健の體を持たんければならん。であるからして、僕は令孃を見ると大に感ずる所あるやうな譯で、一層食慾を鼓舞してからに、今後とも壯健に壯健を加へんとするのであります、譬へば僕の書生のあの古里遠………。」

は「本當に樣子の好い方ね。」

古「それだから可かん！　那奴は物を食ふのも僕の四分の一ぐらゐ、であるからして、一寸見ると姿は好いやうだが、それだけ體が弱い。一年中藥といふものを絕したことが無い、飯の代に藥を飲んで居るのだ。幾多姿が好くても肝心の體が弱かつたら、貴方、如何しますか。」

は「然うでございますね。私も這麼に太つて居るのが氣になつて。可厭で可厭でならないんでございますけれど。それぢや女も丈夫向の方が依樣宜しいんでございますかね。」

古「勿論です。夫婦たる以上は何方が弱くても可かん、双方が壯健だけ其

だけ快樂が多いのですからな。」

妻「でも、貴方、適には一寸疾ふのも好いもんぢやございませんか。餘り丈夫なのは可憎うございます。それに、年中働き詰の休無しと云ふ體では、時々は疾つて寢るのも保養でございますわ。それが、私どもは可厭に丈夫で、滅多に風も引かないんですから、病身の者よりは一割方損かと思ひます。」

主「はっはっはっはっ、年中働き詰の休無し！　はっはっはっ。疾つて寐るのも保養！　はっはっはっ。信じません、僕は信じません！　否、信じられんのだ。年中働き詰の休無しと云ふのは、それは奉公人の體だ。疾つて寐るのも保養などゝは、所謂奉公人根性だ。六七萬の財產家と聞ゆる福富家の令嬢たる貴方が、はっはっはっ、箸より重い物は持たれんと云ふことは能く知つて居るです。然し、然う言つては僕の氣に入るまいと云ふ考量て、內では下女同樣に働いて居る、と大に平氏的に養成され

て居るかのやうに言はれたのであらうけれどもが、はっはっはっ、猶且令孃は令孃だ、那樣事を言はれても他は信じはせんですよ。然し、其の無邪氣な處が難有いので、よいしよ！」と突如に奇聲を出す。

は「あゝ、吃驚した。」

吉「時に令孃、吭が渇いて、腹が減つて來たですがね、」

は「はい、唯今申付けます。」

おはすはカラコロ〳〵と其處まで出て、母屋の方に向ひて手を鳴し、

は「あの、蓮や、一寸來ておくれな。」

薔「はい〳〵唯今。」

と薔薇子は急いで用を聞きに來る。

は「あの、お茶とお菓子を持つてお出で。お菓子は何か貰つたのが有るだらう。」

と言ふ傍から薔薇子に睨まれて、

は「けれど、貰つたのなんぞは可けないから、新規に取つて來るのだよ。」

薔「畏りました。」

古「早くしてくれ、可いか。」

と横柄に言ふ。薔薇子は其顔を一寸見て、

薔「はい、畏りましてございます。」

と返して行くと與に傍路より忍び寄りたる春山優雄、雜栽の陰に潛みて樣子を立聽く。

古「令孃、僕は一日貴方を伴れて何處かへ行つて見たいと思ふですけれどもが、如何ですか。」

は「阿父さまに聞いて見ませんければ、出られますか、如何ですか。」

古「阿父さまなどは如何でもなるですが、貴方は如何ですか。」

は「私は結構でございますけれど、那樣事をなさいますと後で後悔をなごらなければなりませんから………。」

吉「何爲後で後悔をせんければならんてす。ねえ、是は一つ伺ひたい。」
と言ふのを機に擦付いて、又おはすの手を握る。
は「貴方、今の婢は如何でございます。」
吉「如何とは？」
は「お目に留りませんか。」
吉「何故ですか。」
は「好い器量でございませう。」
此時薔薇子は茶と菓子とを持來りて、是も小陰に立聽をする。
吉「好いか、惡いか、僕は下女を見に來たんではないですね。それぢや何ですか、僕には下女が相當だと言ふんですか。僕は然う見えますか。」
は「あれ、那樣意で申したのではございませんけれど、彼を皆さんがお譽めなさるから、貴方のお目にも留りましたかと思ひまして。」
吉「留りません、更に留りません！」

は「口頭では那樣に有仰っても……。」
古「心ぢや何とか僕が思つとると云ふてすか。」
は「まあ、そこいらで御座いせう。」
古「ふむ。それぢや口頭ばかりでない證據を僕が見せませうか。」
は「どうぞ。」
古「來たら僕が蹴飛ばすが如何です。」
おはすも有繫に肝を潰して、
は「貴方がお孃……御常談を有仰いまし。」
古「いや、常談でない！　貴方の爲なら下女の一匹や二匹は蹴殺して見せる。」
と力味返つて持構へる。薔薇子は腹が立つやら、悔しいやら、吾を忘れて茶盃を取落す。此の物音に二人は吃驚してぱつと離れる。優雄は衝と起上つて考へ込む。

（七）　念の爲の上

壽右衛門
實はおはす

は「旦那さま、未だお目覺でございましたか。」
壽「おゝ、蓮か。此の夜深に何用じや。」
は「晝間は人目が御座いましたり、又お客樣が些でもお傍をお離しなさいませんものですから、這麼時分に上りましてございますが、旦那さま、まあ、到底もない事になつて了ひました。」
壽「ほう、一條が露顯したか。それぢやから私が言はん事ぢやない、…………。」
は「あれ、違ひますでございます。」
壽「違ふと？　では露顯したぢやない？　はゝあ、お前の事ぢやから又粗相をしたの。私の大事の那の銀の湯沸でも凹ましたか。」
は「粗相には違ございませんけれど、お客樣の御粗相なんでございます。」

壽「はあ、それでは依然湯沸を凹ませたのじやの。」

は「いゝえ、湯沸よりはもつとお大事の〳〵品が凹んだので御座います。」

壽「何が凹んだ！」

は「あの、お孃さまがお凹みあそばましたので。」

壽「何、何、何！　孃が凹んだと？　お客さまの粗相で孃が凹んだと言ふか。　如何凹んだ、甚麼鹽梅に凹んだのじや。」

は「それを申上に參りましたんでございますけれど、私の口からは何となく申上げ難いんでございます。」

壽「お前が言難けりや孃を此へ呼んで私が見て遣る。」

は「お孃さまは全で御存じないんで御座いますから。」

壽「芋の煮えたも御存じ無いと云ふのは聞いたが、いくら馬鹿でも、自分の何處か凹んだのを知らんで居る奴が有るものか。」

は「それぢや何も彼も申上げて了ひます。實は、あの、お客樣でございま

すね、どうも變なのでございますよ。」

藤「ほう、變か。」

は「私を何處までも此方のお孃さまと思召して被在るんでございます。」

藤「それが變なものか。」

は「此の後が變なのでございます。で御座いますもんですから、私に色々な事を有仰るんで御座いますよ。」

藤「未だそこらは變なのぢやなからうの。」

は「もう漸々變でも宜うございますので。其の色々なことを有仰る中には、那だの恁だのと御親切に有仰るもんですから、私は例も御挨拶に困つて了ふんで御座います。私の考へますには、此分でもう二三日も經ちますと、噓から出た誠で、甚麼拍子で本物に成るまいもんでも御座いませんから、明日から此の狂言は幕になすつた方がお爲だらうと存じますでございます。」

薔「そりや何と言ふ、あの、お客樣がお前に彼此有仰る？　ほう、然うか、そりや可かつた！」

は「何と有仰います。」

薔「うゝ、成程、そりや言ふかも知れんて。」

は「言ふかも知れんでは御座いませんよ、なか〳〵手嚴く有仰るんで御座いますから、今日迄は何か恁か柳に風で受流して凌いで參りましたけれど、もう然う〳〵は私も續きませんでございますから、唯今限り此のお役目は御免を蒙ります。」

薔「それは然うでもあらうが、のう、何も奉公と諦めて、最少しの辛防じや。是が主人の身替に立つと云ふにしても、お前の首を斬つて出すぢやなし、のう、毎日旨い物を食べて、好い着物を着て、可いか、樂をして、甚麽に願つたとて二度と有る事ぢやなし、おまへも忠義を思つて身替に立つたからには、傍へも寄せられんほど嫌はれたとて、まあ是非も無い

のぢやらう、のう。それが善う思はれるのは、冥理に協つたと云ふものじや。又お前にしても、那云ふ身分の方に彼此言はれるのは、決して惡い心持は爲んぢやらう。あゝ、如何じやな。」

は「て御座います、私だつて惡い心持は致しませんですから、此のお役目は務まらないと申しますんで御座います。」

壽「はて、のう。」

は「然やうぢや御座いませんですか。私だつて女でございます、而して年頃でございます、いづれ嫁にも參らなければ成りません體で御座います。同じ嫁に參るならば少しでも宜しい所へ參りたいのが情合で御座います。」

壽「一々無理も無い、のう。」

は「そこへ持つて參つて、那云ふ御方が何とか有仰つて下さいませば、私だつて嬉しう御座います。」

壽「おゝ、尤。」

は「私のやうな者でも御深切に有仰つて下さるかと思ひますと、適には妙な氣にもなりますで御座います。噫、爰で恁云ふ御挨拶さへしたら、話は直に纏るものをと思ひながら、然うでない、是は御主人樣の預り物だ、と熟と怺へます其の辛さ！　貧乏人が大金を預つて大晦日でも越すやうな、あの、心持が致すんで御座います。それでも今迄は左にか右にか辛抱致しましたけれど、もう私は出來ません、はい、迚も出來ませんで御座いますから、粗相の御座いません内にお大事のお品はお返し申します。這麼に迄申上げまして、猶且お聽入が御座いませんければ、私は前以てお斷り申して置きますが、那の貧の盜を致しますでございますよ。」

壽「如何に何でも那樣事は困る。」

は「ではお役目は御免を蒙ります。」

壽「それは猶困るがな。」

は「旦那さまよりは私の方が困ります。」

喜「いや、然うでないと云ふに。」

は「いゝえ、もう何と有仰つても可けませんで御座います。」

と持來たる風呂敷を解けば、中にはおのれの衣類を入れたり。手早く令孃扮裝の帶を解きて、小袖を脫捨て、長襦袢一つになりて其の帶を疊み始める。

喜「これ、躁るな！　待てよ〳〵。」

は「もう身替も悟うなれば、自害をされたも同然で御座います。」

喜「ま、ま、何も着物を脫がんでも話は付くわな。」

は「いゝえ、私は脫いでから付けますで御座います。」

喜「付けてから脫げと言ふに。」

念の爲の下

壽右衞門
實はおはす
延太郎

延太郎慌忙しく入り來る。

延「はす、何だ、お前の其の態？　何しに帶を解いたのだ、何しに長襦袢一つになつたのだよ。阿父さん、貴方も貴方ぢやありませんか、馬鹿も好い加減になすつてお措きなさい。當年二十五歲にもなる歷とした悴が有るのですよ、貴方には。而も其の悴には未だ嫁も無いのですよ。」

壽「これよ、譯も聞かずに無法な事を言ひ居る、馬鹿な奴め！」

延「馬鹿な奴ですと？　えゝ、然うでせう、馬鹿な親が生んだのですから。」

壽「これ、馬鹿な親とは誰の事じや。」

延「嚇したつて可けませんよ。はす、此へ出ろ。」

壽「はすに抵ることは無い、私が對手じや。」

延太郎は父親を尻目に掛けて、

延「御尤でございます。へつへつへつ。」

壽「これ、其のへつへつへつが氣に入らん。」

延「何だ、はす、逃げるのか。待て〳〵。」

と利腕取つて引据ゑる。

壽「手暴なことを爲るな。」

延「御尤でございます。さあ、はす、旦那さまがお前に何とか有仰つたのだらう。何と有仰つたか、其を言ひな。」

は「いゝえ、私から申上げたんで御座います。」

延「何、お前の方から言出したのだ？　うむ、能く有る奴、一箸食ふと喝と血反吐を嘔くのだ。」

は「あの、何と有仰います。」

延「旦那さまを丸めて好い事を爲やうと云ふのだらう。」

は「いゝえ、如何いたしまして、丸めるの何のと、那樣意ぢやないんで御座います。」

延「馬鹿を云ふな。お前の年頃で這麼年寄に惚れたの、腫れたのと言ふ寸方が有るものか。」

壽「馬鹿を言ふな、這麼年寄が若い婦女を捉へて、惚れたの、腫れたのと、那樣悅けた事が常談にも出來ると想ふか。」

は「あれ、若旦那さま、私は……何ぼ何でも餘り情無い事を……可うございますよ。全で想ひも着かない事を……私は何ぼ何でも悔うございます。」

と岸破と俯して泣入ると見れば、又顏を擧げて、

は「えゝ、悔しい、えゝ、えゝ。」

と長襦袢の袖を咬裂かんとすれど、一向裂けざれば、愈よ憤れこみの喞へて振廻すばかりなり。

壽「那樣ものを裂いては可かん。」

は「私は餘り悔うございます。」
壽「おゝ、悔しいのは解つて居るから、裂くな〳〵。」
は「若旦那さま、何ぼ何でも貴方は餘りな事を有仰います。私は腐つても蓮で御座います。御主人樣へ那樣眞似を致すやうな汚れた根性ぢやないんで御座います。私は是でも嫁入前の軆で御座います、那樣無實の罪を被せられましては、大事な軆に疵が付きますで御座います。貴方も餘りな事を有仰います。大概推測にも知れたもんで御座います。何ぼ私のやうなお多福でも、那麼お爺……………。」
延「おつと、それから？」
おはすは行塞りて爲方無く、
は「私は悔うございます。」
とばかりにわつと泣俯す。
壽「これよ、泣くな〳〵。お前に限つて、那樣者でない事は此の私が善う

知つて居る。延太郎には今私が譯を話して、お前の顏の立つやうにして遣るから、のう、それで勘辨をしなさい。もう、泣くな〳〵。これ、延太郎、此へ出ろ。」

延「是は風が變つたかな。」

壽「見なさい、はすれ那の通り泣いて居る。」

延「泣いて居ます。」

壽「何で泣いて居ると思ふのじや。」

延「悔しい〳〵と頻に斷つて居ますから、其に相違無いのでせう。」

壽「悔しいのは當然じや。年の行かん女の身になつたら、泣くほど悔しいのは無理は無い、私のやうな年寄でも隨分悔しいわい！」

延「それほど悔しいなら御遠慮無くお泣きなさるが宜しい、が、まあ、其の悔しい譯から有仰い。這麼夜更小更に唯二人の、一人は男、年は取つても男は男でせう。」

壽「知れた事じや。」
延「一人は女…………。」
は「それが如何いたしました。」
延「それが忠臣藏の討入に行燈と枕を持つて駈出すやうな不躰裁な形をして居たら、對手は親であらうが、子であらうが、何爲用捨は無い、直に風俗壞亂と認めて差押へます。又、貴方は主人、はすれ奉公人、其の奉公人たる者が主人の前で假にも帶を解くなどゝ那樣不作法な奴が今日有りますですか。それを又指を啣へて蕩然と見て居る主人が有りますですか。」
壽「其處ぢやて…………。」
延「其處です。」
壽「七度搜して人を疑へじや。お前は每も其ぢやから、それでは如何もならんと、私は日頃から言ふのじや。はすが帶を解いた、長襦袢一枚にな

知つて居る。延太郎には今私が譯を話して、お前の顔の立つやうにして遣るから、のう、それて勘辨をしなさい。もう、泣くな〳〵。これ、延太郎、此へ出ろ。」
延「是は風が變つたかな。」
壽「見なさい、はすれ那の通り泣いて居る。」
延「泣いて居ます。」
壽「何で泣いて居ると思ふのじや。」
延「悔しい〳〵と頻に斷つて居ますから、其に相違無いのでせう。」
壽「悔しいのは當然じや。年の行かん女の身になつたら、泣くほど悔しいのは無理は無い、私のやうな年寄でも隨分悔しいわい！」
延「それほど悔しいなら御遠慮無くお泣きなさるが宜しい、が、まあ、其の悔しい譯から有仰い。這麽夜更小更に唯二人の、一人は男、年は取つても男は男でせう。」

壽「知れた事じや。」

延「一人は女…………。」

は「それが如何いたしました。」

延「それが忠臣藏の討入に行燈と枕を持つて駈出すやうな不躰裁な形をして居たら、對手は親であらうが、子であらうが、何爲用捨は無い、直に風俗壞亂と認めて差押へます。又、貴方は主人、はすは奉公人、其の奉公人たる者が主人の前で假にも帶を解くなどゝ那樣不作法な奴が今日有りますてなか。それを又指を啣へて蕩然と見て居る主人が有りますてなか。」

壽「其處ぢやて…………。」

延「其處です。」

壽「七度搜して人を疑へじや。お前は毎も其ぢやから、それでは如何もならんと、私は日頃から言ふのじや。はすが帶を解いた、長襦袢一枚にな

つた、唯それ丈で、お前は私を疑ふのかな。」
延「それ丈？　丈とは何てす。」
は「旦那さまごは迚も若旦那さまの御口には克ひませんてすから、私がお對手になりますで御座います。」
壽「おゝ、然うか。年を取ると此の息が切れて、のう。」
は「さあ、若旦那さま、丈で御座いますか。」
壽「誠に勢が好い、のう。」
は「さあ、若旦那さま、私の帶と此の長襦袢をお疑りなさいますなら、此の包、私の不斷着の此の包、是は何で御座います。何の爲に私が此の包を持つて參つたと思召すんで御座います。」
延「那樣事まで思召して居られるものか。えゝ、穢らしい！　那方へ持つて行け、幾錢貸すものか。」
は「可うございます、誰も借りやうとは申しませんてす。」

延「お互様に貸さうとは言はない。然し、稼人の御亭主が長々の疾病で御難儀の處へ小兒のはあるし、それに此頃の諸色高と來てゐるから、お前さんもお大抵ぢやなからうとも。あゝ、お察し申すよ。」

は「多度那樣事を有仰いまし！」

壽「那と云へば恁と言ふ、我が子ながら殆と憎い口じや。はすや、最一度私に委せな。さあ、延太郎。」

延「お早う御座います。」

壽「何を言ふ？　さあ、此の包が何よりの證據じや。中に在るのは蓮の不斷着、のう、帶を解いて、長襦袢一枚になつて居たのは、之に着更へて了ふと言ふのを、私が折角止めて居たのじや。親の心子知らずめが、少し變つた事でもあると、直に飛返つて騷ぎ立てる。其の、の、後前見ずの、鼻元思案の、無分別の、輕躁の、お祭了簡が惡い疾じやと、日頃から私の言はん事ぢやないわ。」

延「聞かん事ぢやありません。然し、然う言つちや何ですが、阿父さんにも惡い疾と云ふのが有りますですよ。」

壽「又那樣事を！」

延「無いとお言ひなら申します。何か私へお話と云ふと、屹度後が引拔て意見の早替は嚴い事です。意見は意見、話は話、分疏は分疏、詫は詫と、箱を別にして置くやうな事に願ひたいもので。唯今の處は何も意見をされる幕ぢやなからうと思ひます。それは成程七度捜して疑はなかつたのは、私の麁忽かも知れませんが、未だ麁忽か、馬骨か、牛骨か、其邊の見分も付かないのぢやありませんか。果して私の麁忽と云ふ證據が上つたら、そこで意見でも折檻でも何でも爲さるが宜しい、今の所は事實か麁忽か、證據裁判の豫審中、黑闇裏の碁石ぢやないが、白いか黑いか判らないのでさ。嫌疑の有る中は罪人です、神妙になさい。」

壽「おのれ、親を捉へて罪人とは！」

延「盜人を捉へて見れば我が子と謂ふ事も有ります。さあ、事實無根の證明から伺ひませう。」

壽「お丶、聞かして遣るから神妙にしろ。」

延「親を調べるとなると勝手が違ふよ。」

是にて壽右衞門、おはすは互相に事の原委を話す。疑團釋然として延太郎一言も無く面皮を缺く。

は「さあ、若旦那さま、如何で御座います。」

壽「延太郎、如何じやな。」

延「はあ、然う有つてこそ阿父さま！　それで延太郎も安心しました。」

壽「何の事じや。」

延「當節は滅法人氣が惡くなつて、なか／＼以て頭が禿げて居るの、硬い物は咬めないのと謂つたつて、那樣事で油斷も隙も有つたものぢやありません、懷爐も入れずに懷合の煖い年寄と云ふと、皆達者に浮氣を働く、

それが馬鹿に行るので、御存じは無からうが、阿父さんの知合の中にも、はあ、強いのが在ります。然し、内の阿父さまに限つては那樣惡戯をなさる事は萬々無い、無いが、惡い事が行つたものだ、流行となると、つい、それ、遣つて見たくなるのが人情、どうか然云ふ間違の無いやうにと、一人の親であつて見れば、私も是で好い加減取越苦勞をして居るとお思ひなさい。其の矢先の長襦袢！　さては親父も病付いたり…………。」

壽「馬鹿も休み〳〵言へ！」

は「旦那さまの方は若旦那さまが御安心なさいまして、それでお宜うございませうが、私の方は如何が遊ばして下さいますんで御座います。貴方も若旦那さまとも謂れるほどのお方ぢやございませんか、七度搜してから人を疑れと申すぢやございませんか。」

延「阿父さんのを合せると十四度か、然うは私だつて根が續かない。成程お前も無實の罪を被せられたのは悔しからう、腹を立てるのも尤だ。而

して又段々譯を聽いて見れば、お前の骨折と謂ふものは莫大なものだ。禮は改めて言ふよ、褒美は阿父さんの方から出るだらう。私が一寸疑つて見たからとて、何も惡氣が有つた譯ぢやなしさ、謂はゞ出合頭の麁相で、まあ、其の、露地に寐て居る犬の足を蹈んだの見たやうなものだ。堪忍しろ堪忍しろと言つて了へば……………。」

は「あの、何と有仰います！ 散々人に難癖を付けてお置きなすつて、犬の足だなんて、はい、私は如何せ犬の足でございます、犬の足が如何いたしました。」

延「如何したか、それは蹈れた方に聞いて見なくて解るものか。私は蹈んだ方なのだよ。」

は「咎も無いものを蹈れゝば、犬でも怒りますで御座います。」

延「だからお前も怒つたのだ。」

は「若旦那さま、貴方は今何と有仰いました。堪忍しろ〳〵と言つて了へ

ばと有仰つたぢやございませんか。犬にさへ謝るほどのお方が………。」

延「おつと、皆まで宣ふな。案山子が悪けりや謝るよ。」

は「いゝえ、單だ謝るぢや私は不承知でございます。並の謝るのとは違ひまして、上の者が下の者にお謝り遊ばすんですから、そんなら其のやうに廉をお立てなすつて下さいまし。」

延「へつ、下駄屋が修行に出たやうに、異う足元を見るな。如何すりや廉が立つのだ、圓い玉子を四角にでも切つて遣らうか。」

は「那樣物はいりませんで御座います。」

延「だから茹でたのよ。」

は「茹でたのなんぞは所嫌で御座います。」

壽「何故食物の話を始めたのぢやらう。はすそ何かい、詫の證に食物が欲いのか。は、は、は、罪が無くて可い、のう。」

は「あれ、旦那さま、可哀さうな事を有仰います。」

壽「然うではないのか。すると、何じやな。」

は「私は若旦那さまからお詫の證として、唯今限り躰替のお暇を戴きますて御座います。」

壽「それは可かんと言ふに。これ、未だ着更へては成らんよ。延太郎、如何か爲んか、のう。あれ、着て了つたわな。」

延「はすや、まあ〳〵待つたよ。然う、お前、主人を蹈付けるものぢやない。」

は「蹈付けられたのは私こそ。私は何せ犬の足なんで御座いますもの。」

壽「いや、決して犬の足ではないから。」

延「馬の脚のお姫さま！　一寸恁う止めた。」

とおはすが唐縮緬の帶を結める所を、左に右引張つて來て元の座に着せる。

延「それぢやお前は如何しても此の役は勤らないと言ふのかい。」

ばと有仰つたぢやございませんか。犬にさへ謝るほどのお方が………。」

廷「おつと、皆まで宣ふな。案山子が惡けりや謝るよ。」

は「いゝえ、單だ謝るぢや私は不承知でございます。並の謝るのとは違ひまして、上の者が下の者にお謝り遊ばすんですから、そんなら其のやうに廉をお立てなすつて下さいまし。」

廷「へつ、下駄屋が修行に出たやうに、異う足元を見るな。如何すりや廉が立つのだ、圓い玉子を四角にでも切つて遣らうか。」

は「那樣物はいりませんで御座います。」

廷「だから茹でたのよ。」

は「茹でたのなんぞは所嫌で御座います。」

廷「何故食物の話を始めたのぢやらう。はすさ何かい、詫の證に食物が欲いのか。は、は、は、罪が無くて可い、のう。」

は「あれ、旦那さま、可哀さうな事を有仰います。」

壽「然うではないのか。すると、何じやな。」
は「私は若旦那さまからお詫の證として、唯今限り躰替のお暇を戴きます
て御座います。」
壽「それは可かんと言ふに。これ、未だ着更へては成らんよ。延太郎、如
何か爲んか、のう。あれ、着て了つたわな。」
延「はすや、まあ〳〵待つたよ。然う、お前、主人を蹈付けるものぢやな
い。」
は「蹈付けられたのは私こそ。私は何せ犬の足なんで御座いますもの。」
壽「いや、決して犬の足ではないから。」
延「馬の脚のお姫さま！ 一寸慥う止めた。」
とおはすが唐縮緬の帶を結める所を、左に右引張つて來て元の座に着せ
る。
延「それぢやお前は如何しても此の役は勤らないと言ふのかい。」

は「馬の脚には勤め切れませんで御座います。」

延「と謂つて、今お前に引込まれた日には、さあ、大變、現に明日の朝から差支へる。其が解らないお前でもなからう。所で、お前が勤め切れないと云ふのを、無理に此上遣つてくれとは頼まない。だから、此の處でぐつと話を切替へて、甚麼にもお前の勤められるやうにして、而してもう一息勤めて貰はうぢやないか。話は解つて居る、遉なものだらう。」

は「私には些も解りませんです。」

延「お前に勤められるやうにして宛行はうと云ふのだ。」

は「へえ、然う致しますと。」

延「元來お前が勤め切れない、切れないから御免を蒙ると云ふのは外でもない、優雄さんがお前を薔薇子とばかり思込んで、彼此深切な事を有仰る。ところが、換玉の悲さには、好いにも惡いにも巧く是の守をして、屆ける處へ屆ける迄は些の麁相が有つてもならないと云ふので、お前の

苦労は一通りや二通りではないのだ。」

は「然やうでございますとも。」

延「然る上に、お前も優雄さんのやうな紳士から彼此言はれるなんぞは、是は最終最初として、おはす一代記には必ず繪入にして載るくらゐの者だから、お前も恐悦に違無いのさ。然やうでございますともと言はないかい！　所で、段々怺へ／＼た其の恐悦が、斷然破裂に及びさうになつたので、間違の無い内に引退らうと覺悟をしたのは天晴だつた。是は勤め切れまい！と解つて居るものを、無理に勸めろとは言難い。だから、其處を勸めてくれと言ふからには、其の恐悦が破裂して、間違が有つても苦しからずと爲やうぢやないか。」

は「それぢや、あの、間違が御座いましても、あの、麁相が御座いましても、へえ、まあ、其はまあ、私は如何いたしましたら可うございませう。」

延「これ／＼、延太郎、誠にお前には呆れて物が言へん、のう。」

延「だから、貴方は何とも仰らなくても宜しい、萬々私にお委せなさい。」
齋「これ、物事を委せると云ふのは、な、是は確と信用を為た時の事じや。」
延「だから、信用をなさいまし。」
齋「これ、信用すると云ふのは、な、安心が出來る時の事じや。」
延「だから、安心をなさいまし。」
齋「これ、安心を爲ると云ふのは、な、氣遣無いと見込んだ時の事じや。」
延「だから、氣遣無いとお見込みなさい。」
齋「見込めるか、是が！　凡そ物を考へるには、まづ其の先から考へて掛るのじや、痴漢め。間違が有る？　間違が有つた時に單だ間違が有つたで濟むと思ふか。間違が有つたら如何するのじや。」
延「そこらに如才が有りますものか。」
は「本當に、若旦那さま、其時は如何遊ばして下さいますんで御座います。」
延「はす、其時は、」とぐつと脂下り、

延「添はして遣らうよ。」
は「えゝ、あの、添はして?!」
謙「私が成らんよ。」
延「可いから、阿爺さん、お委せなさい。總て私に、えゝ、宜しい。」
謙「成らんよ。はすも成りませんぞ。」
は「若旦那さま、如何いたしましたら宜うございませう。」
延「私といふものが心得て居る。」
は「屹度でございますね。」
延「心得て居るよ。」
は「本當に可いんで御座いますね。」
延「惡かつたら代は戴かないとよ。」
は「でも、それぢや餘りお孃さまに濟みませんで御座いますね。あゝ、嬉しいやうな、勿躰ないやうな、可恐いやうな、變に胸が悸々して參りまし

て御座いますよ。」

（八）　不機嫌の上

優雄
古里

古里遠高慢なる容躰にて獨り葉卷を喫し居る。折から人目を忍びて入來る優雄。

優「おい、如何した。」

古「あゝ、誰かと思つたら貴樣か。」

優「何を生利な！　誰も居りはせん。」

古「令孃は今湯に入りに行きました。」

優「令孃の行つた先を聞きは爲んよ。」

古「はあ、大變御機嫌がお惡い。」

優「あゝ、惡い。」

古「えゝ、然うですか、えゝ、解りました。然し、それは、先生、餘り酷

ちやありませんか。當初に潔くお前に讓ると云ふ先生の言が有つたんでせう。」

春「其が如何したのだ。」

吉「其が如何した？　私は答ふる所を知らずです。先生たる者の口から一旦讓ると斷言しておきながら、今更惜くなつて私を仇敵視なさるんですか。」

春「誰が？」

吉「先生が。」

春「何を言ふのだ！」

吉「然うぢやないですか。それぢや御機嫌の惡いのは？」

春「色々有るのだが、先づ第一に、お前と云ふ者は徹頭徹尾野鄙極つて、それで何處が紳士と見えるのだ。俺が那の位言つたのぢやないか、敢て氣取らんでも可いのだ、唯總てに愼んで居てさへ貰へば。それぢや如何

に何でも春山優雄とは見えんよ。」

直「けれどもが、令嬢は更に疑はんです。」

李「那の令嬢だから疑はんのだ。彼が若し那の小間使であつて見るが可い。忽ち看破されて了ふのだ。」

直「何ですか、先生。令嬢よりは小間使の方が人物が上だと有仰るのですか。」

李「不幸にして身分こそ卑いが、其の性質に於て、其の容貌に於て、其の品位に於て、其の言語動作に於て、其の教育に於て、其の貞淑の風あるに於て、彼は到底召使ではない。其に引替へて、あの令嬢、那は何だい！」

直「何でも宜しいです。潔く譲るといふ先生のお言が有つた以上、又私が靡し得る以上は、那の令嬢は私の物です。既に只今なども、互に胸襟を披いて、まあ止しませう、此際先生の感情を害するに過ぎんですから。」

春「何有、俺は始から那の薔薇子では感情を害して居るのだから、今更那樣心配には及ばんよ。其は其で可いから、お前がもつと愼んでくれんければ可かん。紳士は紳士らしく、えゝ、他のハンカチイフなどを欲がるのは可くないから。」

古「あつ、御存じですか！　然し、那も婦人を悅せる一端で、私が野鄙だの、愼まんのと有仰るけれど、那して令孃の意が有る所を以て見ると、此上愼む必要は無からうと考へるですがな。」

春「それだから那の令孃は鼻持が成らんと謂ふのだ。お前は那を令孃と見て居るのか。」

古「令孃ぢやないのですか。」

春「此の娘だから令孃ぢやあらうけれど、」

古「此の娘でさへあれば　彼の六七萬といふのが利いて居ますからな。」

春「幾計利いて居たつて、娘の物になるぢやなし、其の陋い了簡が既に紳

士でないと言ふのだ。」

直「いや、私は敢て紳士たらんことは望まんです。然し、左に右です、令嬢の大に愛して居ることは爭ふべからざる事實です、私はそれて滿足して居ります。此の一兩日來令嬢の愛の度は非常に高つて來たのです、其が如何に高つて來たかは、先生に對してお話は爲難い、事ほど然やうに

私は滿足して居ります。」

査「默らんかい！」

直「はい。」

査「誰もお前が滿足か、不滿足か、那樣事を聞きはせんのだ。紳士たらんことをお前が望まうが、望むまいが、主人の權利を以て、然う遣れと命令するのだ。」

直「けれどもが、けれどもが、…………。」

査「けれどもがではない！」

古「いや、然し…………。」

春「然しも何も要らん！」

古「一寸そんなら申しますが、抑も先生が私に紳士らしく遣れと言はるゝのは、ですな、春山優雄たるの體面を汚さんやうにあれと云ふ事を意味するのでせう。」

春「知れて居るわ。」

古「然りでせう？　而して其の春山優雄は何等の者であるかと謂ふに、此の令嬢と結婚せんが爲に、而して又其の令嬢の爲人を詳悉にせんが爲に、百有三十一里の道を遠しと爲ずして、故々東上したと言ふのも餘り不見識であるから、外に用事を兼ねてと稱して、」

春「那樣事を言はんでも可い。」

古「事實如此にしてお出になつたのだ。さて見れば、春山優雄たる者の體面と云つて差支無いのでありませう。」

春「恐なことを言ふな。春山優雄の體面は春山優雄たるの體面で尚に、何の爲の體面でもない。」

直「けれどもが、今日の場合では其が重なる體面であることは決して疑を容れんです。さて、然うあつて見ると、如何にしたら其の體面が最も善く保たるゝかと云ふに、結婚せんとする其人をして愛慕措く能はざらしむるに至るに如くは無いのでせう。此に由つて之を觀れば、ねえ先生此に由つて之を觀れば、」

春「煩い！」

直「煩くても何でも、此に由つて之を觀ればでせう。」

春「此に由つて之を觀るのは、結婚せんとする其人の如何に在るのだ。那麼愚劣な女には何とか思はれるだけ紳士の體面を汚すのだ。此に由つて之を觀れば、春山優雄の體面はお前の爲に汚されたのだ。」

直「此に由つて之を觀れば、凡そ紳士の體面は、他の家の下女に愛するに

於て最も善く保たるゝのでありますな。」

「設ひ下女と雖も其人の如何に在る。下女が如何したのか。大體あの蓮葉といふ婦人は、お前如きに下女などゝ輕んぜられるやうな者ではないのだ。」

と優雄の不機嫌は益募る。

不機嫌の下

春山優雄
古里遠
實はおはす

古「然し、下女は下女でありますからな。」

春「他は如何でも可いから、自分を愼め。」

古「失敬ながら先生だつて、下女輩に愛されるのは、餘りお愼みの方ぢやないやうに考へますが。」

春「默らんか！　俺がお前の主人たる以上は、お前なる者は義として那の婦人を下女などゝ言へるのではない。福富家には下女であらうとも、春山優雄の心には神とも佛とも拜まれて居るのだ。それほどに主人の思ふ者を輕蔑するのは、取りも直さず主人を輕蔑するのだ。お前は主人を輕蔑するか。」

古「いや、決して然云ふ事は、」

蒼「無いと謂ふなら、今後那の婦人を下女と思はんか。これ、挨拶を爲んか、何を妙な顔をして考へて居るのだ。」
古「あつ、先生、もうお默り下さい。來たです、來たです。」
蒼「えゝ、何が來た。」
古「令嬢、令嬢！　湯上りの令嬢です。」
蒼「うゝ、厭がりの令嬢か。」
古「先生もうお出で下さい。」
蒼「居たつて可いさ。」
古「先生がお在ぢや甚だ爲難いですからな、どうぞ彼地へお出で下さい。」
蒼「可いさ。些と拜見しやうよ。」
古「お出で下さらんと、先生、何を爲るか知れませんぞ、可いですか。」
蒼「可いさ。」
古「屹度ですな、宜しい！」

入來るおはすは念入別製に粧り立てゝ、嬌々と一擧一動も唯是令孃たらざらんを懼るゝが如し。優雄は其姿を見ると齊く平伏して一禮するを、ぐつと下目に見て、

に「おや、お出でなさい。」

古里は何がな窘めんと思付きて、

古「古里、貴樣少し僕の肩を揉んでくれ。」

耄「はあ。」

古「何を貴樣は睨めるのか、早く此へ來て揉まんかい。令孃、此奴は按摩が餘程上手ですから、僕は内に居ると始終揉せて居るです。」

に「それは何より重寶で御座いますね。けども按摩さんは色氣が無いぢや御座いませんか。それよりは何か隱藝がお有なさりさうな柄ですことね。

古「貴樣、何か隱藝が有るか。」

耄「有りません。」

古「ホウカイと云ふの、那は如何だ。」
は「あら、ホウカイ節？　是非聽きたいものですね。」
古「僕の肩を揉みながらホウカイ節を遣つて見い。」
萬「那樣事は一向心得ません。」
古「えゝ、這奴惡く氣取るな。令孃、貴方の前だものだから極が惡いのです、意氣地の無い奴な。」
は「本當にね、お前さん一つお遣んなさいよ。」
古「遣れよ。」
萬「遣れよぢやありません。な、それ、先生の體面を汚します、馬鹿な事を有仰つては可けません。」
古「馬鹿な事とは何か。然云ふ失敬なことを言ふ奴は猶赦さんぞ。遣れ、遣れ、さあ、遣れ。」
萬「先生は那麼事を有仰るのですけれど、私は何も出來ませんので、まだ

迷惑いたします。どうぞお孃さまから先生へお執成を願ひます。」

は「然う、全くホウカイは行けないんですか。」

峯「一向不調法でございますが、若し私が出來ましたら、お孃さまは其を唄はしてお聽になる思召でございますか。」

は「おや、可厭に突掛る人ね。那樣難しい事は知りませんよ。」

古「眞に然うです。可厭に突掛る奴だ。那樣難しい事は令孃は御存じ有るものか。」

は「本當に可厭な方ね、怖い顏をして他を視て。私は怖いわ。」

と少く席を居去る。

古「怖ければ、さあさ僕の傍に來たまへ。古里、貴樣は全體他を見る顏が怖くて可かんぞ。ちと氣を着けい。而して貴樣は此頃不機嫌な面をして居る、他の事は徹頭徹尾野鄙極るとか、紳士の體面を汚すとか、或は某處の令孃は愚劣だとか、偉さうに言ふけれどもが、我が面を見い。然云

ふ不埒な面をして、令孃を見るなど丶云ふは、第一失敬千萬の至だ。顔色を改めてからにもう一遍謹んで見直せ。」

春「私風情が餘りお見上げ申して、御器量でもお惡くなると可けませんから、是は却つてお辭り申します。」

は「變にお言ひなさるぢやありませんか。お前さんに見てお貰ひ申さなくても、はい、私は始から不器量なのですわ。」

古「まあ〳〵、令孃。古里、貴樣は愈怪しからんぞ。令孃に對して不器量とは何か！」

は「いゝえ、私は不器量に違無いのですから、それで可うございますとも。而して誰も古里さんの御妻君にならうとは申しませんから、決して御心配には及びませんの。」

古「まあ〳〵、令孃。古里、貴樣は實に怪しからんぞ。」

春「何時私がお孃樣を不器量だと申しました。貴方等は何處に耳を付けて

在つしやるのです。」

は「あれ、あの通り、耳さへ滿足に付いてゐないやうに言ふぢやありませんか。」

古「成程然うだ。貴樣は令孃を侮辱志、併せて僕を誹議志たぞ。さあ、果して令孃は不器量であるか、耳の附き所が違つて居るか　能く目を開いて、謹んで見直せ。」

番「御器量の優れてお在なのは勿論、お耳も至極御滿足に、ふつくりと好い恰好に出た鬢の下に相違無く附いてお在です。」

は「今日の鬢は些も好い恰好な事はありませんよ。何でも那云ふ皮肉を言ふのですもの。」

古「貴樣皮肉を言つては可かん。好い恰好でもないものを好いなどゝ言ふのは、貴樣が謹んで見んからだ。更に改めて謹んで見直せ。」

番「然やうなら見直します。」

と優雄は開き直つておはすを視る。

は「又那麼怖い顔をして。」

古「未だ怖いですかな。貴様、顔色を改めろと言ふに、何故か。」

香「それでは恁云ふ具合ですか。」

は「未だ怖いわ。」

古「未だ怖いさうだぞ。貴様、氣を着けんかい。」

香「もう是よりは出來ませんですから。」

と又見遣る。

古「令孃、是は如何ですか。」

は「未だ怖らしいのね。」

古「貴様、もう少しだ、聢り遣れ。」

香「大概にして措いて下さい。」

と又出直して見向く彼方の障子越、忍寄りたる薔薇子の顔が硝子を透き

て見ゆるを、優雄は恍然と眺めて居れば、おはすは又吾を忘れて其の顔を熟と見入る、其の又顔を古里が熟と見入る。旋て優雄が薔薇子と目授すれば、おはすも見取るゝ餘に其を傳へて目授する。同じやうに古里も目授する。

（九）　共ふさぎ

実は優雄
実は薔薇子

優雄巻莨を燻しながら如何にも濟まぬ顔にて考へ居る。薔薇子は其傍に膳を据ゑ、通盆を持ちて、

薔「貴方、御飯を召上りまし。」

雄「はい、難有うございますが、私は戴きたく御座いませんてすから、どうか此儘お下げください。」

薔「何處かお加減がお悪いので御座いますね。今朝唯一膳上つた限で、お晝食も全で上らずに、晩も亦恁うして……本にお顔色も勝れず、鬱いでばかりお在のやうでは御座いませんか。」

雄「はい、何と無く此の胸が切なくて耐らんのです。」

薔「それは、まあ、可けません、お痛みなさるので御座いますか。」

雄「格別痛むでもありませんがな、左の肺が痒う……何か提灯のやうになつて、右の肺がぐつと重くなつて、釣鐘でも下げたかと想ふやうな心持で、究竟兩方の釣合が取れん所から、氣が鬱いてならんのです。」

薔「あの、それぢや依様肺病なので?!」

雄「まあ、そこは肺病のやうでもあり、氣の蒶蘊する所は腦病のやうでもあり、胸が一杯になつて張裂けるやうな所は心臓病? 物の食べられん所は胃病ですか知らんて。夜寢られん所を見ると神經病も有るでせう。」

薔「そりや、まあ、大變ぢやございませんか。何でもお體は大事になさいましよ。而して、貴方のやうな方には幾多でも好い御妻君が御出ですから、お體を大事に御勉強なすつて、早くお美しい方をお迎へなさいまし。是限お目に懸りませんでも、之を御縁に私は陰ながら貴方の健康を屹度祈つて居りますから。」

と通盆を翳しながら薔薇子は顔を背けてほろりと泣く。

雄「辱い！　然云ふことを聞くと猶の事……あゝ、左臂の提灯が飛揚るやうだ。」

と薔薇子の打萎るゝ姿を見て、

雄「あゝ、可愛い提灯！　けれども提灯ぢや……提灯ぢや如何も……えゝ、提灯、提灯！」

と身悶して口惜がる。薔薇子は此聲に駭きて、

薔「えゝ、衝心?!　衝心ですか。」

と思はず優雄に縋り付くを、熟と抱緊めて

雄「何有、提灯ですよ。」

薔「あゝ、然うでしたか。」

と遽に心着きて男の手を振拂ひ、ちやっと退いて居住を直す。

雄「提灯の傍は熱いですか。」

薔薇子は物をも言はず考へ居る。

雄「那樣に熱ければ消しませうよ。」
と優雄も後を向けて默つて了ふ。薔薇子は溜息を吻き、窃と男の方を見遣りしが、段々と覗きながら居去寄つて、又思案に沈めば、同じ思の優雄は同じ事を爲て、交互に居去寄り〳〵する間に行違ひて入替りしとも知らず、
雄「往くなら往くが可いさ。怒ひ顏を見るのは思の種だ。」
薔「あゝ、どうしても私は思切れない、と言つて、餘り身分が違ふから、添ふには添はれず。」
雄「と言つて、此に居れば、顏を見ずには、居られず。」
薔「本當に好かないのは、(と憤れたさうに聲を立てゝ)那の春山！」
雄「見たくもないのは、(と舌打をして)那の薔薇子だ！」
と双方同時に名を呼れて、えゝと吃驚、顏を見合せ、
薔「あつ、貴方は其處に！」

雄「うつ、其處に貴方は！
あゝ、未だ其處にお在でしたか。」
薔「はい、未だ居りました。」
雄「好く居て下すつた。御用が無ければ、まあ寛りお話なさいましな、いや、是は氣が着かんでしたが、貴方は未だ御膳前でしたな、どうぞ上つて來て下さい。」
薔「いゝえ、宜しいのでございますよ。」
雄「宜しいことは有りません、外の事と違つて食事は極つたもので、其の時間には上らんければ可けません。」
薔「然う有仰る貴方こそ、」
雄「私は別です、私は物が喉に通らん譯が有るのですから。」
薔「私だつて物が喉に通らない譯が有るので御座いますから。」
雄「貴方も？　然うですか。」

薔「私は二三日以來陸に物が戴けませんので、蜜柑の液ばかり吸つて居ります。」

雄「それは御難義でせう。何處かお惡いのですか。」

薔「いゝえ、ちつと苦になる事が御座いますので、夜も陸に寐は致しませんわ。」

と熟と俯いて溜息を吻く。

雄「何！　陸に夜も寐ず、晝は蜜柑の液ばかり吸つて、而して苦にして居る事が有ると有仰るか。」

と氣遣はしさうに乘出して、

雄「私も覺が有る！　私も實は陸に夜寐ない、而して晝は莨ばかり喫して凌いで居るので、眩暈がしてならんです。」

薔「然やうで御座いませうとも。私は又舌が粗れて、おゝ痛い。」

雄「貴方が其の纖細い體で、蜜柑の液ばかり吸つて苦勞をして居られては

耐るものではない。」

薔「實に耐りませんの。」

雄「耐りますまい！」

薔「耐りません！」

雄「而して貴方の其の苦になる事と云ふのは？」

薔「是ばかりは親にも私は話せません。」

雄「恁云ふ微力の一書生ではありますが、私で出來る事ならば、貴方の爲に何か一つ竭したいと考へるのですが、私へお話し下さいませんか。」

薔薇子は默つて鬱ぐばかり。

雄「私も二三日內には還らうと思ひます。」

薔「えゝ！」　　と驚く。

雄「それで、逗留中は何彼と心着けてお世話をして下すつた、貴方の御深切は躬に浸みて私は忘れません。其のお禮やら、置土産やら兼ねて、何

ぞ貴方に爲て上げたいのですから、若し差支無くば其の苦になる事と云ふのをお聞き申して、及ばずながら一臂の力をお假し申したいので……其をお聞き申さん内は私も苦になつて、どうも此儘お別れ難い。」

薔薇子はわつと泣伏す。

其の姿を凝然と眺めて優雄は膓九廻の想。薔薇子は涙の顔を振擧げて、衝と居去寄る。

薔「二三日中にお歸去なさるので御座いますか。」

雄「いつそ、もう明日歸ります。」

薔「あの、明日！」　と又泣伏す。

雄（吁、提灯に釣鐘！　提灯だから困る。どう考へて見ても提灯ぢや困る。是が提灯でなければ、せめて燈籠ぐらゐだと、石燈籠でも可し、金燈籠なら猶可し、あゝ、提灯、然し綺麗に好く出來た提灯だ！　極彩色の岐阜提灯、勅使河原でも別製の方だ。嗚呼、見れば見るほど、…………釣鐘

が割れるやうだ。）

と頭を抱へて思案に昧れる。此時漸く面を擧げたる薔薇子は、男の姿を打目戍り、

薔（えゝ、もう私は如何したら可からう！　此人が彼人で、彼人が此人でありさへすれば、何の事は無いのだけれど、彼人が彼人で、此人が此人だから、吁、もう〳〵世の中が可厭になつて了つた。幾許思ふやうにならないのが世の中だと云つても、餘り思ふやうにならな過ぎるわ。明日歸るとお言ひだけれど、私は還しはしない、二三日中なんぞにも還しはしない、せめて私の思切れる迄、斷念の付く迄は、何麼にしても還しはしないわ。いよ〳〵是で可いと、悉皆忘れて了ふまでは、私は留めて置く。けれども、如何あつても私は思切らなければならないのかねえ、——諦めなければならないのかねえ。私は是ばかりは忘れられさうもないわ。）

と又泣伏せば、むく〳〵と優雄は首を擧げて、

雄（如何考へて見ても到底可かん！　何に爲ろ提灯に釣鐘は、社會の制裁が許さんもの。而して又、迚も無い緣なら潔く斷念すべしだ。而して又、此者ばかりが女ではなし、世間には降るほど類が有るのだ。勢已むを得ずして斷念せざる可からずと極つたら、俺も潔く斷念する、おゝ、斷念する！俺も社會に出たからには、夙て盤根錯節に遇ふのは覺悟して居た。今後如何なる艱難の出で來るやも測り難いのに、高が一婦人の愛の爲に俘となつて、死を覓めて得ず、活を求めて得ずと云ふ此の有樣は、仰も何事だらう！　苟も有爲の士たる者は、恁く有るべき譯のものではない。盤根錯節と云へば極めて堅いもの、提灯と云へば極めて輕いもの、其の極めて堅い盤根錯節にさへ遇はんとする者が、一箇の岐阜提灯を踏破り得んやうでは、俺の前途も知るべしだ。踏破る、うゝ、踏破る、踏破ると事が極つたからには、潔く踏破る！）

と大きに力みながら薔薇子の泣伏す姿を見れば、附景氣の覺悟は忽ち鈍

る狀。
薔「あゝ、古里さん、私は如何したら可うございませう！」
と思迫つて擦寄れば、優雄の方からも擦寄られに居去出る。
雄「それはもう如何なりと爲て上げますけれど、何を如何して可いのだか解らんぢやありませんか。さあ、それだから、貴方の苦になる事と云ふのを話してお聞せなさい。」
薔「是ばかりは本當に親兄弟にも打明けられませんのですから、御深切は難有う存じますが、」
雄「話されんと有仰るか、あの、如何あつても？」
薔「は……………はい。」
雄「あゝ、そんなら可う御座います。私は貴方の御深切が身に浸みて、他人のやうには思はれんほど貴方の身上を案じて居るのですから、冗くお聞き申すのも思過しからです。それを貴方は更に汲んで下さらんのだ。

私の心は空家の内井戸で、どうせ誰も汲んでくれんのだ。」
薔「それは私は十分汲んで居りますわ。」
雄「何有、手桶は空の癖に。」
薔「はい、其の手桶の空なのは、」
雄「はい、其の手桶の空なのは？」
薔「餘り一杯入れ過ぎたものだから、疾に箍裂けて了つたのぢや御座いませんか。」
雄「那樣樣子は有りませんでしたよ。」
薔「曩から幾度も目から其水が零れて居るでは御座いませんか。」
雄「うむ、如何樣！」
薔「言はぬは言ふに增す思なので御座いますわ。」
雄「うむ、如何樣！」
薔「えゝ、此の切ない胸の内！　如何したら可いのでございませう、ねえ。」

雄「うむ、如何樣！」

と藥袋も無くへろ〳〵に鈍つて了ふ。

薔「私とても貴方の御深切は身に浸遍つて、忘れやうにも忘れられないので御座います。」

雄「うゝ、成程！」

薔「折角然うして有仰つて下さるのですから、私も此の胸の内をお話し申したいのは、それは、もう山々なので御座います。」

雄「うゝ、成程！」

薔「それが子細あつてお話が出來ませんので御座いますから、どうぞ惡からず思召して下さいまし。」

雄「うゝ、成程！……………と言ひたいが、其の(子細あつて)が嬉くない。是は何分にも私には惡からず思はれませんから、其の意で居て下さい。」

薔「いゝえ、私は其の意では居られません。」

雄「貴方が其の意で居たくないのなら、居ずに在れるやうにして居ないが宜しいのです。」

薔「もう一遍有仰つて下さいまし。」

雄「幾度でも言ひます。貴方が其の意で居たくないのなら、」

薔「はい。」

雄「居たくないのなら、ですよ。」

薔「はい。」

雄「待つて下さい、居たくないのなら…………然うです、居たくないのなら、」

薔「はい。」

雄「然う混返しちや可けませんな。」

薔「いゝえ、唯（はい）と申したので御座いますよ。」

雄「此際（はい）も可けません。」

薔「はい。」

雄「可けませんと云ふのに。」

薔「は…………。」

雄「可けま…………。」

と互に見合つて息を止める。

雄「それでは恁云ふのです、貴方が私に惡からず思つてくれとお言ひのでせう、けれども惡からず思ふ譯には行かんやうな事をして置きながら、それで惡からず思へと云ふのは、貴方が餘り手前勝手過ぎる、那樣難しい註文は御免を蒙るのです。」

薔「然う有仰れば一言も御座いませんのですけれど、是には子細有つて、」

雄「親兄弟にもお話をなさらん――毎々伺ひます。」

薔「それに又此事ばかりは決して口外はしまい、と自分の心にも誓ひましたのですから、どうも今更お話し申しかねるので御座います。」

雄「大きに御尤。然し、貴方は話をしたいのは山々だとお言ひでしたね。」

薔「山々〱なので御座いますもの。」
雄「では、心持は打明けたいのであるが、口外しまいと誓を爲すつたもの
だから、それで、お話が出來ないと、恁う有仰るのですな。」
薔「然うなので御座います。」
雄「では、口外さへなさらんければ、究竟可い譯なのです。」
薔「それは何云ふ譯なので御座いますか。」
雄「まあ、宜しい、それから極めて下さい。」
薔「はい、口外さへ致しませんければ、」
雄「可いのでせう。因で、口外と云ふ字は口の外と書く、でせう、口の外
へ出すと云ふ意味でせう。すれば、口の外へさへ出すのでなかつたら、
外の方法で打明ける分には差支無いと謂つて宜しいのだ。紙に筆といふ
重寶な物が有ります、一寸書いて見せて下さいましな。」
薔「まあ、お待ち下さいまし、書きますのも猶且、あの、然う〱然

う然う、書きますのも口外と同じ事で御座いますもの。」
雄「書くのが口外と同じとは？」
蕾「書くと云ふ那の書の字は、下の方に曰と云ふ字が附いて居りますです。曰は即ち口外でございます。」
雄「うゝ、是は……。」と哽と塞りしが、旋て小膝を拍つて、
雄「いや、未だ有る。書くのが可かんとあれば、爰に形語と云ふの、是は一言も言はずに手眞似や身振の働で事が解るのです。爲形て見せて下さいまし。」
蕾「然云ふ事は私は存じませんのですもの。」
雄「何の雜作も無い事で。一寸例を擧げて見ると、(福富の召使、はす)と云ふのは這麼鹽梅に遣れば可いので。」
と頰を脹して息を吹き、
雄「是がふ〻くです。それから、」

戸を引啓ける眞似して、直に小手を翳して前面を眺める。
雄「是でと(戸)み(見)になります。のと云ふ時には一寸喉に指しをするので。次は、」
飯を搔込むが否や顔を蹙めて胸を拊く眞似。
雄「めしつかへは巧いものでせう。後が(はす)。(はす)れそれ、」
と齒を叩いて、息を吸ひ、
雄「這麼ものです。一つ遣つて御覧なさい。」
蕎「設ひ口外致さない迄も、私の胸が貴方に知れましては、それぢやお話を申したも同じことで御座いますもの。」
雄「いや、決して然うでありません。今のは那は以心傳心の法なのですから、貴方が知せやうと爲たのでもなし、又私が知らうとしたのでもない、唯何と無く双方の心と心とが通つたので、譬へば彼のニウトンの林檎のやうなものでせう。あの林檎先生、那は何も、あゝら御覧じろ、地球の引

力は是でござい、と云ふので落ちたのではありませんよ。又ニウトン先生にしても、此林檎落ちるに相違無しと始から知つて、あの木の下に行つて居たのではない。若し然うと知つて居たら、先生屹度皿にナイフを持つて待つて居たらうに、古今どうも那樣圖は見ませんね。林檎も茫然落ちたのだ、先生も茫然見て居たのだ、所が是が引力の大發明となつたのは、それ以心傳心！　林檎が引力の原理を口外したのではありますまい、ニウトン先生が林檎を捉へて、是非聞してくれと口說いたものでもありません。然し、謂つて見れば、林檎の胸には夙て引力の原理は在つたので、落ちたのは形語を爲たのですね。」

薔「大相お面白いお話でございますこと。」

雄「褒めるばかりぢや可けません。是非林擒の心意氣になつて下さい。」

薔「私のやうな者は林檎なんて那樣洒落た物は格に合ひませんので、精々唐茄子ぐらゐの所で御座いますわ。」

雄「唐茄子が落ちるのは困りますな。唐茄子が棚から落ちてニウトルが頭を撲れる、是は引力よりは膏藥の發明になるのでせう。」

薔「那麼御常談ばつかり。」

雄「さあ、どうぞ林檎の心意氣を。」

薔薇子は何やら思案して居る。

雄「さあ、どうぞ。」

薔「未だ少し熟さないので御座います。」

雄「おや、ニウトンもそこらを彷徨して居ませう。」

と莨を吸付ける。

薔「林檎の事でございますから、甚麼落ち樣を致すか解りませんです。そこを解釋なさるのは先生の學力で御座いますよ。」

雄「心得て居ますが、風で落ちないやうにして下さい。餘り遠くへ飛んだり、日潰を吃はしたり爲るのは困りますから。」

薔「どうせ不器用でございますから、唐茄子の方だと思召して下さいまし。
雄「では、唐茄子ぐらゐの林檎として措きませう、北海道にも那樣のは無い、お珍しいものですな。」
薔薇子は起つて何やら支度のある樣子。
雄「是は御趣向ですな。待つて居ました！　親玉の大林檎！」
薔「さあ、宜うございますか。」
と砂糖を紙に包みたるを見せる。
雄「成程。ビリ〳〵シリツピリイボン。」
と西洋手品の呪を唱へながら其の上で出繼の印を結ぶ。
薔薇子は●件の紙包を三度振り、續いて二度振り●雨手にて顎の下を割りて見せ●鍬を持ちて地を堀る狀を爲し、其の跡を眺めて、一寸首を傾け、粟餅でも捏るやうな手付をして、一つ投げ、二つ投げ●それを拾ひて結合さんとして結ばれぬを、熟と考へ居て●忽ち後の方を見遣り、は

たと小膝を拊つ。
薔「私の苦にして居りますのは是でございます。」
雄「はあ、然やうですか。此の林檎は嵐か何ぞで吹飛んだ鹽梅ですな。」
薔「いゝえ、決して那樣着意ではないので御座いますが。」
雄「いや、ニウトン一つ考へて見ませう。」
と薔薇子の爲た通りを眞似ながら一心不亂に考へ居る。
薔「それは然うと本當に二三日中にお歸りなさいますのですか。ねえ、貴方、古里さん、那は御常談なので御座いませう。」
雄「恁う握つた奴を恁う摘んで、ひよいと投げのひよいと投げ、それを拾つて、結ばうとしても結べない。」
薔「あれ、古里さん。」
雄「結べないから、考へたかな。それとも、如何かして結びたいと云ふので、考へたかな。結びたいは氣に入つた。結びたいので考へたとは、ち

えゝ、不便な奴！」

と思はず見向く途端に顔を合せる。

薔「古里さん！」

雄「はい、はい、はい。」

薔「二三日中にお歸りなさると有仰つたのは譃で御座いませう。」

雄「私は明日歸ります。」

薔「えゝ、そりや本當で御座いますか。」

雄「明日は歸ります。歸る迄に是非これは考へて了ひたい。紙に包んだのは砂糖で、之を三度振りの二度振り、」

と夢中になつて爲形をして居れば、明日歸ると聞きし薔薇子は氣が氣でなく、

薔「あゝ、是は何としたら可からう。いつそ兄樣に打明けてと、」

と起つて行き掛けしが、

薔「如何に何でも自分の口から那樣事が、」

と小戻して、優雄の姿を見れば又氣が變り、

薔「此のまゝ別れて了へば、いくら後では戀しくても、…………えゝ、私は思切れないわ。」

と又行き掛けては考直して立戻り、又行き、又戻るを、優雄は一三昧に例の爲形を示て居たりしが、漸く見着けて、

雄「貴方、如何なすつたので。」

薔「はい、あの、何だか引力にでも引れて居るやうで御座います。」

雄「それは大變！　林檎の落ちるのとは違つて、横へ利くところを見れば尋常の引力ではない。」

薔「尋常の引力ではございませんとも。」

雄「何とか發明したいものだ。」

薔「其の發明が出來ませんので、噫、是はニウトンにも出來は致しません。」

と猶行きつ戻りつする中竟に眩暈を起してばたりと倒れる。優雄は駈寄りて、

雄「あ、もし、如何なさいました。」

薔薇子は額を抑へて苦しげに息を呴く。

雄「安心なさい、依様地球の引力でした。」

（十）道端

春山優雄
古里遠

然る程に春山主從は遠に福富家を發足して、七八町も來たる途中。優雄は件の書生扮裝のまゝにて先に立ち、古里は紳士姿にて大鞄を提げながら submitting ら彼々曳々之に隨ふ。

古「え、、先生、一躰是は何云ふ譯なのでありますか。昨夜まで何等の御内論も無くて、今朝になつて突然、歸るのだから支度しろは、實に百驚を吃しましたな。此の不意擊には味方さへ荒膽を抜れたですから、彼處の家内の狼狽といふものは、殆ど目も當てられんでした。

それに、今日の晝食には、令孃の誕生日だと云ふので、何か空前絶後の馳走を爲る趣で、他も大きに心配して居つたし、此方も實は樂みにして居つたですから、切めて其の晝飯を食つてから立ちませう、と那程然う申

したのに御聽入が無い。私が食ひたいばかりではないのです、他だつてそれ〴〵支度をしたので有つて見れば、折角の心配が無駄になる、であればこそ那して皆が寄つて擧つて拜まんばかりにして留めたのではありませんか。那を振切つて出て來られるとは、之をしも忍ぶ可くんば何をか忍ぶ可からざらんでせう。私は居たかつた！　敢て食ひたいばかりではないですよ。然し、仄に令孃から聞く所に由れば、二の膳付でもつて金蒔繪の膳椀で、料理の數が十五通、其上に一斤五圓の薄茶に菓子が出るのです。之に酒と飯と香物とを併せれば、總計二十品、嗚呼、盛なりと謂ふべしてはありませんか。此の二十品を綺羅星の如く前に並べて、それこそ縱橫無盡に食立て飲立て、此を先途と饜くことを知らなかつたら愉快淋漓として飛躍禁ずる能はず、恰も彼の――虎は搏にすべし、蛟は斷つべし。腰間の秋水凛として氷の如し。」

と吟ずる中に、いつか鞄は置いて劍舞を始める。

古「四方之志は人の識る無く。八斗之才は鬼憎に逼る。」
と益調子付いて、差す手の餘勢に優雄の脇腹を丁と拂へば、先より前後不覺に鬱ぎ居たりし優雄は始めて心着き、
雄「何の眞似だな、晝日中往來端で！ 氣でも違つたのか。」
古「はい、氣も違ひませう、恐くは氣も違ふでせう。氣の違ふのは、私一人に止らんだらうと考へます。」
雄「うゝ、それは私にしても胸が張裂けるやうだ。」
古「先生と私との二人には止らんだらうと考へます。」
雄「おゝ、好く言つた。それゆゑ不便が彌増すのだ。」
と忽ち想出して例の形語を始める。
古「いよう、先生も違ひましたな！ それは何の眞似ですか。先生、先生。是は可かん、是は全くお違ひですな。」
優雄は夢中になつて考へ居る。

雄「可いか、紙に包んだのが砂糖だ。」

古「是は愈〻變だ！」

雄「此の紙に包んだのをチョイ〳〵と三度振つて、チョイ〳〵と後で二度だ。」

古「變、變！」

雄「此が最も解り難いよ。後が、それ、是の、是の、是の、是の、是の、是になるのだ。」

古「いや、全く違つた！　那麼妙な手付や身振などをしては、後で熟と考込んで居られる樣子は、既に立派なものだ。や、又始められた！」

と言ふ傍から後を續けて、はたと小膝を拊つ迄遣つて了ひ、

雄「解るまい。」

古「解りません。其が解つては、私も入院のお供を爲んけりやなりません。」

雄「いや、解らんことは無い。彼の心無き林檎だらう、」

吉「甚麽林檎ですか。」

雄「西洋林檎よ。」

吉「西洋林檎が如何したのですか。」

雄「落ちたぢやないか。那をお前は知らんのかい。ちと本を讀まなければ可かんね。」

吉「うゝ、これは全く狂です。いや、因で解つた！」

雄「解つたか！　感心々々、如何お前は判じた。」

と飽くまで件の形語に心を寄せて居る。

吉「えゝ、解りました。昨夜まで沙汰無て、今朝になつて突然、歸るのだ歸るのだと勝座から鳥の起つやうな騒、はて、可笑いわいと思ひました。」

雄「そこは大きに尤だ。うゝ、それから」

吉「是が何も山中に日を暮して、怪げなる孤屋に一夜の宿を頼んだのではないですから、急に賊の棲家と解つて、命が殆い譯も無いのです。然る

に先生の那の慌て方と云ふものは如何です。もう那の時が既に違つて居られたのです。然う氣が着いて見ると、紙に包んだ砂糖や心無き西洋林檎の如きは敢て怪むに足らんですな。噫、然し、お可傷い事であります！　君は有爲の才を抱きて猶且春秋に富めりと雖も、悲い哉、天の憎む所となりて、不幸緣談中にして發狂せり、………。」

と祭文を讀むやうに節を付ける。

雄「何を言ふ！　誰が不幸緣談中にして發狂したのだ。謊にも怪しからん事を言つたものだ。」

古「決して謊に言うたのではありません。」

雄「猶ほ惡いわ。」

古「では、先生お氣は確なのですか。」

雄「何處に不確な所が在る。」

古「然らば伺ひますが、何故這麼事になつたのですか、いづれ理由が有る

でございませう。先づ其を承つて、成程と了解する迄は、私は先生を發狂者として取扱ひますから、然やうお心得下さい。」

雄「おゝ、唐突に出立した理由か。其の理由は、彼の胸の内ではないが、實に謂ふに謂はれんのだ。」

古「彼とは何でございますか。」

雄「彼か、うふ、ふ、ふ、ふ、彼と云ふのは、ふっふっふっふっ。」

古「として取扱ひますから、然やうお心得なさい。」

雄「さあ、彼と云ふのは……代名詞だわ。」

古「はい、彼と云ふのは、代名詞、下女と云ふのは普通名詞、如何でありますな。」

雄「おゝ、然う、然うだ。」

古「それから又お蓮と言ふと、是は固有名詞です。如何でありますな。」

雄「然う、然うとも。」

古「其の固有名詞の件で御座いますか。」
雄「如何にも其の固有名詞、其の固有名詞と代名詞の一人稱との關繫なのよ。」
古「ですけれどもが、關繫にも二種有ります、曰く普通關繫、曰く特別關繫と。何方に屬するので。」
雄「さあ、普通の如くにして特別、特別の如くにして普通かな。」
古「はあ、胸に應へる。世間には類似の事實が有るものですな。」
雄「世間には之に似た事は古今幾多も有る。因て、儘ならぬ憂世とは、噫、好く言つたものだな。」
古「儘ならぬ浮世とは、噫、好く言うたものです。私の方の作戰計畫も今日明日が機一髪と云ふ所で、既に佳境の又佳境に入りつゝ有つた處を、此の唐突の御出發で、萬事休すと成つて了うたです。もう一兩日、長くとは言ひません、僅もう一兩日の時を與へて下すつたら、那の令孃は一

躍して古里薔薇子となり、此の古里遠は忽ちにして福富壽右衞門氏の女婿となり、ごせう、然う成つて見れば、大事の女婿を他の玄關に預けて置いて、それで陸な修業が出來るものではない、となるでせう。早速引取れて、段々樣子を見ると、此の女婿なる古里遠が天稟の英才驚くべきもので、優に明治の一大人物、と玆に始めて認めらるゝ、となるでせう。然う成つて見れば、到底日本如きで此の偉人を敎育することは出來んからと、話は進んで、海外留學となる。是は其の、舅の費用で留學する婿であるからして、名けて舅費婿と云ひますな。是から佛蘭西の飛脚船スマナイ號に乘込んで、目指す港は馬耳塞、十五海里の速力で、橫濱埠頭を離るれば、殘る烟が癪の種、喃、吾が夫よ………。」と既に振事に及ばんとする所を、優雄は見かねて突飛す。
雄「お前は如何したと云ふのだ！　馬鹿も大概に爲んと、以來發狂者として取扱ふから、然う心得ろ。」

古「然し、先生、私のは發狂の原因が解つて居るですから、未だ是で療治が爲好いで御座います。」
雄「私のでも解つて居るのだ。唯解らんのは、」
と又形語の手付を始める。古里は凝然眺めて、呆れた口が塞らず、
古「先生、それは一躰何ですか。」
雄「發狂の原因は總て此中に秘してあるのだ。」
古「けれどもが、抑も其は何ですか。」
雄「是か。是は以心傳心と云つて、依樣暗號電信の類だな。」
古「而して、其の電信は何處から掛りましたのですか。」
雄「うふ、ふ、ふふ、昨夜掛つた。」
古「固有名詞からですな。」
雄「はつはつはつはつ。」
と猶止まずに例の手付を爲ては肝膽を碎き居れば、見やう見眞似に其の

手を覺えて、古里も竟に始める。

雄「よう、巧い！　巧い〳〵！　巧いものだ。もう一遍遣つて見な。然うだ、然うだ〳〵。それて、如何だ、解つたか。」

古「更に解らんのです。先生はお解りになりましたか。」

雄「更に解らんのだ。」

然う聞いて古里は又始める。

雄「いや、もう止せ、止せ。解つた所で儘ならん憂世だ。儘ならん憂世と諦めたから恁して歸るのだ。恁して歸りながら恁して諦めんと云ふのは不都合な話だ。我々は歸るのだ、歸るのは諦めたのだ、解つたか。」

古「はゝあ、それでは何ですか、恁してお歸りになるのは、お諦めなすつたからですか。志て見ると、恁して急にお歸りになるのは、急にお諦めなすつたのでありますな。」

雄「可いから、もう行かうよ。」

と諦めかねたやうに萎れ返る。

古「はてな、然う急にお諦めなすつたと爲ると、是にも大きに理由の有つて存するやうに考へられますな。抑も諦めると云ふ言は、多少失望の意を含んで居りますてな。」

雄「失望？　おゝ、失望とも。」

古「そこで、失望と云ふ言は、思ふやうに事が行かん時の心持を謂うたものでありませう。」

雄「然う。」

古「して見ると、先生、失敬な申分かも知れんですけれども、先生の方はお出來にならんかつたと見えますな。」

雄「出來なかつたとは？」

古「失敬ながら、お話が付かんのでしたらう。」

雄「話が付かんとは？」

古「彼とです。」
雄「彼と話が付かんとは？」
古「先生は彼を愛しておいでなのでしたらう。」
雄「彼をかい、…………然う。」
古「所で彼は應じましたか。恐くは先生の得點は唯一票の自選と來たのでせう。因で、」
雄「待てよ。」
古「失望となり、」
雄「待てと言ふに。」
古「諦めとなり、」
雄「待て〳〵。」
古「終に歸るとなつた譯なのでありませう。」
雄「待てと言つたら待て！」

玄「はい。」

雄「彼は應じましたか。恐くは、とは何だ。人を見て物を言へ、春山優雄をたる者が召使風情を相手にして、其を心に從はせることが出來んと思ふか。文事有るものは必ず武備ありだぞ。能はざるにはあらず、爲ざるなりだわ。」

玄「それなら何を苦んで失望をなさるのですか。先生の彼を愛して居られたのは事實でせう。而して其の件に就いて失望して居られるのも事實でせう。彼を思ひ此を念へば、斷じて、爲ざるにはあらず、能はざるなりです。噫、お諦めになるの　御尤、失望なさるのも御尤、お歸去になるのも御尤であります。」

雄「えゝ、要らざることを言ふな。お前如き者に紳士の理想は解らん。紳士には名譽といふものが有る、德義といふものが有る、其の名譽、德義の爲には身を殺しても敢て爲ざる事が有るのだ。彼に對する件の如きは

最も其の適例なのだ。能く考へて見るが可い、春山優雄が他家の召使を心に從はして、それで後は如何する。」

古「折角可愛がつてお遣りなさいましな。」

雄「折角可愛がるとは如何可愛がるのだ。」

古「如何と謂うて、それは説明の限にあらず、各自ら力を用ゐるべき點ですからな。」

雄「解らん、更に解らん！」

古「はつはつはつ。」

雄「長く愛すると謂ふのか。」

古「はつはつはつはつ。」

雄「夫婦になると謂ふのか。」

古「はつはつはつはつ。」

雄「お前の言ふのは其の意味だらう。」

古「はつはつはつ。」

雄「何を笑ふのか、可笑くもないのに。然うか、其の意味か。」

古「勿論！」

雄「はつはつはつはつ。」

古「これは怪しからん。はつはつはつはつ。」

雄「解りもせんで。はつはつはつ。」

古「何方が解らんのですか。はつはつはつはつ。」

雄「お前が解らんのよ。はつはつはつはつ。」

古「はつはつはつはつ、解るも解らんもないぢやありませんか。愛して居ればこそ心に從はせるのでせう。其の者が心に從うて見れば、益可愛くならざるを得んでせう。益可愛くなつて見れば、片時たりとも其傍が離れられんでせう、片時たりとも其傍が離れられんとして見れば、夫婦にならざるを得んではありませんか。這麼知れ切つた事を、はつはつはつ

はつ。」

雄「はつはつはつはつ、愛したから心に從はせる、心に從はせたから益可愛くなる、可愛くなれば傍が離れられん、傍が離れられんから夫婦になる、那樣事をお前に習はうか。古里遠ならば然う輕々行かうけれど、春山優雄は人にも知られた京都で有數の紳士だ、其人が苟も召使風情と結婚が出來ると思ふか。名譽と云ふものが有るわ、德義と云ふものが有るわ、紳士には紳士の體面と云ふものが有るわ。お前と私とは少し身分が違ふのだから、はつはつはつはつ。」

直「はつはつはつはつ、苟も結婚の出來んやうな下等極る召使風情に何で愛なすつた。」

雄「うつ。」　と塞る。

直「はつはつはつはつ、もう一遍、はつはつはつはつ、更に、はつはつはつはつ、重ねて、はつはつはつはつはつでせう。」

雄「愛ゑたが如何した！　設ひ召使風情たりとも愛すべき値が有るから愛ゑたのだ。」

古「是は更に笑はざるを得ません、はつはつはつはつ。愛すべき値あるものなら、乃ち結婚すべき値有るものでせう。」

雄「うつ。」　と又塞る。

古「度々で可厭になつたけれどもが、是非もう一つ、はつはつはつはつ。」

雄「いや、違ふ！　愛するのは愛するの、又結婚は結婚で、自ら別問題だ。愛するといふ事は偶然で、結婚と云へば人爲的だ。設へば我々が恐多くも英國女帝ヴヰクトリア陛下を見染め奉るかも知れんよ。何と偶然だらうが。」

古「寧ろぐうぜん絕後でせうな。」

雄「偶然の事は人力に及ばんのであるから、之を以て其人を責める譯は無い。然し、結婚は人力に及んで居るのだから、是には斟酌が有る、又制

裁が有つて、無法な事は出來ません。ロンドンの宮內省へ宛て、結婚の願書が差出せると思ふか。」

古「うつ。」　と塞る。

雄「春山優雄は京都有數の紳士、おはすは福富家の召使、どうも提灯に釣鐘で、此の緣は結びかねる、因て諦めた。諦めたのは斟酌した所、諦めなければならんのは制裁の有る所だ。噫、諦めんと欲すれば愛ならず愛せんと欲すれば紳士ならず、」

古「先生進退維に谷る。」

雄「其の胸中の苦しさは、古里、お前幾許かと思ふ！」

と思逼つて泣聲になる。

古「はい。」

雄「さあ、笑へるものなら笑つて見ろ。」

古「はい。」

雄「さあ、いくらでも笑ふが可い。」
古「はい。」
雄「笑へと言ふに！」
古「どうも可笑くもないのに笑はれんです。」
雄「可笑くなければ、悲く思ふか。」
古「はい。」
雄「悲しいか。」
古「はい。先生の事を想ひますに就けて、自分の事が悲くなります。」
雄「悲しければ一處に泣くが可い。」
古「それほどでも有りません。」
雄「噫、然うでない、もう悲むまい。喜怒哀樂愛惡欲は一時の感情に過ぎんのだ、僅一時の感情の爲に紳士の德を傷けるには忍びんから、如何にも諦めたが、彼の事は諦めたが、唯氣に懸るのは那の形語、此の意が解

けたら、それて思置くことは更に無い。是一つが煩惱の種だなあ。」
と又例の復習を始める。
吉「はっはっはっはっ、何の彼のと言うて、其實紳士の德は傷だらけなのでせう。先生、此は往來中の而も青天白日の下です、其の態は餘り紳士の體面に關せん事も無いやうです。えゝ、先生、もう大概になさいませんかな。あつあつ、前面から人が來ますがな。」
優雄は前後不覺となつて其にばかり身を入れて居る。
吉「先生！　さあ、もうお止になりませんか。傍で恁う拜見して居るやうな、お待ち申して居るやうな、甚だ要領を得ん者が此に一人出來て了うたてはありませんか。何分此者の處置に困るです。よう、數を遣るゝ中に段々熟練して、輕妙なものですな。是は面白い！　唯居るのも無聊ですから一寸拜見。」
と手早く鞄を開きて双眼鏡を取出し、

古「之を逆にして遠くに見るのも亦一興。」

と彼邊此邊に當てゝ優雄の姿を覗きながら。

古「ほう、小い。小い癖に高慢な顔をして、おう、盛に手を動かす、動かす、首を掉る。宛然一匹の蟲の跪くが如し。顯微鏡檢査の結果戀のバクテリアは發見されたり！　如何です、先生。面白い〳〵、ちと御覧になりませんか。双眼鏡は倒に見るに限るですな。」

優雄は豁然とした塩梅で丁と横手を拍つ。

古「いよう、次なる藝道ですな。」

雄「讀めたぞ！　古里、解つた！」

古「おゝ、眞向々々。然し、好男子さな。」

雄「何を爲て居る！」

と矢庭に眼鏡を引手繰る。

古「はつ、其處にお在でしたか。」

雄「何の事だ。」

古「如何でした。」

雄「少し解つたぞ。」

古「見えましたか！」

雄「何が？」

古「何ですか。」

雄「何だ！　暗號電信の小口が解つたと云ふのだ。」

古「それは結構です。伺ひませう、今度は伺ふのです。」

雄「何爲今度だ。」

古「いや、餘り退屈しましたから今まで其處等を眺めて居つたのでした。」

雄「漸く首の方だけ解つた。恁うだて、包の中は砂糖だらう、それを三度振つた、で、是がふるさとう三だ。又二度振つたから、二だ。ふるさとう三二は如何だ。」

古「古里さんにですか、なつ、なつ、黄なる絹にして幼き婦なる哉。なつ、なつ。」

雄「それから、両手で恁う腭の下を劃るのは、是は（首たけ）に極つて居る。首たけの下の句は惚れたと云ふやうな事に極つて居る。それ、地を掘る狀だから、ほれる歟ほれた歟だらうけれど、其跡を眺めて、一寸首を撚るのが、どうも解らんよ。」

古「なつ。ほれた跡を眺めて考へるのですな。」

雄「然う、なあ、首たけ惚れた後を能く見て考へるかな、」

古「と先づさて措いて、其先の根つては一つ投げ、二つ投げは何云ふものでありませう。」

雄「惚れた跡を能く見て考へれば、ちぎつてから投げられる？」

古「投げてから味噌を付ける。」

雄「眞面目に／＼！　恁つと、投げたのを結ばうとして、結ばれんと。」

古「結ばれんから考へたのですな。」
雄「おゝ、然うだ、ちぎりが結ばれんと解くのだ。」
古「然うすると、彼の投げたのゝ始末が付かんぢやありませんか。」
雄「始末が付かんから投げて了つたのさ。」
古「眞面目に〳〵！」
雄「全く投げる處には意味は無いので、結ぶ爲に二つ捩つて見せたに違無い。然う、投げると解釋するから惡い、二つ捩つたのだ。」
古「それで義理明晰と成りました。因で、其を考へたのは……前に一度首を捻りましたな。」
雄「前に捻つたのを考へると解いて見ると、今度のは又考へるでは當らんね。」
古「始は捻つて考へた、今度は考へて、考へて、考へて、考へ拔いて、考へが付きませんな。」

雄「契が結ばれん……………結ばれさうなものと工夫をした？　工夫をしてから後を見ると、はっと小膝を拊つて考付いた、とする。何と無く解つて來たやうだな。首から一つ遣つて見やう。」

古「讀書百遍義自ら通ずです。私もお手傳しませう。」

雄「善し。ふるさとう三二、」

古「首たけ。此までは完全無缺なものです。」

雄「首たけほれた跡を能く見て考へれば、……………首たけ惚れた……………古里、首たけ惚れたとよ！　他も首たけ惚れて居たとよ!!　首たけ惚れて居たのか、おゝ、然うか、然うであつたか。然うであつたらう、然うであつたらう！　然う想はんではなかつたけれど、然うとお前の胸を聞くのは今が初發だ。好く言つてくれた、辱い！　難有い！　嬉い！　謝す！　ああ、それで滿足した！」

古「お靜に願ひますよ、先生。」

雄「静にしては居られん、他も首たけだとよ！」

古「解つて居ります。」

雄「あゝ、昨夜だ、是限お目に懸りませんでも、之を御縁に私は陰ながら貴方の健康を屹度祈つて居りますから、と顔を背けてほろりと泣いたぢやないか。那の姿は今も目前に隠顕して居る。未だ其ばかりではない、明日還ると言つた時には、物も言はずにわつと泣伏した。那の聲は今も耳に付いて居る。唯懇意になつた丈の間で、是限逢はんでも陰ながら貴方の健康を屹度祈るなどゝ云ふ語が出るものではない。縦し語は出てゝも、那のほろりが出るものではない。假にほろりは出るとしても、那のわつと泣伏せるものではない。古里、彼は全く首たけ惚れて居たのだよ。」

古「解つて居りますと言ふに。」

雄「あゝ、不敏なものだ。今頃は如何して居るか知らんな。定めて蜜柑の

液も喉へは通るまい、而して泣いてばかり居るだらう。泣くな、よ、泣くな。何事も是までの縁と諦めるより外は無い、然う泣いてくれるな。さあ、もう〳〵泣くなよ。」

と吾を忘れて古里の傍へ寄行く。

古「私は泣きは爲んです。先生、貴方こそ涙が出て居りますが。」

雄「出て居ては惡いか。」

古「それは御自分の物を御自分がお出しになるのですから、可然くお取計になるが宜しいでございます、けれどもが、（首だけ惚れた）までは解つたにした所で、未だ其の先が有ります、而も運命は其の先に因つて決せらるゝので、今は涙よりは智慧をお出しになる可きです。」

雄「其は知つて居るけれど、智慧を出して居る中に涙が出て來たのだ。涙の方は液體だから、どうしても出が善い。智慧となると、結晶して居るのを碎いて、其を鎔して搾るのだから。」

古「では、搾り立の温いところで更に一つお考へなさいませ。」
雄「善し、それぢや大に搾るぞ。」
古「米泔汁などをお入れにならんやうに。」
雄「何を？」
古「いや、首たけ惚れた跡を能く見て考へれば、契が結ばれん……から工夫をゑたが、」
雄「如何にも接續が惡いな。首たけほれた……ほれて……ほれて見たが、」
古「樣子が惡くなつて來たてすな。」
雄「ほれて居る、ほれては居るが、然うだ、居るがと解くのだ。堀つた跡を眺めて、ほれては居るがと首を撚つたのは面白い。此が一寸働いて居るぢやないか。」
古「そこよりは鍬を持つた所の方が負に働いて居ります。」
雄「眞面目に〳〵。惚れては居るが、契の結ばれん……と考へた、……結

ばれんのを苦にして居ると、後から……後から、」
と頻に膝を拊つて、
雄「おゝ、然うだ？　合點が行つた？　讀めた？」
と色々に言試るのを、履違へて、
古「解りましたか。」
雄「未だ〳〵。」　と又膝を拊つて、
雄「解つた？」
古「いよ〳〵解りましたか。」
雄「未だ〳〵。後から解る？　と云ふのかな。契の結ばれん、……結ばれ
さうなものと工夫をして、……契の結ばれん……譯は？　譯は、譯は、
あつ、結ばれん譯はと解くのだ。譯は後から解る。是で善い！　古里、
悉皆解つた。」
古「未だ〳〵。」　と傍目も振らずに獨り爲形をして居る。

雄「此方で解つたのだ。それ、此の通、一寸見てくれ。」

と是より爲形まじりにて、

雄「ふるさとう三二、首たけ、ほれては居るが、ちぎりの結ばれぬ其の譯は、後から解る、ヽ甚麼ものだ！」

古「正に！」

雄「是に違無いと爲ると、其譯は後から解るが氣になるな。何爲契が結ばれんのだらう、而して何爲又後からでなくては其譯は解らんのだらう。」

古「究竟先生の前では言難いのでありませう。」

雄「何爲言難いのだらう。」

古「究竟可羞いのでありませう。」

雄「何爲可羞いのだらう。」

古「究竟先生に愛して居るからでせう。」

雄「何爲愛して居るだらう。」

古「はい？」

雄「どうも然うでない、何か外に秘密が有りさうに想はれる。」

古「お〻又お鬱ぎですか。お解りにならんと云うては鬱ぎ、お解りになつたと云うては鬱ぎ、ふさぎが二匹で飛んだり跛ねたり、那の二連を持つて來れば可うございましたな。」

雄「鬱ぎは爲んよ。」

古「お考へですか。」

雄「考へも爲んけれど、」

古「憶出してお出なのでせう。」

雄「然うでもないけれど、………古里、もう一遍返らうか。」

古「はあ？」

雄「もう一遍行かう。」

古「福富さんへですか。」

雄「可笑いかな。」
古「參りませう！　私は喜んで參ります。何に爲い機一髮と云ふ所で脫然と出て來たのですからして、返りたいのは私心魂に徹して居るのです。車を命じませう。」
雄「これ、待たんかよ。お前の返りたいのを聞くのではない、可笑いか、如何かと云ふのだわな。」
古「恁うなる以上は可笑くたて何だつて管はんてす。」
雄「何も那樣に死物狂になる事は無い、唯可笑からうか、如何か、と其處を聞いて見たのだ。少し髭が惡からう。」
古「惡くたて宜しいぢやありませんか。」
雄「又！　宜しい宜くないの論ではない、餘り妙ではなからうと云ふのだ。」
古「決して妙てはありませんな。」
雄「何しに返つて來たと思はれるだらう。」

吉「けれどもが、此件で(と形語の手付をして)返つて來たとは思はんですよ。」

雄「それを思はれて耐るものか。如何か巧い口實を設けて一寸返りたいがな。」

吉「一寸なのですか。」

雄「何爲。」

吉「一寸では滿りません。寡くとも今夜は泊つて、樣子に據つたら二三日も居る見込でなければ。」

雄「それは又都合で、」

吉「居つても宜しいのですな。――參りませう。」

雄「唯參りませうでは行かれんよ、何とか引返して行くだけの事情を拵へんければ。其を一つ考へるのだ。」

吉「又考へるのですか。やつ、先生もう考へてお在なのですな。」

と同じ形をして暫く思案の躰。
雄「はて、何とか、」
古「有りさうなものだ。」
雄「あゝ、古里、あゝ。」
と卒に頭を抑へて倒れかゝる。
古「如何なさいましたな。」
雄「急に頭痛がして、目が眩んで、腹が痛み出した。此の二三日絶食の所爲と見える。」
と苦みながら大地に坐る。
古「それで宜しい！」
雄「何が宜しいものか。」
古「先生、途中急病と云ふので引返しませう。」
雄「おゝ、可、可、可か……らう。」

と片手に頭、片手に下腹を抑へて倰僜と立上る。

（十二）舞もどりの上

壽右衛門
延太郎
薔薇子
おはす

薔薇子令孃姿にて藹然と寢床の上に坐り、枕頭には壽右衛門、延太郎。

壽「甚麼鹽梅じやな。」

延「如何したのだ、急に。」

薔「はい、胸が切なくて。」

壽「それは困るのう。如何切ない？　楚痛でも來るか。」

薔「楚痛もしませんけれど、心の方が焚えるやうで、上皮が裂けるやうで、」

延「大變だ！　而して氣分は如何だね。」

薔「悲しいやうで、憤れったいやうで、悔しいやうで、儚いやうで、」

壽「大變じや！　一躰お前は割合に丈夫な質で、とんと今まで那樣事は無

かつたのぢやがのう。」
蕎「えゝ、今度初發。」
延「酷く羸れたやうだね。」
蕎「然うでせう。」
壽「而して誠に昏騰してゐる、のう。」
蕎「然うでせう。」
壽「何うも、延太郎、困つたものぢやのう。」
延「困つたものですな。」
蕎「困つたものです。私の思ひますには、乾度此の病氣は重いのですよ。」
延「はて、重寶な病人も有つたものだ、自分で一寸醫者を兼ねる所が妙だ。
如何なものでせう、先生、命に別條は御座いますまいか。」
蕎「都合に因つては甚麼事になるか知れませんから、お氣をお着けなすつて。」

薔「つまらん事を言はんが可い！　延太郎も何の事だ、病人を玩物にして。お前も然うだ、病人の癖に達者な者を玩物にして。」

薔「でも、此病氣は屹度急には瘥りませんもの。」

薔「飛んだことを言ふ、其しきの病氣は直に瘥るわ。」

薔「いゝえ、屹度瘥りません。」

薔「直に瘥る。直に瘥して見せる。」

薔「瘥りません！　私は瘥らないで見せます。」

延「是は面白い、藥と病氣の問答ですな。」

薔「時に何は如何じやな、優雄さんは。那なら異存は無いかい。立派な方ぢやらう。」

薔「…………。」

薔「如何じやな。」

薔「…………。」

薔「如何じやな。如何じやと言つたら返事を爲んか。」
薔「あ、痛、た、た、あゝ。」　と遽に胸を抑へて摚と横になる。
薔「た、た、た、大變！　延太郎！」
延「はい、はい、はい、唯今。」
と慌てふためいて薔薇子を介抱する。
薔「早く醫者じや、醫者じや。これよ、醫者は居らんか。」
と立つたり居たりして無性に手を鳴す。
延「阿爺さん、醫者は内には在りませんよ。」
薔「探せば何處かに在る筈ぢやが、無けりや直に買ひに遣る。」
延「何でも可いから早く買ひに遣つて下さい、大いのを三四個。」
薔「唯々。これよ、誰か、蓮や、醫者の大いところを三四個！」
此時薔薇子は一層苦痛の劇しき躰にて、
薔「あゝ痛、た、た、うゝ、うゝ、うゝん。あ痛、た、うゝん、あ痛、た、

うゝん。」
延「阿爺さん、大變、大變！」
壽「延太郎や、大變か。おゝ、大變、大變！」
と今は耐りかねて人を呼びに駈出でんとする出合頭、
は「大變、大變！」
とおはすの走り込むのに撞當る。
壽「おゝ、大變じや、大變じや！」
は「大變、大變、大變でございます。」
壽「はすや、大變じや。」
は「旦那さま、大變でございます。又お入來になりました！」
壽「おゝ、もうお入來になつたか！　はあ、そりや早かつた、のう。何か、大いのが三四個か。」
は「いゝえ、中位のがお二人。」

壽「中位でも苦くない、早く此方へお通し申せ。延太郎や、中位のお醫者がお二人見えたとよ。」
延「へえ？　餘り早過ぎますな。」
壽「それも然うさの。」
延「はすや、誰がお迎に行つたのだい。」
は「誰がお迎なんぞに參るもので御座いますか。先樣が御勝手に入しつたので御座います。」
壽「これ、何處の國にの、醫者が繋つて振賣に來るものか。慌てるな。今それ所ではない、那の通孃が急病じや。早くお醫者の處へ人を出して。」
は「えゝ、お孃さま御急病！　さあ、又大變!!」
延「何にしろ此の急場の所ですから、阿爺さん、まあ其の振賣、賣、賣、賣、賣、振………。」
壽「何を！」

延「賣振、賣振の醫者をお呼びなさい。」
嘉「おゝ、然うじや。それでれ、はすや、其の賣振、振、振、振、振、振
…………えゝ慣れつたい、早く此へ連れて來な。」
は「はい？　うりふりふり〳〵ふり〳〵〳〵の何で御座います。」
嘉「其の戸外へ來たと云ふ醫者を此へ連れて來るのじや。」
は「はい？　戸外へお醫者様なんぞ參りは致しませんです。」
嘉「えゝ、もう何の事じやい！」
延「えゝ、解らない！　誰が來たのだ。」
は「誰がぢや御座いません、春山様で御座います。」
之を聞くと薔薇子は勃と起直つて聽耳を立てる。
嘉「何をお前は然う慌てるのじや。今朝お立になつたのが春山様、」
は「又お入來になつたのも春山様。」
嘉「何ぢやと、今朝立たれた春山様が又お入來…………延太郎、何云ふのぢやら

う、のう。」

延「何云ふのですかな。何ぞ忘物？」

薰「何ぞ急用？」

延「擦徒にでも遣られたのか。」

謙「道でも解らんのか。」

薔「はすや、春山樣は依樣那の、お二人で？」

と漸々くを這出る。

は「はい、お二人で。」

薔「お變も無くて？」

は「私はうつかりお取次に出ますと、此の裝でございませう、ですからもうう慌てゝ了つて些の瞥と見たばかりで、私は駈込んで參つたので御座いますから、能も解りませんですけれど、先程お立になつたばかりで御座いますもの、大したお變もございますまい。本に私は忘れて居りま

した、お孃さま、御病氣は如何て在つしやいます。」
薔「本に私も忘れた居た。」
薔「それて、お客樣はお通志申したか。」
は「いゝえ、お玄關にても立つて在つしやいませう。」
薔「何爲早くお通し申さないのだらう、ねえ。」
は「那樣事を有仰いましたつて、私の恰好を御覽忎ましな、首がお孃さまて胴から下がお蓮では、如何なとにも出られませんては御座いませんか。」
延「おゝ、然うだ。もう一度御召更だ。さあ、早替り〳〵。」
薔「然し取次が此の急病では。」
と臥褥を見れば薔薇子は居らず、四下を眗して、つい傍に顏を合せる。
薔「おゝ、お前急病は如何した。」
薔「あの、急病は、」
延「おゝ、然う〳〵、急病の一件、大した急病だつたが如何なつたえ。」

蓉「つい如何かして了つたわ。」

蓉「そこらへ捨てゝ置いては可かんな、外の物とは違ふて。」

延「本當です、踏付けでもすると大事だ。病は足の頭から傳染すると謂ひます。」

蓉「早く拾ひな、拾ひな。」

と氣味を惡がる。

蓉「病氣は何處へも行きはしません、丁と復つて了つたのですから大丈夫です。はすや、早くお前の着物を持つて來ておくれ、而してお前も急いでお着更へ。」

此時案內の電鈴が連りに鳴る。

蓉「さあ〳〵取次々々。」

蓮「私が唯今參ります。」

延「これから着物を着更へるのぢやないか。それまで玄關に待せて措ける

ものか。阿爺さん、私が行きませう。」

薔「私も行かう。」

は「それぢや召物を取つて參ります。」

と三人ともに入る。薔薇子は得々立上ると、忽ち眩暈がして倭僂くと倒れる。

薔「あゝ、嬉いと思つたら胸が爽然として、胸が爽然としたと思つたらお肚が急に空いて來たわ。けれど、恁うしては在れない。」

と又立上れば倭僂くとなる。

薔「あゝ、向者のは嘘だつたけれど、今度のは本當に苦しい。」

おはす着物の包を持ち來る。

は「さあ〳〵召しまし。おや、如何遊ばしました。」

薔「あ、あ、はすや、着物よりは先食物を持つて來ておくれ。」

は「何と有仰います。」

薔「何か食物を持つて來ておくれよ。」
は「召上り物を？　あの如何あそばしますんで。」
薔「食物は着られはしないわね。」
は「着物は召上られは致しません。」
薔「それだから持つてお出と言ふのに。」
は「ですから持つて參ります。」
薔「早く！」
は「唯今！」

舞もどりの中

（壽右衛門
　延太郎）

壽右衛門庭草履を踏き、前後を眴しながら木立を潜りて出づれば、彼方より延太郎は扱足にて飛石を傳ひ來る。

延「阿爺さん、お喜びなさい。」

壽「おゝ、然うか。」

延「御安心なさい。」

壽「おゝ、然うか。」

延「明日が日にも目をお瞑んなさい。」

壽「おゝ、然う…………何ぢやと。」

延「悉皆見届けました。」

壽「おゝ、然うか、御苦勞々々々々。而して甚麼鹽梅じやな。」

延「至極好い鹽梅です。確に相違ありませんな。那の樣子で見ると二人の間に話は出來て居るかも知れませんよ。」

壽「ほゝう、那樣鹽梅か。」

延「那樣鹽梅にも這麼鹽梅にも、那の鹽梅は唯で見てゐられる鹽梅ぢやありません。左も右も自分の妹だから我慢して見て居ましたけれど、那が他人だつたら私は石を放り込んで遣るのです。」

壽「ほゝう、然うか、二人睦しくまして……それは目出度い。然し、有繫は優雄さんじや、うむ、目が有るのう。」

延「ところが、行つて御覽なさい、からもう目を無くなして騷いで居るのですから。」

壽「薔薇子も有繫じや。是も目が有る！」

延「ところが、是も無い！」

壽「然うして互に思合つてゐるものを、いつまでも苦めるのも殺生じや。

断然然うと解つたなら、今夜あたりにも二人に話をするが可からうて
ないかのう。」
延「二人は然ぞかし喜びませう。あゝ、薔薇子は巧く遣りましたよ。」
と如何にも可悔さうに言ふ。
喜「いや、然し、お前は一躰早呑込ぢやから誠に氣遣でならんが、二人は
全く睦しいのかな。」
延「へつ、睦しいのか、睦しくないのか、私のやうな者には解りませんが、
唯男と女と寄つて纏綿して居るのです。睦しいと云ふと、もう少し見好
い譯のものなのでせう。」
喜「ふむ、餘程久しく見て居たか。」
延「私だつて然う長く見ては居られますまいぢやありませんか。然う疑る
なら阿爺さん行つて一つ撿分をなさいな。」
喜「おゝ、善し、念の爲撿分は爲るとして、若し然うであつたら、今夜に

も二人に話をさせたいのぢやが、優雄さんの方はお前一つ掛合つてくれ、のう。」
延「宜しい、一つ譚つて遣りませう。」
壽「又始めた！　人を譚へと言付ける親が有るか。」
延「娭けと言付けた親は有ります。」
壽「何と！」
延「一つ吽と掛合ひませう。」
壽「談判をする譯ではないから、のう。」
延「はあ、宜しい。」
壽「それでは一寸行つて見やうかの。」
延「行つて見るは可うございますが、例のゴホン〳〵は禁物ですよ。阿爺さんの咳と來ると四邊へ響いて、出たら限無しと謂ふのだから、那が始つたら、直に露顯てすから。」

壽「えゝ、可いから行きなよ。」

延「忍足は巧いものですな。其の屈み振が酷く氣に入りました。私には然うは行きせん。」

壽「年寄を馬鹿にするな、是は腰が曲つて居るのじや。」

舞もどりの下

〔優雄
　延太郎

ラムプを間に二人相對ひて、延太郎は極の眞面目、優雄は神妙に畏り居る。

延「えゝ、外の儀でも有りませんが、那の召使の蓮の事に就いて少々お話が致したいので。」

雄「えい、那の……………は、はあ、成程。」

延「君は那の者と何かお約束でもなさいましたか。」

雄「いや、決して約束などは、」

延「なさいません？　然し、何かお互の間にお話がありましたらう。」

雄「それは毎日顏を合せることでありますから、自然話も致しましたし、又那の婦人が誠に行屆いて深切に世話をしてくれますから、私に於ても疎ならず思つて居ります。」

延「疎ならず？　俗に云ふ、嬉いのですな。いや、未だ何とか思ひましたらう。」

雄「何と思はうとも私が勝手に思ふので、那樣事まで貴方の指圖は受けんのです。」

延「利いた風なことをお言ひなさんな。那の蓮なる者は宅の召使はして居ますが、尋常の召使とは召使が違ふので、來年が一夜明けて鴉が啞と啼けば、此の福富の奥樣に直らうと云ふ花嫁見習の身の上です。」

雄「えゝ、それぢや那のお蓮さんは此方の嫁御……則ち貴方の御細君……ちえゝ！」

と吾を忘れて口惜がる。

延「則ち拙の持物でげす。」

雄「然うとは知らず……！」

延「然うとは知らず、君は如何爲すつた。いゝえさ、如何爲すつたのです。

惚れた譯なのでせう。儘ならぬ世の中と云つたやうな譯なのでせう。其を疎ならずか何かで手輕に噛さうと爲たつて、然うは行きませんのさ。」

此にて優雄は急に例の形語の契つては投げる條を始めて、

雄「契の結ばれぬ其の譯は、おゝ、是であつたか！」

と膝を疊に打着ける。

延「何、何、何、何！　契の結ばれぬ其の譯は、おゝ、是であつたか！」

とは聞捨になりかねる。」

と突如に優雄の胸座を把る。

延「さあ、それまでに君が話を付けた事とは夢にも想はなかつた。知つての通り内の親仁は那の彌喧屋だから、一夜明けて鴉が啞と啼けば私の所好自由になる女でも、一夜が明けず、鴉が啞と啼かない、限は、預り物の他の娘、蝶慢な事が有つては家の掟が立たんと、今日まで三箇年の長の月日一つ屋根の下に寐起をして居ながら、唯の一度傍へ寄つて小指の

先に觸つた例も無い位に、それは初中終睨み付けられて、心は互に通へども、籠の鳥かや、夫婦の玉子、こんな緣がからにも在ろかと云つたやうな二人が中。未だ〳〵三七廿一日なら斷食も續く、此方は三箇年の精進潔齋です！」

雄「それは始めて伺ふです。」

延「並大抵ならぬ其の中を、ちよろり君に占められて、」

雄「痛い、吭が緊る！」

延「それで私の男が立つと思ひますかよ。」

雄「痛い、苦しい！」

延「それで私の胸が濟むと思ひますかよ。」

雄「苦しい、切ない！」

延「それで私が默つて引込んで居られると思ひますかよ。」

雄「うゝ、うゝ、うゝん。」

と餘り緊められて竟に聲も出なくなる。

延「さあ、君は福富家の花嫁に疵を付けたのだ。他の持物に疵を付けて置いて、疎ならず思ふも能く出來て居る。其代り、御覽なさい、爰に一人馬鹿に疎に思はれた人が出來上つて了つたらうぢやありませんか。此の始末は如何してくれるのです！」

と突放して屹となれば、

雄「あゝ、面目も無い！」

と言ふより早くラムプを吹消す。

延「闇黒でも話は見える。面目無いとお言ひなさるからには、全く疵をお付けなすつたな。」

雄「いや〳〵、私も一箇の紳士……………に成るべき男子、誓つて然やうな不德な事は致しません。」

延「それぢや面目無いとは、凡そ甚麽事を爲すつたので。」

雄「別に子細は無いのですから………。」
延「万更子細の無い事は有りますまい。此期になつてからに愁ひお隠しなさると、却つてお爲に善くありませんよ。」
雄「甚だ失禮ですが、私は是でお暇を致します。どうか御老人様へも宜う。」
延「お待ちなさい。」
と手捜に寄つて袂を捉へる。
雄「どうかお放し下さい。」
延「痛い！　手を捻るのは酷い。お待ちなさらなければ此方にも爲樣が有るから………痛い〳〵。」
雄「えゝ、爲樣とは？」
延「内分には濟しません。」
雄「内分には濟さんとは？」
延「此の顛末を新聞に出すから、然うお思ひなさい。」

雄「此の顚末を新聞に？　待ちます〳〵。さあ、此の通準縄に待ちました、就いては御内分に願ひます。」

延「内分に爲ませうから、其の面目無い譯を明かにお言ひなさい。」

雄「其は其の、唯其の些の、一寸其の、」

延「何ですか。」

雄「唯其の疎ならず思つたゞけの事で、やあ、然し、面目も有りません！」

延「おっと、迯げちや可けません。」

雄「迯げるものですか、此の通端然として居ります。」

延「先には面目無いで燈をお消しなすつたら、今度は消す燈が無いから迯げる氣でお在なすつたに違無い。まあ、お待ちなさい。唯疎ならずぐらゐの事では關は通されませんよ。疎ならず思つたなら思つたで、其は其で可うございますから、未だ其先が有りませう。外の事と違つて男女の間柄です、唯疎ならず思つた、其限でお仕舞といふ譯には行かんもの、

もう少し先が有りませう。是は無ければ妄です。」

雄「いや、如何も然云ふ心當は有りませんので。實は其の頻に疎ならず思つて居る內に、突然今朝の出發となつたやうな次第て、其先まで思ふ遑が未だ無いので御座います。それて、又恁うして立戾つて參つたに就いて、幾分か其の遑を得やうかと云ふ所を、又貴方から此の御詰問を受けた爲に、疎ならず思つたのも何も錯々亂々になつて了つて、今の所唯恐縮より外は無いので御座います。はい、大に恐縮いたしました。」

延「いや、可うございます、君は何處までも然うしてお隱蔽になるのだ。成程、知らぬは亭主ばかりなりと云ふ事が有るが、私は未だ許婚中です、それほど燒は廻つて居ません。冗く言ふやうですが三箇年が間の精進潔齋、憚りながら彼の體には注連繩が張つてあるくらゐのものです。其の御神木へ斧を入れやうと爲る曲者が有るとは、疾に睨んで置いたのです。君は夢中になつてお出だから御存じは有るまいが、私は間がな隙がな此

の外へ來て、二人の話は大概立聞をして居るのです。」

雄「え丶、あの、大概立聞を？　あ丶、面目無い！」

延「咄來い、逃しは爲ませんよ。それでも君がお隱じなさるなら、強ひては伺ひますまい。是から行つて那の蓮を一番取緊めて、今夜中掛つて虐り散したら、何とか白狀するでせう。どれ、ぶつぶつ。」

と兩手に唾して、

延「然よなら大きにお邪魔を致しました。」

雄「暫く〳〵、暫くどうか。」

延「御用ですか。」

雄「お蓮さんには何等の罪も有りはしません、手暴な事を爲さいますな。」

延「是は大きに憚り樣です。」

雄「今夜中掛つて虐り散す？　此の二三日蜜柑の汁ばかりで凌いで在れ、那の體ではありませんか。」

延「はあ、然やうですか、其は始めて。」

雄「況や罪も何も無いものを、え丶、好い加減に爲さいませんか！　吁、那麽可憐い婦人を貴方のやうな無法者に添せるのは、天道果して是か非か、餘りと謂へば殘念だ、なあ！」

延「占め〳〵、本音が出まし………。」

と遽に口を抑へて、

延「え丶、もし、彼を可憐い婦人は解つた、――皆さんが然う有仰います――貴方のやうな無法者が些と解らない。家内の事をお褒め下さる段は忝いが、其に就けて私を貶しの、添せるのは殘念だなどは、既に下心大有りの兆、何とそれで疎ならずの先が無いと言へますかね。御返事が無い、是は恐く有りますまい。ですから、其の返事は蓮から聞きまさ。」

と聞えよがしに立上る音を作せる。

雄「那の方を苦められる迄もない、私から致します。」

延「など、いよ／＼親類附合の所が癪に障る。」

雄「其の附合も實は他は調謔半分で、これは此方が遊ばれたのかも知れん。然し、那の、何に限つては那麼性の惡いのではない、又遊ばれる私でもない。遊ばれる私よりは、遊ぶ那の人ではない――決してない、それはない、誓つてない！　それならば、體の極つて居るものを何も然う隱さんでも可からうと私は思ふ。始から慥云ふ夫が有る、非賣品である、と解つて居れば、此方も其氣で、高嶺の花と餘所に見て了ふ。それを左や右思ふやうな無面目な男でもない。然るに貴方は噫氣にも出さんぢやありませんか！　然うでせう。氣振にも見せんぢやありませんか！　然うでせう。而して憖ひ深切にまて下さるぢやありませんか！　然うでせう。であるから私もつい、それ、何ぢやありませんか、然うでせう。」

延「其は大きに然うでせう。」

雄「然うでせう？　畢竟私が這麼に面目を失したも、誰の業でもない、」

延「皆おはすの爲す業か。」
雄「私は然う思ふ。」
延「私も然う思ふ。」
雄「然う思つて、私は何處までも、おはすさん、貴方を怨みます！」
延「おや、おはすは其處に來て居ますか。」
雄「來て居れば、私は言ふ事が有る！」
延「彼奴來て居たら唯は措かないから。」
雄「得もや來られはえますまい。」
延「けれども念の爲、燐枝が有りますか。」
雄「こゝに在ります。」
と其處等を撈して、擦付ける火影に兩人顏を見合すれば、
雄「あゝ、猶且面目無い！」　と直に吹消す。
延「へい、然よならお寢みなさい。」

（十二）　判然

古里遠　延太郎
春山優雄　薔薇子
壽右衞門　おはす

座敷の正面に古里遠、春山優雄、鍵の手に壽右衞門、延太郎、其次に空座ありて、各々見事なる配膳あり。

壽「さて昨日は娘の誕生日でございまして、一献差上げたく思うて居りました所、急の御立で一向お構ひ申すこともならず、甚だ不本意に存じ居りました。幸ひの御立戻に就きまして、今日改めて祝と申しても、些の證ばかり、何の風情もございませんが、どうぞお氣樂にお過し下さいますやうに。」

古「はい、成程。十分に頂戴します。」

雄「それはお目出度うございます。」

古「それはなか〳〵お目出度いですな。」

雄「又お手厚い御馳走で難有う存じます。」

古「いや、大きに今日は難有いのです。」

薔「どう致しまして、一向召上れるやうなものも御座りませんで。唯今お銚子を。」

延太郎長緒の電鈴を鳴す。薔薇子着飾りたる令嬢姿にて銚子を持ち、おはすも着易へたる召使装にて同じく銚子を持ち、徐々と入來る。古里は薔薇子の酌を受けんとして初めて顔を見る。

古「やっ！」

優雄は先より首を俛れて始終鬱ぎ居る。古里は瞿々しながらおはすの顔を覗き、

古「やっ！」

と盃を委いて、滅多無性に目を擦り、打返し〳〵二人の顔を見較べて、

古「違うた！　あっ、首が違うた!!　先生、御覧なさい、一寸、一寸、一

寸御覧なさい！」

雄「あつ！」

古「如何ですか。」

雄「逢つた！」

薔薇子は小首を傾けて、

薔「彼方が此方を先生と有仰るのは？」

雄「こりや如何いたしたのでございますな。」

と壽右衛門に言を懸ける。

壽「そりや猶且然うでございます。夙てお噂を申し置きました娘の薔薇子てござります。」

古「いや、善く御覧なさい、首が逢ふ！」

薔「兄さま、是には何か譯が有るのぢやありませんか。」

延「有るよ〳〵。」

と延太郎の傍へ行く。

薔「聞かして下さい。」

雄「それぢや今朝までの令嬢は？」

壽「其に居ります召使のはすと申す者。」

雄「どうも更に解りませんですな。」

と座を立つて壽右衛門の傍へ行く。

古「解らんぞ、解らんぞ。」

と是も立つておはすの傍へ行く。席は忽ち亂れて、彼地にも此地にも良

暫くは相談の騒のみ。

薔「そんなら貴方が春山さま！」

雄「貴方が薔薇子さんでありましたか！」

は「あら、貴方は書生さん？」

古「何か、然う言ふ貴樣は！」

壽「まづ目出度い！」

延「テトッツン〳〵、ツトッツン〳〵、」と口三味線にて立上り、煙管筒を扇子に換へて左の袖に承けながら、嫋嫋〵と其に顯れて、

延「蓬萊に聞かばや伊勢の初だより、トンチチン〳〵、チン〳〵チンリン〳〵、チンチリヽリヽリン…………。」

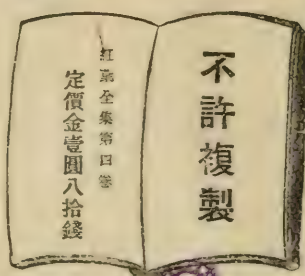
（三十一年六月）

遺弟　泉斜汀　校

紅葉全集卷之四終

明治三十七年七月十四日印刷
明治三十七年七月十七日發行
明治三十八年四月再版發行
明治四十三年九月廿五日七版發行

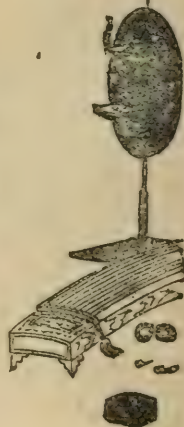
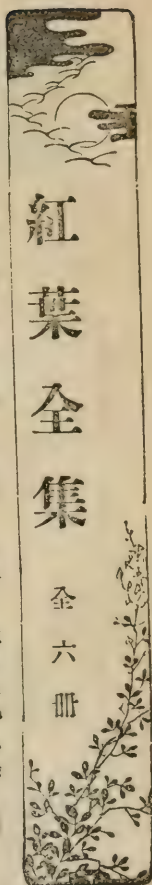
紅葉全集第四卷
定價金壹圓八拾錢

不許複製

著者 尾崎德太郎
發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元
東京市日本橋區本町三丁目
博文館

十千萬堂藏版

紅葉全集　全六冊

第壹卷

二人比丘尼色懺悔　風雅娘　新桃花扇　巴波川

南無阿彌陀佛　拈華微笑　戀の蛻　此ぬし

夏痩　關東五郎　新色懺悔　文ながし

猿枕　わかれ蚊帳　七十二文命の安賣　二人むく助

二人女房　紅葉山人著作年表

第貳卷

伽羅枕　おぼろ舟　むき玉子

伽羅物語　女の顔　花ぐもり　紅白毒饅頭

戀の病　夏小袖

第

三人妻前編

錢の富士……身邊の樂……沈香亭……火上の氷……心配筋……天の邪鬼……濡事師……いつも端麗……風の柳(上)……風の柳(下)……金と女　雪燕し……佩刀の鑑……煎餅屋の娘……砂糖餅……南無三寶……尺八の稽古……談義所の饗物……櫻の花……御恩がへし……心嬉しき顔……瑠璃の梁……夜半の嵐……火澤睽

參　巻

第四巻

第五巻

多情多恨 前編 全 後編

安短歌貌林 月下の頭巾……夜中の代診

千箱の玉章

寒牡丹 雪中の猩猩……不幸の盃……背の冷汗……掌上の人形……一萬五千ループル……老の嘆願……門前の一瞥……驚天動地……結婚の刑……財産目錄……文中の秘密……勤儉貞淑……恐怖と寒さと……村の記錄……兇險の相……窮命の淵……減水の堂……御神の審判……令聞嘖々……賢婦忠僕……特赦の天使……燈下の指環……配所の雪……(大團圓 花の都路

第六巻

金色夜叉 前編 全 中編 全 後編

續金色夜叉 續續金色夜叉

新續金色夜叉 烟霞療養

紅葉山人傳 紅葉山人著作年表 追加

△大判紙數毎冊九百餘頁 正價一冊金壹圓八十錢‖全部六冊金拾圓‖郵税一冊拾五錢宛▽